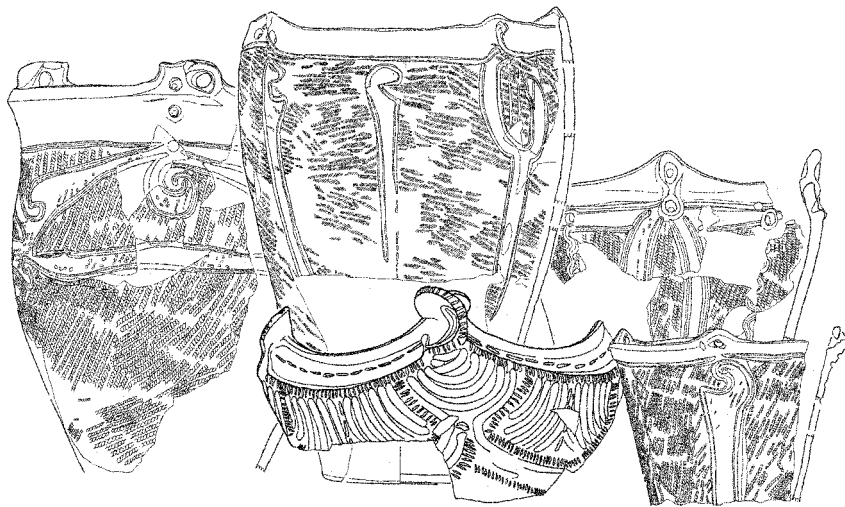


蔵王町文化財調査報告書 第10集

# 西浦B遺跡

— 商業施設出店計画に伴う緊急発掘調査 —



2011年（平成23年）3月

宮城県刈田郡蔵王町教育委員会



# 西浦B遺跡

— 商業施設出店計画に伴う緊急発掘調査 —



# 序 文

蔵王山麓の豊かな自然環境に恵まれた私たちの蔵王町は、大昔から大変住み良いところだったのでしょう。私たちの足もとに埋もれている数多くの遺跡が、悠久の時をこえてそのことを力づよく物語っています。

少子高齢社会への移行が進む日本では、未来を担う子どもたちを守り育てていくための受け皿として、地域社会をより豊かで魅力あるものとするのが求められています。私たちの地域の個性豊かな風土や歴史的に価値ある文化財を保存し活用することは、それぞれの地域のもつ価値を再発見し、豊かで魅力あるまちづくりの一翼を担う大切な取り組みであります。

しかしその一方で、当町においてもさまざまな開発事業によって、文化財が破壊され消滅の危機にさらされることが多くなってきました。とりわけ土地との結びつきの強い埋蔵文化財（遺跡）は、個人・企業・行政などによる各種の開発で常に破壊される恐れがあることから、当教育委員会では開発部局等に遺跡の所在を周知徹底するとともに、開発との関わりが生じた場合には宮城県教育委員会と連携して貴重な文化財を積極的に保護することに努めてきております。

本書において皆さまにご報告するのは、開発行為に先立つ記録保存を目的として、平成 21 年度に行った西浦 B 遺跡の発掘調査成果です。今回の調査では、今からおよそ 4,500 年前の縄文時代後期の集落跡や、平安時代の竪穴住居跡、中世から近世の屋敷跡などが発見されました。これらは、蔵王山麓に暮らした当時の人々の生活の一端を窺い知ることのできる貴重な成果です。本書にまとめられた学術的成果が、広く町民の皆さまや各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助となれば幸いです。

今回の発掘調査の実施にあたっては、開発事業主の株式会社キクチと地権者の皆さまより文化財の保存への暖かいご理解とご協力をいただきました。また、発掘作業員の皆さまには、晩秋から真冬の寒空の下、野外での発掘作業にあたっていただきました。ご協力を賜りました関係各位の皆さまに篤く心より御礼申し上げます。

最後になりましたが、先人の残した文化遺産を町民の宝として長く後世に継承していくことは、これからの地域色豊かなまちづくりには欠かせない大切なことでもあります。今後とも、各位のご理解とご協力を念願して序といたします。

平成 23 年 3 月

蔵王町教育委員会  
教育長 山田 紘



# 例 言

1. 本書は、蔵王町大字円田字西浦北地内に所在する西浦B遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の発掘調査は、株式会社キクチを事業主とするフレスコキクチ蔵王店出店計画に伴う事前調査として行なったものであり、発掘調査から整理作業および本書の作成に至る一連の業務は、調査原因となった事業の主体者である株式会社キクチを委託者、蔵王町を受託者とする業務委託契約を締結し、蔵王町教育委員会が平成21～22年度に実施した。
3. 本遺跡の発掘調査と整理作業は蔵王町教育委員会が主体となり、教育総務課文化財保護係が担当した。職員体制は下記のとおりである。

教 育 長 山田 紘

教育総務課長 大沼 芳國 課長補佐 阿部 宏 (H21年度) 高野正人 (H22年度)

文化財保護係長 佐藤 洋一 主 事 鈴木 雅

文化財臨時職員 我妻 なおみ・庄子 善昭・鈴木 和美・中沢 祐一 (H21・22年度)  
渡邊 香織 (H22年度)

発掘調査作業員 我妻 英子・我妻 武夫・市川 康雄・太田 忠義・大庭 慶志郎・亀井 勇二・  
小杉 佐和子・後藤 扶美江・小林 四郎・小林 美智子・佐藤 和子・佐藤 貴美子・  
佐藤 照子・佐藤 福治・佐藤 義晴・鈴木 光一・鈴木 春夫・武田 憲繁・山家 次郎  
室内整理作業員 我妻 英子・岩佐 若奈・大庭 慶志郎・小杉 佐和子・小林 四郎・小林 美智子・  
佐藤 かおる・佐藤 貴美子・佐藤 恵子・佐藤 里栄・松田 律子

4. 本遺跡の発掘調査および資料整理と本書の作成に際し、以下の諸機関・諸氏よりご指導・ご助言ならびにご協力を賜った。ここに記して深甚より謝意を表します。

東北大学大学院文学研究科考古学研究室・宮城県教育庁文化財保護課・明治大学文化財研究施設・株式会社キクチ・有限会社星測量設計・相原 淳一・阿部 昭典・石黒 伸一郎・大場 正善・鹿又 喜隆・金成 太郎・菅野 智則・佐川 正敏・佐々木 繁喜・佐竹 一・佐藤 栄一・佐藤 正雄・島田 和高・杉原 重夫・高橋 健寿・弦巻 賢介・早瀬 亮介・村田 弘之・矢島 國雄・山田 しょう・山家 一彦 (敬称略・五十音順)

5. 本発掘調査で使用した測量原点の測量成果については、有限会社星測量設計より提供を受けた。
6. 石器石材の鑑定は、宮城県内で一般的に用いられている石材名を使用して鈴木雅・中沢祐一が行ない、不明なものについては佐藤恵子の地質学的所見を参考にした。なお、珪質頁岩と頁岩の区別は、主に山形県最上川流域など東北地方の日本海側で産出する珪酸分に富み緻密で硬質なものを珪質頁岩、宮城県域を含む太平洋側でも産出するやや粗粒で軟質なものを頁岩と呼称した。
7. 第5章に収録した自然科学的分析のうち、放射性炭素年代測定と土器胎土分析については株式会社加速器分析研究所に委託して行なった。また、黒曜石製石器の原産地分析については明治大学文化財研究施設が行ない、明治大学文化財研究施設運営委員の杉原 重夫教授・明治大学文化財研究施設の金成 太郎氏をはじめとする諸氏より玉稿を賜った。石器使用痕分析については東北大学大学院考古学研究室の鹿又 喜隆准教授・村田 弘之氏が行ない、玉稿を賜った。
8. 本発掘調査における現場写真撮影に使用した機材等は以下のとおりである。

カメラ：NikonD100・NikonD70s / レンズ：AF-S NIKKOR 18-70mm f3.5～4.5G ED

9. 遺物の写真撮影は、庄子 善昭が担当した。撮影に使用した機材等は以下のとおりである。

カメラ：NikonD90 / レンズ：TAMRON SP AF90mm F/2.8Di・AF MICRO NIKKOR 60mm F:2.8 D /  
ストロボ：SUNPAK auto544 / カメラコントロールソフトウェア：Adobe Photoshop Lightroom3 ver.3.0

10. 本書に掲載した遺構実測図のトレース、画像処理、レイアウトには下記のソフトウェアを使用した。  
Adobe Photoshop7.0・CS4 / Adobe Illustrator10.0・CS4 / Adobe InDesignCS4
11. 本書に掲載した遺構実測図のトレース、遺物実測図の作成およびトレース、遺物拓本、遺物写真撮影、  
図版レイアウトなどは文化財臨時職員が中心となり、室内整理事業員がこれを助けた。
12. 本発掘調査の整理事業は、下記の調査員が中心となり、調査員全員で協議しながら進めた。  
遺構 …………… 我妻 なおみ  
縄文土器・土製品・陶磁器 …………… 渡邊 香織  
石器・石製品 …………… 中沢 祐一  
土師器 …………… 鈴木 和美  
統括 …………… 鈴木 雅・庄子 善昭
13. 本書の執筆は調査員全員の協議を経て下記の分担により進め、鈴木 雅が編集した。  
第1章～第4章、第6章第1節2、第2・3節、第7章 …………… 鈴木 雅  
第5章第5節 …………… 鈴木 雅・佐藤 恵子  
第6章第1節1（1）縄文土器 …………… 鈴木 雅・渡邊 香織  
第6章第1節1（2）石器 …………… 鈴木 雅・中沢 祐一  
写真図版 …………… 庄子 善昭  
校正・照合 …………… 鈴木 和美
14. 本発掘調査の成果については、平成22年度宮城県遺跡調査成果発表会等において概要を公表して  
いるが、これらと本書の内容が異なる場合には、本書がこれらに優先するものである。
15. 本発掘調査で出土した遺物および写真・図面等の記録資料については、蔵王町教育委員会が一括し  
て永久保管している。

## 凡 例

1. 本発掘調査における測量原点の座標値は、日本測地系に基づく平面直角座標第X系による。測量成  
果表は第5図に示した。なお、方位は座標北を表している。
2. 本発掘調査では、調査区内に任意方向の3mグリッドを設定し、東西・南北方向に数字を付した。  
グリッドの局地座標における北は日本測地系に基づく平面直角座標第X系における座標北を基準  
として東に38.55°の方位である。
3. 第2図は、国土調査による1/50,000土地分類基本調査（地形分類図）「白石」（宮城県1983）の  
一部を使用して作成した。
4. 第3図は、宮城県文化財調査報告書第152集「宮城県遺跡地図」（宮城県教育委員会1993）の「村  
田」（1/25,000）の一部を使用して作成した。
5. 本書で使用した土色の記述については、「新版標準土色帖」（小川・竹原2005）を参照した。
6. 本書で使用した遺構番号は、遺構種別に関わらず調査時に付された連続する番号を使用した。
7. 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。  
S I：竪穴住居跡、S B：掘立柱建物跡、S A：柱穴列、S D：溝跡・河川跡、S E：井戸跡、



- S K：フラスコ状土坑・落とし穴状土坑・土坑、S L：炉跡、S X：性格不明遺構
8. 遺構・遺物実測図の縮尺は下記の通りで、それぞれ図中にスケールを付して示した。  
調査区配置図：1/1000、遺構配置図：1/400・1/600  
竪穴住居跡：1/60、掘立柱建物跡・柱列跡：1/100（断面図：1/60）  
フラスコ状土坑・落とし穴状土坑・土坑：1/60、溝跡：1/100・1/200（断面図：1/60）  
土器・陶磁器：1/3、ミニチュア土器・土錘・土製品：1/2  
礫石器：2/3・1/3・1/6、打製石器：1/1・2/3
9. 遺構断面図に付した土層注記表の備考欄では、下記の略号を使用して記載している。  
（柱掘）：柱穴掘方埋土、（柱痕）：柱痕跡、（柱抜）：柱材抜き取り痕跡  
（堆）：堆積土、（崩）：崩落土、（構）：構築土、（人為）：人為的埋土（特記ないときは自然堆積土）
10. 遺構の説明で、例えば北を基準として東に10度傾いている場合、「N - 10° - E」のように表記した。  
重複関係について、例えばAよりBが新しい場合「A → B」、掘立柱建物跡などで重複関係にあるが新旧関係が不明な場合「A - B」のように記載した。柱間寸法で（ ）内の数値は推定値である。
11. 遺物観察表で、器面調整あるいは加工の前後関係が確認でき、Aの痕跡よりBの痕跡が新しい場合「A → B」のように記載した。また、（ ）内の数値は残存値である。
12. 遺構・遺物実測図において、下記の場合には網点で示し、用例は各図中に記載した。  
遺構：焼面・貼床・柱痕跡・壁材痕跡 遺物：黒色処理
13. 引用文献および執筆にあたり参考にした文献については巻末に一括して掲載した。

## 調査要項

遺 跡 名：西浦B遺跡（宮城県遺跡登録番号：05160 遺跡記号：NB）

所 在 地：宮城県刈田郡蔵王町大字円田字西浦北地内

調査対象面積：12,690㎡（埋蔵文化財保存協議における遺構確認調査面積：延べ3,413㎡）

発掘調査面積：4,678㎡（A区：83㎡、B区：3,650㎡、C区：595㎡、D区：350㎡）

調 査 期 間：平成21年（2009年）11月1日～平成22年（2010年）2月26日（事前調査）

調 査 原 因：フレスコキクチ蔵王店建設計画

調 査 主 体：蔵王町教育委員会 教育長 山田 紘

調 査 担 当：蔵王町教育委員会教育総務課文化財保護係 主事 鈴木 雅

調 査 員：佐藤 洋一 鈴木 雅（教育総務課文化財保護係）

庄子 善昭 中沢 祐一 我妻 なおみ 鈴木 和美（文化財専門職臨時職員、H21・22年度）

渡邊 香織（同、H22年度）

調 査 指 導：宮城県教育庁文化財保護課

調 査 協 力：株式会社キクチ 有限会社星測量設計 佐竹 一 佐藤 栄一 佐藤 正雄 山家 一彦

# 目 次

序 文

例 言

凡 例

調査要項

目 次

<b>第 1 章 遺跡の概要</b> .....	1
第 1 節 遺跡の位置と地理的環境 .....	1
第 2 節 周辺の遺跡と歴史的環境 .....	2
<b>第 2 章 調査に至る経緯</b> .....	6
<b>第 3 章 調査の方法と経過</b> .....	7
<b>第 4 章 調査の結果</b> .....	9
第 1 節 基本層序 .....	9
第 2 節 発見された遺構と遺物 .....	10
1 縄文時代 .....	10
(1) A 区 .....	10
(2) B・C 区 .....	17
(3) D 区 .....	84
(4) その他の出土遺物 .....	85
2 古代 .....	123
(1) B 区 .....	123
3 中世以降 .....	128
(1) A 区 .....	128
(2) B 区 .....	129
(3) D 区 .....	133
(4) その他の出土遺物 .....	134

<b>第5章 自然科学的分析</b> .....	137
第1節 西浦B遺跡における放射性炭素年代測定（AMS測定） .....	137
第2節 西浦B遺跡出土縄文土器の胎土分析 .....	141
第3節 蔵王町出土黒曜石製遺物の原産地推定 .....	152
第4節 西浦B遺跡出土石器の使用痕分析 .....	170
第5節 西浦B遺跡における石器石材の地質学的検討 .....	174
<b>第6章 考察</b> .....	177
第1節 縄文時代 .....	177
1 遺物の特徴と編年的位置づけ .....	177
(1) 縄文土器 .....	177
(2) 石器 .....	189
2 遺構の特徴と遺跡の性格 .....	202
(1) 遺構の時期と特徴 .....	202
(2) 遺跡の性格 .....	203
3 遺跡の年代 .....	205
第2節 古代 .....	205
1 遺物の特徴と年代 .....	205
2 遺構の特徴と遺跡の性格 .....	206
第3節 中世～近世 .....	207
1 遺物の特徴と年代 .....	207
2 遺構の特徴と遺跡の性格 .....	207
<b>第7章 総括</b> .....	209

引用・参考文献

写真図版

遺跡遠景 .....	写真図版 1
遺構 .....	写真図版 2～21
遺物（縄文土器） .....	写真図版 22～42
遺物（土製品） .....	写真図版 43
遺物（石器） .....	写真図版 44～53
遺物（土師器・陶磁器） .....	写真図版 54～55

報告書抄録

解 説

# 挿図目次

第1図	蔵王町の位置	1	第47図	SK9 フラスコ状土坑出土遺物	39
第2図	遺跡周辺の地形区分	1	第48図	SK22 フラスコ状土坑	39
第3図	遺跡の位置と周辺の遺跡	3	第49図	SK9 フラスコ状土坑	39
第4図	調査区配置図	6	第50図	SK28 フラスコ状土坑	39
第5図	調査区グリッド設定図	7	第51図	SK52 フラスコ状土坑	40
第6図	調査区遠景	8	第52図	SK53 フラスコ状土坑	40
第7図	発掘作業風景	8	第53図	SK54 フラスコ状土坑	40
第8図	整理作業風景	8	第54図	SK55 フラスコ状土坑	40
第9図	遺構配置図	11	第55図	SK22 フラスコ状土坑出土遺物(1)	41
第10図	縄文時代の遺構配置図	13	第56図	SK22 フラスコ状土坑出土遺物(2)	42
第11図	SK19 フラスコ状土坑	14	第57図	SK22 フラスコ状土坑出土遺物(3)	43
第12図	SK20 フラスコ状土坑	14	第58図	SK22 フラスコ状土坑出土遺物(4)	44
第13図	SK45 土坑	14	第59図	SK22 フラスコ状土坑出土遺物(5)	45
第14図	SK49 土坑	14	第60図	SK22 フラスコ状土坑出土遺物(6)	46
第15図	SK19 フラスコ状土坑出土遺物(1)	15	第61図	SK22 フラスコ状土坑出土遺物(7)	47
第16図	SK19 フラスコ状土坑出土遺物(2)	16	第62図	SK22 フラスコ状土坑出土遺物(8)	48
第17図	SK20 フラスコ状土坑出土遺物	16	第63図	SK22 フラスコ状土坑出土遺物(9)	49
第18図	SI65 竪穴住居跡	17	第64図	SK22 フラスコ状土坑出土遺物(10)	50
第19図	SI65 竪穴住居跡出土遺物	18	第65図	SK28 フラスコ状土坑出土遺物(1)	51
第20図	SB93 掘立柱建物跡	19	第66図	SK28 フラスコ状土坑出土遺物(2)	52
第21図	SB97 掘立柱建物跡	20	第67図	SK28 フラスコ状土坑出土遺物(3)	53
第22図	SB97・SB98・SB112・SB135 掘立柱建物跡出土遺物	21	第68図	SK28 フラスコ状土坑出土遺物(4)	54
第23図	SB98 掘立柱建物跡	21	第69図	SK54 フラスコ状土坑出土遺物	55
第24図	SB100 掘立柱建物跡	22	第70図	SK55 フラスコ状土坑出土遺物	55
第25図	SB103・SB104 掘立柱建物跡	23	第71図	SK63 フラスコ状土坑	56
第26図	SB105 掘立柱建物跡	23	第72図	SK56・SK62 フラスコ状土坑	56
第27図	SB108 掘立柱建物跡	23	第73図	SK66 フラスコ状土坑	56
第28図	SB111 掘立柱建物跡	24	第74図	SK67 フラスコ状土坑	56
第29図	SB112・SB113 掘立柱建物跡	25	第75図	SK68 フラスコ状土坑	57
第30図	SB114・SB115 掘立柱建物跡	26	第76図	SK71 フラスコ状土坑	57
第31図	SB116・SB118 掘立柱建物跡	27	第77図	SK73 フラスコ状土坑	57
第32図	SB120 掘立柱建物跡	28	第78図	SK74 フラスコ状土坑	57
第33図	SB129 掘立柱建物跡	28	第79図	SK56 フラスコ状土坑出土遺物(1)	58
第34図	SB130・SB131 掘立柱建物跡	29	第80図	SK56 フラスコ状土坑出土遺物(2)	59
第35図	SB132・SB133 掘立柱建物跡	30	第81図	SK56 フラスコ状土坑出土遺物(3)	60
第36図	SB134・SB135 掘立柱建物跡	31	第82図	SK56 フラスコ状土坑出土遺物(4)	61
第37図	SA107 柱列跡	32	第83図	SK62 フラスコ状土坑出土遺物	61
第38図	SA106 柱列跡	32	第84図	SK66 フラスコ状土坑出土遺物	61
第39図	SA109・SA110・SA117 柱列跡	33	第85図	SK63 フラスコ状土坑出土遺物	62
第40図	SA121 柱列跡	34	第86図	SK73 フラスコ状土坑出土遺物	62
第41図	SA119 柱列跡	34	第87図	SK76 フラスコ状土坑出土遺物	62
第42図	SL86 炉跡	35	第88図	SK79 フラスコ状土坑	62
第43図	SK7 土坑	35	第89図	SK76 フラスコ状土坑	62
第44図	SL86 炉跡出土遺物(1)	36	第90図	SK82 フラスコ状土坑	63
第45図	SL86 路跡出土遺物(2)	37	第91図	SK83 フラスコ状土坑	63
第46図	SK7 フラスコ状土坑出土遺物	38	第92図	SK79 フラスコ状土坑出土遺物	64

第93図	SK82 フラスコ状土坑出土遺物 …	65	第139図	遺構外出土遺物 (2) ……	88
第94図	SK87 フラスコ状土坑…	65	第140図	遺構外出土遺物 (3) ……	89
第95図	SK89 フラスコ状土坑…	65	第141図	遺構外出土遺物 (4) ……	90
第96図	SK83 フラスコ状土坑出土遺物 …	66	第142図	遺構外出土遺物 (5) ……	91
第97図	SK87 フラスコ状土坑出土遺物 …	66	第143図	遺構外出土遺物 (6) ……	92
第98図	SK90 フラスコ状土坑…	66	第144図	遺構外出土遺物 (7) ……	93
第99図	SK91 フラスコ状土坑…	66	第145図	ミニチュア土器 土錘 不明土製品	93
第100図	SK89 フラスコ状土坑出土遺物 …	67	第146図	土器片加工円板 ……	94
第101図	SK90 フラスコ状土坑出土遺物 …	67	第147図	石鏃 ……	95
第102図	SK91 フラスコ状土坑出土遺物 …	68	第148図	石錐 石匙 スクレイパー ……	96
第103図	SK101 フラスコ状土坑出土遺物 ..	68	第149図	彫刻刀形石器 ビエス・エスキュー 二次加工剥片 (1)	97
第104図	SK92 フラスコ状土坑出土遺物 …	68	第150図	二次加工剥片 (2) ……	98
第105図	SK125 フラスコ状土坑出土遺物 ..	68	第151図	二次加工剥片 (3) ……	99
第106図	SK92 フラスコ状土坑出土遺物(1)	69	第152図	二次加工剥片 (4) ……	100
第107図	SK92 フラスコ状土坑出土遺物(2)	70	第153図	二次加工剥片 (5) ……	101
第108図	SK92 フラスコ状土坑出土遺物(2)	71	第154図	微細剥離痕を有する剥片 (1) ……	102
第109図	SK101 フラスコ状土坑出土遺物 ..	71	第155図	微細剥離痕を有する剥片 (2) ……	103
第110図	SK125 フラスコ状土坑出土遺物 ..	72	第156図	微細剥離痕を有する剥片 (3) ……	104
第111図	SK69 落とし穴状土坑…	73	第157図	石核 (1) ……	105
第112図	SK123 落とし穴状土坑 ……	73	第158図	石核 (2) ……	106
第113図	SK124 落とし穴状土坑 ……	73	第159図	石核 (3) ……	107
第114図	SK6 土坑 ……	73	第160図	磨製石斧 擦痕のある石製品 ……	109
第115図	SK13・36 土坑 ……	74	第161図	磨石 (1) ……	110
第116図	SK39 土坑 ……	74	第162図	磨石 (2) 凹石 (1) ……	111
第117図	SK44 土坑 ……	74	第163図	凹石 (2) 磨石/凹石 (1) ……	112
第118図	SK6 土坑出土遺物 (1) ……	75	第164図	磨石/凹石(2) 磨石/凹石/敲石	113
第119図	SK6 土坑出土遺物 (2) ……	76	第165図	石皿 (1) ……	114
第120図	SK13 土坑出土遺物 ……	76	第166図	石皿 (2) ……	115
第121図	SK39 土坑出土遺物 ……	77	第167図	石皿 (3) ……	116
第122図	SK50・SK51 土坑 ……	78	第168図	石皿 (4) ……	117
第123図	SK64 土坑 ……	79	第169図	石皿 (5) ……	118
第124図	SK70 土坑 ……	79	第170図	石皿 (6) ……	119
第125図	SK81 フラスコ状土坑出土遺物…	80	第171図	石皿 (7) ……	120
第126図	SK72 土坑 ……	80	第172図	棒状石製品 (1) ……	121
第127図	SK81 土坑 ……	80	第173図	棒状石製品 (2) ……	122
第128図	SK102 土坑…	80	第174図	SI16 竪穴住居跡 ……	124
第129図	SK126 フラスコ状土坑 ……	81	第175図	SI16 竪穴住居跡出土遺物 (1) ……	125
第130図	SK122 落とし穴状土坑 ……	81	第176図	SI16 竪穴住居跡出土遺物 (2) ……	126
第131図	柱穴跡出土遺物 ……	82	第177図	SI16 竪穴住居跡出土遺物 (3) ……	127
第132図	SI16 竪穴住居跡混入遺物 ……	83	第178図	SX78 竪穴状遺構 ……	127
第133図	SD8 溝跡混入遺物 ……	83	第179図	中世以降の遺構配置図 ……	128
第134図	SD18 溝跡混入遺物 ……	84	第180図	SD18 溝跡 ……	129
第135図	SD88 溝跡混入遺物 (1) ……	84	第181図	SB85 掘立柱建物跡 ……	130
第136図	SD88 溝跡混入遺物 (2) ……	85	第182図	SA95・SA96 柱列跡 ……	130
第137図	SD84 溝跡混入遺物 ……	86	第183図	SD8 溝跡・SD88 溝跡 (1) ……	131
第138図	遺構外出土遺物 (1) ……	87	第184図	SD8 溝跡・SD88 溝跡 (2) ……	132

第185図	SD24 溝跡	132	第203図	西浦 B 遺跡出土石器の使用痕 (2)	173
第186図	SD84 溝跡	133	第204図	宮城県南西地域地質図	175
第187図	SD84 溝跡出土遺物	134	第205図	珪質頁岩分布図	175
第188図	SB127 掘立柱建物跡	134	第206図	Ⅱ群土器 (1)	179
第189図	遺構外出土遺物	134	第207図	Ⅱ群土器 (2)	181
第190図	SB128 溝跡	135	第208図	Ⅱ群土器 (3)	183
第191図	[参考] 暦年較正年代グラフ	140	第209図	仙台市六反田遺跡Ⅰ・Ⅱ群土器	184
第192図	各粒度段階における鉱物・岩石出		第210図	仙台市梨野 A 遺跡Ⅷ群土器	184
(1)	現頻度 (%) および全体の粒径組成	145	第211図	蔵王町二屋敷遺跡Ⅱ群土器	185
第192図	各粒度段階における鉱物・岩石出		第212図	石巻市南境貝塚7トレンチ9~11層出土土器	186
(2)	現頻度 (%) および全体の粒径組成	146	第213図	福島県新地町三貫地貝塚Ⅱ群土器	186
第192図	各粒度段階における鉱物・岩石出		第214図	石鏃の長幅値	190
(3)	現頻度 (%) および全体の粒径組成	147	第215図	石鏃の幅厚値	190
第193図	碎屑物・基質・孔隙の割合	147	第216図	石鏃の最大厚と重量	190
第194図	胎土薄片 (1)	150	第217図	遺構種別にみた石器出土状況	195
第195図	胎土薄片 (2)	151	第218図	遺構種別にみた器種構成	195
第196図	石材遺物(黒曜石・サヌカイト)の原産地推定	152	第219図	大別石材でみた石材構成	197
第197図	石器時代における北海道・東北地方の黒曜石原産地	157	第220図	石材構成	197
第198図	蔵王町内の原産地構成	163	第221図	打製石器の石材構成	198
第199図	蔵王町内出土黒曜石製遺物の判別		第222図	礫石器の石材構成	198
(1)	図 (Rb 分率; 北海道・東北地方)	164	第223図	磨製石器・礫石器の器種別石材構成	198
第199図	蔵王町内出土黒曜石製遺物の判別		第224図	打製石器の器種別石材構成	198
(2)	図 (Sr 分率; 北海道・東北地方)	164	第225図	大別器種構成	199
第200図	蔵王町内出土黒曜石製遺物の判別		第226図	器種構成	199
(1)	図 (Rb 分率; 北陸・中部地方)	165	第227図	打製石器の石材構成	199
第200図	蔵王町内出土黒曜石製遺物の判別		第228図	礫石器の石材構成	199
(2)	図 (Sr 分率; 北陸・中部地方)	165	第229図	器種別にみた打製石器・石核の長幅値	200
第201図	不明原産地遺物の判別図		第230図	主要石材別にみた打製石器の長幅値	200
(1)	(Rb 分率; 北海道・東北地方)	166	第231図	主要石材別にみた石核の長幅値	200
第201図	不明原産地遺物の判別図		第232図	主要石材別にみた石核の大きさ	200
(2)	(Sr 分率; 北海道・東北地方)	166	第233図	縄文時代の遺構配置	204
第202図	西浦 B 遺跡出土石器の使用痕 (1)	172			

## 表 目 次

第1表	剥片観察表	108	第7表	判別分析における群間距離	155
第2表	試料一覧および 14C 年代	139	第8表	北海道・東北地方における黒曜石原産地の区分	156
第3表	14C 年代と暦年較正年代	139	第9表	蔵王町における原産地推定の集計結果	163
第4表	試料一覧および胎土分類	141	第10表	蔵王町出土黒曜石製遺物の原産地推定結果	167
第5表	(1) 薄片観察結果	148	第11表	遺構種別にみた器種構成	195
	(2) 薄片観察結果	149	第12表	石器の器種・石材の構成	197
第6表	北海道・東北地方における黒曜石の測定値	154	第13表	遺構の時期	202

# 第1章 遺跡の概要

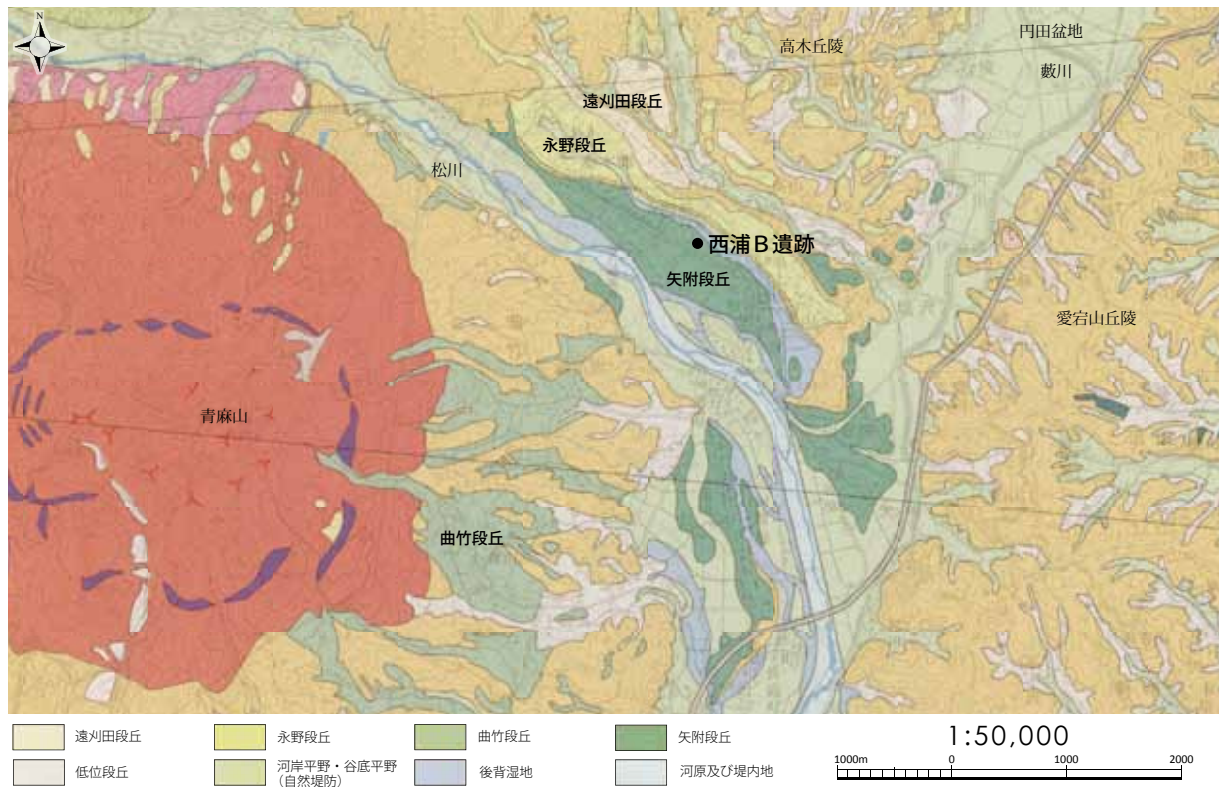
## 第1節 遺跡の位置と地理的環境

宮城県南部の蔵王連峰東麓に位置する蔵王町は、東は村田町と大河原町、西は蔵王連峰をはさんで山形県、南は白石市、北は川崎町と境を接する（第1図）。町域は東西23km、南北13kmで面積は152.85km<sup>2</sup>を占め、海拔標高は最高点が西端の屏風岳で1,825m、最低点が東南部の松川と白石川の合流点で20mを測る。町域の西部が主に蔵王連峰に連なる山林原野で、東部の松川流域と円田盆地に田園地帯が形成されている。西部は蔵王国定公園に含まれ、遠刈田温泉などが蔵王観光の基地となっているほか、東部の丘陵部を中心に果樹園が営まれ、県内有数の果樹生産地となっている。

西浦B遺跡は宮城県刈田郡蔵王町大字円田字西浦北地内に所在する。町域の東部に位置し、松川の北岸に形成された矢附段丘上に立地している（第2図）。松川は蔵王連峰から東流し、青麻山の北・東麓を迂回するように南流して白石川へ注いでおり、本遺跡の立地する中流沿岸とその北側には4段の段丘が分布する。すなわち、上位には上流沿岸の遠刈田段丘に相当するとみられている段丘が松川の北側一帯に分布し、これより下位には松川北岸に永野段丘、青麻山東麓のやや幅の広い谷底の主面に曲竹段丘が、さらに低位の松川沿岸に矢附段丘が分布している（中川 1983）。



第1図 蔵王町の位置



第2図 遺跡周辺の地形区分

## 第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

蔵王町における周知の遺跡は現在 190 か所を数える（第3図）。その多くは町域の東部に分布し、蔵王連峰から派生する丘陵部と青麻山東麓部、松川流域と円田盆地の平野部などに立地する。旧石器時代から近世に至るまで多数の遺跡が形成されているが、大略的に見て縄文時代の遺跡は蔵王連峰の東麓部から延びる高木丘陵上と青麻山東麓部の標高 150～250 m 付近に、弥生時代中期以降の遺跡は円田盆地とその周辺の丘陵辺縁部の標高 80～100m 付近に立地する傾向が見られる。

こうした様相の違いは、概ね当時の人びとの生業形態の変化に伴うものと考えられる。縄文時代の食料獲得の場は主に丘陵地に繁茂した森林であり、弥生時代中期以降の食料生産の場は低湿地に作られた水田であったことを示している。後述するが、蔵王町内における稲作の開始を裏付けるものとしては、籾殻の圧痕がある弥生土器片や、古墳時代の水田跡がある。なお、縄文時代の集落が低湿地の周辺に作られることはなかったが、低平な丘陵と湿地の入り組んだ円田盆地北部の一带は、縄文時代には狩猟の場として利用されていた。以下、各時代・時期における蔵王町内の考古学的様相を概観する。

### （1）旧石器時代

宮地区の持長地遺跡、鉄砲町遺跡、明神裏遺跡、小村崎地区の前戸内遺跡が知られている。持長地遺跡では黄褐色ローム漸移層の下部よりナイフ形石器が単独出土している。石刃を素材として基部の両側縁に刃潰し加工を施しており、いわゆる茂呂型ナイフ形石器の範疇に含まれるものである。鉄砲町遺跡では彫刻刀形石器が採集されている。大型の石刃の末端側に施した急角度剥離面を打面として側縁に槓状剥離面を作出しており、いわゆる小坂型彫刻刀形石器の範疇に含まれるものである。明神裏遺跡では細石刃と槍先形尖頭器が採集されたというが、詳細は不明である。また、円田盆地北西部の前戸内遺跡では槍先形尖頭器が採集されている。剥片を素材として両面調整が施されており、平面形はやや左右非対称な木葉形を呈する。このほか、宮地区の二屋敷遺跡では石刃状の縦長剥片に基部加工を施したナイフ形石器の可能性のある石器が出土しているが、本遺跡では同様の縦長剥片を素材とする縄文時代の石器も散見されることから、旧石器であるかどうかの判断は難しい。

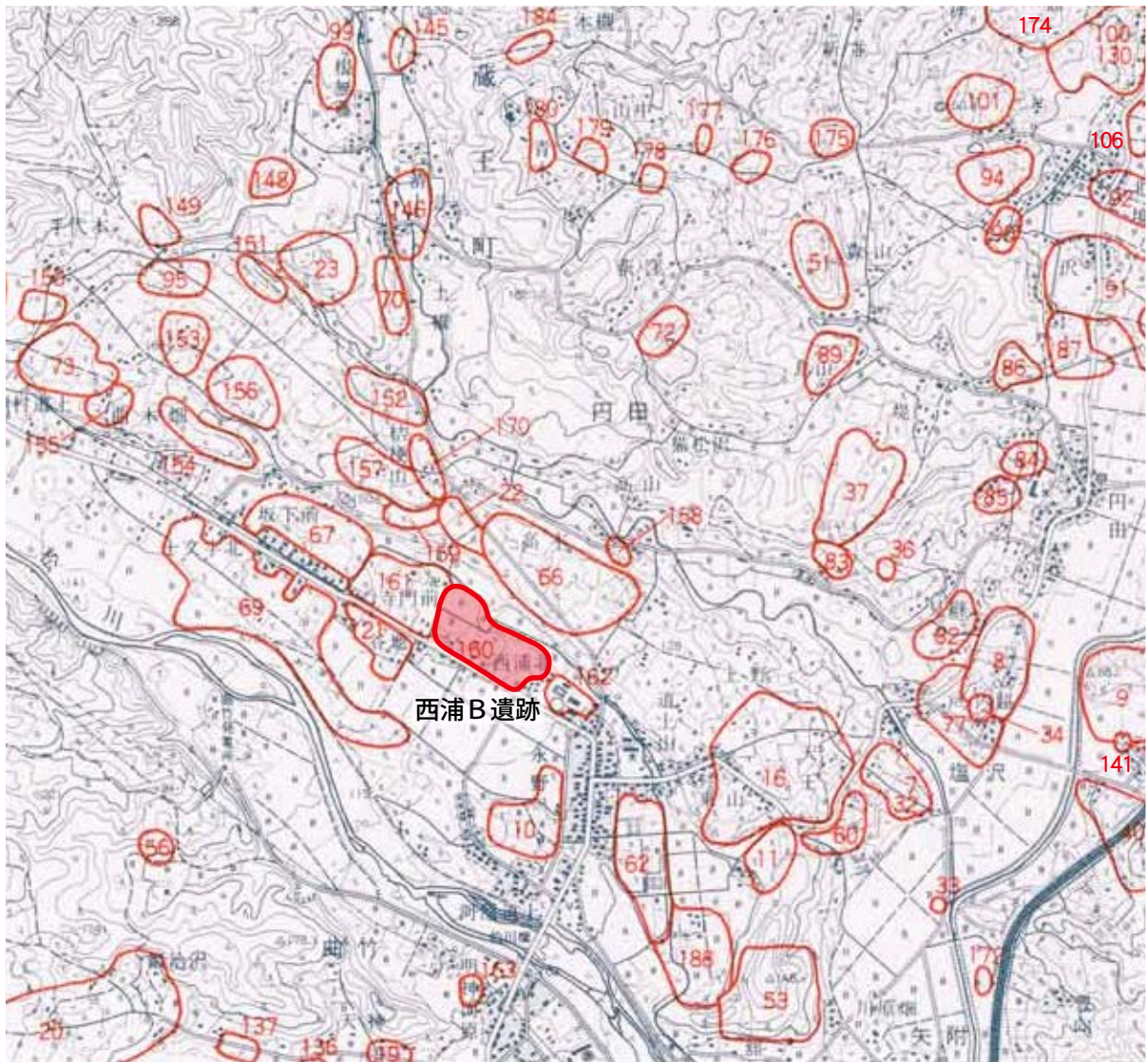
以上のことから、持長地遺跡と鉄砲町遺跡については後期旧石器時代、明神裏遺跡と前戸内遺跡については後期旧石器時代終末～縄文時代草創期に属する可能性が考えられる。しかし、いずれも単独出土しないしは採集資料のため、明確な時期や遺跡の性格については不明な点が多い。

なお、円田盆地の東側に隣接する村田盆地の東縁をなす高館丘陵西麓部では玉髓が産出し、これを利用して石器製作を行なった原産地遺跡が点在している。これらは新川流域遺跡群と呼ばれ、近年調査研究が進められている。このうち、村田町小泉地区の賀籠沢遺跡では 2003～2006 年度にかけて東北学院大学による学術発掘調査が行なわれ、後期旧石器時代の在り型原産地遺跡の様相が明らかにされた。今のところ蔵王町内における旧石器時代の人びとの暮らしぶりは明らかになっていないが、このような原産地遺跡に関連して残された遺跡が今後発見される可能性は十分に考えられる。

### （2）縄文時代

草創期については前述のとおり明確な遺跡が発見されていない。周辺地域でも白石市福岡深谷地区の高野遺跡で槍先形尖頭器が、同大鷹沢地区の小菅遺跡、戸谷沢遺跡で局部磨製石斧が採集されている程度で、具体的な様相は明らかでない。早期の遺跡には宮地区の明神裏遺跡、沢入 D 遺跡、円田地区の手代木遺跡、三本槻 A 遺跡、遠刈田地区の北原尾遺跡、前期の遺跡には宮地区の長峰遺跡、八幡平遺跡、円田地区の入山遺跡、愛宕山遺跡、中期の遺跡には宮地区の上原田遺跡、円田地区の高木遺跡、鞆堂山遺跡、湯坂山 B 遺跡、後期の遺跡には宮地区の二屋敷遺跡、山田沢遺跡、一本木遺跡、円田地区の西浦 B 遺跡、晩期の遺跡には宮地区の下別当遺跡、沢北遺跡、曲竹地区の鍛冶沢遺跡などがある。





西浦B遺跡

1:25,000  
500m 0 500 1000

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
7	天王遺跡	散布地	縄文早・中・弥生・古代	72	菟の窟遺跡	散布地	縄文晩・弥生	150	官林遺跡	散布地	縄文早
8	宋膳堂遺跡	散布地	弥生・古墳・平安	73	棚布遺跡	散布地	縄文後	151	手代木B遺跡	散布地	縄文早・後・古代
9	台遺跡	散布地・水田	弥生・古墳・平安・中・近世	77	戸の内脇遺跡	散布地	縄文早・中・弥生・古墳・平安・中世	152	土橋遺跡	散布地	縄文後・弥生
10	西浦遺跡	集落・散布地	縄文早～後・弥生・古代	82	土ヶ市遺跡	散布地	弥生・古代	153	上曲木C遺跡	散布地	縄文早・中
11	下永向山遺跡	散布地	縄文中・弥生・古代	83	見纏遺跡	散布地	縄文	154	上曲木E遺跡	散布地	縄文前・中
16	上野遺跡	散布地	縄文中・弥生・平安	84	堀の内遺跡	集落・散布地	縄文・弥生・古墳・古代	155	曲木畑遺跡	散布地	縄文
19	日向前遺跡	散布地	縄文早・晩・古代	85	寺坂遺跡	散布地	平安	156	上曲木D遺跡	散布地	縄文前・中
20	鍛冶沢遺跡	散布地	縄文早・中～晩・弥生・古代	86	清水遺跡	散布地	弥生・平安	157	上曲木B遺跡	散布地	縄文早～中・古代
21	谷地遺跡	散布地	縄文中～晩	87	白山遺跡	集落・散布地	弥生・古墳	158	高木B遺跡	散布地	縄文
22	騎堂山遺跡	散布地	縄文中・後・弥生・古代	89	烏山遺跡	散布地	縄文中・古代	159	上曲木A遺跡	散布地	縄文早・弥生・古代
23	湯坂山B遺跡	集落	縄文中～晩・弥生	90	沢遺跡	散布地	古代	160	西浦B遺跡	集落・散布地	縄文中・後・弥生・平安
32	天王古墳群	円墳	古墳	91	本宿前遺跡	集落・散布地	縄文早・弥生・古代・中世	161	寺門前遺跡	散布地	縄文中・後
33	鉦附神社古墳	円墳?	古墳?	92	中組遺跡	集落・散布地	縄文早・中・弥生・平安・中・近世	162	愛宕山遺跡	散布地	縄文前～後・古代
34	宋膳堂古墳	方墳	古墳	95	手代木遺跡	散布地	縄文早・弥生	163	白九頭竜古墳	古墳	古墳
36	八幡山古墳群	円墳・方墳	古墳	99	根無藤館跡	城館	中世	170	桔梗山B遺跡	散布地	縄文
37	花橋館跡	城館	中世	100	小高遺跡	散布地	縄文・弥生・古代	172	豊向遺跡	散布地	古墳
40	大山遺跡	集落	縄文早・弥生・古墳前	101	大栴内遺跡	散布地	弥生	174	瀧訪館遺跡	散布地	弥生・古墳
51	築館館跡	城館	中世	106	堂の内遺跡	散布地	弥生・古代・中世	175	新並遺跡	散布地	縄文中
53	矢附館跡	城館	中世	130	経塚	経塚	中世	176	角山B遺跡	散布地	縄文
56	馬越遺跡	散布地	縄文中	136	八卦遺跡	散布地	縄文後	177	角山A遺跡	散布地	
60	蟹沢遺跡	散布地	弥生	137	市ノ沢遺跡	散布地	弥生・古代	178	青木遺跡	散布地	平安
62	東浦遺跡	散布地	縄文中・後・弥生・古墳・古代	141	西脇古墳	円墳	古墳	179	山中遺跡	散布地	平安
66	高木遺跡	散布地	縄文中	145	円田入C遺跡	散布地	縄文	180	入青木遺跡	散布地	縄文
67	曲木遺跡	散布地	縄文中	146	円田入B遺跡	散布地	縄文早・中	184	三本槻A遺跡	散布地	縄文早
69	十文字遺跡	散布地	縄文中	148	根無藤遺跡	散布地	縄文早・晩・古代	188	下永野B遺跡	散布地	奈良・平安
70	湯坂山遺跡	散布地	縄文中～晩	149	入山遺跡	散布地	縄文前・弥生・古代				

第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (番号は宮城県遺跡登録番号の下3ケタに対応)

鞆堂山遺跡では主に大木8b式期の竪穴住居跡5軒、貯蔵穴23基、土坑墓1基などが発見され、竪穴住居跡は貯蔵穴・柱穴群を挟むように北西側と南東側に分布していた。湯坂山B遺跡では主に大木9式期の竪穴住居跡13軒、貯蔵穴8基などが発見され、多量の土器・石器と土笛が出土している。竪穴住居跡は複式炉を伴うもので、直径9mに及ぶ大型のものもみられる。二屋敷遺跡では南境式期の炉跡2基、土器埋設遺構4基、配石遺構などが発見され、遺物包含層から多量の遺物が出土している（宮城県教育委員会1984）。鍛冶沢遺跡では大洞BC～C1式期の土器埋設遺構や弥生時代初頭の再葬墓と、その周囲を取り囲むように配置された掘立柱建物跡群が発見されている（宮城県教育委員会2010）。

遺跡の分布状況を見ると、早期の遺跡は小規模なものが多く、高木丘陵から青麻山東麓部にかけての広範囲に点在し、遠刈田地区から白石市福岡深谷地区にかけての不忘山東麓部にまとまった分布域を形成する。前期の遺跡数はやや少なくなるが、高木丘陵上と青麻山東麓部に点在する。中期から後期にかけては高木丘陵上に大きな集落が形成され、集中的な遺跡分布域となっている。一方、青麻山東麓部では後期になると多くの集落が形成され、晩期まで継続する大規模な集落がみられる。

このように、時期による分布域の移動と、微地形選択の志向性に変化は見られるものの、縄文時代のおよそ1万数千年間を通して彼らの生活の中心は蔵王山東麓部から延びる高木丘陵上と、青麻山東麓部にあったと言って良い。なお、円田盆地北部の小村崎地区にある都遺跡、窪田遺跡、六角遺跡、原遺跡、平沢地区の中組遺跡などでは縄文時代のもと考えられる落し穴状土坑が見つかっており、低湿地に面した低平な丘陵裾部が狩猟の場として利用されていたことが分かっている。

### （3）弥生時代

縄文時代晩期から継続する宮地区の沢北遺跡、曲竹地区の鍛冶沢遺跡、これに後続する柵形囲式期の遺跡には宮地区の長峰遺跡、円田地区の清水遺跡、西浦遺跡、塩沢地区の宋膳堂遺跡、東根地区の立目場遺跡、円田式期の遺跡には東根地区の大橋遺跡、塩沢地区の台遺跡、上野遺跡、塩沢北遺跡、小村崎地区の都遺跡、円田地区の西浦遺跡、十三塚式期の遺跡には東根地区の愛宕山遺跡、立目場遺跡、天王山式期の遺跡には東根地区の愛宕山遺跡、塩沢地区の天王遺跡、平沢地区の赤鬼上遺跡などがある。

柵形囲式期以前の遺跡は、縄文時代の立地を踏襲しながら、一部円田盆地周縁部の丘陵に立地している。円田式期になると円田盆地周縁部に急速に展開し、遺跡数も急増する。遺構が調査された例は皆無であるが、稲作が受容されたと考えするのに十分な変化と言える。しかし、十三塚式期から天王山式期にかけてはこうした流れを引き継ぐ一方、標高の高い丘陵上に立地する遺跡も見られる。こうした状況は円田盆地に隣接する村田盆地の賀籠沢遺跡などでもみられる。なお、都遺跡で出土した円田式土器の破片と、大橋遺跡で出土した天王山式土器の破片の表面に籾殻の圧痕が観察されている。

### （4）古墳時代

前期（塩釜式期）の遺跡には東根地区の大橋遺跡、伊原沢下遺跡、円田地区の堀の内遺跡、中期（南小泉式期）の遺跡には小村崎地区の都遺跡、東根地区の中沢A遺跡、台遺跡があるが、後期（住社式期）の遺跡は明瞭には確認されていない。また、高塚古墳には宮地区の明神裏古墳、東根地区の夕向原古墳群、古峯神社古墳、塩沢地区の宋膳堂古墳、天王古墳、西脇古墳、中屋敷古墳、八幡山古墳があり、横穴古墳には現在確認できないが平沢地区の諏訪館横穴墓群がある。

古墳時代の遺跡は弥生時代の立地を踏襲し、円田盆地周縁部に集中している。前期の大橋遺跡、伊原沢下遺跡は宮城県内における塩釜式最古段階の、中沢A遺跡は南小泉式最古段階の遺跡として知られ、当該地域が周辺地域に先駆けて新しい文化要素を受容していたことが窺われる。また、盆地を取り囲む丘陵上にいくつもの高塚古墳が築かれている。古墳のほとんどは未調査であるが、宋膳堂古墳は直径約30mの円墳で、埴輪が採集されている。明神裏古墳は昭和31年に発掘調査され、凝灰岩板石によって築造された箱式石棺が確認されている。

## (5) 古代

飛鳥・奈良・平安時代の遺跡としては100か所以上が知られ、このうち発掘調査が行なわれた遺跡としては宮地区の二屋敷遺跡、矢附地区の東山遺跡、塩沢地区の塩沢北遺跡、円田地区の堀の内遺跡、平沢地区の窪田遺跡、都遺跡、赤鬼上遺跡、小村崎地区の戸ノ内遺跡、六角遺跡、十郎田遺跡、前戸内遺跡などがある。

飛鳥・奈良・平安時代の遺跡は、弥生時代以降の立地を踏襲し、円田盆地周辺に多く分布する一方、町東部の丘陵麓部の広い範囲に分布するようになり、生活領域が拡大したことが窺われる。近年の調査成果から特筆されるのは円田盆地北部（平沢・小村崎地区）の様相である。十郎田遺跡では7世紀後半頃（飛鳥時代）の材木塀と大溝による区画施設を伴う集落跡を確認している。六角遺跡では7世紀後半～8世紀前半頃（飛鳥～奈良時代初頭）の大溝による区画施設を伴う集落跡を確認した。当時の在地の土師器とは異なる関東系土師器を主体的に伴っており、関東型カマドをもつ竪穴住居跡も確認されている。堀の内遺跡、都遺跡、戸ノ内遺跡でも少数ながら関東系土師器が出土している。都遺跡では遺跡中樞部が削平により残存しないものの、8世紀前半の多賀城創建期（奈良時代初頭）に位置づけられる軒平瓦が採集されているのをはじめ、大型の掘立柱建物跡と材木塀による区画施設が確認されており、当時の円田盆地を中心とする地域の経営に関する官衙関連施設が営まれていた可能性がある。また、前戸内遺跡では平安時代前半の掘立柱建物跡群が確認され、墨書土器なども出土している。東山遺跡からは、石組みのカマドを持つ平安時代の竪穴住居跡と土器溜遺構が確認され、灰釉陶器、転用硯のほか、「万田」、「子田」などの墨書土器が多量に出土している。

## (6) 中世以降

中世の遺跡としては、宮地区の宮城館跡、山家館跡、館の山城跡、曲竹地区の曲竹小屋館跡、円田地区の花楯館跡、棚村館跡、小村崎地区の西小屋館跡、兵衛館跡、平沢地区の平沢館跡、諏訪館館跡、矢附地区の矢附館跡などがあり、町東部の丘陵麓部に多くの城館が築かれている。また、宮地区の持長地遺跡では中世の掘立柱建物跡群が確認され、常滑系陶器、馬具、鉄鈴、刀子などが出土している。

このほか、平沢地区の保昌寺境内に現存する丈六阿弥陀如来坐像は平安時代末期の作風とされ、当時の平沢地区と奥州藤原氏との関係性を示唆している。遠刈田地区の岩崎山金窟址では戦国末期には採掘が開始されていたとみられ、江戸初期には仙台藩主伊達家の命により採掘されていた。

近世の遺跡として調査されているものは少ないが、小村崎地区の車地蔵遺跡、鍛冶屋敷遺跡では近世の有力者層の屋敷地の一部と考えられる掘立柱建物跡、区画溝跡、水場遺構などの遺構群が確認された。現存する近世の建造物としては、曲竹地区の我妻家住宅、小村崎地区の奥平家住宅、宮地区の刈田嶺神社本殿・拝殿・隨身門などがある。我妻家住宅は江戸中期に建てられた大規模な茅葺民家で、国重要文化財に指定されている。奥平家住宅は江戸後期に建てられた茅葺入母屋造の民家である。刈田嶺神社は江戸期には刈田郡総鎮守として白石城主片倉家の保護を受けた。本殿は江戸中期に建てられたもので、県指定文化財に指定されている。また、近世には奥州街道が宮地区を通り、さらに宮宿から分かれて四方峠、笹谷峠を經由して山形へ至る羽前街道が通っていた。平沢地区には羽前街道の古道の一部が保存され（旧羽前街道保存地区）、藩政時代の街道の景観を今に伝えている。

近代の遺構としては遠刈田地区の遠刈田製鉄所高炉跡、軽便鉄道跡などがある。遠刈田製鉄所高炉跡は当時最先端の設計で明治時代後期に建てられたもので、近代製鉄遺構としては国内で唯一、基礎部分が現存する。明治時代後期から大正時代にかけて大河原―遠刈田間を結んだ軽便鉄道は、現在の道路あるいは路地として、その路線敷きの名残を留めるのみである。

## 第2章 調査に至る経緯

西浦B遺跡は蔵王町大字円田字西浦北地内に所在し、縄文時代の遺跡として宮城県遺跡台帳に登録された周知の埋蔵文化財包蔵地である。平成21年5月に株式会社キクチよりフレスコキクチ蔵王店建設計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が蔵王町教育委員会経由で宮城県教育委員会へ提出され、宮城県教育委員会から計画地内における埋蔵文化財の状況を把握するための遺構確認調査を実施する必要があるとの回答があった。これを受けて株式会社キクチと協議した結果、同年6～7月に蔵王町教育委員会が計画地12,690㎡を対象として遺構確認調査（第4図）を実施し、その結果をみて今後の対応について別途協議することとなった。調査の結果、計画地内には主に縄文時代の遺構・遺物が多数存在しており、遺跡の中核部にあたることが判明したため、再度今後の事業計画と遺跡に対する保護措置について協議を行なったが、計画変更が難しいとの事から事前調査を実施して遺跡の記録保存を図ることで合意した。その後、調査の実施に関する条件整備が整った同年10月29日に株式会社キクチと蔵王町との間に埋蔵文化財発掘調査業務委託に関する覚書ならびに業務委託契約を締結し、地権者からの発掘調査承諾書の提出を受けて同年11月1日より蔵王町教育委員会が事前調査に着手した。



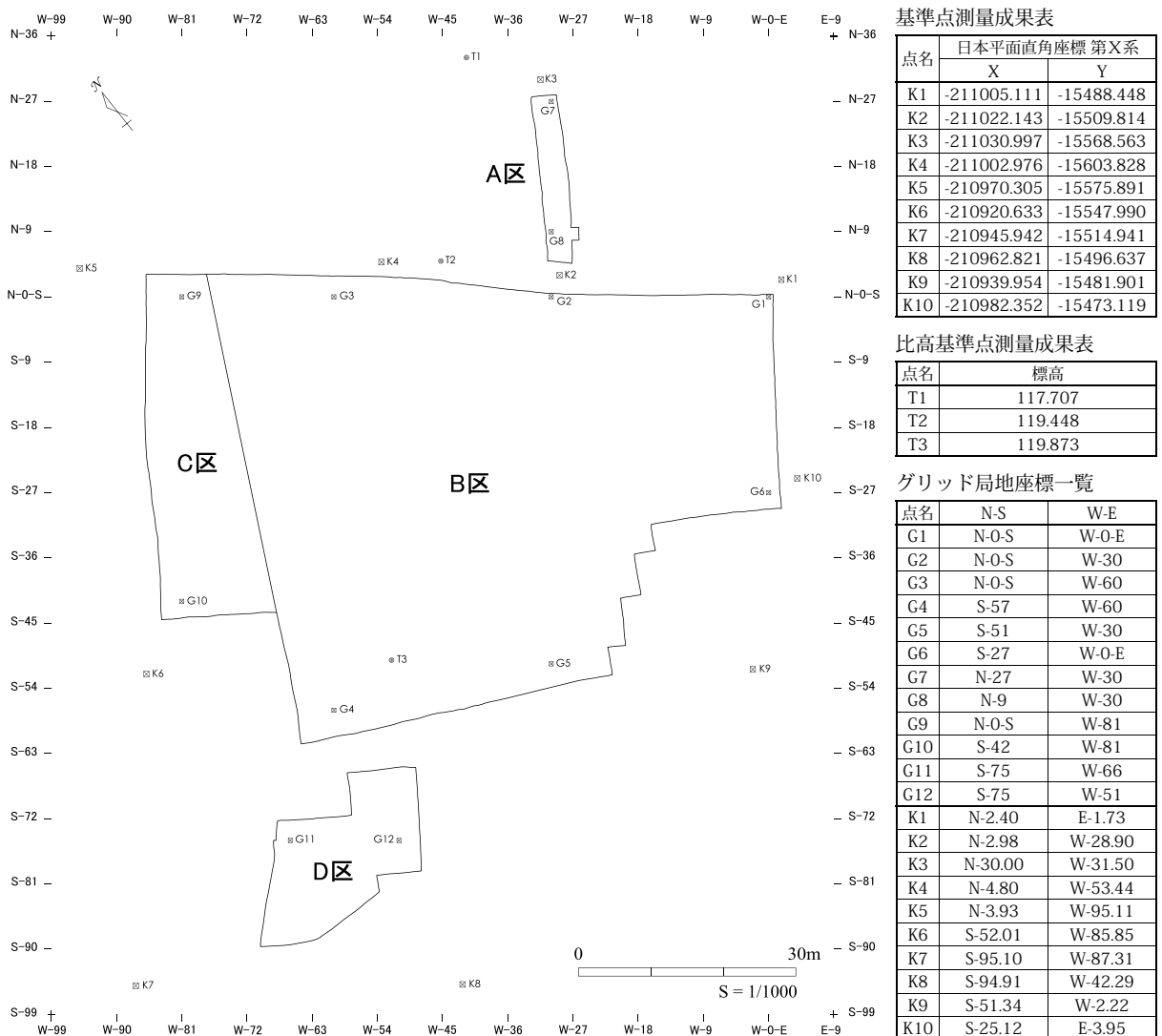
第4図 調査区配置図

## 第3章 調査の方法と経過

遺構確認調査は平成21年6月15日～7月9日にかけて実施し、重機による表土除去の後、人力で遺構確認作業を実施した。工事計画では、鉄骨造平屋建の建物2棟とアスファルト舗装による駐車場を整備するとされており、宮城県教育委員会との協議を経て計画地の全域を調査対象とした。ただし、計画地の西部には果樹が作付されており、秋季の落葉を待って移植をする計画であったことから対象から除外し、中央部から東部・北部を対象として南北方向のトレンチ26本（合計2,276㎡）を設定した（第4図）。この結果、計画地の南東部を除くほぼ全域に遺構が分布することが明らかとなり、出土遺物の特徴から縄文時代後期を中心とする遺構群であると推定された。

事前調査は同年11月1日に着手し、北部の排水路掘削部をA区、建物・駐車場予定地をB区として調査区を設定した。調査区内にはB区北東隅付近に打設した杭(G1)を基準として任意方向の3mグリッドを設定し、東西・南北方向に数字を付した（第5図）。調査区に設定したグリッドの局地座標と国家座標（日本平面直角座標第X系）との対応関係は第5図右表のとおりである。

調査の方法は重機による表土除去の後、人力で遺構確認作業を実施し、その後20分の1縮尺の遺構



第5図 調査区グリッド設定図

平面図を作成した。遺構精査は遺構平面図の作成が完了したA区およびB区の東部から順次行ない、必要に応じて20分の1縮尺の遺構断面図を作成した。遺構精査の完了した区域では、順次完掘後の遺構平面図を作成した。遺構の出土遺物は遺構番号と出土層位ごとに取り上げ、遺構外出土遺物については調査区と出土層位ごとに取り上げた。また、遺構堆積土中に炭化物が確認された場合には、分析用試料として適宜採取した。各遺構の精査完了後には担当した調査員が遺構調書を作成した。

A・B区の調査終了後、果樹の移植作業が完了した計画地西部の遺構確認調査を実施した。東西方向に17本のトレンチ（合計1,137㎡）を設定したところ（第4図）、B区の遺構分布が西側へ15m程度広がっていることが確認された。また、B区の南側で時期不明の廂付掘立柱建物跡が確認された。このため、前者をC区、後者をD区として事前調査を実施した。調査の方法と手順はA・B区と同様に進め、翌22年2月26日までにすべての事前調査と埋め戻し作業を完了した。

記録写真についてはデジタル一眼レフカメラおよび35mmモノクロームフィルムを用いて適宜撮影を行ない、デジタルデータについてはDVD-ROMに記録して保管した。図面についてはトータルステーションを用いて設定した3mグリッドを利用してすべて手実測で作成した。

整理作業は平成22年3月から行ない、遺構・遺物の年代と遺物の性格についての指標を得ることを目的に遺構出土炭化物と土器附着炭化物を試料としたAMS法による放射性炭素年代測定および薄片観察法による土器胎土分析を委託業務により実施した。また、明治大学文化財研究施設の協力を得て黒曜石製石器の原産地分析を、東北大学大学院文学研究科考古学研究室の協力を得て石器使用痕分析を行なった。

遺構図については、手実測で作成した図面をイメージスキャナとビットマップ画像編集ソフトウェアを用いてデジタル画像化し、調査員が作成した遺構調書を参照しながらパソコン内でベクトル画像編集ソフトウェアを用いてデジタルトレースを行なった。

遺物については、水洗洗浄の後に注記を行ない、可能な限り接合と修復を行なった上で遺物調書を作成し、遺物の性格と残存状況などに応じて実測図あるいは拓本を作成した。遺物の実測図およびトレース図についてはすべて手作業により作成した。実測図等の作成が終了した遺物については、デジタル一眼レフカメラを用いて写真撮影を行なった。

以上の経過を経て作成した遺構・遺物調書をもとに報告書を執筆した本文と、遺構・遺物の写真・図面等のレイアウトおよび編集作業をDTPソフトウェアを用いて実施し、本書の印刷・製本を行なって本事業を完了した。



第6図 調査区遠景



第7図 発掘作業風景



第8図 整理作業風景

## 第4章 調査の結果

### 第1節 基本層序

調査区は遺跡範囲の中央部付近にあたり、地表面の遺物の散布も比較的濃密であった。調査前の現況は畑地で、東へ向かってわずかに傾斜している。耕作に伴う耕起のほかは、大きな地形の改変は認められない。基本層序はⅠ～Ⅴ層に細分される。Ⅰ層は表土または現代の耕作土で、層厚は15～25cm程度である。Ⅱ層は旧耕作土で、層厚は10～20cm程度である。近代の陶磁器片などを含む。Ⅲ層は黒ボクと称される黒色火山灰層で、層厚は10～20cm程度である。調査区内では標高の低い北東部でのみ確認した。Ⅳ層はⅤ層上部に形成された漸移層で、層厚は15～30cm程度である。Ⅴ層は黄褐色を呈する火山灰層で、永野火山灰（中川ほか1960）とみられる。遺構はすべてⅤ層上面で確認したが、調査区断面の観察から中世～近世の遺構掘り込み面はⅢ層上面、縄文時代後期の遺構掘り込み面はⅤ層上面であることを確認した。現地表面からⅤ層上面までの深さは45～85cmである。

Ⅰ層	黒褐色シルト	表土・現耕作土	15～25cm	
Ⅱ層	黒色シルト	旧耕作土	10～20cm	
Ⅲ層	黒褐色シルト	黒色火山灰層	10～20cm	中世～近世の遺構掘り込み面
Ⅳ層	暗褐色シルト	漸移層	15～30cm	
Ⅴ層	黄褐色粘質シルト	永野火山灰層	80cm以上	縄文時代後期の遺構掘り込み面

永野火山灰は蔵王火山に由来するもので、松川沿岸の永野・矢附段丘上を覆い、北東方向へ仙台市内の青葉山段丘上でも確認されている。層厚は永野段丘上で2.5mに及び、中川久夫らは永野火山灰を関東地方の立川ロームに対比させている（中川ほか前掲）。また、遠刈田温泉の南側に位置する七日原地区では永野火山灰上部（本遺跡Ⅳ層に相当か）に縄文時代晩期の土器片が包含され、永野火山灰の降灰期間は永野段丘形成後から縄文時代晩期までの長期間にわたったものと考えられている（村山1966）。

永野火山灰層を覆う黒色火山灰層（本遺跡Ⅲ層）は縄文時代晩期以降に堆積したものであり、蔵王連峰の最高部に位置する火口湖の御釜を中心として東方約20km程度まで半円弧を描くように分布する。層厚は七日原付近で1.5mに及ぶ。御釜を火口とする火山活動の最も古い記録は773年（続日本後記）であり、その後の1227年には「九月陸奥国芝田郡に石の降ること雨の如し、その大きさ柚柑のように細長く、下道廿余里の間人馬畜類是にうたるもの数を知らず（九条九代記）」、1230年には「十月廿六日夜奥羽国柴田郡に石雨の如く降るといふ。かの石一つ將軍家に進ず、大きさ柚の如く鹿石なり（東鑑）」、1624年には「十月五日砂礫を雨ふらし、大石を飛ばし田を害す（貞山公治家記録）」、また1895年には「二月十五日鳴動し白煙噴出。九月廿七日鳴動噴煙し青根・川崎等降灰雨の如し（菊地勇治郎氏稿）」など20数回の活動が記録にあり（三原1955）、多量の降灰があったことが知られる。

なお本遺跡周辺では、黄褐色を呈する永野火山灰層中に厚さ数cmから数10cmの黒色火山灰の夾層が確認されることがある。黄褐色火山灰は黒色火山灰中の鉱物片が風化・溶脱され、さらに酸化鉄が生成されることによって色調が変化したものであり、蔵王山麓では普通粒径の火山灰では約1,000年を単位として黄褐色に変化する。こうした火山灰の風化・溶脱の作用は、降灰時の粒径および降灰後の気温や降水量などの因子に影響され、溶脱の進行度合いや酸化鉄の生成差によって黄褐色火山灰層中に黒色火山灰の夾層が形成されることが明らかにされている（村山前掲）。

## 第2節 発見された遺構と遺物

確認した遺構は、竪穴住居跡2軒、竪穴状遺構1軒、炉跡1基、掘立柱建物跡26軒、柱列跡9条、溝跡5条、フラスコ状土坑31基、落とし穴状土坑4基、土坑14基、柱穴多数である。各調査区における遺構の確認状況は以下のとおりである。

A区は調査対象範囲の北部に位置する南北23m、東西3.5m、面積約83㎡の調査区である。北端は段丘面を開析する埋没河川に形成された後背湿地との境界に面し、基本層Ⅲ層の黒色火山灰の堆積はA区北部のみで確認した。遺構確認面はV層上面で、北へ向かって緩やかに傾斜している。現地表面からの深さは60～85cmである。確認した遺構は溝跡1条、フラスコ状土坑2基、土坑2基、柱穴10数か所である。

B区は調査対象範囲の中央部に位置し、主体を占める東西78m、南北65m、面積約3,650㎡の調査区である。C区は東西16m、南北47.5m、面積約595㎡で、B区の西側に隣接する。B・C区をあわせた調査区は東西86.5m、南北65m、面積約4,245㎡である。遺構確認面はV層上面で、北へ向かってわずかに傾斜している。現地表面からの深さは45～60cmである。確認した遺構は竪穴住居跡2軒、竪穴状遺構1軒、掘立柱建物跡24棟、柱列跡9条、炉跡1基、溝跡4条、フラスコ状土坑27基、落とし穴状土坑3基、土坑12基、柱穴多数である。

D区は調査対象範囲の南部に位置する南北22m、東西23m、面積約350㎡の調査区である。遺構確認面はV層上面で、ほぼ平坦である。現地表面からの深さは60～70cmである。確認した遺構は掘立柱建物跡2棟、フラスコ状土坑1基、落とし穴状土坑1基、柱穴数か所である。

出土した遺物は、縄文土器・石器を主体に、ロクロ土師器・中世陶器・近世陶磁器などである。縄文土器はフラスコ状土坑から出土したものが主体でほとんどが縄文時代後期に位置づけられ、中期・晩期のものがごく少数みられる。石器についても大半が縄文時代後期の土器に伴うものとみられる。ロクロ土師器は竪穴住居跡から出土したもので平安時代に位置づけられる。出土遺物の修復後総量は遺物収納コンテナ（44×60×15cm）で約46箱分である。

これらの遺構の分布状況と出土した遺物の特徴などから、B区南西部とD区で確認した掘立柱建物跡3棟は中世～近世、B区北西部で確認した竪穴住居跡1軒は平安時代に位置づけられ、B区を中心に分布するこのほかの竪穴住居跡1軒、炉跡1基、掘立柱建物跡23棟、フラスコ状土坑31基など大半の遺構が縄文時代後期に位置づけられる。また、B区北西部で確認した竪穴状遺構は古代、A区とB区中央部で確認した溝跡5条は中世以降、B・C区南部とD区で確認した落とし穴状土坑4基は縄文時代と考えられる。以下、発見された遺構と遺物について時代ごとに述べる。

### 1. 縄文時代

#### (1) A区

##### ① フラスコ状土坑

【SK19 フラスコ状土坑】（第11・15・16図、写真図版2－6・7）

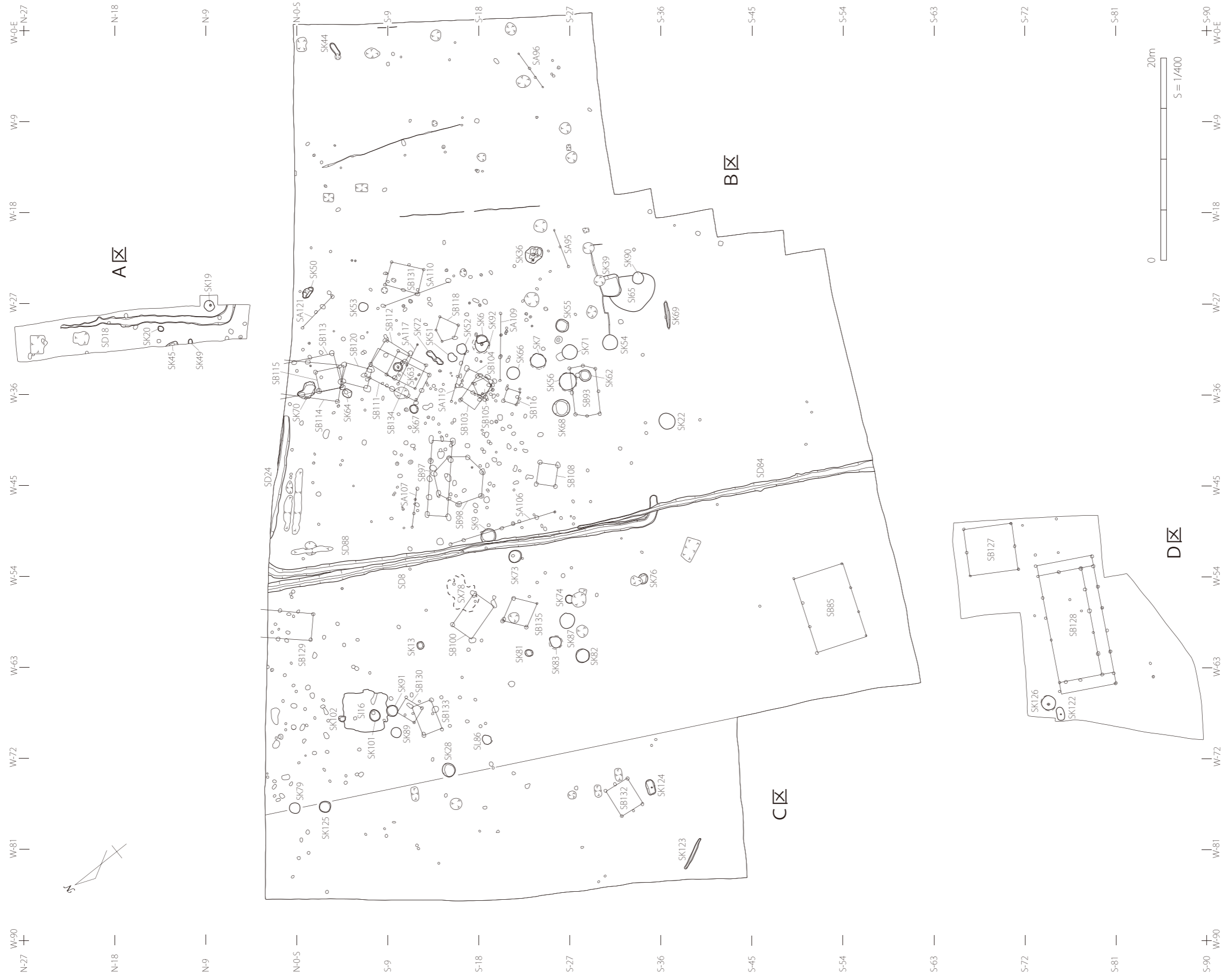
〔位置・確認面〕 A区の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕 なし

〔規模・形状〕 平面形は確認面で直径100cm、最大径で110cmの円形を呈し、断面形は深さ26cmの台形を呈する。底面は周縁部で3cmほど窪んでいる。中心部のやや南東寄りの位置で平面形が直径約20cmの円形を呈し、深さ25cmの小柱穴を確認した。

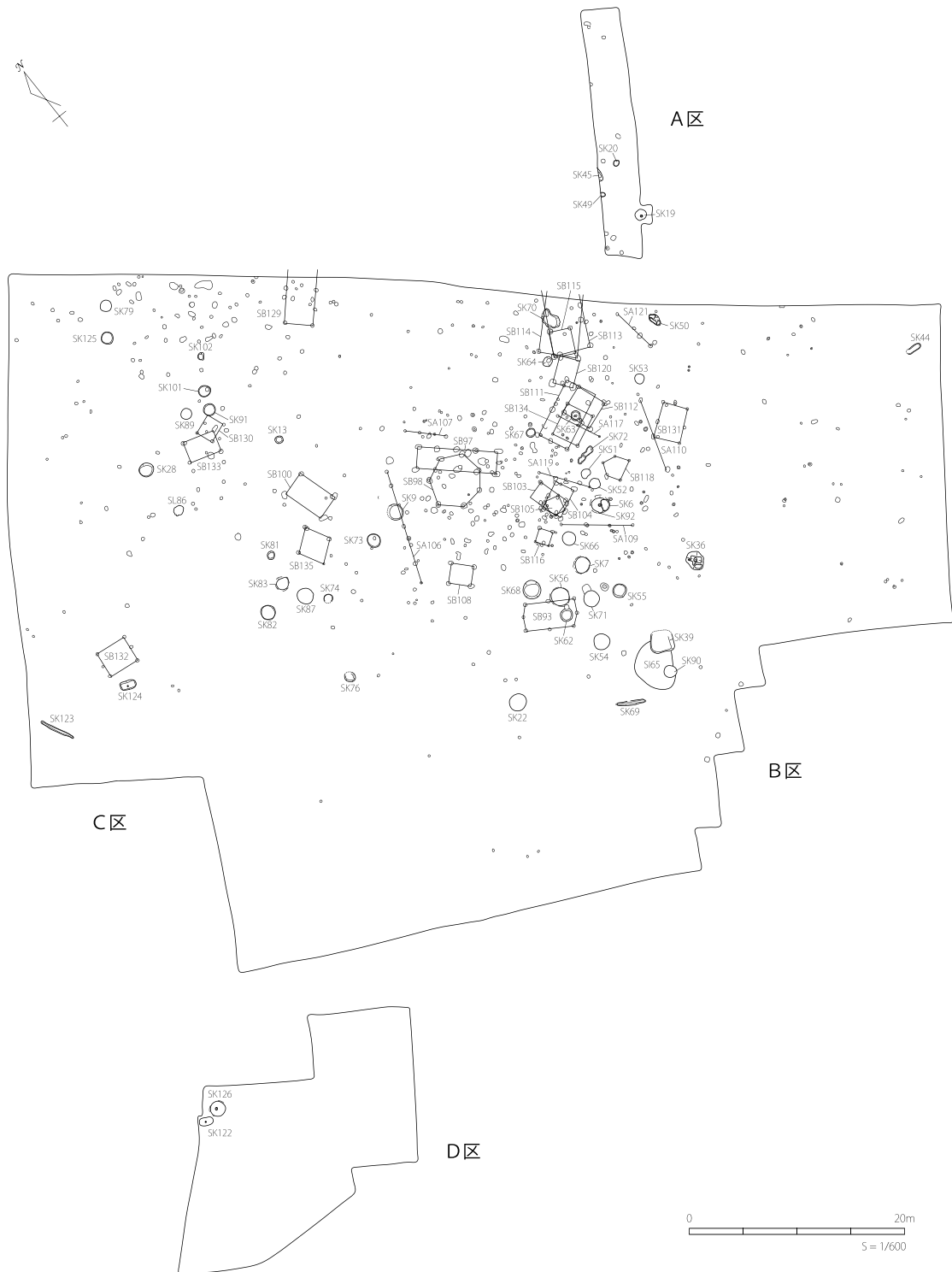
〔堆積土〕 3層に細分される。1層は地山ブロックをわずかに含む黒褐色シルト、2・3層は地山ブロッ





第9図 遺構配置図





第10図 縄文時代の遺構配置図

クを含む黒褐色シルトである。1層は自然堆積土、2・3層は人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕 確認面、堆積土より縄文土器浅鉢（第16図13・18・19）、鉢（第16図20・21）、深鉢（第15図2～12、第16図1～12・23～27）、台付鉢（第16図22）、注口土器（第15図1）、土器片加工円板（第146図1・2）、二次加工剥片（第150図2）、微細剥離痕を有する剥片（第156図1～3）、剥片、石核（第158図3・7）などが出土した。第16図14～22については型式学的にみて他の出土土器よりも明らかに新しい様相を示しており、上層からの混入と考えられる。

【SK20 フラスコ状土坑】（第12・17図、写真図版3-1）

〔位置・確認面〕 A区の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸 60cm、短軸 50cm の不整形形を呈し、断面形は深さ 29cm のU字形を呈する。底面は皿状を呈する。

〔堆積土〕2層に細分される。地山ブロックを多く含む黒褐色シルト・暗褐色粘質シルトであり、いずれも人為的埋土と考えられる。

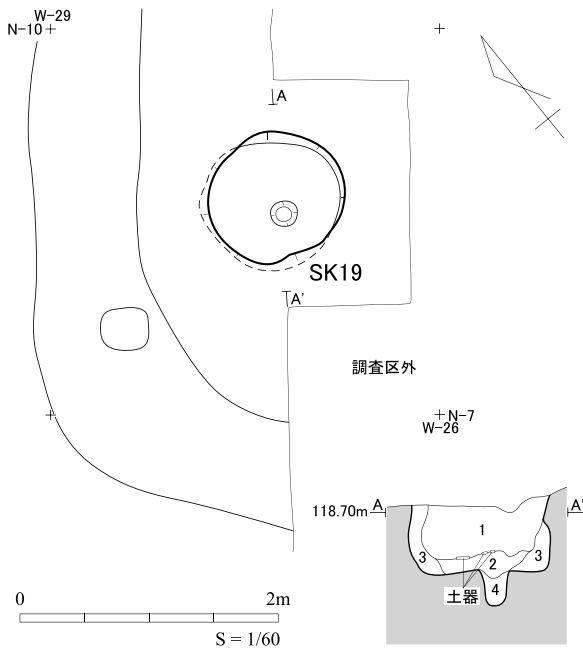
〔出土遺物〕確認面、堆積土より縄文土器深鉢（第 17 図）、土器片加工円板（第 146 図 1・2）が出土した。

② 土坑

〔SK45 土坑〕（第 13 図、写真図版 3 - 2）

〔位置・確認面〕A 区の平坦面に位置する。V 層上面で確認した。

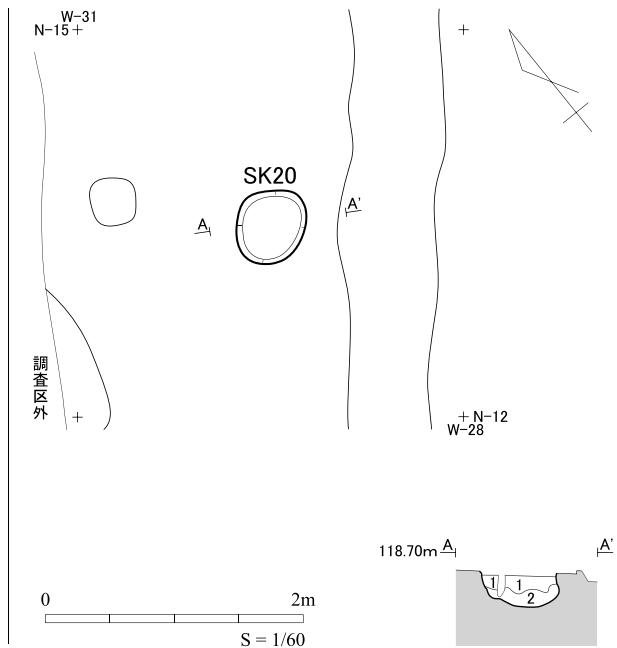
〔重複〕なし



SK19 フラスコ状土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	地山ブロックを少量含む
2	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを微量に含む（人為）
3	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む（人為）
4	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む

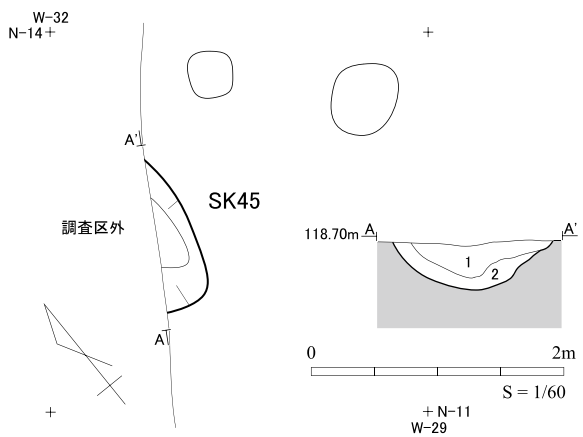
第 11 図 SK19 フラスコ状土坑



SK20 フラスコ状土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒を多く含む
2	10YR3/4 暗褐	粘質シルト	地山ブロックを多く含む

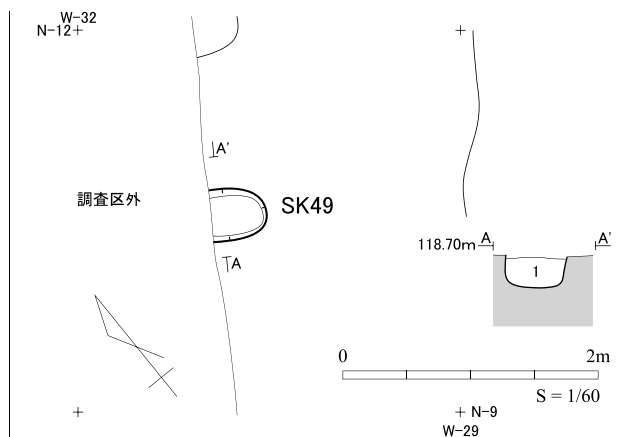
第 12 図 SK20 フラスコ状土坑



SK45 土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR 4/1 褐灰	シルト	地山ブロック・砂を含む
2	10YR4/3 にぶい黄褐	シルト	地山ブロックを多く含む 砂を含む（人為）

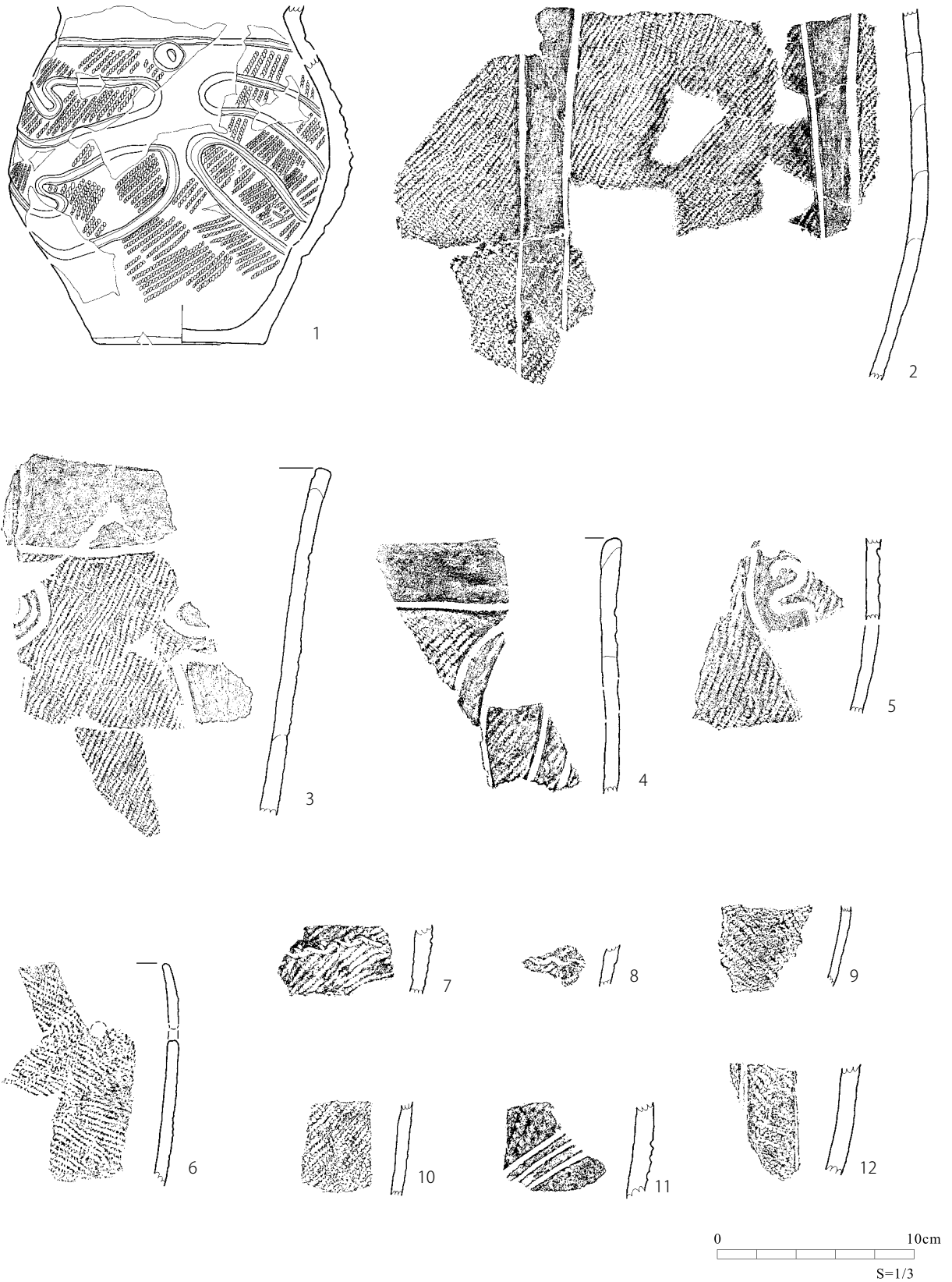
第 13 図 SK45 土坑



SK49 土坑 A-A'

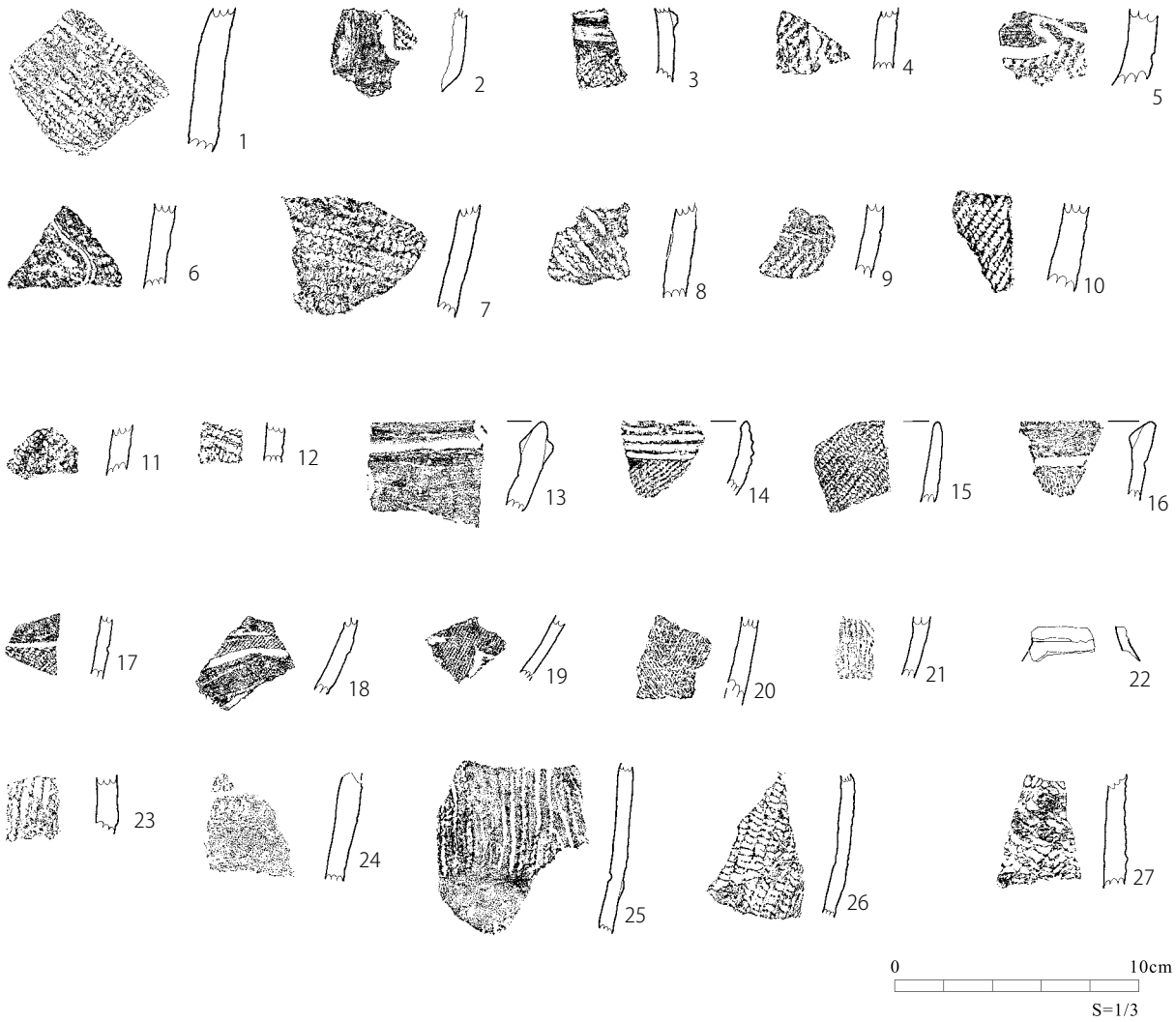
No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（人為）

第 14 図 SK49 土坑



No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	A・SK19・堆	注口 土器	ボタン状貼付文、縄文 (RL) → 沈線文 底面：無文 (ミカキ)	022	22-1	6	A・SK19・堆	深鉢	縄文 (LR+ 結節文)、補修孔?	027	22-7
2	A・SK19・堆、確	深鉢	磨消縄文 (LR)、平行沈線文	023	22-3	7・8	A・SK19・堆	深鉢	縄文 (LR+ 結節文)	028	22-8
3	A・SK19・堆、確	深鉢	沈線文、磨消縄文 (LR)、蕨手文、U字状文	024	22-4	9	A・SK19・堆	深鉢	縄文 (R)	029	-
4	A・SK19・堆	深鉢	沈線文、磨消縄文 (LR)、楕円文またはU字状文	025	22-5	10	A・SK19・堆	深鉢	縄文 (LR)	030	-
5	A・SK19・堆	深鉢	磨消縄文 (LR)、蕨手文	026	22-6	11	A・SK19・堆	深鉢	縄文 (L) → 多条沈線文	031	-
						12	A・SK19・堆	深鉢	縄文 (RL) → 沈線文	032	-

第15図 SK19 フラスコ状土坑出土遺物 (1)



No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	A・SK19・堆	深鉢	縄文 (RL)	033	-	14	A・SK19・堆	鉢	平行沈線文、縄文 (L)	047	22-9
2	A・SK19・堆	深鉢	沈線区画、縄文 (LR)	034	-	15	A・SK19・堆	鉢	縄文 (LR)	048	-
3	A・SK19・堆	深鉢	隆線文、沈線文、縄文 (RL)	035	-	16	A・SK19・堆	鉢	沈線文、撚糸文 (LR)	049	-
4	A・SK19・堆	深鉢	縄文 (LR) → 沈線文	036	-	17	A・SK19・堆	鉢	沈線文、縄文 (RL)	050	-
5	A・SK19・堆	深鉢	磨消縄文 (L)、沈線文	037	-	18・19	A・SK19・堆	浅鉢	変形文 / 縄文 (LR)	051	22-10
6	A・SK19・堆	深鉢	磨消縄文 (RL)、沈線文	038	-	20	A・SK19・堆	鉢?	櫛描文	052	-
7	A・SK19・堆	深鉢	縄文 (LR)	039	-	21	A・SK19・堆	鉢?	縄文 (LR) → 沈線文	053	-
8	A・SK19・堆	深鉢	縄文 (R)	040	-	22	A・SK19・堆	台付	隆線文、無文 (ミガキ) 脚部?	054	22-11
9	A・SK19・堆	深鉢	縄文 (L)	041	-	23	A・SK19・堆3	深鉢	縄文 (L)	055	-
10	A・SK19・堆	深鉢	縄文 (LR)	042	-	24	A・SK19・堆3	深鉢	条線文	056	-
11	A・SK19・堆	深鉢	縄文 (LR)	043	-	25	A・SK19・確	深鉢	撚糸文 (RL)、隆線文	057	-
12	A・SK19・堆	深鉢	縄文 (LR)。外面：付着物あり (漆?)	044	-	26	A・SK19・確	深鉢	縄文 (LR)、割口に炭化物? 付着	058	-
13	A・SK19・堆	浅鉢	外面：隆線文、内面：隆線文	046	-	27	A・SK19・確	深鉢	縄文 (L)	059	-

第16図 SK19 フラスコ状土坑出土遺物 (2)

〔規模・形状〕西側が調査区外へ延びるため全体の形状は不明であるが、平面形は長軸 110cm 以上、短軸 40cm 以上の方角を呈するとみられる。断面形は深さ 35cm の皿状を呈する。

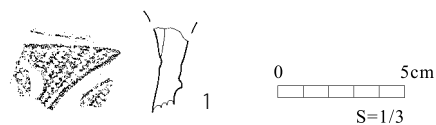
〔堆積土〕2層に細分される。1層は地山ブロック・砂を多く含む褐灰色シルト、2層は地山ブロックを多く含むにぶい黄褐色シルト層である。1層は自然堆積土、2層は人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

〔SK49 土坑〕(第14図、写真図版3-3・4)

〔位置・確認面〕A区の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕なし



No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	A・SK20・確	深鉢	磨消縄文 (LR)、沈線文	062	22-11

第17図 SK20 フラスコ状土坑出土遺物

〔規模・形状〕西側が調査区外へ延びるため全体の形状は不明であるが、平面形は長軸 45cm 以上、短軸 40cm 以上の楕円形を呈するとみられる。断面形は深さ 25cm の逆台形を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕地山ブロックを含む黒褐色シルト層で、人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

(2) B・C区

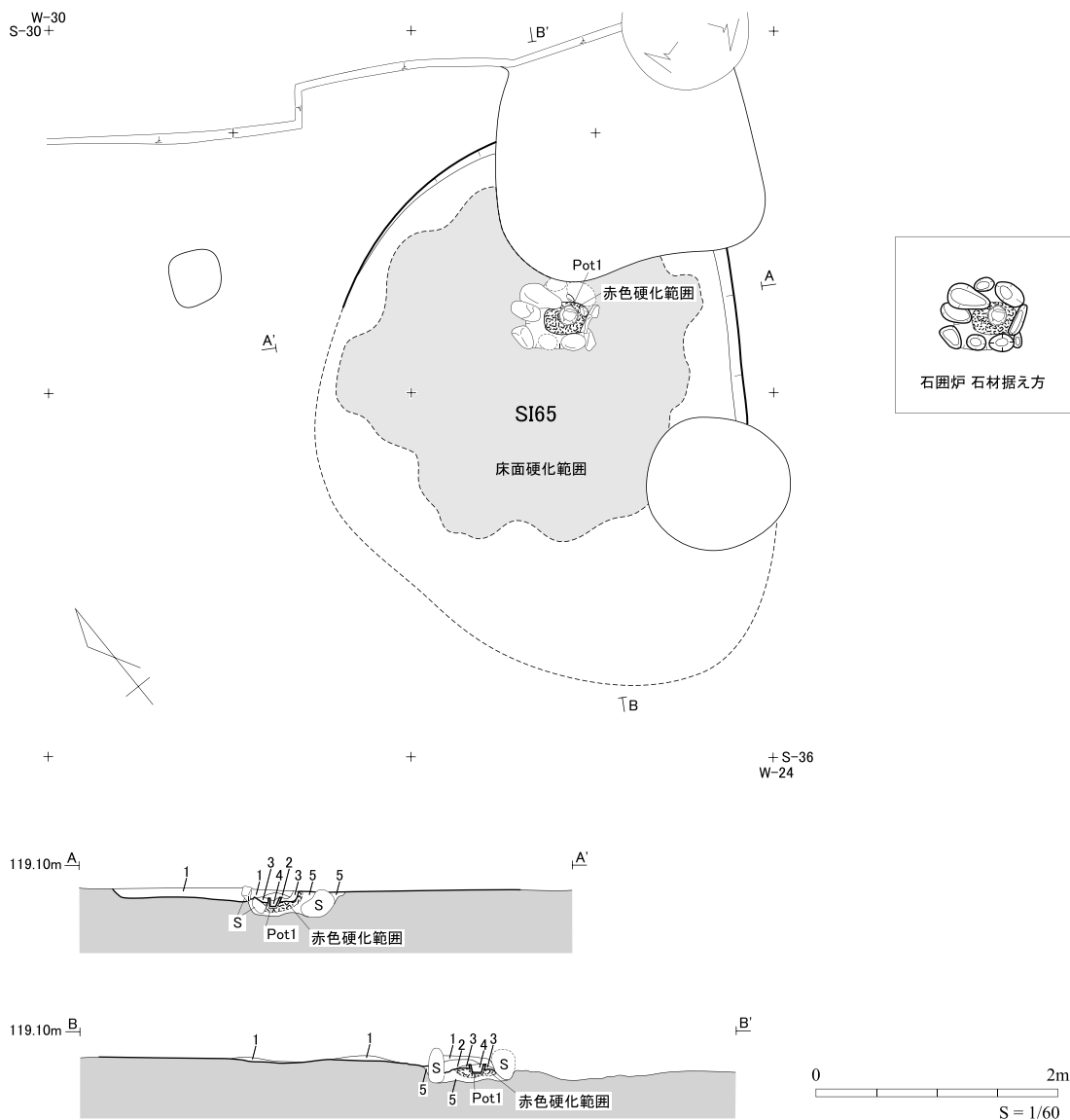
① 竪穴住居跡

【SI65 竪穴住居跡】(第 18・19 図、写真図版 5 - 4 ~ 7)

〔位置・確認面〕B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕SI65 → SK90・SK39

〔規模・形状〕南西側が削平を受けており全体の形状は不明であるが、残存範囲で南北 4.6m、東西 3.6m の不整楕円形を呈する。



SI65 竪穴住居跡 A-A' B-B'

No.	土色	土性	備考	No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ブロックを多量に含む(住堆)	4	7.5YR2/3 極暗褐	シルト	焼土ブロック・炭化物を含む 地山ブロックを少量含む(炉堆)
2	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒を含む 焼土粒を少量含む(炉堆)	5	7.5YR3/4 暗褐	シルト	均質土 内面が被熱により赤色化(炉石据方・炉構)
3	7.5YR3/2 黒褐	シルト	地山粒を多量に含む(炉堆)				

第 18 図 SI65 竪穴住居跡

〔壁面〕 V～VI層を壁とする。床面から外傾して立ち上がり、残存壁高は東壁で床面から12cmである。  
 〔床面〕 地山（VI層）を床とする。ほぼ平坦である。中央やや北寄りの東西2.9m、南北2.9mの範囲で床面の顕著な硬化を確認した。

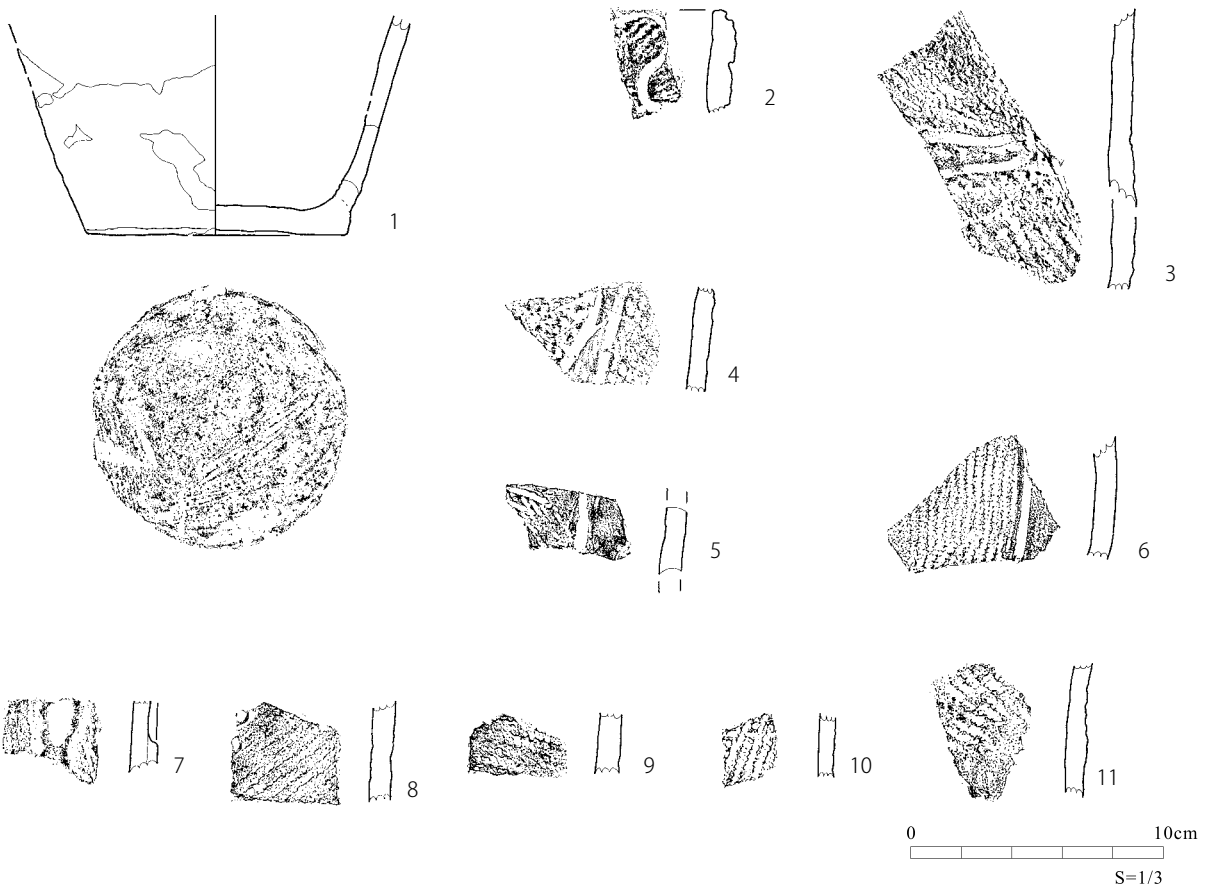
〔支柱穴〕 なし

〔周溝〕 なし

〔炉〕 中央やや北東寄りの位置に石囲炉が設置されている。20～40cm大の河原石を用いて東西70cm、南北60cmの不整形に区画し、地山ブロック主体の埋土で炉床を構築している。炉床の中央部の直径30cmの範囲で被熱による顕著な赤色化がみられる。また、被熱面を直径15cm、深さ5cmほど掘り下げて深鉢形土器を正位に埋設している。埋設された土器は体下部～底部が残存する。二次的な被熱による器壁の剥落などの損傷が著しい。石組の石材は8石が残存し、3石の痕跡を確認したことから、計11石で構築されていたと考えられる。石材には石皿などの礫石器を転用しているものがある。

〔堆積土〕 地山ブロックを含む暗褐色シルトで、住居廃絶後の自然堆積土である。

〔出土遺物〕 石囲炉内に埋設された状態で縄文土器深鉢（第19図1）が、炉内堆積土より深鉢（第19図2）が出土した。石囲炉を構築する石材として、磨石（第161図4）、磨石／凹石（第164図4）、石皿（第166図1）が転用されていた。また、堆積土より縄文土器深鉢（第16図3～11）、ピエス・エスキュー（第149図6）、剥片などが出土した。縄文土器深鉢の破片には、SK90フラスコ状土坑出土土器（第101図2）と同一個体とみられるものがある。



No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SI65・Pot1	深鉢	胴部：無文（ミガキ）、底部：無文（ナデ→ミガキ） 全体的に被熱著しい	406	22-2	6	B・SI65・堆	深鉢	磨消縄文（LR）、沈線文	410	22-17
2	B・SI65・炉内	深鉢	縄文→S字状？沈線文、外面：炭化物付着	407	22-13	7	B・SI65・堆	深鉢	鎖状隆線文、縄文（LR）	412	22-18
3	B・SI65・堆	深鉢	磨消縄文（RL）、沈線文、外面：炭化物付着	408	22-14	8	B・SI65・堆	深鉢	縄文（L）、連続刺突文または微隆起線文	413	-
4	B・SI65・堆	深鉢	磨消縄文（LR）、沈線文、刻目文、外面：炭化物付着	409	22-15	9	B・SI65・堆	深鉢	縄文（RL）	414	-
5	B・SI65・堆	深鉢	沈線文、撚糸文（LR）、押圧縄文（LR）	411	22-16	10	B・SI65・堆	深鉢	縄文（LR）	415	-
						11	B・SI65・堆	深鉢	縄文（LR）	416	-

第19図 SI65 竪穴住居跡出土遺物



② 掘立柱建物跡

【SB93 近接棟持柱付掘立柱建物跡】（第20図、写真図版5-8、6-1）

〔位置・確認面〕 B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕 SK62・SK56 - SB93

〔規模・形状〕 東西2間（総長4.56m）、南北1間（総長2.52m）の東西棟側柱建物で、東西に近接棟持柱をもつ。

〔柱穴〕 側柱6か所、棟持柱2か所を確認した。側柱は掘方の平面形が長軸28～43cm、短軸26～32cmの円形または楕円形を呈し、深さ17～24cmである。2か所で柱材の抜き取り痕跡を確認した。柱痕跡はいずれも確認されなかった。棟持柱は東西側柱列に近接した外側に位置し、掘方の平面形が長軸29～33cm、短軸25～30cmの略円形を呈し、深さ18～34cmである。柱痕跡はいずれも確認されなかった。

〔柱間寸法〕 北側柱列：西から(216)―(240)cm、東側柱列：(252)cm、棟持柱間：(500)cm

〔方向〕 北側柱列：N - 56.5° - W

〔出土遺物〕 P1の柱材抜き取り痕跡より縄文土器深鉢の破片が出土した。

【SB97 掘立柱建物跡】（第21図、22図1・2、写真図版6-2～5）

〔位置・確認面〕 B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕 SB97 → SB98

〔規模・形状〕 東西4間（総長7.40m）、南北1間（総長2.02m）の東西棟側柱建物である。

〔柱穴〕 10か所確認した。掘方の平面形は長軸44～78cm、短軸28～56cmの隅丸方形または楕円形を呈し、深さ19～52cmである。7か所で柱材の抜き取り痕跡を、2か所で平面形が直径24～26cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕 北側柱列：西から(176)―(184)―(180)―(200)cm、東側柱列：(202)cm

〔方向〕 東側柱列：N - 46.5° - W

〔出土遺物〕 P4堆積土より縄文土器深鉢（第22図1）が、P8堆積土より縄文土器深鉢（第22図2）が出土した。また、P2、P3、P7堆積土より縄文土器深鉢の破片が、P6確認面より剥片が出土した。

【SB98 掘立柱建物跡】（第22図6・7、23図、写真図版6-1・2・6・7）

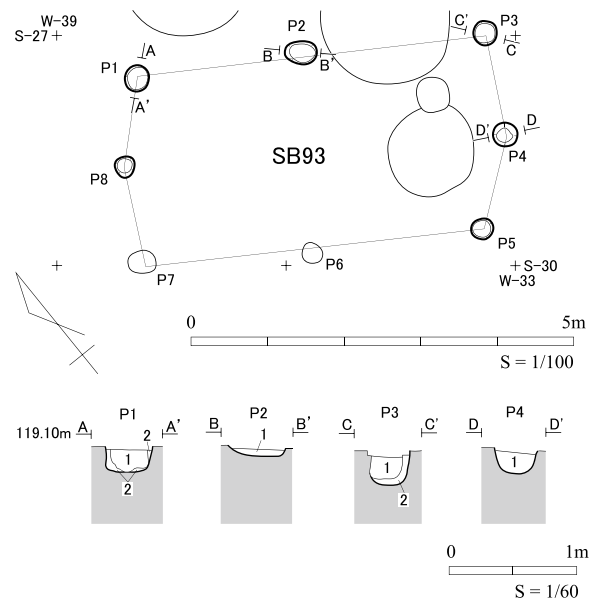
〔位置・確認面〕 B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕 SB97 → SB98

〔規模・形状〕 建物外周の7か所に柱を配置する多角形側柱建物で、東西4.80m、南北4.80mの規模をもつ。

〔柱穴〕 7か所確認した。掘方の平面形は長軸44～70cm、短軸42～52cmの略円形または楕円形を呈し、深さ49～70cmである。5か所で柱材の抜き取り痕跡を、4か所で平面形が直径22～29cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕 P1から時計回り：(220)―(190)―(208)―226―242―(232)cm



SB93 掘立柱建物跡 P1 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を少量含む（柱抜）
2	10YR3/4 暗褐	シルト	地山粒をきわめて多量に含む（柱掘）

SB93 掘立柱建物跡 P2 B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒を含む

SB93 掘立柱建物跡 P3 C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを少量含む（柱抜）
2	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ブロックを多量に含む（柱掘）

SB93 掘立柱建物跡 P4 D-D'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を含む

第20図 SB93 掘立柱建物跡

〔出土遺物〕P6 堆積土より縄文土器深鉢（第22図3）が、P7 堆積土より縄文土器深鉢（第22図4）などが出土した。また、P1 堆積土より剥片が出土した。

【SB100 掘立柱建物跡】（第24図、写真図版6-8、7-1）

〔位置・確認面〕B区西部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕SX78 → SB100

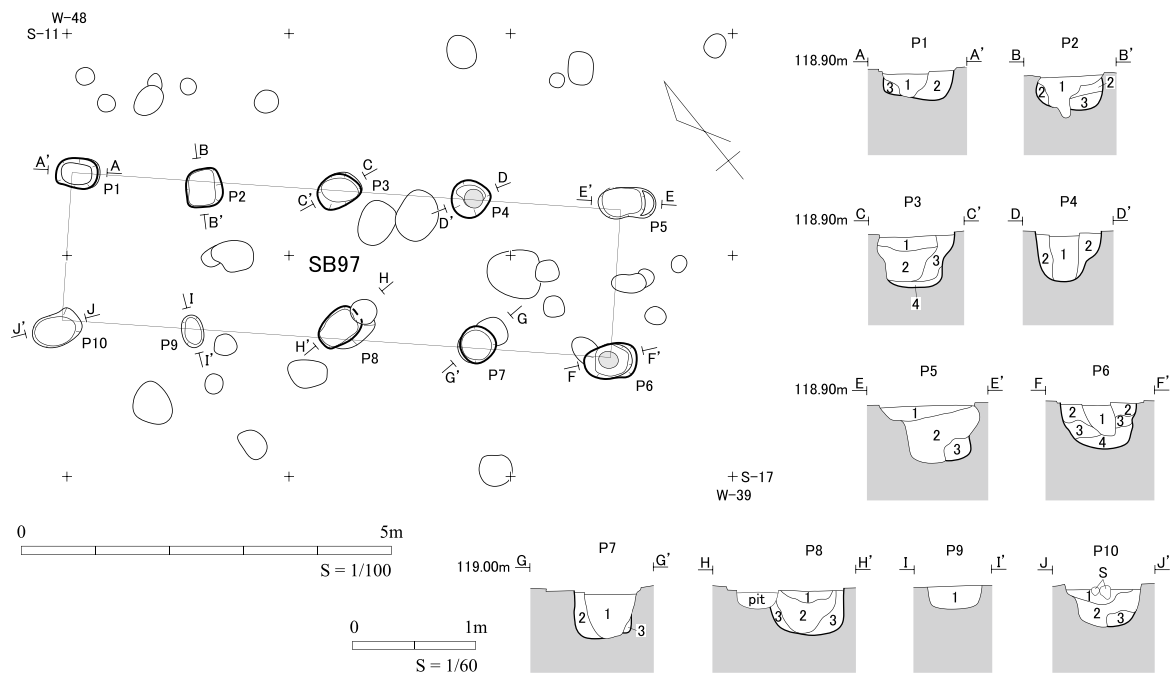
〔規模・形状〕東西1間（総長2.44m）、南北1間（総長3.96m）の側柱建物である。

〔柱穴〕4か所確認した。掘方の平面形は長軸44～80cm、短軸36～44cmの隅丸方形または楕円形を呈し、深さ51～71cmである。いずれも柱材の抜き取り痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕南側柱列：(244)cm、東側柱列：(396)cm

〔方向〕東側柱列：N-15.6°-W

〔出土遺物〕P2 堆積土よりスクレイパー（第148図7）が、P4 堆積土より石核（第159図3）が、P1・P2・P4 堆積土より縄文土器深鉢の破片が、P1 堆積土より剥片が出土した。



SB97 掘立柱建物跡 P1 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒をわずかに含む（柱抜）
2	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）
3	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SB97 掘立柱建物跡 P6 F-F'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを少量含む（柱痕）
2	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ブロックを含む 炭化物をわずかに含む（柱掘）
3	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ブロックを多量に含む（柱掘）
4	10YR4/3 にぶい黄褐	シルト	地山粒を少量含む（柱掘）

SB97 掘立柱建物跡 P2 B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱抜）
2	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを少量含む（柱掘）
3	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

SB97 掘立柱建物跡 P7 G-G'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を少量含む（柱抜）
2	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を含む（柱掘）
3	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SB97 掘立柱建物跡 P3 C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒を多く含む（柱抜）
2	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒を含む（柱抜）
3	10YR3/4 暗褐	シルト	地山粒を多く含む（柱掘）
4	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒を多く含む（柱掘）

SB97 掘立柱建物跡 P8 H-H'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱抜）
2	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱抜）
3	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SB97 掘立柱建物跡 P4 D-D'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を含む（柱痕）
2	10YR3/2 暗褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SB97 掘立柱建物跡 P9 I-I'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 暗褐	シルト	地山粒を含む（柱抜）

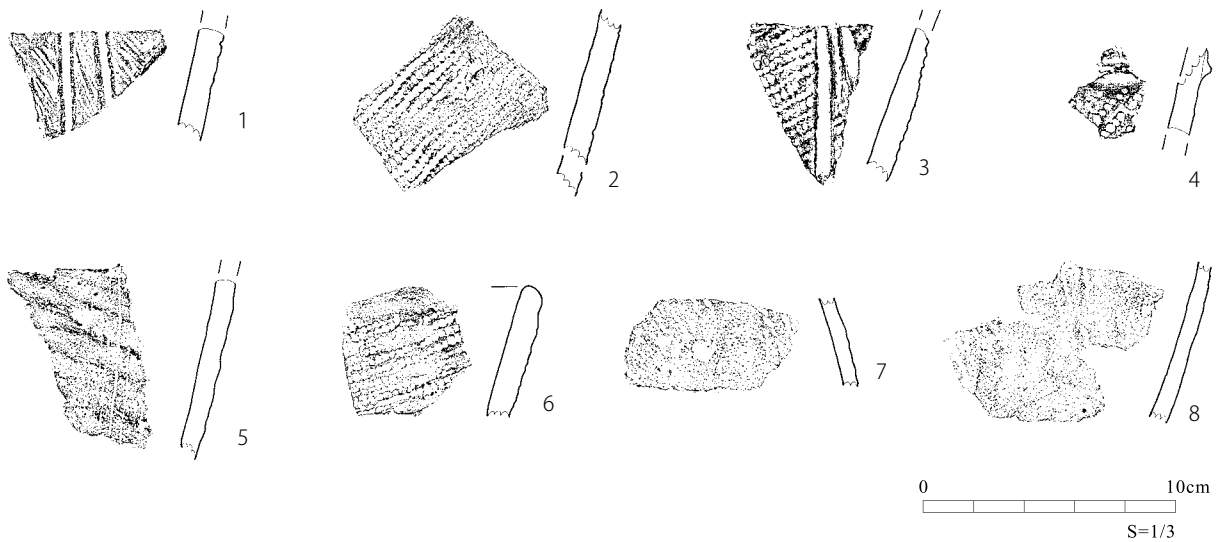
SB97 掘立柱建物跡 P5 E-E'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを少量含む（柱抜）
2	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを多量に含む（柱抜）
3	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SB97 掘立柱建物跡 P10 J-J'

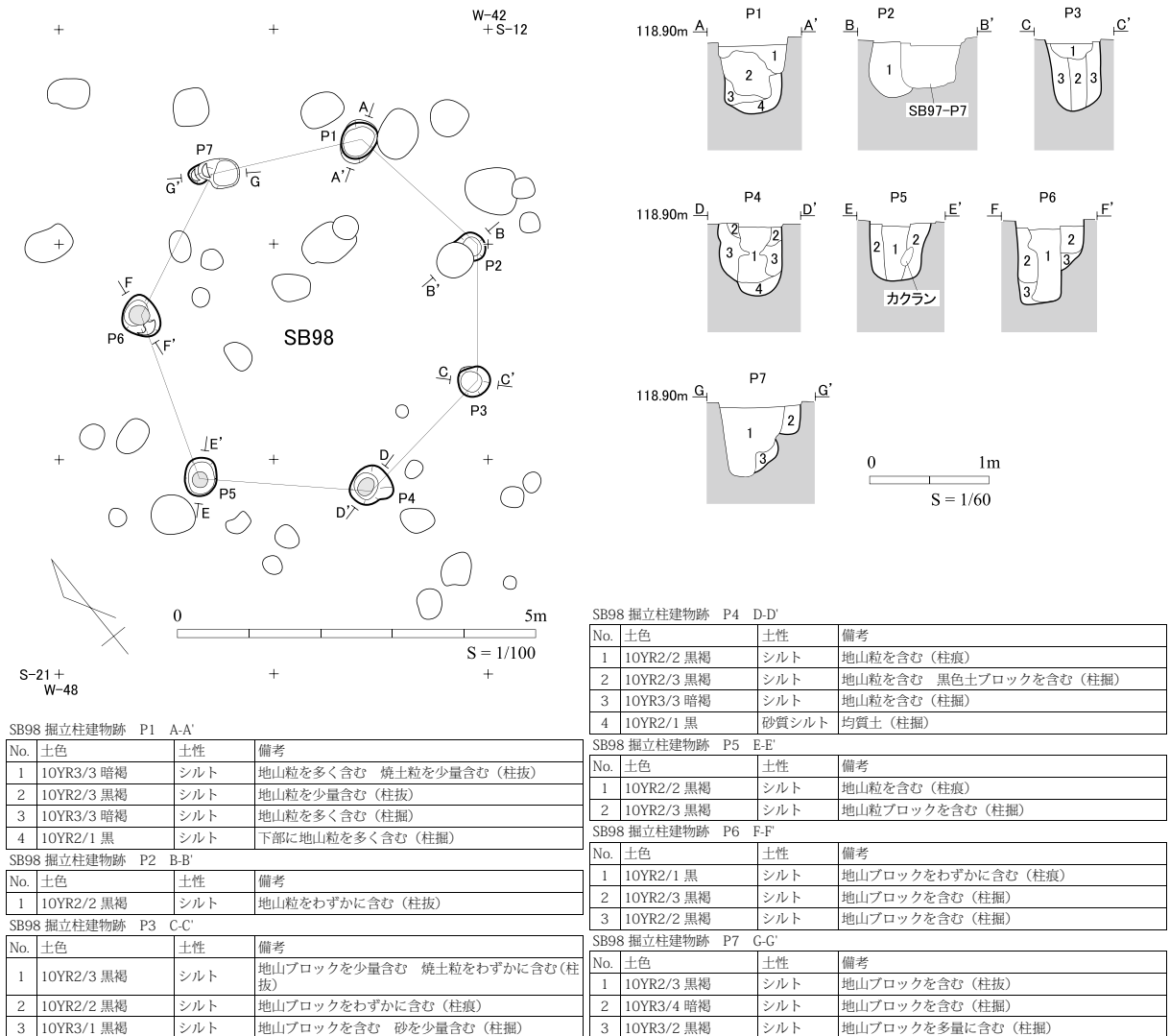
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを少量含む（柱抜）
2	10YR2/3 暗褐	シルト	地山ブロックを含む（柱抜）
3	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックをわずかに含む（柱掘）

第21図 SB97 掘立柱建物跡



No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SB97-P4・堆	深鉢	撚糸文 (R) → 多条沈線文	477	23-1	5	B・SB112-P4・堆	深鉢	櫛描文	480	23-5
2	B・SB97-P8・堆	深鉢	縄文 (LR)	528	23-2	6	B・SB135-P1・堆	深鉢	縄文 (RL)	536	23-6
3	B・SB98-P6・堆	深鉢	縄文 (RL) → 沈線文	478	23-3	7	B・SB135-P1・堆	深鉢	撚糸文 (LR)	537	23-7
4	B・SB98-P7・堆	深鉢	隆線文、縄文 (LR)	479	23-4	8	B・SB135-P1・堆	深鉢	撚糸文 (LR)	538	23-8

第22図 SB97・SB98・SB112・SB135 掘立柱建物跡出土遺物



SB98 掘立柱建物跡 P1 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	地山粒を多く含む 焼土粒を少量含む (柱抜)
2	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒を少量含む (柱抜)
3	10YR3/3 暗褐	シルト	地山粒を多く含む (柱掘)
4	10YR2/1 黒	シルト	下部に地山粒を多く含む (柱掘)

SB98 掘立柱建物跡 P2 B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒をわずかに含む (柱抜)

SB98 掘立柱建物跡 P3 C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを少量含む 焼土粒をわずかに含む (柱抜)
2	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックをわずかに含む (柱掘)
3	10YR3/1 黒褐	シルト	地山ブロックを含む 砂を少量含む (柱掘)

SB98 掘立柱建物跡 P4 D-D'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を含む (柱掘)
2	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒を含む 黒色土ブロックを含む (柱掘)
3	10YR3/3 暗褐	シルト	地山粒を含む (柱掘)
4	10YR2/1 黒	砂質シルト	均質土 (柱掘)

SB98 掘立柱建物跡 P5 E-E'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を含む (柱掘)
2	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒ブロックを含む (柱掘)

SB98 掘立柱建物跡 P6 F-F'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山ブロックをわずかに含む (柱掘)
2	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを含む (柱掘)
3	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む (柱掘)

SB98 掘立柱建物跡 P7 G-G'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを含む (柱抜)
2	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ブロックを含む (柱掘)
3	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを多量に含む (柱掘)

第23図 SB98 掘立柱建物跡

【SB103 掘立柱建物跡】(第25図、写真図版7-2)

〔位置・確認面〕B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕SB105 - SB103 → SB104

〔規模・形状〕東西1間(総長1.82m)、南北1間(総長3.00m)の側柱建物である。

〔柱穴〕3か所確認した。掘方の平面形は長軸38~42cm、短軸30~42cmの略円形または楕円形を呈し、深さ24~33cmである。1か所で柱材の抜き取り痕跡を、1か所で平面形が直径20cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕南側柱列:(182)cm、東側柱列:(300)cm

〔方向〕東側柱列:N-15.6°-W

〔出土遺物〕なし

【SB104 掘立柱建物跡】(第25図、写真図版7-3・4)

〔位置・確認面〕B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕SB103 → SB104 - SB105

〔規模・形状〕東西2間(総長2.84m)、南北1間(総長1.88m)の東西棟側柱建物である。

〔柱穴〕6か所確認した。掘方の平面形は長軸42~54cm、短軸32~46cmの楕円形または不整楕円形を呈し、深さ14~34cmである。3か所で柱材の抜き取り痕跡を確認した。柱痕跡はいずれも確認されなかった。

〔柱間寸法〕南側柱列:西から(140)-(144)cm、東側柱列:(188)cm

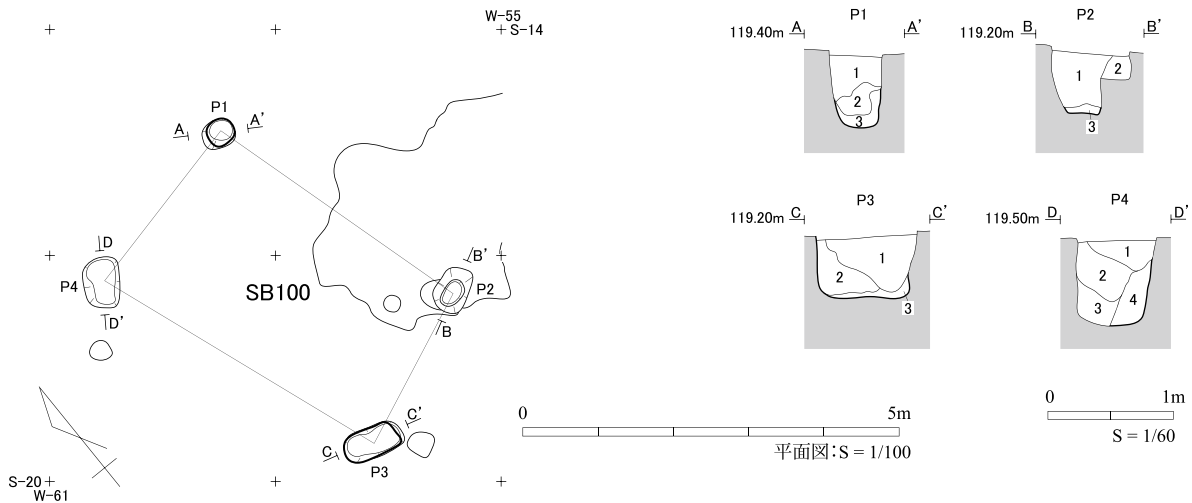
〔方向〕南側柱列:E-28.0°-N

〔出土遺物〕なし

【SB105 掘立柱建物跡】(第26図、写真図版7-5・6)

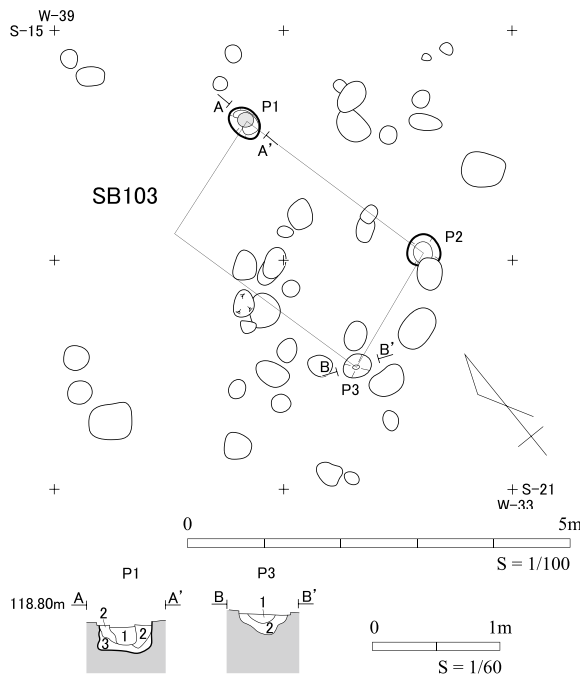
〔位置・確認面〕B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕SB105 - SB103・SB104



SB100 掘立柱建物跡 P1 A-A'				SB100 掘立柱建物跡 P3 C-C'			
No.	土色	土性	備考	No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒・焼土粒を含む(柱抜)	1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを少量含む(柱抜)
2	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒を多く含む(柱抜)	2	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を多く含む(柱抜)
3	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む(柱掘)	3	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックをわずかに含む(柱掘)
				4	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを含む(柱掘)
SB100 掘立柱建物跡 P2 B-B'				SB100 掘立柱建物跡 P4 D-D'			
No.	土色	土性	備考	No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを含む(柱抜)	1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を多く含む(柱抜)
2	10YR3/2 黒褐	粘質シルト	地山粒をわずかに含む(柱抜)	2	10YR3/1 黒褐	粘質シルト	地山粒を少量含む(柱抜)
3	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	地山ブロックを多量に含む(柱掘)	3	10YR3/2 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを少量含む(柱抜)
				4	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを少量含む(柱掘)

第24図 SB100 掘立柱建物跡



SB103 掘立柱建物跡 P1 A-A'

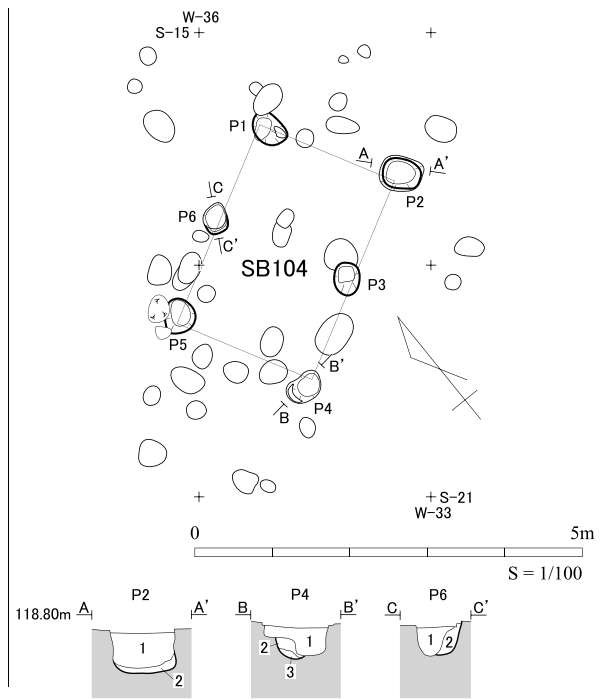
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを少量含む (柱痕)
2	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	地山粒を多く含む (柱掘)
3	10YR3/2 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを多量に含む (柱掘)

SB103 掘立柱建物跡 P3 B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを少量含む (柱抜)
2	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ブロックを含む (柱抜)

SB104 掘立柱建物跡 P2 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ブロックを含む (柱抜)
2	10YR4/6 褐	シルト	地山ブロックを多量に含む (柱掘)



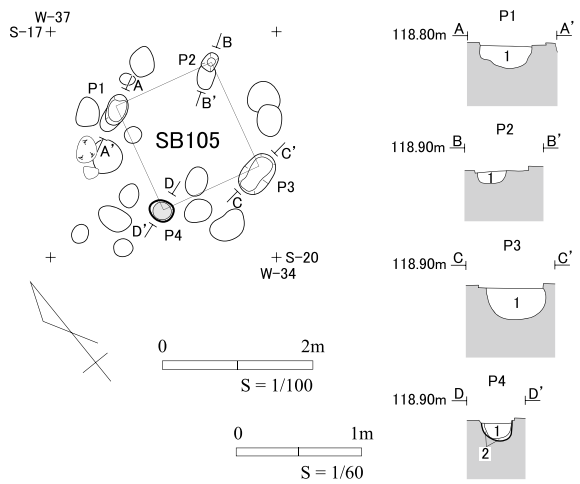
SB104 掘立柱建物跡 P4 B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを含む 炭化物を少量含む (柱抜)
2	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを多量に含む (柱掘)
3	10YR3/3 黒褐	シルト	地山ブロックを含む (柱掘)

SB104 掘立柱建物跡 P6 C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	地山粒を多く含む (柱抜)
2	10YR3/4 暗褐	粘質シルト	地山粒を多く含む (柱掘)

第25図 SB103・SB104 掘立柱建物跡



SB105 掘立柱建物跡 P1 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	地山粒を多く含む (柱抜)

SB105 掘立柱建物跡 P2 B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	地山粒を少量含む 下部に地山ブロックを多く含む (柱抜)

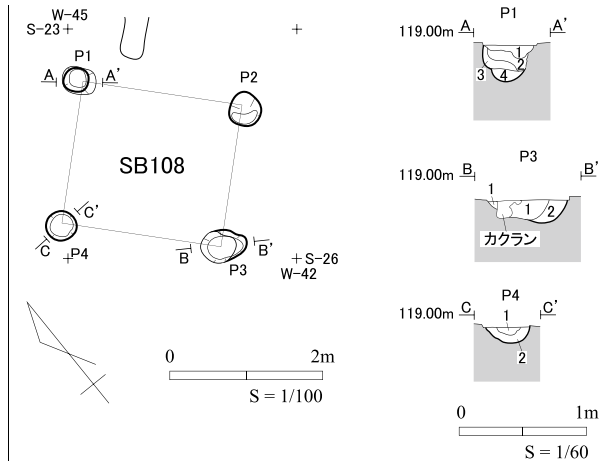
SB105 掘立柱建物跡 P3 C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを含む (柱抜)

SB105 掘立柱建物跡 P4 D-D'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを少量含む (柱痕)
2	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを多量に含む (柱掘)

第26図 SB105 掘立柱建物跡



SB108 掘立柱建物跡 P1 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む (柱抜)
2	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	地山粒をわずかに含む (柱抜)
3	10YR2/1 黒	粘質シルト	地山ブロックを少量含む (柱掘)
4	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを多く含む (柱掘)

SB108 掘立柱建物跡 P3 B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	地山粒を多量に含む 地山ブロックを少量含む (柱抜)
2	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを多量に含む (柱掘)

SB108 掘立柱建物跡 P4 C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒をわずかに含む (柱抜)
2	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを多量に含む (柱掘)

第27図 SB108 掘立柱建物跡

〔規模・形状〕東西1間（総長1.40m）、南北1間（総長1.54m）の側柱建物である。

〔柱穴〕4か所確認した。掘方の平面形は長軸24～60cm、短軸18～38cmの楕円形を呈し、深さ13～28cmである。3か所で柱材の抜き取り痕跡を、1か所で平面形が直径24cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕南側柱列：(140)cm、東側柱列：(154)cm

〔方向〕東側柱列：N - 13.5° - E

〔出土遺物〕なし

【SB108 掘立柱建物跡】（第27図、写真図版7-7・8）

〔位置・確認面〕B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西1間（総長1.92m）、南北1間（総長2.20m）の側柱建物である。

〔柱穴〕4か所確認した。掘方の平面形は長軸40～60cm、短軸34～44cmの円形または不整楕円形を呈し、深さ14～34cmである。3か所で柱材の抜き取り痕跡を確認した。いずれも柱痕跡は確認されなかった。

〔柱間寸法〕南側柱列：(192)cm、東側柱列：(220)cm

〔方向〕東側柱列：N - 43.0° - E

〔出土遺物〕P3堆積土より縄文土器深鉢の破片が出土した。

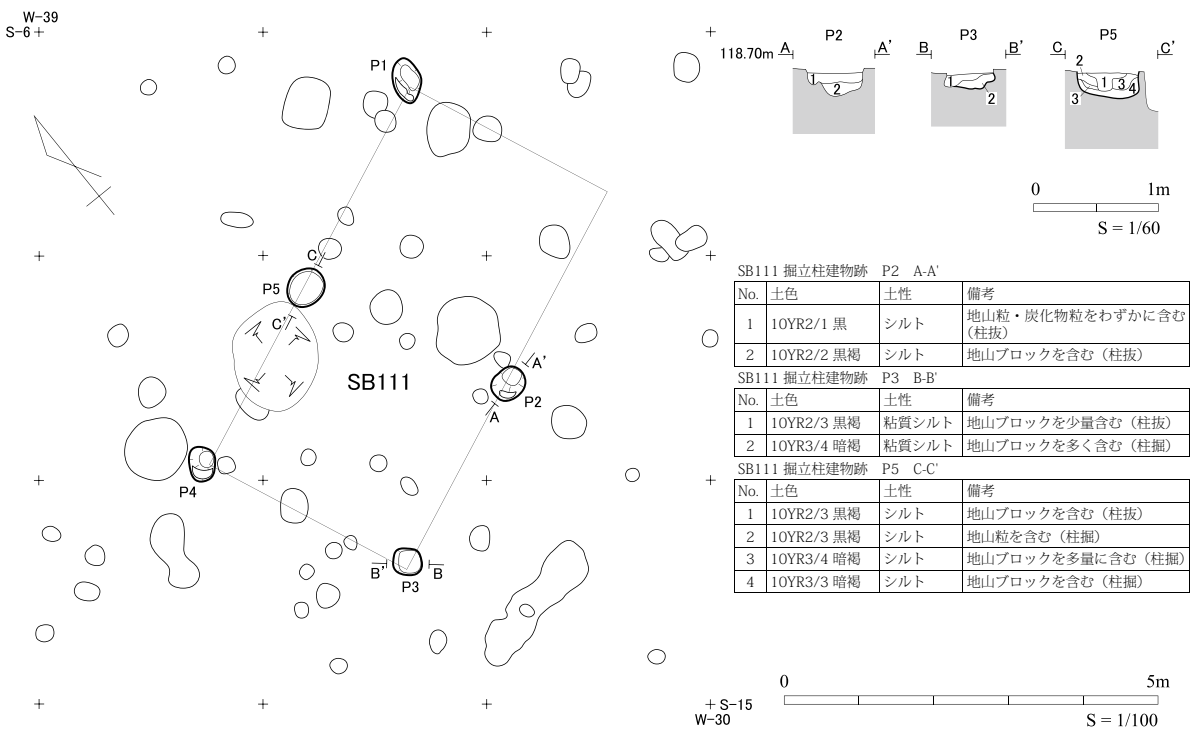
【SB111 掘立柱建物跡】（第28図、写真図版8-1）

〔位置・確認面〕B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕SB111 - SK63・SA117・SB112・SB120・SB134

〔規模・形状〕東西2間（総長5.74m）、南北1間（総長3.04m）の東西棟側柱建物である。

〔柱穴〕5か所確認した。掘方の平面形は長軸38～62cm、短軸34～46cmの隅丸方形または楕円形を呈し、深さ19～40cmである。3か所で柱材の抜き取り痕跡を確認した。いずれも柱痕跡は確認されなかった。



第28図 SB111 掘立柱建物跡

〔柱間寸法〕北側柱列：西から (266)―(308)cm、西側柱列：(304)cm

〔方向〕北側柱列：E - 22.0° - N

〔出土遺物〕P5 堆積土より二次加工ある剥片（第 150 図 3）が、P3 堆積土より縄文土器深鉢の破片が出土した。

【SB112 掘立柱建物跡】（第 29 図、22 図 5、写真図版 8 - 2）

〔位置・確認面〕B 区中央部の平坦面に位置する。V 層上面で確認した。

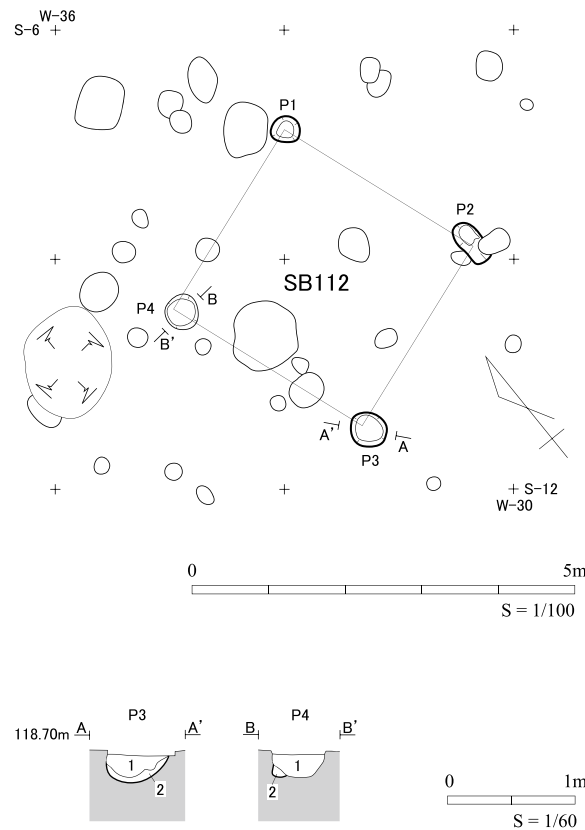
〔重複〕SB112 - SK63・SB111・SB134

〔規模・形状〕東西 1 間（総長 2.80m）、南北 1 間（総長 2.86m）の側柱建物である。

〔柱穴〕4 か所確認した。掘方の平面形は長軸 38 ~ 60cm、短軸 30 ~ 44cm の円形または楕円形を呈し、深さ 11 ~ 39cm である。2 か所で柱材の抜き取り痕跡を確認した。いずれも柱痕跡は確認されなかった。

〔柱間寸法〕南側柱列：(280)cm、東側柱列：(286)cm

〔方向〕北側柱列：N - 20.5° - W



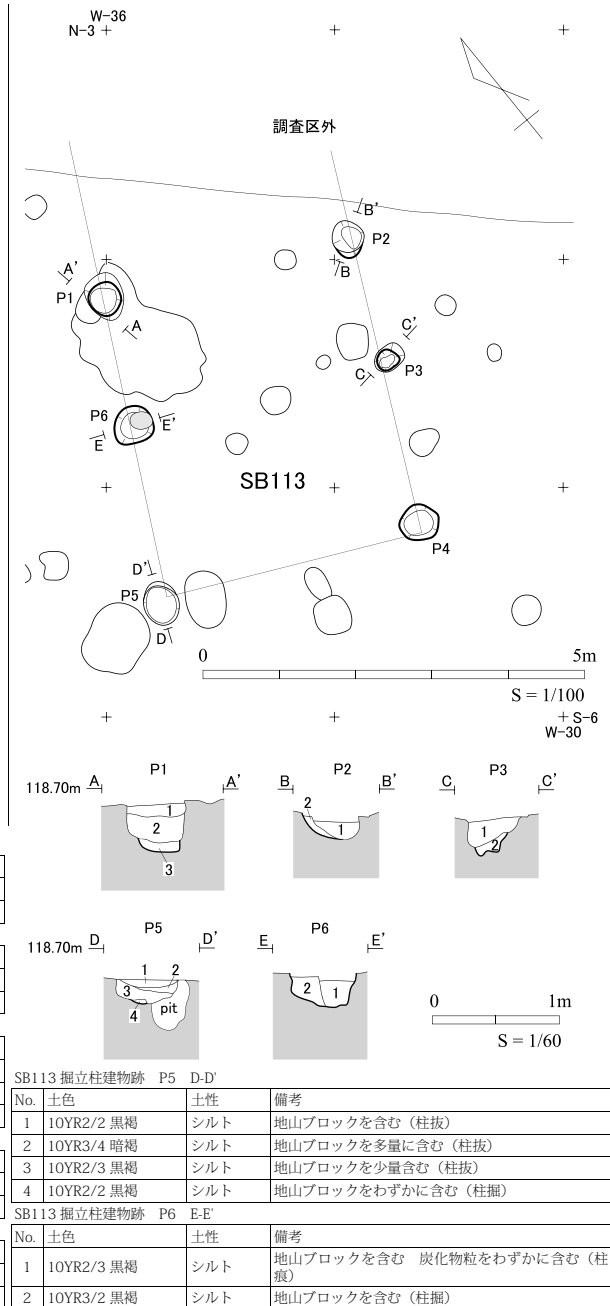
SB112 掘立柱建物跡 P3 A-A'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	地山粒を少量含む（柱抜）
2	10YR3/4 暗褐	粘質シルト	地山ブロックを多量に含む（柱掘）

SB112 掘立柱建物跡 P4 B-B'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	地山粒を少量含む（柱抜）
2	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

SB113 掘立柱建物跡 P1 A-A'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を含む（柱抜）
2	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱抜）
3	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロック・黒色土ブロック・砂を含む（柱掘）

SB113 掘立柱建物跡 P2 B-B'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを少量含む（柱抜）
2	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを多量に含む（柱掘）

SB113 掘立柱建物跡 P3 C-C'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	下部に地山粒を多く含む（柱抜）
2	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	地山ブロックを多量に含む（柱掘）



SB113 掘立柱建物跡 P5 D-D'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱抜）
2	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ブロックを多量に含む（柱抜）
3	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを少量含む（柱抜）
4	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックをわずかに含む（柱掘）

SB113 掘立柱建物跡 P6 E-E'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを含む 炭化物粒をわずかに含む（柱痕）
2	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

第 29 図 SB112・SB113 掘立柱建物跡

〔出土遺物〕 P4 堆積土より縄文土器深鉢（第 22 図 5）が、P2 堆積土より縄文土器深鉢の破片が出土した。

【SB113 掘立柱建物跡】（第 29 図、写真図版 8 - 3・4）

〔位置・確認面〕 B 区中央部の平坦面に位置する。V 層上面で確認した。

〔重複〕 SK70 → SB114 → SB115 → SB113

〔規模・形状〕 東西 1 間（総長 3.52m）、南北 2 間（総長 4.00m）以上の南北棟側柱建物である。

〔柱穴〕 6 か所確認した。掘方の平面形は長軸 42 ~ 52cm、短軸 30 ~ 50cm の円形または楕円形を呈し、深さ 22 ~ 55cm である。4 か所で柱材の抜き取り痕跡を、1 か所で平面形が直径 28cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕 南側柱列：(352)cm、東側柱列：北から (168) - (232)cm

〔方向〕 東側柱列：N - 25.6° - W

〔出土遺物〕 P2 堆積土より剥片が出土した。

【SB114 掘立柱建物跡】（第 30 図）

〔位置・確認面〕 B 区中央部の平坦面に位置する。V 層上面で確認した。

〔重複〕 SK70 → SB114 → SB115 → SB113

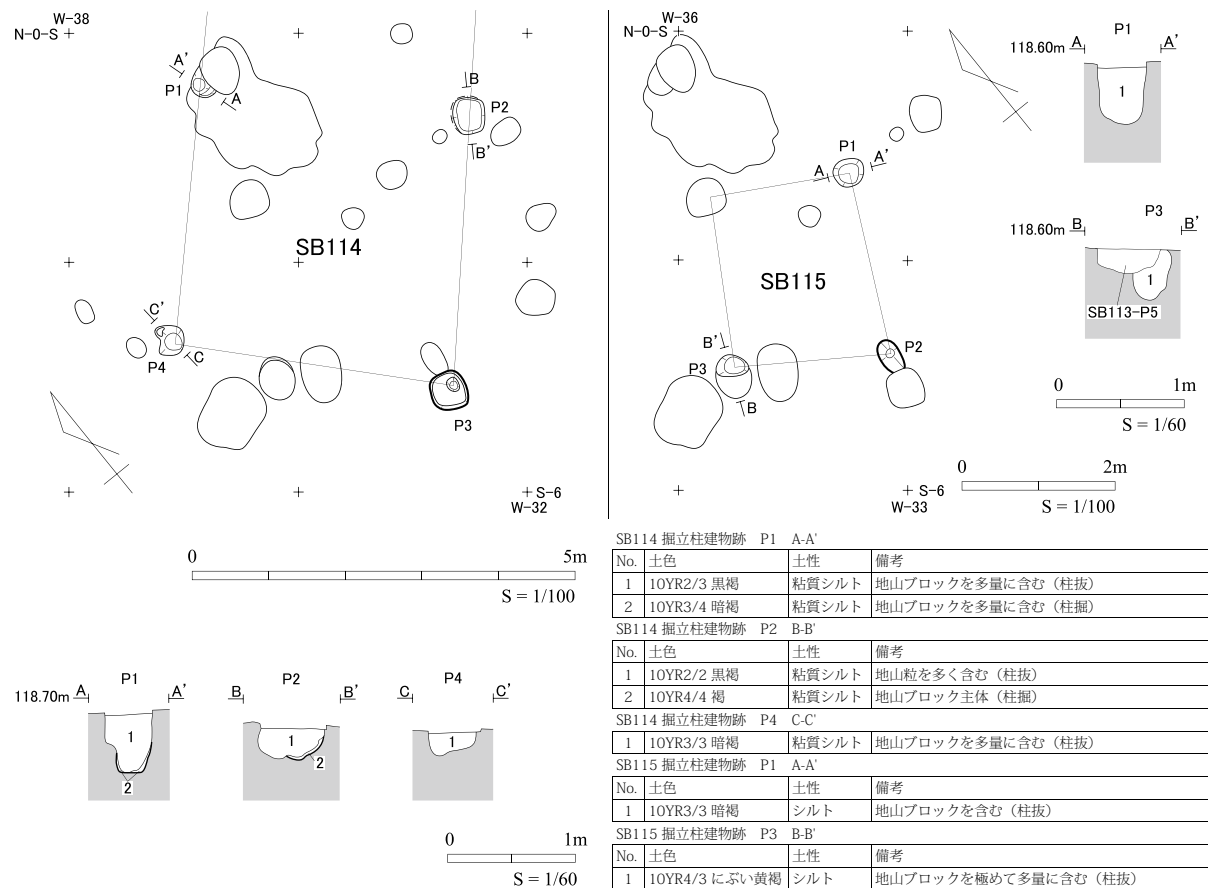
〔規模・形状〕 東西 1 間（総長 3.64m）、南北 1 間（総長 3.44m）の側柱建物である。

〔柱穴〕 4 か所確認した。掘方の平面形は長軸 38 ~ 62cm、短軸 30 ~ 48cm の円形または不整楕円形を呈し、深さ 26 ~ 43cm である。3 か所で柱材の抜き取り痕跡を確認した。いずれも柱痕跡は確認されなかった。

〔柱間寸法〕 北側柱列：(364)cm、東側柱列：(344)cm

〔方向〕 北側柱列：N - 48.5° - E

〔出土遺物〕 なし



第 30 図 SB114・SB115 掘立柱建物跡



【SB115 掘立柱建物跡】（第30図）

〔位置・確認面〕 B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕 SK70 → SB114 → SB115 → SB113

〔規模・形状〕 東西1間（総長2.00m）、南北1間（総長2.40m）の側柱建物である。

〔柱穴〕 3か所確認した。掘方の平面形は長軸40～44cm、短軸26～36cmの円形または楕円形を呈し、深さ48～57cmである。2か所で柱材の抜き取り痕跡を確認した。いずれも柱痕跡は確認されなかった。

〔柱間寸法〕 南側柱列：(200)cm、東側柱列：(240)cm

〔方向〕 東側柱列：N - 28.5° - E

〔出土遺物〕 なし

【SB116 掘立柱建物跡】（第31図、写真図版8-5）

〔位置・確認面〕 B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕 なし

〔規模・形状〕 東西1間（総長1.36m）、南北1間（総長1.28m）の側柱建物である。

〔柱穴〕 4か所確認した。掘方の平面形は長軸18～36cm、短軸16～34cmの円形または不整楕円形を呈し、深さ19～42cmである。2か所で柱材の抜き取り痕跡を確認した。いずれも柱痕跡は確認されなかった。

〔柱間寸法〕 南側柱列：(136)cm、東側柱列：(128)cm

〔方向〕 東側柱列：N - 34.0° - W

〔出土遺物〕 P1 堆積土より縄文土器深鉢の破片が出土した。

【SB118 掘立柱建物跡】（第31図）

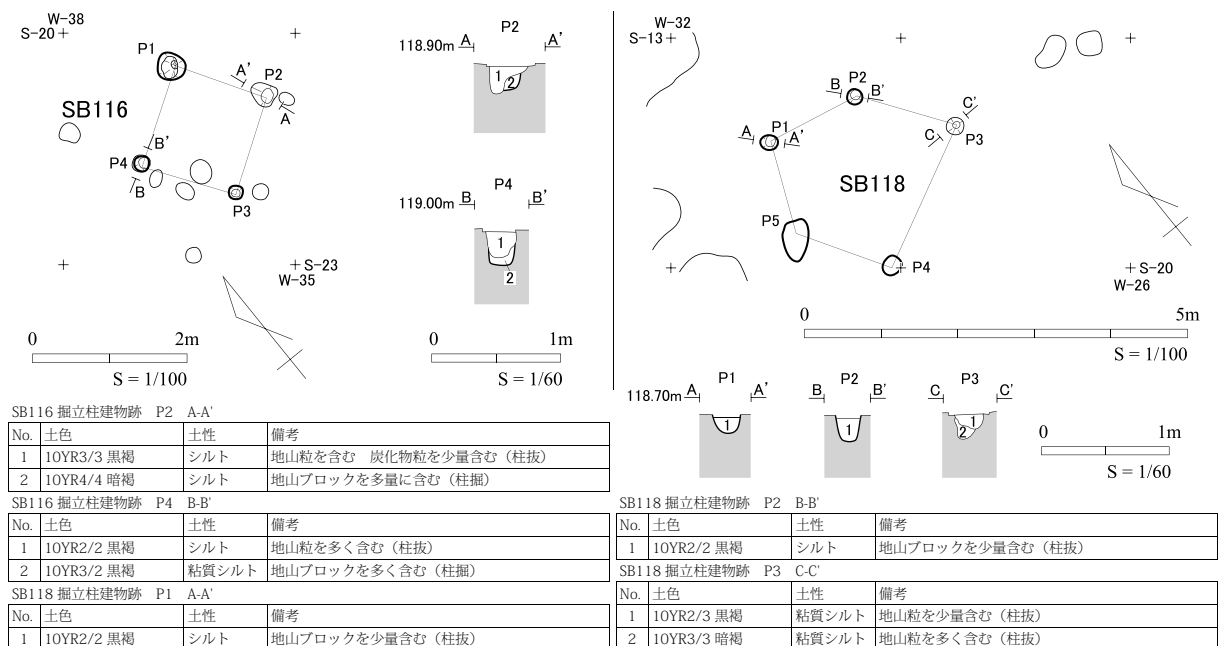
〔位置・確認面〕 B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕 なし

〔規模・形状〕 建物外周の5か所に柱を配置する多角形側柱建物で、東西2.01m、南北2.12mの規模をもつ。

〔柱穴〕 5か所確認した。掘方の平面形は長軸20～23cm、短軸20～24cmの円形または楕円形を呈し、深さ15～27cmである。1か所で柱材の抜き取り痕跡を確認した。いずれも柱痕跡は確認されなかった。

〔柱間寸法〕 P4から時計回り：(128) - (132) - (126) - (138) - (201)cm



第31図 SB116・SB118 掘立柱建物跡

〔出土遺物〕 なし

【SB120 掘立柱建物跡】（第32図、写真図版8-6）

〔位置・確認面〕 B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕 SB111・SB114 - SB120 → SB115

〔規模・形状〕 東西1間（総長2.84m）、南北1間（総長1.88m）の側柱建物である。

〔柱穴〕 3か所確認した。掘方の平面形は長軸70～74cm、短軸52～58cmの隅丸方形または楕円形を呈し、深さ22～34cmである。2か所で柱材の抜き取り痕跡を確認した。いずれも柱痕跡は確認されなかった。

〔柱間寸法〕 北側柱列：(284)cm、西側柱列：(188)cm

〔方向〕 北側柱列：N - 52.0° - E

〔出土遺物〕 なし

【SB129 掘立柱建物跡】（第33図）

〔位置・確認面〕 B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

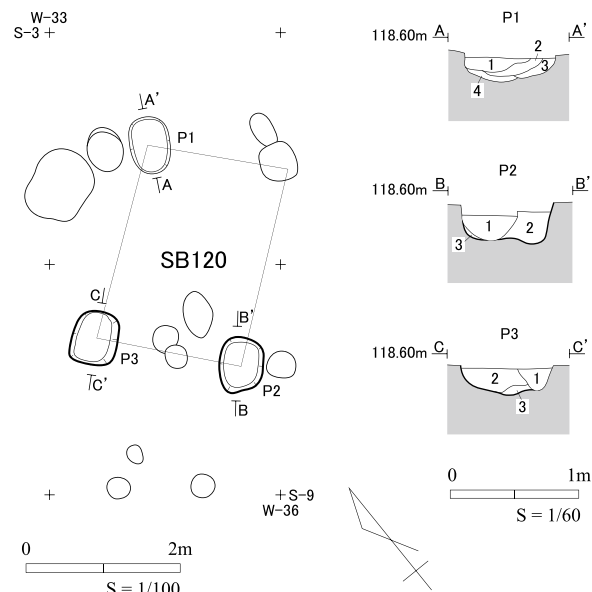
〔重複〕 なし

〔規模・形状〕 東西1間（総長2.61m）、南北1間（総長3.29m）の側柱建物である。

〔柱穴〕 4か所確認した。掘方の平面形は長軸33～40cm、短軸30～38cmの略円形を呈し、深さ9～45cmである。1か所で柱材の抜き取り痕跡を確認した。いずれも柱痕跡は確認されなかった。

〔柱間寸法〕 南側柱列：(261)cm、東側柱列：(329)cm

〔方向〕 西側柱列：N - 42.0° - E



SB120 掘立柱建物跡 P1 A-A'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱抜）
2	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ブロックを多量に含む（柱抜）
3	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱抜）
4	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱抜）

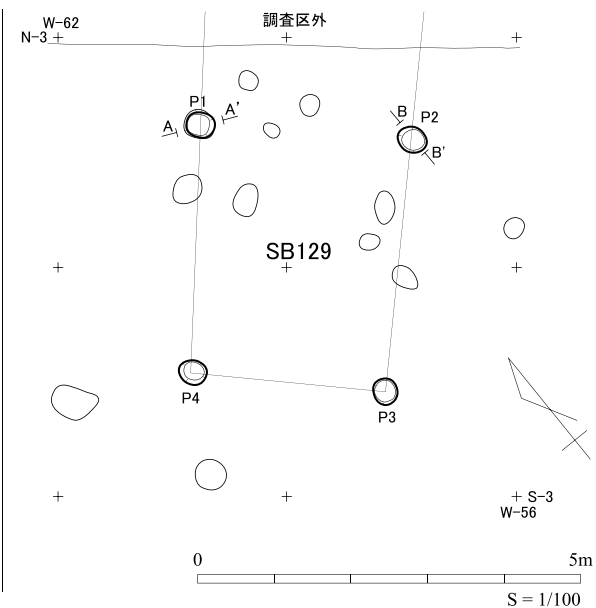
  

SB120 掘立柱建物跡 P2 B-B'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	地山粒を多く含む（柱抜）
2	10YR3/4 暗褐	粘質シルト	地山粒を多量に含む（柱掘）
3	10YR4/4 褐	粘質シルト	地山ブロックを多量に含む（柱掘）

SB120 掘立柱建物跡 P3 C-C'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱抜）
2	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）
3	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを多量に含む（柱掘）

第32図 SB120 掘立柱建物跡



SB129 掘立柱建物跡 P1 A-A'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR4/3 にぶい黄褐	シルト	地山ブロックを多量に含む（柱抜）
2	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SB129 掘立柱建物跡 P2 B-B'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを多量に含む（柱抜）

第33図 SB129 掘立柱建物跡

〔出土遺物〕なし

【SB130 掘立柱建物跡】（第34図）

〔位置・確認面〕B区西部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕SB133 - SB130 → SK91

〔規模・形状〕東西1間（総長1.61m）、南北1間（総長1.96m）の側柱建物である。

〔柱穴〕3か所確認した。掘方の平面形は長軸25～32cm、短軸24～28cmの略円形を呈し、深さ17～56cmである。2か所で平面形が直径12～25cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕南側柱列：(161)cm、東側柱列：(196)cm

〔方向〕東側柱列：E - 19.0° - N

〔出土遺物〕P2 堆積土より剥片が出土した。

【SB131 掘立柱建物跡】（第34図）

〔位置・確認面〕B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕SB131 → SA110

〔規模・形状〕東西1間（総長2.40m）、南北2間（総長3.35m）の南北棟側柱建物である。

〔柱穴〕5か所確認した。掘方の平面形は長軸25～44cm、短軸22～28cmの略円形または楕円形を呈し、深さ13～32cmである。1か所で柱材の抜き取り痕跡を確認した。いずれも柱痕跡は確認されなかった。

〔柱間寸法〕北側柱列：(240)cm、東側柱列：北から(172) - (163)cm

〔方向〕東側柱列：E - 38.2° - N

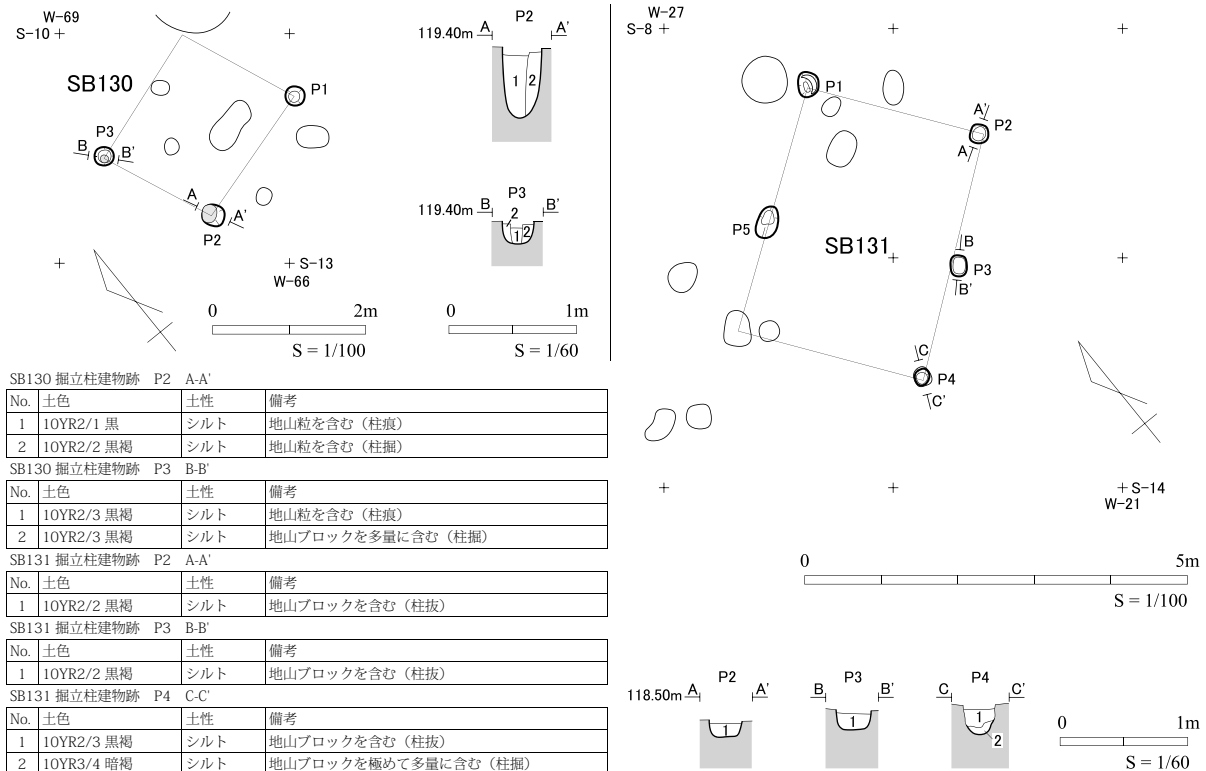
〔出土遺物〕なし

【SB132 掘立柱建物跡】（第35図、写真図版8-7）

〔位置・確認面〕C区南部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西1間（総長3.02m）、南北2間（総長2.44m）の側柱建物である。



第34図 SB130・SB131 掘立柱建物跡

〔柱穴〕6か所確認した。掘方の平面形は長軸22～35cm、短軸20～32cmの略円形または楕円形を呈し、深さ11～28cmである。いずれも柱痕跡は確認されなかった。

〔柱間寸法〕北側柱列：(302)cm、東側柱列：北から(108)―(136)cm

〔方向〕東側柱列：N - 9.5° - E

〔出土遺物〕なし

【SB133 掘立柱建物跡】(第35図)

〔位置・確認面〕B区西部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕SB133 - SB130 → SK91

〔規模・形状〕東西1間(総長3.13m)、南北1間(総長1.96m)の側柱建物である。

〔柱穴〕4か所確認した。掘方の平面形は長軸21～71cm、短軸30～40cmの略円形または楕円形を呈し、深さ10～49cmである。1か所で平面形が直径18cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕北側柱列：(313)cm、西側柱列：(196)cm

〔方向〕西側柱列：N - 19.4° - E

〔出土遺物〕なし

【SB134 掘立柱建物跡】(第36図)

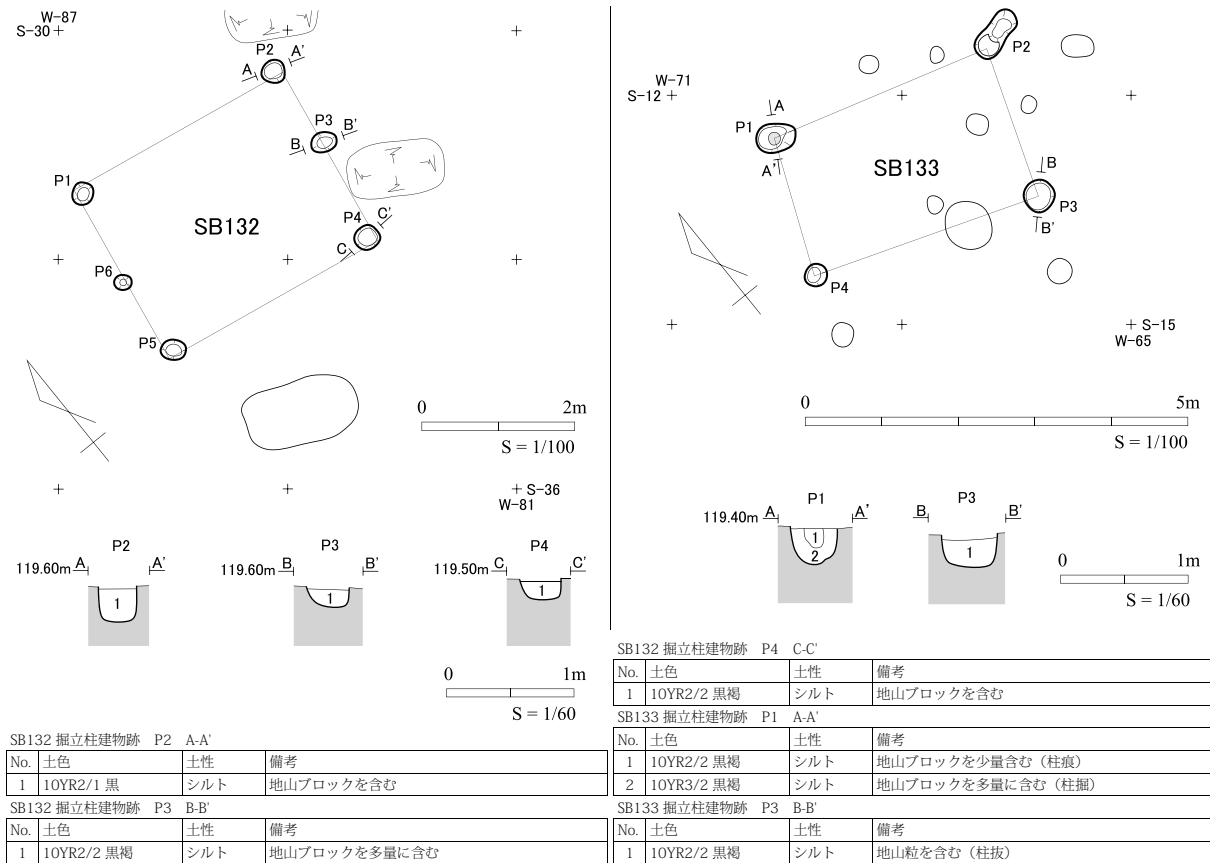
〔位置・確認面〕B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕SB134 - SA117・SB111・SB112

〔規模・形状〕東西1間(総長2.43m)、南北1間(総長3.10m)の側柱建物である。

〔柱穴〕4か所確認した。掘方の平面形は長軸21～33cm、短軸20～32cmの略円形または楕円形を呈し、深さ15～38cmである。2か所で柱材の抜き取り痕跡を確認した。いずれも柱痕跡は確認されなかった。

〔柱間寸法〕北側柱列：(243)cm、東側柱列：(310)cm



第35図 SB132・SB133 掘立柱建物跡

〔方向〕東側柱列：E - 24.4° - N

〔出土遺物〕なし

【SB135 掘立柱建物跡】（第36図、22図6～8、写真図版9-1）

〔位置・確認面〕B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西1間（総長2.42m）、南北1間（総長2.50m）の側柱建物である。

〔柱穴〕4か所確認した。掘方の平面形は長軸20～40cm、短軸15～40cmの略円形または不整形円形を呈し、深さ23～55cmである。2か所で柱材の抜き取り痕跡を確認し、2か所で平面形が直径18～25cmの円形または楕円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕北側柱列：242cm、東側柱列：(250)cm

〔方向〕東側柱列：N - 27.4° - W

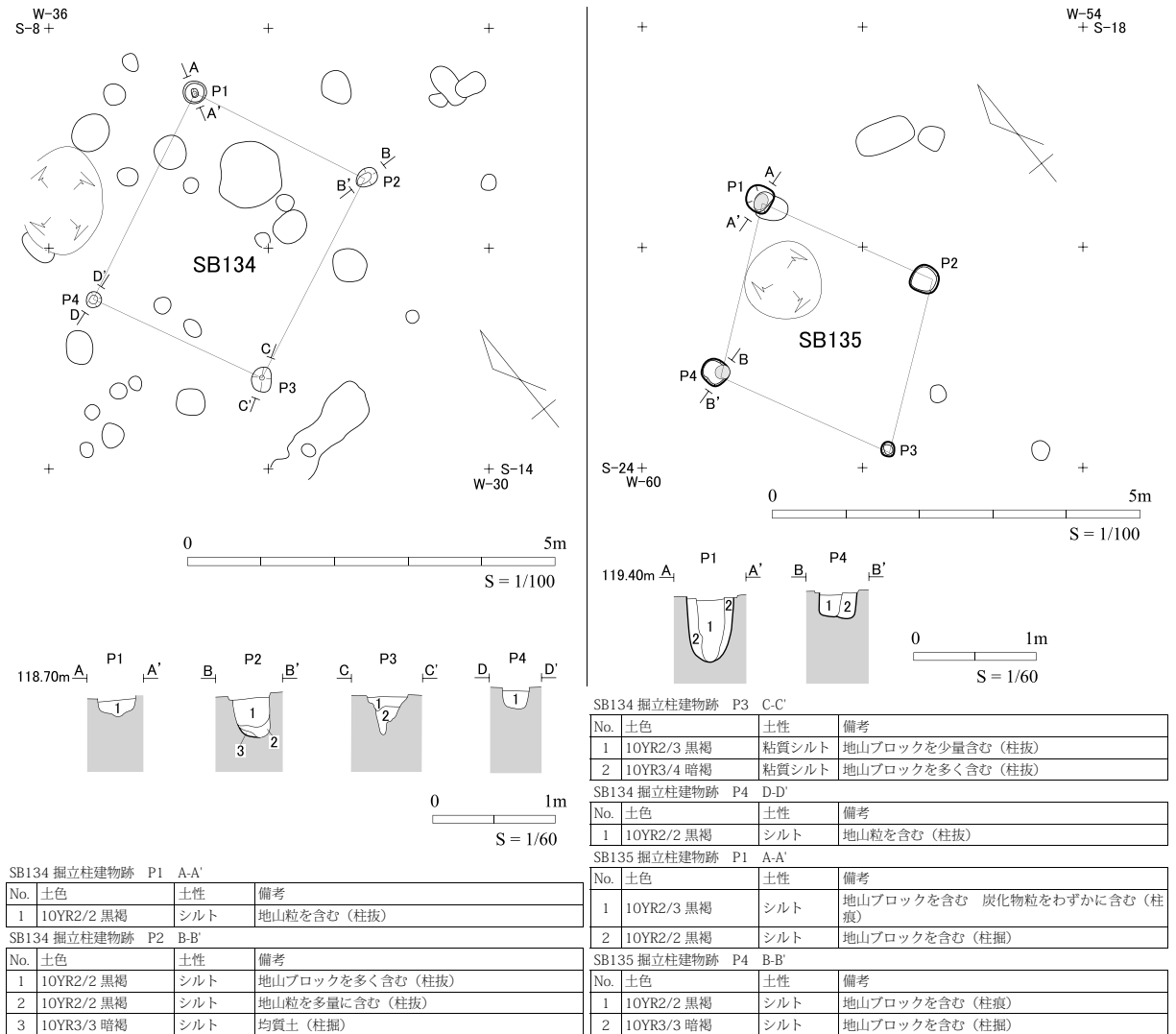
〔出土遺物〕P1堆積土より縄文土器深鉢（第22図6～8）、微細剥離痕を有する剥片（第156図4）、剥片が出土した。

### ③ 柱列跡

【SA106 柱列跡】（第38図）

〔位置・確認面〕B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕SA106 → SK9 → SD88



第36図 SB134・SB135 掘立柱建物跡

〔規模・形状〕南北6間（総長 11.06m）の柱列跡である。

〔柱穴〕7か所確認した。掘方の平面形は長軸 24～40cm、短軸 20～38cm の略円形を呈し、深さ 24～56cm である。2か所で柱材の抜き取り痕跡を確認した。いずれも柱痕跡は確認されなかった。

〔柱間寸法〕北から (136)―(196)―(200)―(188)―(196)―(190)cm

〔方向〕N - 22.0° - E

〔出土遺物〕なし

【SA107 柱列跡】（第 37 図、写真図版 9 - 2）

〔位置・確認面〕B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕北西―南東方向に延びる3間（総長 3.86m）の柱列跡である。

〔柱穴〕4か所確認した。掘方の平面形は長軸 22～32cm、短軸 21～30cm の円形を基調とし、深さ 11～28cm である。1か所で柱材の抜き取り痕跡を、1か所で平面形が直径 10cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕北西から (136)―(138)―(112)cm

〔方向〕N - 43.5° - W

〔出土遺物〕なし

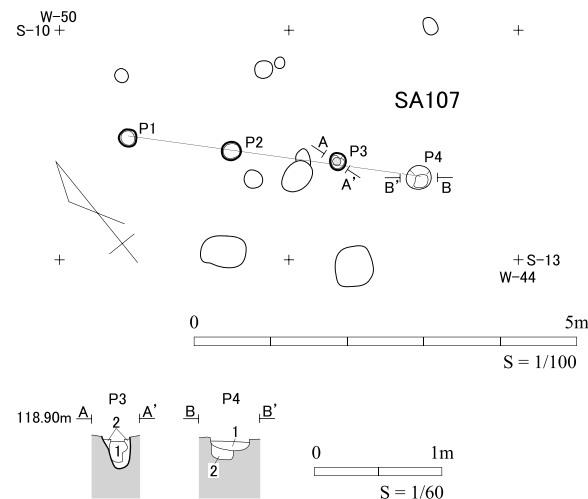
【SA109 柱列跡】（第 39 図、写真図版 9 - 3）

〔位置・確認面〕B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕北西―南東方向に延びる3間（総長 6.66m）の柱列跡である。

〔柱穴〕4か所確認した。掘方の平面形は長軸 26～45cm、短軸 20～32cm の円形または楕円形を呈し、深さ 19～35cm である。2か所で平面

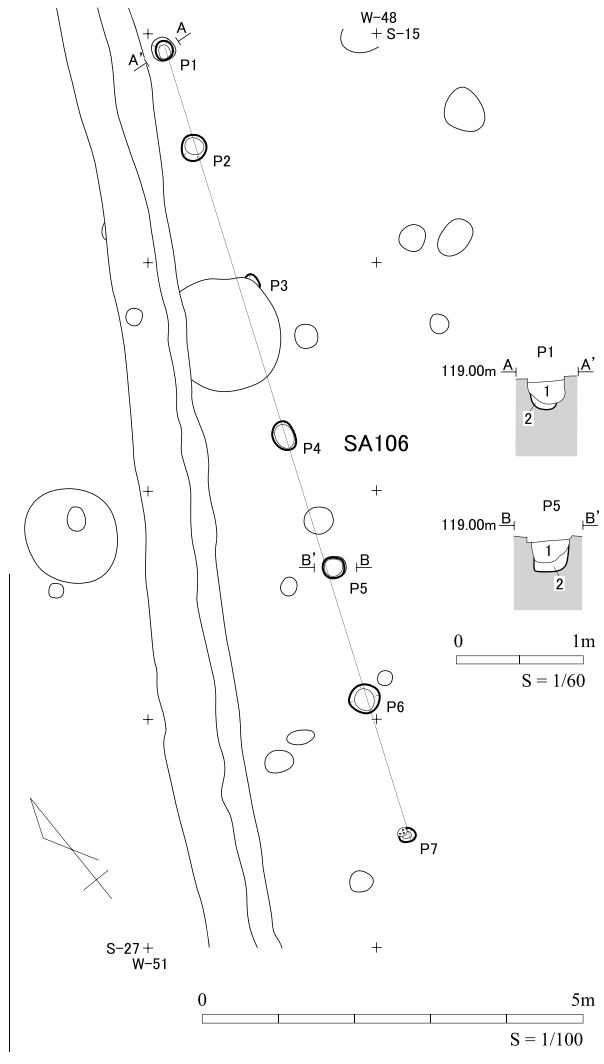


SA107 柱列跡 P3 A-A'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを少量含む（柱痕）
2	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ブロックを多量に含む（柱掘）

SA107 柱列跡 P4 B-B'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱抜）
2	10YR4/3 にぶい黄褐	シルト	地山ブロックを多量に含む（柱抜）

第 37 図 SA107 柱列跡



SA106 柱列跡 P1 A-A'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒褐	シルト	地山ブロックを含む 炭化物粒をわずかに含む（柱抜）
2	10YR4/4 褐	シルト	地山ブロックを多量に含む（柱掘）

SA106 柱列跡 P5 B-B'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを多く含む（柱抜）
2	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

第 38 図 SA106 柱列跡

形が直径 15 ~ 18cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕北西から (242) — 208 — (216)cm

〔方向〕N — 50.0° — W

〔出土遺物〕P3 確認面より縄文土器深鉢の破片が出土した。

【SA110 柱列跡】(第 39 図)

〔位置・確認面〕B 区中央部の平坦面に位置する。V 層上面で確認した。

〔重複〕なし

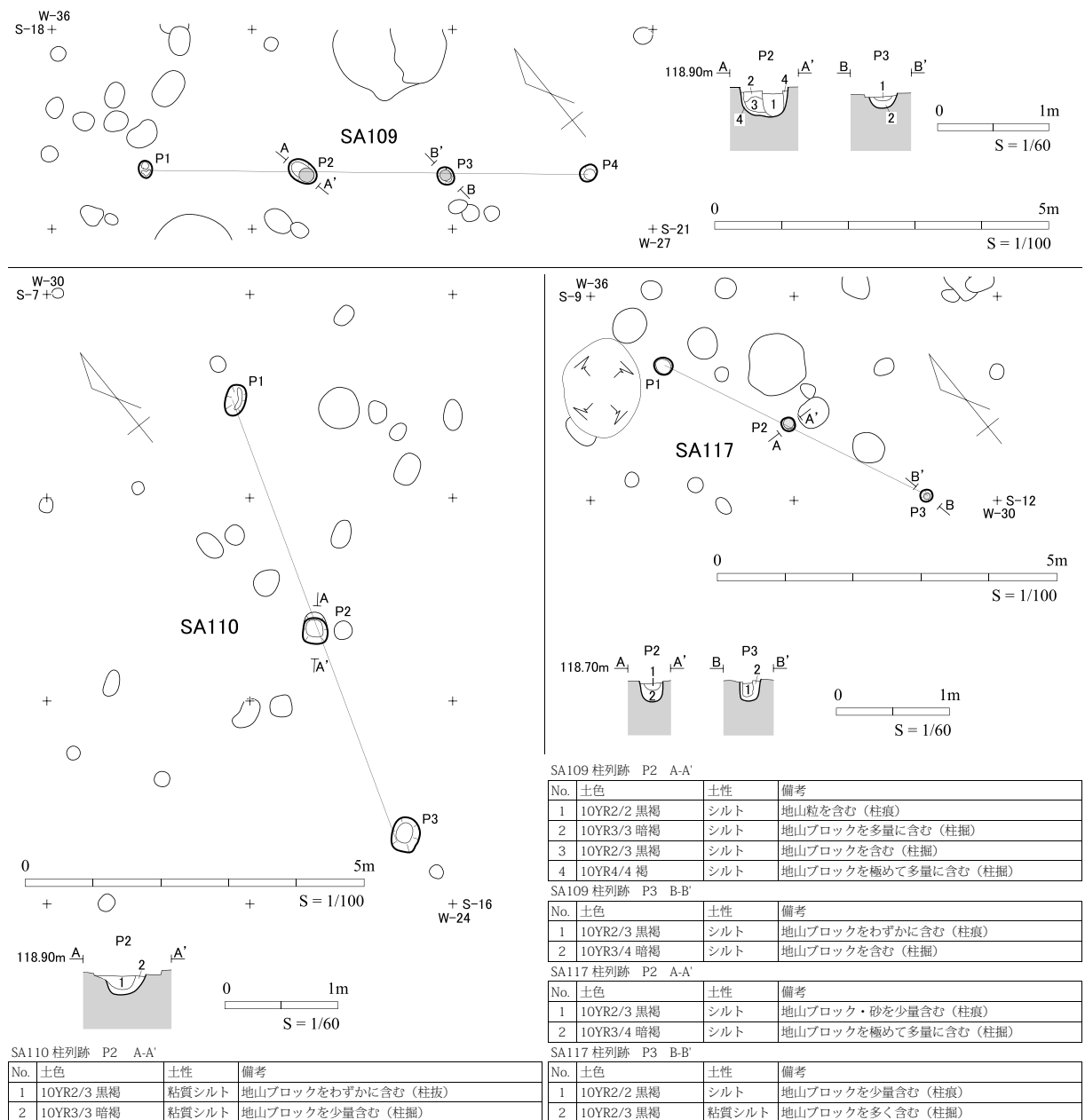
〔規模・形状〕南北 2 間(総長 6.94m)の柱列跡である。

〔柱穴〕3 か所確認した。掘方の平面形は長軸 46 ~ 50cm、短軸 26 ~ 42cm の楕円形または不整楕円形を呈し、深さ 19 ~ 22cm である。1 か所で柱材の抜き取り痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕北から (360) — (334)cm

〔方向〕N — 18.0° — E

〔出土遺物〕なし



第 39 図 SA109・SA110・SA117 柱列跡

【SA117 柱列跡】(第39図、写真図版9-4)

〔位置・確認面〕 B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕 SA117 - SB111・SB134

〔規模・形状〕 南北2間(総長4.30m)の柱列跡である。

〔柱穴〕 3か所確認した。掘方の平面形は長軸18~28cm、短軸16~26cmの略円形を呈し、深さ12~18cmである。2か所で平面形が直径8~18cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕 北から(202)―228cm

〔方向〕 N - 24.5° - W

〔出土遺物〕 なし

【SA119 柱列跡】(第41図)

〔位置・確認面〕 B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕 SA119 → SK52

〔規模・形状〕 北西-南東方向に延びる2間(総長4.86m)の柱列跡である。

〔柱穴〕 3か所確認した。掘方の平面形は長軸22~24cm、短軸20~22cmの略円形を呈し、深さ18~23cmである。1か所で平面形が直径8cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕 北西から(250)―(236)cm

〔方向〕 N - 35.0° - W

〔出土遺物〕 なし

【SA121 柱列跡】(第40図)

〔位置・確認面〕 B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕 なし

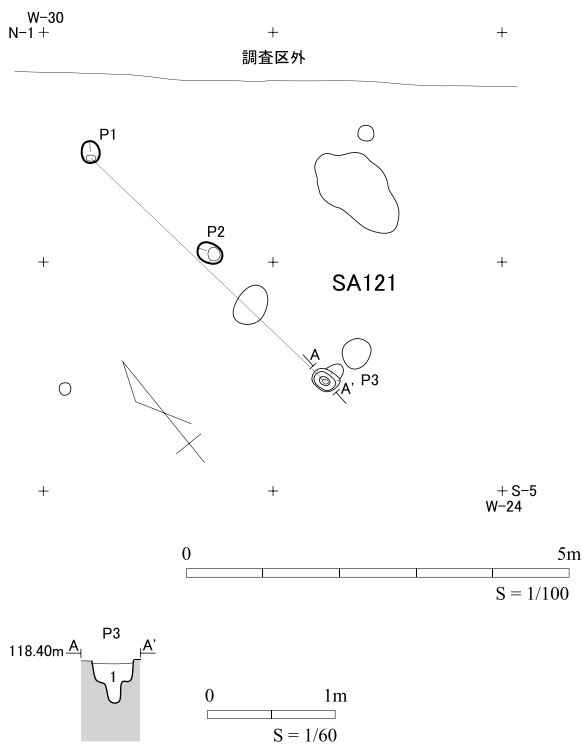
〔規模・形状〕 南北2間(総長4.32m)の柱列跡である。

〔柱穴〕 3か所確認した。掘方の平面形は長軸28~34cm、短軸23~28cmの楕円形または不整楕円形を呈し、深さ19~34cmである。いずれも柱痕跡は確認されなかった。

〔柱間寸法〕 北から(206)―(226)cm

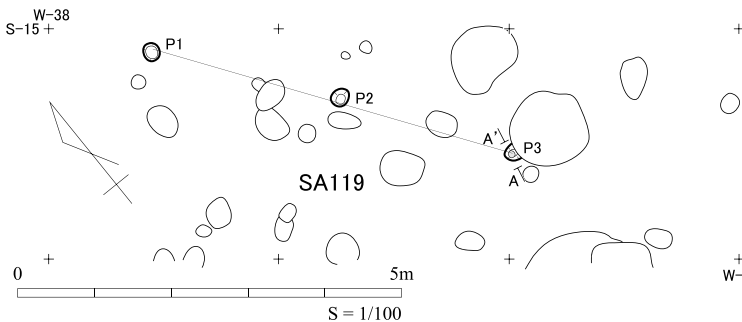
〔方向〕 N - 11.2° - W

〔出土遺物〕 P1 確認面より縄文土器深鉢の破片が出土した。



SA121 柱列跡 P3 A-A'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む(柱抜)

第40図 SA121 柱列跡



SA119 掘立柱建物跡 P3 A-A'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を含む(柱痕)
2	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを含む(柱掘)

第41図 SA119 柱列跡



④ 炉跡

【SL86 炉跡】(第 42・44・45 図、写真図版 9 - 5)  
 [位置・確認面] B区西部の平坦面に位置する。  
 V層上面で確認した。

[重複] なし

[規模・形状] 平面形が長軸 100cm、短軸 80cm  
 の楕円形を呈し、深さ 12cm の皿状の窪みの周囲  
 に 5 ~ 15cm 程度の石材を配置する石囲炉である。  
 石材は南側のみ残存するが、本来は全周するよう  
 に配置されていたと考えられる。石材で囲まれた  
 内側の長軸 50cm、短軸 30cm の範囲で底面の被  
 熱による赤色硬化を確認した。

[堆積土] 地山・焼土粒をわずかに含む黒褐色シ  
 ルトである。

[出土遺物] 石材据方埋土より縄文土器浅鉢(第  
 44 図 1)、深鉢(第 44 図 2 ~ 6)、剥片などが、  
 堆積土より縄文土器浅鉢、深鉢(第 44 図 7 ~  
 10・20)が、確認面より縄文土器浅鉢(第 44  
 図 11)、鉢(第 44 図 12)、深鉢(第 44 図 13 ~  
 19・21 ~ 27、第 45 図)、土器片加工円板(第  
 146 図 14・15)、剥片などが出土した。石組炉を  
 構築する石材として、磨石(第 161 図 5)、凹石  
 (第 162 図 1)、石皿(第 169 図 1、第 170 図 1)  
 が転用されていた。

⑤ フラスコ状土坑

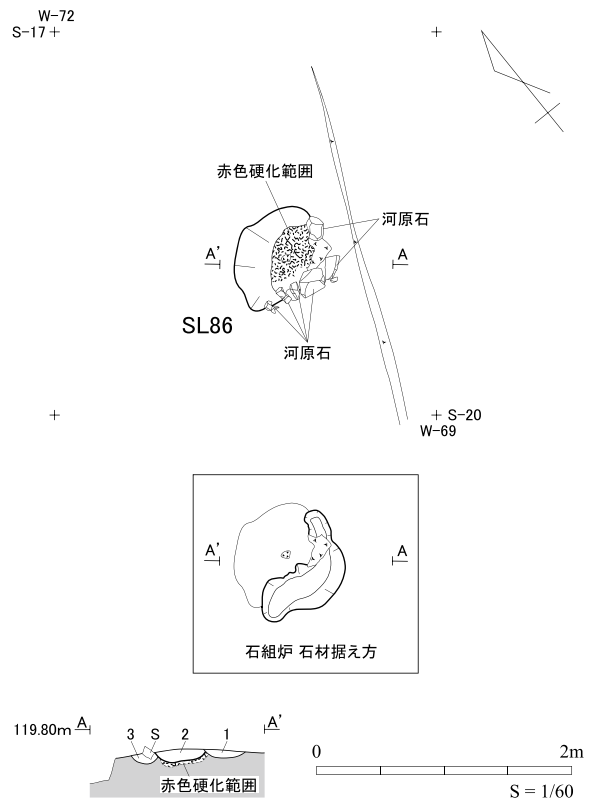
【SK7 フラスコ状土坑】(第 43・46 図、写真図版  
 9 - 6・7)

[位置・確認面] B区中央部の平坦面に位置する。  
 V層上面で確認した。

[重複] なし

[規模・形状] 平面形は長軸 150cm、短軸 140cm  
 の略円形を呈し、断面形は深さ 62cm の台形を呈  
 する。底面はほぼ平坦である。

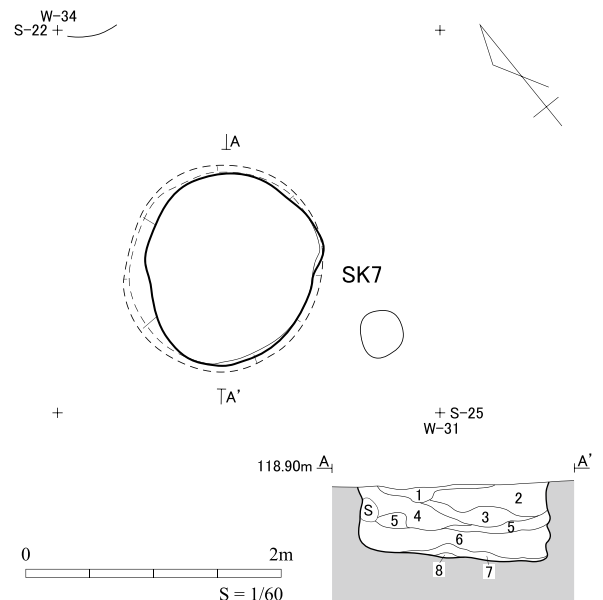
[堆積土] 8層に細分される。1層は地山粒と炭  
 化物粒を少量含む黒褐色シルト、2層は地山ブ  
 ロックを多量に含む暗褐色シルト、3層は地山  
 ブロック・炭化物粒を含む黒褐色シルト、4層は  
 地山ブロックを多量に含む黒褐色シルト、5層は  
 地山ブロックを少量含む  
 黒褐色シルト、6層は地山ブ  
 ロックをごく少量含む黒褐色シルト、7層は地山  
 ブロックをごく少量含む黒褐色シルト、8層は地



SL86 炉跡 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒をわずかに含む(炉石拔)
2	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒・焼土粒をわずかに含む(炉堆)
3	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を少量含む(炉石据方)

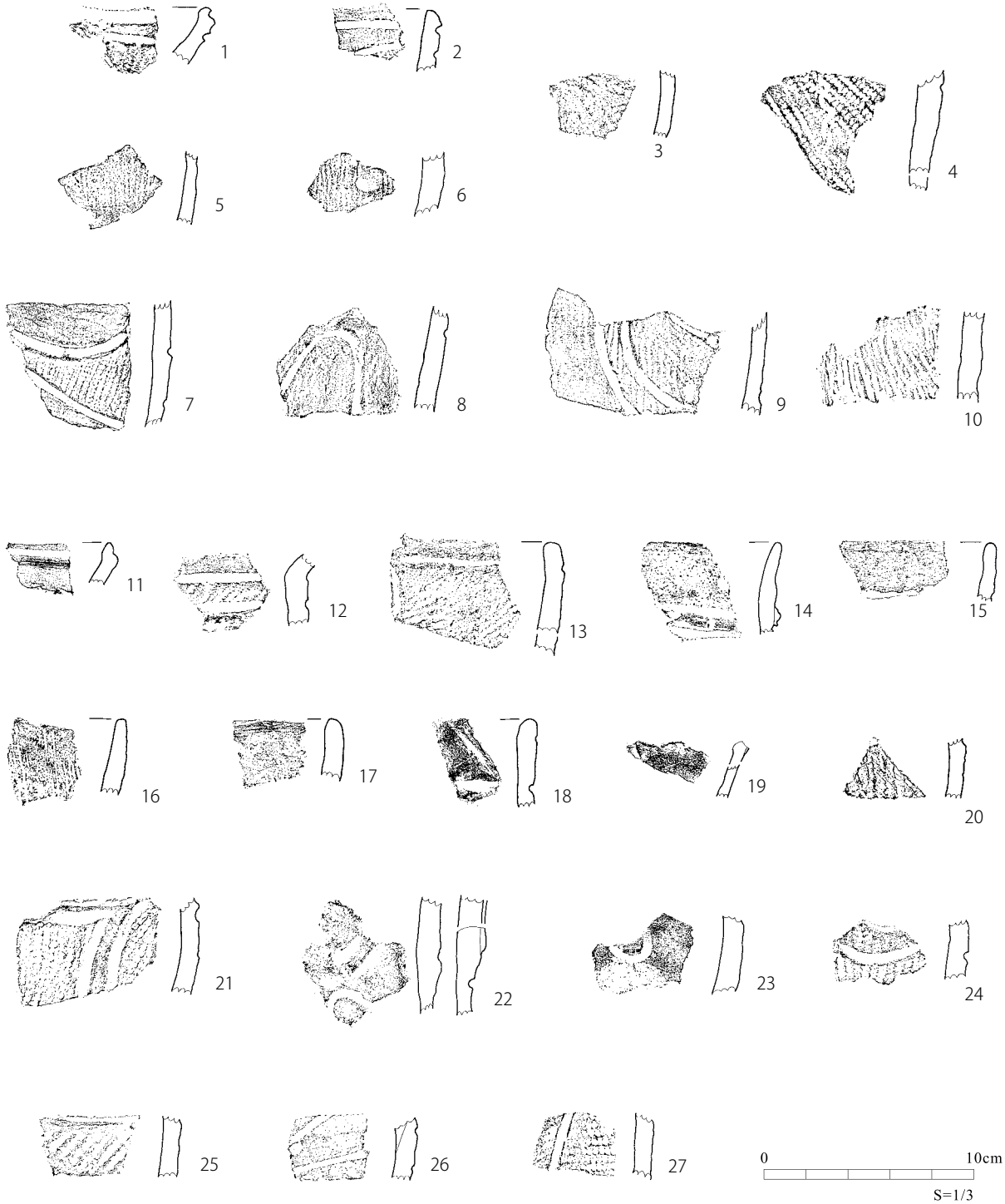
第 42 図 SL86 炉跡



SK7 フラスコ状土坑 A-A'

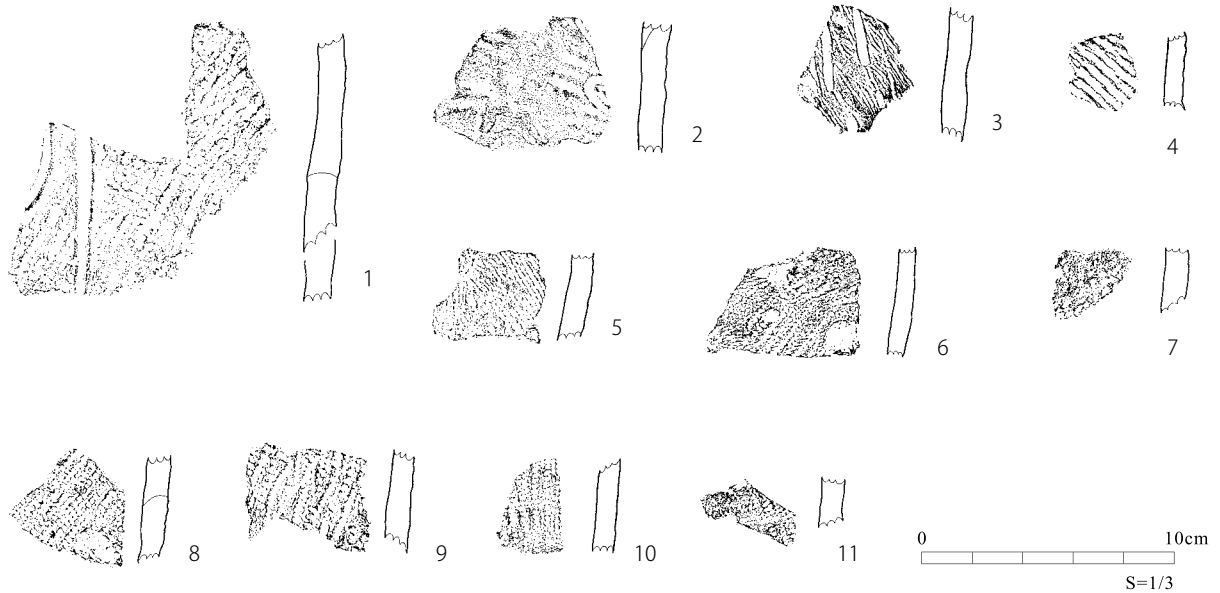
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒・炭化物粒を少量含む
2	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ブロックを多量に含む(人為)
3	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロック・炭化物片を含む(人為)
4	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ブロックを多量に含む 砂を少量含む 炭化物粒をわずかに含む(人為)
5	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを少量含む
6	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックをごくわずかに含む
7	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックをごくわずかに含む
8	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	地山ブロックを含む(壁筋)

第 43 図 SK7 土坑



No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SL86・石材据方	浅鉢	磨消縄文、沈線文	481	23-9	15	B・SL86・確	深鉢	沈線文	496	-
2	B・SL86・石材据方	深鉢	沈線文、円形刺突文、条線文	482	23-10	16	B・SL86・確	深鉢	櫛描文	497	-
3	B・SL86・石材据方	深鉢	縄文(R)、列点文	484	-	17	B・SL86・確	深鉢	無文(ミガキ)、摩滅	498	-
4	B・SL86・石材据方	深鉢	縄文(LR+結節文)	483	23-11	18	B・SL86・確	深鉢	沈線文	499	-
5	B・SL86・石材据方	深鉢	条線文	485	-	19	B・SL86・確	深鉢	隆線文	500	-
6	B・SL86・石材据方	深鉢	擦糸文(R)	486	-	20	B・SL86・堆	深鉢	縄文(R)、沈線文	490	-
7	B・SL86・堆	深鉢	磨消縄文(RLR-0段多条)、沈線文	487	23-12	21	B・SL86・確	深鉢	縄文(RL)→沈線文、外面：炭化物付着	503	23-20
8	B・SL86・堆	深鉢	磨消縄文、沈線文	488	23-13	22	B・SL86・確	深鉢	隆線文、沈線文、一部剥離	504	-
9	B・SL86・堆	深鉢	磨消縄文(L)、沈線文	489	23-14	23	B・SL86・確	深鉢	沈線文、一部剥離	505	-
10	B・SL86・堆	深鉢	擦糸文(R)	491	23-15	24	B・SL86・確	深鉢	縄文(RL)→沈線文	506	-
11	B・SL86・確	浅鉢	無文(ミガキ)、隆線文	493	23-16	25	B・SL86・確	深鉢	縄文(LR)→沈線文	507	-
12	B・SL86・確	鉢	縄文(LR)→沈線文	492	23-17	26	B・SL86・確	深鉢	磨消縄文、沈線文	508	-
13	B・SL86・確	深鉢	沈線文、縄文(L)	494	23-18	27	B・SL86・確	深鉢	縄文(RL)→沈線文	510	-
14	B・SL86・確	深鉢	隆線文、沈線文	495	23-19						

第44図 SL86 炉跡出土遺物(1)



No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SL86・確	深鉢	縄文 (RL) → 沈線文	509	23-21	7	B・SL86・確	深鉢	縄文 (RL)	520	-
2	B・SL86・確	深鉢	縄文 (RL) → 沈線文	511	-	8	B・SL86・確	深鉢	縄文 (LR)	516	-
3	B・SL86・確	深鉢	撚糸文 (R) → 沈線文	512	-	9	B・SL86・確	深鉢	縄文 (LR)	517	-
4	B・SL86・確	深鉢	縄文 (R)	514	-	10	B・SL86・確	深鉢	縄文 (LR)	518	-
5	B・SL86・確	深鉢	縄文 (R)	513	-	11	B・SL86・確	深鉢	縄文 (RL)	519	-
6	B・SL86・確	深鉢	縄文 (LR)	515	-						

第45図 SL86 炉跡出土遺物 (2)

山ブロックを含む暗褐色粘質シルトである。1・5～7層は自然堆積土、2～4層は人為的埋土、8層は自然崩落土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土（主に5層上面）より縄文土器深鉢（第46図）、スクレイパー（第148図5）、剥片、石核（第157図4）などが出土した。

【SK9 フラスコ状土坑】（第47・49図、写真図版9－8、10－1）

〔位置・確認面〕B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕SK9 → SA106・SD88

〔規模・形状〕平面形は直径150cmの円形を呈し、断面形は深さ36cmの逆台形を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕3層に細分される。1層は地山粒を微量に含む黒色シルト、2層は地山ブロックを含む黒色シルト、3層は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。1・2層は人為的埋土、3層は自然崩落土と考えられる。

〔出土遺物〕確認面、堆積土より縄文土器深鉢（第47図）、二次加工剥片（第150図4）、微細剥離痕を有する剥片（第155図1）などが出土した。

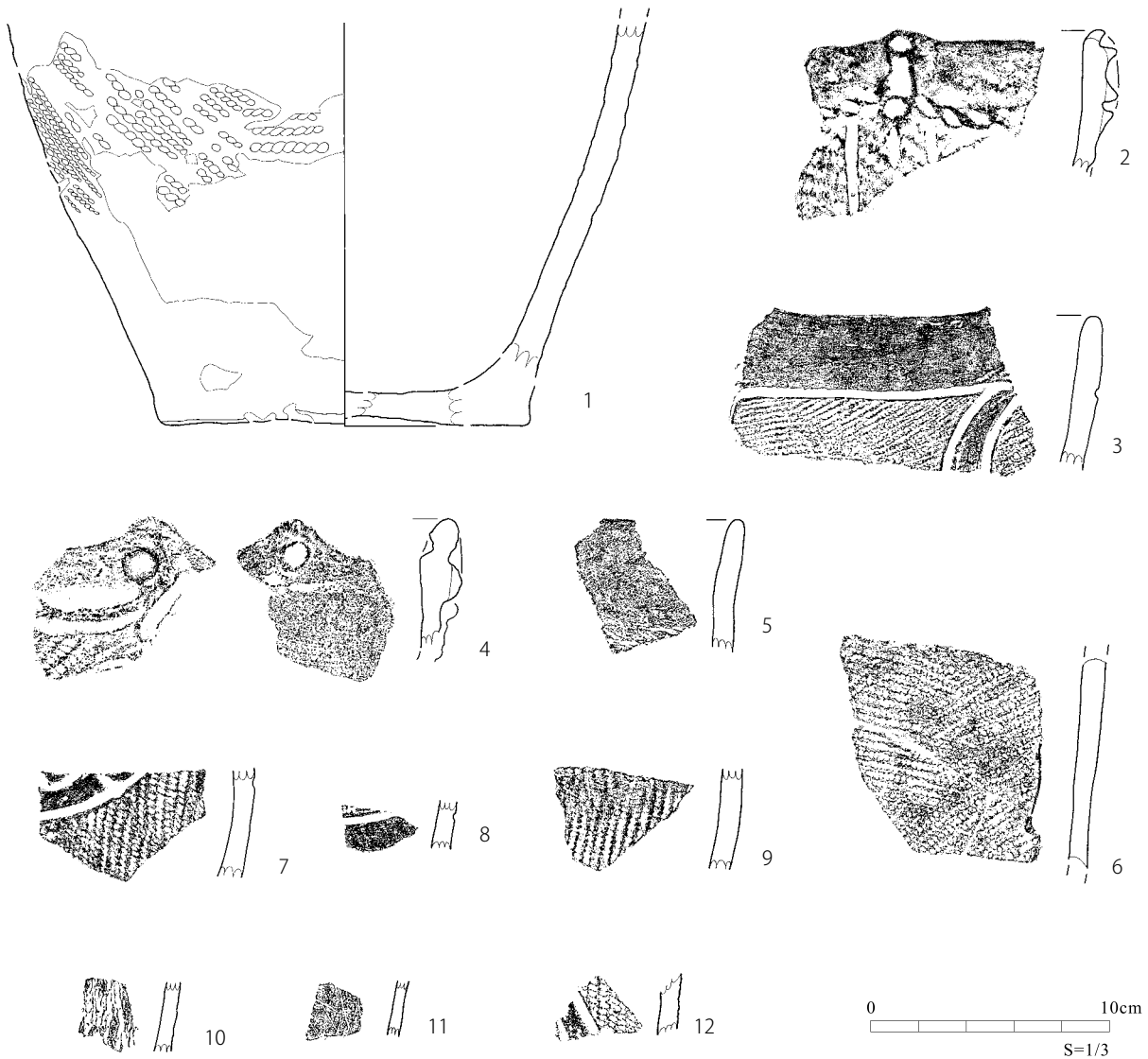
【SK22 フラスコ状土坑】（第48図、55～64図、写真図版10－2～5）

〔位置・確認面〕B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は直径162cmの円形を呈し、断面形は深さ35cmの逆台形を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕11層に細分される。1層は地山粒を少量含む褐灰色シルト、2層は地山粒を少量含む黒褐色シルト、3層は地山粒を微量に含む黒褐色シルト、4層は地山粒を微量に含む黒色シルト、5層は地山粒を少量含む黄褐色シルト、6層は地山ブロックを含む灰黄褐色シルト、7層は地山粒を微量に含む黒褐色シルト、8層は地山ブロックを含む黒色シルト、9層は地山粒と焼土を含む黒褐色シルト、10層は地山ブロックと炭化物粒を含む黒褐色シルト、11層は地山ブロックを多く含む褐灰色シルトである。



No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SK7・堆	深鉢	縄文(LR)、底部：無文(ミガキ)	159	24-1	5	B・SK7・堆	深鉢	撚糸文(L)	162	-
2	B・SK7・堆	深鉢	沈線入降線文、刻目付降線文、沈線区画、鎖状沈線文、縄文(LR)	160	23-22	6	B・SK7・堆	深鉢	縄文(LR)→沈線文、外面：炭化物付着	165	-
3	B・SK7・堆	深鉢	磨消縄文(LR)、沈線文	163	23-23	7~9	B・SK7・堆	深鉢	磨消縄文(LR)、沈線文	164	-
4	B・SK7・堆	深鉢	凹形刺突文、降線文、沈線文、縄文(RL)、内面：凹形刺突文	161	23-24	10	B・SK7・堆	深鉢	撚糸文(LR)	166	-
						11	B・SK7・堆	深鉢	格子状欄描文、外面：炭化物付着	167	-
						12	B・SK7・堆	深鉢	磨消縄文(LR)、沈線文	168	-

第46図 SK7 フラスコ状土坑出土遺物

1～4・6～10層は人為的埋土、5・11層は自然崩落土と考えられる。

〔出土遺物〕確認面、堆積土（主に8層上面）より縄文土器注口付浅鉢（第57図1）、鉢（第56図2、第57図2・3、第61図12・13、第63図2・3）、深鉢（第55図、第56図1、第58～60図、第61図1～8・10・11・14～19、第62図、第63図1・4～22、第64図）、壺（第63図3）、ミニチュア土器（第145図3）、把手（第61図9、第63図2）、土器片加工円板（第146図11）、彫刻刀形石器（第149図1）、二次加工剥片（第149図8、152図7）、微細剝離痕を有する剥片（第154図5、155図7）、剥片、石核（第159図1）、石皿（第170図2・3）などが出土した。

【SK28 フラスコ状土坑】（第50図、65～68図、写真図版10-6・7）

〔位置・確認面〕B区西部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は直径135cmの円形を呈し、断面形は深さ30cmの逆台形を呈する。底面は皿状に窪んでいる。

〔堆積土〕5層に細分される。1層は地山ブロックを多く含む灰黄褐色シルト、2層は焼土粒を含む黒色シルト、3層は焼土粒と地山粒を含む黒色シルト、4層は地山ブロックを多く含む黒褐色シルト、5層は地山ブロックを多く含む暗褐色シルトである。1・4・5層は自然崩落土、2・3層は人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕確認面、堆積土より縄文土器深鉢（第65～68図）、焼成粘土塊（写真図版43-42、胎土分析-02）、二次加工剥片（第151図5）、剥片、凹石（第164図1）、石皿（第165図3、171図1・2）などが出土した。

【SK52 フラスコ状土坑】（第51図、写真図版10-8、11-1）

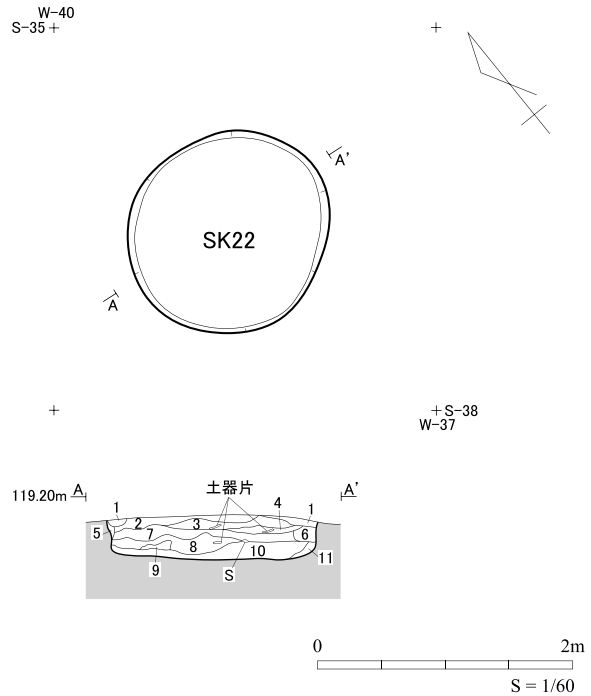
〔位置・確認面〕B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕SA119 → SK52



No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SK9・堆	深鉢	縄文(R) → 沈線文	069	24-2
2	B・SK9・堆	深鉢	縄文(LR+ 結節文)	070	24-3
3	B・SK9・堆	深鉢	縄文(LR、細い原体) → 沈線文	071	24-4

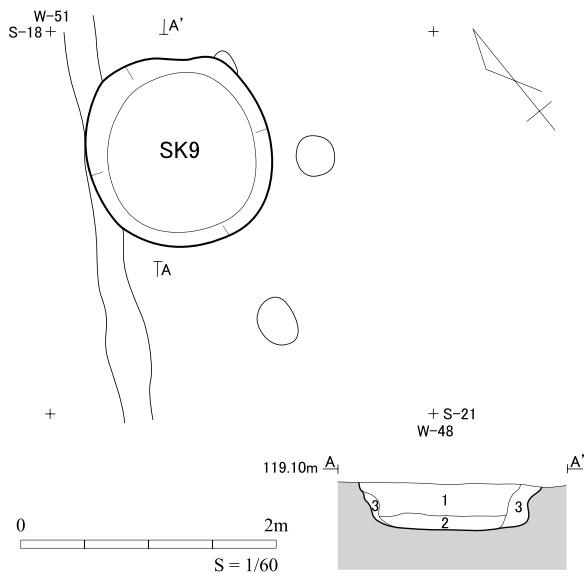
第47図 SK9 フラスコ状土坑出土遺物



SK22 フラスコ状土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR4/1 褐灰	シルト	地山粒を少量含む(人為)
2	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を少量含む(人為)
3	10YR3/2 黒褐	シルト	地山粒をごくわずかに含む(人為)
4	10YR2/1 黒	シルト	地山粒をごくわずかに含む(人為)
5	10YR4/2 灰黄褐	シルト	地山粒を少量含む(壁崩)
6	10YR4/2 灰黄褐	シルト	地山ブロックを含む(人為)
7	10YR3/2 黒褐	シルト	地山粒をごくわずかに含む 上面に土器片を多く含む(人為)
8	10YR2/1 黒	シルト	地山ブロックを含む(人為)
9	10YR3/1 黒褐	シルト	地山粒を含む 焼土をごくわずかに含む(人為)
10	10YR3/1 黒褐	シルト	地山ブロック・炭化物片を少量含む(人為)
11	10YR4/1 褐灰	シルト	地山ブロックを多く含む(壁崩)

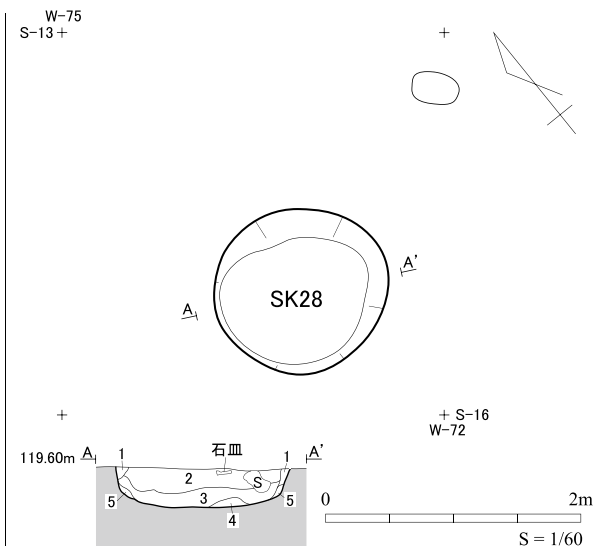
第48図 SK22 フラスコ状土坑



SK9 フラスコ状土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山粒をごくわずかに含む(人為)
2	10YR2/1 黒	シルト	地山ブロックを含む(人為)
3	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む(壁崩)

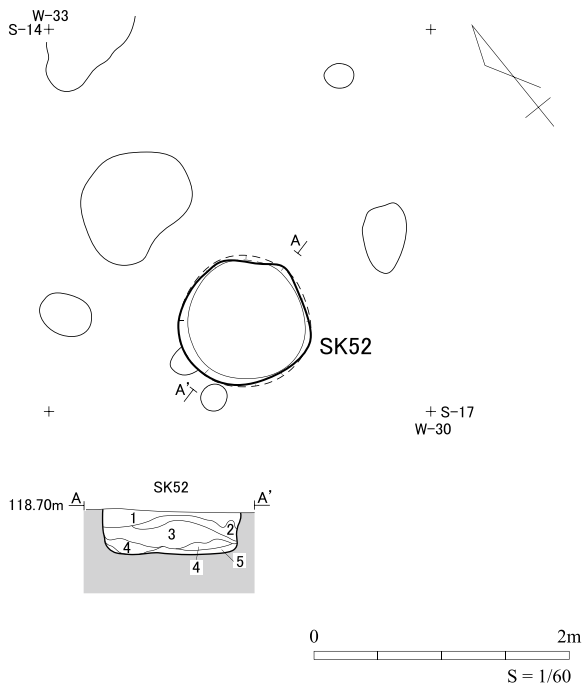
第49図 SK9 フラスコ状土坑



SK28 フラスコ状土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR4/2 灰黄褐	シルト	地山ブロックを多く含む(壁崩)
2	10YR2/1 黒	シルト	焼土粒を含む 地山粒をごくわずかに含む(人為)
3	10YR2/1 黒	シルト	焼土粒を含む 地山粒を含む(人為)
4	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む(壁崩)
5	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ブロックを多く含む(壁崩)

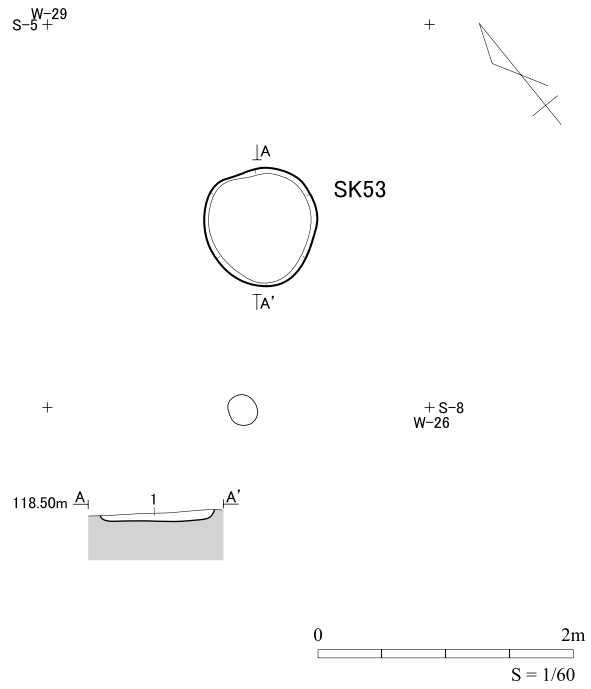
第50図 SK28 フラスコ状土坑



SK52 フラスコ状土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐色	シルト	地山ブロックを含む 炭化物粒・砂を少量含む(人為)
2	10YR3/3 暗褐色	シルト	地山ブロックを含む(人為)
3	10YR3/4 暗褐色	シルト	地山ブロックを多量に含む(人為)
4	10YR3/2 黒褐色	シルト	地山ブロック・砂を含む(人為)
5	10YR3/3 暗褐色	シルト	地山ブロックを多量に含む(人為)

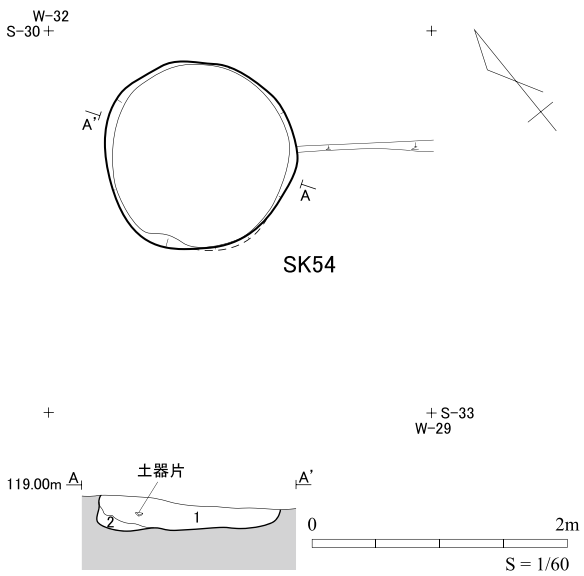
第51図 SK52 フラスコ状土坑



SK53 フラスコ状土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	地山粒をごくわずかに含む

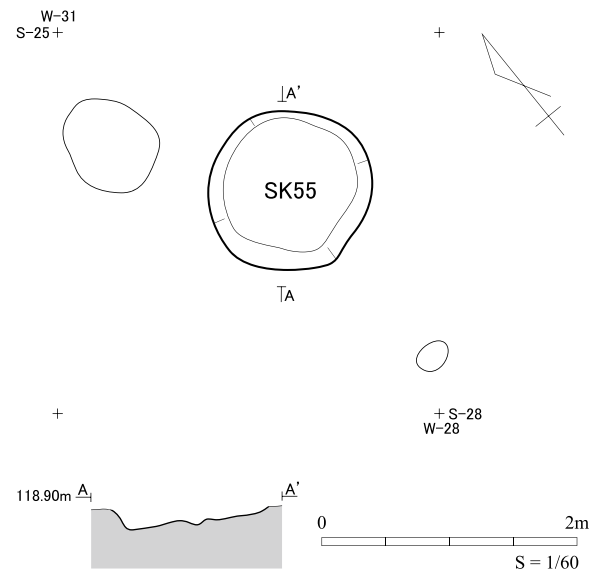
第52図 SK53 フラスコ状土坑



SK54 フラスコ状土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	地山ブロック・炭化物粒を少量含む
2	10YR3/3 暗褐色	シルト	地山ブロックを多量に含む(壁崩)

第53図 SK54 フラスコ状土坑



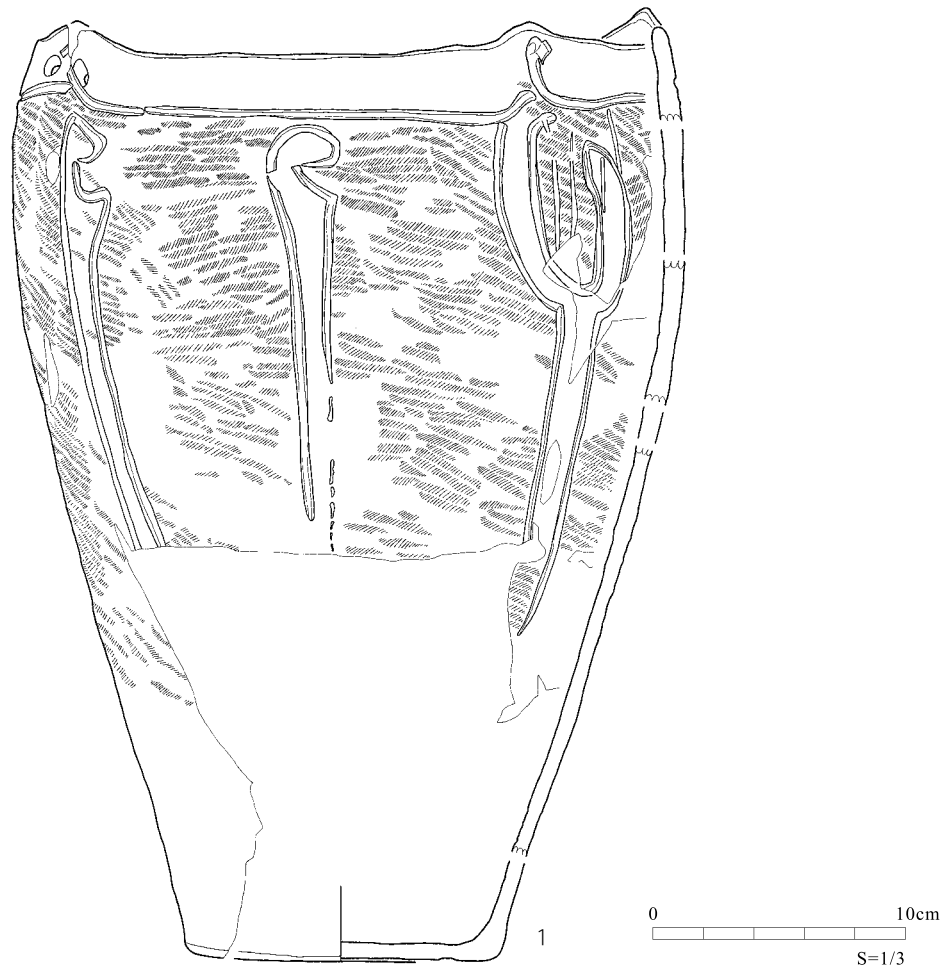
SK55 フラスコ状土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	地山粒を少量含む

第54図 SK55 フラスコ状土坑

〔規模・形状〕 平面形は直径 97cmの円形を呈し、断面形は深さ 34cmの逆台形を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕 5層に細分される。1層は地山ブロック・炭化物粒を含む暗褐色シルト、2層は地山ブロックを含む暗褐色シルト、3層は地山ブロックを多量に含む暗褐色シルト、4層は地山ブロックを含む黒褐色シ



No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SK22・Pot1	深鉢	円形盲孔、入組状沈線文、磨消縄文 (L) 蕨手文、U字状文、補修孔	307	25-1

第55図 SK22 フラスコ状土坑出土遺物 (1)

ルト、5層は地山ブロックを多量に含む暗褐色シルトで、いずれも人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

#### 【SK53 フラスコ状土坑】(第52図)

〔位置・確認面〕B区東部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸92cm、短軸88cmの略円形を呈し、断面形は深さ10cmのU字形を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕地山粒を少量含む暗褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

#### 【SK54 フラスコ状土坑】(第53・69図、写真図版11-2・3)

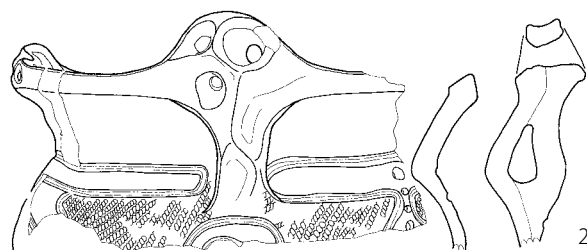
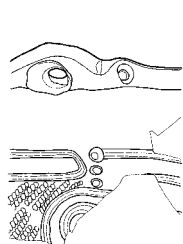
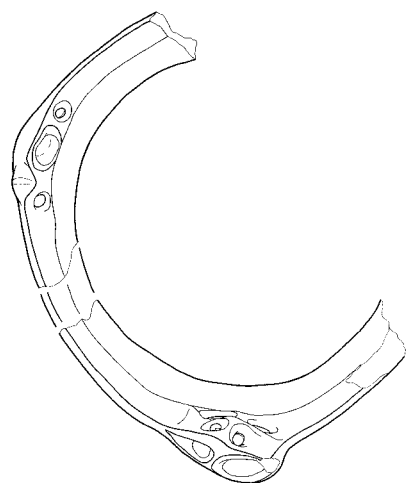
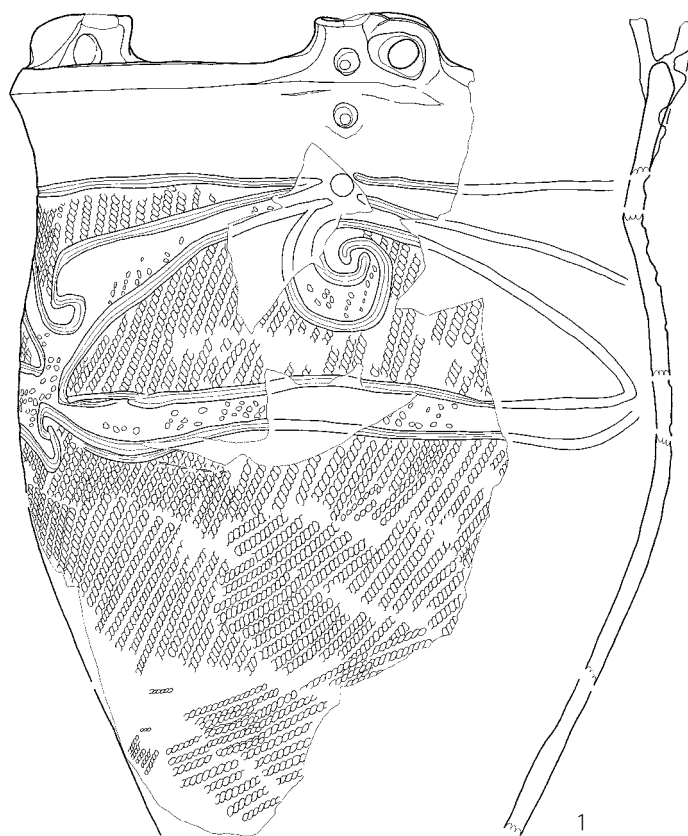
〔位置・確認面〕B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は直径150cmの円形を呈し、断面形は深さ27cmの台形を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕2層に細分される。1層は地山ブロック・炭化物粒を含む黒褐色シルト、2層は地山ブロックを多量に含む暗褐色シルトである。1層は自然堆積土、2層は自然崩落土と考えられる。

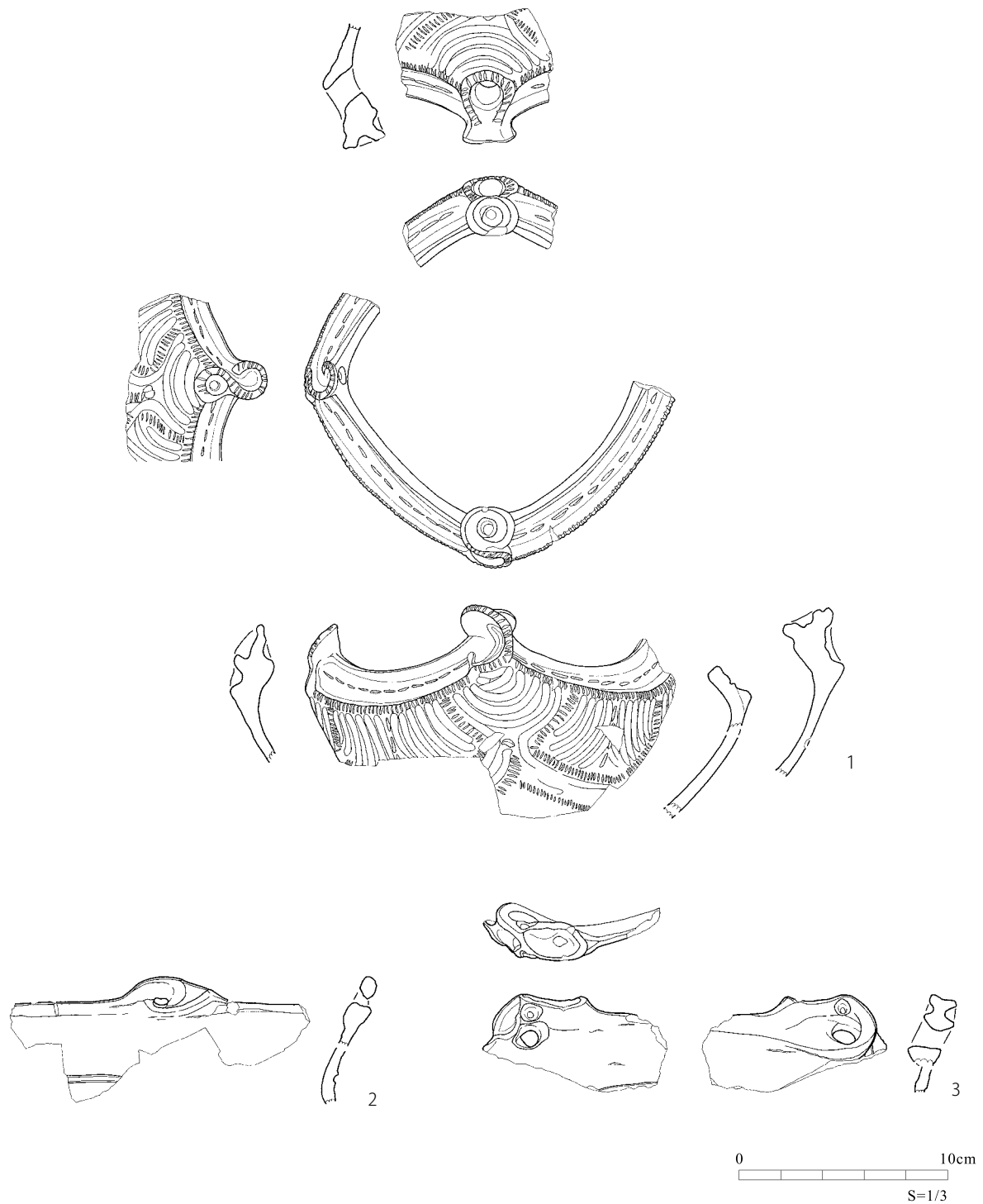
〔出土遺物〕堆積土より縄文土器深鉢(第69図)、ミニチュア土器(第145図1)、不明土製品(第145図2)、スクレイパー(第148図3)、二次加工剥片(第151図3)、微細剥離痕を有する剥片などが出土した。



No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SK22・堆 9.7, 下層	鉢	貫通孔、円形盲孔、入組溝付三角文、磨消縄文 (LR)、【胎土分析-09】	308	25-2
2	B・SK22・堆 7	鉢	橋状把手、貫通孔、円形盲孔、方形区画、磨消縄文 (LR)	311	24-6

第56図 SK22 フラスコ状土坑出土遺物 (2)





No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SK22・堆7,下層	注口付浅鉢	口縁：S字状・8字状突起、加飾隆帯、鎖状沈線文、爪形文、多条沈線文、外面：炭化物付着、内面：帯状に炭化物付着、 【年代測定-08・09】【胎土分析-11】	310	24-7
2・3	B・SK22・堆9,7	鉢	貫通孔、円形盲孔、沈線文、【年代測定-07】	312	24-5

第57図 SK22 フラスコ状土坑出土遺物 (3)

【SK55 フラスコ状土坑】(第54・70図、写真図版11-4)

〔位置・確認面〕B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は直径125cmの円形を呈し、断面形は深さ17cmの逆台形を呈する。底面はやや南に向かって傾斜している。

〔堆積土〕地山粒を少量含む黒褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。



No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1~4	B・SK22・堆	深鉢	円形刺突、沈線文、磨消縄文(RL)、藏手文、U字状文、外面：炭化物付着、【胎土分析-08】	309	26

第58図 SK22 フラスコ状土坑出土遺物 (4)

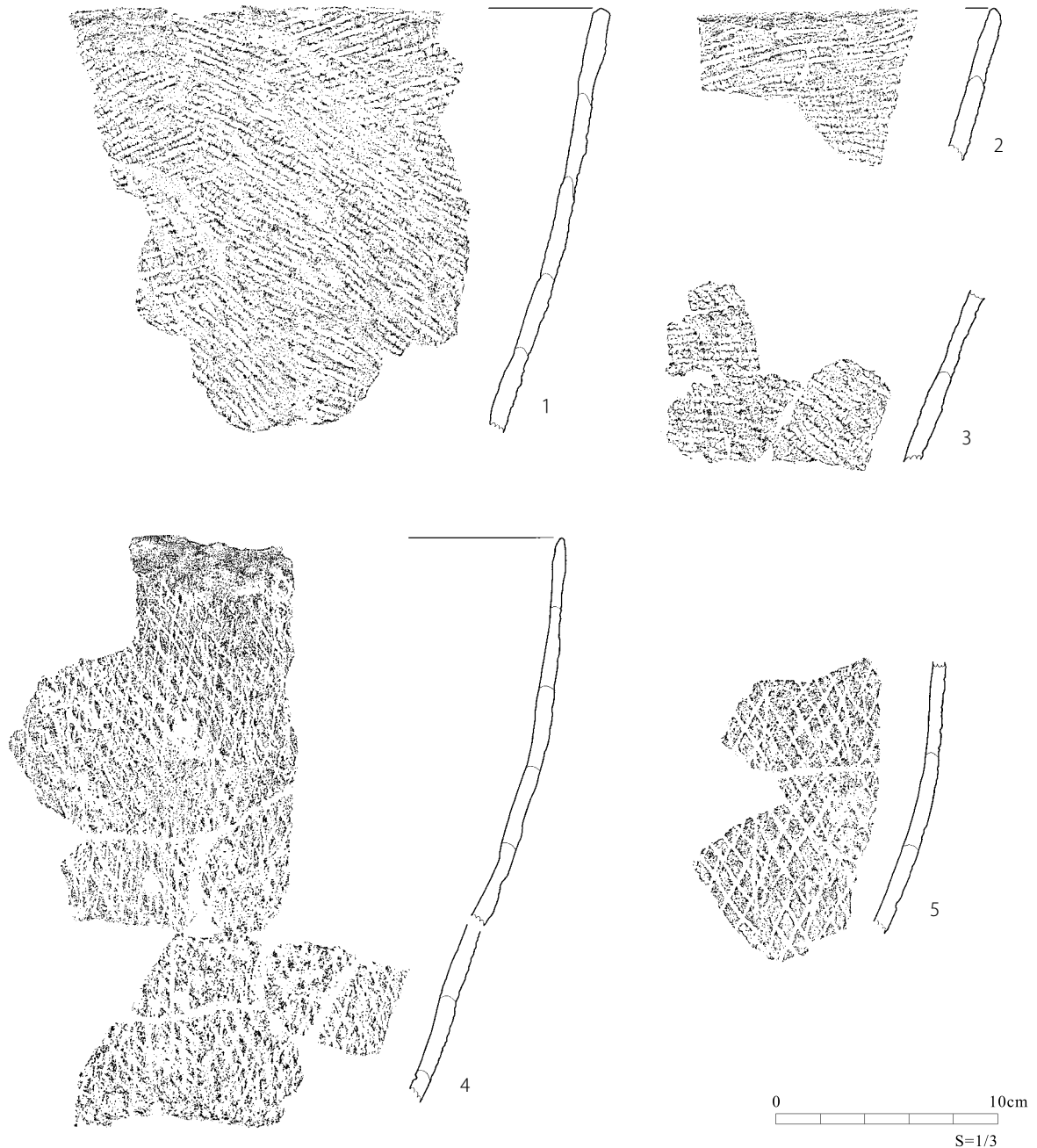
〔出土遺物〕 堆積土より縄文土器深鉢（第70図）、石鏃（第147図4）、二次加工剥片（第152図5）などが出土した。

【SK56 フラスコ状土坑】（第72・79～82図、写真図版11-5～7）

〔位置・確認面〕 B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕 なし

〔規模・形状〕 平面形は確認面で直径168cm、最大径で直径184cmの円形を呈し、断面形は高さ36cmの台形を呈する。底面はほぼ平坦である。



No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1～3	B・SK22・Pot1・堆7	深鉢	縄文(LR)	314	-	4・5	B・SK22・堆7	深鉢	網目状撫糸文、被熱著しい	315	27-1

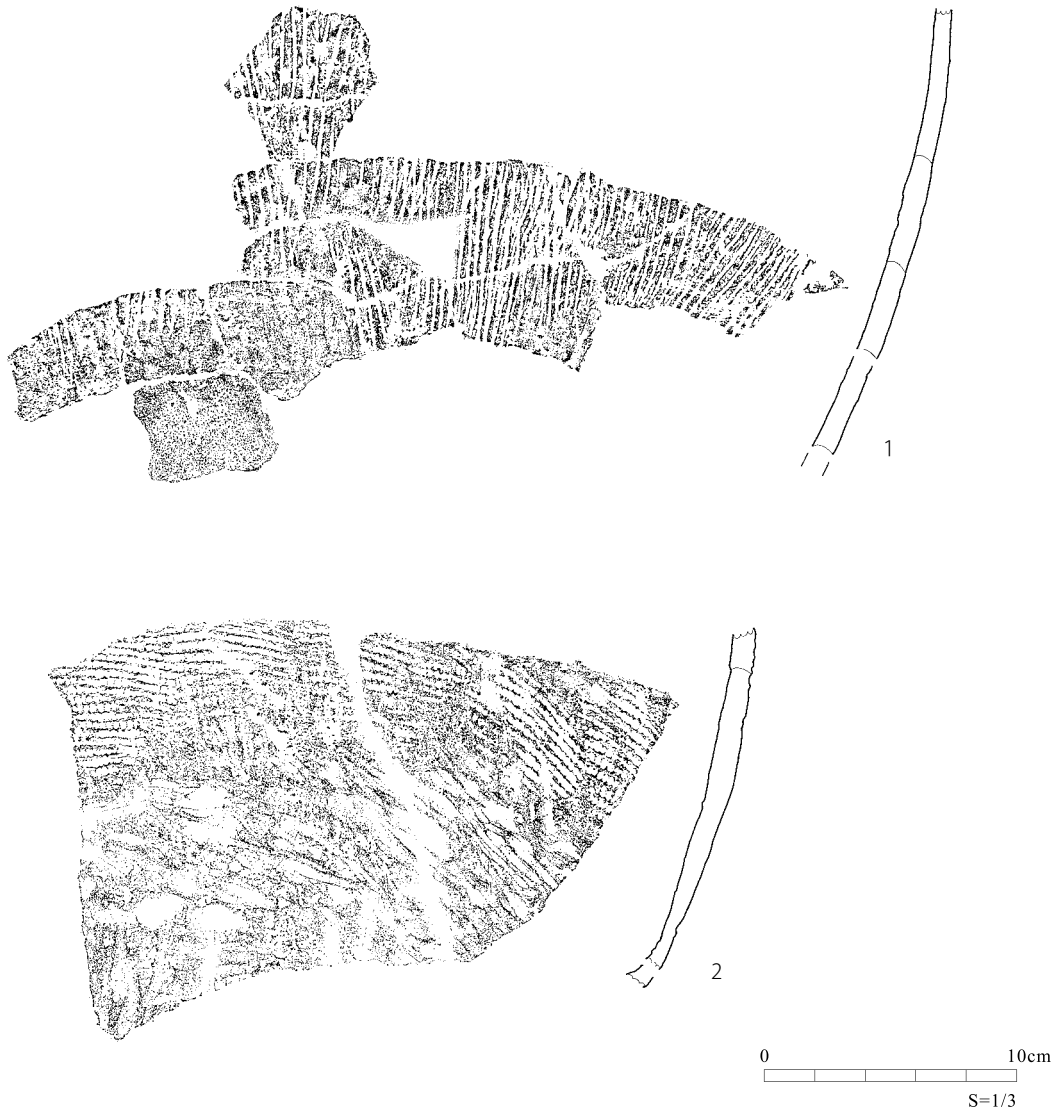
第59図 SK22 フラスコ状土坑出土遺物 (5)

〔堆積土〕6層に細分される。1層は地山ブロックを多量に含む褐色シルト、2層は地山粒・炭化物粒を少量含む黒褐色シルト、3層は地山ブロック、焼土・炭化物粒を少量含む暗褐色シルト、4～6層は地山ブロック、焼土・炭化物粒を少量含む黒褐色シルトである。1層は自然崩落土、2～6層は人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土（主に5層中）より縄文土器鉢（第80図14）、深鉢（第79図、第80図1～13・15～20、第81・82図）、土器片加工円板（第146図9・10）、二次加工剥片（第152図3）、石皿（第165図1）、剥片などが出土した。第82図10については型式学的にみて他の出土土器よりも明らかに古い様相を示しており、混入と考えられる。

【SK62 フラスコ状土坑】（第72・83図、写真図版11－8）

〔位置・確認面〕B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。



No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SK22・堆9.7.下層	深鉢	燃糸文 (R)	316	27-2	2	B・SK22・Pot1	深鉢	縄文 (LR) → 胴部下半：ミガキ	313	27-3

第60図 SK22 フラスコ状土坑出土遺物 (6)

〔重複〕 Pit → SK62

〔規模・形状〕 平面形は直径 110cm の円形を呈し、断面形は深さ 10cm の皿状を呈する。

〔堆積土〕 地山ブロックを少量含む黒褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕 堆積土より縄文土器深鉢（第 83 図）、剥片などが出土した。

〔SK63 フラスコ状土坑〕（第 71・85 図、写真図版 12 - 1）

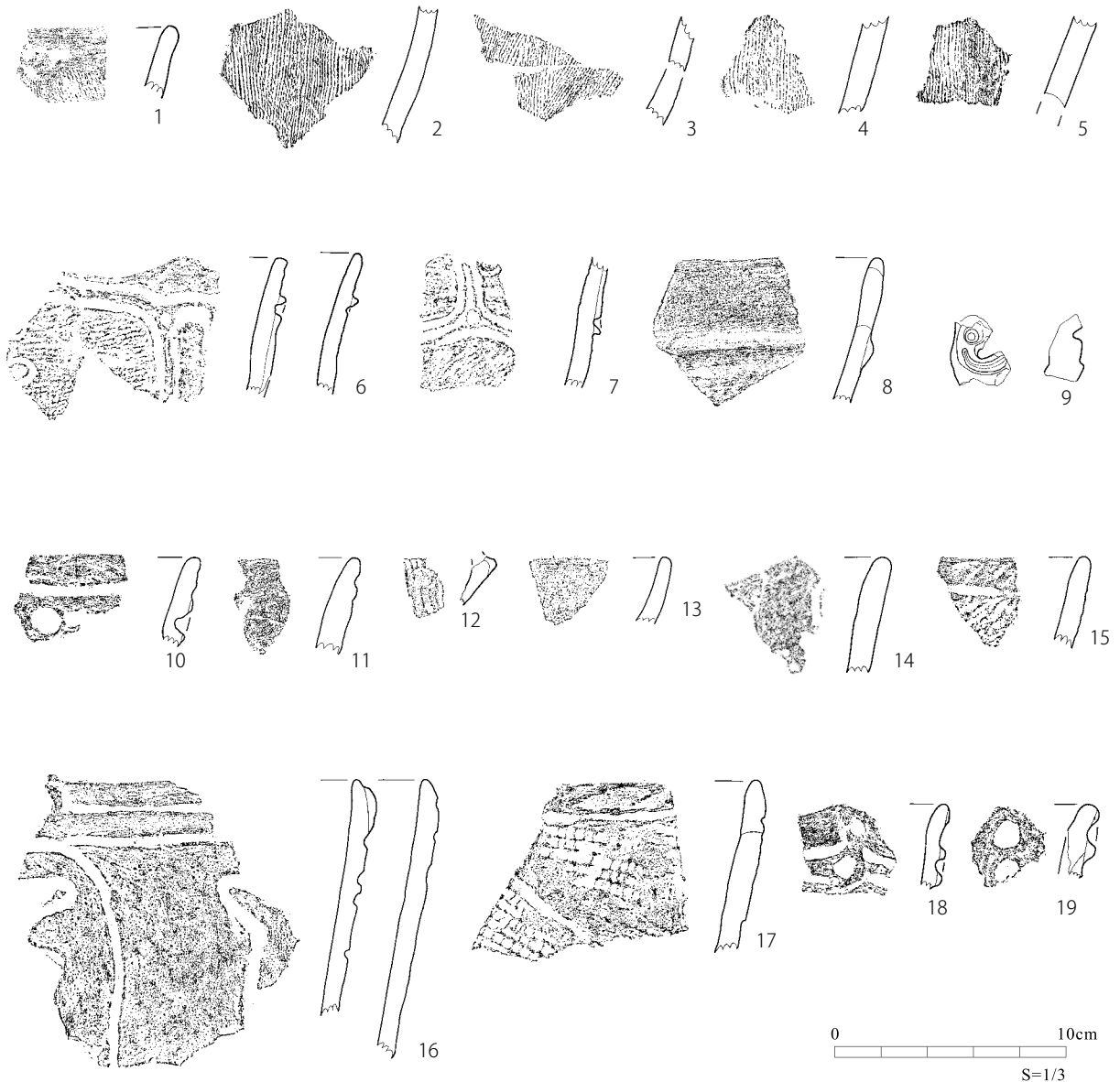
〔位置・確認面〕 B 区中央部の平坦面に位置する。V 層上面で確認した。

〔重複〕 SK63 - SB112

〔規模・形状〕 平面形は長軸 88cm、短軸 86cm の略円形を呈し、断面形は深さ 8cm の皿状を呈する。底面はほぼ平坦である。中央部で平面形が長軸 30cm、短軸 19cm の楕円形を呈し、深さ 40cm の小柱穴を確認した。

〔堆積土〕 3 層に細分される。1 層は地山粒を少量含む黒褐色粘質シルト、2 層は地山ブロックを多く含む黒褐色粘質シルト、3 層は地山粒を多量に含む褐色粘質シルトである。3 層は自然崩落土、1・2 層は人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕 堆積土より縄文土器深鉢（第 85 図）などが出土した。



No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1～5	B・SK22・堆7	深鉢	燃糸文 (R, 細い原体)	317	28-1	13	B・SK22・堆9	鉢?	無文 (ミガキ)	323	-
6・7	B・SK22・堆7, 下層	深鉢	円形刺突付隆線文、沈線文、縄文 (LR)	318	28-2	14	B・SK22・堆7	深鉢	沈線文、円形刺突	326	-
8	B・SK22・下	深鉢	隆線文	319	28-3	15	B・SK22・堆7	深鉢	縄文 (L) → 沈線文	327	-
9	B・SK22・堆7	把手	円形刺突、弧状沈線文	330	28-4	16	B・SK22・堆7	深鉢	隆線文、多条沈線文、蕨手文	324	28-6
10	B・SK22・下	深鉢	沈線文、ボタン状貼付文	320	28-5	17	B・SK22・堆7	深鉢	縄文 (LR) → 沈線文	325	28-7
11	B・SK22・下	深鉢	円形刺突、磨消縄文 (RL)	321	-	18	B・SK22・堆7	深鉢	隆線文、沈線文、交点に不整形刺突	328	28-8
12	B・SK22・堆9	鉢?	爪形文、多条沈線文	322	-	19	B・SK22・堆7	深鉢	円形盲孔	329	28-9

第61図 SK22 フラスコ状土坑出土遺物 (7)

【SK66 フラスコ状土坑】 (第73・84図、写真図版12-2)

〔位置・確認面〕 B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕 なし

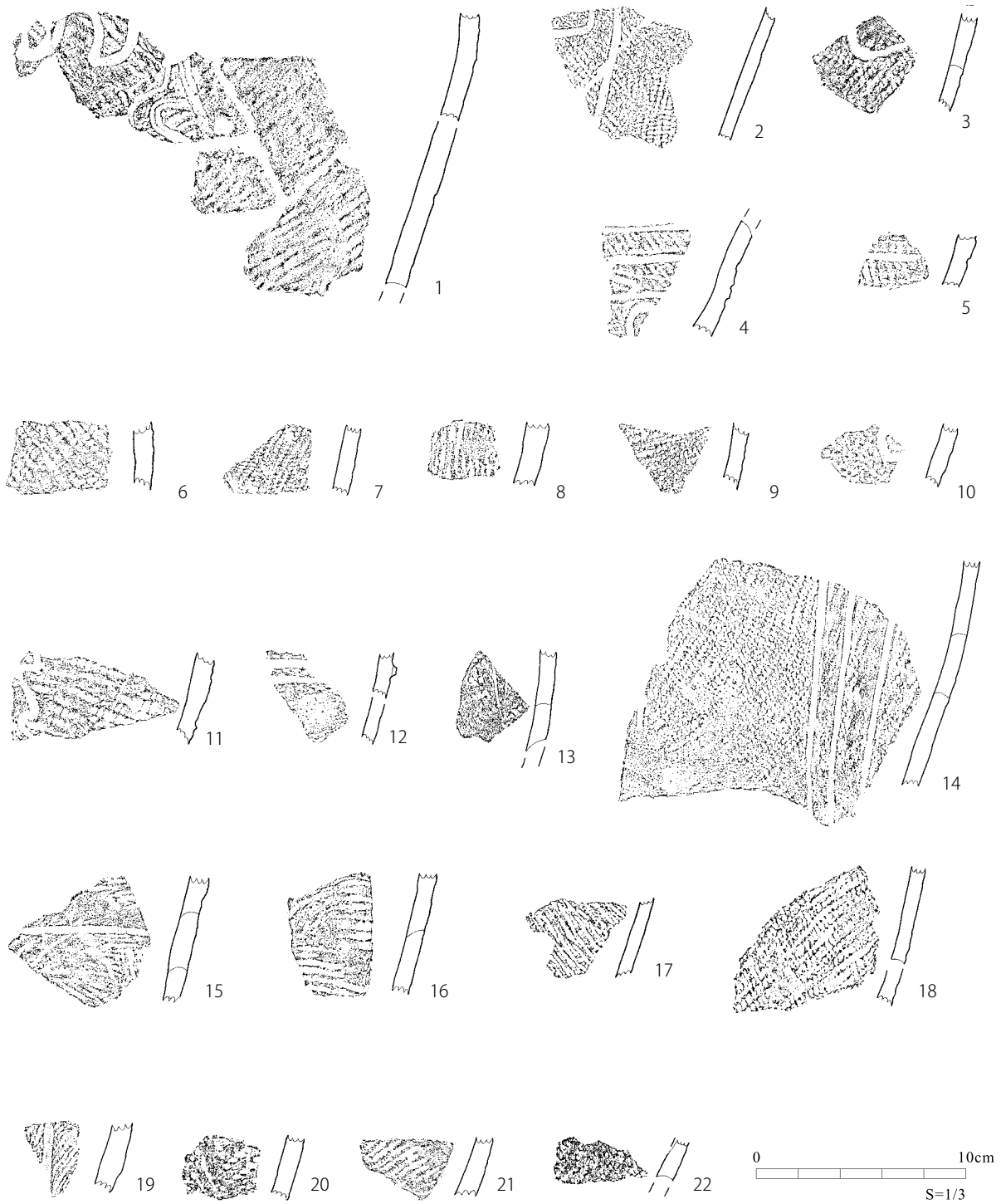
〔規模・形状〕 平面形は確認面で直径128cm、最大径で直径140cmの円形を呈し、断面形は高さ18cmの台形を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕 2層に細分される。1層は地山・炭化物粒を含む黒褐色シルト、2層は地山ブロックを含む黒褐色シルトで、いずれも自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕 堆積土より縄文土器深鉢 (第84図)、土器片加工円板 (第146図3) などが出土した。

【SK67 フラスコ状土坑】 (第74図、写真図版12-3・4)

〔位置・確認面〕 B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。



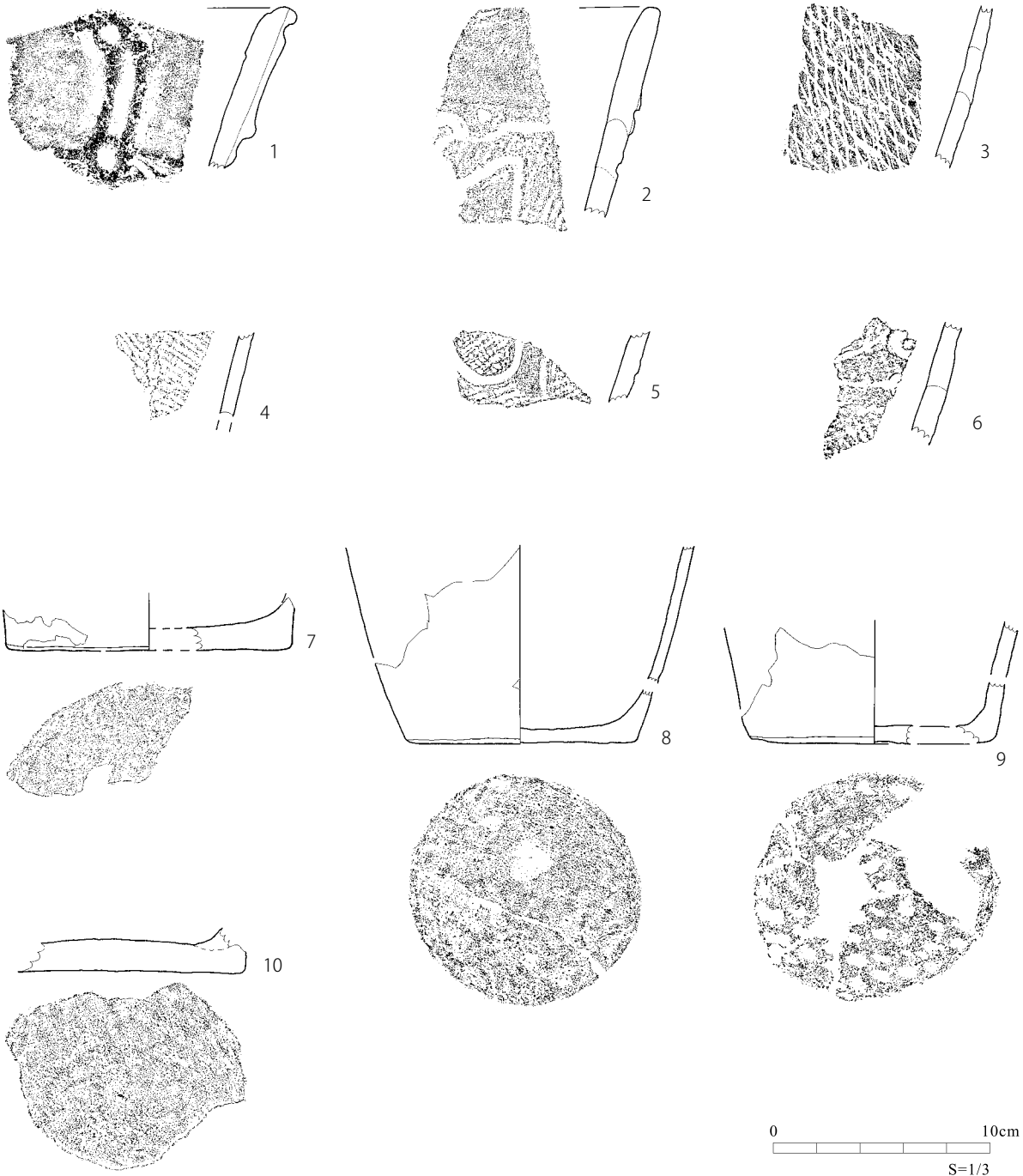
No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SK22・堆9,7,下層	深鉢	縄文(L)→沈線文	336	28-10	13	B・SK22・堆7	深鉢	縄文(LR)→沈線文	350	-
2	B・SK22・下層	深鉢	縄文(RL)→沈線文	337	28-11	14	B・SK22・堆7	深鉢	磨消縄文(LR)、多条沈線文	344	28-17
3	B・SK22・堆9	深鉢	縄文(LR)→沈線文	338	-	15	B・SK22・堆7	深鉢	縄文(L)→沈線文	345	28-16
4・5	B・SK22・堆7	深鉢	磨消縄文(LR)、沈線文	346	28-12	16	B・SK22・堆7	深鉢	縄文(L)	352	28-15
6	B・SK22・堆9	深鉢	縄文(LR)	339	-	17	B・SK22・堆7	深鉢	縄文(L)、内面：炭化物付着	353	-
7	B・SK22・堆9	深鉢	縄文(RL)	340	-	18	B・SK22・堆7	深鉢	縄文(LR)	351	-
8	B・SK22・堆9	深鉢	縄文(L)	341	-	19	B・SK22・堆7	深鉢	縄文(LR)→沈線文	348	-
9	B・SK22・堆9	深鉢	縄文(LR)	342	-	20	B・SK22・堆7	深鉢	縄文(RL)	354	-
10	B・SK22・堆9	深鉢	縄文(LR)→沈線文	343	-	21	B・SK22・堆7	深鉢	縄文(LR)	355	-
11	B・SK22・堆7	深鉢	縄文(LR)→沈線文	349	28-13	22	B・SK22・堆7	深鉢	縄文(LRL)、外面：炭化物付着	356	-
12	B・SK22・堆10,9,7	深鉢	隆線文、沈線文、縄文(原体不明)、磨滅	377	28-14						

第62図 SK22 フラスコ状土坑出土遺物(8)



No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SK22・堆	深鉢	縄文(LR)	331	29-1	12	B・SK22・堆	深鉢	縄文(RL)→並行沈線文	365	-
2	B・SK22・堆	把手	橋状把手、沈線文、縄文(LR)	332	29-2	13-15	B・SK22・堆	深鉢	縄文(LR)→沈線文	366	-
3	B・SK22・堆	壺?	無文(ミガキ)	333	29-3	16	B・SK22・堆	深鉢	磨消縄文(LR)、沈線文、摩滅	367	-
4	B・SK22・堆	深鉢	磨消縄文(LR)、平行沈線文、弧状沈線文	357	29-7	17	B・SK22・堆	深鉢	縄文(LR)	368	-
5	B・SK22・堆	深鉢	縄文(LR)	358	-	18	B・SK22・堆	深鉢	縄文(RL)	369	-
6	B・SK22・堆	深鉢	隆線文、縄文(RL-0段多条?)	359	29-4	19	B・SK22・堆	深鉢	縄文(L)	370	-
7	B・SK22・堆	深鉢	隆線文、縄文(LR)	360	-	20	B・SK22・堆	深鉢	縄文(LR)	371	-
8	B・SK22・堆	深鉢	鎖状短沈線文	361	-	21	B・SK22・堆	深鉢	撫糸文(R)	372	-
9	B・SK22・堆	深鉢	沈線文、縄文(LR)	362	-	22	B・SK22・堆	深鉢	撫糸文(L?)	373	-
10	B・SK22・堆	深鉢	弧状沈線文、縄文、摩滅	363	-	23	B・SK22・堆	鉢?	無文(ミガキ)	382	-
11	B・SK22・堆	深鉢	磨消縄文(LR)、沈線文	364	-						

第63図 SK22 フラスコ状土坑出土遺物(9)



No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SK22・確	深鉢	沈線入降線文、沈線文	334	29-5	7	B・SK22・下	深鉢	底面：無文（ミガキ）	378	-
2	B・SK22・確	深鉢	降線文、ボタン状貼付文、磨消縄文、沈線文	335	29-6	8	B・SK22・堆	深鉢	胴部：無文（ミガキ）、底面：無文（ミガキ）、 摩滅、内面：炭化物付着	381	29-11
3	B・SK22・確	深鉢	網目状擦糸文（R）	383	29-9	9	B・SK22・堆 9.7	深鉢	底：外面、無文（ミガキ）、 底面：網代痕→ミガキ	380	29-12
4	B・SK22・確	深鉢	縄文（LR+結節文）	375	29-8	10	B・SK22・堆 9	深鉢	底部：網代痕→ミガキ	379	-
5	B・SK22・確	深鉢	磨消縄文（LR）、沈線文	374	29-10						
6	B・SK22・確	深鉢	縄文（L）、沈線文	376	-						

第64図 SK22 フラスコ状土坑出土遺物（10）

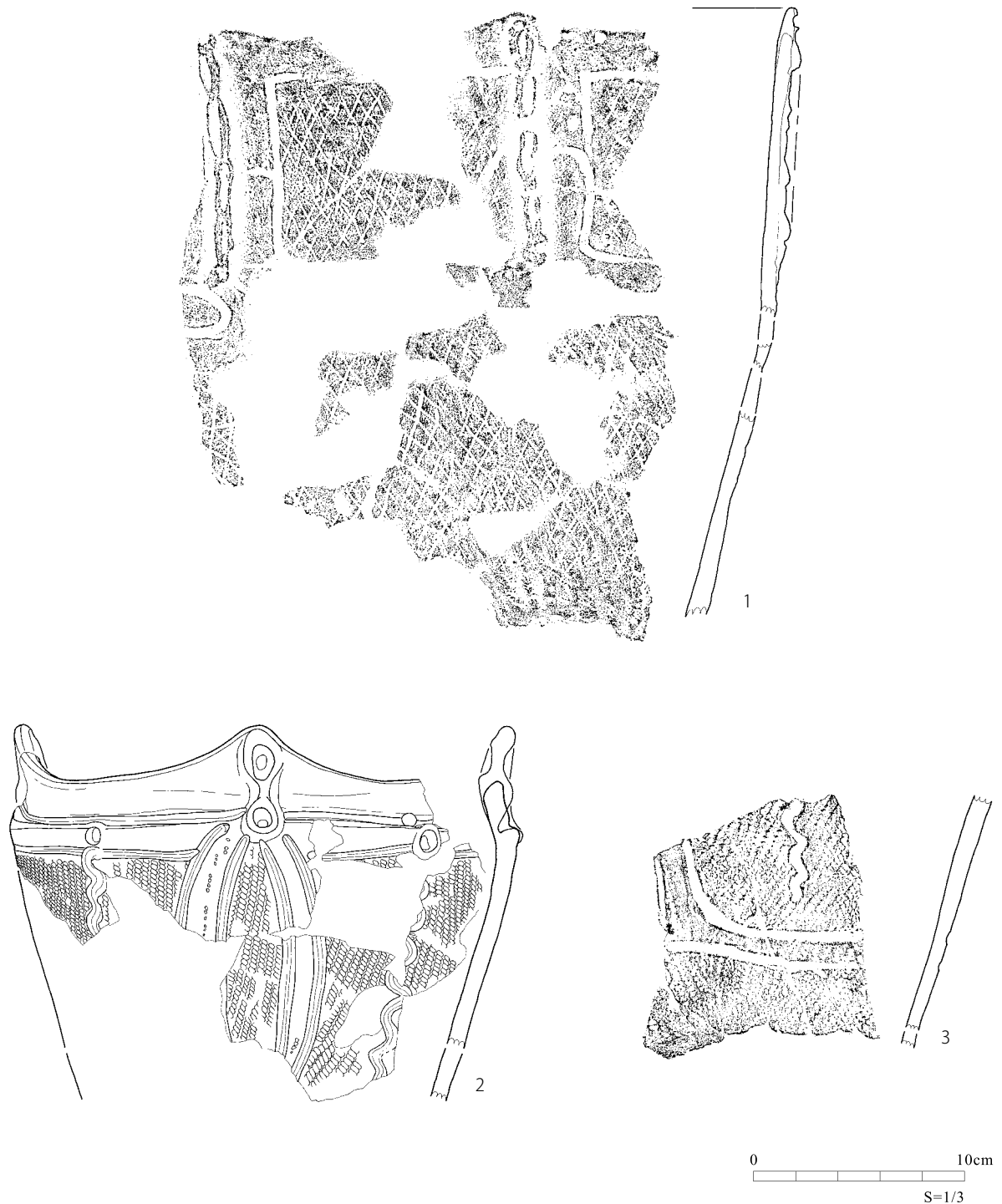
〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸 97cm、短軸 78cm の略円形を呈し、断面形は深さ 23cm の逆台形を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕2層に細分される。1層は地山粒を少量含む黒褐色粘質シルト、2層は地山ブロックを少量含む黒褐色粘質シルトで、いずれも人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕底面より棒状石製品（第173図1）が出土した。





No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SK28・2層+堆	深鉢	網目状襷糸文、鎖状隆線文、方形区画	241	30-1
2・3	B・SK28・3・2層+堆	深鉢	8字状隆線文、沈線文、貫通孔、ボタン状貼付文、楕円文、沈線区画、ジグザグ文、磨消縄文 (LR)、【胎土分析-06】	242	29-13

第 65 図 SK28 フラスコ状土坑出土遺物 (1)

【SK68 フラスコ状土坑】(第 75 図、写真図版 12 - 5・6)

〔位置・確認面〕 B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕 なし

〔規模・形状〕 平面形は直径 170cmの円形を呈し、断面形は深さ 23cmの皿状を呈する。

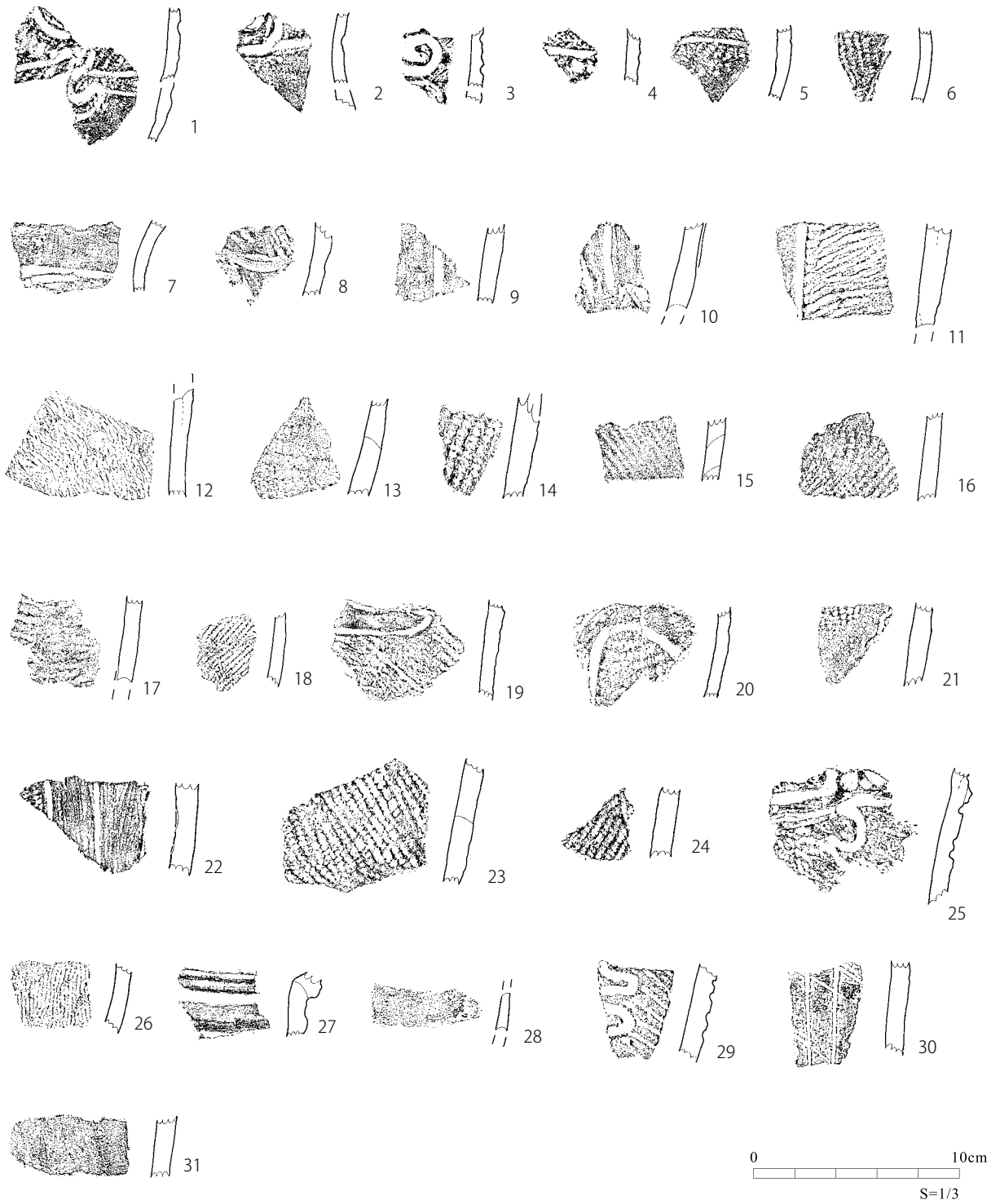
〔堆積土〕 2層に細分される。1層は地山粒を少量含む黒褐色シルト、2層は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトである。1層は自然堆積土、2層は人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕 堆積土より土器片加工円板(第 146 図 5)、スクレイパー(第 148 図 4)、剥片などが出土した。



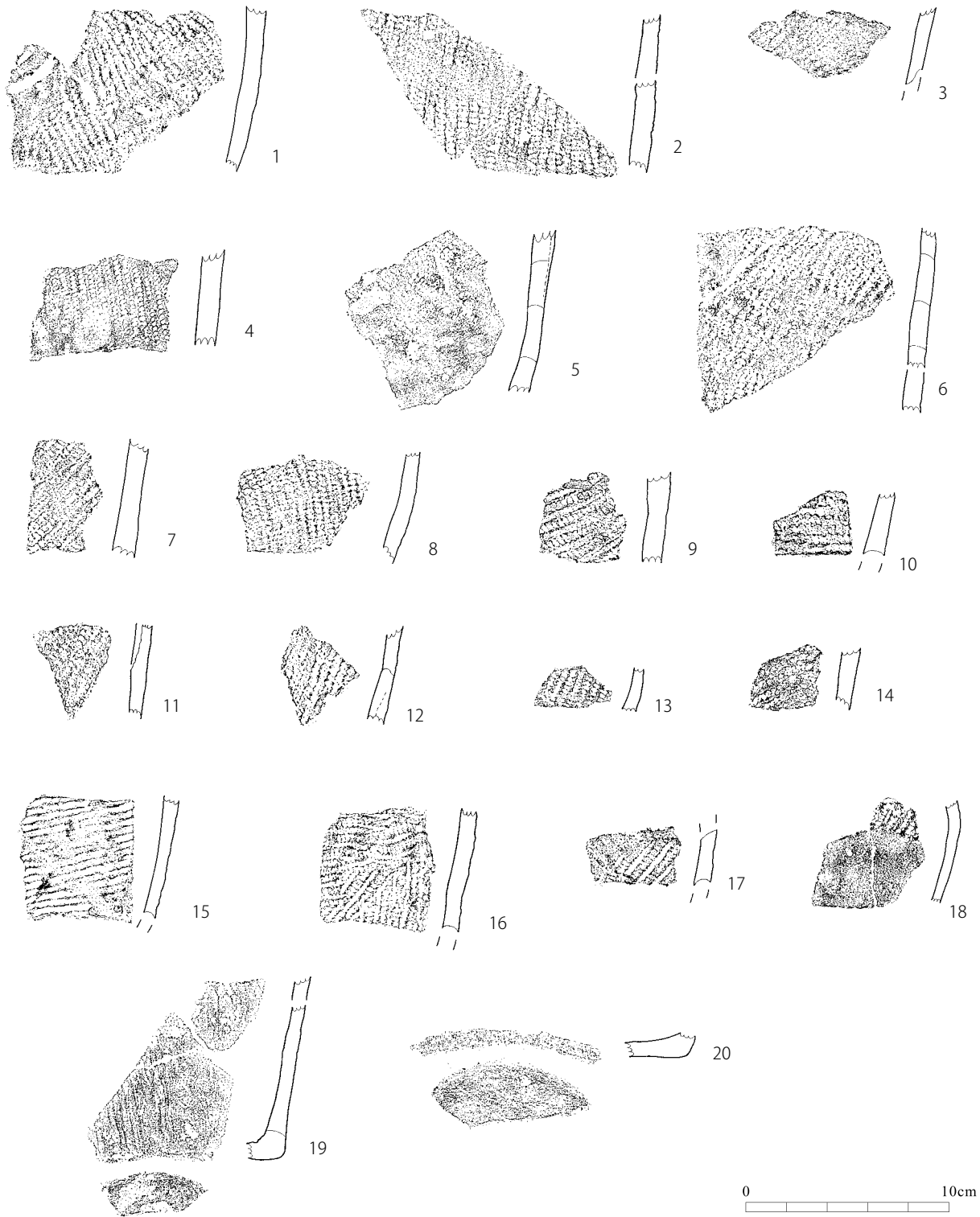
No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1・2	B・SK28・堆	深鉢	柳歯状沈線文(縦位、一部格子状)、全体的に被熱著しい	243	30-2	10	B・SK28・堆3	深鉢	縄文(LR)	248	30-10
3	B・SK28・堆3	深鉢	把手(ねじり状)、円形刺突文、沈線文	244	30-3	11	B・SK28・堆2	深鉢	渦巻文	252	30-11
4	B・SK28・堆3	深鉢	沈線文、8字状降線文、渦巻文、縄文(LR)	245	30-4	12	B・SK28・堆2	深鉢	沈線文、鎖状刺突文	253	-
5	B・SK28・堆3+確	深鉢	無文(ミガキ)、貫通孔	246	30-5	13	B・SK28・堆2	深鉢	無文(ミガキ)	254	-
6	B・SK28・堆3	深鉢	方形区画文/縄文(LR)	247	30-6	14	B・SK28・堆2	深鉢	短沈線文、縄文(LR)	255	-
7	B・SK28・堆2	深鉢	ホタン状貼付文、沈線区画、降線文、縄文(LR)	249	30-7	15	B・SK28・堆	深鉢	沈線文、櫛状沈線文(連続S字状文)	256	30-12
8	B・SK28・堆2	深鉢	降線文、縄文(LR)	250	30-8	16	B・SK28・堆	深鉢	降線文、縄文(LR)	257	30-13
9	B・SK28・堆2	深鉢	沈線入降線文、刺突文、降線文	251	30-9	17	B・SK28・堆	深鉢	押圧縄文(R)?	258	-
						18	B・SK28・堆	深鉢	縄文(LR)	259	-

第66図 SK28 フラスコ状土坑出土遺物(2)



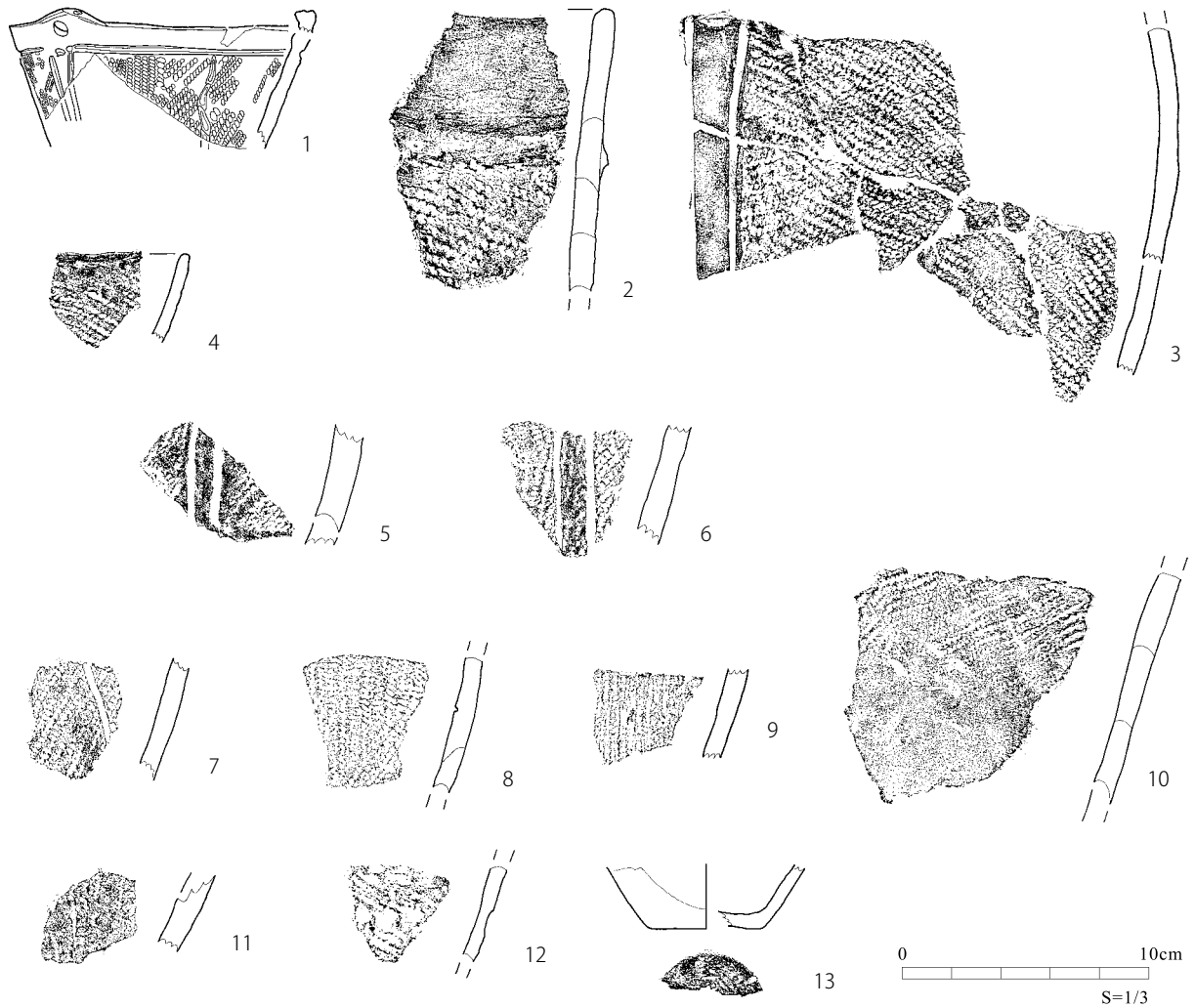
No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1~6	B・SK28・堆	深鉢	渦巻文	260	31-1	19	B・SK28・堆2	深鉢	磨消縄文 (RL)、沈線文	273	31-4
7	B・SK28・堆3	深鉢	沈線文	261	-	20	B・SK28・堆2	深鉢	沈線区画、縄文 (LR)、内面・断面：炭化物付着	274	31-5
8	B・SK28・堆3	深鉢	縄文 (LR)、沈線文	262	-	21	B・SK28・堆2	深鉢	縄文 (LR+結節文)	275	-
9	B・SK28・堆3	深鉢	沈線文	263	-	22	B・SK28・堆2	深鉢	磨消縄文 (RL)、多条沈線文	276	31-6
10	B・SK28・堆3	深鉢	沈線文	264	-	23	B・SK28・堆2	深鉢	縄文 (RL)	277	31-7
11	B・SK28・堆3	深鉢	縄文 (L) → 沈線文	265	31-2	24	B・SK28・堆2	深鉢	縄文 (LR)	279	-
12	B・SK28・堆3	深鉢	撚糸文 (R)	266	31-3	25	B・SK28・堆	深鉢	隆線文、沈線文、縄文	280	31-8
13	B・SK28・堆3	深鉢	縄文 (RL)、ナデ	267	-	26	B・SK28・堆2	深鉢	縄文 (R)	278	-
14	B・SK28・堆3	深鉢	縄文 (LR)	268	-	27	B・SK28・堆	深鉢	隆線文、沈線文、鎖状刺突文	281	-
15	B・SK28・堆3	深鉢	縄文 (LR)	269	-	28	B・SK28・堆	深鉢	無文、凝口縁	282	-
16	B・SK28・堆3	深鉢	縄文 (LR)	270	-	29	B・SK28・堆	深鉢	縄文 (LR) → ズグザグ文	283	31-9
17	B・SK28・堆3	深鉢	縄文 (LR)、内面：炭化物付着	271	-	30	B・SK28・堆	深鉢	格子状沈線文	284	31-10
18	B・SK28・堆3	深鉢	縄文 (LR、細い原体)	272	-	31	B・SK28・堆3	深鉢	無文 (ナデ)	303	-

第 67 図 SK28 フラスコ状土坑出土遺物 (3)



No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SK28・堆	深鉢	縄文 (RL) → 沈線文、2 と同一個体?	285	31-11	11	B・SK28・堆	深鉢	縄文 (RL)	297	-
2	B・SK28・堆	深鉢	縄文 (RL)、1 と同一個体?	286	31-12	12	B・SK28・堆	深鉢	縄文 (LR)	298	-
3	B・SK28・堆	深鉢	縄文 (LR)	301	-	13	B・SK28・堆	深鉢	縄文 (LR)、一部ナデ	299	-
4	B・SK28・堆	深鉢	縄文 (RL)	289	-	14	B・SK28・堆	深鉢	縄文 (LR)	300	-
5	B・SK28・堆	深鉢	縄文 (RL)、ミガキ	288	-	15	B・SK28・堆	深鉢	縄文 (L)	291	31-14
6	B・SK28・堆	深鉢	縄文 (RL)	287	31-13	16	B・SK28・堆	深鉢	縄文 (RLR?)	292	31-15
7	B・SK28・堆	深鉢	縄文 (RLR)	290	-	17	B・SK28・堆	深鉢	縄文 (RLR?)	296	-
8	B・SK28・堆	深鉢	縄文 (LR)	293	-	18	B・SK28・堆 2	深鉢	縄文 (LR)、外面：種子痕	302	-
9	B・SK28・堆	深鉢	縄文 (RLR)	294	-	19	B・SK28・堆 3	深鉢	胴部：無文 (ミガキ)、底部：無文 (ミガキ)、摩滅	304	-
10	B・SK28・堆	深鉢	縄文 (RL)	295	-	20	B・SK28・堆 2	深鉢	無文 (ミガキ)、摩滅	305	-

第 68 図 SK28 フラスコ状土坑出土遺物 (4)



No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SK54・堆+確	深鉢	貫通孔、円形盲孔、沈線区画、縄文(RL-O段多条)→鎖状刺突文	132	31-16	7	B・SK54・堆	深鉢	縄文(LR)→沈線文	137	-
2	B・SK54・堆	深鉢	隆線文、縄文(RL)	133	31-17	8	B・SK54・堆	深鉢	縄文(LR)	138	-
3	B・SK54・堆	深鉢	磨消縄文(LR)、平行沈線文	131	31-18	9	B・SK54・堆	深鉢	縄文(RL)	139	-
4	B・SK54・堆	深鉢	縄文(LR)	134	-	10	B・SK54・堆	深鉢	縄文(LR)	141	31-21
5	B・SK54・堆	深鉢	磨消縄文(LR)、沈線区画	135	31-19	11	B・SK54・堆	深鉢	縄文(原体不明)	140	-
6	B・SK54・堆	深鉢	磨消縄文(LR)、沈線文	136	31-20	12	B・SK54・堆	深鉢	連続刺突文、縄文(LR)	142	-
						13	B・SK54・堆	深鉢	無文(ミガキ)、底面:無文(ミガキ)	143	-

第69図 SK54 フラスコ状土坑出土遺物

【SK71 フラスコ状土坑】(第76図)

〔位置・確認面〕 B区中央部の平坦面に位置する。

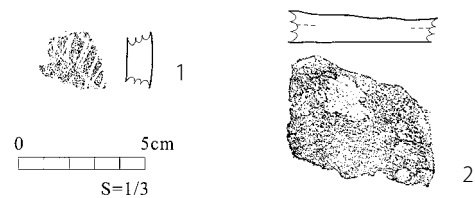
V層上面で確認した。

〔重複〕 Pit → SK71

〔規模・形状〕 平面形は直径145cmの円形を呈し、断面形は深さ18cmの皿状を呈する。

〔堆積土〕 地山・焼土粒を少量含む黒褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕 なし



No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SK55・堆	深鉢	網目状燃糸文(R)	076	31-22
2	B・SK55・堆	深鉢	無文(ミガキ)	077	31-23

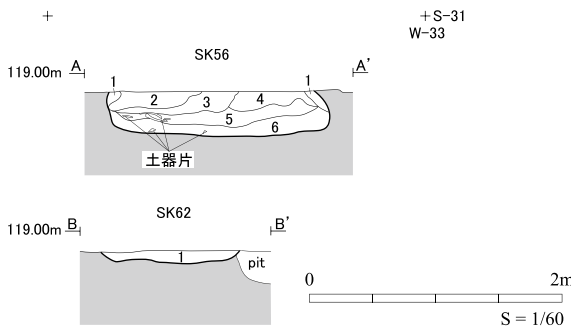
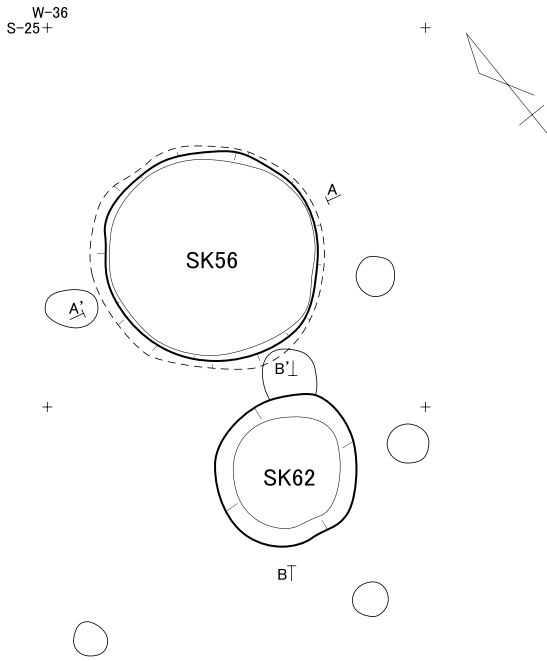
第70図 SK55 フラスコ状土坑出土遺物

【SK73 フラスコ状土坑】(第77・86図、写真図版12-7・8)

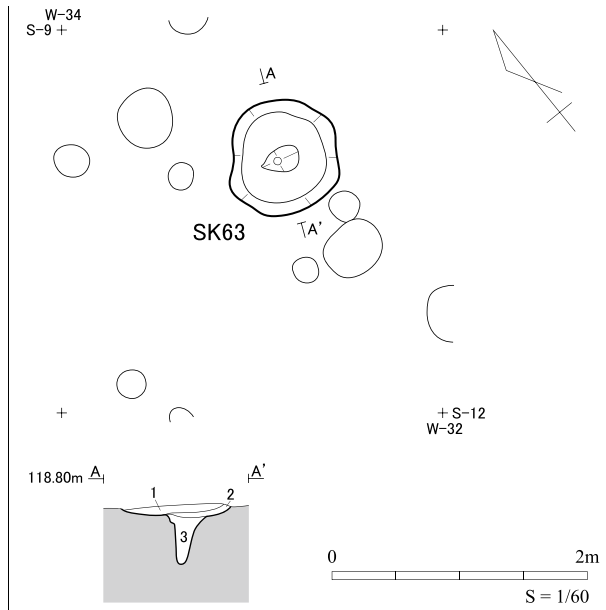
〔位置・確認面〕 B区西部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕 なし

〔規模・形状〕 平面形は直径130cmの円形を呈し、断面形は深さ20cmの逆台形を呈する。底面はほ



第72図 SK56・SK62 フラスコ状土坑



SK63 フラスコ状土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	地山粒を少量含む (人為)
2	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを多く含む (人為)
3	10YR4/6 褐	粘質シルト	地山粒主体 (人為)

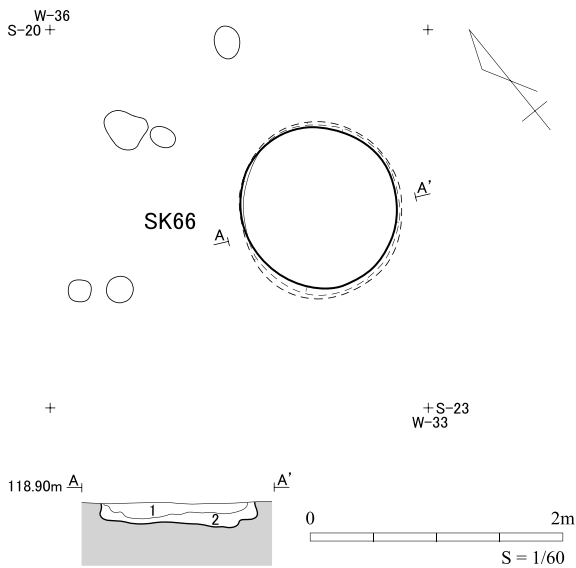
第71図 SK63 フラスコ状土坑

SK56 フラスコ状土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR4/6 褐	シルト	地山ブロックを極めて多量に含む (壁崩)
2	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を少量含む 炭化物片をわずかに含む (人為)
3	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ブロックを含む 焼土粒・炭化物粒を少量含む (人為)
4	10YR3/1 黒褐	シルト	地山ブロックを含む 焼土粒・炭化物粒を少量含む (人為)
5	10YR2/2 黒褐	シルト	土器片を多く含む 地山ブロックを含む 焼土粒・炭化物粒・砂を少量含む (人為)
6	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを含む 焼土粒・炭化物粒を少量含む (人為)

SK62 フラスコ状土坑 B-B'

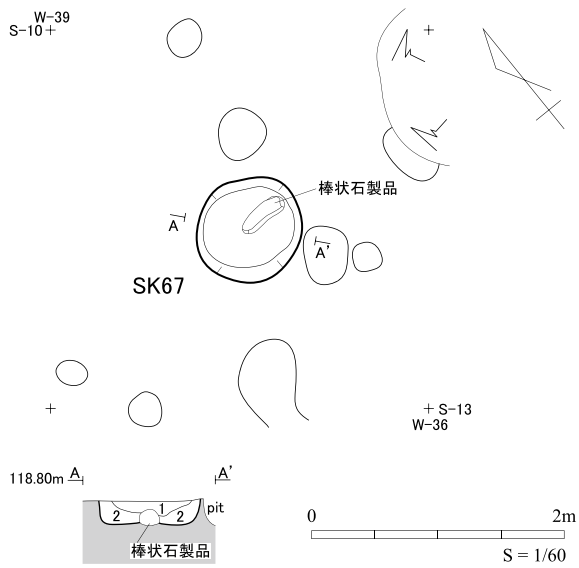
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを少量含む



SK66 フラスコ状土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒・炭化物粒を少量含む
2	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む

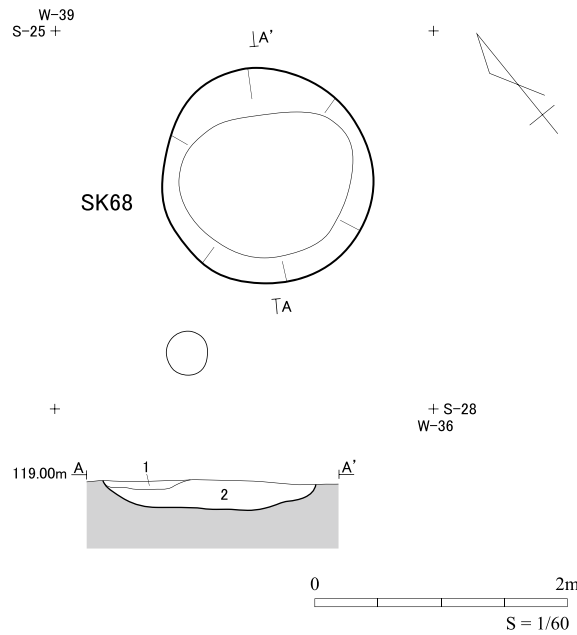
第73図 SK66 フラスコ状土坑



SK67 土坑 A-A'

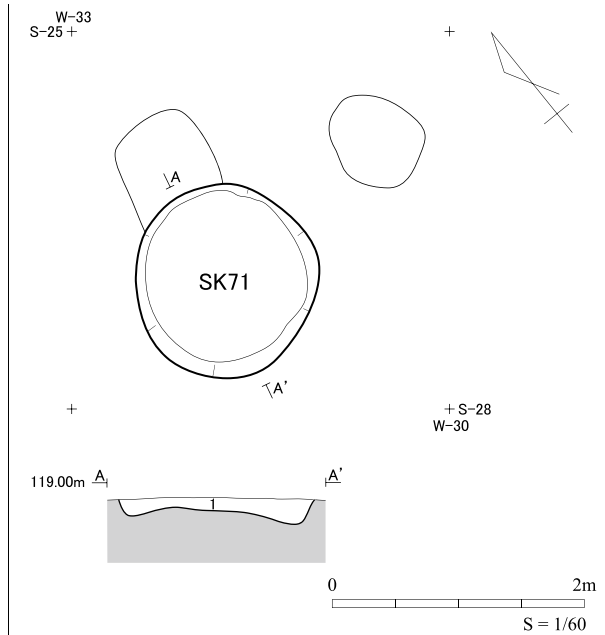
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	地山粒を少量含む (人為)
2	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを少量含む (人為)

第74図 SK67 フラスコ状土坑



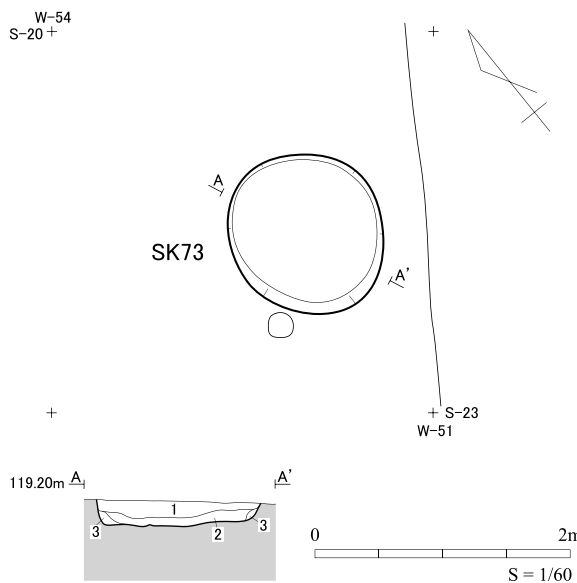
No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	地山粒を少量含む
2	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む (人為)

第75図 SK68 フラスコ状土坑



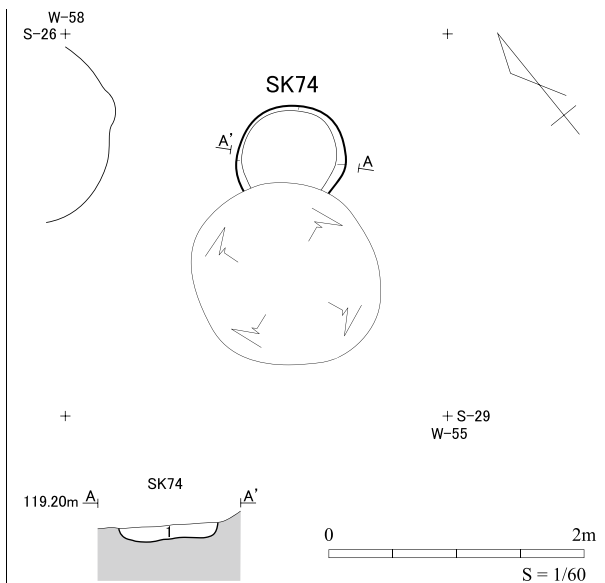
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒・焼土粒を少量含む

第76図 SK71 フラスコ状土坑



No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む (人為)
2	10YR2/1 黒	シルト	地山ブロックを含む (人為)
3	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を含む (壁崩)

第77図 SK73 フラスコ状土坑



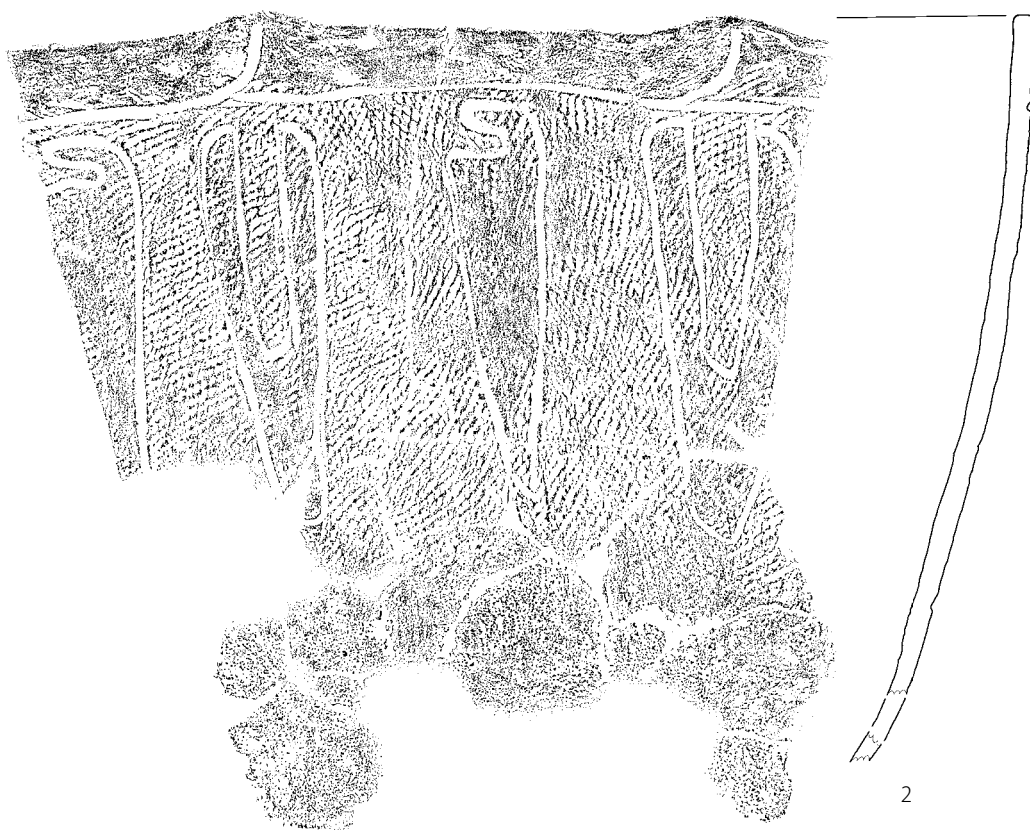
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを含む (人為)

第78図 SK74 フラスコ状土坑

ば平坦である。中心部のやや北寄りの位置で平面形が長軸 32cm、短軸 25cm の楕円形を呈し、深さ 15cm の小柱穴を確認した。

〔堆積土〕 3層に細分される。1層は地山ブロックを多量に含む黒褐色シルト、2層は地山ブロックを含む黒色シルト、3層は地山粒を含む黒褐色シルトである。1・2層は人為的埋土、3層は自然崩落土と考えられる。

〔出土遺物〕 堆積土より縄文土器深鉢（第86図）、剥片などが出土した。



0 10cm  
S=1/3

No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SK56・堆	深鉢	磨消縄文 (LR)、平行沈線文、一部ミガキ、底面：無文 (ミガキ)	207	32-2
2	B・SK56・堆	深鉢	入組沈線文、磨消縄文 (LR)、藏手文、U字状文、【胎土分析-05】	208	32-1

第79図 SK56 フラスコ状土坑出土遺物 (1)





No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1～5	B・SK56・堆	深鉢	擦糸文(LR)	209	33-1	14	B・SK56・堆	鉢?	隆線文、沈線文、縄文(L)、摩滅	217	33-8
6	B・SK56・堆	深鉢	沈線文、磨消縄文(LR)、蕨手文	211	33-3	15	B・SK56・堆	深鉢	磨消縄文(LR)、蕨手文	222	33-9
7	B・SK56・堆	深鉢	刻目付隆線文、縄文(LR)	210	33-2	16	B・SK56・堆	深鉢	磨消縄文(LR)、沈線文	221	33-10
8	B・SK56・堆	深鉢	沈線文、縄文(LR)	212	33-4	17	B・SK56・堆	深鉢	磨消縄文(LR)、沈線文	223	33-11
9	B・SK56・堆	深鉢	沈線文、縄文(LR)	213	33-5	18	B・SK56・堆	深鉢	磨消縄文(LR)、沈線文	224	33-12
10	B・SK56・堆	深鉢	環状把手	215	33-6	19	B・SK56・堆	深鉢	縄文(R)→沈線文	225	-
11	B・SK56・堆	深鉢	縄文(R)	214	-	20	B・SK56・堆	深鉢	隆線文、縄文(LR)、摩滅	230	-
12・13	B・SK56・堆	深鉢	擦糸文(R)→沈線文、円形刺突、ジグザグ文	216	33-7						

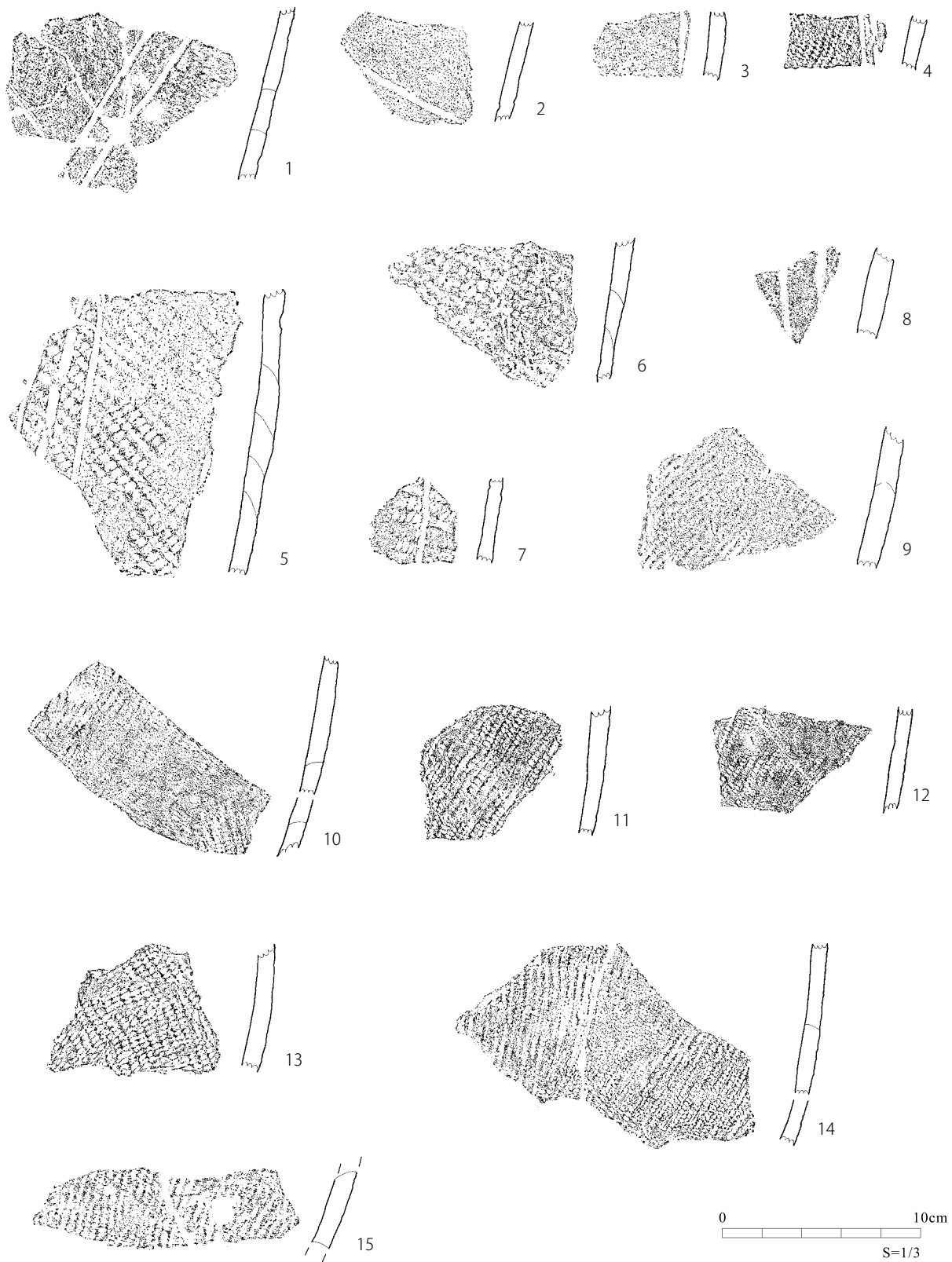
第80図 SK56 フラスコ状土坑出土遺物(2)

【SK74 フラスコ状土坑】(第78図、写真図版13-1)

〔位置・確認面〕B区西部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

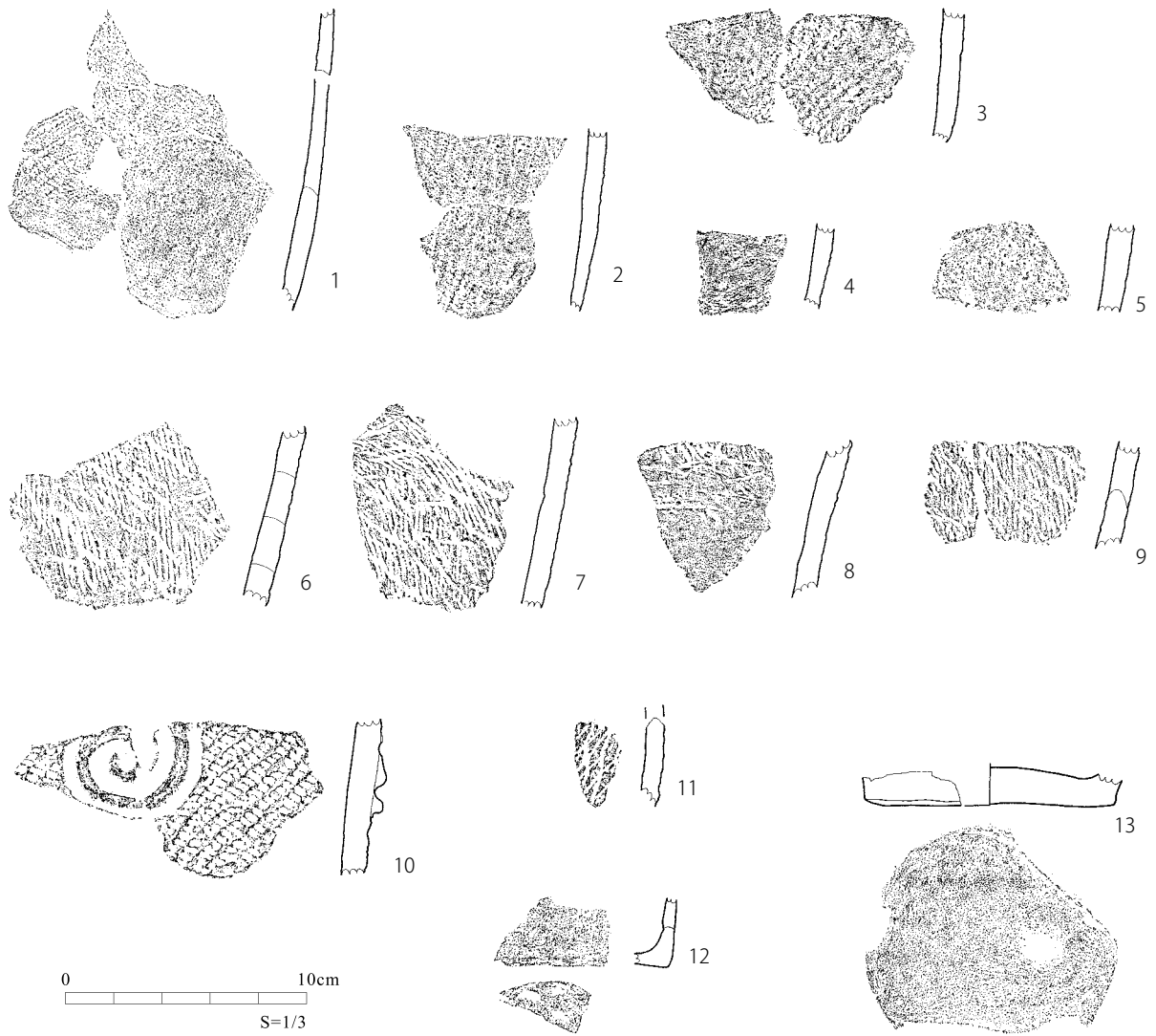
〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸86cm、短軸64cm以上の略円形を呈し、断面形は深さ12cmの逆台形を呈する。底面はほぼ平坦である。



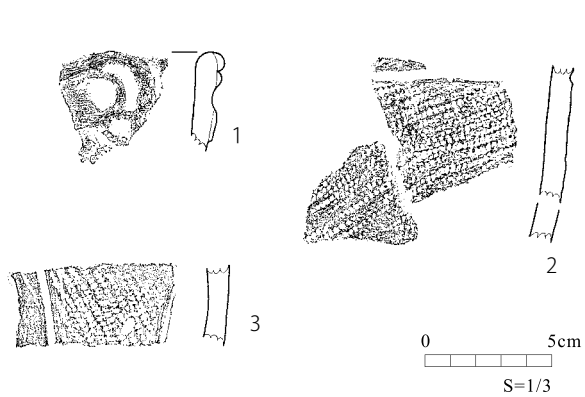
No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1~3	B・SK56・堆	深鉢	沈線文、摩滅	226	33-13	11	B・SK56・堆	深鉢	縄文(LR)	236	33-17
4	B・SK56・堆	深鉢	縄文(LR)→沈線文、鎖状沈線文	227	-	12	B・SK56・堆	深鉢	縄文(LR)	237	33-18
5~7	B・SK56・堆	深鉢	縄文(LR、太い原体)→沈線文、鎖状沈線文	228	33-14	13	B・SK56・堆	深鉢	縄文(RL)	235	33-19
8・9	B・SK56・堆	深鉢	縄文(L)→沈線文、摩滅	231	33-15	14	B・SK56・堆	深鉢	縄文(LR)	234	34-1
10	B・SK56・堆	深鉢	縄文(LR)	232	33-16	15	B・SK56・堆	深鉢	縄文(LR)、摩滅	233	34-2

第81図 SK56 フラスコ状土坑出土遺物(3)



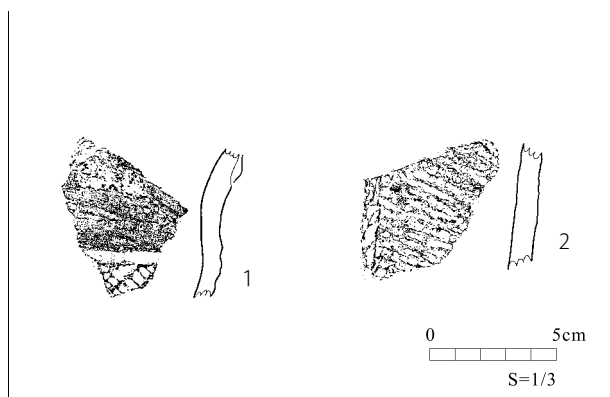
No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1~5	B・SK56・堆	深鉢	縄文(LR)	238	34-3	11	B・SK56・堆	深鉢	網目状撫糸文(R)	219	-
6~9	B・SK56・堆	深鉢	撫糸文(R)、結節文	229	34-4	12	B・SK56・堆	深鉢	無文(ミガキ)、底面：網代痕	240	-
10	B・SK56・堆	深鉢	縄文(RL)、渦巻状隆線文	218	34-5	13	B・SK56・堆	深鉢	底面：無文(ミガキ)	239	34-6

第 82 図 SK56 フラスコ状土坑出土遺物 (4)



No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SK62・堆	深鉢	逆C字状隆沈線文、円形刺突、磨消縄文(R)	078	34-7
2	B・SK62・堆+確	深鉢	縄文(LR)→沈線文	079	34-8
3	B・SK62・堆	深鉢	磨消縄文(LR)、沈線文	080	34-9

第 83 図 SK62 フラスコ状土坑出土遺物



No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SK66・堆	深鉢	隆線文、沈線文、縄文(LR)	082	34-11
2	B・SK66・堆	深鉢	縄文(LR?)、押圧縄文(撫糸文LR?)	083	34-12

第 84 図 SK66 フラスコ状土坑出土遺物

〔堆積土〕地山ブロックを含む黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

【SK76 フラスコ状土坑】（第87・89図、写真図版13-2）

〔位置・確認面〕B区西部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸98cm、短軸90cmの略円形を呈し、断面形は深さ17cmの逆台形を呈する。底面はほぼ平坦で、中央部に直径10cm、深さ5cmほどの窪みがある。

〔堆積土〕2層に細分される。1層は地山粒を含む黒褐色シルト、2層は地山ブロックを多く含む灰黄褐色シルトで、いずれも人為的埋土と考えられる。

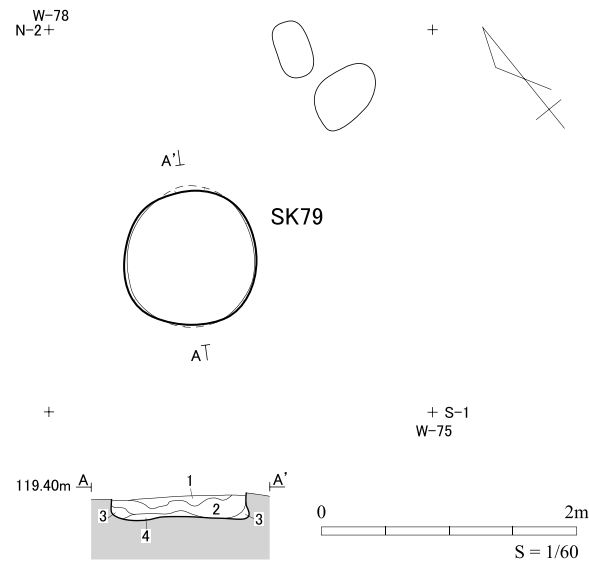
〔出土遺物〕堆積土より縄文土器深鉢（第87図）などが出土した。

【SK79 フラスコ状土坑】（第88・92図、写真図版13-3・4）

〔位置・確認面〕B区西部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕なし

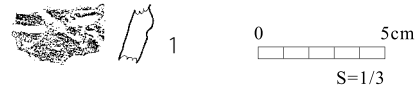
〔規模・形状〕平面形は直径105cmの円形を呈し、



SK79 フラスコ状土坑 A-A'

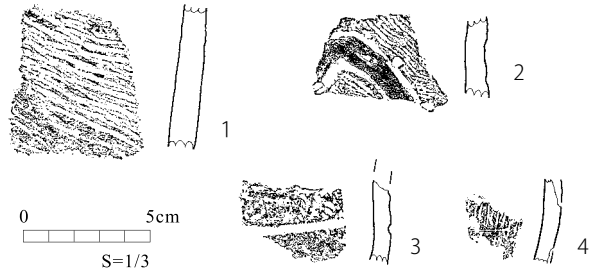
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	土器片・地山粒を含む（人為）
2	10YR3/1 黒褐	シルト	地山粒を含む 焼土粒をごくわずかに含む（人為）
3	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む（壁崩）
4	10YR4/1 灰褐	シルト	地山ブロックを含む

第88図 SK79 フラスコ状土坑



第85図 SK63 フラスコ状土坑出土遺物

No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SK63・堆	深鉢	頸状沈線文	081	34-10

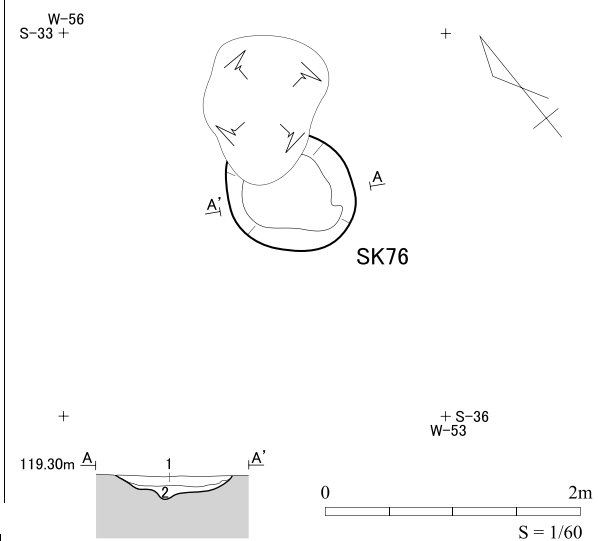
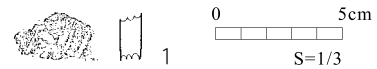


第86図 SK73 フラスコ状土坑出土遺物

No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SK73・堆	深鉢	撫糸文（R）	086	34-13
2	B・SK73・堆	深鉢	沈線文、撫糸文（R）、磨消縄文	087	34-14
3	B・SK73・堆	深鉢	縄文（LR）→沈線文	088	34-15
4	B・SK73・堆	深鉢	撫糸文（R）	089	34-16

No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SK76・堆	深鉢	縄文（LR）	090	34-17

第87図 SK76 フラスコ状土坑出土遺物



SK76 フラスコ状土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを少量含む（人為）
2	10YR5/2 灰黄褐	シルト	地山ブロックを多く含む（人為）

第89図 SK76 フラスコ状土坑

断面形は深さ 19cm の台形を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕 4層に細分される。1層は地山粒を含む黒色シルト、2層は地山小ブロック・焼土粒を少量含む黒褐色シルト、3層は地山ブロックを多く含む黒褐色シルト、4層は地山ブロックを含む灰褐色シルトである。1・2層は人為的埋土、3層は自然崩落土、4層は自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕 確認面、堆積土（主に1層）より縄文土器深鉢（第92図）、二次加工剥片（第149図9）、剥片などが出土した。

【SK82 フラスコ状土坑】（第90・93図、写真図版13-5・6）

〔位置・確認面〕 B区西部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕 なし

〔規模・形状〕 平面形は確認面で直径135cm、最大径で150cmの円形を呈し、断面形は深さ38cmの台形を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕 5層に細分される。1層は地山ブロック・焼土粒を少量含む黒褐色シルト、2層は地山ブロック・炭化物粒を少量含む黒褐色シルト、3層は多量の地山ブロックと少量の炭化物粒を含む暗褐色シルト、4層は地山ブロックを含む黒色シルト、5層は地山ブロックを多量に含む褐色シルトである。1～3層は人為的埋土、4層は自然崩落土、5層は自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕 堆積土より縄文土器深鉢（第93図）、二次加工剥片（第150図8）、剥片などが出土した。

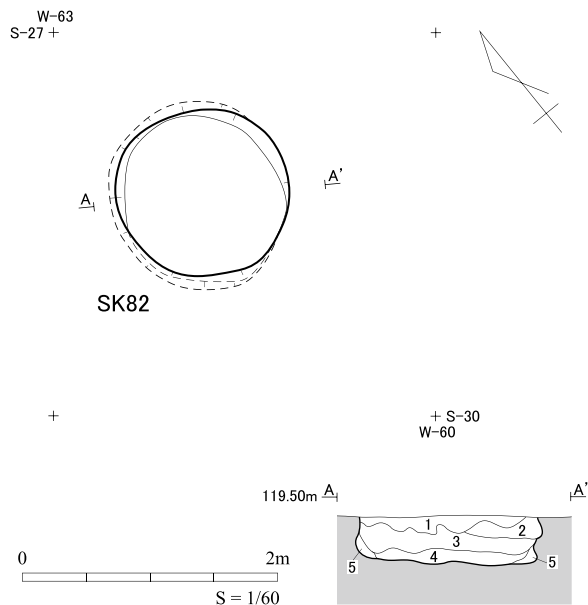
【SK83 フラスコ状土坑】（第91・96図、写真図版13-7・8）

〔位置・確認面〕 B区西部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕 なし

〔規模・形状〕 平面形は確認面で直径110cm、最大径で138cmの円形を呈し、断面形は深さ38cmの台形を呈する。底面はほぼ平坦である。

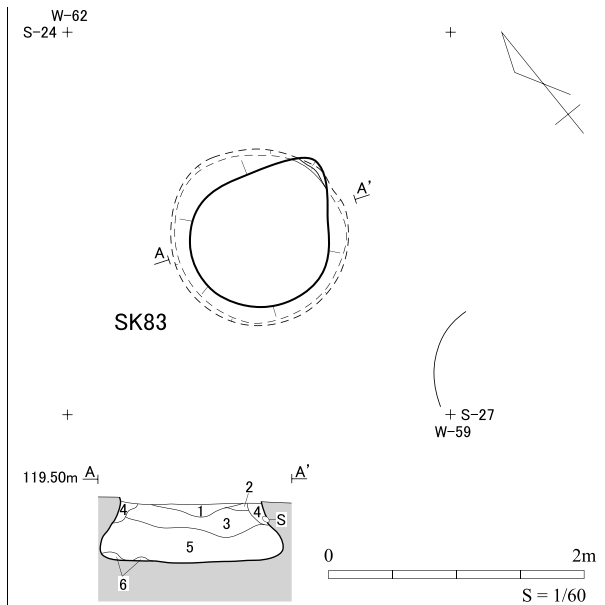
〔堆積土〕 6層に細分される。1層は地山粒をわずかに含む黒色シルト、2層は地山ブロック・焼土粒を



SK82 フラスコ状土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを少量含む 焼土粒をごくわずかに含む (人為)
2	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを少量含む 炭化物粒をごくわずかに含む (人為)
3	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ブロックを多量に含む 炭化物粒を含む (人為)
4	10YR2/1 黒	シルト	地山ブロックを含む
5	10YR4/6 褐	シルト	地山ブロックを極めて多量に含む (壁崩)

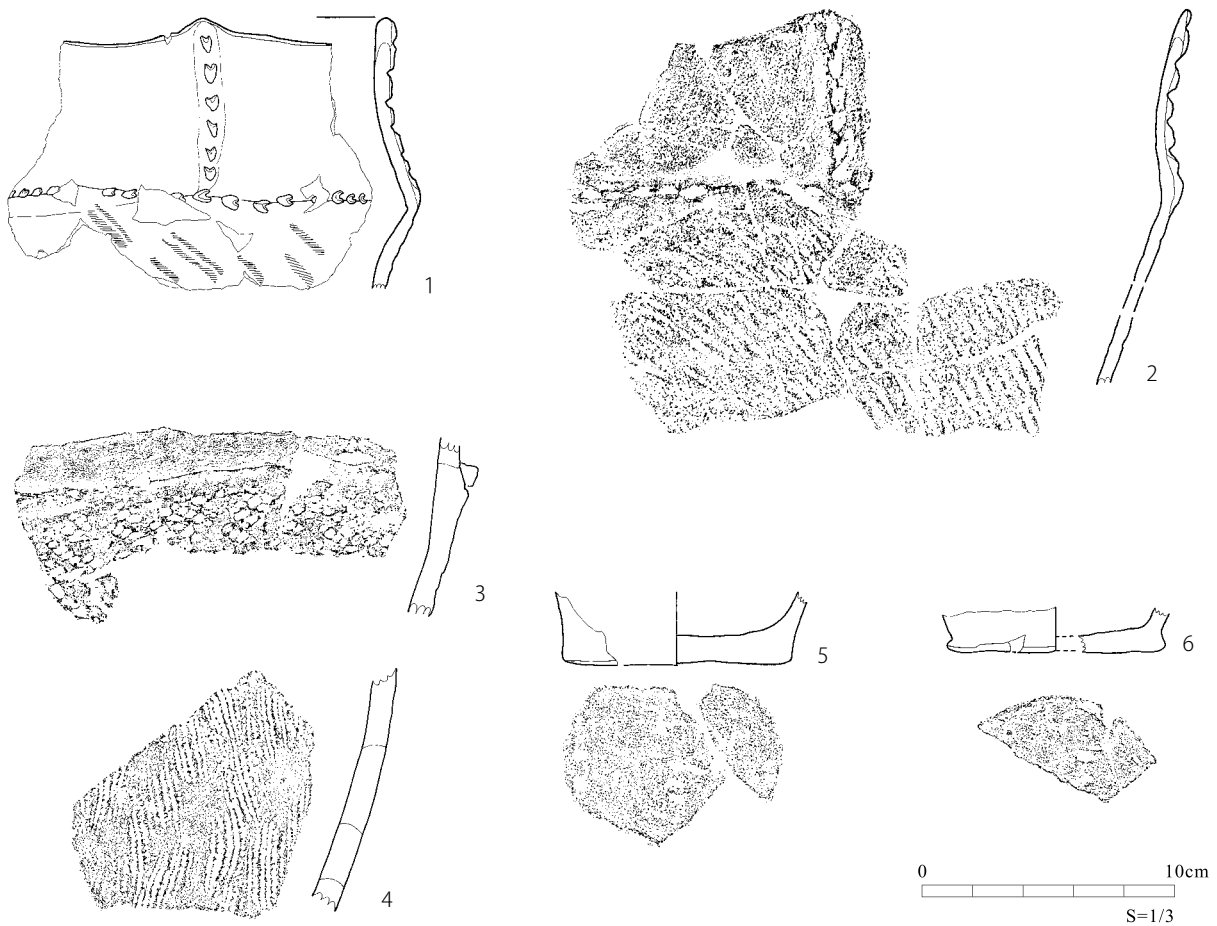
第90図 SK82 フラスコ状土坑



SK83 フラスコ状土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山粒をごくわずかに含む (人為)
2	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒を含む 焼土粒をごくわずかに含む (人為)
3	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を少量含む (人為)
4	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む 焼土粒をごくわずかに含む (壁崩)
5	10YR2/1 黒	シルト	地山ブロックを少量含む (人為)
6	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ブロックを多量に含む (壁崩)

第91図 SK83 フラスコ状土坑



No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1・2	B・SK79・堆1+確	深鉢	刺突入隆線文(縦・横)、縄文(L)、 【年代測定-10】、【胎土分析-04】	118	35-1	5	B・SK79・堆1	深鉢	胴部：無文(ミガキ)、底面：網代痕→ミガキ	121	35-4
3	B・SK79・確	深鉢	隆線文、縄文(LR)	119	35-2	6	B・SK79・堆1	深鉢	胴部：無文(ミガキ、ナデ)、 底面：網代痕→ミガキ	122	-
4	B・SK79・堆1	深鉢	縄文(LR)	120	35-3						

第92図 SK79 フラスコ状土坑出土遺物

少量含む黒褐色シルト。3層は地山粒を少量含む黒褐色シルト、4層は地山ブロック・焼土粒を少量含む黒褐色シルト、5層は地山ブロックを含む黒色シルト、6層は地山ブロックを多量に含む暗褐色シルトである。1～3・5層は人為的埋土、4・6層は自然崩落土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土より縄文土器深鉢(第96図)が出土した。

【SK87 フラスコ状土坑】(第94・97図、写真図版14-1・2)

〔位置・確認面〕B区西部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は確認面で直径150cm、最大径で161cmの円形を呈し、断面形は深さ27cmの台形を呈する。底面はほぼ平坦である。

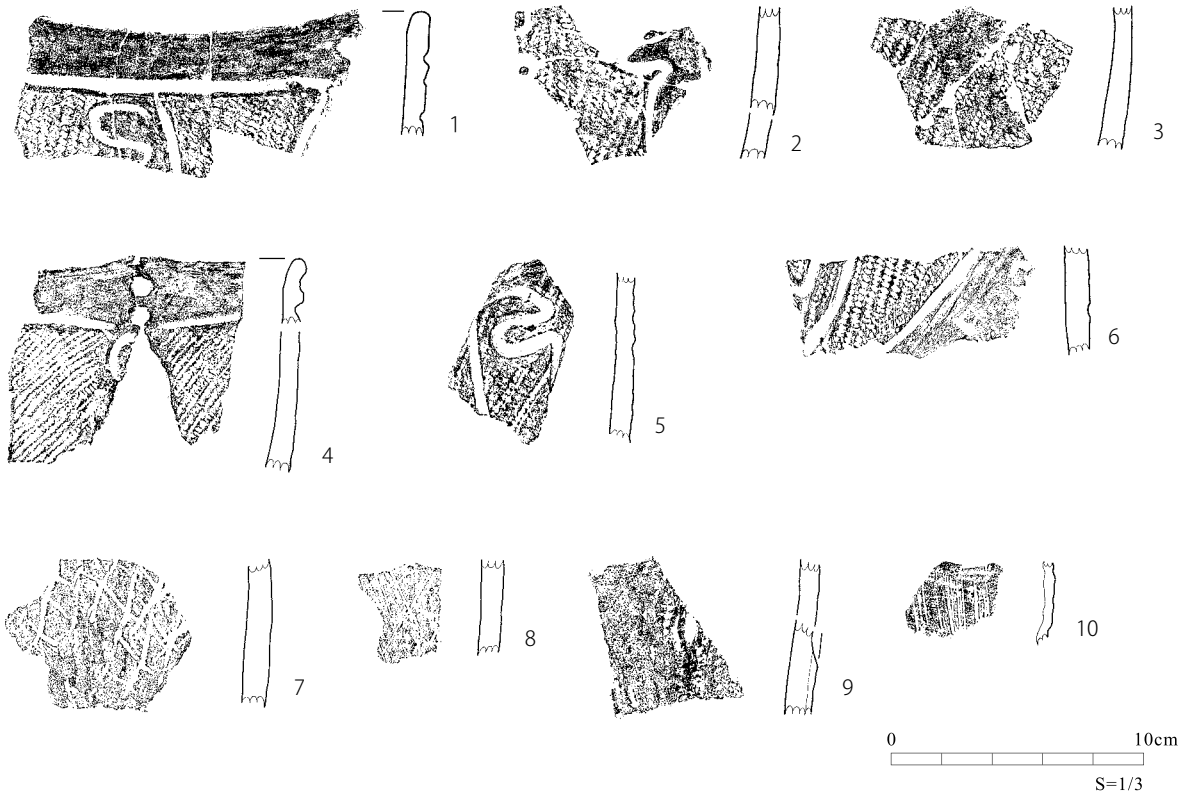
〔堆積土〕5層に細分される。1層は地山粒を少量含む黒色シルト、2層は地山ブロックを主体とする灰褐色シルト、3層は地山ブロックを含む黒褐色シルト、4層は地山粒を含む黒褐色シルト、5層は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。1層は自然堆積土、2層は自然崩落土、3・4層は人為的埋土、5層は自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土より縄文土器深鉢(第97図)、土器片加工円板(第146図4)などが出土した。

【SK89 フラスコ状土坑】(第95・100図、写真図版14-3・4)

〔位置・確認面〕B区西部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

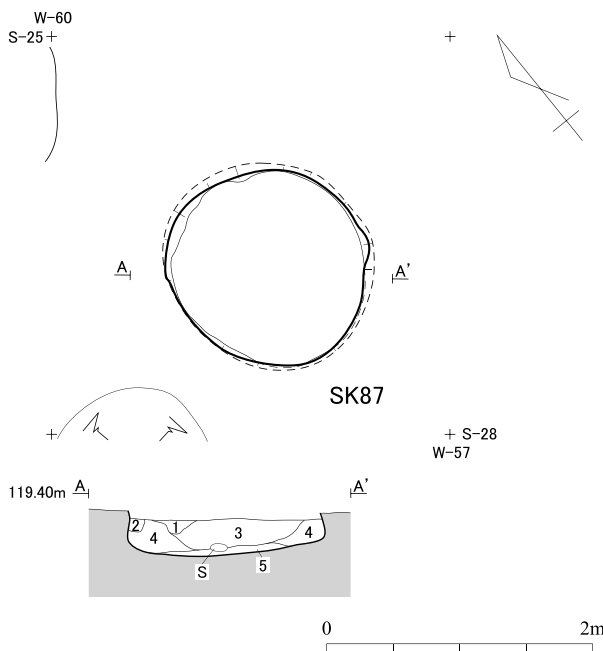
〔重複〕なし



No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1~3	B・SK82・堆	深鉢	円形盲孔、沈線文、蕨手文、磨消縄文 (LR)、内面：炭化物付着	123	35-5
4	B・SK82・堆	深鉢	円形盲孔、沈線文、縄文 (LR-0 段多条)	124	35-6
5	B・SK82・堆	深鉢	磨消縄文 (LR)、蕨手文	125	35-7
6	B・SK82・堆	深鉢	磨消縄文 (LR)、沈線文	126	35-8

No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
7	B・SK82・堆	深鉢	網目状撫糸文 (R)	127	35-9
8	B・SK82・堆	深鉢	格子状櫛描文	128	35-10
9	B・SK82・堆	深鉢	磨消縄文 (LR)、刻目付隆線文	129	35-11
10	B・SK82・堆	深鉢	櫛描文	130	35-12

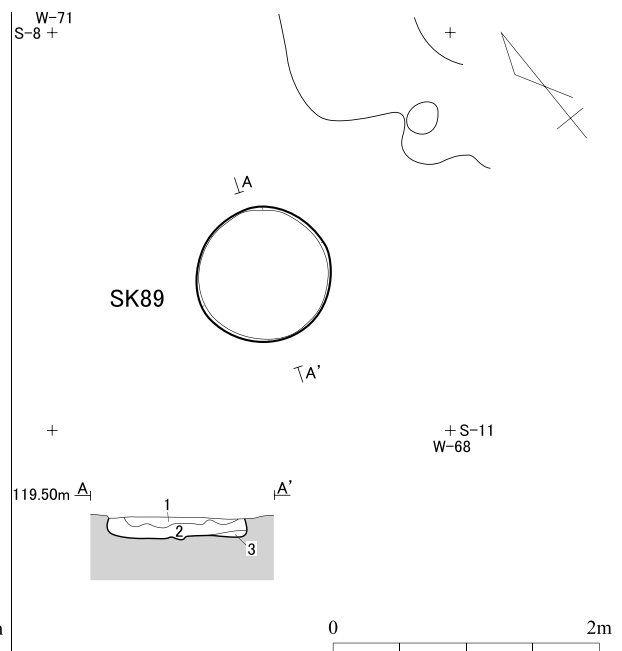
第93図 SK82 フラスコ状土坑出土遺物



SK87 フラスコ状土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山粒を少量含む
2	10YR4/2 灰褐	シルト	地山ブロック主体 (壁崩)
3	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む (人為)
4	10YR3/1 黒褐	シルト	地山粒を含む (人為)
5	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む

第94図 SK87 フラスコ状土坑



SK89 フラスコ状土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒・焼土粒をわずかに含む (人為)
2	10YR3/4 暗褐	粘質シルト	地山ブロックを少量含む (人為)
3	10YR4/6 褐	粘質シルト	地山ブロックを多量に含む (壁崩)

第95図 SK89 フラスコ状土坑

〔規模・形状〕平面形は確認面で直径 100cm、最大径で 105cm の円形を呈し、断面形は深さ 16cm の台形を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕3層に細分される。1層は地山地山・焼土粒をわずかに含む黒褐色シルト、地山ブロックを少量含む暗褐色シルト、3層は地山ブロックを多量に含む褐色シルトである。1・2層は人為的埋土、3層は自然崩落土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土より縄文土器深鉢（第 100 図）などが出土した。

【SK90 フラスコ状土坑】（第 98・101 図、写真図版 14 - 5）

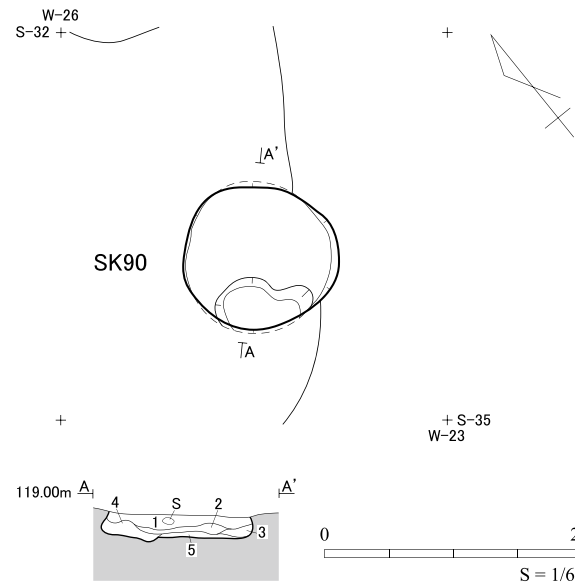
〔位置・確認面〕B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕SI65 → SK90

〔規模・形状〕平面形は確認面で直径 111cm、最大径で 118cm の円形を呈し、断面形は深さ 20cm の台形を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕5層に細分される。1層は地山・焼土・炭化物粒を少量含む黒褐色シルト、2層は地山ブロック、焼土・炭化物粒を少量含む黒褐色シルト、3層は地山ブロックを少量含む暗褐色シルト、4層は地山ブロックを含む暗褐色シルト、5層は地山ブロックを含む褐灰色シルトである。1～3層は人為的埋土、4・5層は自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土より縄文土器鉢（第 101 図 8）、深鉢（第 101 図 1～7）、剥片、磨石（第 161 図 2・3）、石皿（第 166 図 2・3）などが出土した。第 101 図 2 は同一個体とみられる破片が SI65 竪穴住居跡堆積土より出土している。



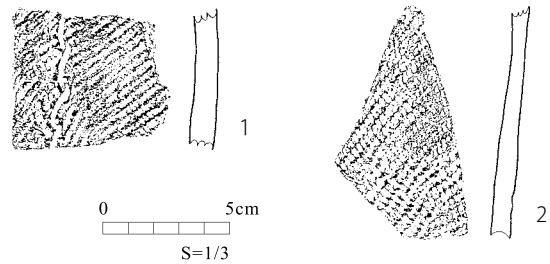
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒を含む 焼土粒・炭化物をごくわずかに含む(人為)
2	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む 焼土粒をごくわずかに含む(人為)
3	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ブロックを少量含む(人為)
4	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ブロックを含む
5	10YR5/1 褐灰	シルト	地山ブロックを含む

第 98 図 SK90 フラスコ状土坑



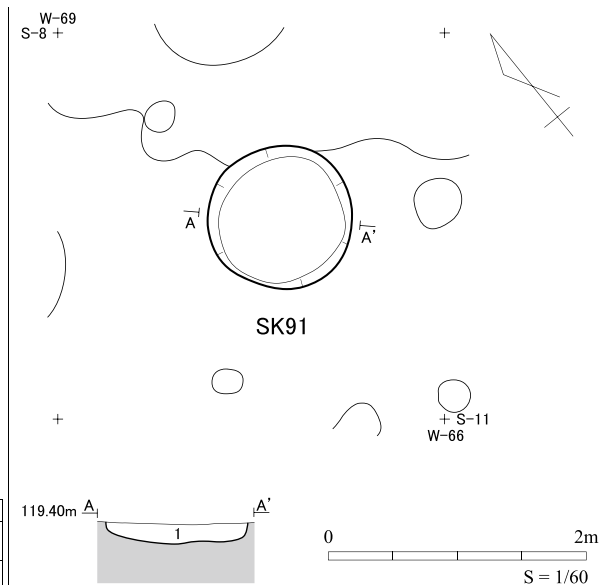
No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SK83・堆	深鉢	沈線紋、縄文 (RL)	095	35-13

第 96 図 SK83 フラスコ状土坑出土遺物



No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SK87・堆	深鉢	縄文 (LR+結節文)	096	35-14
2	B・SK87・堆	深鉢	縄文 (LR)	097	35-15

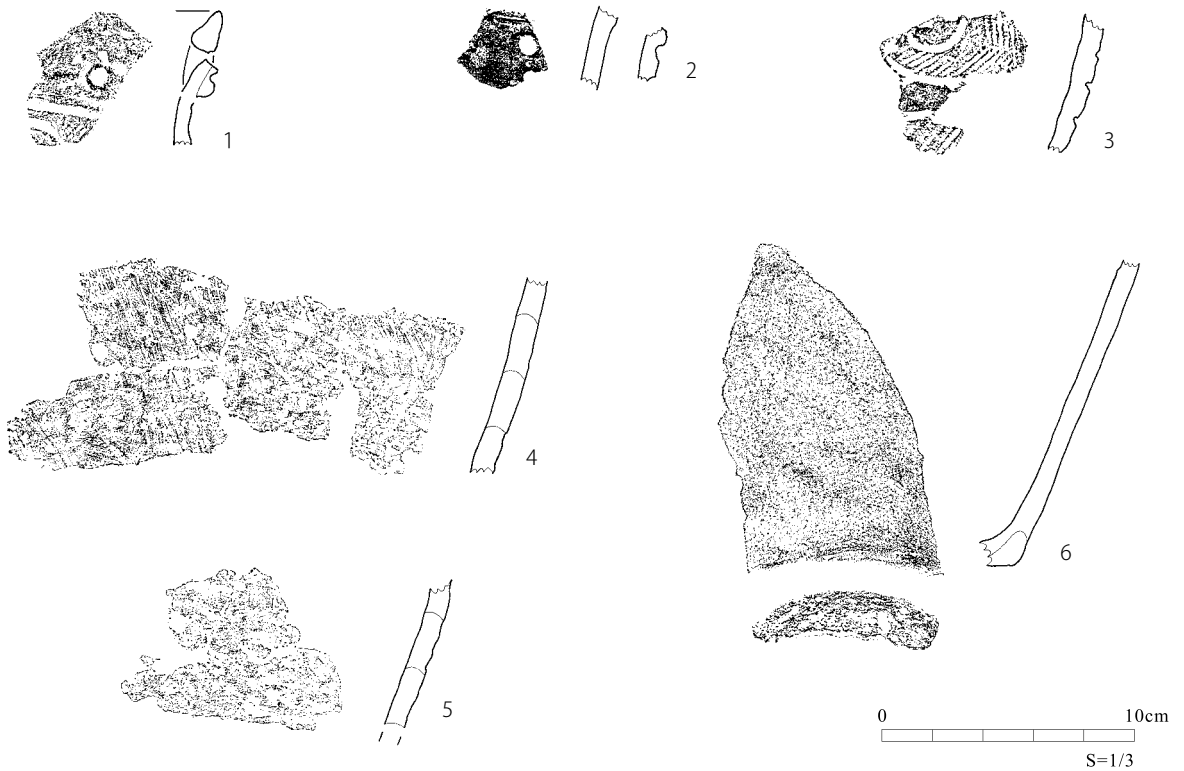
第 97 図 SK87 フラスコ状土坑出土遺物



No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む(人為)

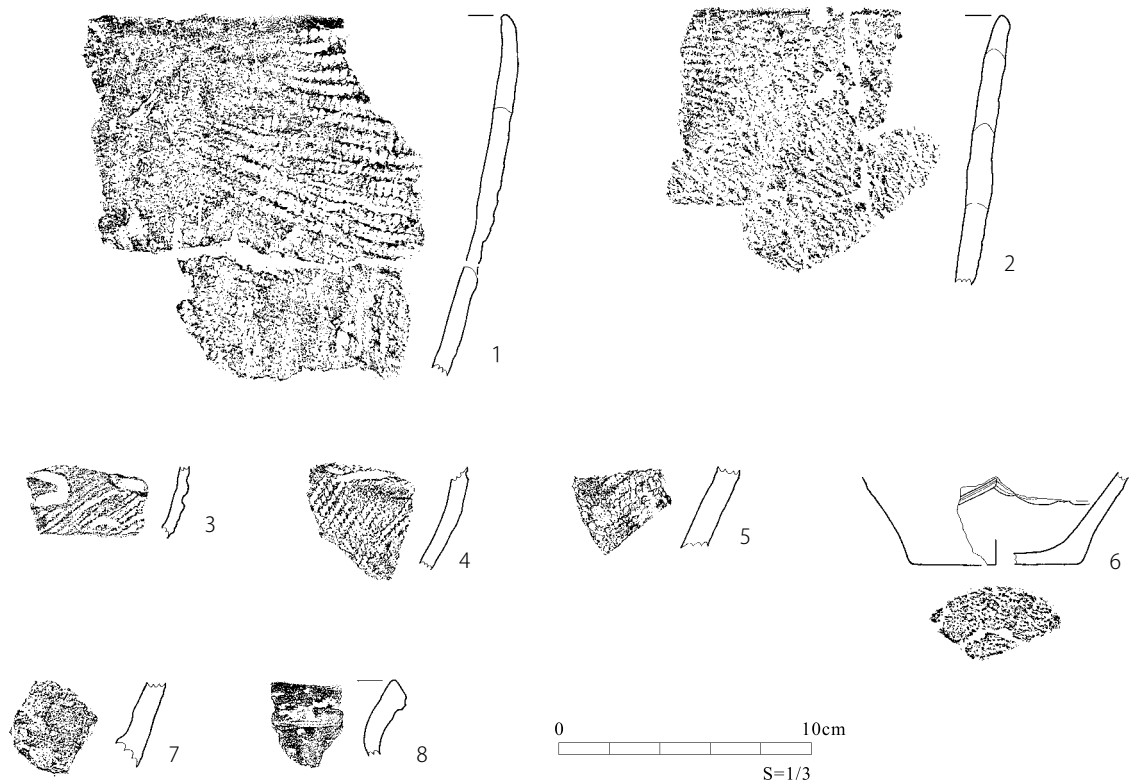
第 99 図 SK91 フラスコ状土坑





No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SK89・堆	深鉢	ボタン状貼付文、磨消縄文 (LR)、沈線文、内面：隆帯貼付	146	36-1	3	B・SK89・堆	深鉢	羽状縄文 (LR/RL)、沈線文	148	36-3
2	B・SK89・堆	深鉢	円形刺突	147	36-2	4・5	B・SK89・堆	深鉢	櫛描文	149	36-4
						6	B・SK89・堆	深鉢	胴部：無文 (ミガキ)、底面：摩滅	150	-

第100図 SK89 フラスコ状土坑出土遺物



No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SK90・堆2	深鉢	縄文 (LR)	151	36-5	5	B・SK90・堆2	深鉢	縄文 (LR)	155	-
2	B・SK90・堆2	深鉢	撚糸文 (R)	152	36-6	6	B・SK90・堆2	深鉢	胴部：沈線文、底面：無文、摩滅	156	-
3	B・SK90・堆2	深鉢	縄文 (L) → 沈線文、外面：赤彩	153	36-7	7	B・SK90・堆	深鉢	縄文 (R)	157	-
4	B・SK90・堆2	深鉢	縄文 (LR) → 沈線文	154	-	8	B・SK90・堆	鉢	無文 (ミガキ)	158	-

第101図 SK90 フラスコ状土坑出土遺物

【SK91 フラスコ状土坑】(第99・102図、写真図版14-6・7)

〔位置・確認面〕B区西部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕SK91 → SI16

〔規模・形状〕平面形は直径110cmの円形を呈し、断面形は深さ15cmの逆台形を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕地山ブロックを含む黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

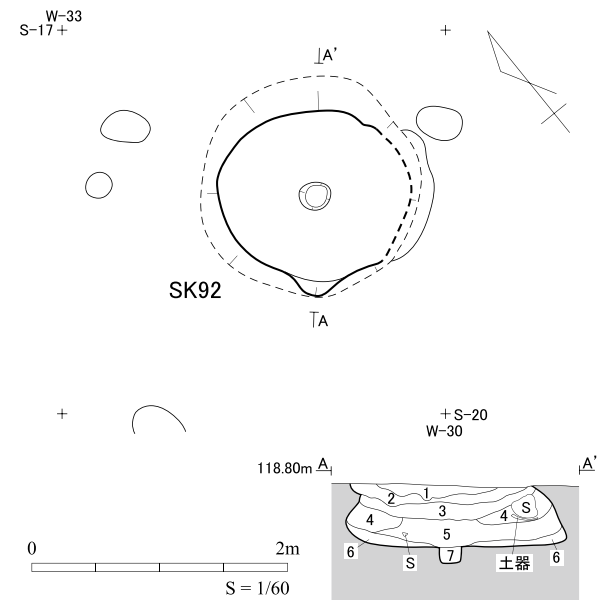
〔出土遺物〕堆積土より縄文土器深鉢(第102図)、ピエス・エスキーユ(第149図4)が出土した。

【SK92 フラスコ状土坑】(第104・106～108図、写真図版14-8、15-1～4)

〔位置・確認面〕B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕SK92 → SK6

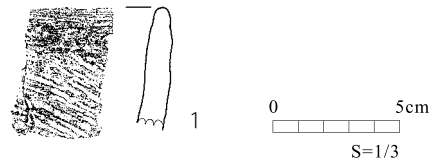
〔規模・形状〕平面形は確認面で直径136cm、最大径で176cmの円形を呈し、断面形は深さ46cmの台形を呈する。底面はほぼ平坦である。中央部で平面形が直径22cmの円形を呈し、深さ13cm



SK92 フラスコ状土坑 A-A'

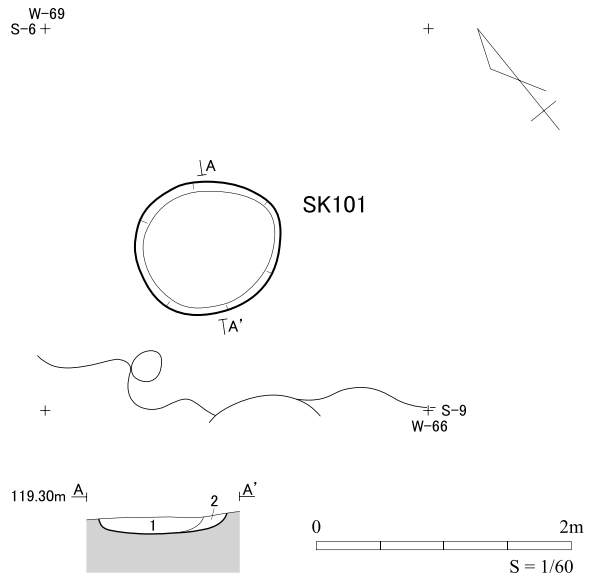
No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ブロックを多量に含む 炭化物粒を少量含む(人為)
2	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む 炭化物粒を少量含む(人為)
3	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ブロックを多量に含む 炭化物粒を少量含む(人為)
4	10YR2/3 黒褐	シルト	地山小ブロックを含む 炭化物粒・焼土粒を少量含む(人為)
5	10YR3/3 暗褐	シルト	地山粒・炭化物粒を含む(人為)
6	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを含む
7	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む

第104図 SK92 フラスコ状土坑出土遺物



No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SK91・堆	深鉢	縄文(L)	099	36-8

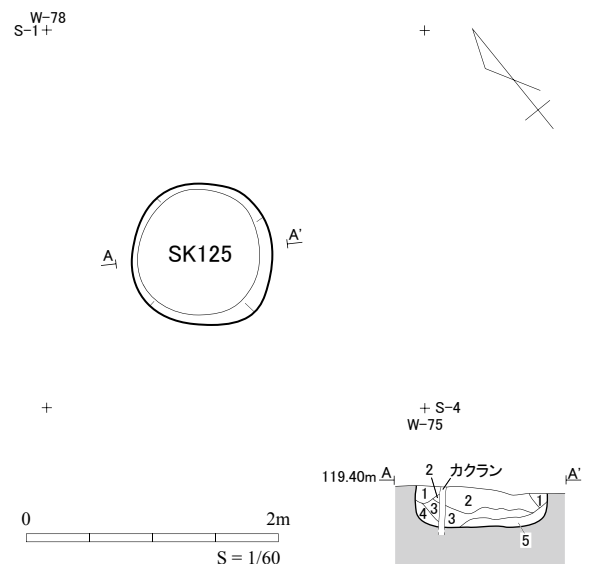
第102図 SK91 フラスコ状土坑出土遺物



SK101 フラスコ状土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを含む 焼土粒・炭化物粒・砂を少量含む
2	10YR2/3 黒褐	シルト	地山小ブロックを含む

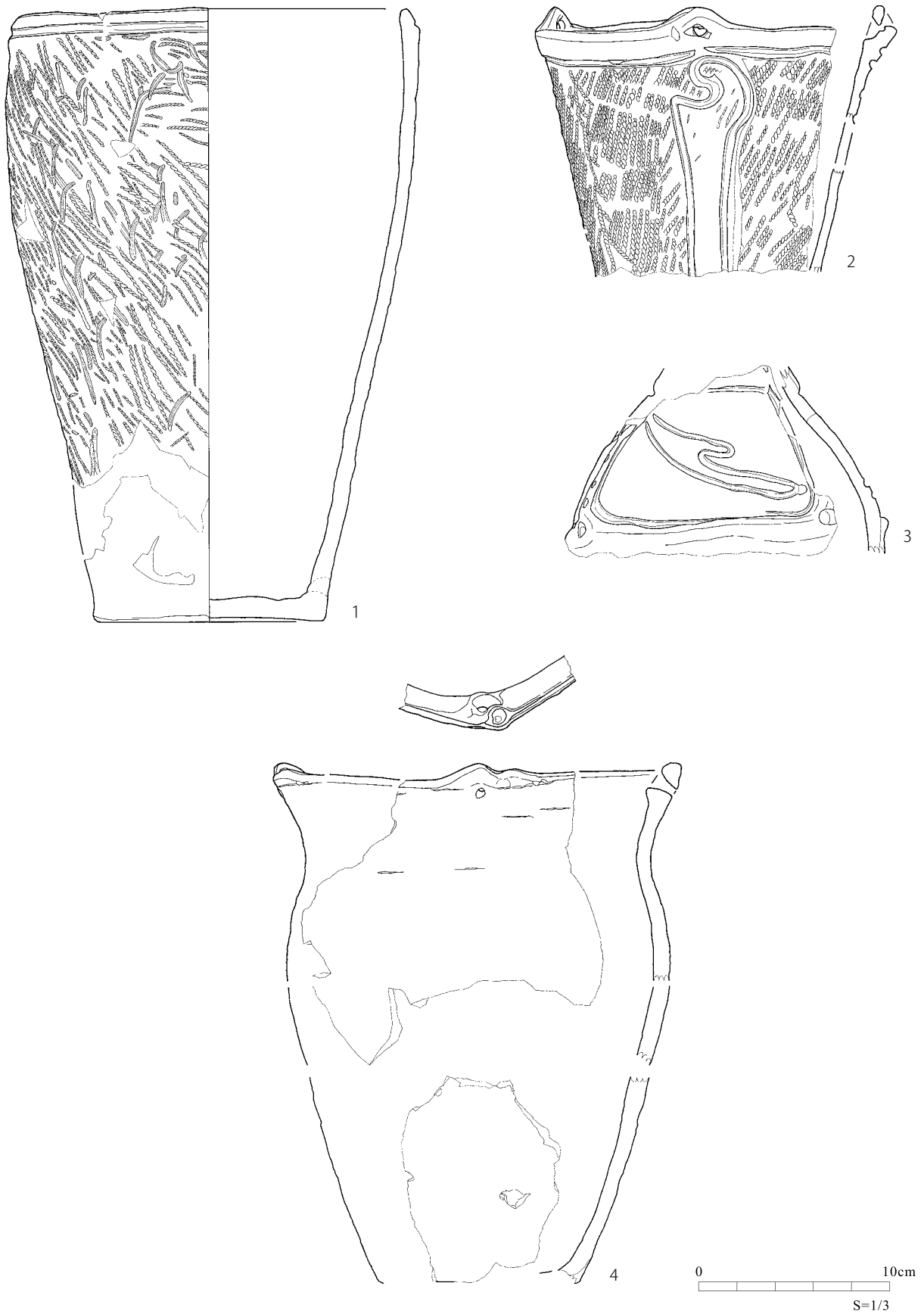
第103図 SK101 フラスコ状土坑出土遺物



SK125 フラスコ状土坑 A-A'

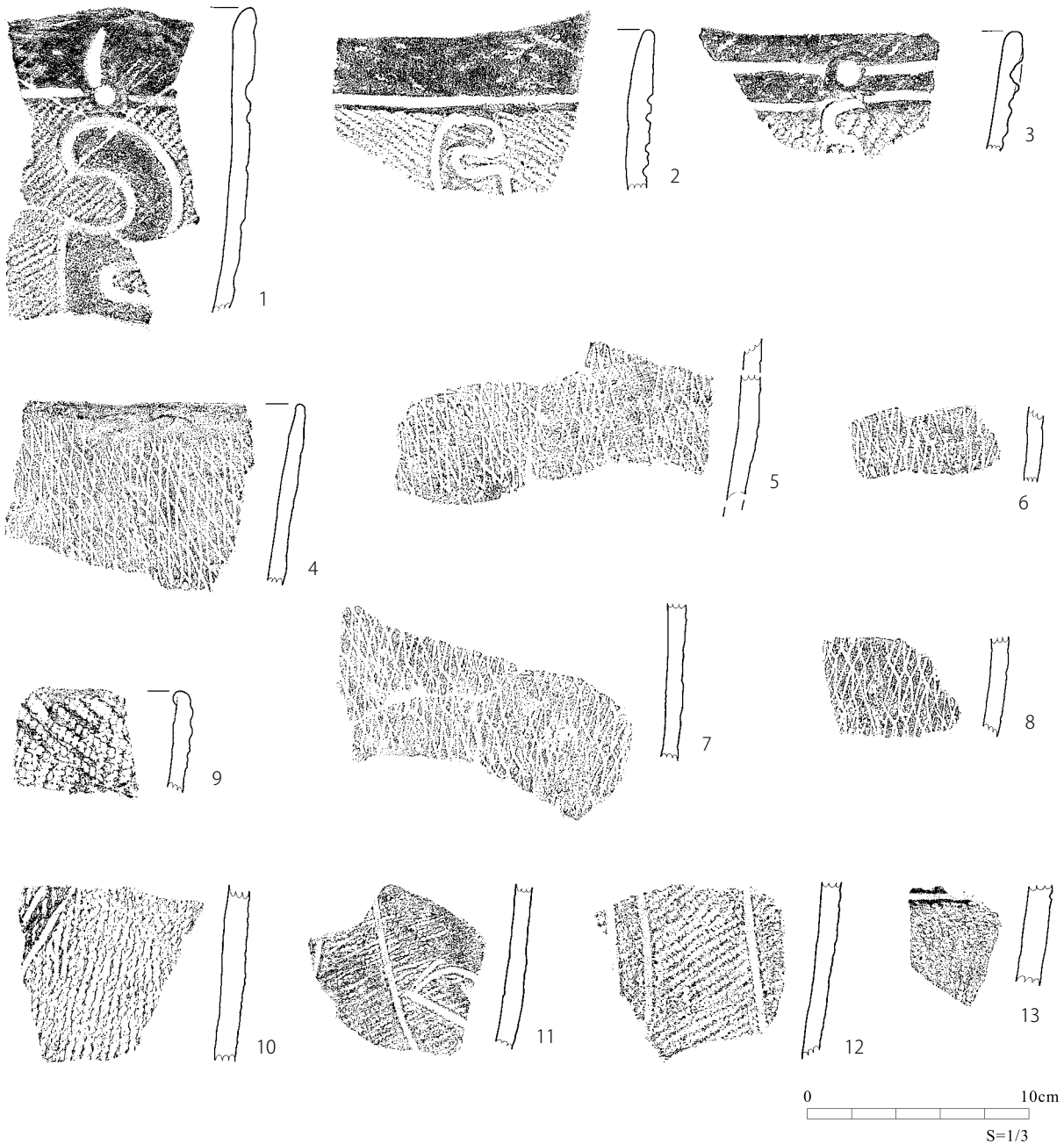
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	ブロックを多く含む(壁崩)
2	10YR2/1 黒	シルト	地山粒を含む 炭化物粒を少量含む
3	10YR2/3 黒	シルト	地山粒を含む
4	10YR4/2 灰黄褐	シルト	地山ブロックを多量に含む(壁崩)
5	10YR4/2 灰黄褐	シルト	地山ブロックを含む(壁崩)

第105図 SK125 フラスコ状土坑出土遺物



No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SK92・堆	深鉢	沈線文、襷糸文 (R) → 短沈線文、底面：無文 (ミガキ)	183	37-1
2	B・SK92・堆	深鉢	貫通孔、沈線文、磨消縄文 (LR) + 結節文、藤手文	184	37-2
3	B・SK92・堆	壺	円形刺突付隆線文、沈線文、ミガキ、【胎土分析-10】	186	37-10
4	B・SK92・堆	鉢?	貫通孔、無文 (ミガキ)、SK6 と接合	185	37-9

第106図 SK92 フラスコ状土坑出土遺物 (1)



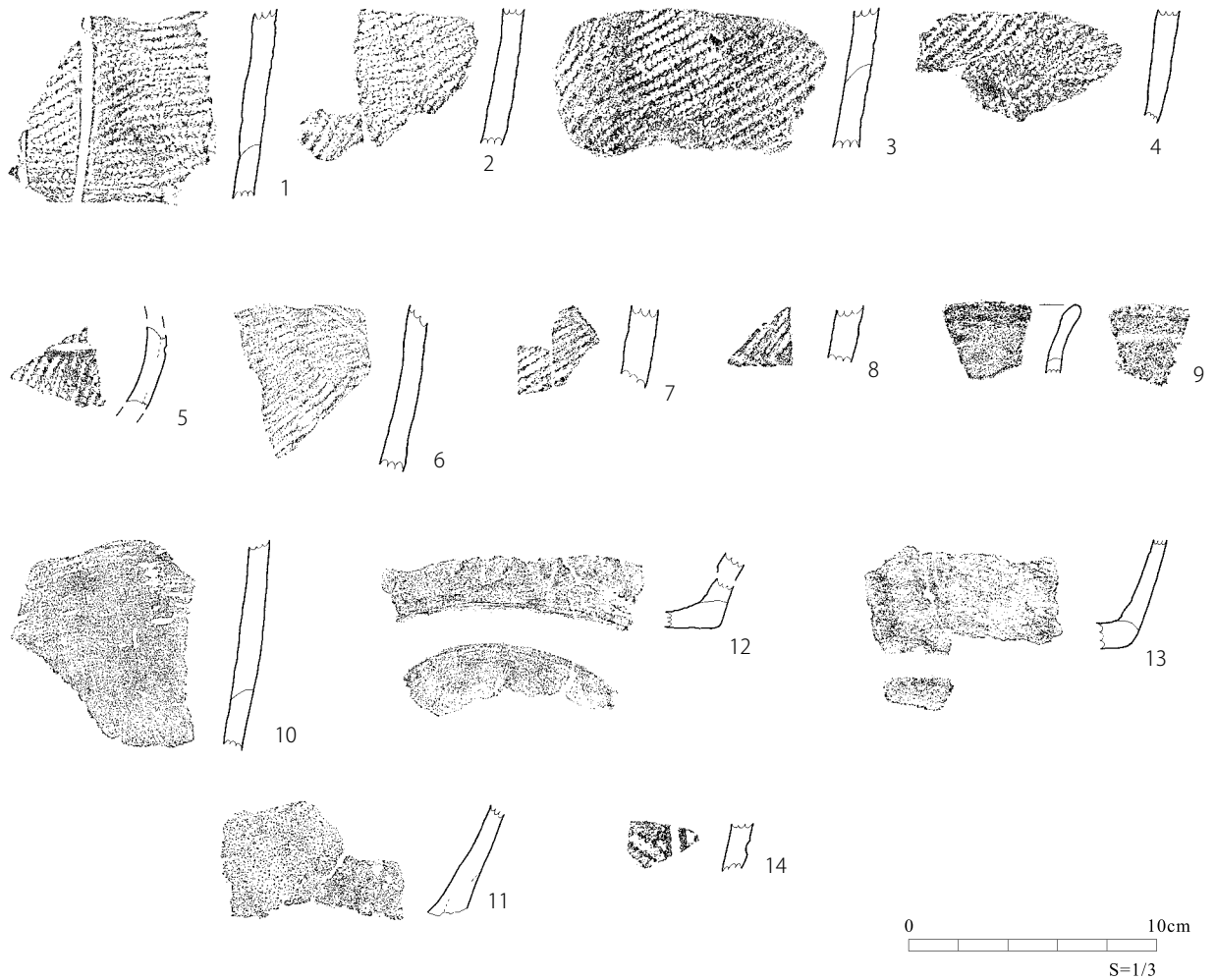
第 107 図 SK92 フラスコ状土坑出土遺物 (2)

の小柱穴を確認した。

〔堆積土〕7層に細分される。1層は多量の地山ブロックと少量の炭化物粒を含む暗褐色シルト、2層は地山ブロックと少量の炭化物粒を含む黒褐色シルト、3層は多量の地山ブロックと少量の炭化物粒を含む暗褐色シルト、4層は地山ブロック、炭化物・焼土粒を含む黒褐色シルト、5層は地山・炭化物粒を含む黒褐色シルト、7層は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。1～5層は人為的埋土、6・7層は自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土より縄文土器鉢(第106図4)、深鉢(第106図1・2、第107図、第108図1～8・10～14)、壺(第106図3、第108図9)、土器片加工円板(第146図8)、剥片、棒状石製品など

No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SK92・堆	深鉢	逆C字状沈線文、円形盲孔、沈線文、磨消縄文(LR)、蔵手文、【胎土分析-07】	187	36-11	9	B・SK92・堆	深鉢	縄文(RLR?)	191	37-4
2	B・SK92・堆	深鉢	沈線文、磨消縄文(RL)、蔵手文	188	36-12	10	B・SK92・堆	深鉢	燃糸文(LR)→沈線文、沈線間磨消、外面：炭化物付着	192	-
3	B・SK92・堆	深鉢	沈線文→ボタン状貼付文、縄文(LR)→S字状沈線文	189	36-13	11	B・SK92・堆	深鉢	縄文(LR)→沈線文	193	37-5
4～8	B・SK92・堆	深鉢	網目状燃糸文(R)	190	37-3	12	B・SK92・堆	深鉢	縄文(LR)→沈線文	194	37-6
						13	B・SK92・堆	深鉢	縄文(LR)→沈線文	196	-



No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1~4	B・SK92・堆	深鉢	磨消縄文(LR)、沈線文、内面：炭化物付着	195	37-7	10	B・SK92・堆	深鉢	磨消縄文(LR)、爪形文	201	37-8
5	B・SK92・堆	深鉢	縄文(LR)→沈線文	197	-	11	B・SK92・堆	深鉢	縄文(LR?)、摩滅、SK6と接合	202	-
6	B・SK92・堆	深鉢	縄文(L)	198	-	12	B・SK92・堆	深鉢	無文(ミガキ)、底面：無文(ミガキ)	203	-
7・8	B・SK92・堆	深鉢	縄文(LR)、摩滅	199	-	13	B・SK92・堆	深鉢	縄文(RL?)、ミガキ、底面：無文(ミガキ)	204	-
9	B・SK92・堆	壺	無文、摩滅	200	-	14	B・SK92・堆	深鉢	縄文(LR)→沈線文	205	-

第108図 SK92 フラスコ状土坑出土遺物(3)

が出土した。第106図4・第108図1~4など、堆積土上層から出土した土器はSK6土坑出土土器と同一個体あるいは接合関係が認められるものがある。棒状石製品は凝灰岩製で、直径21cm、長さ47cmの柱状を呈し、土坑西壁に接して底面付近の5層下部から直立した状態で埋設されていた。風化が著しく取り上げは不可能であった。



No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SK101・堆	深鉢	磨消縄文(LR)→沈線文	100	37-9

第109図 SK101 フラスコ状土坑出土遺物

【SK101 フラスコ状土坑】(第103・109図、写真図版15-5・6)

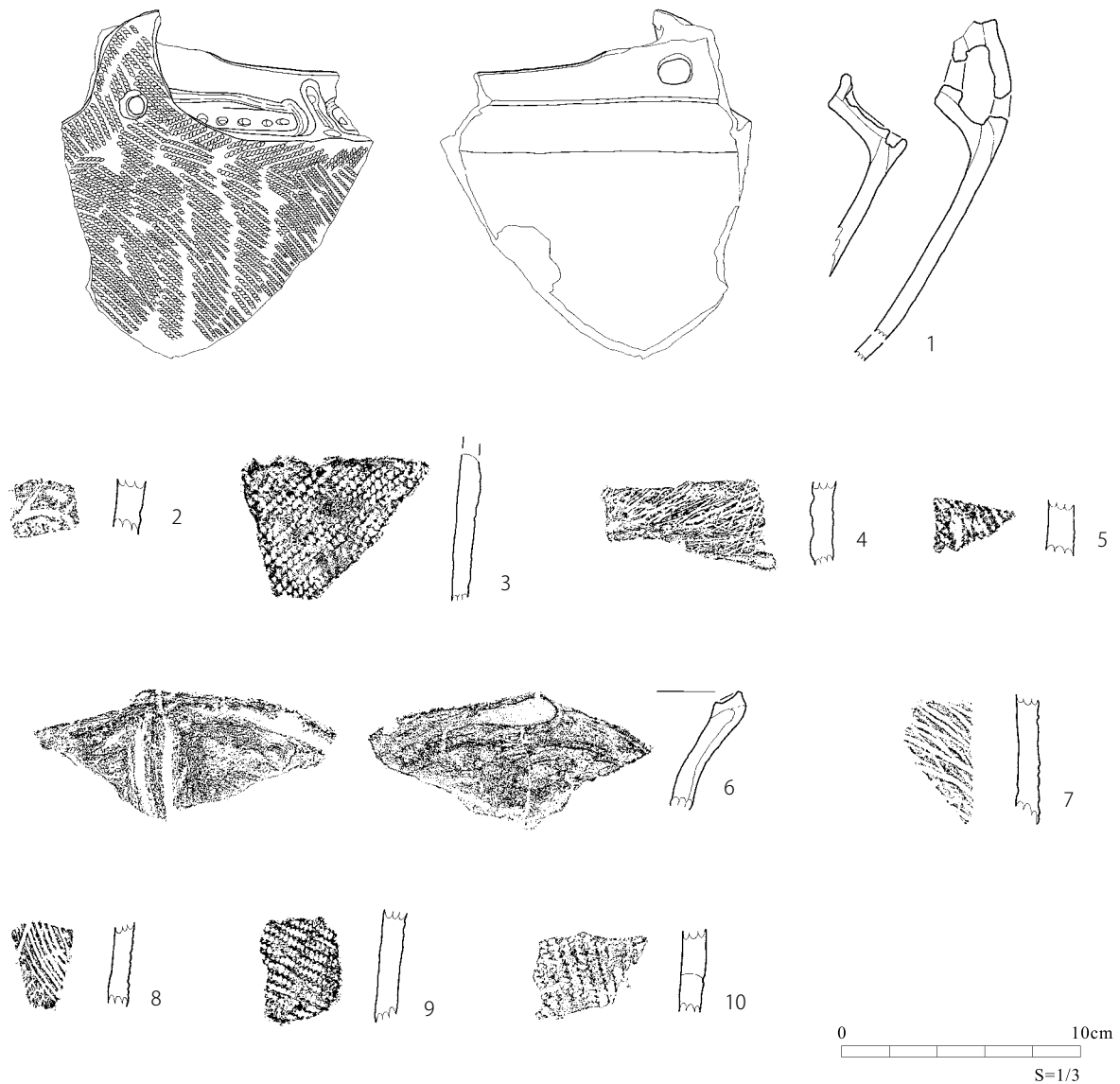
〔位置・確認面〕B区西部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕SK101→SI16

〔規模・形状〕平面形は直径116cmの円形を呈し、断面形は深さ13cmの皿状を呈する。

〔堆積土〕2層に細分される。1層は地山ブロックと少量の焼土・炭化物粒を含む黒褐色シルト、2層は地山ブロックを含む黒褐色シルトで、いずれも自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土より縄文土器深鉢(第109図)、土錘(第145図5)、土器片加工円板(第146図6)などが出土した。



No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	C・SK 125・堆	鉢	橋状把手、貫通孔（内外面）、I字状沈線入降線文、不整形区画、連続円形刺突、縄文（LR）、一部ミガキ	012	38-1	5	C・SK 125・堆	深鉢	縄文（LR）	016	-
2	C・SK 125・堆	深鉢	沈線文、刻目文	013	-	6	C・SK 125・堆 2	浅鉢	縦位降線文、沈線文、内面：炭化物付着	017	38-3
3	C・SK 125・堆	深鉢	縄文（LR）	014	38-2	7	C・SK 125・堆 3	深鉢	燃糸文（R）	021	-
4	C・SK 125・堆	深鉢	櫛描文	015	-	8	C・SK 125・堆 2	深鉢	入組带状文 / 櫛描文	018	-
						9	C・SK 125・堆 2	深鉢	縄文（RL）	019	-
						10	C・SK 125・堆 2	深鉢	縄文（RL）	020	-

第 110 図 SK125 フラスコ状土坑出土遺物

【SK125 フラスコ状土坑】（第 105・110 図、写真図版 15 - 7・8）

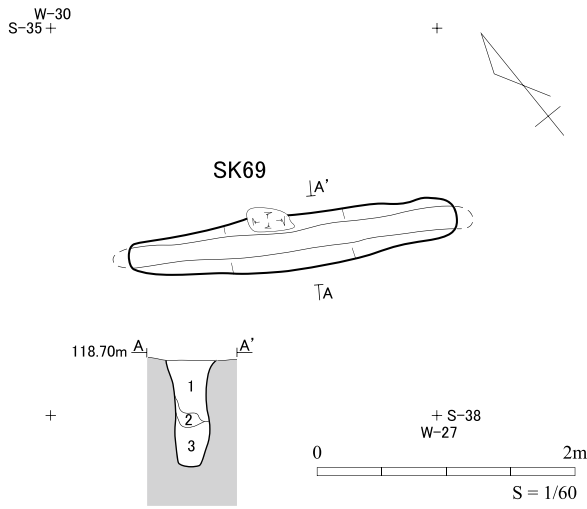
〔位置・確認面〕 C 区北部の平坦面に位置する。V 層上面で確認した。

〔重複〕 なし

〔規模・形状〕 平面形は直径 110cm の略円形を呈し、断面形は深さ 40cm の U 字形を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕 5 層に細分される。1 層は地山ブロックを多く含む黒褐色シルト、2 層は地山粒を含み、炭化物粒を少量含む黒褐色シルト、3 層は地山ブロックを少量含む黒褐色シルト、4 層は地山ブロックを多量に含む灰黄褐色シルト、5 層は地山ブロックを含む灰黄褐色シルトである。1 層・4～5 層は自然崩落土、2～3 層は自然堆積土と考えられる。

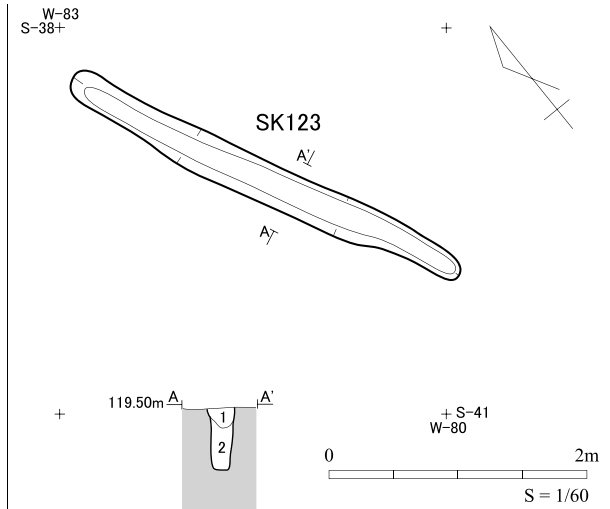
〔出土遺物〕 堆積土より縄文土器浅鉢（第 110 図 6）、鉢（第 110 図 1）深鉢（第 110 図 2～5・7～10）、石皿（第 168 図 2、第 170 図 4）などが出土した。



SK69 落とし穴状土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む
2	10YR3/2 黒褐	シルト	地山粒を含む
3	10YR4/2 灰黄褐	シルト	地山ブロックを含む

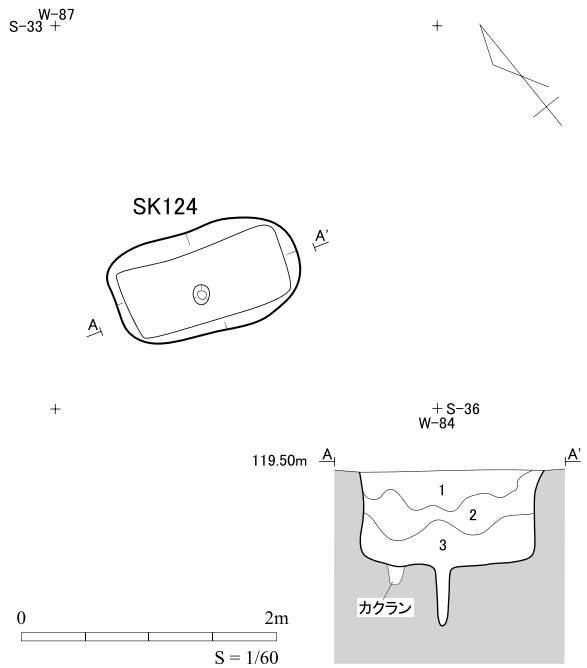
第111図 SK69 落とし穴状土坑



SK123 落とし穴状土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒を少量含む
2	10YR3/4 暗褐	シルト	地山粒を多く含む

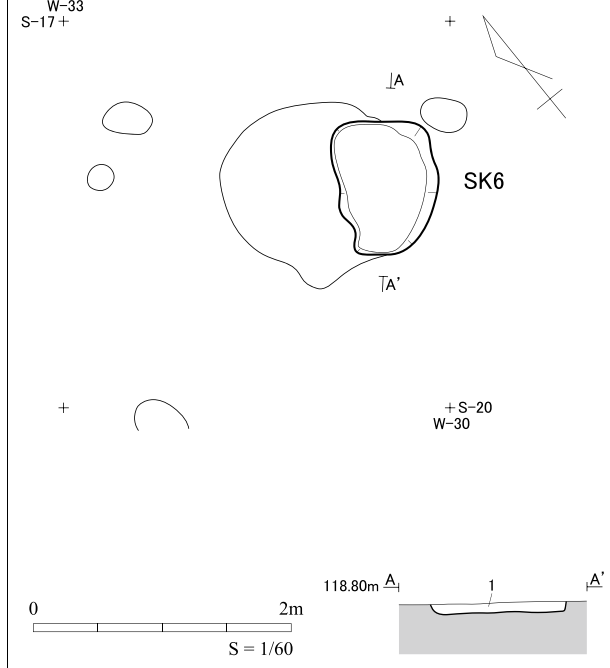
第112図 SK123 落とし穴状土坑



SK124 落とし穴状土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを少量含む
2	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む
3	10YR4/2 灰黄褐	シルト	地山ブロックを多量に含む (壁崩)

第113図 SK124 落とし穴状土坑



SK6 土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐		地山粒をごくわずかに含む

第114図 SK6 土坑

⑥ 落とし穴状土坑

【SK69 落とし穴状土坑】(第111図、写真図版16-1・2)

〔位置・確認面〕B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸が確認面で256cm、最大長で282cm、短軸42cmの溝状を呈し、断面形は深さ81cmのU字形を呈する。底面は中央部に向かって皿状に窪んでいる。

〔堆積土〕3層に細分される。1層は地山ブロックを含む黒褐色シルト、2層は地山粒を含む黒褐色シルト、3層は地山ブロックを含む灰黄褐色シルトで、いずれも自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕 なし

【SK123 落とし穴状土坑】 (第 112 図、写真図版 16 - 3・4)

〔位置・確認面〕 C区南部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕 なし

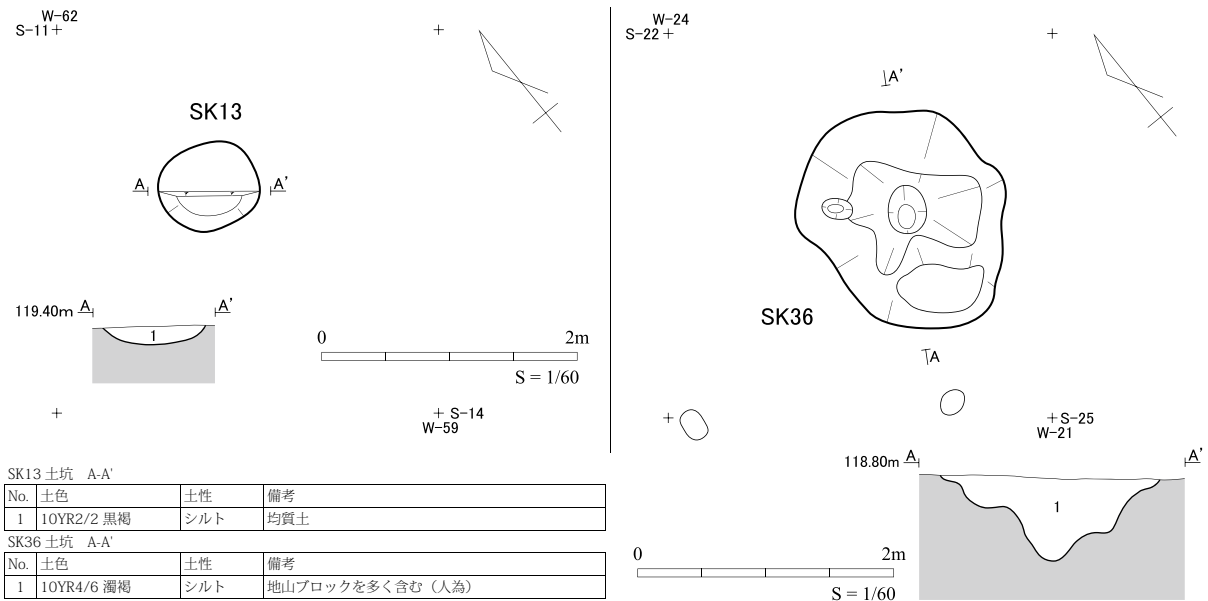
〔規模・形状〕 平面形は長軸 330cm、短軸 30cmの溝状を呈し、断面形は深さ 50cmのU字形を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕 2層に細分される。1層は地山粒を少量含む黒褐色シルト、2層は地山粒をやや多く含む暗褐色シルトで、いずれも自然堆積土と考えられる。

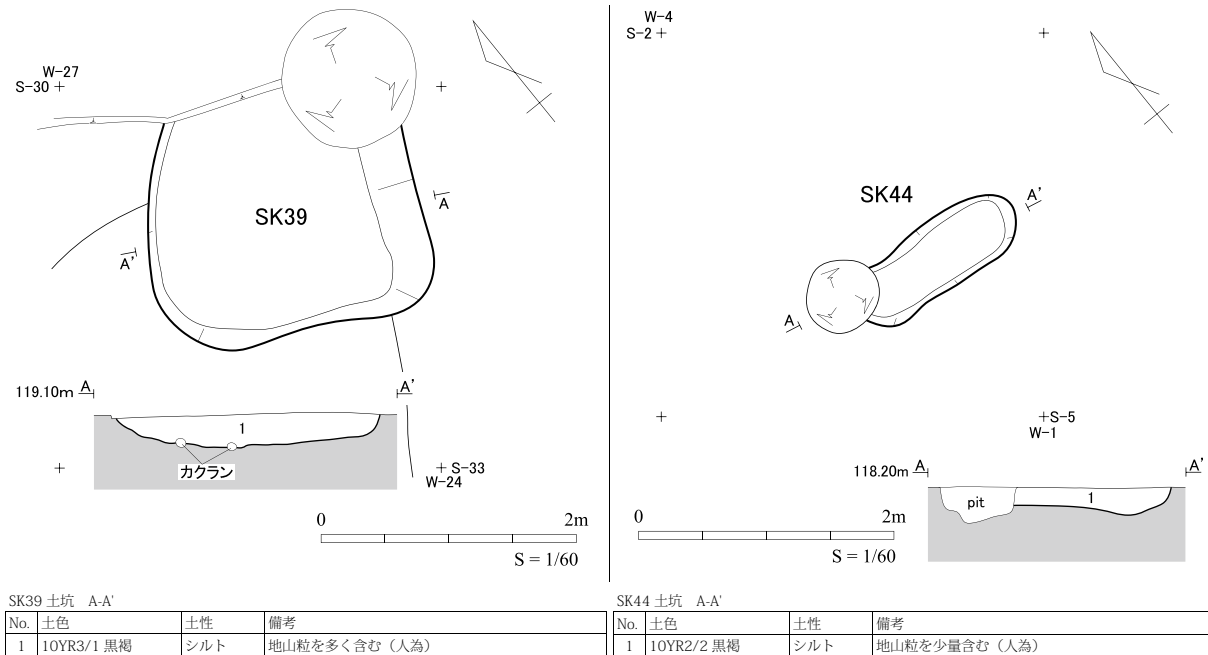
〔出土遺物〕 なし

【SK124 落とし穴状土坑】 (第 113 図、写真図版 16 - 5・6)

〔位置・確認面〕 C区南部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。



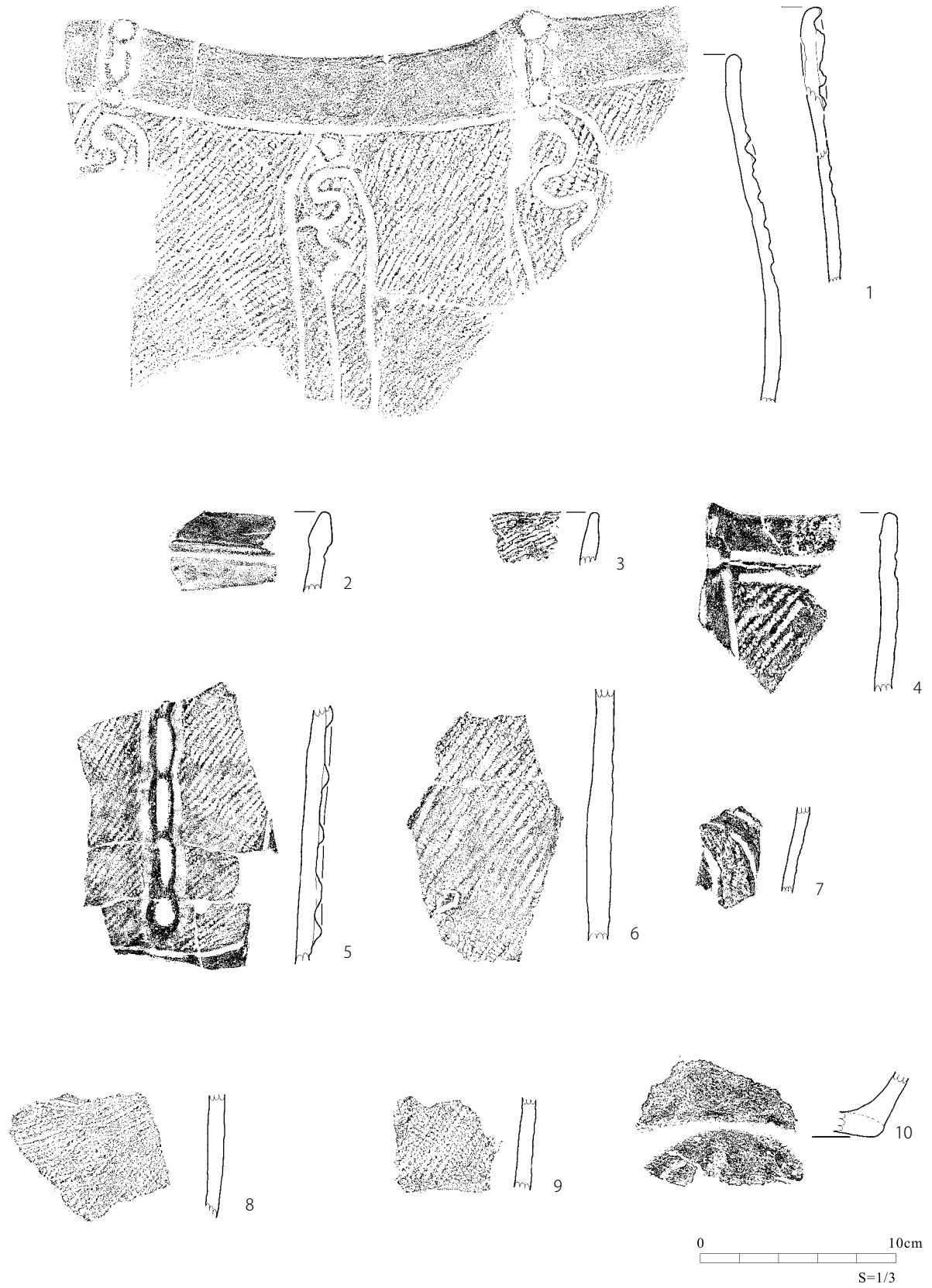
第 115 図 SK13・36 土坑



第 116 図 SK39 土坑

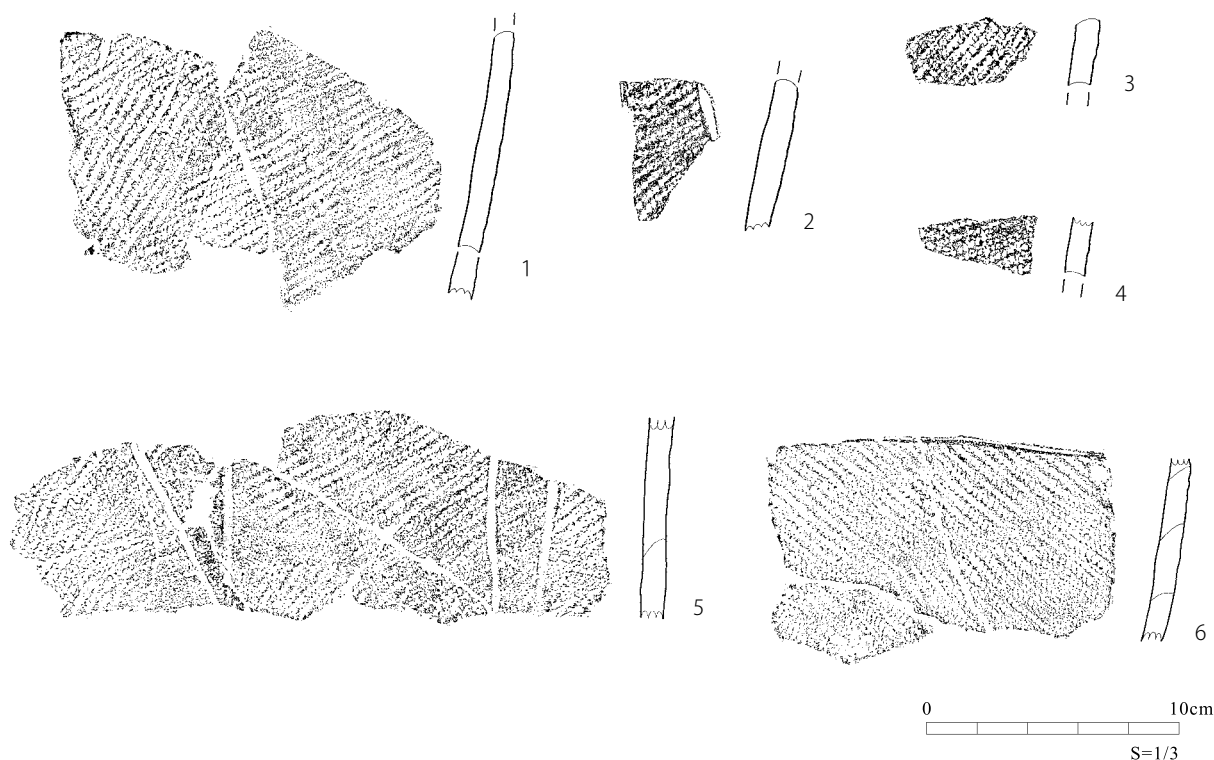
第 117 図 SK44 土坑





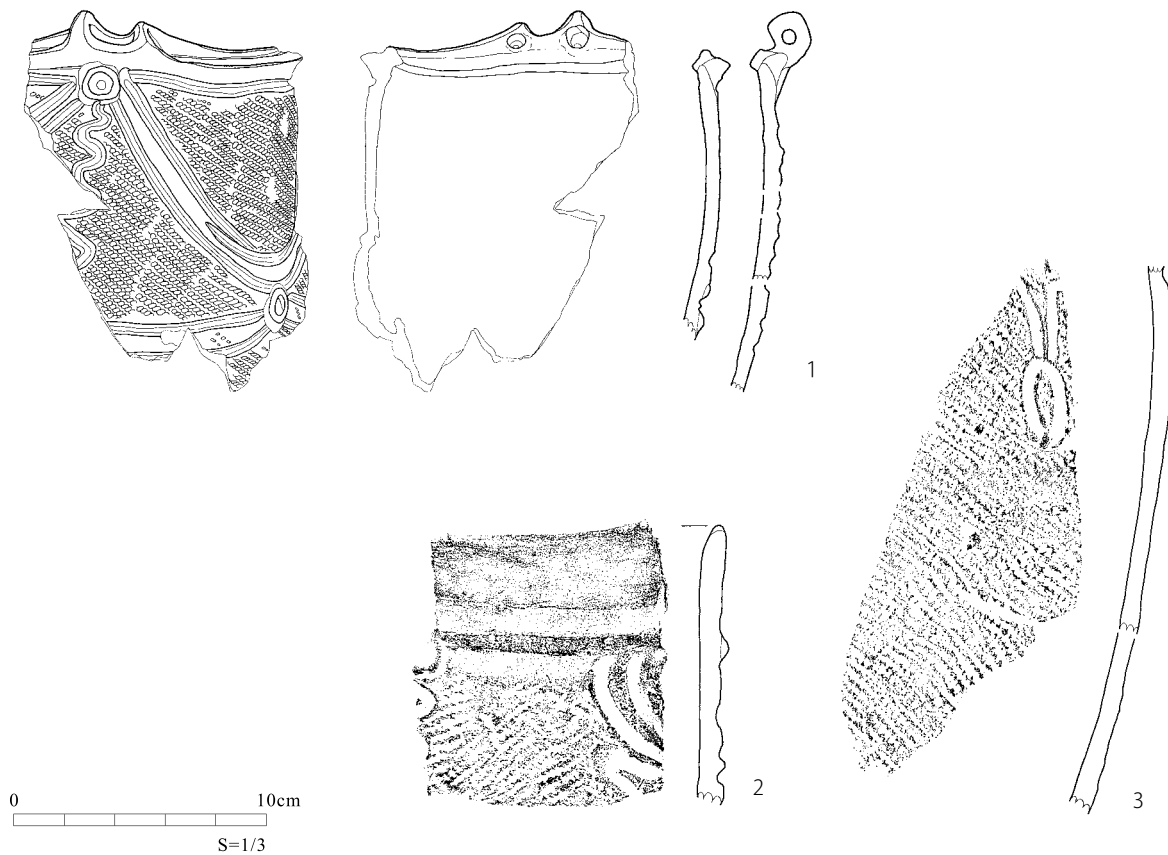
No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SK6・堆+礎	深鉢	沈線入降線文、沈線文、ボタン状貼付文、磨消縄文(LR)、麻手文	169	38-4	6	B・SK6・堆	深鉢	縄文(LR)、沈線文、摩滅	172	38-6
2	B・SK6・堆	鉢?	降線文、沈線文	175	-	7	B・SK6・堆	深鉢	磨消縄文(R?), 沈線文	177	38-7
3	B・SK6・堆	深鉢	縄文(L)	176	-	8	B・SK6・堆	深鉢	縄文(LR)、【年代測定-06】	179	-
4	B・SK6・堆+礎	深鉢	沈線文→ボタン状貼付文、磨消縄文(LR)、沈線文	170	-	9	B・SK6・堆	深鉢	縄文(LR)、降線文貼付痕跡あり	180	-
5	B・SK6・堆+礎	深鉢	縄文(LR)→沈線文(沈線区画)、鎖状降線文	171	38-5	10	B・SK6・堆	深鉢	無文(ミガキ)、底面:無文(ミガキ)	182	-

第118図 SK6土坑出土遺物(1)



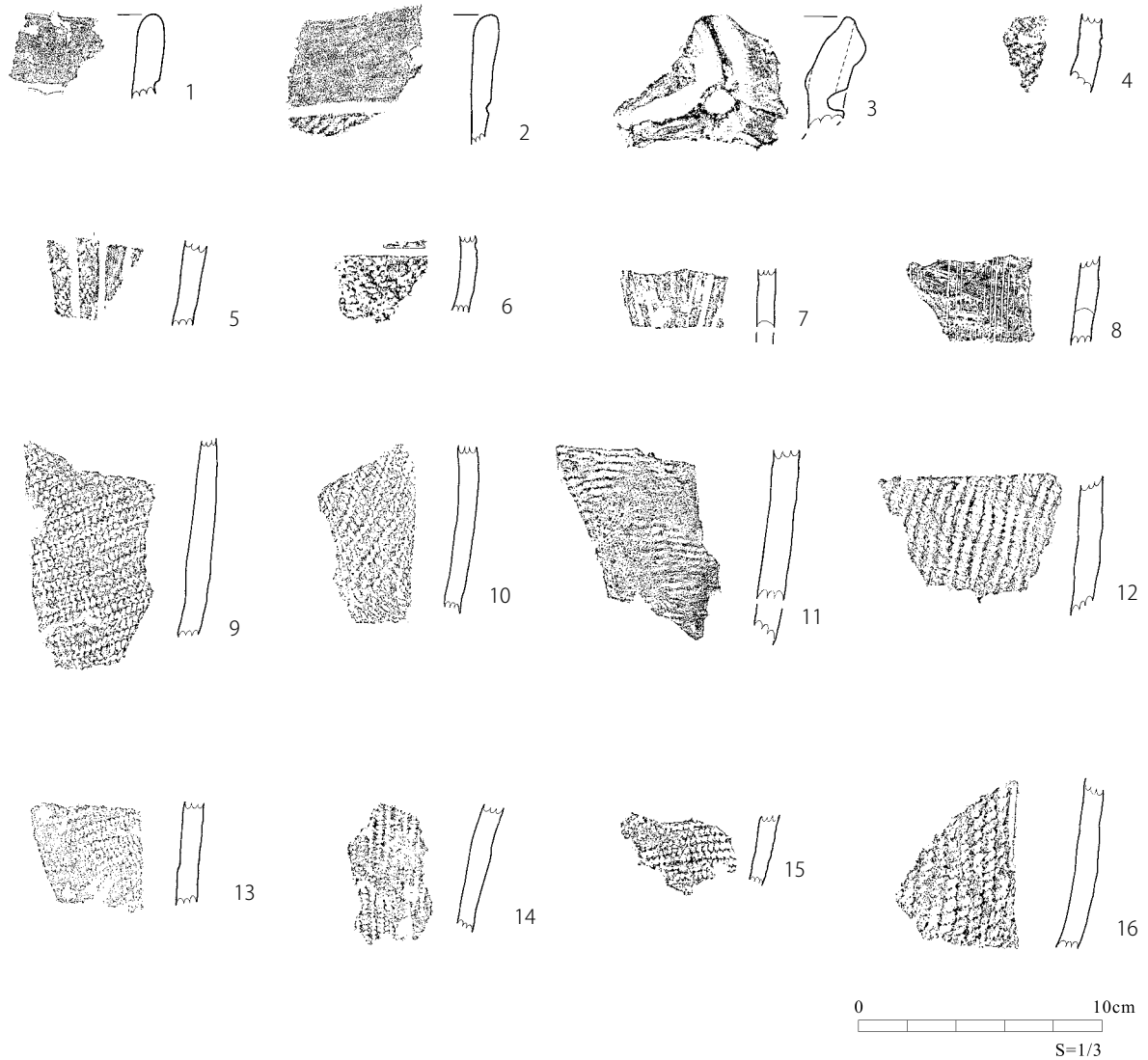
No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1~4	B・SK6・堆	深鉢	縄文(LR)→沈線文、SK92と接合	174	38-8	5	B・SK6・堆	深鉢	縄文(LR)→沈線文、SK92と接合	173	38-9
						6	B・SK6・堆	深鉢	縄文(RL)→沈線文、SK92と接合	178	38-10

第119図 SK6土坑出土遺物(2)



No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SK13・ 確+B区表土	深鉢	橋状把手、内面：盲孔、磨消縄文(LR)、沈線文→ポタン状貼付文、シグザグ文、外面：炭化物附着	063	39-1	2	B・SK13・確	深鉢	降線文、縄文(LR)→沈線文	064	39-2
						3	B・SK13・堆	深鉢	縄文(RL)→沈線文	065	39-3

第120図 SK13土坑出土遺物



No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SK39・堆	深鉢	沈線文	103	-	9・10	B・SK39・堆	深鉢	縄文(LR)	104	39-7
2	B・SK39・堆	深鉢	沈線文、縄文(L)	112	39-4	11	B・SK39・堆	深鉢	縄文(R)、外面：炭化物付着	105	39-8
3	B・SK39・堆	深鉢	降線文、盲孔	113	39-5	12	B・SK39・堆	深鉢	縄文(LR)	106	-
4	B・SK39・堆	深鉢	縄文(RL?)	110	-	13	B・SK39・堆	深鉢	縄文(LR)	107	-
5	B・SK39・堆	深鉢	磨消縄文(LR)、沈線文	109	39-6	14	B・SK39・堆	深鉢	縄文(RL)、一部磨消	108	-
6	B・SK39・堆	深鉢	縄文(LR)→沈線文、外面：炭化物付着	114	-	15	B・SK39・堆	深鉢	縄文(LR)	116	-
7	B・SK39・堆	深鉢	撫糸文(R)	111	-	16	B・SK39・堆	深鉢	縄文(LR)→沈線文、外面：炭化物付着	115	-
8	B・SK39・堆	深鉢	櫛描文	117	-						

第121図 SK39土坑出土遺物

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸140cm、短軸80cmの小判形を呈し、断面形は深さ70cmのU字形を呈する。底面はほぼ平坦で、中央部に平面形が直径7cmの円形を呈し、深さ40cmの小柱穴を確認した。

〔堆積土〕3層に細分される。1層は地山ブロックを少量含む黒褐色シルト、2層は地山ブロックを多く含む黒褐色シルト、3層は地山ブロックを多く含む灰黄褐色シルトである。1～2層は自然堆積土、3層は自然崩落土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

⑦ 土坑

【SK6土坑】(第114・118・119図、写真図版16-7)

〔位置・確認面〕B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸 102cm、短軸 80cm の不整形を呈し、断面形は深さ 8cm の逆台形を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕地山粒を少量含む黒褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕確認面、堆積土より縄文土器鉢（第 118 図 2）、深鉢（第 118 図 1・3～10、第 119 図）、土器片加工円板（第 146 図 7）などが出土した。第 119 図など、SK92 フラスコ状土坑の堆積土上層出土土器との接合関係が認められるものがある。

【SK13 土坑】（第 115・120 図）

〔位置・確認面〕B 区西部の平坦面に位置する。V 層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸 77cm、短軸 66cm の略円形を呈し、断面形は深さ 15cm の皿状を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕均質な黒褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕確認面、堆積土より縄文土器深鉢（第 120 図）が出土した。

【SK36 土坑】（第 115 図、写真図版 16－8・9）

〔位置・確認面〕B 区中央部の平坦面に位置する。V 層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸 186cm、短軸 150cm の不整形を呈し、断面形は深さ 69cm の V 字形を呈する。底面は凹凸がみられる。

〔堆積土〕地山ブロックを含む黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

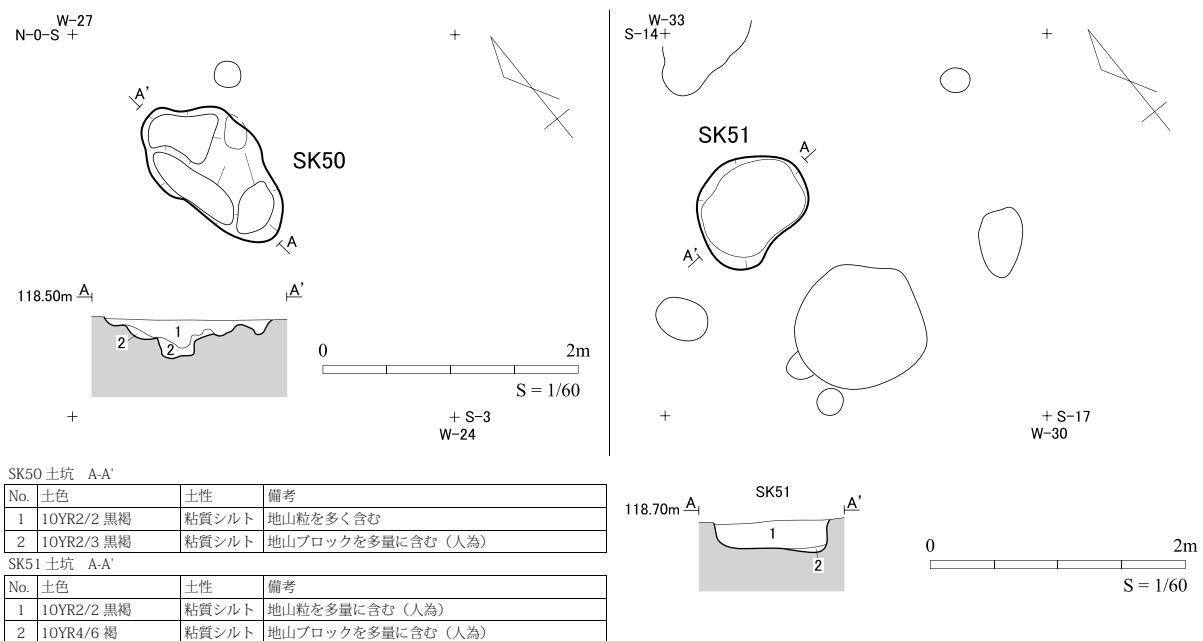
〔出土遺物〕なし

【SK39 土坑】（第 116・121 図、写真図版 16－10、17－1）

〔位置・確認面〕B 区中央部の平坦面に位置する。V 層上面で確認した。

〔重複〕SI65 → SK39

〔規模・形状〕北側が残存しないため全体の形状は不明であるが、平面形は長軸 220cm 以上、短軸 186cm 以上の隅丸方形を呈し、断面形は深さ 25cm の皿状を呈する。底面はほぼ平坦である。



第 122 図 SK50・SK51 土坑

〔堆積土〕地山ブロックを多く含む黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土より縄文土器深鉢（第121図）、二次加工剥片（第151図4）、剥片などが出土した。

【SK44 土坑】（第117図、写真図版17-2）

〔位置・確認面〕B区東部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸145cm、短軸54cmの長楕円形を呈し、断面形は深さ20cmのV字形を呈する。底面は東側へ向かって傾斜している。

〔堆積土〕地山粒を少量含む黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

【SK50 土坑】（第122図、写真図版17-3・4）

〔位置・確認面〕B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸136cm、短軸78cmの不整形を呈し、断面形は深さ31cmのV字形を呈する。底面は凹凸がみられる。

〔堆積土〕2層に細分される。1層は地山粒を含む黒褐色粘質シルト、2層は地山ブロックを多量に含む黒褐色粘質シルトである。1層は自然堆積土、2層は人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

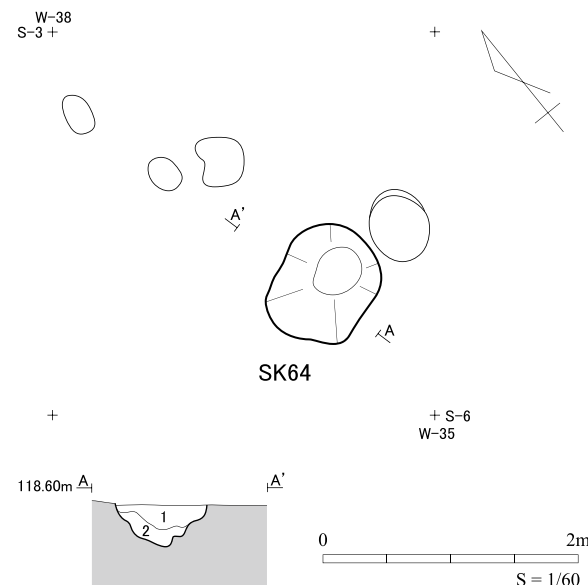
【SK51 土坑】（第122図、写真図版17-5）

〔位置・確認面〕B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸95cm、短軸72cmの不整円形を呈し、断面形は深さ25cmの逆台形を呈する。底面はほぼ平坦である。

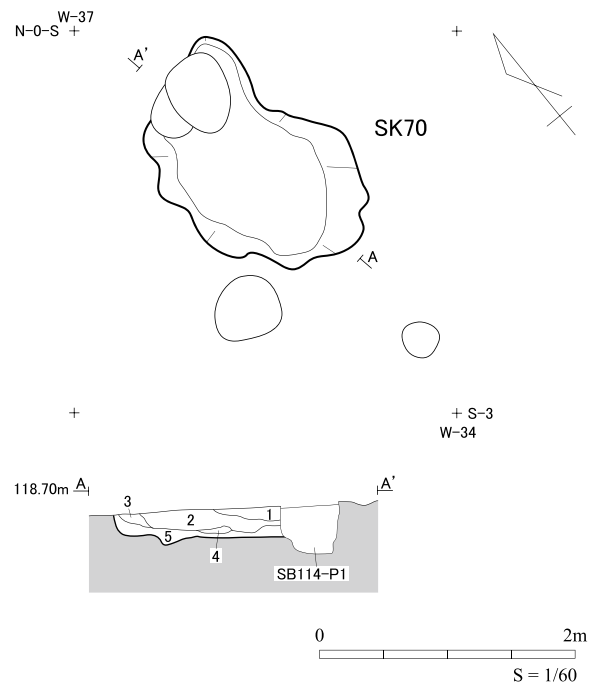
〔堆積土〕1層は地山粒を多量に含む黒褐色粘質シルト、2層は地山ブロックを多量に含む褐色粘質シルトで、いずれも人為的埋土と考えられる。



SK64 土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	地山粒をわずかに含む
2	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを多量に含む（人為）

第123図 SK64 土坑



SK70 土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒を少量含む
2	10YR3/3 暗褐	シルト	地山粒を含む
3	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを少量含む（人為）
4	10YR3/2 黒褐	シルト	地山粒を少量含む（人為）
5	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ブロックを含む（人為）

第124図 SK70 土坑

〔出土遺物〕 なし

【SK64 土坑】（第 123 図、写真図版 17 - 6）

〔位置・確認面〕 B区中央部の平坦面に位置する。  
V層上面で確認した。

〔重複〕 なし

〔規模・形状〕 平面形は長軸 97cm、短軸 72cm の不整楕円形を呈し、断面形は深さ 44cm の逆台形を呈する。壁面は階段状の凹凸がみられ、底面は皿状に窪む。

〔堆積土〕 2層に細分される。1層は地山粒をわずかに含む黒褐色粘質シルト、2層は地山ブロックを多量に含む黒褐色粘質シルトである。1層は自然堆積土、2層は人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕 なし

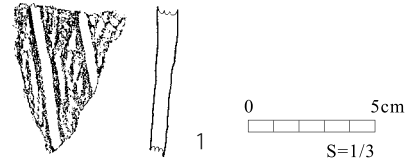
【SK70 土坑】（第 124 図、写真図版 17 - 7・8）

〔位置・確認面〕 B区中央部の平坦面に位置する。  
V層上面で確認した。

〔重複〕 SK70 → SB113 → SB114

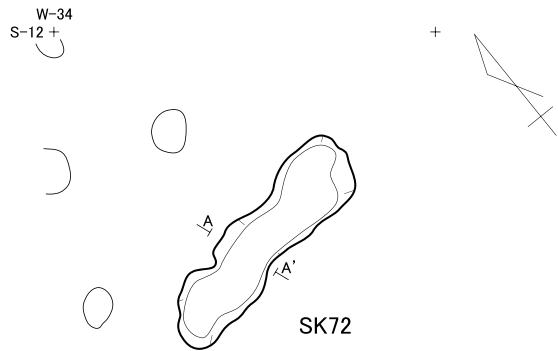
〔規模・形状〕 平面形は長軸 200cm、短軸 136cm の不整形を呈し、断面形は深さ 26cm の逆台形を呈する。底面はほぼ平坦で、一部に凹凸がある。

〔堆積土〕 5層に細分される。1層は地山粒を少量含む黒褐色シルト、2層は地山粒を含む暗褐色シルト、3層は地山ブロックを少量含む黒褐色シルト、4層は地山粒を少量含む黒褐色シルト、5



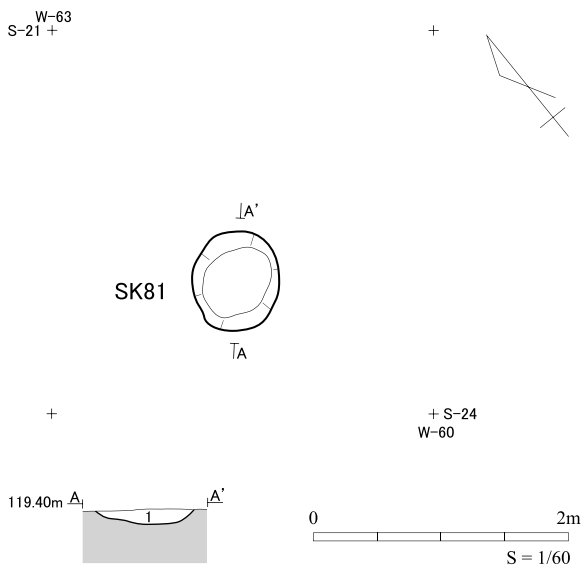
No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SK81・堆	深鉢	磨消縄文 (LR)、沈線文	094	39-9

第 125 図 SK81 フラスコ状土坑出土遺物



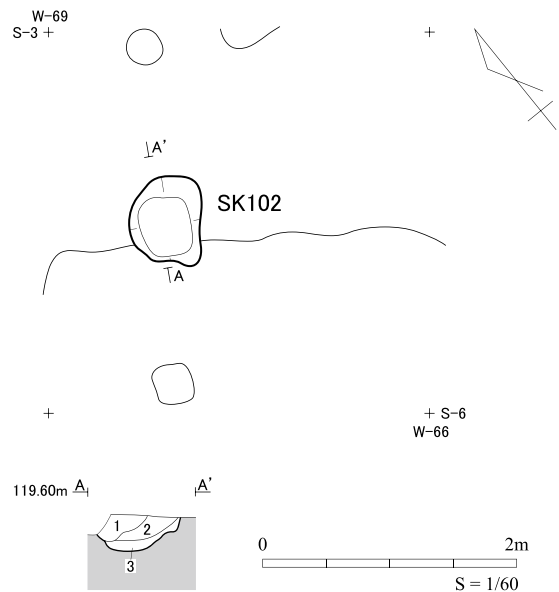
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを含む (人為)

第 126 図 SK72 土坑



No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む

第 127 図 SK81 土坑



No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	地山粒を多く含む (人為)
2	10YR3/2 黒褐	粘質シルト	地山ブロックをわずかに含む (人為)
3	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	地山ブロックを多く含む (人為)

第 128 図 SK102 土坑

層は地山ブロックを含む暗褐色シルトである。1・2層は自然堆積、3～5層は人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕 堆積土よりピエス・エスキュー（第149図5）が出土した。

【SK72 土坑】（第126図）

〔位置・確認面〕 B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕 Pit → SK72

〔規模・形状〕 平面形は長軸192cm、短軸56cmの不整長楕円形を呈し、断面形は深さ14cmの逆台形を呈する。底面は皿状に窪んでいる。

〔堆積土〕 地山ブロックを含む黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕 なし

【SK81 土坑】（第125・127図、写真図版18-1）

〔位置・確認面〕 B区西部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕 なし

〔規模・形状〕 平面形は長軸78cm、短軸68cmの略円形を呈し、断面形は深さ11cmの逆台形を呈する。底面はほぼ平坦で、一部に凹凸がみられる。

〔堆積土〕 地山ブロックを含む黒褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。

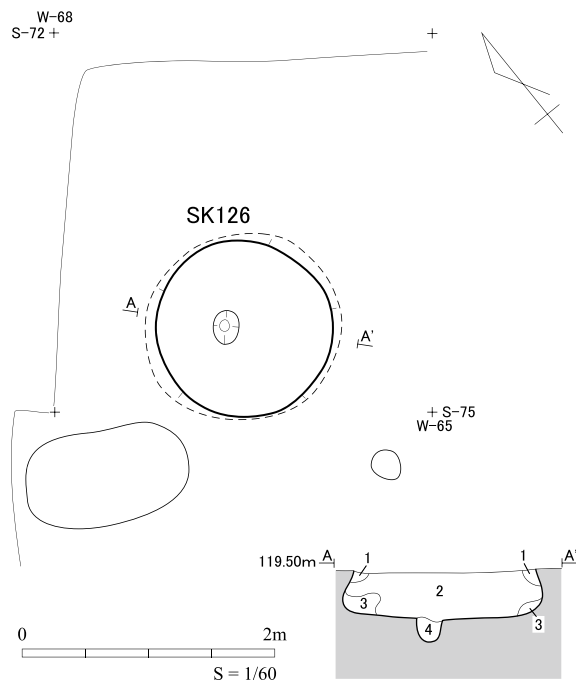
〔出土遺物〕 堆積土より縄文土器深鉢（第125図）が出土した。

【SK102 土坑】（第128図、写真図版18-2・3）

〔位置・確認面〕 B区西部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕 SK102 → SI16

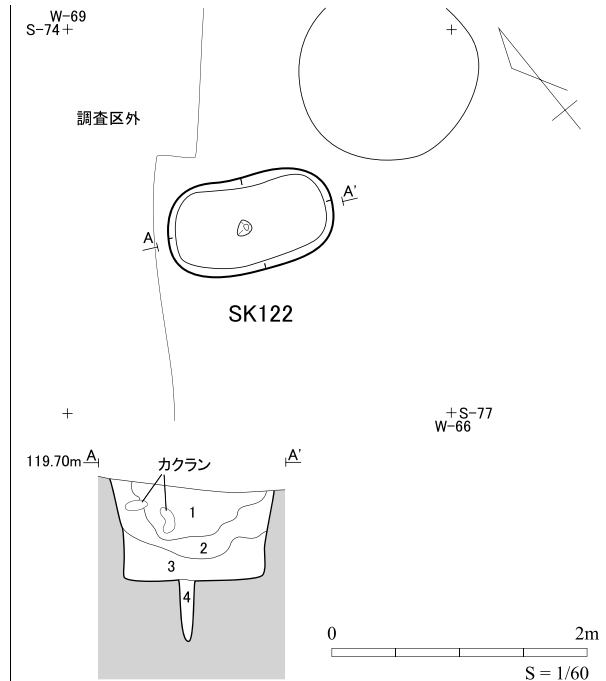
〔規模・形状〕 平面形は長軸129cm、短軸54cmの不整楕円形を呈し、断面形は深さ27cmの逆台形を呈する。底面はほぼ平坦である。



SK126 フラスコ状土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む
2	10YR2/1 黒	シルト	地山小ブロックを含む
3	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む
4	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む

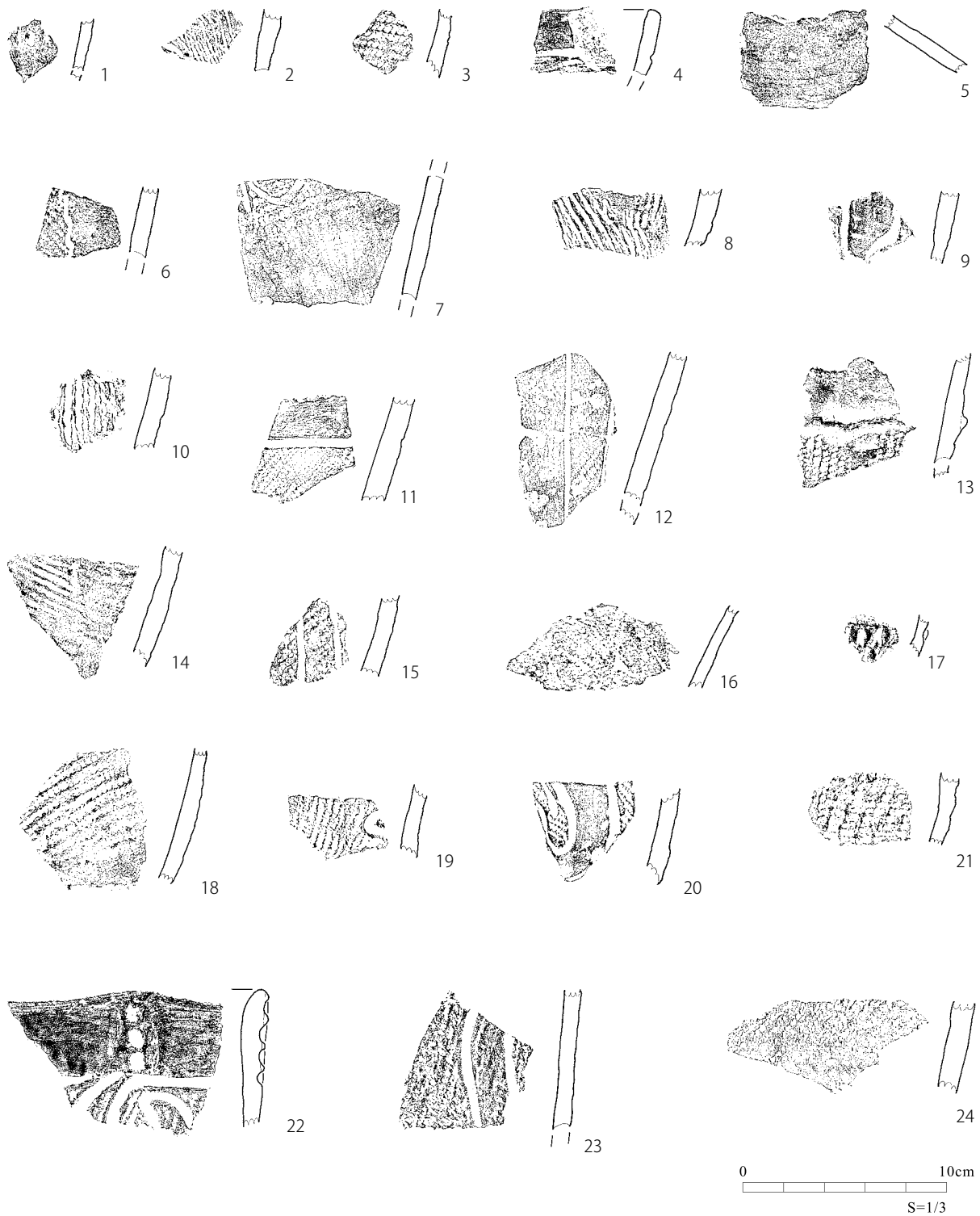
第129図 SK126 フラスコ状土坑



SK122 落とし穴状土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を含む
2	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒を多量に含む
3	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ブロックを含む
4	10YR3/4 暗褐	シルト	均質土

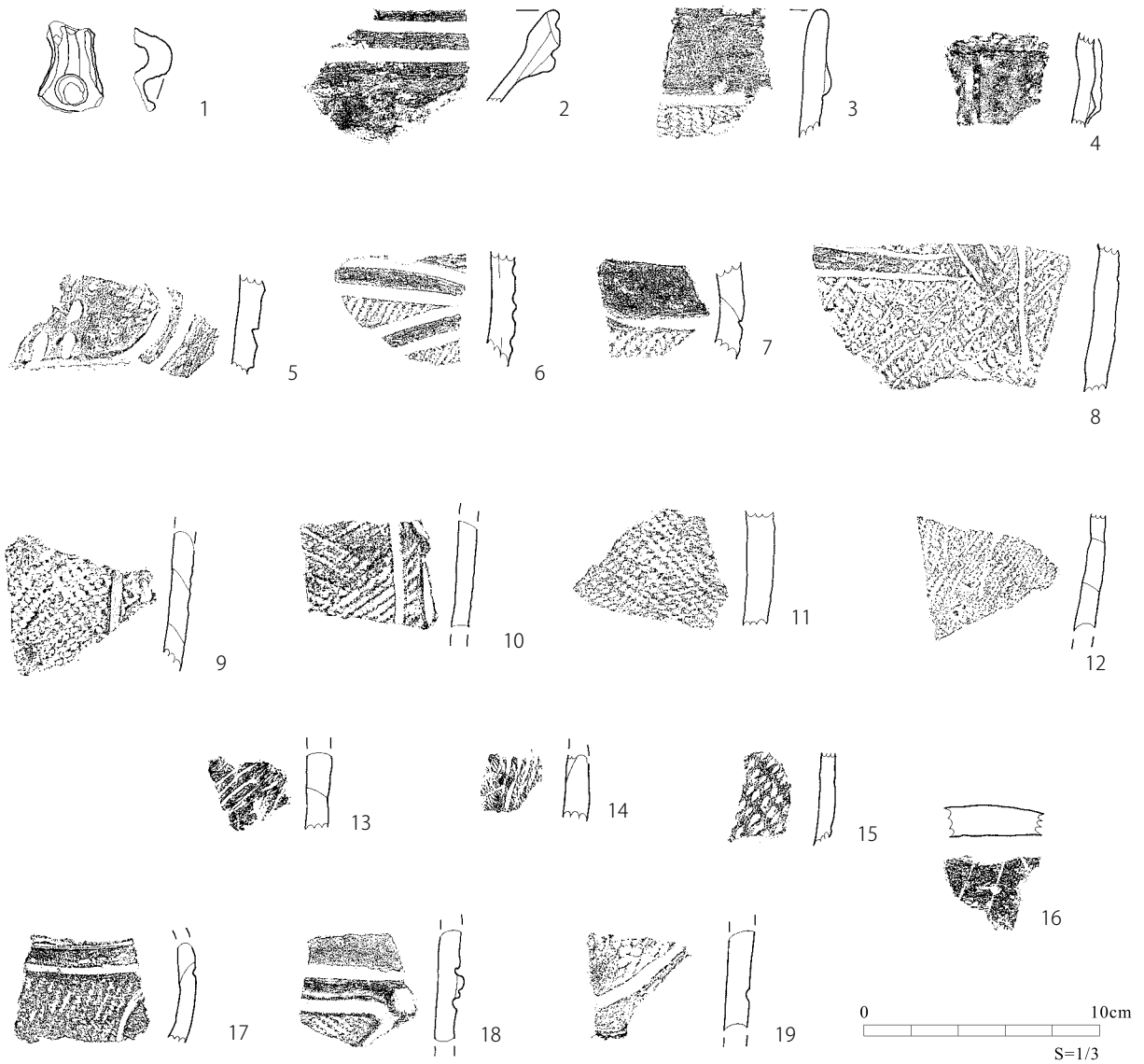
第130図 SK122 落とし穴状土坑



No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・P5・確	深鉢	爪形文	521	-	13	B・P259・堆	深鉢	隆線文、縄文 (RL)	535	39-13
2	B・P7・確	深鉢	擦糸文 (LR) → 沈線文	522	-	14	B・P271・堆	深鉢	縄文 (L)	539	-
3	B・P12・確	深鉢	縄文 (LR)、外面：炭化物付着	523	-	15	B・P274・堆	深鉢	縄文 (LR) → 沈線文、外面：炭化物付着	540	-
4	B・P49・堆	深鉢	沈線文、縄文 (LR)、外面：炭化物付着、一部剥離	524	-	16	B・P274・堆	深鉢	縄文 (LR)	541	-
5	B・P68・堆	壺	無文 (ミガキ)、摩滅	525	-	17	B・P279・堆	深鉢	連続刺突文	543	-
6	B・P185・堆	深鉢	縄文 (LR+ 結節文)	526	39-10	18	B・P286・堆	深鉢	縄文 (LR)	545	-
7	B・P199・堆	深鉢	縄文 (LR) → 沈線文、ミガキ	527	39-11	19	B・P290・堆	深鉢	縄文 (LR) → S 字状沈線文	546	-
8	B・P225・堆	深鉢	擦糸文 (R)、外面：炭化物付着	529	-	20	B・P295・堆	深鉢	磨消縄文 (LR)、沈線文	547	39-14
9	B・P246・堆	深鉢	磨消縄文 (LR)、沈線文	531	-	21	A・P303・堆	深鉢	縄文 (RL、太い原体)	548	-
10	B・P250・堆	深鉢	擦糸文 (LR、太い原体)	532	-	22	B・P318・堆	深鉢	円形文付隆線文、磨消縄文 (LR)、沈線文	073	39-15
11	B・P254・堆	深鉢	磨消縄文 (LR)、沈線文、外面：炭化物付着	533	-	23	B・P318・堆	深鉢	磨消縄文、沈線文	074	39-16
12	B・P257・堆	深鉢	磨消縄文 (LR)、沈線文、外面：炭化物付着	534	39-12	24	B・P318・堆	深鉢	縄文 (LR)	075	-

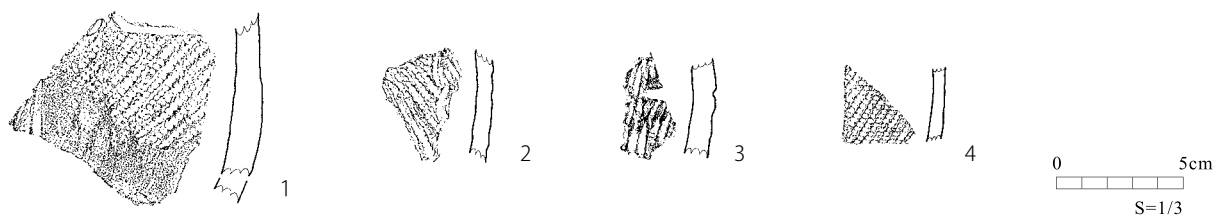
第131図 柱穴跡出土遺物





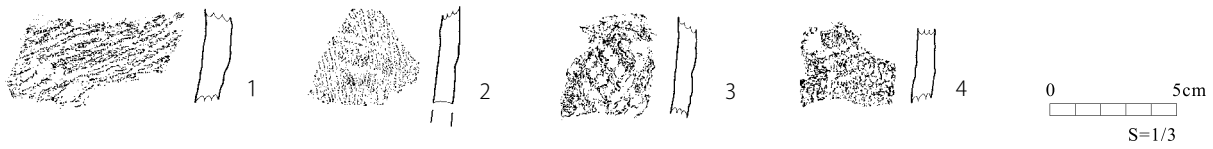
No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SI16・堆	深鉢	橋状把手、円形盲孔	386	40-1	11	B・SI16・堆	深鉢	縄文 (LR)	396	-
2	B・SI16・堆	浅鉢	降線文、沈線文	387	40-2	12	B・SI16・堆	深鉢	縄文 (LR)	397	-
3	B・SI16・堆	深鉢	降線文、沈線文、縄文 (LR)	388	40-3	13	B・SI16・堆	深鉢	撫糸文 (R)、赤彩か	398	-
4	B・SI16・堆	深鉢	降線区画、縄文 (LR)	389	-	14	B・SI16・堆	深鉢	撫糸文 (R、極細い原体) → 縄文 (R) ?	399	-
5	B・SI16・堆	深鉢	磨消縄文 (RL)、沈線区画、刺突文	390	40-4	15	B・SI16・堆 1	深鉢	連続刺突文	401	-
6	B・SI16・堆	深鉢	沈線文、縄文 (LR)	391	40-5	16	B・SI16・堆	深鉢	底面：木葉痕	400	-
7	B・SI16・堆	深鉢	沈線文、縄文 (LR)	392	40-6	17	B・SI16・確	深鉢	磨消縄文 (LR)、沈線文	402	40-10
8	B・SI16・堆	深鉢	附加条縄文 (LR+R) → 沈線文、外面：炭化物付着	393	40-7	18	B・SI16・確	深鉢	沈線文、降線文 → 円形刺突、縄文 (LR)	403	40-11
9	B・SI16・堆	深鉢	縄文 (LR) → 沈線文、外面：炭化物付着	394	40-8	19	B・SI16・確	深鉢	縄文 (LR) → 沈線文	404	40-12
10	B・SI16・堆	深鉢	磨消縄文 (L)、沈線文	395	40-9						

第 132 図 SI16 竪穴住居跡混入遺物



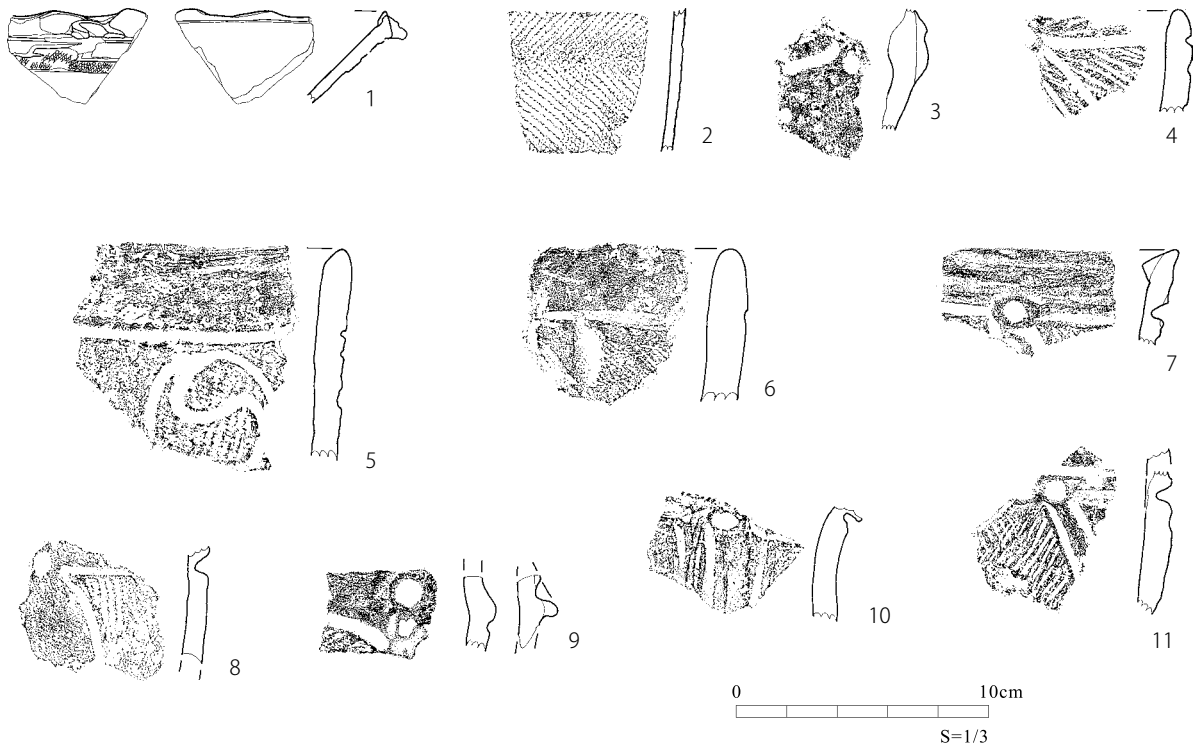
No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SD8・堆	深鉢	縄文 (LR)、沈線文	421	40-13	3	B・SD8・堆	深鉢	縄文 (L) → 短沈線文	423	-
2	B・SD8・堆	深鉢	縄文 (LR+ 結節文)	422	-	4	B・SD8・堆	深鉢	縄文 (RL)	424	-

第 133 図 SD8 溝跡混入遺物



No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	A・SD18・堆	深鉢	縄文 (L)	417	-	3	A・SD18・堆	深鉢	縄文 (LR、太い原体)	419	-
2	A・SD18・堆	深鉢	櫛描文	418	-	4	A・SD18・堆	深鉢	縄文 (LR)	420	-

第 134 図 SD18 溝跡混入遺物



No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SD88・堆	皿	瘤付、雲形文 / 縄文 (LR)、内面:沈線文、内外面:漆附着?	431	40-22	6	B・SD88・堆	深鉢	沈線文、縄文 (R)	435	40-27
2	B・SD88・堆	深鉢	羽状縄文 (LR/RL)	432	40-23	7	B・SD88・堆	深鉢	沈線文→ボタン状貼付文	436	41-1
3	B・SD88・堆	鉢?	円形盲孔、沈線文	472	40-24	8	B・SD88・堆	深鉢	円形盲孔、磨消縄文 (RL)、沈線区画	433	41-2
4	B・SD88・堆	深鉢	円形盲孔、撚糸文 (R) → 沈線区画	446	40-25	9	B・SD88・堆	深鉢	盲孔入貼付文、沈線文、縄文 (L)	437	41-3
5	B・SD88・堆	深鉢	沈線文、磨消縄文 (RL)、蕨手類似文	434	40-26	10	B・SD88・堆	深鉢	隆線文、円形盲孔	438	-
						11	B・SD88・堆	深鉢	円形盲孔、沈線区画、撚糸文 (R)	473	41-4

第 135 図 SD88 溝跡混入遺物 (1)

〔堆積土〕3層に細分される。1層は地山粒を多く含む黒褐色粘質シルト、2層は地山ブロックをわずかに含む黒褐色粘質シルト、3層は地山ブロックを多く含む暗褐色粘質シルトで、いずれも人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

(3) D区

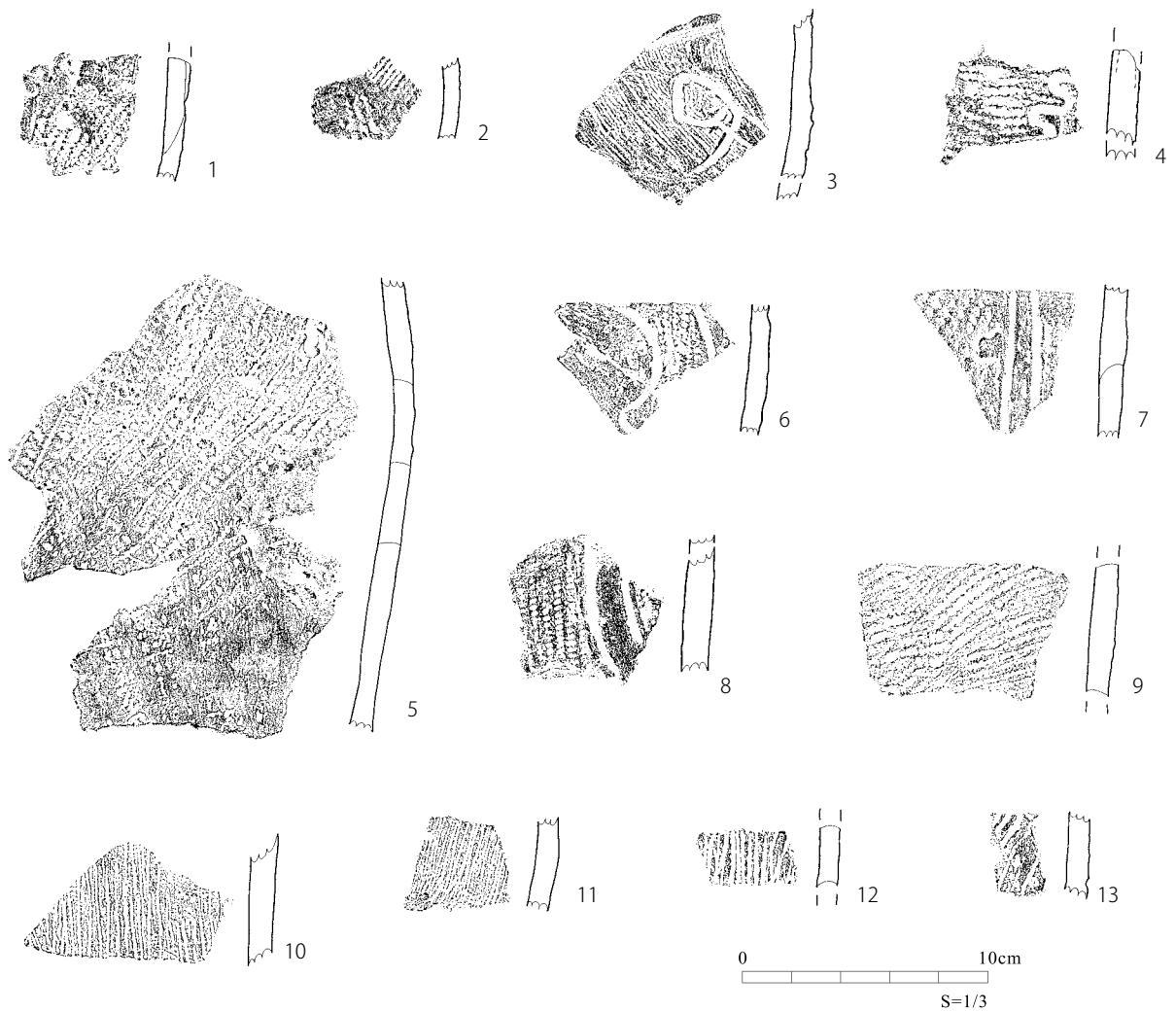
① フラスコ状土坑

〔SK126 フラスコ状土坑〕(第 129 図、写真図版 20 - 6・7)

〔位置・確認面〕C区北部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は直径 140cmの略円形を呈し、断面形は深さ 35cmの台形を呈する。底面はほぼ平坦で、中央部で平面形が直径 42cm、深さ 40cmの小柱穴を確認した。



No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SD88・堆	深鉢	縄文(LR)、輪積痕に刻目あり?	474	-	8	B・SD88・堆	深鉢	磨消縄文(RL)、沈線文	445	41-10
2	B・SD88・堆	深鉢	撫糸文(LR)、縄文(L)	475	-	9	B・SD88・堆+確	深鉢	縄文(LR)	440	-
3	B・SD88・堆	深鉢	撫糸文(R)→沈線文	441	41-5	10	B・SD88・堆	深鉢	撫糸文(R)	447	41-11
4	B・SD88・堆	深鉢	縄文(RL)→ジグザグ文	442	41-7	11	B・SD88・堆	深鉢	撫糸文(R)	448	-
5	B・SD88・堆	深鉢	附加条縄文(LR+R)→一部ミガキ、剥離	439	41-6	12	B・SD88・堆	深鉢	撫糸文(R)	449	-
6	B・SD88・堆+表	深鉢	磨消縄文(LR)、沈線文	443	41-8	13	B・SD88・堆	深鉢	撫糸文(R)	450	-
7	B・SD88・堆	深鉢	磨消縄文(LR)、沈線文	444	41-9						

第136図 SD88 溝跡混入遺物(2)

〔堆積土〕4層に細分される。1層は地山ブロックを含む黒褐色シルト、2層は地山ブロックを含む黒色シルト、3・4層は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトである。いずれも自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

② 落とし穴状土坑

【SK122 落とし穴状土坑】(第130図、写真図版20-8・9)

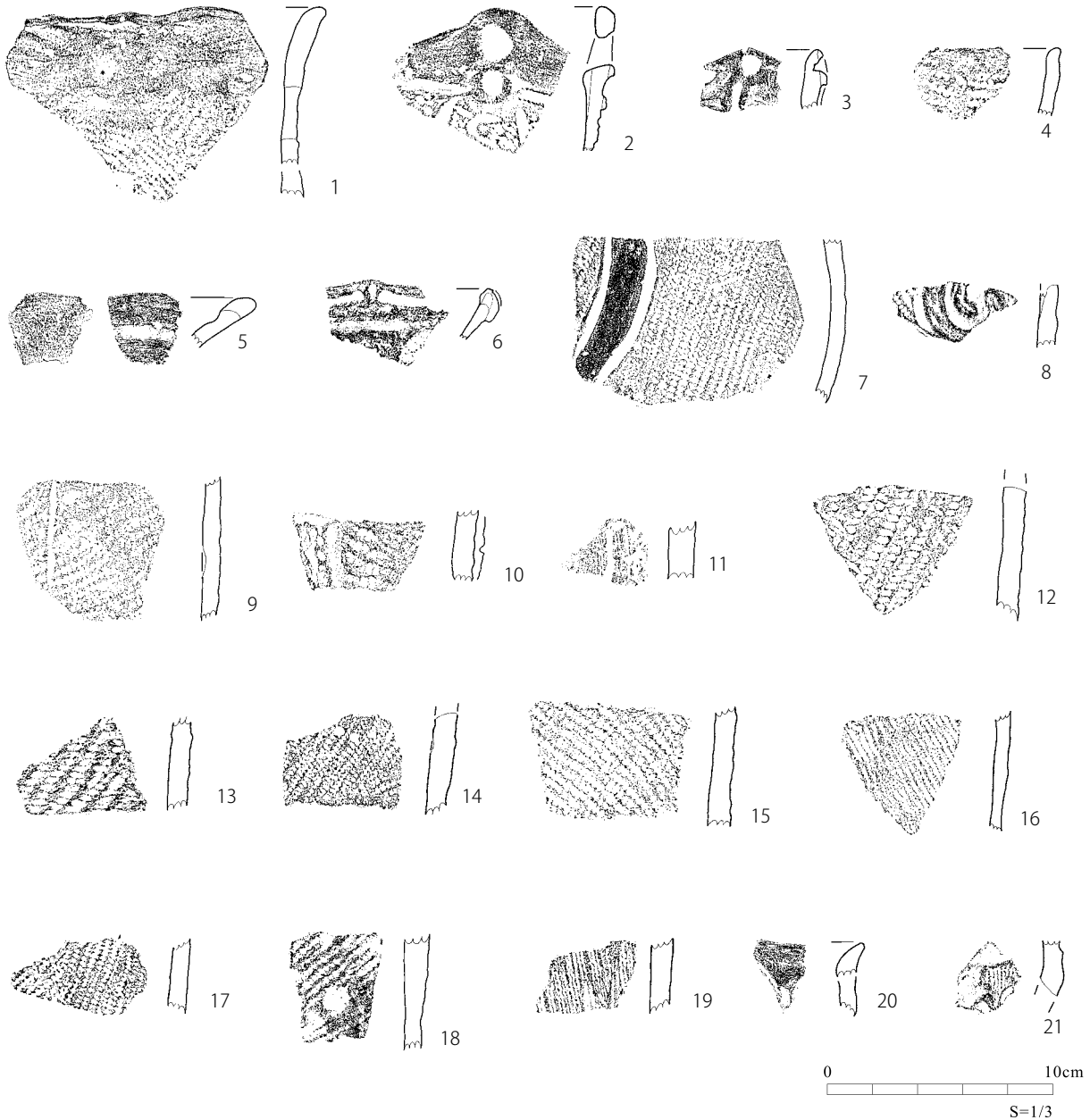
〔位置・確認面〕D区北西部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸260cm、短軸70cmの小判形を呈し、断面形は深さ80cmのU字形を呈する。底面はほぼ平坦で、中央部で平面形が直径23cmの円形を呈し、深さ50cmの小柱穴を確認した。

〔堆積土〕4層に細分される。1層は地山粒を含む黒褐色シルト、2層は地山粒を多く含む黒褐色シルト、3・4層は地山粒を多く含む暗褐色シルトである。いずれも自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕なし



No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SD84・堆	深鉢	縄文(LR)、外面：炭化物付着	451	40-14	11	B・SD84・堆	深鉢	条線文→沈線文	461	-
2	B・SD84・堆	深鉢	貫通孔、ボタン状貼付文、縄文(LR)→沈線文	452	40-15	12	B・SD84・堆	深鉢	縄文(RL、太い原体+結節文)	462	-
3	B・SD84・堆	深鉢	円形盲孔、沈線入降線文	453	40-16	13	B・SD84・堆	深鉢	縄文(RL)	463	-
4	B・SD84・堆	深鉢	縄文(LR)	454	-	14	B・SD84・堆	深鉢	縄文(LR)	464	-
5	B・SD84・堆	壺	無文(ミガキ)	455	40-17	15	B・SD84・堆	深鉢	縄文(LR)	465	-
6	B・SD84・堆	浅鉢	沈線入降線文、刺突	456	40-18	16	B・SD84・堆	深鉢	縄文(LR)	466	-
7	B・SD84・堆	深鉢	磨消縄文(LR)、沈線文	457	40-19	17	B・SD84・堆	深鉢	縄文(LR)	467	-
8	B・SD84・堆	深鉢	磨消縄文(LR)、渦巻文	459	40-20	18	B・SD84・堆	深鉢	縄文(RL)、摩滅	468	-
9	B・SD84・堆	深鉢	縄文(LR)→沈線文、摩滅	458	40-21	19	B・SD84・堆	深鉢	燃糸文(R)	469	-
10	B・SD84・堆	深鉢	円形刺突入降線文、縄文(R、太い原体)	460	-	20・21	B・SD84・堆	鉢?	降線文、縄文(LR)	471	-

第137図 SD84 溝跡混入遺物

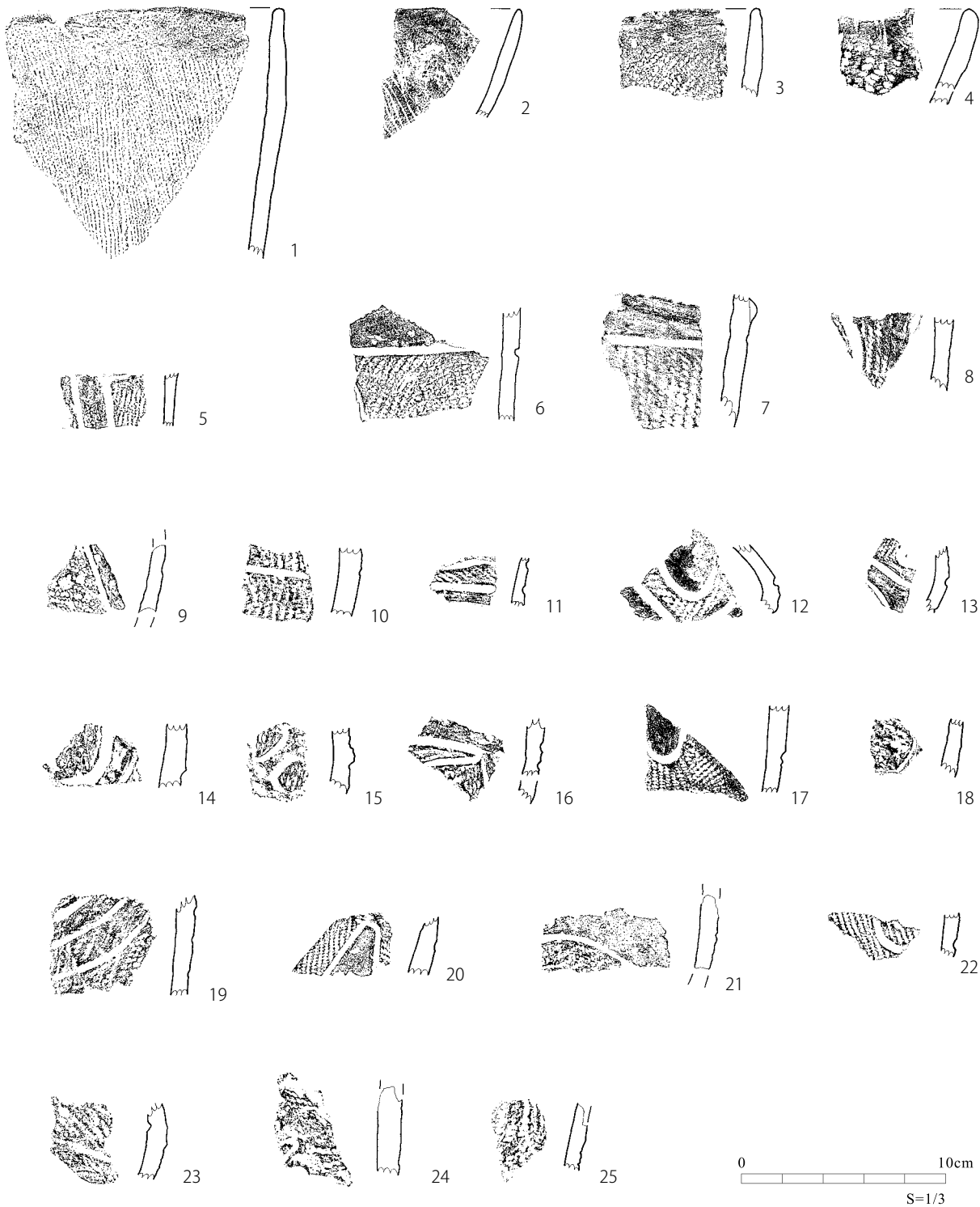
(4) その他の出土遺物

【柱穴】柱穴堆積土より縄文土器深鉢(第131図1～4・6～24)、壺(第131図5)、土器片加工円板(第146図16・17)、焼成粘土塊(写真図版43-43、胎土分析-01)、二次加工剥片(第150図7、第153図3)、微細剥離痕を有する剥片(第155図8)、剥片、石核(第157図5)、磨石(第162図3)、磨石/凹石(163図2)が出土した。



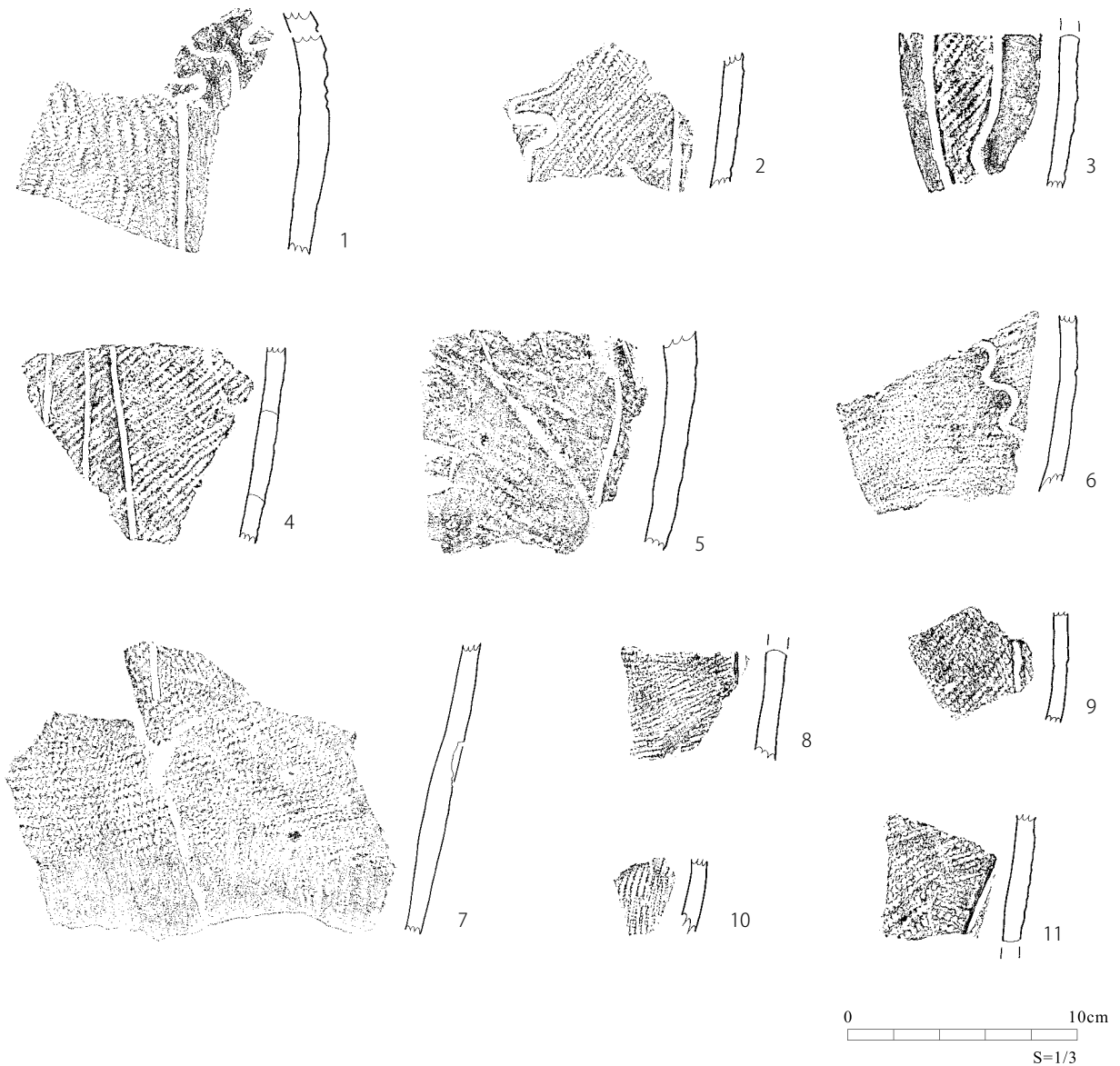
No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・確	深鉢	貫通孔、沈線文+凹形盲孔、沈線文、鎖状沈線文、内面：凹形盲孔、沈線文	596	41-12	9	B・表土	深鉢	凹形盲孔、沈線文、沈線入隆線文	577	41-20
2	試掘4T・攪乱	深鉢	C字状沈線入貼付文、刺突入隆線文、網目状擦糸文(R)、【胎土分析-13】	563	41-14	10	B・攪乱	深鉢	隆線文、縄文(LR)、摩滅	638	-
3	試掘3T・表土	深鉢	凹形盲孔、沈線文、【胎土分析-03】	555	41-13	11	試掘(層位不明)	深鉢	凹形刺突	551	41-21
4	B・確	深鉢	凹形盲孔	600	41-15	12	B・確	深鉢	磨消縄文(RL)→沈線文	599	41-22
5	B・確	深鉢	凹形刺突	597	41-16	13	B・表土	深鉢	凹形盲孔?、擦糸文(R)→沈線文	579	41-23
6	試掘4T・確	深鉢	橋状把手、連続刺突文、【胎土分析-12】	560	41-17	14	B・表土	深鉢	隆線文、縄文(L)、外面：炭化物附着	578	41-24
7	B・確	深鉢	凹形盲孔、( )状沈線文、磨消縄文(LR)→沈線文	595	41-18	15	B・確	深鉢	隆線文剥離、縄文(RL?)→沈線文	601	42-1
8	B・攪乱	深鉢	凹形盲孔、鎖状刺突文、沈線文	631	41-19	16	B・攪乱	深鉢	沈線文、擦糸文(R)	632	42-2
						17	試掘6T・確	深鉢	沈線文、縄文(LR?)、外面：種子痕?	566	42-3
						18	B・表土	深鉢	沈線文	580	42-4

第138図 遺構外出土遺物(1)



No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	試掘 9T・確	深鉢	撚糸文 (R)、外面：炭化物付着	573	42-5	14	B・確	深鉢	縄文 (L) → 沈線文	428	-
2	B・確	深鉢	撚糸文 (R)	598	-	15	試掘 (層位不明)	深鉢	隆線文、沈線区画、縄文 (?)	552	-
3	B・確	深鉢	縄文 (LR)	425	-	16	B・攪乱	深鉢	磨消縄文、沈線文	648	-
4	B・攪乱	深鉢	縄文 (RLR?)	669	-	17	C・攪乱	深鉢	磨消縄文 (LR)、沈線文	629	-
5	B・確	深鉢	磨消縄文 (LR)、沈線文	610	-	18	B・攪乱	深鉢	縄文 (LR) → 沈線文	643	-
6	B・確	深鉢	沈線文、縄文 (LR)	426	-	19	B・攪乱	深鉢	磨消縄文 (RL)、沈線文	646	42-7
7	B・表土	深鉢	隆線文、沈線文、縄文 (LR)	584	-	20	B・攪乱	深鉢	磨消縄文 (LR)、沈線文、外面：種子痕?	647	-
8	C・攪乱	深鉢	縄文 (LR) → 沈線文、外面：炭化物付着	630	-	21	B・攪乱	深鉢	磨消縄文 (LR)、沈線文	649	-
9	B・攪乱	深鉢	縄文 (LR) → 沈線文	653	-	22	B・攪乱	深鉢	縄文 (LR) → 沈線文	677	-
10	B・攪乱	深鉢	縄文 (RL) → 沈線文	678	-	23	B・確	深鉢	縄文 (R) → 沈線文	621	-
11	B・攪乱	深鉢	磨消縄文 (RL)、沈線文	654	-	24	B・攪乱	深鉢	縄文 (LR)、沈線文	641	-
12	B・表土	深鉢	磨消縄文 (LR)、沈線文、一部剥離、外面：炭化物付着	585	42-6	25	B・攪乱	深鉢	縄文 (RL) → 櫛歯状沈線文	642	-
13	B・攪乱	深鉢	磨消縄文 (RL)、沈線文	655	-						

第 139 図 遺構外出土遺物 (2)

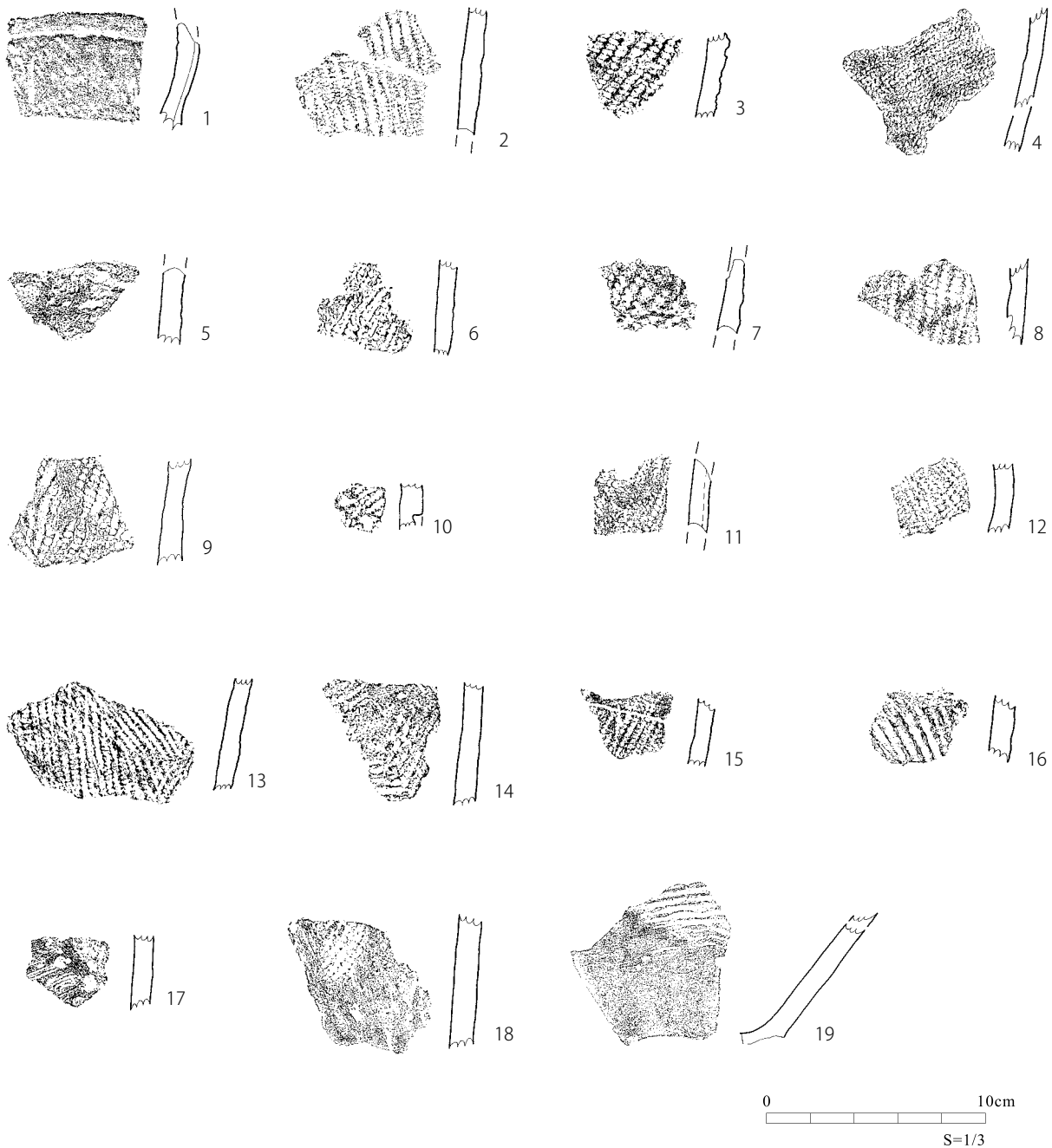


No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	試掘 4T・表土	深鉢	磨消縄文 (RL)、蕨手文、外面：炭化物付着	558	42-8	7	試掘 4T・確	深鉢	縄文 (LR) → 沈線文、一部ミガキ	562	42-13
2	試掘 6T・攪乱	深鉢	磨消縄文 (LR)、蕨手文	568	42-9	8	B・攪乱	深鉢	縄文 (RL) → 沈線文	657	-
3	B・攪乱	深鉢	磨消縄文 (LR)、沈線文	651	42-10	9	B・攪乱	深鉢	縄文 (LR) → 沈線文	659	-
4	B・攪乱	深鉢	磨消縄文 (LR)、沈線文、外面：炭化物付着	652	42-11	10	B・攪乱	深鉢	縄文 (LR)	658	-
5	B・攪乱	深鉢	縄文 (LR) → 沈線文、摩滅	661	-	11	B・攪乱	深鉢	縄文 (LR) → 沈線文、内面：種子痕	660	-
6	B・攪乱	深鉢	縄文 (LR) → ジグザグ文、摩滅	640	42-12						

第 140 図 遺構外出土遺物 (3)

【遺構外】遺構確認面、攪乱、試掘トレンチ、表土、排土、表採より縄文土器浅鉢 (第 144 図 8)、鉢 (第 144 図 5～7・9～11)、深鉢 (第 138～143 図、第 144 図 1～4)、壺 (第 144 図 12～14)、土錘 (第 145 図 4)、土器片加工円板 (第 146 図 19～36)、石鏃 (第 147 図 1～3・5～11)、石錐 (第 148 図 1)、石匙 (第 148 図 2)、スクレイパー (第 148 図 6)、ピエス・エスキーユ (第 149 図 2・3)、二次加工剥片 (第 149 図 11・第 150 図 5、151 図 1・2・6～8、152 図 1・2・6・8・9、第 153 図 1・2・4・5)、微細剥離痕を有する剥片 (第 154 図 2～4・6～9、155 図 2～6・9、第 156 図 6・7)、剥片、石核 (第 157 図 2・3、158 図 1・2・4～6、159 図 4)、磨製石斧 (第 160 図 1～3)、擦痕のある石製品 (第 160 図 4)、磨石 (第 162 図 2・4)、凹石 (第 163 図 1)、磨石/凹石/敲石 (第 164 図 3)、石皿 (第 167 図、169 図 2、171 図 3)、棒状石製品 (第 172・173 図 2) などが出土した。

【混入遺物】平安時代の SI16 竪穴住居跡の確認面、堆積土より縄文土器浅鉢 (第 132 図 2)、深鉢 (第

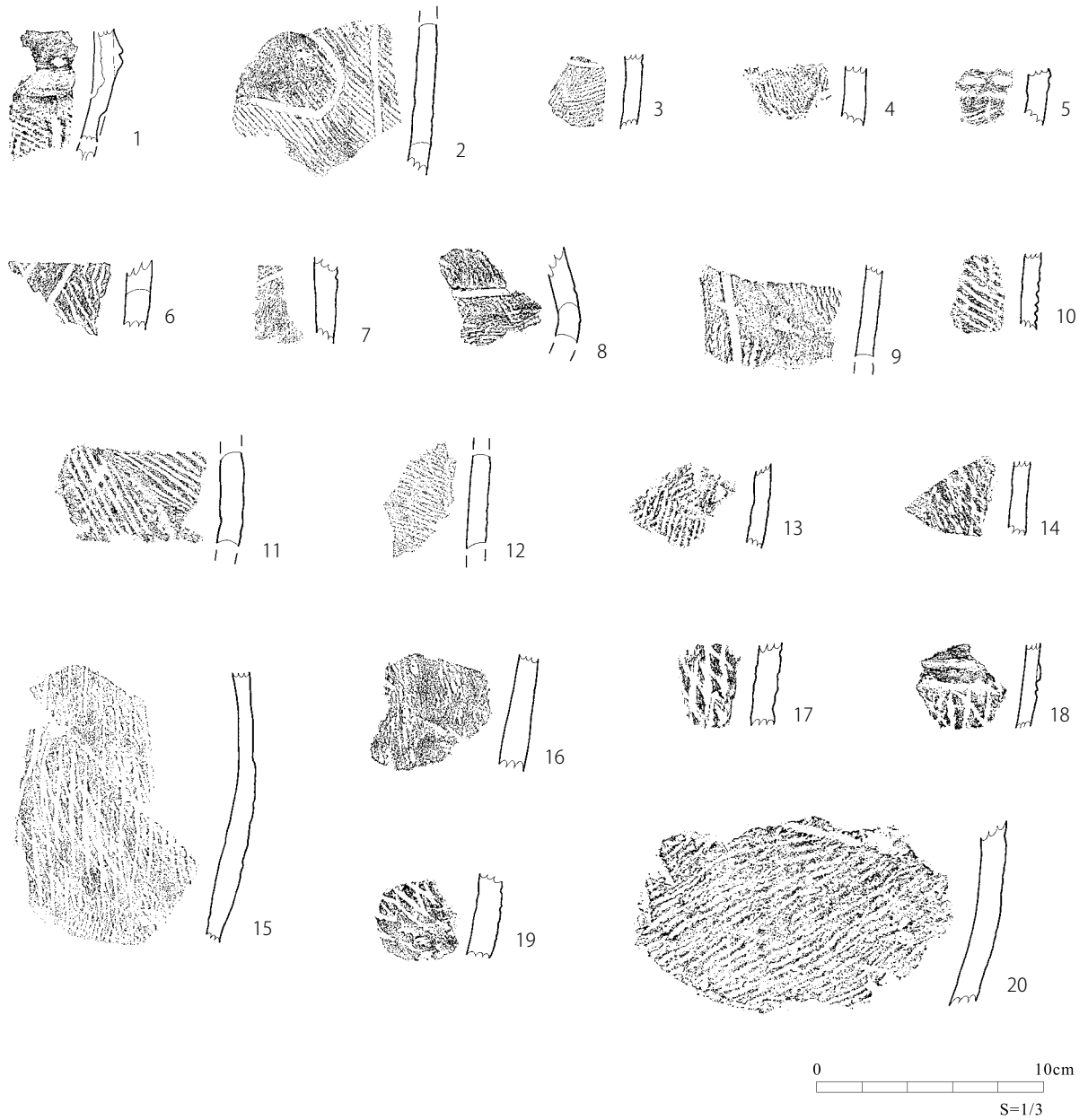


No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	A・排土	深鉢	凝白縁、縄文(L)、摩滅	628	-	11	B・確	深鉢	縄文(LR)、輪積痕	615	-
2	A・確	深鉢	縄文(RL)、外面：炭化物付着	591	-	12	B・確	深鉢	縄文(LR)	616	-
3	B・攪乱	深鉢	縄文(RL)、外面：炭化物付着	670	-	13	B・攪乱	深鉢	縄文(RL)	667	-
4	B・攪乱	深鉢	縄文(LR)、内面：漆？付着	671	-	14	B・攪乱	深鉢	縄文(L)	668	-
5	B・確	深鉢	縄文(L)	614	-	15	B・攪乱	深鉢	縄文(LR)、内面：種子痕	672	-
6	B・攪乱	深鉢	縄文(LR)	679	-	16	表採	深鉢	縄文(L、太い原体)	575	-
7	B・確	深鉢	縄文(LR、太い原体)	620	-	17	B・確	深鉢	縄文(LR、細い原体)	618	-
8	A・確	深鉢	縄文(LR、太い原体)	592	-	18	A・確	深鉢	縄文(RL)	593	-
9	B・確	深鉢	縄文(LR)	429	-	19	B・表土	深鉢	縄文(L)、ミガキ	588	-
10	試掘4T・確	深鉢	縄文(LR)、内外面：種子痕？	561	-						

第141図 遺構外出土遺物(4)

132 図1・3～19)、土器片加工円板(第146 図8)、二次加工剥片(第150 図1・9)、微細剥離痕を有する剥片(第156 図5)、剥片、石核(第157 図2、159 図2)、石皿(第168 図1)などが、古代のSX78 竪穴状遺構の堆積土より磨石(第164 図2)、剥片などが、中世以降のSD8・18・24・84・88 溝跡の確認面、堆積土より縄文土器浅鉢(第137 図6)、鉢(第135 図3、第137 図20・21)、深鉢(第133・134 図、第135 図2・4～11、第136 図、第137 図1～4・7～19)、壺(第137 図5)、皿(第

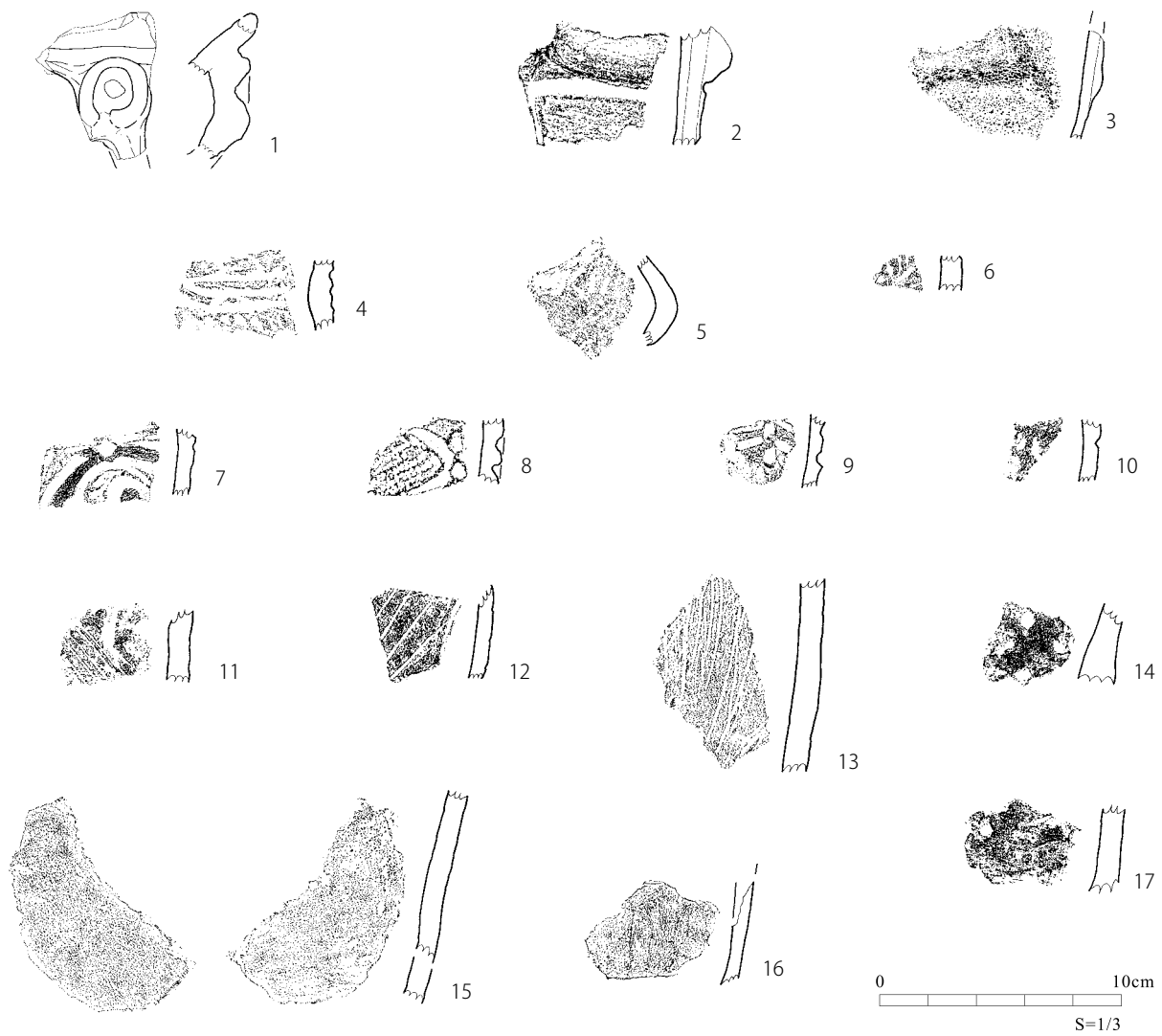




No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・攪乱	深鉢	隆線文、燃糸文 (R)	639	-	11	B・攪乱	深鉢	燃糸文 (R)	066	-
2	B・確	深鉢	燃糸文 (R) → 沈線文、一部磨消	609	42-16	12	B・攪乱	深鉢	燃糸文 (L)	067	-
3	B・確	深鉢	沈線文、燃糸文 (R、細い原体)	612	-	13	B・攪乱	深鉢	燃糸文 (R)	665	-
4	B・攪乱	深鉢	燃糸文 (L) → 沈線文	663	-	14	B・確	深鉢	燃糸文 (R、細い原体・太い原体?)	617	-
5	表採	深鉢	鎖状沈線文、沈線文、燃糸文 (R)	574	-	15	B・表土	深鉢	網目状燃糸文 (R)、燃糸文 (R)	589	42-14
6	B・確	深鉢	燃糸文 (R)、沈線文、外面：炭化物付着	611	-	16	B・確	深鉢	燃糸文 (R)	624	-
7	B・表土	深鉢	燃糸文 (R) → 沈線文	586	-	17	B・確	深鉢	網目状燃糸文 (LR)、外面：炭化物付着	622	-
8	B・攪乱	深鉢	沈線文、燃糸文 (R)	650	-	18	B・攪乱	深鉢	隆線文、網目状燃糸文 (R)	637	-
9	B・攪乱	深鉢	燃糸文 (R) → 沈線文	656	-	19	B・攪乱	深鉢	網目状燃糸文 (R)	674	-
10	B・確	深鉢	燃糸文 (LR)	619	-	20	B・攪乱	深鉢	燃糸文 (R)	666	42-15

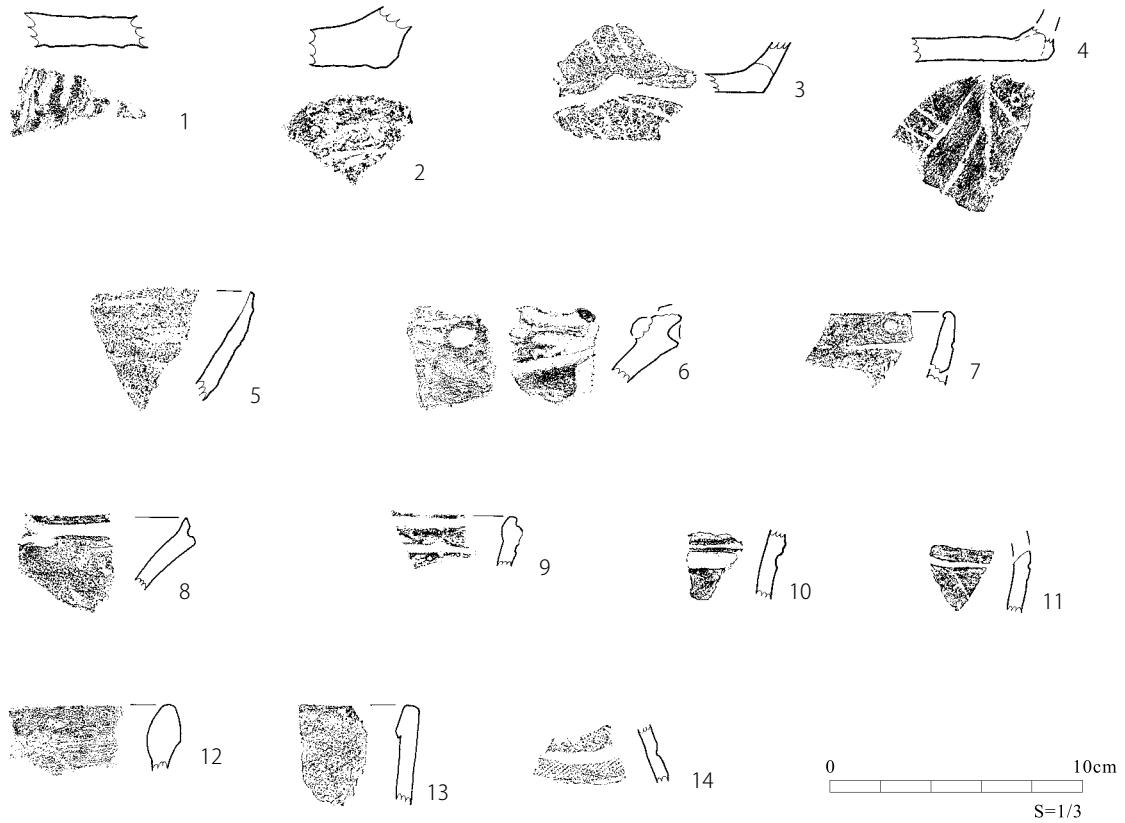
第 142 図 遺構外出土遺物 (5)

135 図 1) 土器片加工円板 (第 146 図 12・13)、二次加工剥片 (第 149 図 7・10、150 図 6、152 図 4)、剥片、磨石 (第 161 図 1)、石皿 (第 165 図 2) が、SB85 掘立柱建物跡 P2 堆積土より縄文土器深鉢の破片などが出土した。



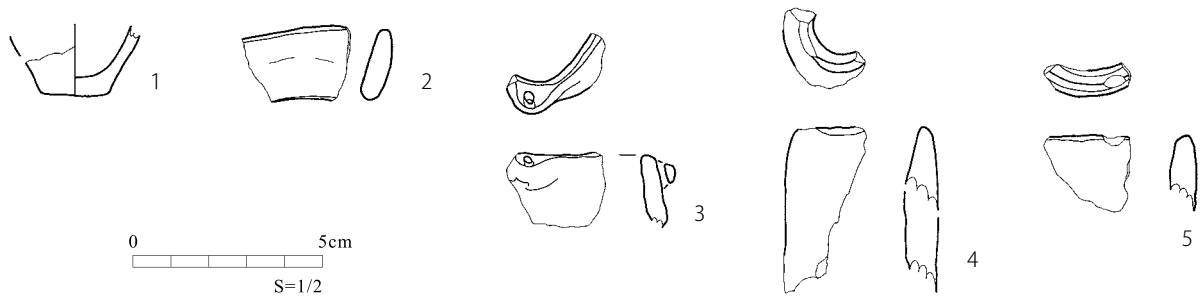
No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・表採	深鉢	凹形隆線貼付文、把手部?	576	42-17	10	B・確	深鉢	刻目文?	613	-
2	B・確	深鉢	突起?、沈線区画	604	42-18	11	B・確	深鉢	櫛描文	607	-
3	C・確	深鉢	隆線文	627	-	12	B・確	深鉢	櫛描文	608	-
4	B・攪乱	深鉢	沈線文	068	42-19	13	B・表土	深鉢	櫛描文	587	-
5	試掘(層位不明)	深鉢?	沈線文、摩滅	554	-	14	B・確	深鉢	刺突、ミガキ	625	-
6	試掘 6T・攪乱	深鉢	沈線文、摩滅、外面：種子痕?	569	-	15	試掘 5T・表土	深鉢	無文(ミガキ)、内面：種子痕	565	42-22
7	試掘 6T・確	深鉢	凹形盲孔、沈線文	567	42-20	16	B・確	深鉢	無文(ミガキ)	623	-
8	B・確	深鉢	凹形刺突、沈線区画、縄文(LR)	606	42-21	17	B・攪乱	深鉢	無文(ナデ・ミガキ)、外面：種子痕	673	-
9	B・確	深鉢	凹形刺突、沈線文	605	-						

第143図 遺構外出土遺物(6)



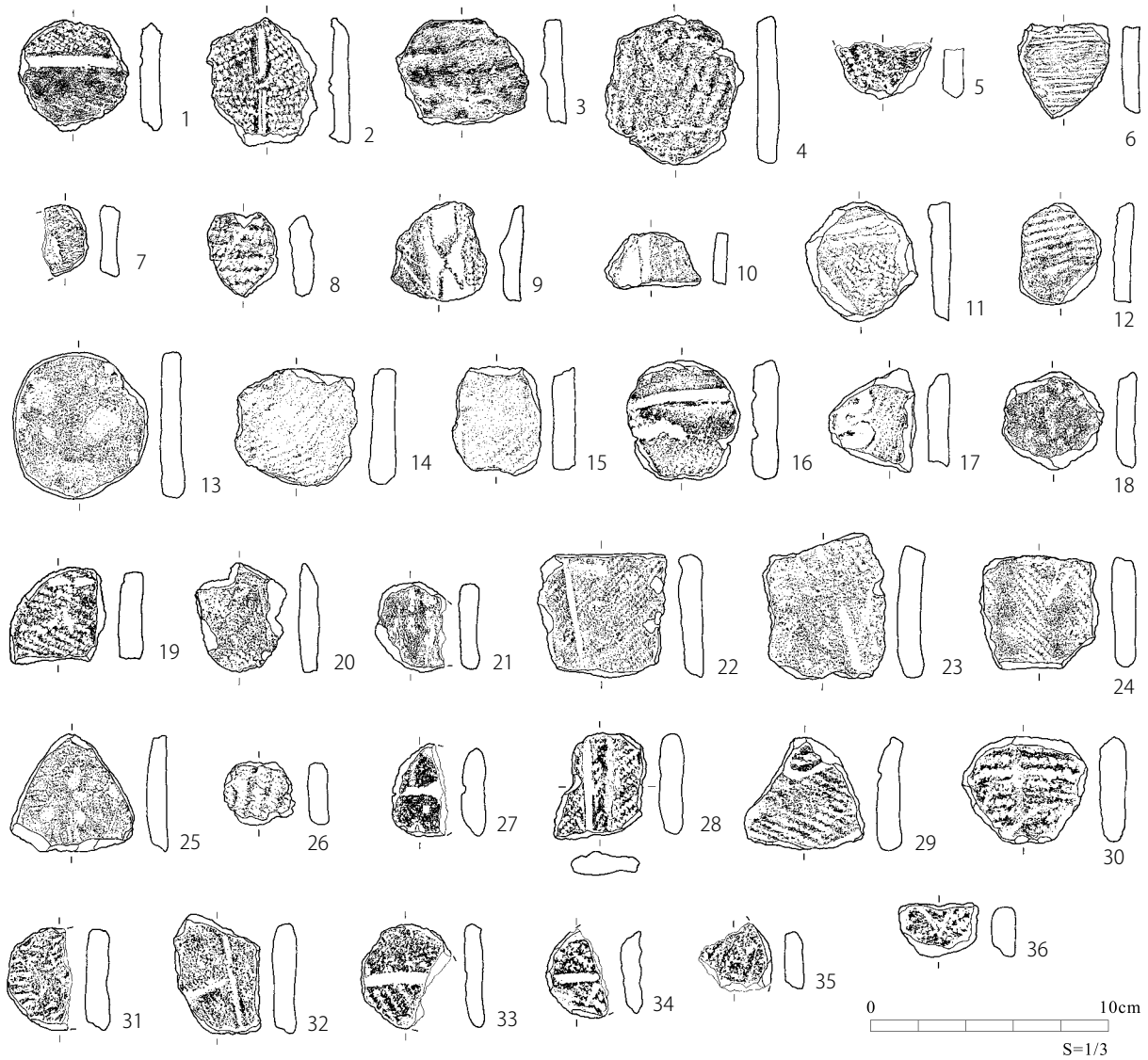
No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	試掘 (層位不明)	深鉢	底面：網代痕	553	-	8	B・攪乱	浅鉢	沈線文	634	-
2	試掘 3T・表土	深鉢	底面：不明圧痕文?	556	-	9	B・攪乱	鉢	沈線文、隆線文、縄文 (LR?)	635	-
3	試掘 4T・表土	深鉢	沈線文、底面：木葉痕	559	-	10	B・攪乱	鉢?	隆線文、沈線文	644	-
4	B・攪乱	深鉢	底面：木葉痕	682	-	11	B・攪乱	鉢?	沈線文、擦糸文 (R)	645	-
5	B・表土	鉢?	内外面：ナデ?による微隆起文?	581	-	12	B・表土	壺?	無文 (ミガキ)	582	-
6	B・表土	鉢?	隆線文、円形盲孔、沈線文	583	42-23	13	B・確	壺?	無文 (ミガキ)、内外面：炭化物付着	603	-
7	B・攪乱	鉢?	沈線文、縄文 (?)、補修孔?あり	633	-	14	B・確	壺	雲形文 / 縄文 (LR)	430	-

第 144 図 遺構外出土遺物 (7)



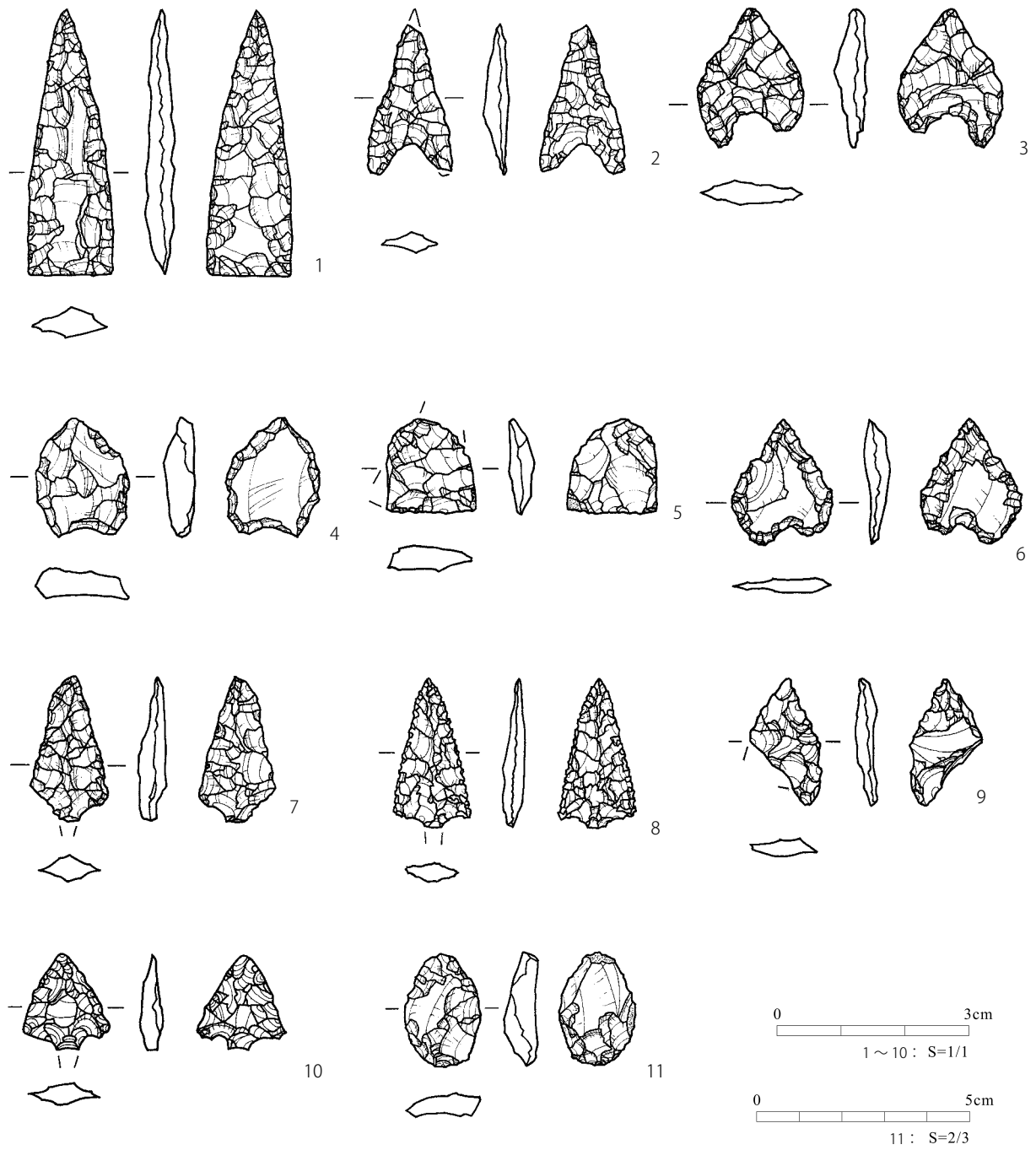
No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	器形	特徴	登録	写真
1	B・SK54・堆	ミニチュア	残存高 1.9cm、外面：無文 (ミガキ)、摩滅、底面：無文 (ミガキ)	144	43-37	4	B・攪乱	土錘	残存長 4.4cm、重量 9.8 g、外面：ナデ・ミガキ、内面：ナデ	093	43-40
2	B・SK54・堆	不明土製品	長さ 2.0cm、内外面：ミガキ	145	43-38	5	B・SK101・堆	土錘	残存長 2.0cm、重量 2.2 g、内外面：ナデ	102	43-41
3	B・SK22・下	ミニチュア	残存長 2.0cm、把手部?に貫通孔あり	384	43-39						

第 145 図 ミニチュア土器 土錘 不明土製品



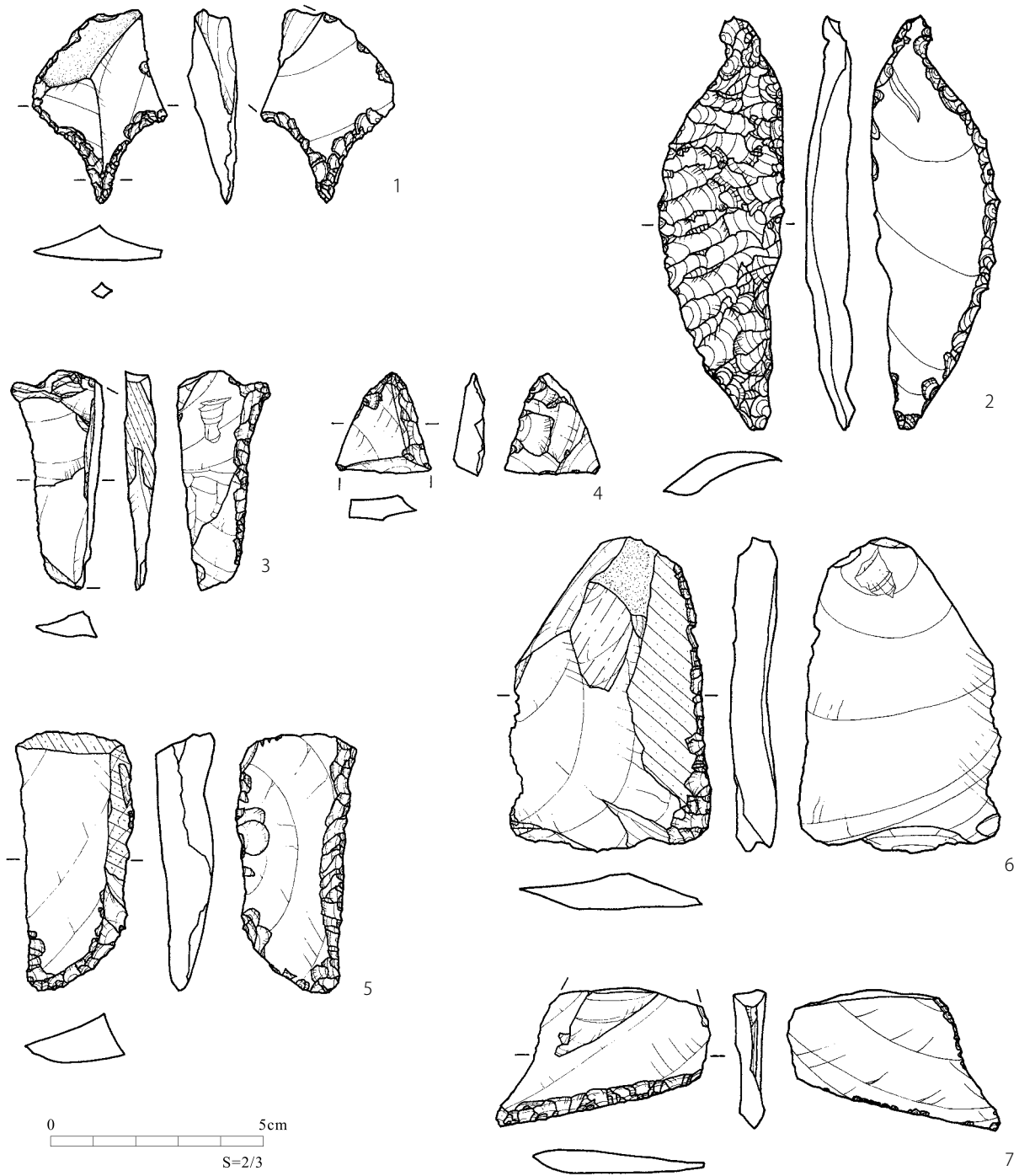
No.	遺構	特徴	長 (mm)	幅 (mm)	重 (g)	登録	写真	No.	遺構	特徴	長 (mm)	幅 (mm)	重 (g)	登録	写真
1	A・SK19・堆	周縁敲打、磨消縄文 (LR)、沈線文	46	46	20	060	43-1	21	試掘 4T・攪乱	周縁敲打、無文 (ミガキ・ナデ)、残存 2/3	38	(30)	10	564	43-21
2	A・SK19・堆	周縁敲打、磨消縄文 (LR) → 短沈線文	54	45	21	061	43-2	22	試掘 6T・攪乱	周縁敲打、部分研磨、縄文 (LR) → 沈線文、摩滅	52	54	31	570	43-22
3	B・SK66・堆	周縁敲打、隆線文	45	55	22	084	43-3	23	試掘 6T・攪乱	周縁敲打、擦糸文 (R)、沈線文、摩滅	62	51	39	571	43-23
4	B・SK87・堆	周縁敲打、縄文 (LR)、摩滅	62	58	33	098	43-4	24	試掘 6T・攪乱	周縁敲打、部分研磨、縄文 (LR)	48	50	29	572	43-24
5	B・SK68・堆	周縁敲打、縄文 (LR)、摩滅、残存 1/2	(24)	40	7	085	43-5	25	B・表土	周縁敲打、部分研磨、無文 (ミガキ)	50	52	22	590	43-25
6	B・SK101・堆	周縁敲打、擦糸文 (R)	40	38	12	101	43-6	26	A・確	周縁敲打、縄文 (LR)	27	30	8	594	43-26
7	B・SK6・堆	周縁敲打、擦糸文 (R)、残存 1/2	30	(20)	4	181	43-7	27	B・確	周縁敲打、一部研磨、無文、摩滅、残存 1/2	39	(23)	9	626	43-27
8	B・SK92・堆	周縁敲打、縄文 (R)	35	29	9	206	43-8	28	B・攪乱	周縁敲打、一部研磨、隆線文、沈線文、縄文 (RL)、焼成後両側穿孔	45	(39)	16	636	43-28
9	B・SK56・堆	周縁敲打、鎖状隆線文、縄文 (RL)	42	40	11	220a	43-9	29	B・攪乱	周縁敲打、縄文 (R) → 沈線文	47	50	23	683	43-29
10	B・SK56・堆	周縁敲打、鎖状隆線文、縄文 (RL)、残存 2/1	(24)	40	6	220b	43-10	30	B・攪乱	周縁敲打、部分研磨、縄文 (LR) → 沈線文、摩滅	45	53	29	684	43-30
11	B・SK22・堆 7	周縁敲打、部分研磨、磨消縄文 (LR) → 沈線文	50	42	21	385	43-11	31	B・攪乱	周縁敲打、部分研磨、縄文 (L)、残存 1/2	43	(27)	14	685	43-31
12	B・SD84・堆	周縁敲打、部分研磨、縄文 (R)、摩滅	42	34	11	470	43-12	32	B・攪乱	周縁敲打、沈線文、摩滅、残存 2/3	50	(37)	17	686	43-32
13	B・SD88・堆	周縁敲打、全面研磨、無文、摩滅	61	57	39	476	43-13	33	B・攪乱	周縁敲打、縄文 (L) → 沈線文、残存 2/3	44	(38)	12	687	43-33
14	B・SL86・確	周縁敲打、縄文 (L)、摩滅	49	51	33	501	43-14	34	B・攪乱	周縁敲打、全面研磨か、磨消縄文 (LR) → 沈線文、残存 1/2	38	(27)	8	688	43-34
15	B・SL86・確	周縁敲打、縄文 (RL)、摩滅	46	37	20	502	43-15	35	B・攪乱	周縁敲打、部分研磨、縄文 (LR)、残存 2/3	(29)	(31)	7	690	43-35
16	B・P229・堆	周縁敲打、部分研磨、沈線文、縄文 (LR)	51	47	25	530	43-16	36	B・攪乱	周縁敲打、部分研磨、縄文 (LR)、摩滅、残存 1/2	(23)	33	8	689	43-36
17	B・P279・堆	周縁敲打、部分研磨、縄文 (RL) → S字状沈線文、摩滅	44	37	12	542	43-17								
18	B・SI16・堆	周縁敲打、無文 (ミガキ)	41	42	15	405	43-18								
19	B・攪乱	周縁敲打、部分研磨、縄文 (RL) → 刺突文、残存 1/3	(41)	(40)	19	091	43-19								
20	試掘 3T・表土	周縁敲打、縄文 (LR)、沈線文、一部欠損	46	38	14	557	43-20								

第 146 図 土器片加工円板



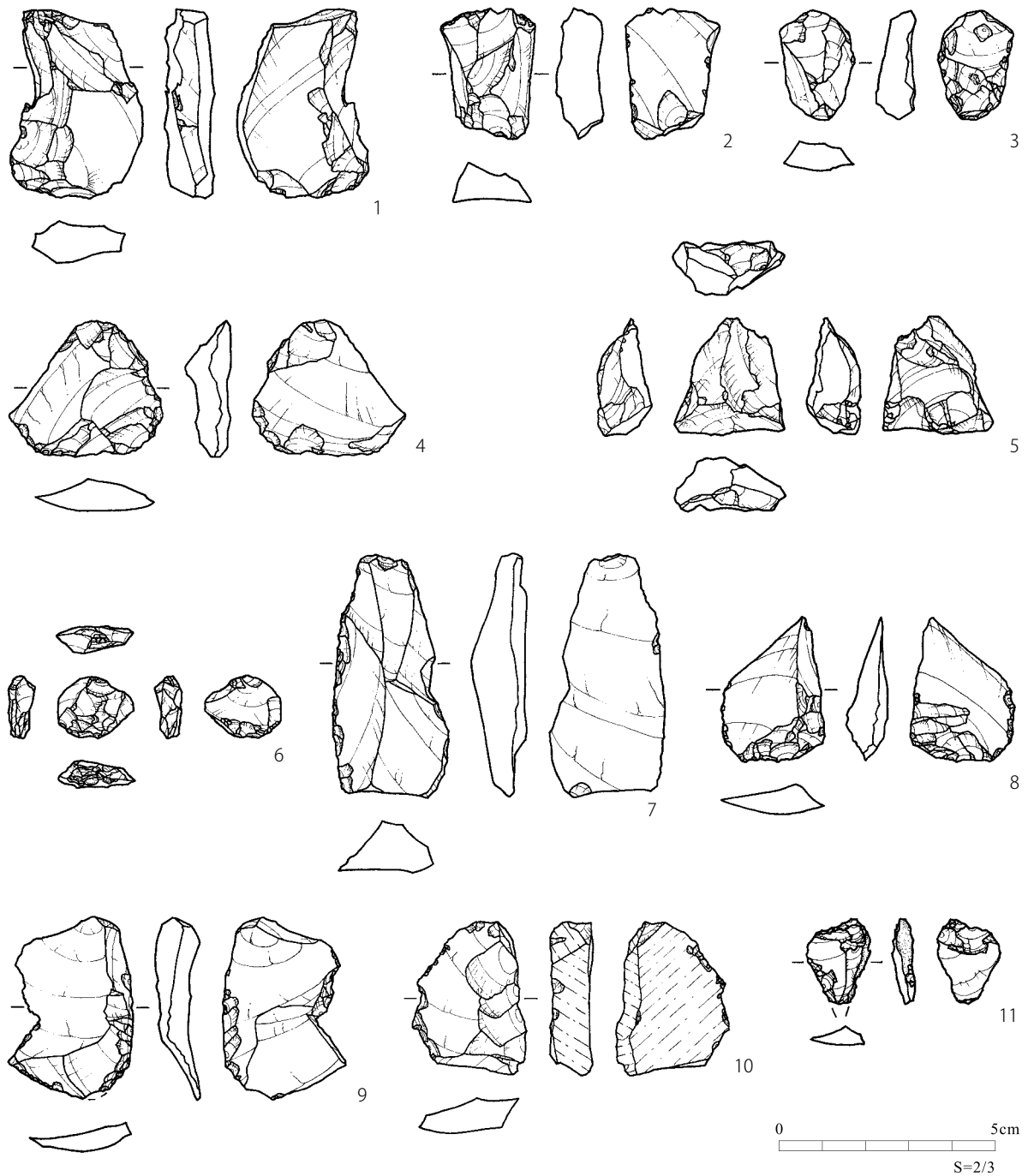
No.	遺構	層位	種類	残存	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石材	特徴	登録	写真
1	B区	攪乱	石鏃	完形	41.63	13.34	4.43	2.2	玉髓質珪化木	平基無茎。二次加工部は素材面よりも強い光沢を有する。加熱処理痕跡か。	713	44-1
2	B区	攪乱	石鏃	完形	23.03	13.13	3.21	0.6	珪質頁岩	凹基無茎。長身で基部の挟りが深く脚部が長い。先端部に衝撃剥離痕。	714	44-2
3	B区	確認面	石鏃	完形	21.83	16.17	4.24	1.0	珪質頁岩	凹基無茎。寸詰まり形状で基部の挟りが深く、中央部側縁が膨らみをもつ。	715	44-3
4	B区 SK55	堆積土	石鏃	完形	18.43	14.25	4.07	1.1	珪質頁岩	凹基無茎。調整剥離は縁辺にとどまり、裏面に素材剥片の腹面を大きく残す。	716	44-4
5	C区	確認面	石鏃	欠損	14.82	13.95	3.63	0.8	黒曜石	平基無茎。先端に礫面を残す。【原産地推定：ZA01-013（不明原産地2）】	717	44-5
6	試掘 4T	表土	石鏃	完形	19.26	15.08	2.61	0.7	珪質頁岩	凹基無茎。剥片を横位に用い、周縁調整によって寸詰まりの形状を作成。背腹両面に素材面を残す。先端部側に最大厚をもつ。	718	44-6
7	-	表探	石鏃	欠損	22.28	11.97	4.50	0.8	珪化凝灰岩	凸基有茎。基部は裏面側からの衝撃により折損。長身の三角形。先端部は非対称であることから先端部が欠損した後に再加工されたと考えられる。	719	44-7
8	-	表探	石鏃	欠損	23.22	12.03	3.26	0.7	珪質頁岩	基部に若干の挟りをもつ有茎石鏃。基部は裏面側からの衝撃により折損。浅く細長い周縁調整によって器面の両面加工がなされ、側縁は鋸歯状を呈する。	757	44-8
9	-	表探	石鏃	欠損	19.38	10.22	2.86	0.4	黒曜石	凹基無茎。背面側からの衝撃により左下半部を大きく欠損。周縁調整の剥離痕のサイズにばらつきが大きい。裏面の中央部と、裏面右側縁に折れ面と思われる素材面を残す。【原産地推定：ZA01-018（板山系）】	760	44-9
10	-	表探	石鏃	欠損	14.64	13.32	3.07	0.5	玉髓	平基有茎。基部は裏面側からの衝撃により折損。剥片を素材とし、連続する密な周縁調整によって薄手の寸詰まりの形状を作成。背腹両面に素材面を残す。	763	44-10
11	試掘 6T	確認面	石鏃	完形	26.07	17.39	7.76	3.8	珪質頁岩	周縁部に両面加工を施す小型の石器。平面形状は楕円形を呈する。両面に素材剥片の剥離面および礫面を残す。	720	44-11

第147図 石鏃



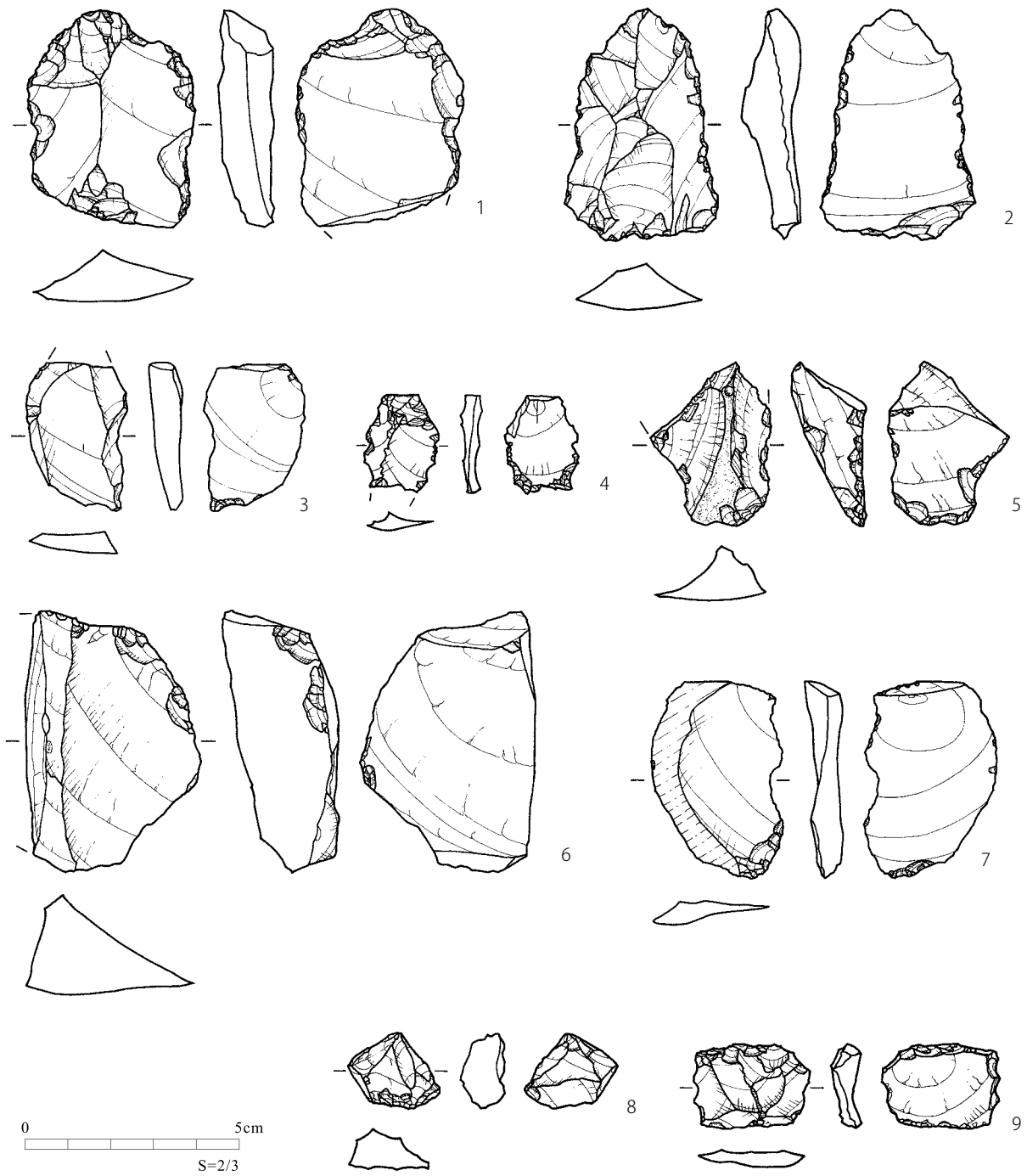
No.	遺構	層位	種類	残存	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石材	特徴	登録	写真
1	-	表採	石錐	欠損	46.10	31.36	10.79	9.4	珪質頁岩	素材剥片の背面中央の稜を利用して、末端部にV字状の錐部を作出。素材剥片の打面部は腹面からの衝撃により折損。背面に砥礫面を残す。	758	44-13
2	-	表採	石匙	完形	97.01	30.19	6.39	18.2	珪質頁岩	縦長剥片を素材とした縦形石匙。素材剥片の打面部につまみを作出。左側縁は外湾し、右側縁は直線的となる。左側縁には背面中央部へと内奥する細長い調整剥離が並列する。それらより短い調整剥離が腹面右側縁からつまみ部にかけてと、右側縁下半部中央になされる。腹面右側縁の周縁調整は、背面左側縁の細長い連続的な調整に先行する。一方、右側縁下半部中央の調整は背面の周縁調整を切っており、先端側へ向かって急角度となる。	762	44-12
3	B区 SK54	堆積土	スクレイパー	一部	51.98	21.25	6.28	6.5	珪質頁岩	素材となる縦長剥片の主剥離面側の側縁に連続的な二次加工を加え、直線的な刃部を作出。素材の縦方向に欠損する。	722	44-16
4	B区 SK68	堆積土	スクレイパー	一部	23.65	22.08	6.50	3.1	珪質頁岩	素材背面側の側縁に急角度の調整剥離を施し、直線的な刃部を作出。刃部は背面側の急角度調整の後、腹面側に平坦な調整を施す。刃部を切る下半部の折損と、左側縁の折損の後、左側縁の末端に90度近くの急斜度調整がなされる。	723	44-14
5	B区 SK7	堆積土	スクレイパー	完形	23.20	61.04	9.04	18.6	珪質頁岩	横長剥片の右側縁に腹面側から連続する調整剥離によって刃部を作出。右側縁の調整は打面まで及び外湾する。打面と背面に礫面を残す。	724	44-17
6	試掘 8T	確認面	スクレイパー	完形	74.21	46.72	8.89	33.2	珪質頁岩	縦長剥片の右側縁に腹面側からの連続する二次加工によって直線的な刃部を作出。背面の一部に礫面を残す。単剥離打面。末端はステップ・ターミネーション。	726	44-18
7	B区 SB100	P2堆積土	スクレイパー	欠損	27.79	54.89	5.91	8.8	珪質頁岩	素材剥片の末端に腹面側から連続的な二次加工を加え、直線的な刃部を作出。左側縁には微細剥離痕がみられる。右側縁下半部と打面は折損。	725	44-15

第148図 石錐 石匙 スクレイパー



No.	遺構	層位	種類	残存	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石材	特徴	登録	写真
1	B区 SK22	堆積土 9層	彫刻刃形石器	完形	39.71	29.48	10.34	14.6	珪質頁岩	縦長剥片末端側の折面を打面とし、左側縁に2条のファシットを施す。彫り面作出に先立って左側縁から主剥離面の中央付近まで調整剥離を施す。【使用痕分析】	721	45-1
2	B区	確認面	ピエス・エスキュー	完形	29.18	22.18	10.36	6.3	珪質頁岩	剥片の両側縁に対向する剥離痕がみられる。背面に一部礫面を残す。	727	45-2
3	B区	確認面	ピエス・エスキュー	完形	25.31	17.62	9.15	3.9	珪化凝灰岩	素材剥片の上下・左右に対向する剥離がみられる。被熱痕跡。	728	45-3
4	B区	堆積土	ピエス・エスキュー	完形	31.86	35.26	10.30	5.4	凝灰岩	素材剥片の主剥離面の末端に外湾する調整剥離を施す。側縁側から対向する剥離がみられる。	729	45-6
5	B区	堆積土	ピエス・エスキュー	完形	27.01	25.56	11.59	5.2	玉髓	打面が大きく末端が先鋭となる、寸詰まりの剥片を素材とする。腹面に上下から対向する剥離痕がみられる。	828	45-5
6	B区	堆積土	ピエス・エスキュー	完形	13.97	17.71	5.03	1.3	珪質頁岩	小型の横長剥片を素材とする。上下方向から対向する剥離が背面両面にみられる。剥片末端からの伸びる剥離痕は末端部がステップ・ターミネーションとなる。	829	45-4
7	A区	堆積土	二次加工剥片	完形	55.54	26.85	12.71	13.8	凝灰質砂岩	背面中央に直線的な稜をもつ石刃を素材とする。左側縁全体に調整剥離がみられる。剥離痕の大きさにばらつきがみられる。右側縁下半部付近に節理面を残す。	741	45-7
8	B区	堆積土 下層	二次加工剥片	完形	34.09	23.20	8.97	4.8	珪質頁岩	両側縁が平行する寸詰まり剥片を素材とし、打面を中心とする縁辺の両面に調整剥離を施す。平行する両側縁に微細剥離痕。剥片末端はヒンジ・ターミネーション。	744	45-8
9	B区	堆積土 1層	二次加工剥片	欠損	40.46	28.14	8.63	7.7	珪質頁岩	右側縁下半部の表裏両面に奥へと伸びる調整剥離を施す。左側縁の下半部には平面側へと微細剥離痕がみられる。幅広の打面をもつ。	745	45-9
10	B区	確認面	二次加工剥片	完形	36.26	26.47	9.32	8.9	玉髓	背面に大きく礫面を残す剥片の主剥離面を作業面とする。主剥離面の右側縁を打面として、連続的に寸詰まりの剥片を剥離。主剥離面の左側縁に調整剥離を施す。	746	45-10
11	-	表採	二次加工剥片	欠損	15.19	19.26	4.18	1.0	黒曜石	小型剥片を素材とする。打面部の両面と左側縁の背面側に平坦な二次加工を施す。背面右半部に礫面を残す。末端部を欠損。【原産地推定:ZA01-022(不明原産地2)】	764	45-14

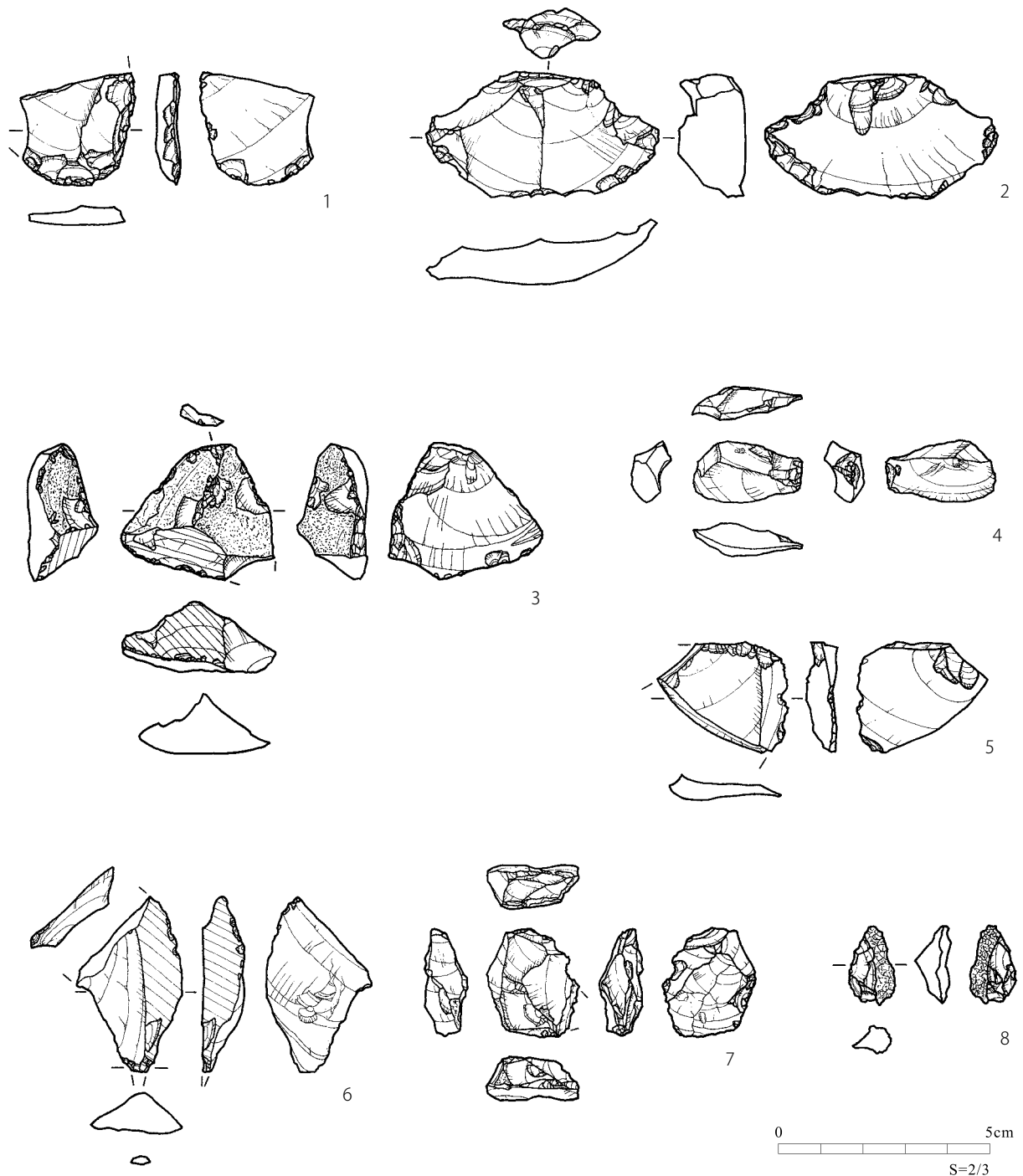
第149図 彫刻刃形石器 ピエス・エスキュー 二次加工剥片 (1)



No.	遺構	層位	種類	残存	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石材	特徴	登録	写真
1	B区 SI16	堆積土	二次加工剥片	欠損	53.08	39.14	12.90	24.8	珪質頁岩	両側縁が平行する石刃状の剥片を素材とし、打面・両側縁に両面から調整剥離を施す。下半部は背面側から衝撃で折損し、折れ面から背面側に階段状の剥離痕を施す。	742	45-15
2	B区 SK19	堆積土	二次加工剥片	完形	53.41	35.48	13.14	20.8	珪質頁岩	両側縁が平行する石刃状の剥片を素材とし、左右両側縁に鋸歯縁状の剥離を施す。末端は背面からの衝撃により折損。剥片の打面および末端の折れ面を打面とし、背面中央の稜線に平行する方向に剥片剥離がなされており、石核へと転用か。	743	45-16
3	B区 SB111	P5 堆積土	二次加工剥片	欠損	37.59	23.46	7.23	6.1	頁岩	剥片末端にやや内湾する調整剥離を施す。剥片の右半部を一部欠損する。	747	45-17
4	B区 SK9	堆積土 1層	二次加工剥片	欠損	21.97	17.04	3.52	1.4	玉髓	腹面の下半部の縁辺に調整剥離を施す。背面側からの衝撃により末端部を欠損。	775	45-12
5	試掘	表土	二次加工剥片	欠損	40.27	28.20	17.29	9.6	頁岩	剥片縁辺の両面に幅広の調整剥離を施す。背面は多方向からの剥離痕からなり、中央に転離面を残す。打面部を大きく欠損。	771	45-19
6	B区 SD88	堆積土	二次加工剥片	欠損	54.39	40.55	21.41	45	流紋岩	背面側右側縁の上半部に平坦な調整剥離を重複的に施す。	776	45-20
7	B区 P285	堆積土	二次加工剥片	完形	42.87	30.4	8.18	8.5	珪質頁岩	幅広の単剥離打面を有する剥片の末端部に調整剥離を施す。調整剥離は背面側で浅く腹面側で深い。	748	45-18
8	B区 SK82	堆積土	二次加工剥片	完形	16.99	21.71	9.59	2.8	碧玉 (緑色)	末端部は細長く内奥に伸びる剥離と急角度の剥離によって調整。打面側は側面からの両極剥離によって欠損。	782	45-13
9	B区 SI16	堆積土	二次加工剥片	完形	19.14	27.64	5.42	3.0	珪質頁岩	横長剥片を素材として腹面側の全周に調整剥離を施し、平面形は四角形となる。背面には多方向からの剥離痕が重畳し、中央に少量の節理面を残す。	781	45-11

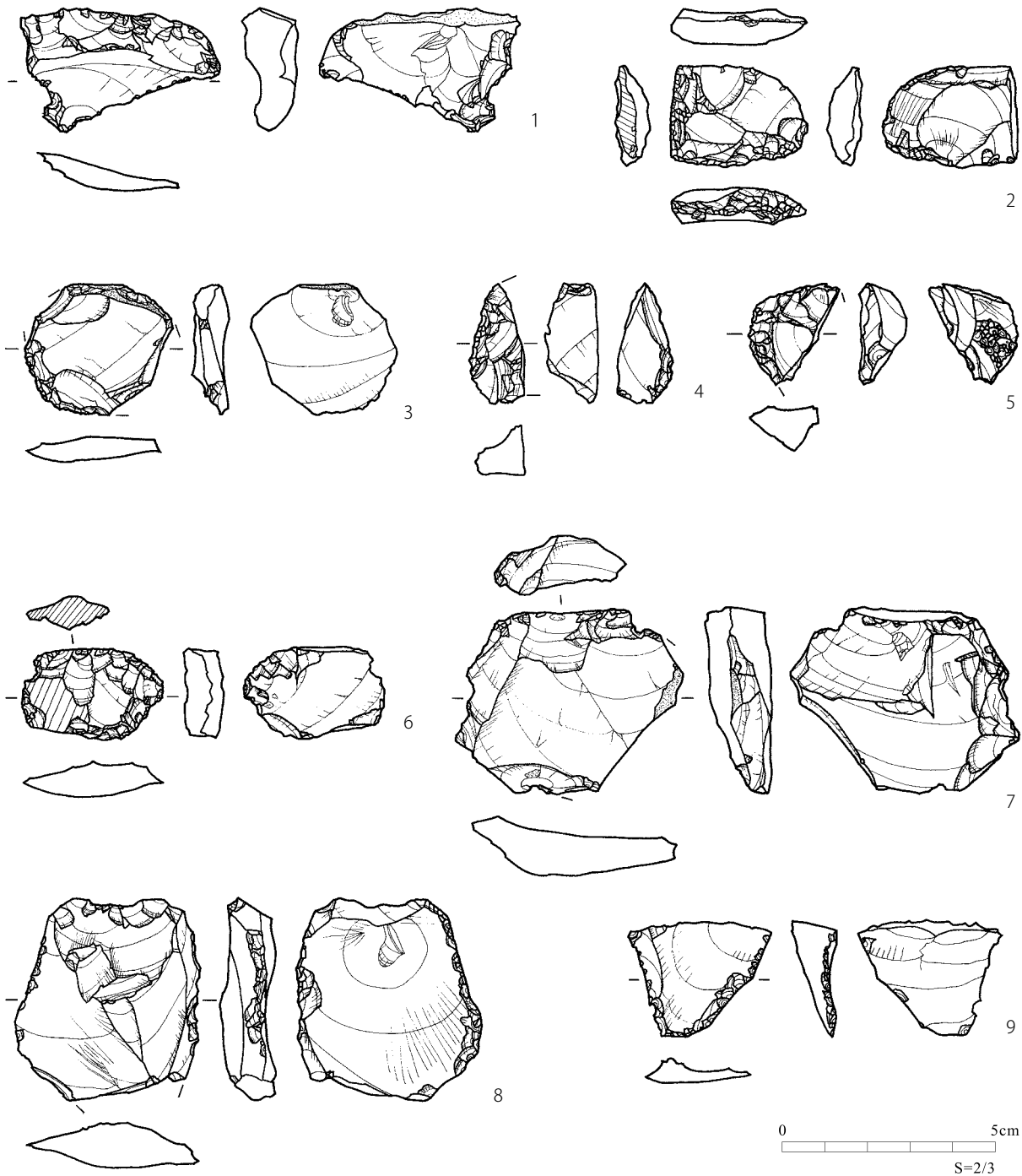
第150図 二次加工剥片 (2)





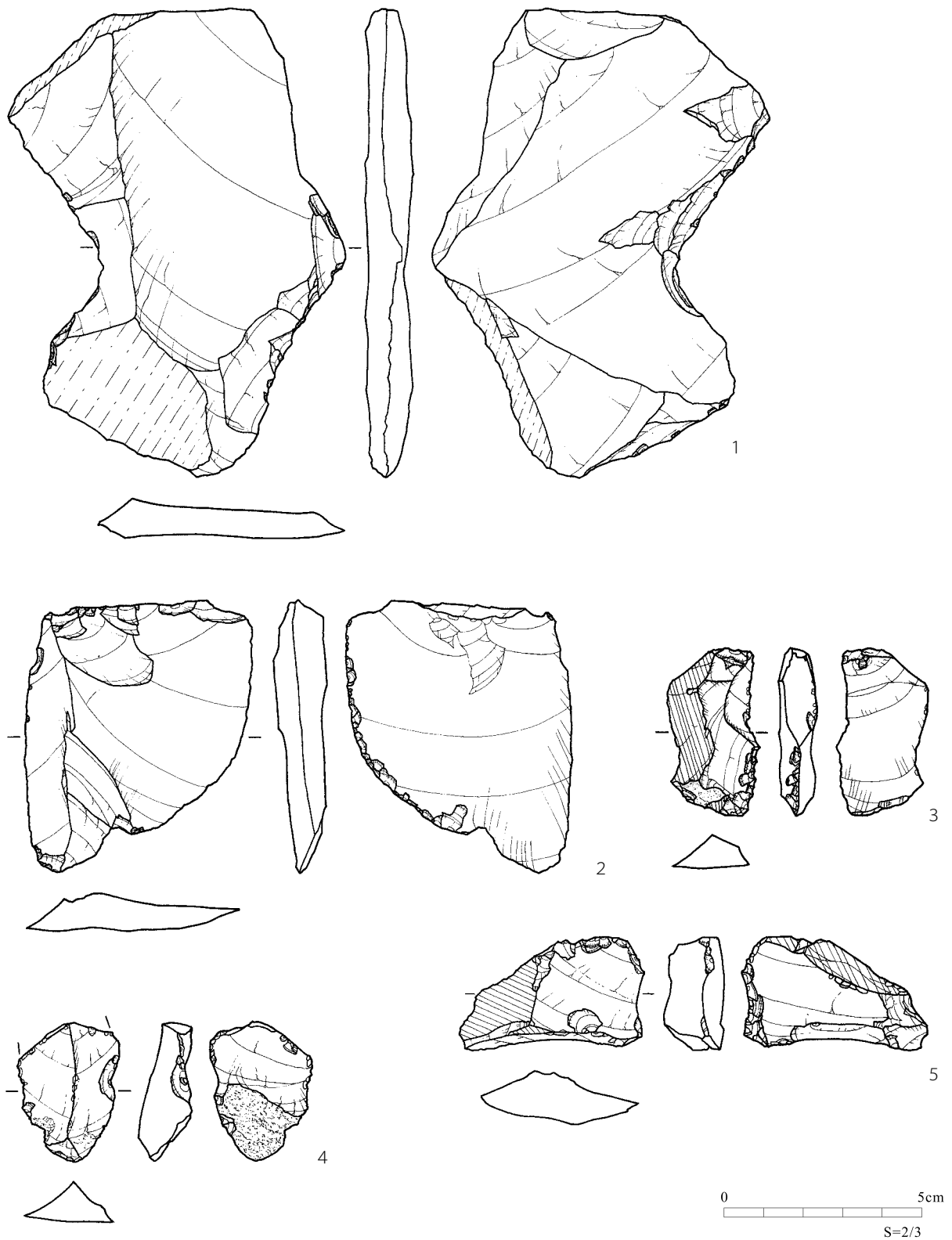
No.	遺構	層位	種類	残存	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石材	特徴	登録	写真
1	-	表採	二次加工剥片	欠損	24.02	28.18	5.27	4.3	珪質頁岩	剥片の末端に円弧状の刃部を、右側縁に急角度の調整剥離によって直線的な刃部を作出。腹面側には平坦剥離がまばらにみられる。打面部は折損。	790	46-1
2	B区	攪乱	二次加工剥片	完形	29.52	54.25	11.90	14.2	珪質頁岩	横長剥片を素材として末端部の背腹両面に幅広の調整剥離を施す。右側縁は背面側への調整剥離によって鋸歯縁状を呈する。	791	46-8
3	B区 SK54	堆積土	二次加工剥片	欠損	32.87	36.19	16.21	11.6	珪質頁岩	単剥離打面で末端側が幅広となる剥片を素材とし、右側縁の腹面側に連続的な調整剥離を施す。左側縁の上半部と右側縁に微細剥離痕。右側縁下端部を欠損。背面は礫面と節理面で構成。	804	46-2
4	B区 SK39	堆積土	二次加工剥片	完形	16.07	25.63	8.04	2.6	珪質頁岩	横長剥片の右側縁に階段状の剥離を背腹両面に施す。打面は幅広で厚く、背面は多方向からの剥離痕で構成。	830	46-4
5	B区 SK28	堆積土 2層	二次加工剥片	欠損	30.36	23.24	4.75	3.6	珪質頁岩	打面部から背面側へ連続的に調整剥離を施す。腹面の右側縁に平坦剥離が施された後、左側縁下半部および打面左半分を欠損。右側縁の両面に微細な剥離痕。	778	46-6
6	B区	確認面	二次加工剥片	欠損	40.70	25.13	8.99	6.4	珪質頁岩	縦長剥片を素材とし、末端へと収斂する側縁の背面側に調整剥離を施す。調整剥離は若干内湾する。折損している末端には錐状の刃部を作出か。左右両側縁には微細な剥離痕がまばらに分布。打面部は背面からの衝撃により折損。	831	46-3
7	B区	攪乱	二次加工剥片	欠損	25.67	20.72	8.54	3.8	碧玉	腹面は凹凸が激しく、一方への剥離軸がみられない。腹面両側縁には対向する小剥離痕がみられ、両極打撃か。背面は多方向からの剥片剥離痕で構成。	834	46-7
8	試掘 5T	表土	二次加工剥片	完形	18.37	9.82	5.79	1.1	玉髓	片側半分が結晶質となる素材の両面に、幅広の調整剥離を施す。	777	46-5

第151図 二次加工剥片 (3)



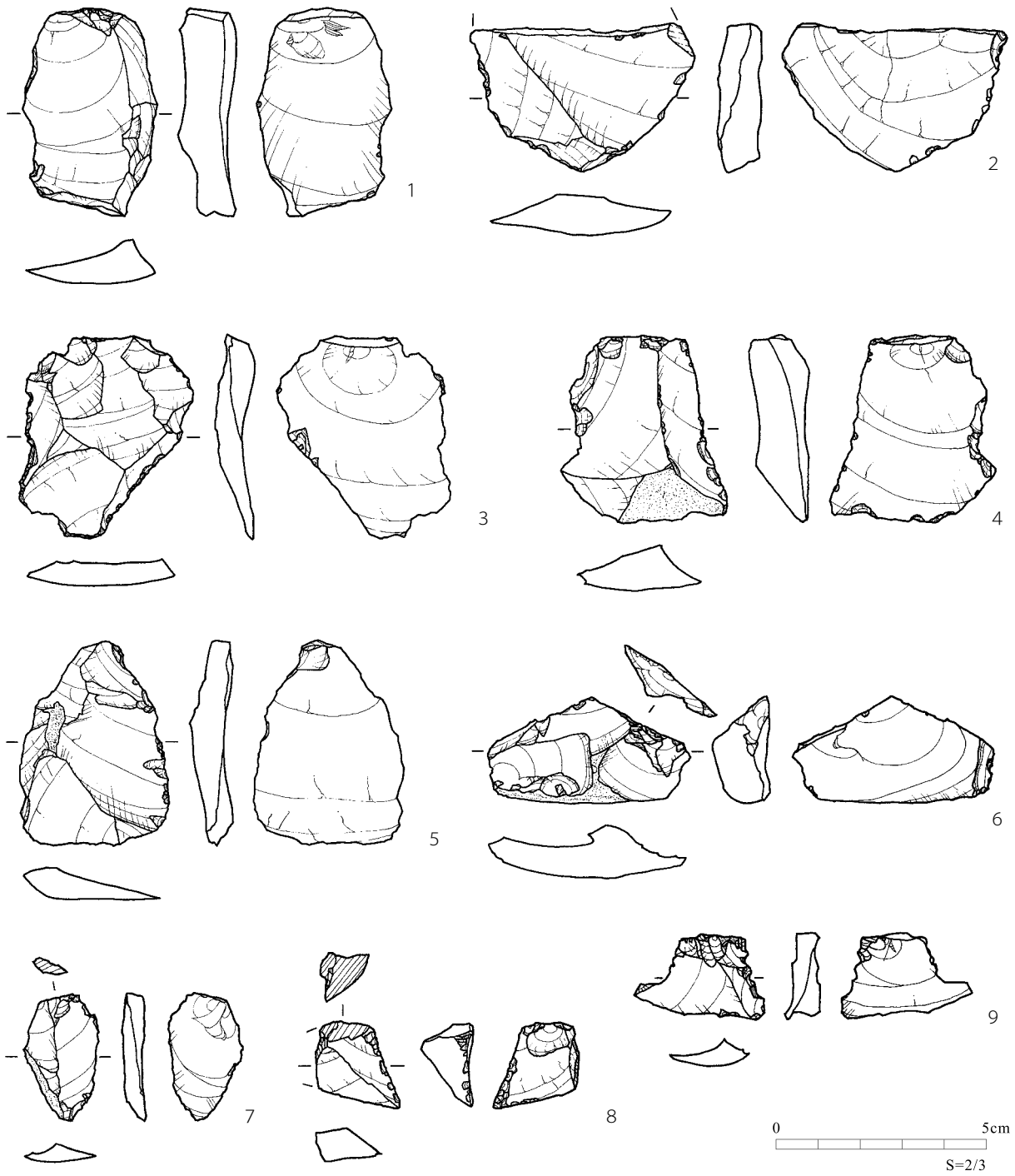
No.	遺構	層位	種類	残存	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石材	特徴	登録	写真
1	B区	表土	二次加工剥片	完形	25.36	44.38	12.00	10.8	珪質頁岩	横長剥片を素材とし、打面側から背面側へ調整剥離を施す。右側縁から末端部にかけて調整剥離を施す。末端部の抉り状の加工は石匙のつまみ部を作出か。	779	46-9
2	-	表採	二次加工剥片	完形	31.29	23.28	7.26	5.1	珪質頁岩	剥片の側縁から両面へ平坦な調整剥離を施し、薄身に整形。縁辺付近は急角度剥離を施し、正面左側の節理面から背面側へ調整剥離を施す。剥片の形状は不明。	780	46-13
3	B区 SK56	堆積土	二次加工剥片	欠損	30.19	35.00	5.61	6.8	珪質頁岩	寸詰まりの剥片を素材とし、側縁の背面側への調整剥離で外湾する刃部を作出。打面付近の両側縁は欠損。本来は円弧状の刃部を有していたと推測される。礫打面。	783	46-11
4	B区 SD84	堆積土	二次加工剥片	欠損	27.85	12.23	11.97	3.6	珪質頁岩	折れ面から剥片の両面へ連続する調整剥離を施す。背面の剥片剥離痕はヒンジ・ターミネーションを有し、背面側へ階段状の調整剥離を施す。	784	46-15
5	B区 SK55	堆積土	二次加工剥片	欠損	19.58	22.04	10.33	3.3	珪質頁岩	縦割れで右半部を欠損する寸詰まり剥片を素材とする。打面は大きく、打瘤が発達。左側縁に急角度な調整剥離で外湾する刃部を作出。腹面に被熱痕跡。	786	46-16
6	B区	排土	二次加工剥片	完形	21.11	32.24	8.70	6.9	玉髓	打面と背面の一部に節理面を有する横長剥片を素材とし、左側縁の背面側へ外湾する調整剥離とノッチ状の調整を施す。右側縁の背腹両面に調整剥離を施し、外湾する刃部を作出。下半が折損後、素材剥片の打面と折れ面を打面として両極剥離。	785	46-14
7	B区 SK22	堆積	二次加工剥片	欠損	43.25	55.74	13.29	29.2	珪質頁岩	厚手の幅広剥片を素材とし、右側縁の腹面側と末端の背面側に幅広の調整剥離を施す。左側縁は鋸歯縁状となる。右側縁下半部を背面側からの衝撃により折損。	787	46-19
8	-	表採	二次加工剥片	欠損	48.89	42.21	11.96	26.6	珪質頁岩	両側縁の平行する幅広の剥片を素材とする。幅広の打面を有し、打瘤が発達。両面に調整剥離を施す。下半部は腹面側からの衝撃により折損。	788	46-10
9	-	表採	二次加工剥片	完形	27.14	32.84	9.17	5.2	珪質頁岩	末端が収斂する剥片の右側縁に腹面側から調整剥離を施す。左側縁の背面側には微細剥離痕。打面側は腹面側からの衝撃により折損。	789	46-12

第152図 二次加工剥片 (4)



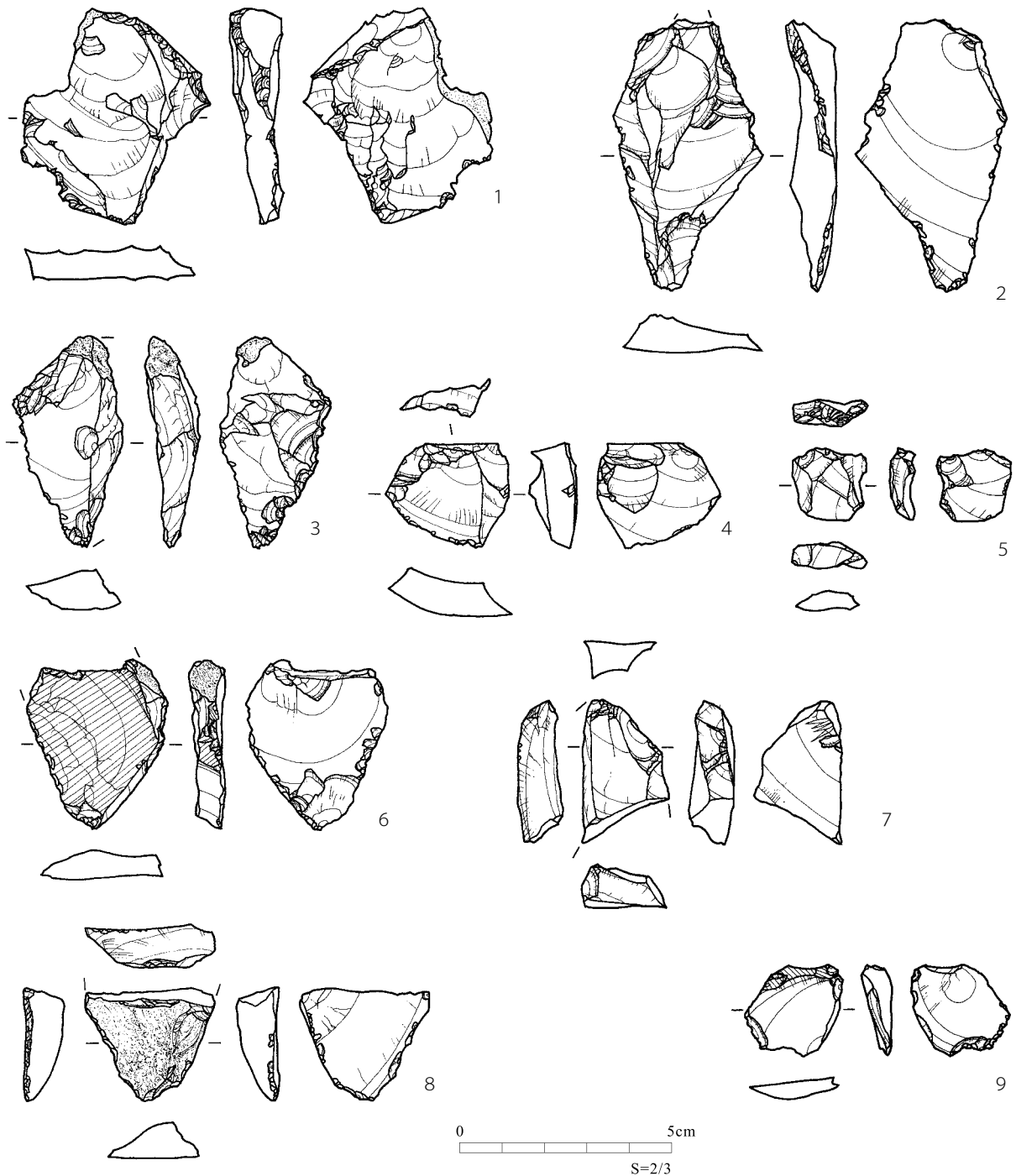
No.	遺構	層位	種類	残存	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石材	特徴	登録	写真
1	B区	確認面	二次加工剥片	完形	118.92	91.88	8.04	112	頁岩	両面を粗く剥離した礫素材の両面調整素材を用いて、裏面の右側縁中央に調整剥離を施して挾入部を作出。縁辺のほぼ全体に摩耗痕跡。	749	47-1
2	B区	確認面	二次加工剥片	完形	64.42	55.33	11.02	32.4	珩質頁岩	幅広の大型剥片を素材とし、外湾する右側縁の腹面側に連続的な調整剥離を施す。左側縁に微細剥離痕。	750	46-18
3	A区 P303	堆積土	二次加工剥片	完形	40.35	22.80	8.71	8.5	珩質頁岩	縦長剥片を素材とし、右側縁下半部の背面側に連続的な調整剥離を施す。背面の左半分は礫面・節理面で構成。	772	46-17
4	A区	表土	二次加工剥片	欠損	34.03	25.13	11.41	6.2	珩質頁岩	背面側からの衝撃により打面部を折損する縦長剥片。下半部に礫面。右側縁上半部を中心としてまばらに調整剥離を施す。	774	46-21
5	A区	表土	二次加工剥片	完形	27.28	48.59	14.82	17.6	碧玉	上下を折損する剥片の右側縁に背面側から調整剥離を施す。素材剥片の表面は赤褐色に変質し、調整加工の剥離面はこれより新しい。二重パティナ。	773	46-20

第153図 二次加工剥片 (5)



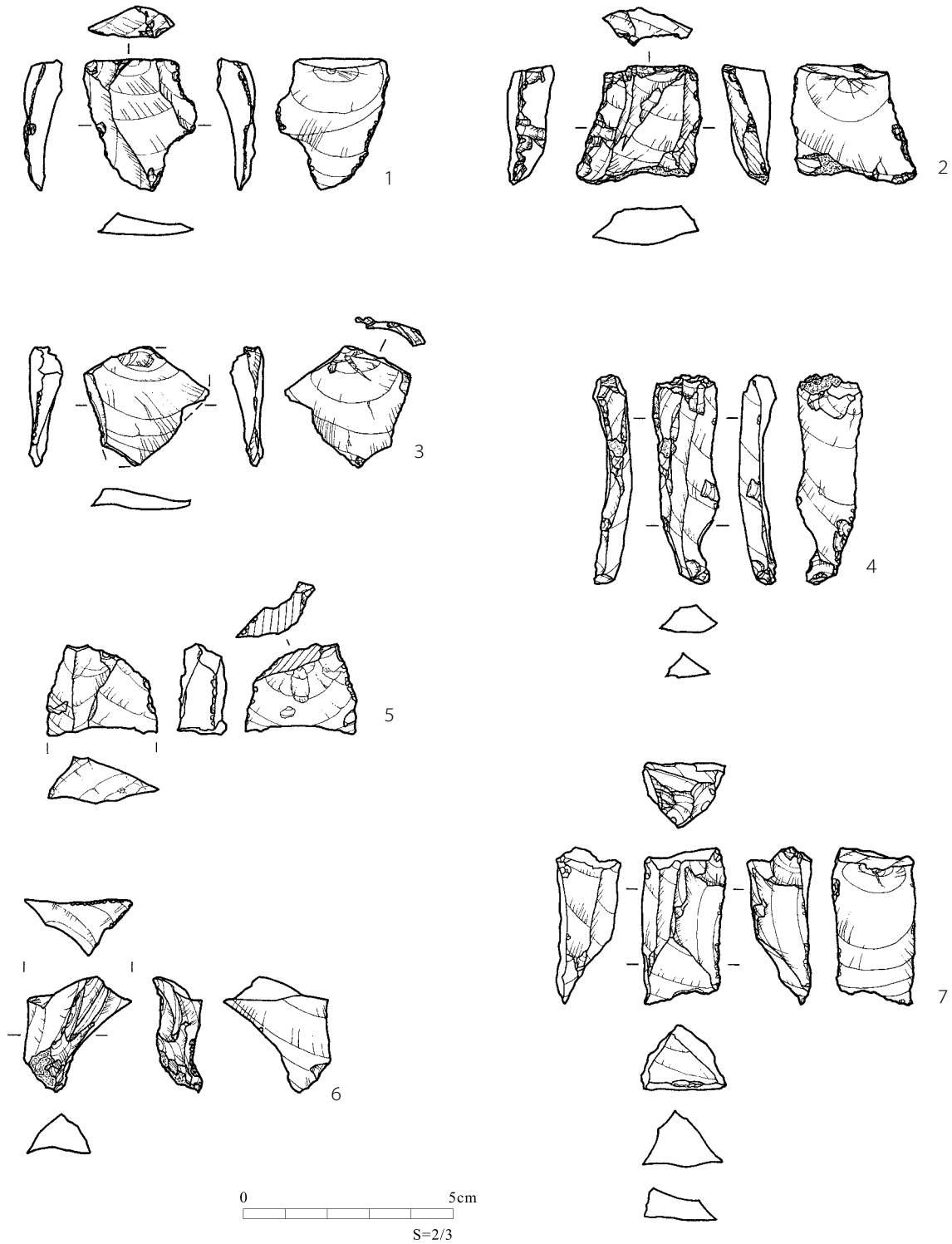
No.	遺構	層位	種類	残存	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石材	特徴	登録	写真
1	B区 SK29	擾乱	微細剥離痕を有する剥片	完形	50.39	31.62	12.04	17.4	珪質頁岩	縦長剥片の左側縁と、打面と背面のなす縁辺に微細剥離痕。打面は幅広で厚い単剥離打面。	751	47-2
2	B区	確認面	微細剥離痕を有する剥片	欠損	33.89	53.52	10.39	19.6	頁岩	打面側を大きく折損する幅広の剥片。末端の両面に微細剥離痕。被熱痕跡か。	752	47-4
3	試掘 4T	確認面	微細剥離痕を有する剥片	完形	46.00	39.65	7.33	13.2	珪質頁岩	多方向からの剥離面によって背面が構成される剥片。単剥離打面。縁辺のほぼ全周に微細剥離痕。	753	47-5
4	B区	表土	微細剥離痕を有する剥片	完形	43.80	38.99	11.41	18.0	珪質頁岩	下半部に砥礫面を残す厚手の縦長剥片。厚い調整打面をもち、打瘤が発達。両側縁にまばらに調整剥離を施す。右側縁と背面中央の稜上に微細剥離痕。	754	47-6
5	B区 SK22	堆積土 下層	微細剥離痕を有する剥片	完形	48.07	35.18	7.30	11.0	チャート	多方向からの剥離面と一部砥礫面によって背面が構成される剥片。打面は幅狭の調整打面。末端は撥状に開き、ヒンジ・ターミネーション。右側縁に微細剥離痕。	755	47-3
6	-	表採	微細剥離痕を有する剥片	完形	24.51	49.01	13.59	13.4	緑色凝灰岩	多方向からの剥離面によって背面が構成され、末端がフェザー・ターミネーションとなる縦長剥片。打面は腹面側からの衝撃で折損。左側縁の両面に微細剥離痕。	761	47-7
7	-	表採	微細剥離痕を有する剥片	完形	29.68	18.61	4.73	2.4	流紋岩	末端がフェザー・ターミネーションとなる小型の縦長剥片。打面は節理面。右側縁の背面側と、左側縁下半部の腹面側に微細剥離痕。	759	47-8
8	試掘 6T	確認面	微細剥離痕を有する剥片	欠損	25.66	18.93	12.12	3.4	玉髓	縁辺が直線的となる寸詰まり剥片。縦割れにより左半部を欠損。節理面打面。右側縁の両面から末端の腹面側にかけて連続的に微細剥離痕。	794	47-16
9	-	表採	微細剥離痕を有する剥片	完形	20.47	31.16	6.20	3.0	緑色凝灰岩	末端が広く、ヒンジ・ターミネーションとなる台形状剥片。左側縁の腹面側、右側縁の背面側に微細剥離痕。	768	47-17

第154図 微細剥離痕を有する剥片 (1)



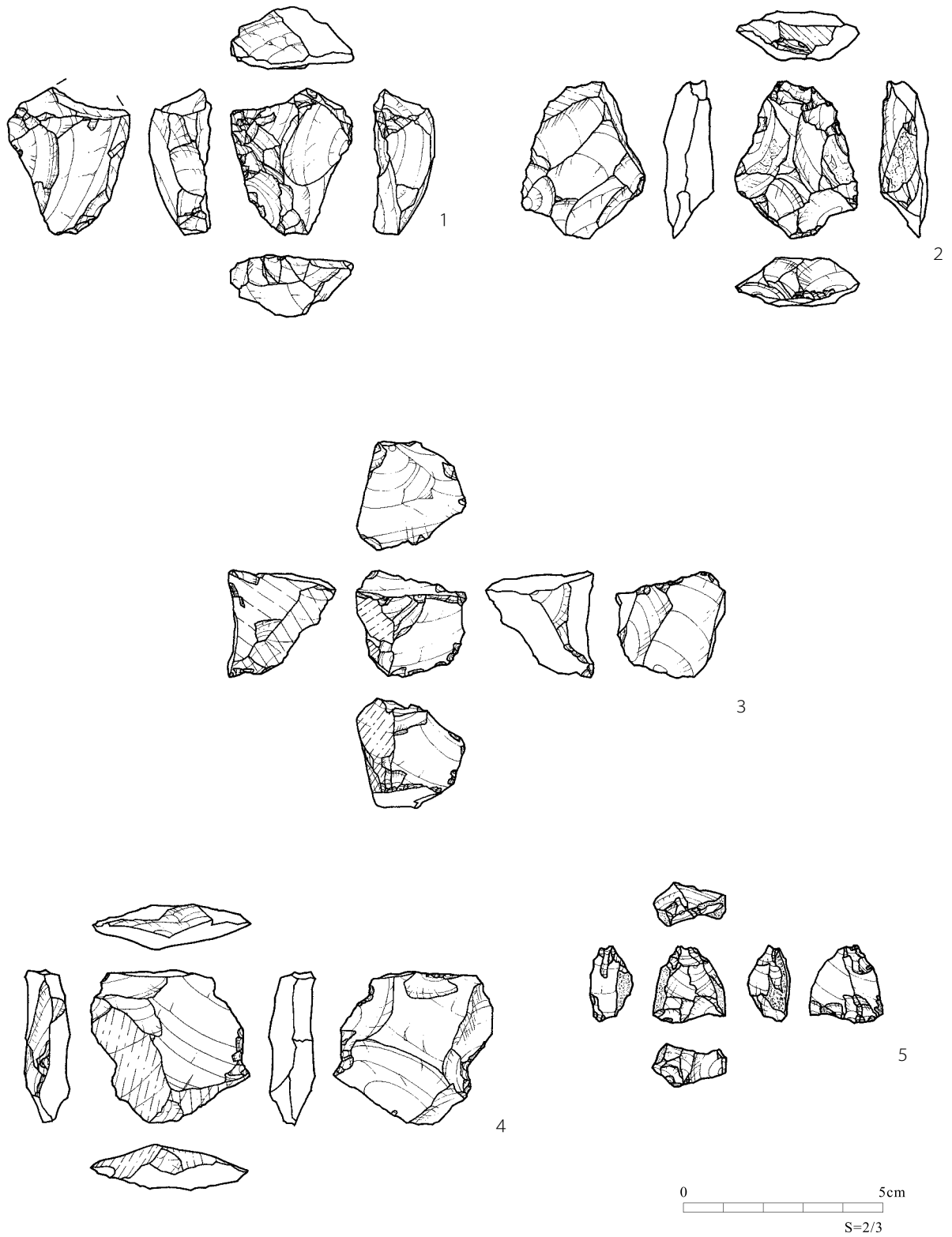
No.	遺構	層位	種類	残存	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石材	特徴	登録	写真
1	B区 SK9	堆積土	微細剥離痕を有する剥片	完形	48.69	41.81	10.95	19.2	珪質頁岩	背面にポジティブ面を有する剥片。打面部は背面側からの衝撃により折損。左側縁に礫面を有する。剥片の末端部と右側縁の背面側に微細剥離痕。	793	47-9
2	試掘	表土	微細剥離痕を有する剥片	欠損	63.00	35.12	10.21	16.0	珪質頁岩	両側縁の平行する石刃状の縦長剥片。打面は先行する剥離作業面を残し、打面転位して本剥片を剥離。両側縁に微細な剥離痕がまばらに分布。剥片の末端は細長く突出し、その背面の剥離面には肉眼で識別可能な光沢を有する。【使用痕分析】	792	47-10
3	B区	表土	微細剥離痕を有する剥片	欠損	49.55	26.64	9.49	8.9	珪質頁岩	礫打面の縦長剥片。右半部が縦割れにより折損後、先端部から背腹両面にわたる細長い剥離を施す。左側縁の腹面側に微細な剥離痕。	796	47-11
4	A区	確認面	微細剥離痕を有する剥片	完形	27.04	28.96	7.91	5.3	珪質頁岩	寸詰まりの剥片。末端部の背腹両面に微細な剥離痕。腹面側の左上で打面側から寸詰まりの剥片2枚を剥離。	795	47-13
5	B区	掘乱	微細剥離痕を有する剥片	完形	19.16	19.38	5.21	1.7	珪質頁岩	小型の寸詰まり剥片。幅広の打面でツイン・バルブを有する。背面下半部はポジティブ面であり、本剥片が剥片石核から剥離されたことを示す。末端部に微細剥離痕。	835	47-15
6	B区	確認面	微細剥離痕を有する剥片	欠損	40.55	33.07	7.47	10.2	珪質頁岩	背面に自然面を残す剥片。打面部は背面からの衝撃により折損。腹面末端に平坦剥離を施す。両側縁に微細剥離痕。	797	47-12
7	B区 SK22	堆積土	微細剥離痕を有する剥片	欠損	31.29	20.45	8.42	6.0	珪質頁岩	末端と左半部を、それぞれ腹面と背面からの衝撃により折損する剥片。右側縁の背面側に微細剥離痕。	799	48-1
8	B区 P291	堆積土	微細剥離痕を有する剥片	欠損	25.90	30.38	9.73	6.8	珪質頁岩	側縁が末端に収斂する剥片。背面は転礫面からなり、打面部は背面からの衝撃により大きく折損。左側縁の背面側に連続的な急角度の微細剥離痕。	800	47-14
9	B区	確認面	微細剥離痕を有する剥片	完形	21.44	24.66	5.22	2.5	珪質頁岩	小型の寸詰まり剥片。単剥離打面で打瘤が発達。末端部の両面に微細な剥離痕。微細剥離痕は腹面側に顕著。	798	47-18

第155図 微細剥離痕を有する剥片 (2)



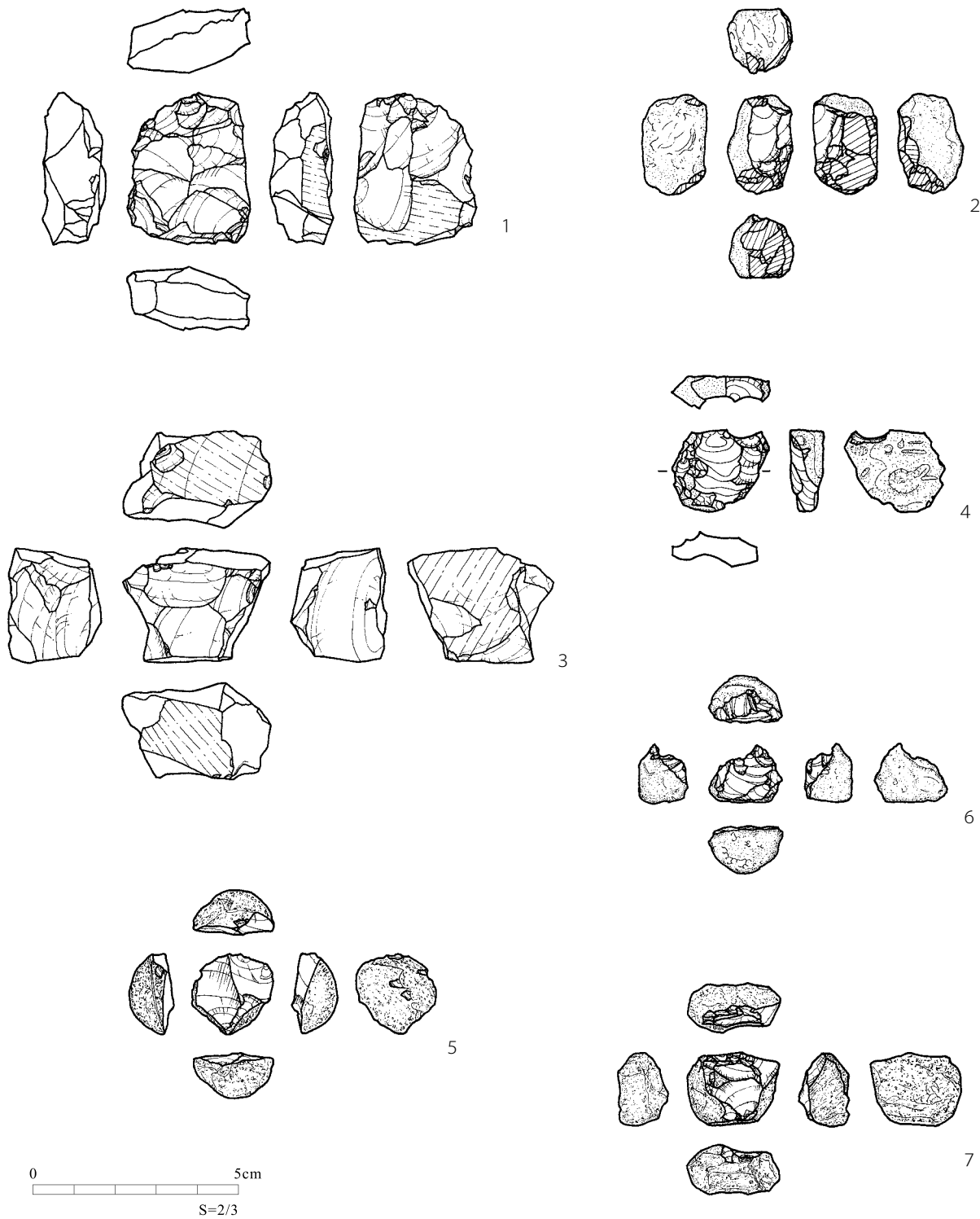
No.	遺構	層位	種類	残存	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石材	特徴	登録	写真
1	B区 SK19	堆積土	微細剥離痕を有する剥片	完形	32.52	26.40	6.36	3.9	珪質頁岩	平行する稜をもつ縦長剥片。打面は平坦な単剥離面で、末端が背面側へと反る。右側縁の背腹両面と、左側縁の腹面側に微細剥離痕。	801	48-2
2	B区 SK19	堆積土	微細剥離痕を有する剥片	完形	29.41	31.26	8.48	8.0	珪質頁岩	両側縁の平行する寸詰まり剥片。調整打面で、末端部は礫面となる。背面の2本の稜は剥離軸に平行。左側縁の両面と右側縁の背面側に微細剥離痕。	802	48-3
3	B区 SK19	堆積土	微細剥離痕を有する剥片	欠損	27.69	29.74	5.30	3.2	珪質頁岩	末端がヒンジ・ターミネーションとなる寸詰まり剥片。打面を含む右側縁と末端をそれぞれ背面側と腹面側からの衝撃により折損。左側縁の背面側に微細剥離痕。	803	48-4
4	B区 SB135	P1 堆積土	微細剥離痕を有する剥片	完形	49.39	15.12	6.67	4.7	碧玉	幅狭の細長い石刃状剥片。礫打面で、頭部調整を施す。末端と左側縁の腹面側に微細剥離痕。【使用痕分析】	832	48-6
5	B区 SI16	堆積土	微細剥離痕を有する剥片	欠損	20.53	26.63	10.42	5.4	玉髓	側縁と稜線が剥離軸にほぼ平行する剥片。下半部は腹面からの衝撃によって大きく折損。縦長剥片か。右側縁の背腹両面と、左側縁の腹面に微細な剥離痕。	833	48-5
6	B区	攪乱	微細剥離痕を有する剥片	欠損	28.82	16.60	15.42	4.0	珪質頁岩	末端部がやや突出する剥片。背面下半部に礫面をもち、打面は背面からの衝撃により折損。右側縁全体に微細剥離痕。微細剥離痕は右側縁下半部の背面側に集中。	837	48-8
7	B区	攪乱	微細剥離痕を有する剥片	完形	36.27	19.38	12.77	9.5	珪質頁岩	両側縁および背面の左半分の稜線が平行する石刃状の縦長剥片。打面は調整打面であり、打面部に最大厚をもつ。両側縁と末端に微細剥離痕。【使用痕分析】	836	48-7

第 156 図 微細剥離痕を有する剥片 (3)



No.	遺構	層位	種類	残存	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石材	特徴	登録	写真
1	B区 SI16	堆積土	石核	欠損	35.64	30.08	14.90	16.0	碧玉	厚手の剥片を素材とし、背腹両面を剥片剥離作業面とする両面石核。縁辺からの求心的な打撃によって小型の横長剥片を剥離。	736	48-10
2	B区	確認面	石核	完形	39.64	30.91	12.49	11.4	玉髓	平坦な剥片もしくは礫を素材とし、両面を剥片剥離作業面とする両面石核。正面で左下から右上にかけて縦長の剥片を剥離した後、裏面では求心状の剥離によって寸詰まりの剥片を剥離。被熱痕跡。	735	48-11
3	試掘	表土	石核	完形	28.53	26.38	24.87	14.0	珪質頁岩	下縁へとすぼまる角柱状を呈する。上面は単剥離打面で、下縁側からも剥離のある両設打面。寸詰まりから縦長の剥片を剥離。側面に礫面を残す。	734	48-12
4	B区 SK7	堆積土	石核	完形	38.20	42.14	11.60	15.0	珪質頁岩	剥片を素材とし、主剥離面側を作業面とする。縁辺からの求心的な打撃により小型の横長剥片を剥離。背面に節理面を残す。	737	48-9
5	B区 P9	堆積土	石核	完形	10.07	18.59	19.59	2.9	黒曜石	小礫を素材とする両極石核。上下の打撃によって剥片を剥離。周囲に礫面を残す。【原産地推定：ZAO1-001（不明原産地1）】	738	49-1

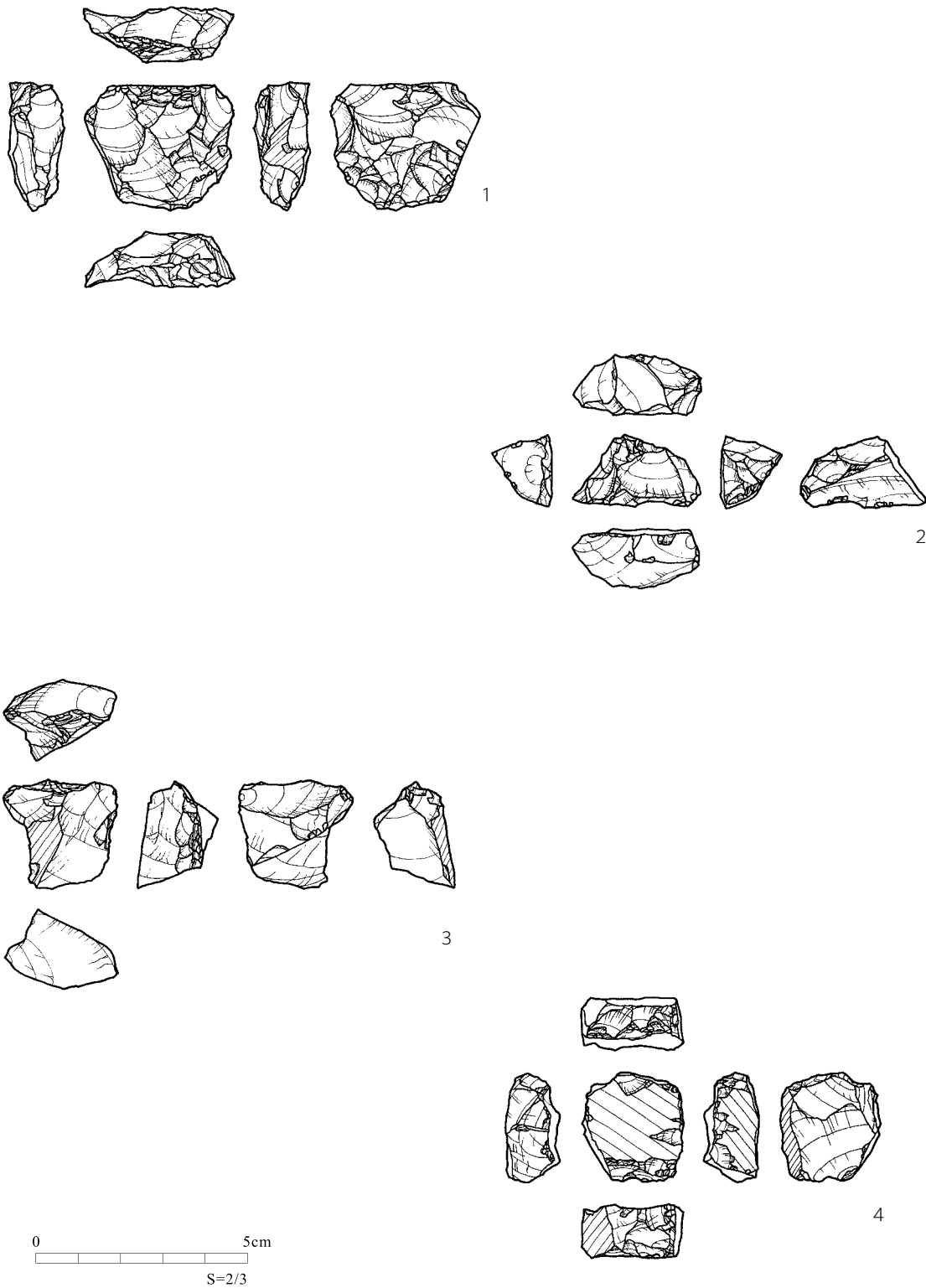
第157図 石核(1)



No.	遺構	層位	種類	残存	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石材	特徴	登録	写真
1	試掘 6T	確認面	石核	完形	36.34	30.11	15.28	18.2	珪質頁岩	剥片もしくは礫を素材とする両面石核。周縁からの打撃により寸詰まりの剥片を剥離。礫面を残す。	739	49-9
2	-	表採	石核	完形	15.16	13.31	24.11	7.6	黒曜石	直方体状を呈する小転礫を素材とする。転礫の一端の小口面を打面とし、側面方向への打撃により縦長の剥片を剥離。【原産地推定：ZAO1-019（不明原産地1）】	765	49-4
3	B区 SK19	堆積土	石核	完形	22.79	35.71	27.27	18.6	珪質頁岩	打面転位を頻繁に行なって小型の寸詰まり・横長の剥片を剥離。残核形状は正方体に近い不定形を呈する。被熱痕跡か。	740	49-10
4	-	表採	石核	完形	19.95	22.51	7.45	3.7	黒曜石	扁平な小礫を素材とする。小口面への平坦剥離により打面を設定。礫の片面を作業面とし、不定形な縦長剥片を剥離。【原産地推定：ZAO1-020（不明原産地1）】	766	49-5
5	-	表採	石核	完形	10.81	17.64	13.92	2.8	黒曜石	小垂円礫を素材とし、互いに90度で直交する作業面を設定。数枚の小剥片を剥離。【原産地推定：ZAO-021（不明原産地1）】	767	49-2
6	試掘 4T	表土	石核	完形	9.68	20.25	19.34	3.2	黒曜石	小円礫を両極打撃により分割し、分割面を作業面とする。小型の剥片3枚を剥離。【原産地推定：ZAO-015（不明原産地2）】	769	49-6
7	A区 SK19	堆積土	石核	完形	10.24	22.27	16.80	5.1	黒曜石	小垂角礫を両極打撃により分割し、分割面を作業面とする。小型の寸詰まり剥片1枚を剥離。【原産地推定：ZAO-002（不明原産地2）】	770	49-3

第158図 石核 (2)



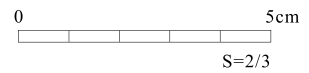
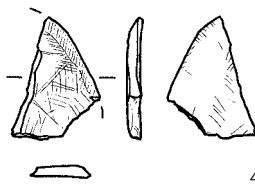
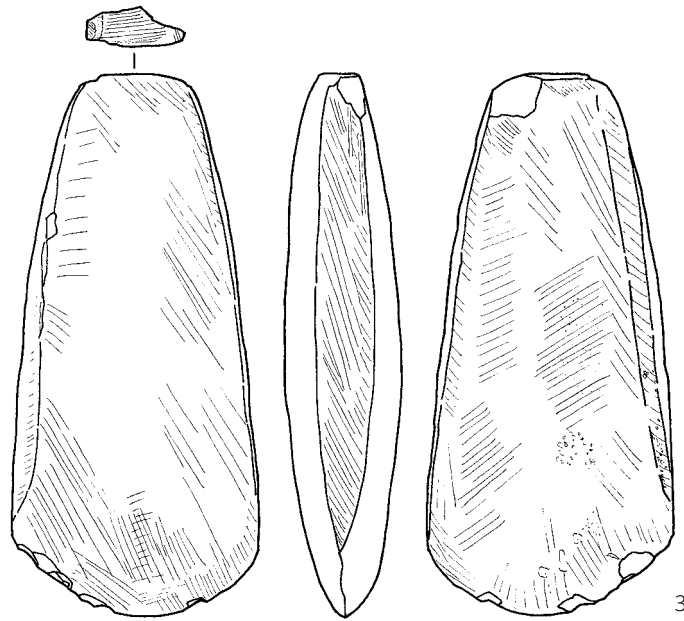
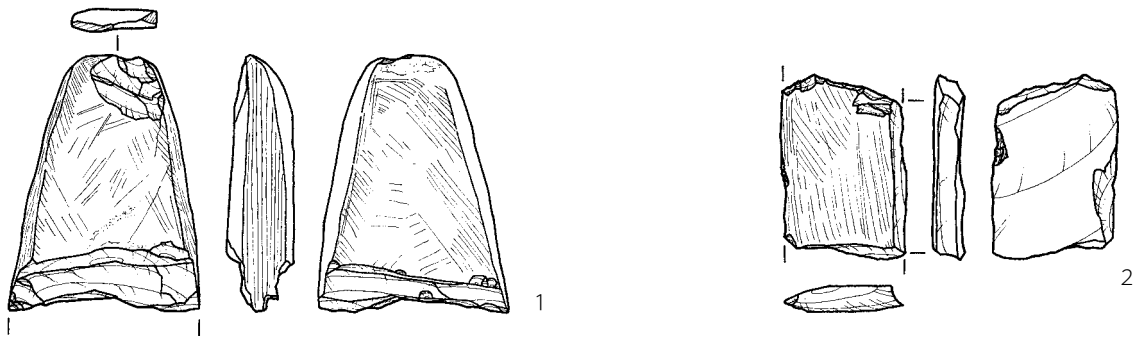


No.	遺構	層位	種類	残存	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石材	特徴	登録	写真
1	B区 SK22	堆積土	石核	完形	29.73	34.76	12.09	11.0	流紋岩	厚手の剥片を素材とする。背腹両面を作業面とし、周辺から小型剥片を多数剥離。正面の上部にはステップ・ターミネーションをもつ小剥離が集中。	805	49-11
2	B区 SI16	攪乱	石核	完形	16.89	29.00	15.25	5.9	玉髓	小型の剥片を素材とする。背面中央の稜、腹面、側方の折れ面を打面とし、素材剥片の背面全体を作業面とする。小型の横長・寸詰まり剥片を剥離。	806	49-7
3	B区 SB100	P4 堆積土	石核	完形	21.08	28.57	27.11	8.6	珩質頁岩	背面に節理面を残す厚い剥片を素材とする。素材剥片の打面部の右側から細長い剥離を施し、これを打面として正面側の上部と右側縁に急角度の階段状剥離を連続的に施す。下半部の裏面の剥離面はこれらの階段状剥離痕よりも新しいことから、本石核は石核の作業面再生にともなう調整剥片の可能性もある。	807	49-12
4	C区	確認面	石核	完形	25.52	24.35	11.22	10.2	玉髓	亜角礫を素材とする。側面の複数の小口面を作業面とし、小型の剥片を剥離。	808	49-8

第159図 石核 (3)

第1表 剥片観察表

区	遺構	層位	重(g)	石材	備考	登録	写真	区	遺構	層位	重(g)	石材	備考	登録	写真
A	SD18	堆積土	4.8	珪化凝灰岩		908	-	B	SX86	確認面	1.7	チャート	984と同一個体	982	-
A	SD18	堆積土	17.2	珪化木		909	-	B	SX86	堆積土	2.5	玉髓		983	-
A	SK19	確認面	2.9	玉髓		903	-	B	SX86	堆積土	3	チャート	982と同一個体	984	-
A	SK19	堆積土	0.4	玉髓		907	-	B	SX86	堀方埋土	1	玉髓		981	-
A	SK19	堆積土	15.6	黒曜石	【原産地推定：ZAO-003(馬場町北系)】	1030	-	B	P***	堆積土	4.8	珪質頁岩		993	-
A	SK57	堆積土	2.7	玉髓		904	-	B	P229	堆積土	0.4	珪質頁岩		987	-
A	SK57	堆積土	3.9	珪質頁岩		905	-	B	P24	堆積土	2.3	緑色凝灰岩		985	-
A	SK57	堆積土	25.6	珪質頁岩		906	-	B	P276	堆積土	2.9	玉髓		990	-
B	SB100	P1 堆積土	2.6	黒曜石	【原産地推定：ZAO-005(不明原産地1)】	1035	-	B	P276	堆積土	10.2	黒曜石	【原産地推定：ZAO-006(不明原産地1)】	991	-
B	SB100	P1 堆積土	0.9	玉髓		979	-	B	P276	堆積土	3.7	黒曜石	【原産地推定：ZAO-007(不明原産地1)】	992	-
B	SB113	P2 堆積土	5.6	玉髓		980	-	B	P279	堆積土	6.1	玉髓		989	-
B	SB97	P6 確認面	1	凝灰岩		977	-	B	P99	堆積土	0.4	緑色凝灰岩		986	-
B	SB98	P1 堆積土	0.2	頁岩		978	-	B	確認面	-	5.4	玉髓		919	-
B	SD8	堆積土	3	黒曜石	【原産地推定：ZAO-011(蔵王系)】	994	-	B	確認面	-	9.9	玉髓		922	-
B	SD84	堆積土	2.2	玉髓		997	-	B	確認面	-	1.2	珪質頁岩		913	-
B	SD84	堆積土	0.3	玉髓		998	-	B	確認面	-	2.9	珪質頁岩		914	-
B	SD84	堆積土	4.2	黒曜石	【原産地推定：ZAO-012(不明原産地1)】	999	-	B	確認面	-	22.6	珪質頁岩		915	-
B	SD88	堆積土	5.6	珪質頁岩		1000	-	B	確認面	-	2.6	珪質頁岩		916	-
B	SD88	堆積土	3.3	玉髓		996	-	B	確認面	-	1.7	珪質頁岩		917	-
B	SD88	堆積土	2	珪質頁岩		995	-	B	確認面	-	9.8	珪質頁岩		918	-
B	SI16	確認面	6	珪質頁岩		941	-	B	確認面	-	1.3	頁岩		923	-
B	SI16	攪乱	3.2	玉髓		1026	-	B	確認面	-	6.2	頁岩		924	-
B	SI16	攪乱	3	玉髓		1027	-	B	確認面	-	2.9	黒曜石	【原産地推定：ZAO-014(不明原産地1)】	925	-
B	SI16	攪乱	2.6	珪質頁岩		939	-	B	確認面	-	4.5	流紋岩		921	-
B	SI16	攪乱	0.2	珪質頁岩		940	-	B	確認面	-	6.4	緑色凝灰岩		920	-
B	SI16	攪乱	0.3	碧玉		1029	-	B	攪乱	-	1.3	玉髓		929	-
B	SI16	堆積土	1.3	珪質頁岩		947	-	B	攪乱	-	1.6	珪質頁岩		927	-
B	SI16a	堆積土	0.6	玉髓		945	-	B	攪乱	-	13	珪質頁岩		928	-
B	SI16d	堆積土	1.1	玉髓		942	-	B	攪乱	-	4.3	緑色凝灰岩		930	-
B	SI16d	堆積土	0.7	玉髓		943	-	B	攪乱	-	3	緑色凝灰岩		931	-
B	SI16d	堆積土	1.3	玉髓		944	-	B	表土	-	3.4	珪質頁岩		910	-
B	SI65b	堆積土	6.1	珪質頁岩		948	-	B	表土	-	1.3	碧玉		912	-
B	SI78	確認面	1.9	珪質頁岩		949	-	B	表土	-	13	緑色凝灰岩		911	-
B	SI78	堆積土	0.4	珪質頁岩		950	-	3T	表土	-	2.5	玉髓		1001	-
B	SK19	堆積土	0.6	玉髓		954	-	4T	確認面	-	23	珪質頁岩		1008	-
B	SK19	堆積土	6.2	玉髓		955	-	4T	確認面	-	7.1	頁岩		1009	-
B	SK22	堆積土	6.7	珪質頁岩		956	-	4T	表土	-	0.3	珪質頁岩		1002	-
B	SK22	堆積土	2.1	珪質頁岩		957	-	4T	表土	-	0.1	珪質頁岩		1003	-
B	SK22	堆積土	2.1	珪質頁岩		958	-	4T	表土	-	1.2	珪質頁岩		1004	-
B	SK28	堆積土	4.9	黒曜石	【原産地推定：ZAO-009(不明原産地2)】	959	-	4T	表土	-	0.8	珪質頁岩		1005	-
B	SK28	堆積土3層	2.2	黒曜石	【原産地推定：ZAO-010(不明原産地2)】	962	-	4T	表土	-	8.6	珪質頁岩		1006	-
B	SK28	堆積土2層	4.9	珪質頁岩		960	-	4T	表土	-	7.4	珪質頁岩		1007	-
B	SK28	堆積土2層	1.8	黒曜石	【原産地推定：ZAO-008(不明原産地2)】	961	-	5T	表土	-	0.5	珪質頁岩		1010	-
B	SK39	堆積土	10.6	珪質頁岩		963	-	5T	表土	-	0.7	珪質頁岩		1011	-
B	SK56	堆積土	2.1	珪質頁岩		965	-	5T	表土	-	0.5	頁岩		1025	-
B	SK56	堆積土	5.4	珪質頁岩		966	-	6T	攪乱	-	1.6	珪質頁岩		1012	-
B	SK56	堆積土	5.3	緑色凝灰岩		1028	-	-	表採	-	2.6	珪質頁岩		1013	-
B	SK62	堆積土	0.6	珪質頁岩		967	-	-	表採	-	2.4	珪質頁岩		1014	-
B	SK68	堆積土	5.9	珪質頁岩		968	-	-	表採	-	2.7	珪質頁岩		1015	-
B	SK68	堆積土	3.9	珪質頁岩		969	-	-	表採	-	5	珪質頁岩		1016	-
B	SK7	堆積土	6.8	珪化木	被熱痕跡	953	-	-	表採	-	4.6	珪質頁岩		1017	-
B	SK7	堆積土	5	珪質頁岩		952	-	-	表採	-	4.7	珪質頁岩		1018	-
B	SK7	堆積土	9.9	頁岩		951	-	-	表採	-	3.5	珪質頁岩		1019	-
B	SK73	堆積土	2.9	頁岩		972	-	-	表採	-	1.9	頁岩		1020	-
B	SK73	堆積土	4.9	碧玉		971	-	-	表採	-	11.4	頁岩		1021	-
B	SK79	堆積土	2.4	珪質頁岩		973	-	-	表採	-	0.1	黒曜石	【原産地推定：ZAO-025(湯の倉系)】	1023	-
B	SK82	堆積土	6.7	珪質頁岩		974	-	-	表採	-	6.1	黒曜石	【原産地推定：ZAO-017(判別不可)】	1024	-
B	SK82	堆積土	7	黒曜石	【原産地推定：ZAO-004(蔵王系)】	1034	-	-	表採	-	1.6	黒曜石	【原産地推定：ZAO-023(不明原産地2)】	1031	-
B	SK90	堆積土	1.7	玉髓		975	-	-	表採	-	0.1	黒曜石	【原産地推定：ZAO-024(不明原産地2)】	1032	-
B	SK92	堆積土	6.7	珪質頁岩		976	-	-	表採	-	0.5	黒曜石	【原産地推定：ZAO-016(不明原産地2)】	1033	-
								-	表採	-	9.6	流紋岩		1022	-



No.	遺構	層位	種類	残存	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石材	特徴	登録	写真
1	-	表採	磨製石斧	欠損	50.36	37.50	13.58	40.8	緑色泥岩	刃部を裏面側からの衝撃により折損するが、平面形は刃部側に最大幅をもつ撥形を呈していたとみられる。全面を入念に研磨する。破断面は板状の節理であり、節理面に平行して素材を整形したことが分かる。	731	50-2
2	試掘 4T	確認面	磨製石斧	一部	34.79	24.28	5.63	8.2	緑色泥岩	縦方向の線条痕を密に有する磨製石斧片。剥片の上下両端は欠損。	730	50-3
3	-	表採	磨製石斧	完形	107.18	49.07	23.85	184.0	緑色凝灰岩	平面形は刃部に最大幅をもつ撥形で、刃部はゆるやかな孤状を呈する。刃部正面形にみられる稜線は、裏面側に反る。側面はやや外湾する直線状の平面形をもつ。全面を入念に研磨し、両面の中央部には研磨に先立つ敲打痕を残す。	732	50-1
4	B区	確認面	擦痕のある 石製品	一部	24.15	14.10	2.35	0.8	スレート	緩やかな孤状を呈する縁辺をもつ薄手のスレート片。縁辺の断面は鋭角であるが、表面は密な研磨によって滑らかとなる。正面裏面ともに平滑であり、正面はやや凸、裏面はやや凹となる。正面には多方向の線条痕が顕著にみられる。	733	50-4

第160図 磨製石斧 擦痕のある石製品



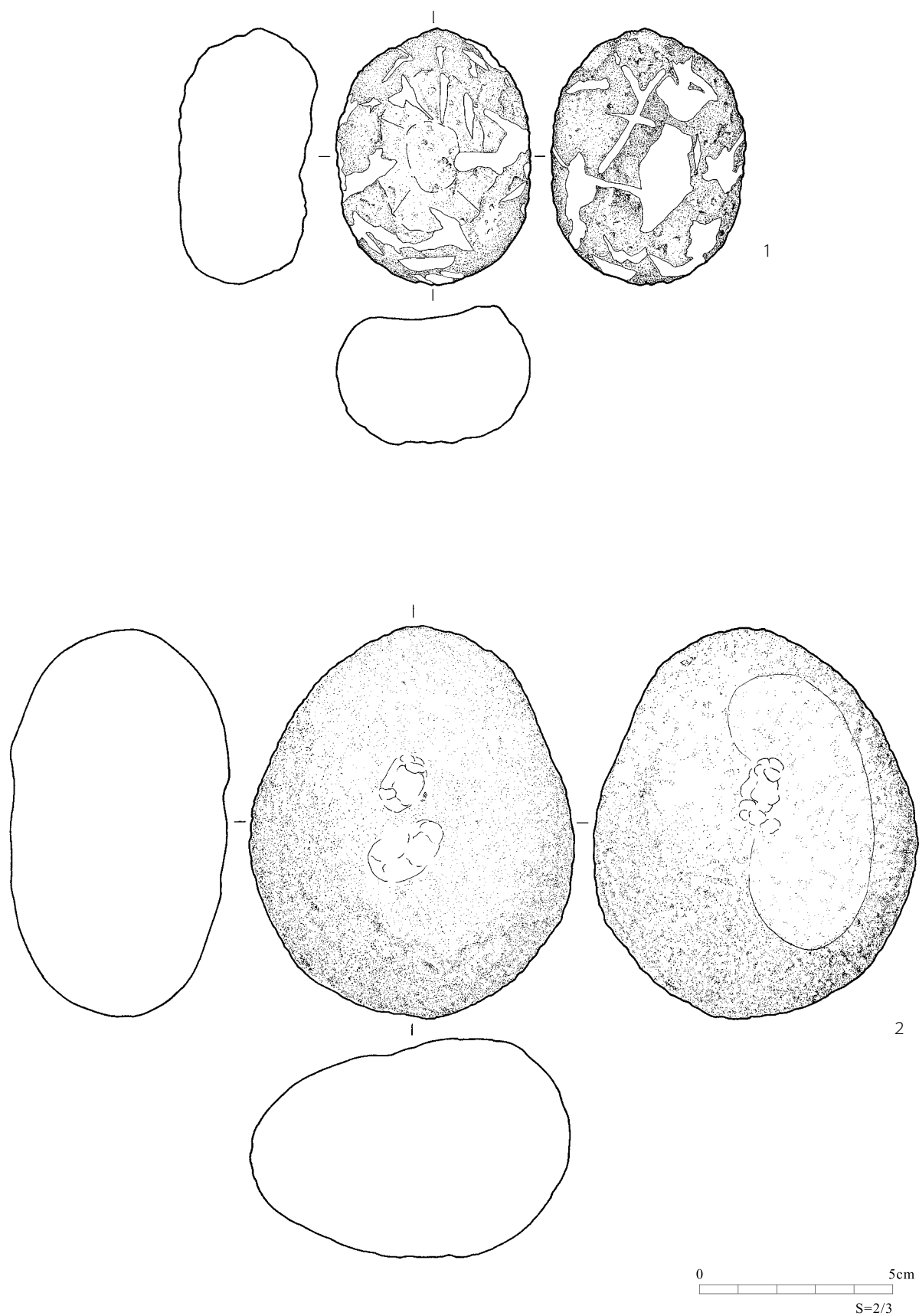
No.	遺構	層位	種類	残存	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石材	特徴	登録	写真
1	B区 SD88	堆積土	磨石	完形	103.31	76.30	51.92	505	安山岩	両面に磨面。磨面と側面に敲打痕。	705	50-5
2	B区 SK90	堆積土 1層	磨石	完形	98.27	77.77	53.57	602	安山岩	片面に平坦な磨面。	709	50-6
3	B区 SK90	堆積土 2層	磨石	完形	141.15	72.55	58.86	659	安山岩	両面に平坦な磨面。裏面の磨面には縦方向の線条痕がみられる。上下両端から側面にかけて連続的な敲打痕。正面の平坦面中央に敲打痕。表面の一部は黒変。	710	50-9
4	B区 SI65	炉内 堆積土	磨石	完形	126.08	71.68	53.16	632	石英安山岩	両面・側面に磨面。表裏の中央には敲打痕が残される。	756	50-8
5	B区 SL86	確認面	磨石	完形	140.68	106.58	68.66	1435	安山岩	両面に磨面。	810	50-7

第161図 磨石(1)



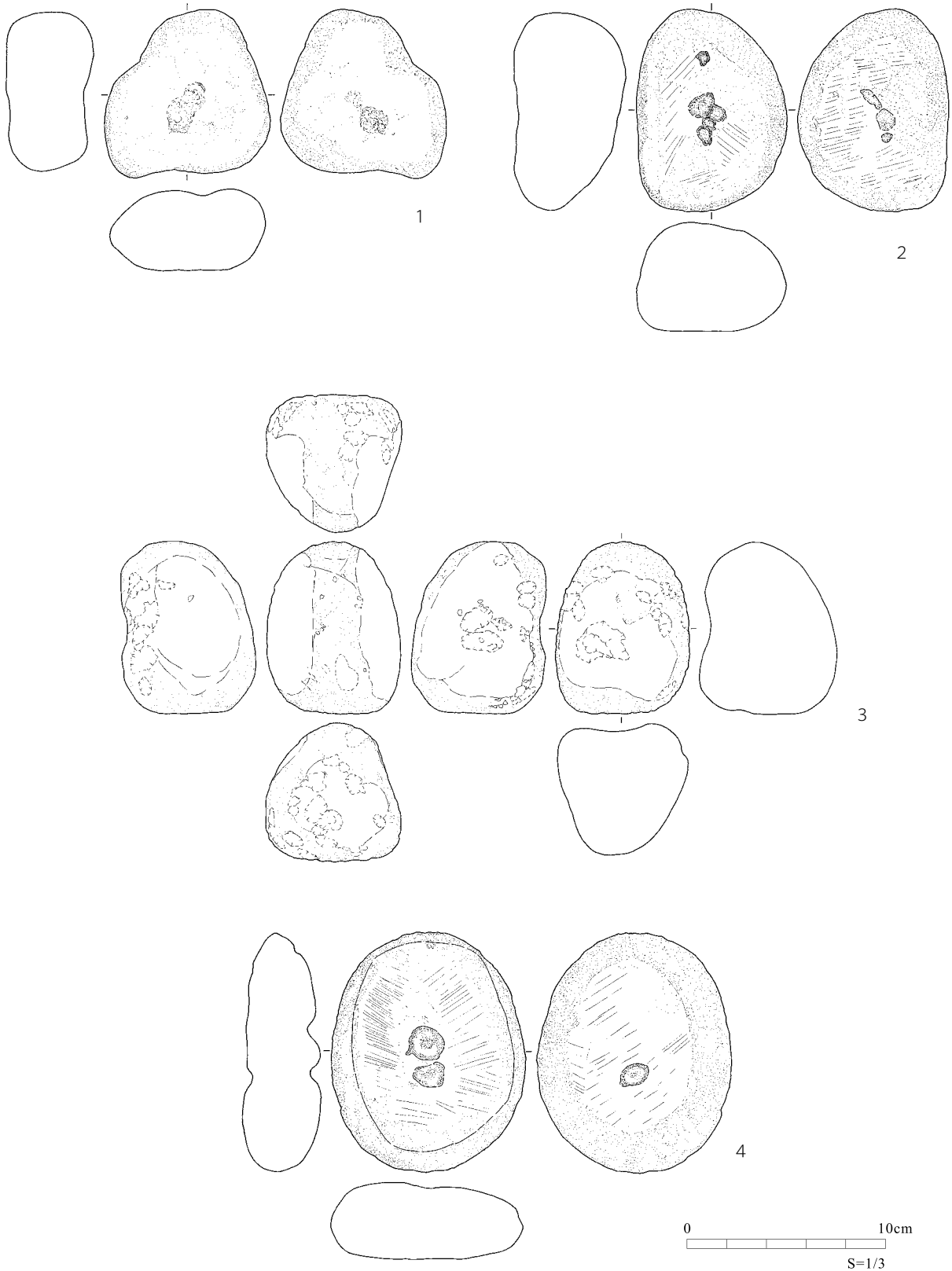
No.	遺構	層位	種類	残存	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石材	特徴	登録	写真
1	B区 SL86	炉内 堆積土	凹石	欠損	157.00	143.42	84.01	1932	玄武岩	両面に多数の凹部。一端は欠損。	842	50-13
2	B区	表土	磨石	完形	99.81	93.43	51.72	717	安山岩	両面に平坦な磨面。側面の一部にも磨面。	823	50-14
3	B区 P6	堆積土	磨石	一部	69.51	34.42	12.95	27.8	安山岩	平坦な磨面。縦方向の線条痕がみられる。	816	51-1
4	B区	攪乱	磨石	欠損	151.12	72.98	59.68	842	緑色凝灰岩	表面全体に磨面。長軸方向の線条痕がみられる。礫の片面および上下両端は欠損。	821	50-10

第162図 磨石(2) 凹石(1)



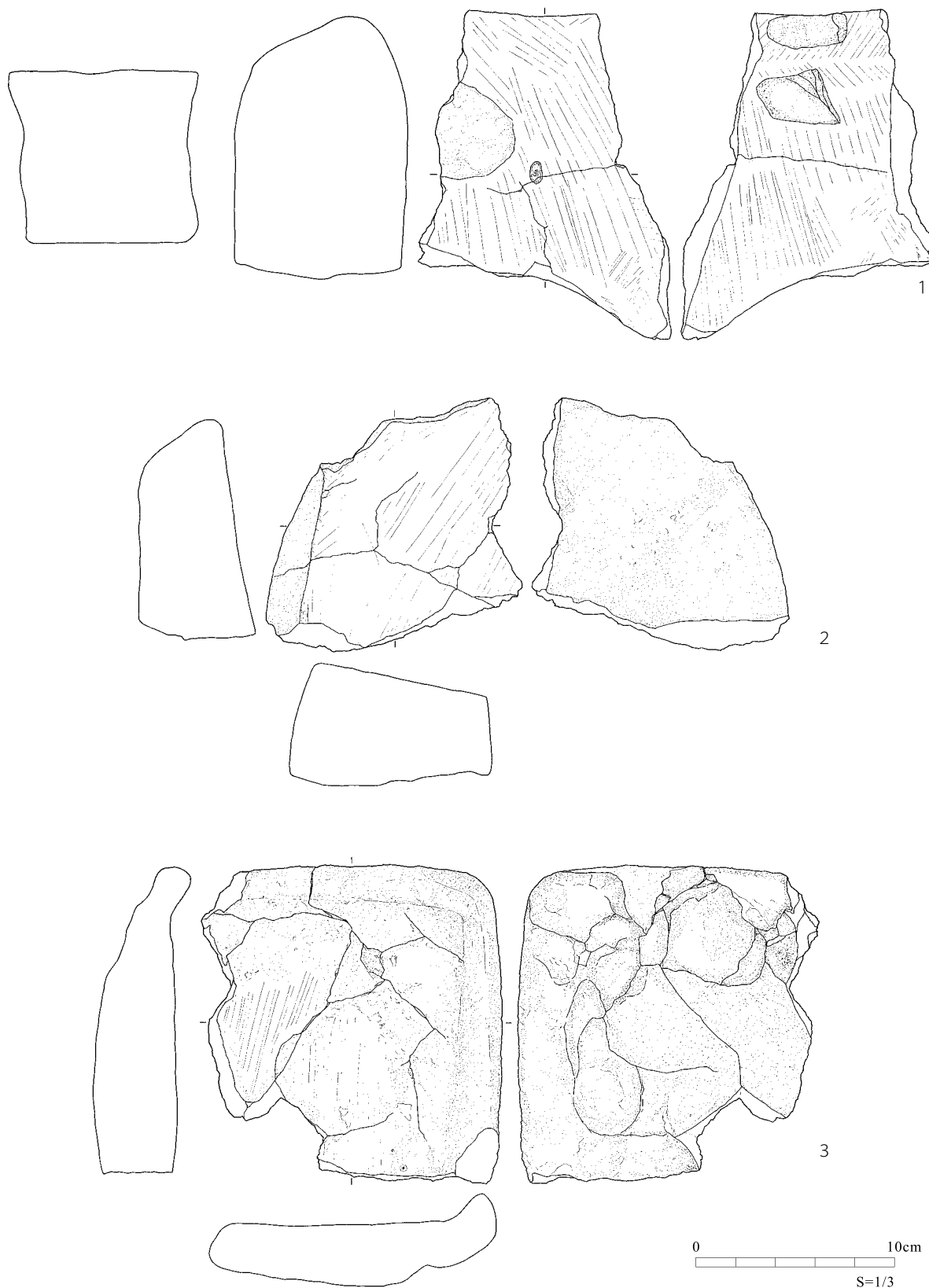
No.	遺構	層位	種類	残存	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石材	特徴	登録	写真
1	試掘	表土	凹石	完形	66.39	50.87	34.75	160	安山岩	片面に楕円形の凹部。凹部の内面は研磨され平滑となる。ガジリ著しい。	817	50-11
2	B区 P296	堆積土	磨石／凹石	完形	100.03	83.99	55.19	627	安山岩	両面に磨面。各面中央に2か所ずつの凹部。	815	50-15

第163図 凹石(2) 磨石／凹石(1)



No.	遺構	層位	種類	残存	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石材	特徴	登録	写真
1	B区 SK28	堆積土	磨石/凹石	完形	95.84	78.76	41.25	421	安山岩	両面に磨面。各面中央に重複する凹部。	707	51-8
2	B区 SX78	確認面	磨石/凹石	完形	102.50	74.85	56.94	605	砂岩	両面に磨面。各面中央に数か所の重複する凹部と敲打痕。側面には敲打痕を有する。	704	50-12
3	B区	攪乱	磨石/凹石/ 敲石	完形	85.49	66.98	68.21	584	安山岩	2面に顕著な磨面。4面に凹部。凹部の一部は磨面と重複。面と面の境界となる湾曲部に敲打痕。	819	51-9
4	B区 SI65	炉内 堆積土	磨石/凹石	完形	120.16	97.50	39.68	592	砂岩	両面に磨面。正面中央部に2か所、裏面中央下部に1か所の凹部。被熱痕跡か。	703	50-16

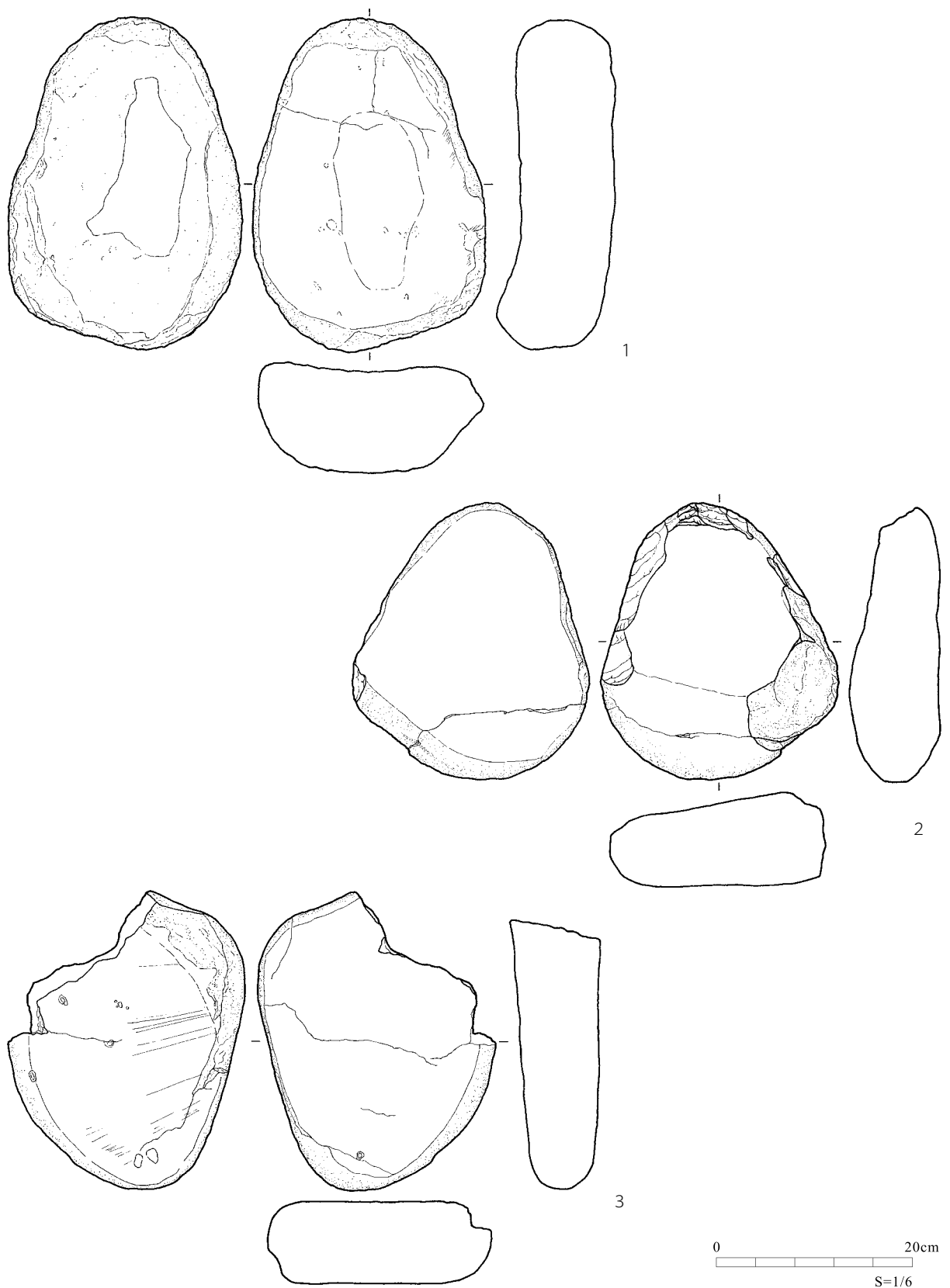
第164図 磨石/凹石 (2) 磨石/凹石/敲石



No.	遺構	層位	種類	残存	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石材	特徴	登録	写真
1	B区 SK56	堆積土	石皿	一部	157.00	126.94	82.70	2600	石英安山岩	両面及び側面に平坦な磨面。被熱による赤化・ヒビ・磨面の剥落が認められる。	708	51-11
2	B区 SD88	堆積土	石皿	一部	143.57	107.66	68.48	1255	安山岩	片面に平坦な磨面。被熱による赤化とヒビが認められる。	706	51-12
3	B区 SK28	堆積土 2層	石皿	一部	160.00	148.29	43.15	958	砂岩	全体を入念な敲打と研磨により整形。方形の平坦な磨面をもち、受け皿状を呈する。被熱により破碎。	712	51-10

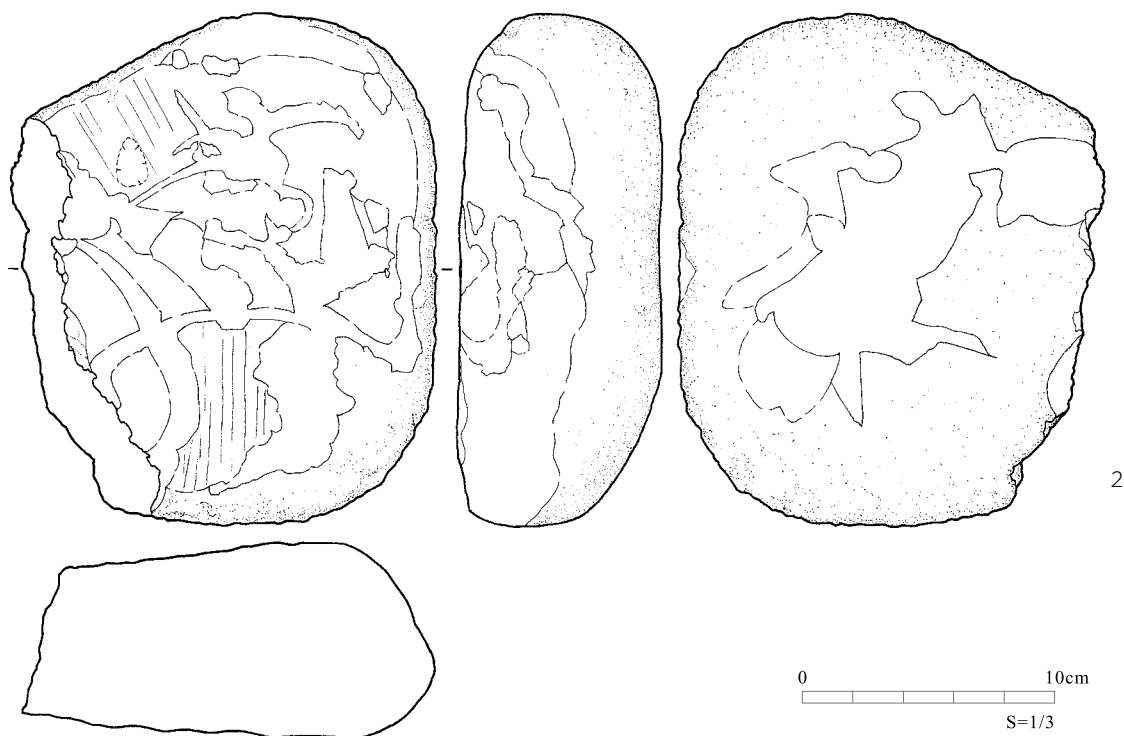
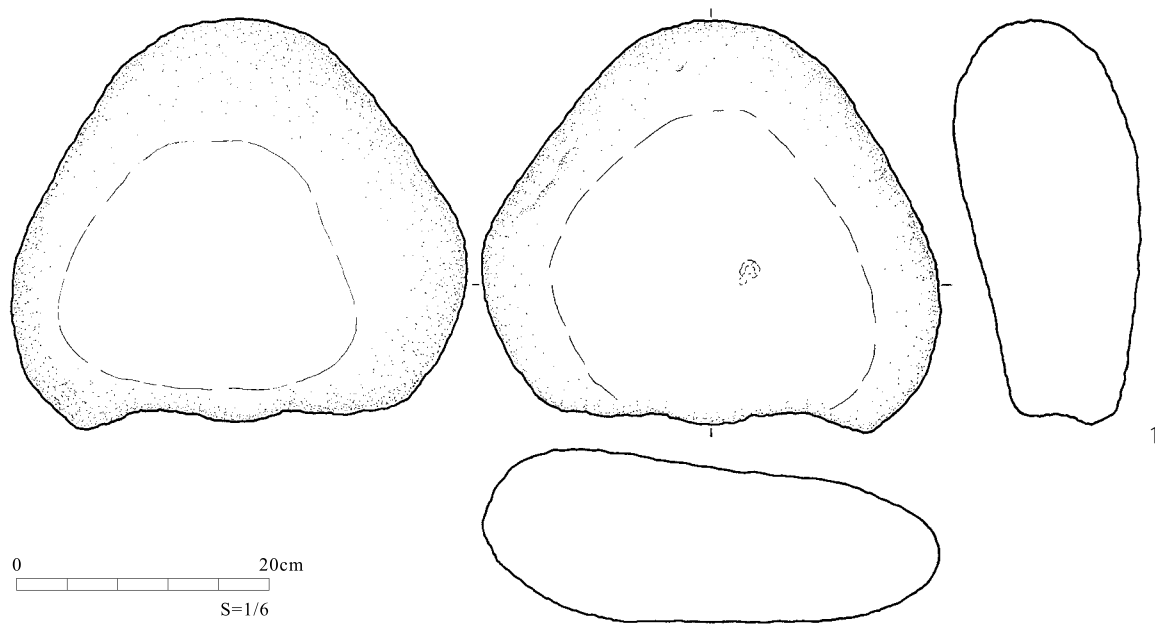
第165図 石皿(1)





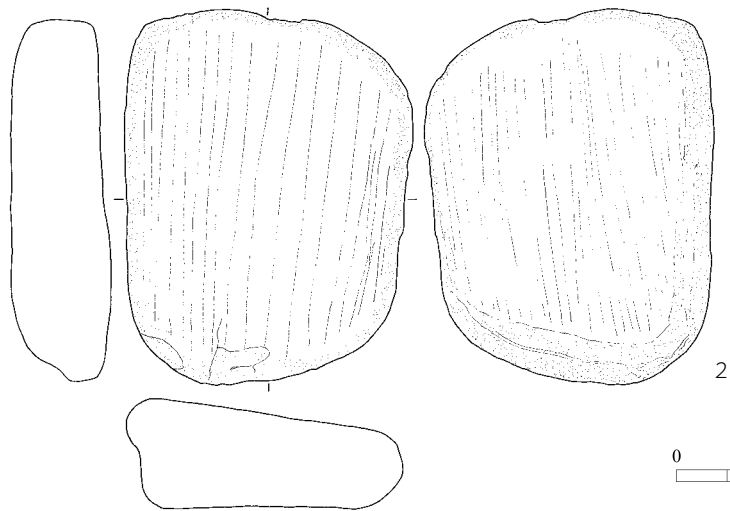
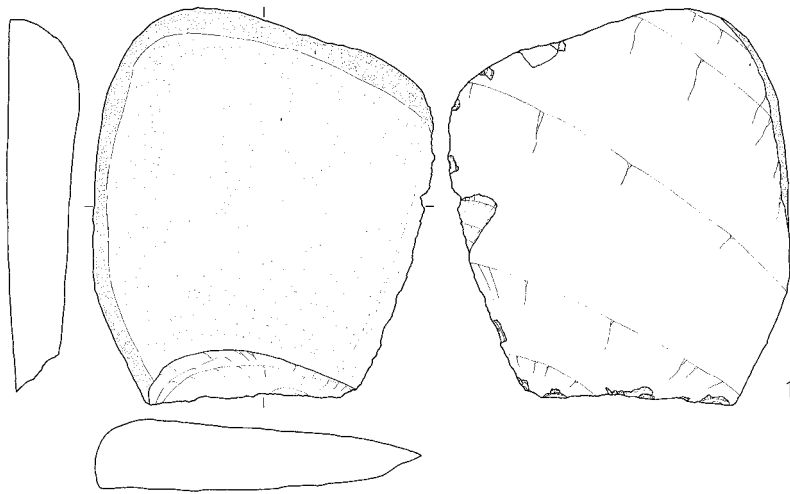
No.	遺構	層位	種類	残存	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石材	特徴	登録	写真
1	B区 SI65	炉内 堆積土	石皿	完形	327	232	100.00	12500	安山岩	両面に磨面。片面の磨面は研磨によって大きく内湾し、舟形の断面形を呈する。	840	52-2
2	B区 SK90	堆積土 1層	石皿	欠損	277	132	95.56	8400	安山岩	両面に平坦な磨面。側面も一部研磨。破砕面とヒビにより欠損。	843	52-3
3	B区 SK90	堆積土 1層	石皿	欠損	295	232	90.31	8700	安山岩	両面に磨面。片側の磨面中央に2か所の凹部。破砕面とヒビにより欠損。破砕面の縁辺にも磨痕がみられることから、破砕後も石皿として利用されたことを示す。	839	52-1

第166図 石皿 (2)



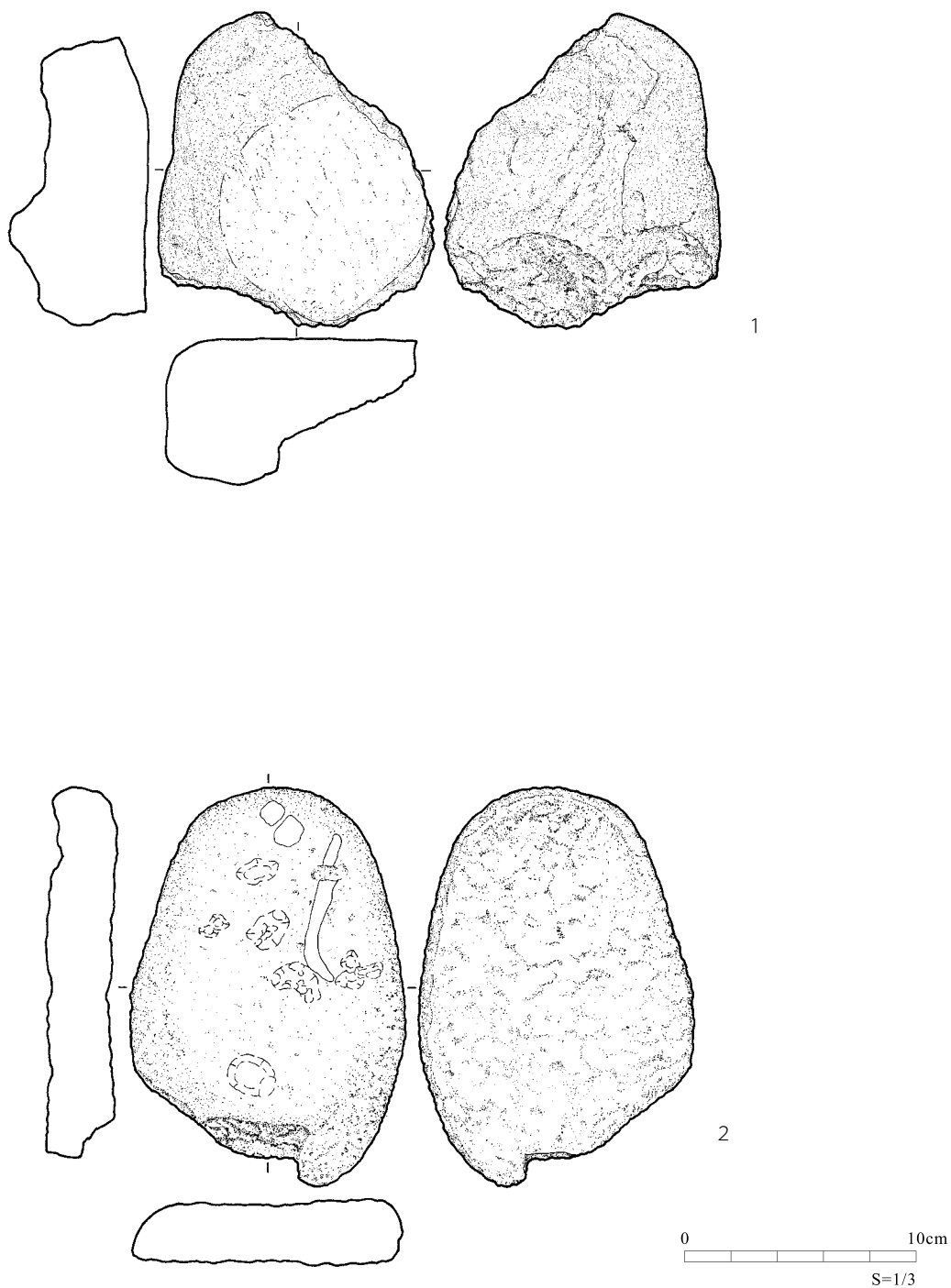
No.	遺構	層位	種類	残存	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石材	特徴	登録	写真
1	B区	表土	石皿	完形	341	355	143	2280	安山岩	両面に磨面。片面の磨面中央に凹部。	825	52-4
2	B区	表土	石皿	欠損	195	168	73.22	4000	安山岩	片面に平坦な磨面。一端を大きく欠損。ガジリ著しい。	824	51-14

第167図 石皿(3)



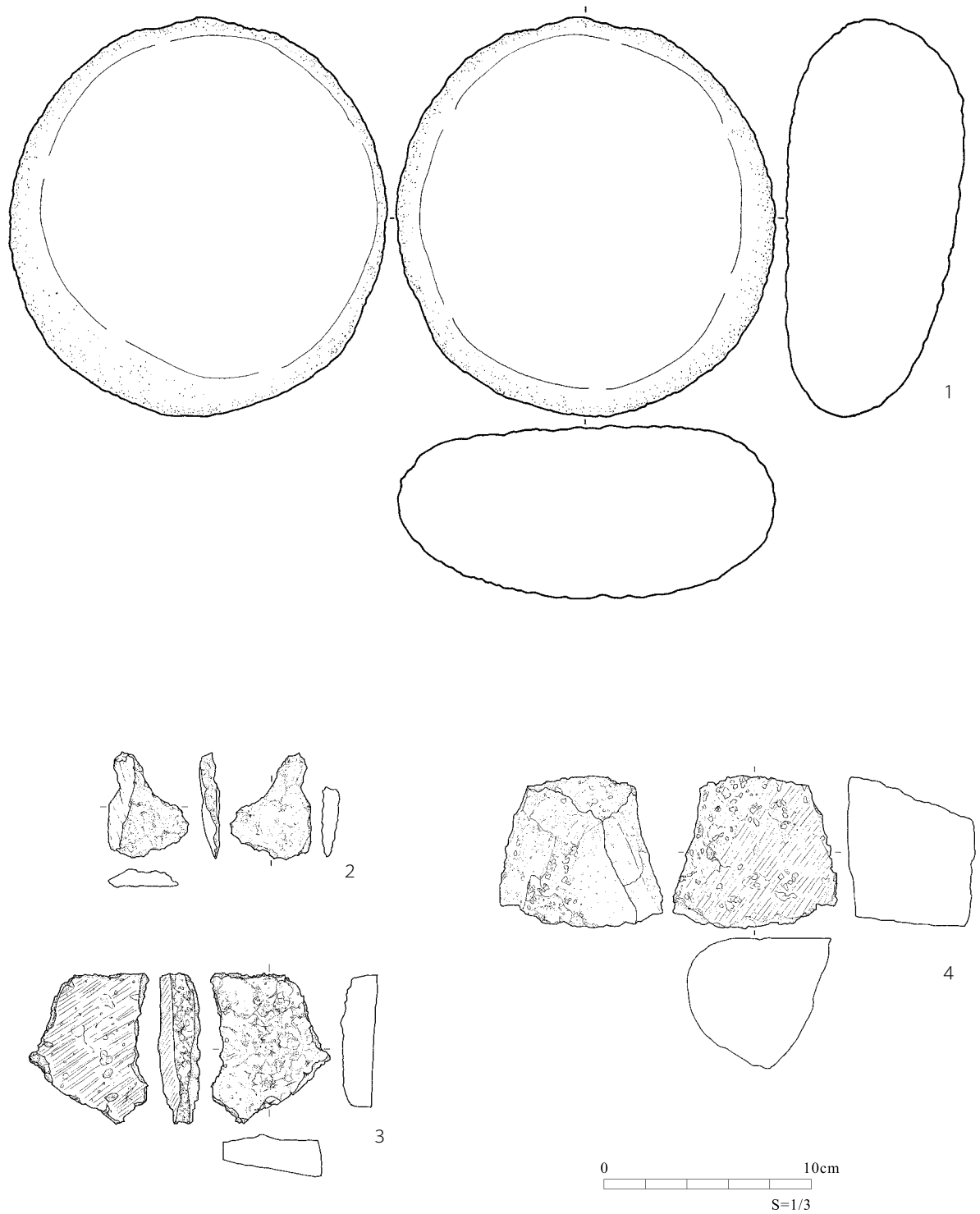
No.	遺構	層位	種類	残存	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石材	特徴	登録	写真
1	B区 SI16	堆積土	石皿	欠損	158.00	128.48	26.06	865	安山岩	片面に平坦な磨面。裏面と側面の一部を剥離により欠損。	701	51-13
2	B区 SK125	堆積土	石皿	完形	148.53	112.4	43.38	1133	安山岩	両面に平坦な磨面。	711	51-15

第168図 石皿(4)



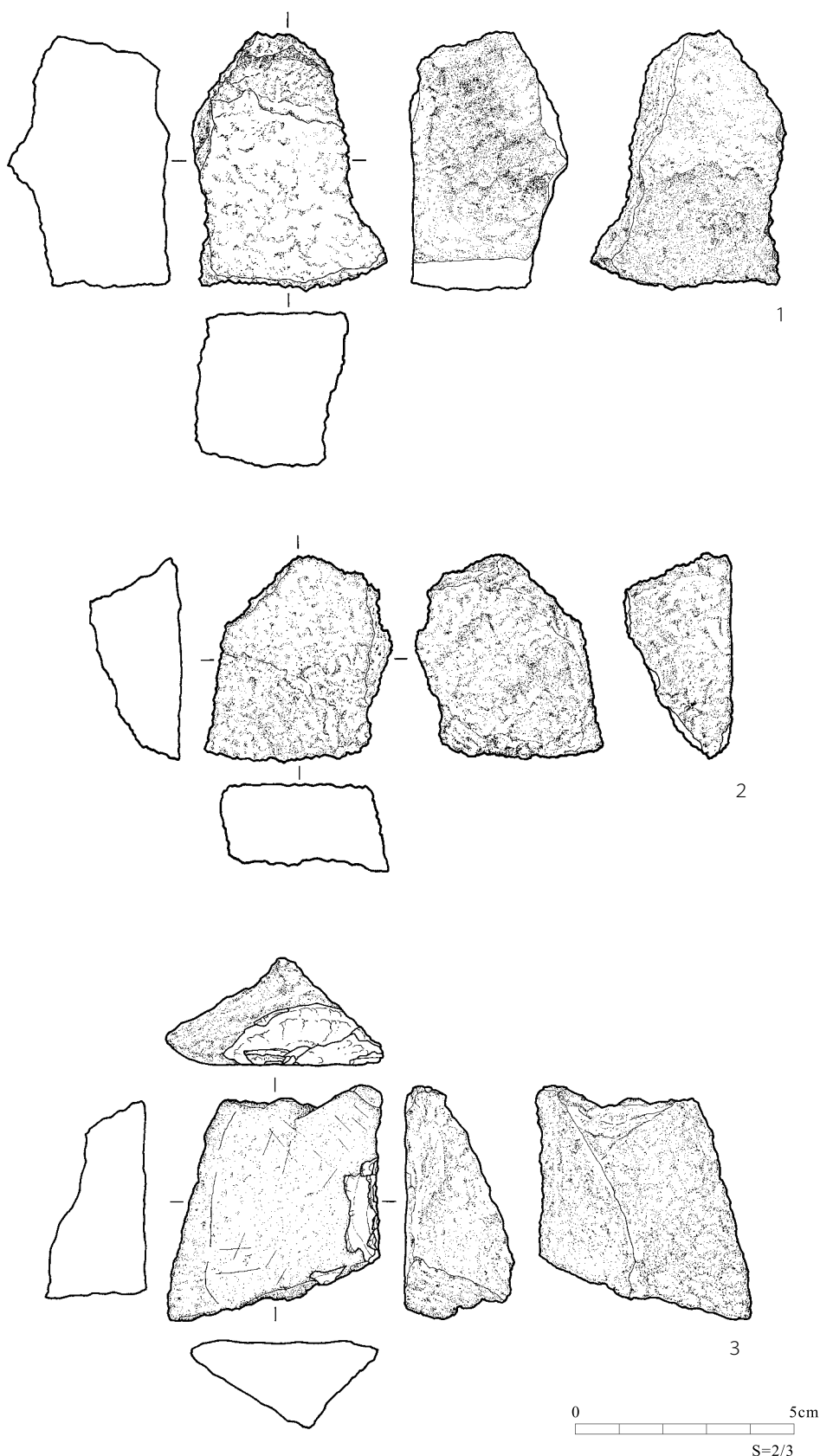
No.	遺構	層位	種類	残存	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石材	特徴	登録	写真
1	B区 SL86	炉内 堆積土	石皿	欠損	140.10	119.41	65.81	1192	安山岩	片面に平坦な磨面。裏面と側面の多くを欠損。被熱痕跡。	809	51-17
2	B区	表土	石皿	欠損	174.00	119.93	28.67	802	安山岩	片面に磨面。磨面はやや内湾し、全面に凹痕・潰れ痕が認められる。裏面と側面の一部を欠損。	818	51-18

第169図 石皿 (5)



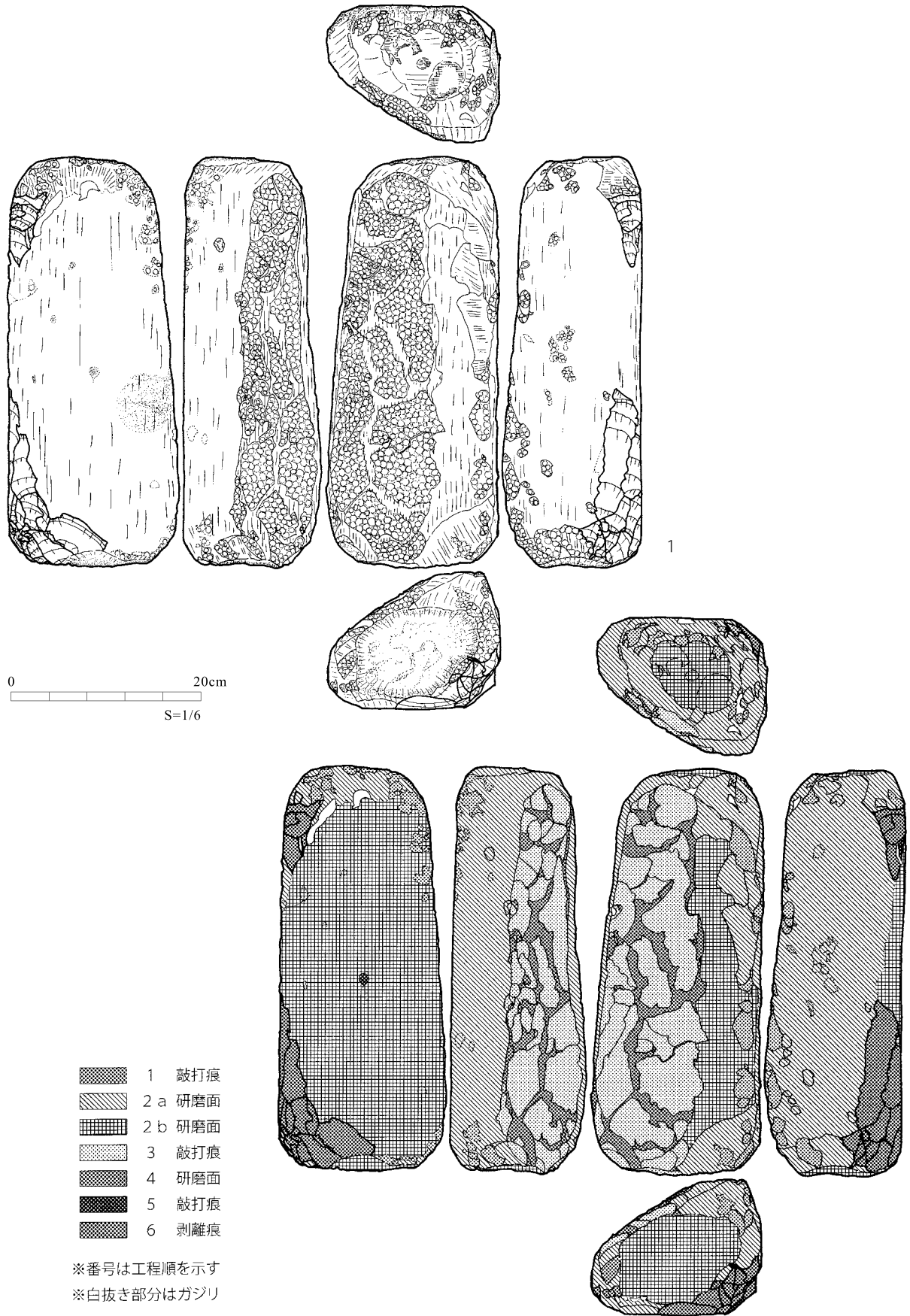
No.	遺構	層位	種類	残存	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石材	特徴	登録	写真
1	B区 SL86	炉内 堆積土	石皿	完形	185	177	70.58	3700	安山岩	両面に磨面。磨面に先行して潰痕が認められる。	841	51-16
2	B区 SK22	堆積土 9層	石皿	一部	50.64	39.13	7.27	13.4	安山岩	破片。一端に平坦な磨面。	822	51-2
3	B区 SK22	堆積土 7層	石皿	一部	72.32	57.42	17.85	92.0	安山岩	破片。一面に平坦な磨面。	811	51-3
4	B区 SK125	堆積土	石皿	一部	68.79	77.98	65.61	422	安山岩	破片。側面に平坦な磨面。被熱痕跡。	814	51-6

第170図 石皿 (6)



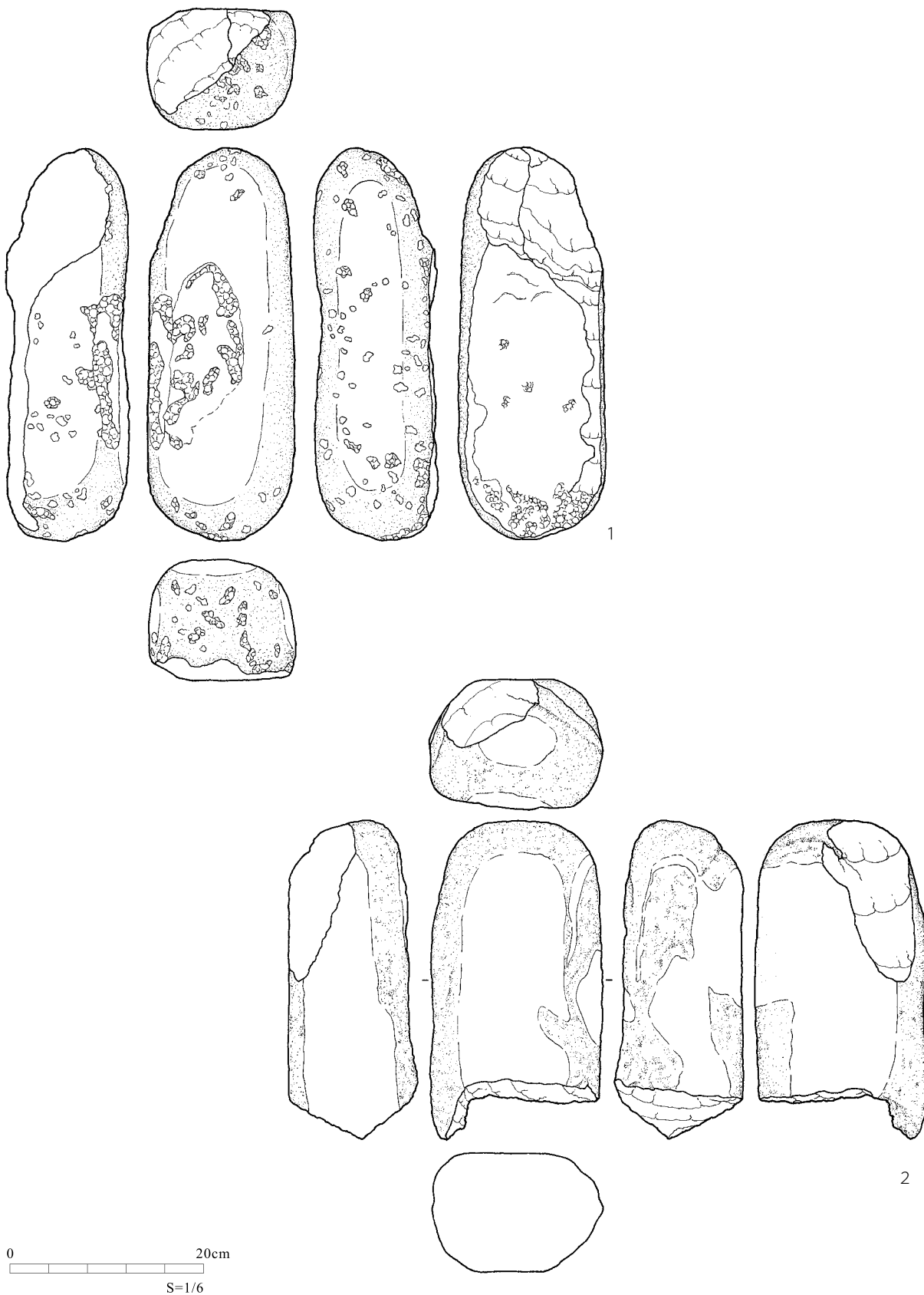
No.	遺構	層位	種類	残存	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石材	特徴	登録	写真
1	B区 SK28	堆積土 2層	石皿	一部	59.00	41.34	35.96	81.0	砂岩	破片。一面に平滑な磨面。破片面の表面側に近い部分が帯状に黒褐色に変質。712・813と同一個体。	812	51-7
2	B区 SK28	堆積土 2層	石皿	一部	55.48	41.58	23.84	39.0	砂岩	破片。一面に平滑な磨面。712・812と同一個体。	813	51-4
3	B区	掘乱	石皿	一部	70.13	50.14	24.26	57.0	玄武岩	破片。一面に平滑な磨面。磨面は縁辺の一部で湾曲。表面が暗褐色に変質。	820	51-5

第171図 石皿(7)



No.	遺構	層位	種類	残存	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石材	特徴	登録	写真
1	B区	表土	棒状石製品	完形	433	173	154	18900	安山岩	隅丸の三角柱状を呈し、一端がやや肥厚する。側面と端部に敲打・研磨・剝離により整形・調整加工を施す。各面ごとに敲打の後に研磨を施し、研磨面と研磨面のなす稜上の両端に整形剝離を施す。	827	53-1

第 172 図 棒状石製品 (1)



No.	遺構	層位	種類	残存	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石材	特徴	登録	写真
1	B区 SK67	底面	棒状石製品	完形	440	150	125	12700	安山岩	隅丸の四角柱状を呈する。棒状の大型礫の側面に敲打の後に研磨を施す。端部中央からの強い打撃による大型の剥離痕がみられる。	838	53-2
2	B区	表土	棒状石製品	欠損	328	172	130	12000	花崗閃緑岩	隅丸の四角柱状を呈する。棒状の大型礫の側面と端部に敲打の後に研磨を施す。中央部で折損し、端部から側面に磨面を切る剥離痕がみられる。	826	53-3

第173図 棒状石製品 (2)



## 2. 古代

### (1) B区

#### ① 竪穴住居跡

【SI16 竪穴住居跡】(第174～177図、写真図版18-4・5、19-1・3)

〔位置・確認面〕B区西部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕SB130→SK91・SK101・SK102→SI16

〔規模・形状〕東西4.2m、南北4.5mの不整隅丸方形を呈する。

〔方向〕カマド中軸線：E-26.0°-S

〔壁面〕V～VI層を壁とする。床面からやや外傾気味に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良好な西壁で床面から16cmである。

〔床面〕住居掘方埋土を床とする。ほぼ平坦である。

〔主柱穴〕4か所確認した。北側の2か所は住居平面形の対角線上に、南側の2か所は住居南壁に接する位置に設けられている。掘方の平面形は長軸31～45cm、短軸30～38cmの隅丸方形または楕円形を呈し、深さ51～68cmである。掘方埋土は地山ブロックを多く含む黄褐色・褐色シルトである。いずれも柱材の抜き取り痕跡を確認し、このうち3か所で平面形が直径14～18cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡はいずれも掘方底面に達する。

〔周溝・壁材〕なし

〔カマド〕住居東辺やや南寄りに付設されている。燃烧部の焚口側のみ残存する。燃烧部は長さ172cm、幅168cmで、焚口幅は側壁先端間で80cmである。燃烧部底面は幅50cm、奥行70cm以上で、床面より最大で13cmほど皿状に窪んでいる。底面は被熱による赤色化が認められる。側壁は河原石を骨材として構築している。骨材は燃烧部の焚口側が残存し、奥壁側は抜き取られている。燃烧部中央に平面形が長軸20cm、短軸15cmの楕円形を呈し、燃烧部底面からの高さ22cmの柱状の河原石が据えられており、支脚と考えられる。奥壁は住居東壁と一致していたものとみられ、その場合の側壁の長さは左右とも115cm程度である。また、カマド燃烧部は人為的に壊され、土師器甕7個体以上が廃棄されていた。

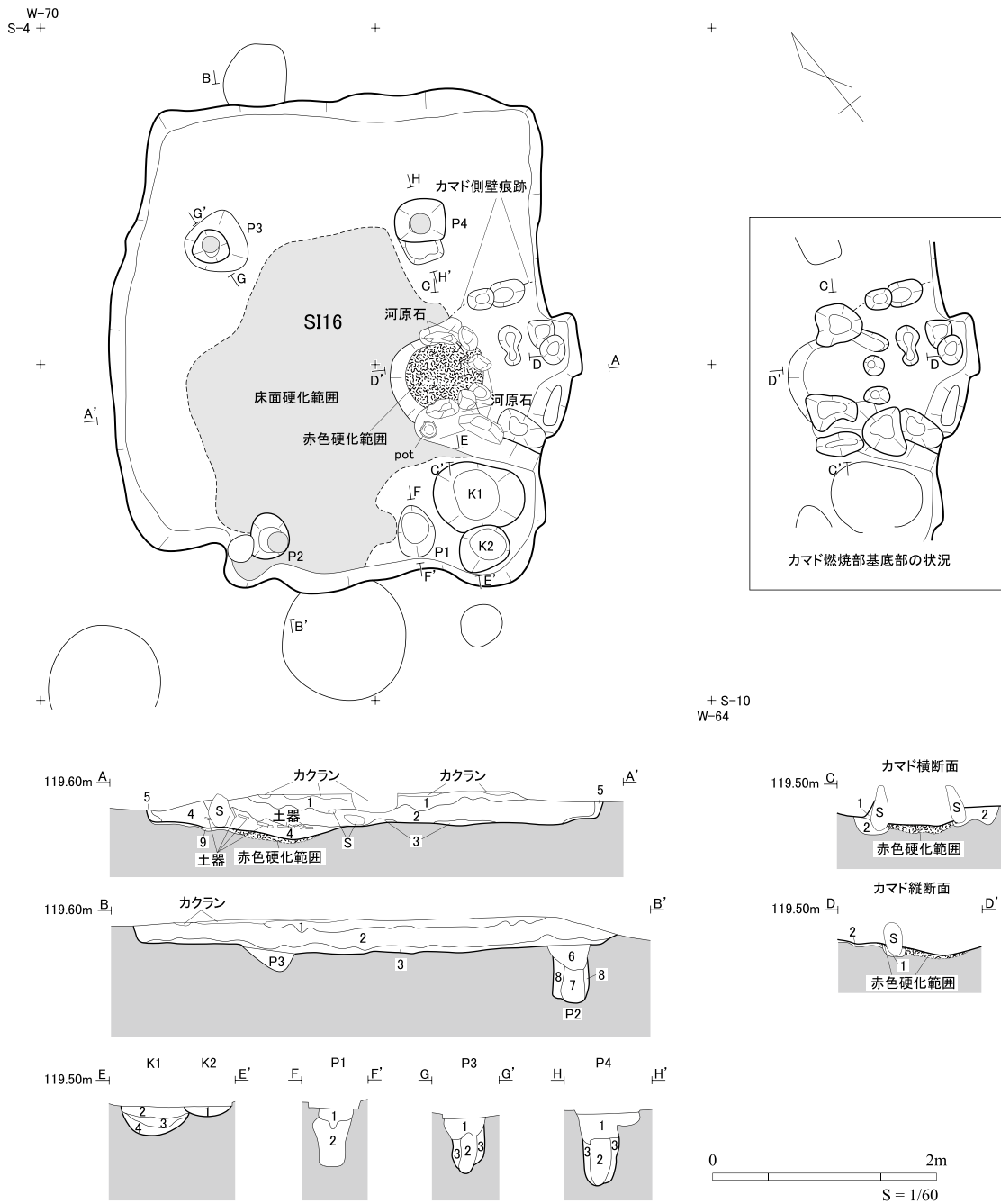
〔貯蔵穴〕住居南東隅で土坑2基(K1・K2)を確認した。これらは重複関係にあり、K1はK2に壊されている。いずれも位置と形状から貯蔵穴と考えられる。K1は平面形が長軸82cm、短軸64cmの不整楕円形を呈し、断面形は深さ26cmのU字形を呈する。堆積土は3層に細分され、焼土粒・地山ブロックを含む黒褐色シルトである。いずれも人為的埋土と考えられる。K2は平面形が長軸50cm、短軸38cmの不整円形を呈し、断面形は深さ9cmの皿状を呈する。堆積土は地山ブロックを含む暗褐色粘質シルトで、人為的埋土と考えられる。

〔床下土坑〕なし

〔堆積土〕5層に細分される。1層は均質な黒色シルト、2層は地山粒をわずかに含む黒褐色シルト、3層は地山ブロックを含む黒褐色シルト、4層は焼土と土器片を多量に含む黒褐色シルト、5層は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトである。1～3層は住居廃絶後の自然堆積土、4層はカマド廃絶に伴う人為的埋土、5層は住居機能時の壁際の崩落土と考えられる。

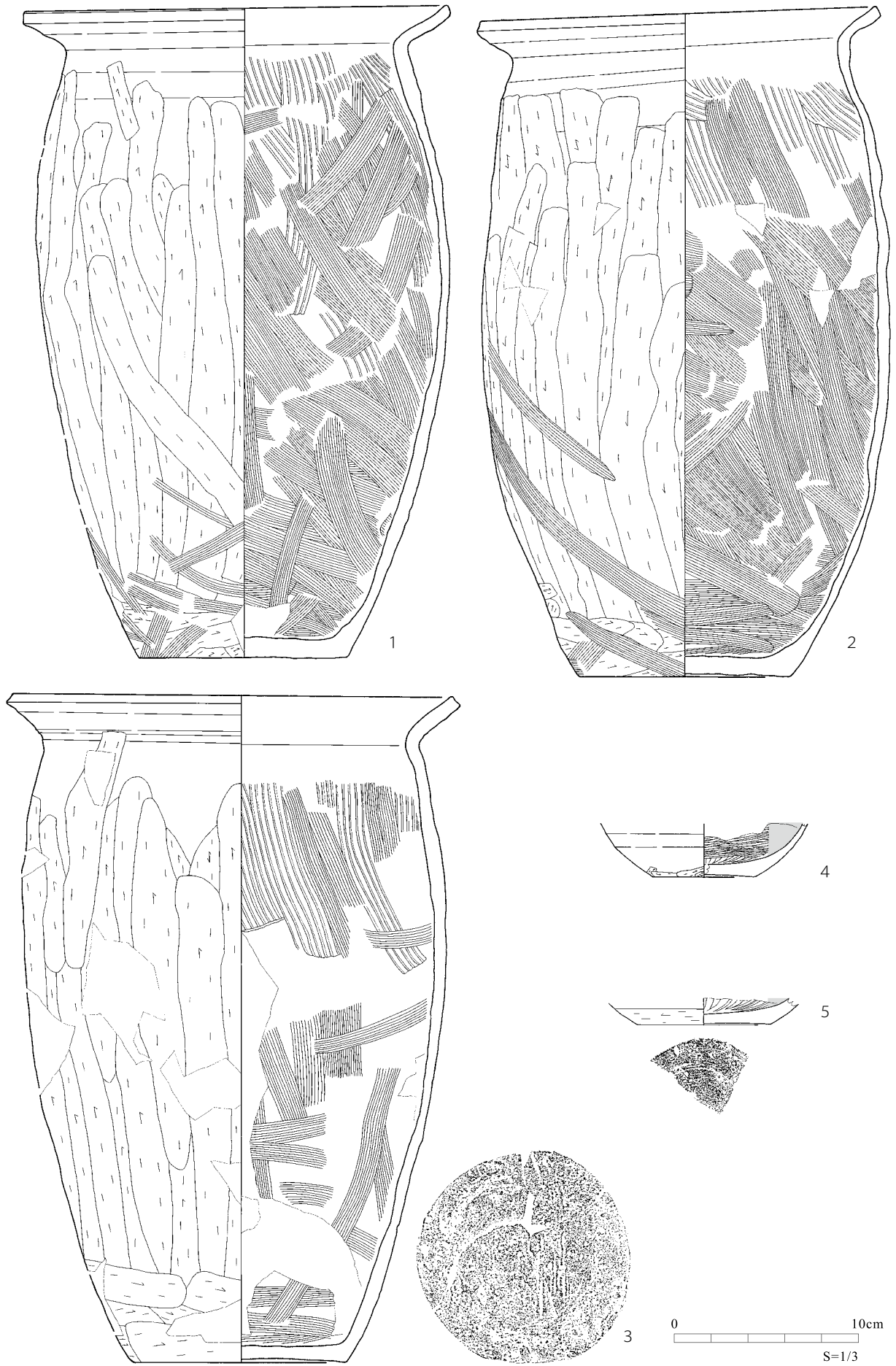
〔出土遺物〕床面よりロクロ土師器甕(第175図1～3、第176図6～10)、砥石(第177図)、K1堆積土よりロクロ土師器小型甕(第176図9)、住居内堆積土よりロクロ土師器坏(第175図4)、確認面よりロクロ土師器坏(第175図5)が出土した。

1～3・7は内外面にロクロナデ調整を施した後、内面の底部から頸部付近にかけてハケメ調整→ヘラナデ調整、外面の底部付近から頸部付近にかけて縦方向のケズリ調整を施し、底部にはケズリ調整を

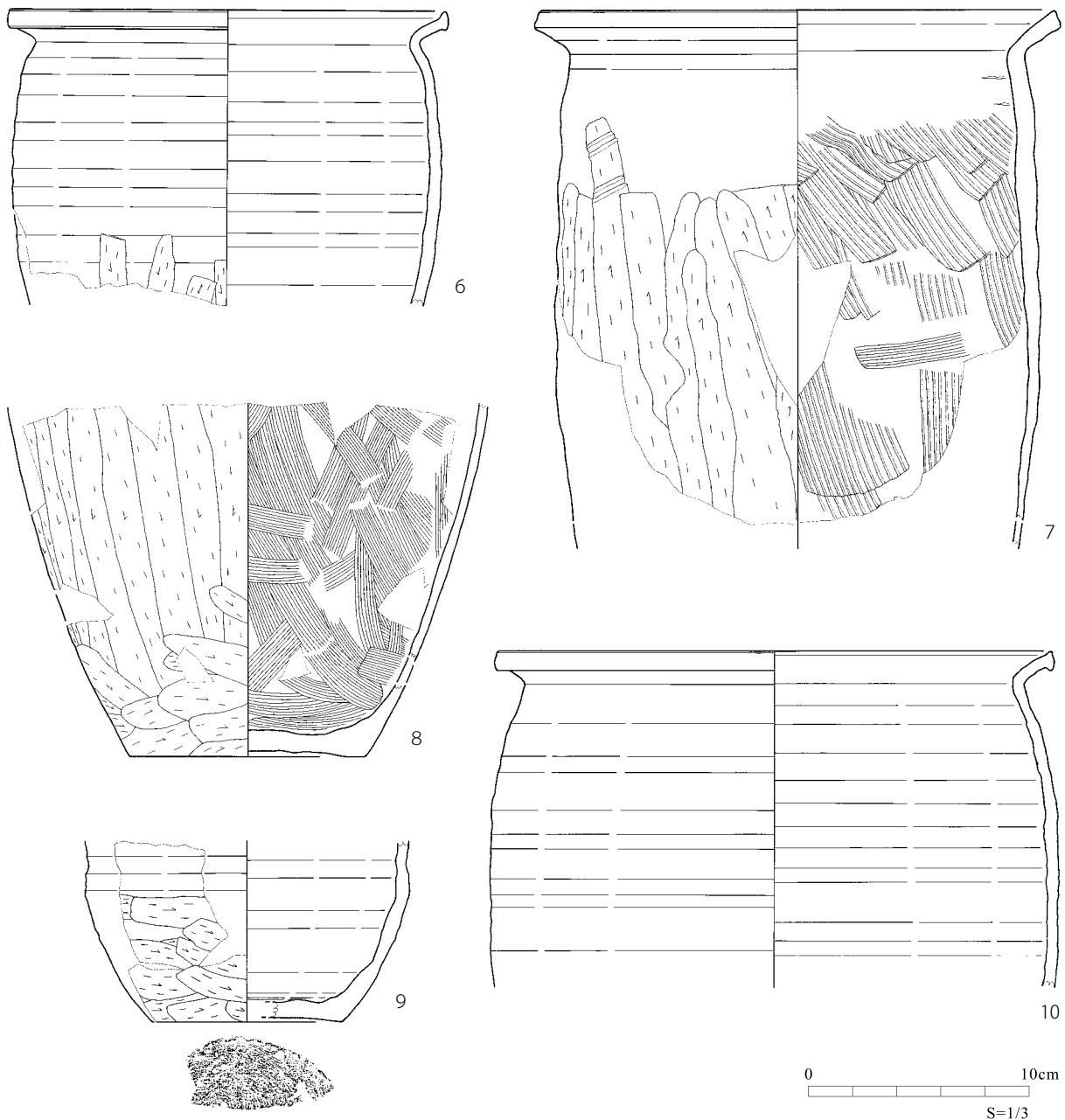


SI16 竪穴住居跡 A-A' B-B'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	均質土
2	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒をわずかに含む
3	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを含む
4	10YR2/3 黒褐	シルト	焼土粒・土器片を多く含む(人為)
5	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む(壁崩)
6	10YR4/4 褐	シルト	地山ブロック主体 暗褐色土ブロックをわずかに含む(P2 柱)
7	10YR3/2 黒褐	シルト	均質土(P2 柱痕)
8	10YR5/8 黄褐	シルト	地山ブロック主体 暗褐色土ブロックを含む(P2 柱)
9	10YR4/6 褐	シルト	地山ブロックを含む(柱)
SI16 竪穴住居跡 カマド横断面 C-C'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒をわずかに含む(カマド構)
2	10YR3/4 暗褐	粘質シルト	地山ブロック・焼土粒を含む(カマド骨材据方)
SI16 竪穴住居跡 カマド縦断面 D-D'			
No.	土色	土性	備考
1	7.5YR3/4 暗褐	シルト	焼土粒を含む(カマド支脚据方)
2	10YR4/6 褐	シルト	地山ブロックを含む(柱)
SI16 竪穴住居跡 K1・K2 E-E'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	地山ブロックを多量に含む 焼土粒をわずかに含む(K1 堆・人為)
2	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	地山粒・焼土粒を多く含む(K2 堆・人為)
3	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	地山粒を少量含む 焼土粒をわずかに含む(K2 堆・人為)
4	10YR3/2 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを多く含む(K2 堆・人為)
SI16 竪穴住居跡 P1 F-F'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを含む(柱)
2	10YR4/3 にぶい黄褐	シルト	地山ブロックを多量に含む(柱)
SI16 竪穴住居跡 P3 G-G'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ブロックを多量に含む(柱)
2	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む(柱)
3	10YR4/4 褐	シルト	地山ブロックを多量に含む(柱)
SI16 竪穴住居跡 P4 H-H'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ブロックを多く含む(柱)
2	10YR2/1 黒	シルト	地山ブロックを含む(柱)
3	10YR5/6 黄褐色	粘質シルト	地山ブロックを多く含む(柱)

第174図 SI16 竪穴住居跡

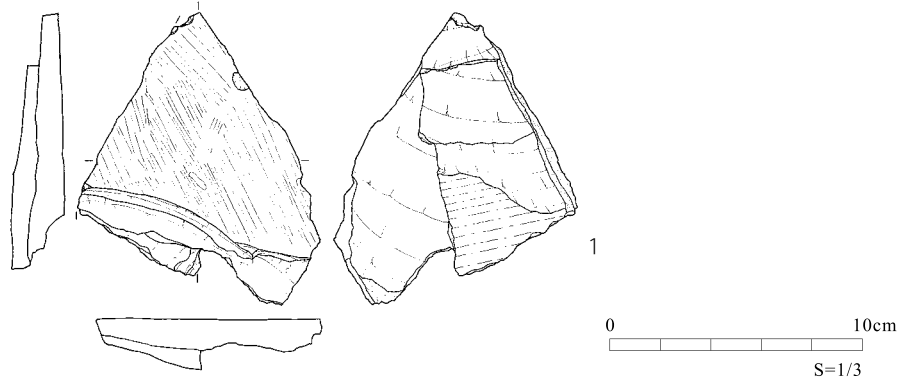


第 175 図 SI16 竪穴住居跡出土遺物 (1)



No.	層位	種類	器種	器面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録	写真
					口径	底径	器高			
1	床面直上	ロクロ土師器	甕	内面：ロクロナデ→ハケメ→ヘラナデ 外面：ロクロナデ→ヘラケズリ→体下部ヘラナデ 切り離し：不明→ヘラケズリ	23.20	11.35	35.40	略完形	1	54-3
2	床面直上	ロクロ土師器	甕	内面：ロクロナデ→ハケメ→ヘラナデ 外面：ロクロナデ→ヘラケズリ→体下部ヘラナデ 切り離し：不明→ヘラケズリ	21.90	11.40	36.20	略完形	2	54-4
3	床面直上	ロクロ土師器	甕	内面：ロクロナデ→ハケメ→ヘラナデ 外面：ロクロナデ→ヘラケズリ 切り離し：静止糸切?→ヘラケズリ	24.60	11.50	36.30	略完形	3	55-5
4	堆積土	ロクロ土師器	坏	内面：放射状ミガキ→黒色処理 外面：ロクロナデ→体下部ヘラケズリ 切り離し：不明→手持ちヘラケズリ	-	(5.60)	(2.95)	下半部	9	55-1
5	確認面	ロクロ土師器	坏	内面：放射状ミガキ→黒色処理 外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ 切り離し：不明→回転ヘラケズリ	-	(7.20)	(1.45)	底部	10	55-2
6	床面直上	ロクロ土師器	甕	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ→ヘラケズリ	(20.00)	-	(13.30)	上半部	6	55-6
7	床面直上	ロクロ土師器	甕	内面：ロクロナデ→ハケメ・ヘラナデ 外面：ロクロナデ→ヘラケズリ	(23.80)	-	(24.45)	上半部	4	54-1
8	床面直上	ロクロ土師器	甕	内面：ロクロナデ→ヘラナデ 外面：ロクロナデ→ヘラケズリ 切り離し：不明→ヘラケズリ	-	10.70	(16.00)	下半部	5	55-7
9	K1 堆積土	ロクロ土師器	小型甕	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ→ヘラケズリ 切り離し：回転糸切→無調整	-	(8.60)	(8.20)	下半部	11	55-3
10	床面直上	ロクロ土師器	甕	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ	(25.40)	-	(15.25)	上半部	7	54-2

第 176 図 SI16 竪穴住居跡出土遺物 (2)



No.	遺構	層位	種類	残存	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石材	特徴	登録	写真
1	B区 SI16	床面直上	砥石	一部	93.9	97.85	21.32	183	玄武岩	表裏に平坦な磨面を残す。大きな方の磨面には線条痕あり。	702	55-4

第 177 図 SI16 竪穴住居跡出土遺物 (3)

施しており、1・2は外面の体下部に粗いナデ調整を施している。8は下半部のみ残存し、内外面にロクロナデ調整を施した後、内面にヘラナデ調整、外面に縦方向のケズリ調整を施し、底部にはケズリ調整を施している。6・10は上半部のみ残存し、内外面にロクロナデ調整を施しており、6は外面体下部に縦方向のケズリ調整を施している。4・5は内面に放射状のミガキ調整→黒色処理を施している。4は外面にロクロナデ調整、底部に手持ちヘラケズリ調整を施し、5は外面の体下部から底部に回転ヘラケズリ調整を施している。9は内外面にロクロナデ調整を施した後、外面体下部に横方向のケズリ調整を施しており、底部は回転糸切の後無調整である。第 177 図は砥石の断片で、平滑な砥面が認められる。

このほか、床面、K1 堆積土、P2・P4 の柱材抜き取り穴、堆積土、確認面よりロクロ土師器坏・甕の破片が出土した。また、確認面、堆積土より縄文土器、土製品、二次加工剥片 (第 150 図 1・9)、微細剥離痕を有する剥片 (第 156 図 5)、石核 (第 157 図 1)、石皿 (第 168 図 1) などが出土した。

## ② 竪穴状遺構

【SX78 竪穴状遺構】(第 178 図、写真図版 19 - 6)

〔位置・確認面〕 B区西部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕 SB100 → SX78

〔規模・形状〕 残存範囲で南北 2.5m、東西 3.9m の不整形を呈する。

〔壁面〕 残存しない。

〔床面〕 残存しない。

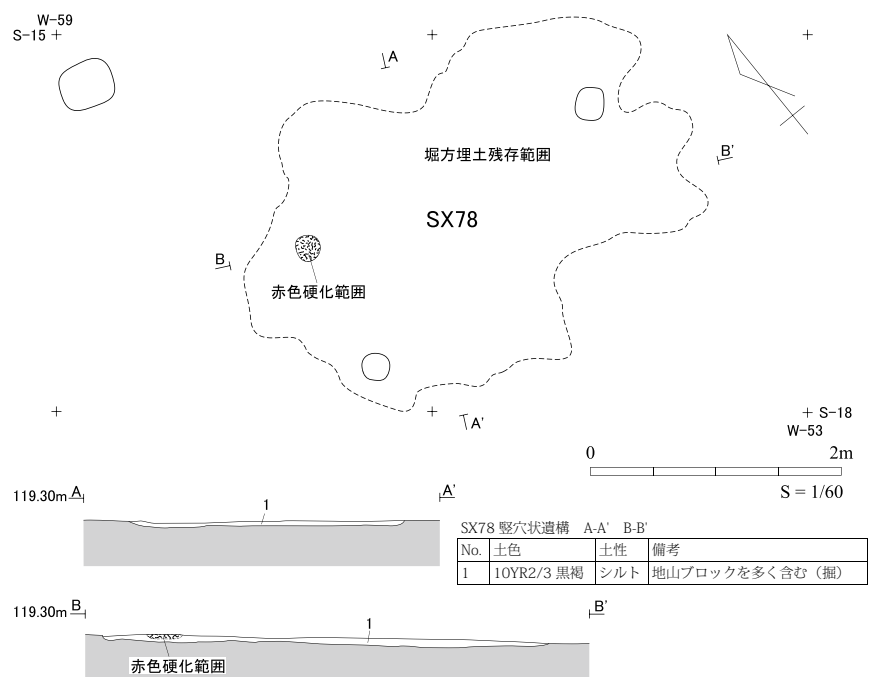
〔主柱穴〕 なし

〔周溝〕 なし

〔カマド〕 残存範囲西寄りの位置で直径 30cm の被熱による赤色化範囲を確認した。位置関係からカマド燃焼部の痕跡と考えられる。

〔堆積土〕 残存しない。

〔出土遺物〕 確認面より磨石/凹石 (第 164 図 2) などが出土した。



第 178 図 SX78 竪穴状遺構

### 3. 中世以降

#### (1) A区

##### ① 溝跡

【SD18 溝跡】(第180図、写真図版3-5・6)

〔位置・確認面〕A区の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕Pit → SD18 → Pit

〔規模・形状〕北東-南西方向に直線的に延び、南西端で南東方向へ屈曲している。北東-南西方向に



第179図 中世以降の遺構配置図

18m、南西端から南東方向に2mを確認した。北東側は削平を受けており、南東側は調査区外へ延びている。上幅85cm、底幅60cmで、断面形は深さ17cmの皿状を呈する。

〔堆積土〕2層に細分される。地山粒を少量含む黒色・黒褐色シルト層である。

〔出土遺物〕確認面、堆積土より縄文土器、ピエス・エスキーユ（第149図7）などが出土した。

(2) B区

① 掘立柱建物跡

【SB85掘立柱建物跡】(第181図、写真図版19-7)

〔位置・確認面〕B区南部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西3間(総長7.56m)、南北1間(総長5.06m)の東西棟側柱建物である。

〔柱穴〕8か所確認した。掘方の平面形は長軸16~30cm、短軸16~28cmの円形または略円形を呈し、深さ6~33cmである。いずれも柱痕跡は確認されなかった。

〔柱間寸法〕北側柱列：西から(264)―(244)―(248)cm、東側柱列：(506)cm

〔方向〕東側柱列：N-21.0°-E

〔出土遺物〕P2堆積土より縄文土器が出土した。

② 柱列跡

【SA95柱列跡】(第182図)

〔位置・確認面〕B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西2間(総長3.92m)の柱列跡である。

〔柱穴〕3か所確認した。掘方の平面形は長軸18~24cm、短軸14~26cmの略円形または楕円形を呈し、深さ11~22cmである。いずれも柱痕跡は確認されなかった。

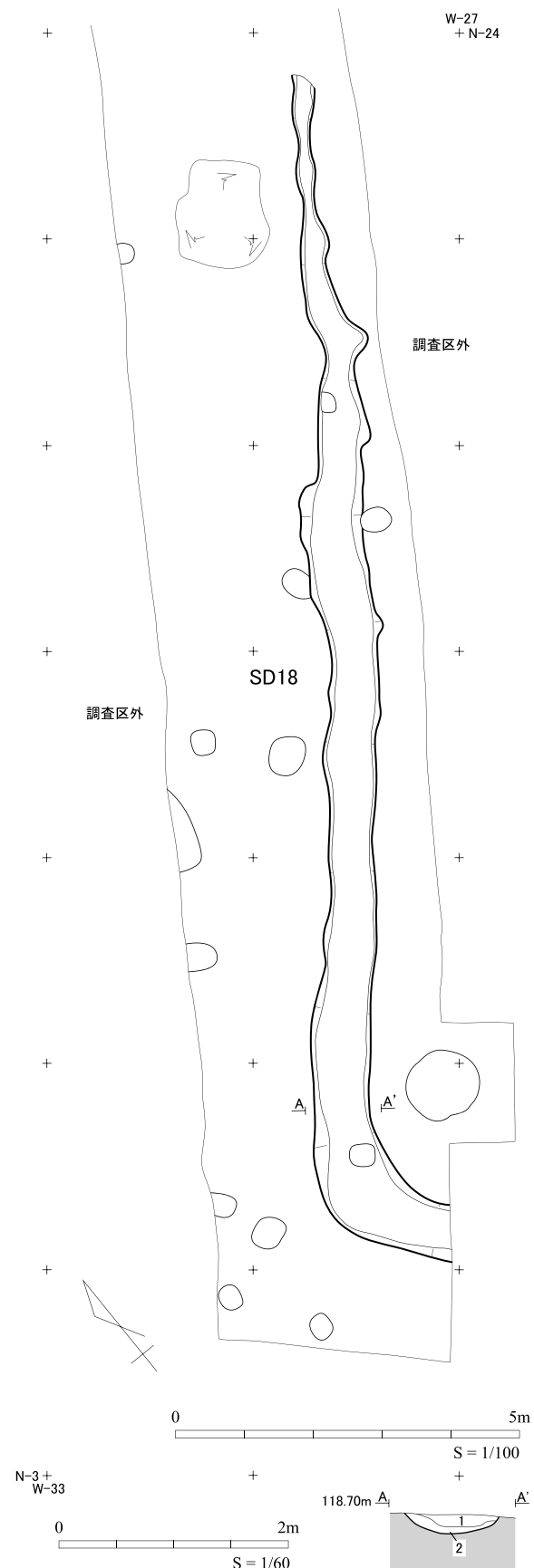
〔柱間寸法〕西から(214)―(178)cm

〔方向〕N-1.3°-W

〔出土遺物〕なし

【SA96柱列跡】(第182図)

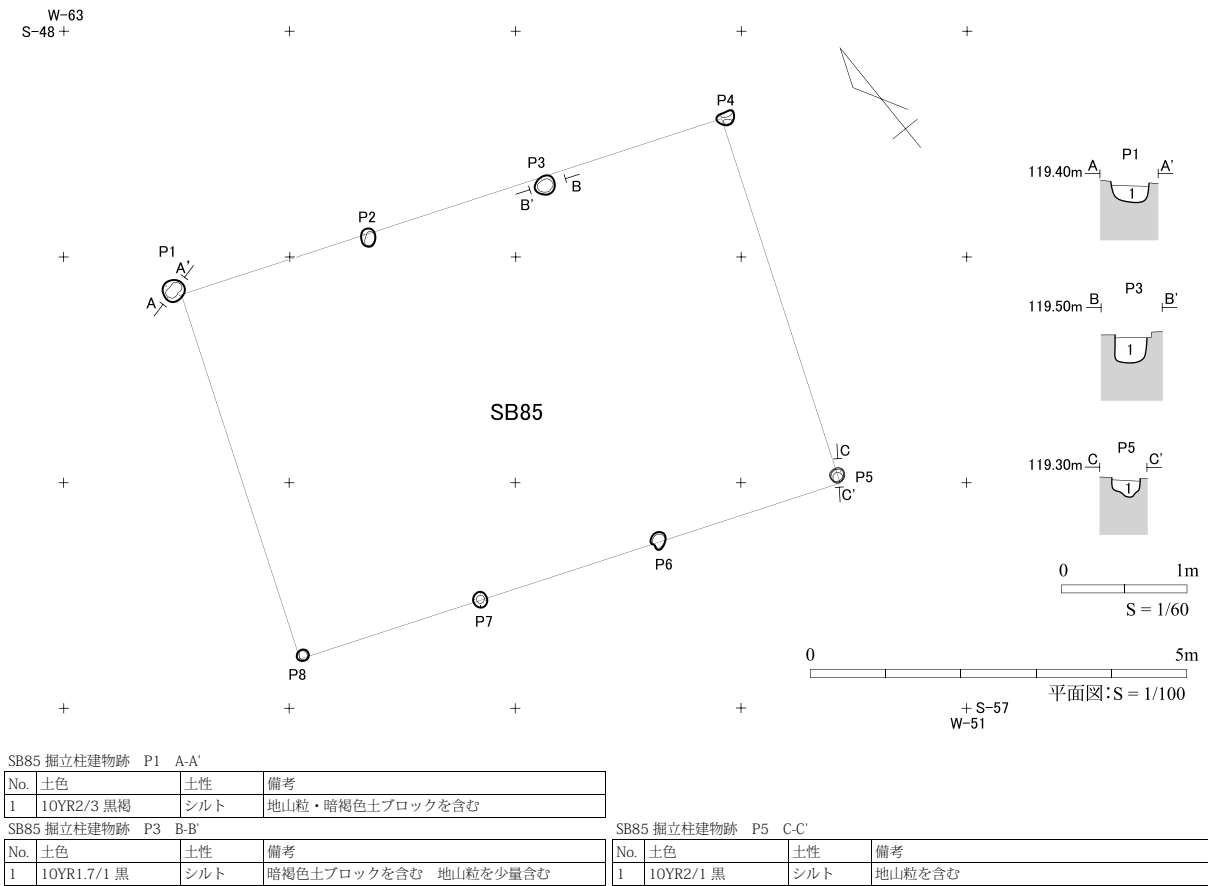
〔位置・確認面〕B区東部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。



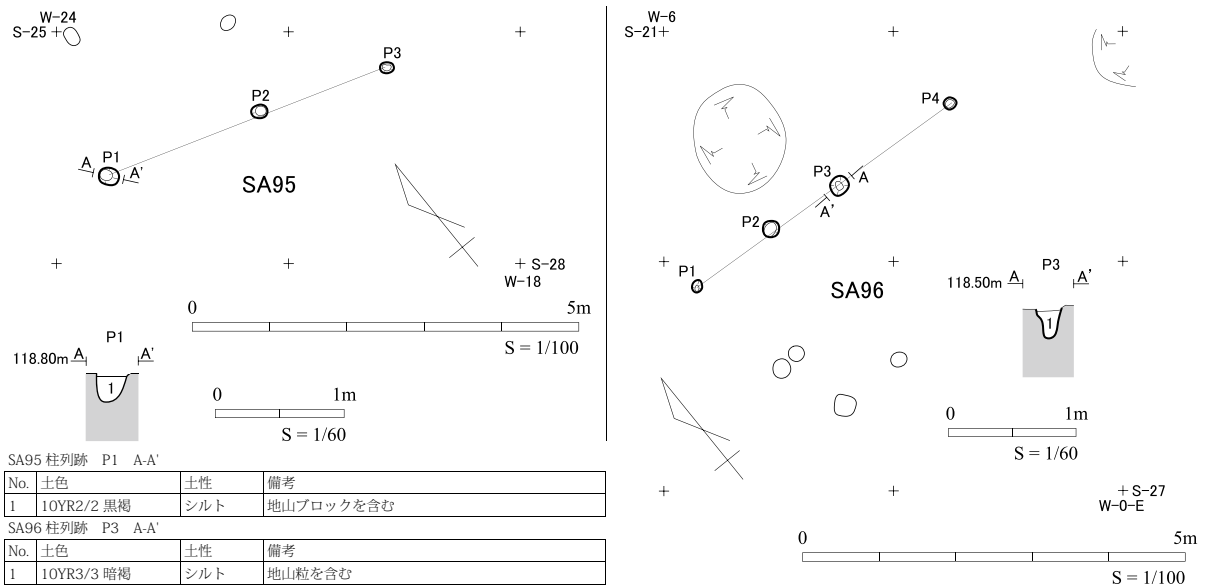
SD18 溝跡 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山粒を少量含む
2	10Y2/2 黒褐	シルト	地山粒を多く含む

第180図 SD18溝跡



第181図 SB85 掘立柱建物跡



第182図 SA95・SA96 柱列跡

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西3間（総長4.10m）の柱列跡である。

〔柱穴〕4か所確認した。掘方の平面形は長軸17～44cm、短軸12～22cmの隅丸方形を基調とし、深さ9～27cmである。いずれも柱痕跡は確認されなかった。

〔柱間寸法〕西から(122)―(106)―(182)cm

〔方向〕E - 3.0° - N

〔出土遺物〕なし

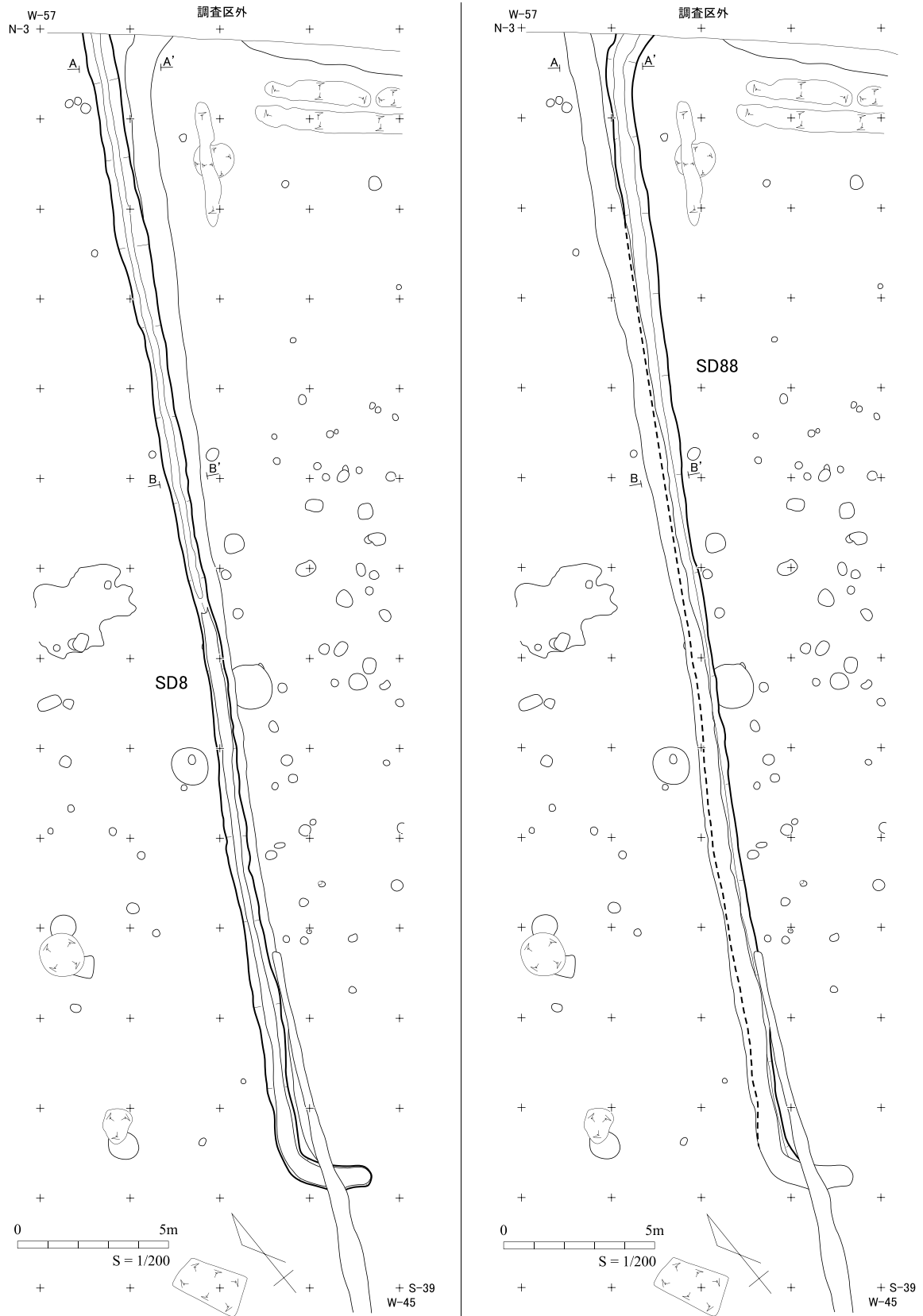


③ 溝跡

【SD8 溝跡】(第183・184図、写真図版19-8・9、20-1)

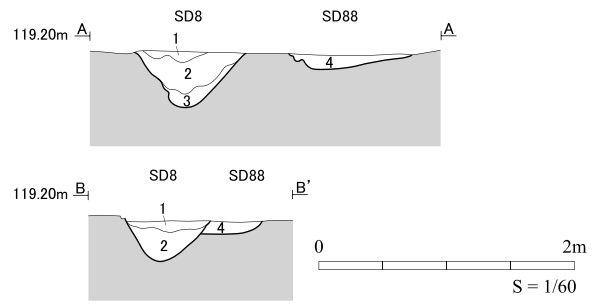
〔位置・確認面〕B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕SK9 → SD88 → SD8 → SD84



第183図 SD8 溝跡・SD88 溝跡 (1)

〔規模・形状〕南北方向に直線的に伸び、南端で東方向へ屈曲している。南北方向に38m、東西方向に3mを確認した。東側は削平を受けており、北側は調査区外へ延びている。上幅85cm、底幅50cmで、断面形は深さ43cmのV字形を呈する。  
 〔堆積土〕3層に細分される。1層は地山粒をわずかに含むオリーブ黒色シルト、2層は地山粒を多く含む黒褐色粘質シルト、3層は地山ブロック・粒を多量に含む黒褐色粘質シルトである。いずれも自然崩落土あるいは自然流入土と考えられる。  
 〔出土遺物〕確認面、堆積土より縄文土器、二次加工剥片（第149図10）などが出土した。



SD8 溝跡・SD88 溝跡 A-A' B-B'

No.	土色	土性	備考
1	5Y2/2 オリーブ黒	シルト	地山粒をわずかに含む (SD8 堆)
2	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	地山粒を多く含む (SD8 堆)
3	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	地山粒を多量に含む (SD8 堆)
4	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを多く含む (SD88 堆)

第184図 SD8 溝跡・SD88 溝跡 (2)

〔SD24 溝跡〕(第185図、写真図版20-2)

〔位置・確認面〕B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西方向に直線的に伸びる。長さ12.2mを確認した。東側は削平を受けており、西側は調査区外へ延びている。西側で確認したSD88と接続している可能性がある。上幅84cm、下幅58cmで、断面形は深さ15cmの皿状を呈する。

〔堆積土〕地山ブロックを含む黒色シルトで、自然流入土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土より縄文土器深鉢の破片が出土した。

〔SD84 溝跡〕(第186・187図、写真図版20-3・4)

〔位置・確認面〕B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕SK9 → SD88 → SD8 → SD84

〔規模・形状〕南北方向に直線的に伸びる。長さ30mを確認した。北側は削平を受けており、南側は調査区外へ延びている。上幅138cm、底幅48cmで、断面形は深さ40cmのV字形を呈する。

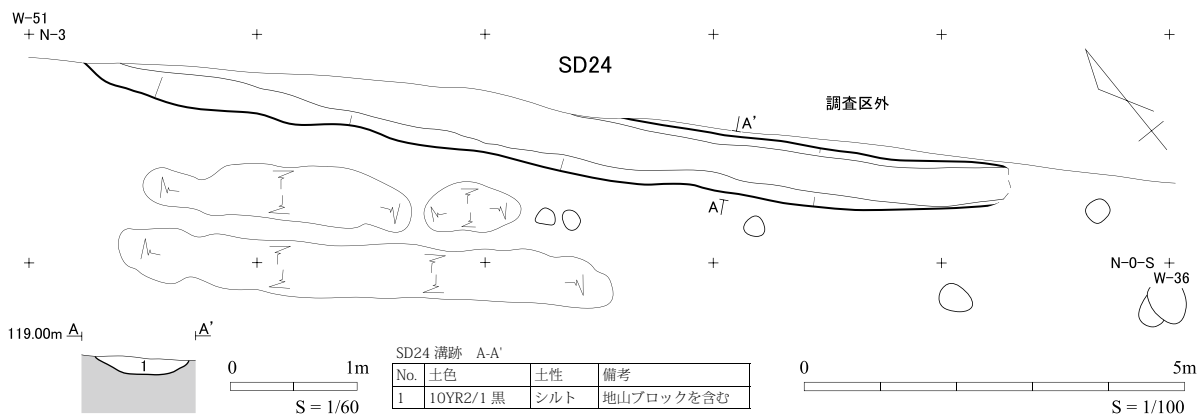
〔堆積土〕地山ブロックを含む黒褐色シルトで、自然流入土と考えられる。

〔出土遺物〕底面付近の堆積土より中世陶器甕(第187図)が出土した。また、堆積土より縄文土器、土製品、石器などが出土した。

〔SD88 溝跡〕(第183・184図、写真図版19-8・9、20-1)

〔位置・確認面〕B区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕SK9 → SD88 → SD8 → SD84



第185図 SD24 溝跡

〔規模・形状〕南北方向に直線的に延び、北端で東方向へ屈曲している。長さ 38m を確認した。南側は SD8 と SD84 に壊されており、北側は調査区外へ延びている。東側で確認した SD24 と接続している可能性がある。上幅 86cm、下幅 40cm で、断面形は深さ 10cm の皿状を呈する。

〔堆積土〕地山粒を多く含む黒褐色シルトで、自然流入土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土より縄文土器、土製品、二次加工剥片（第 150 図 6）、磨石（第 161 図 1）、石皿（第 165 図 2）などが出土した。

### （3）D区

#### ① 掘立柱建物跡

〔SB127 掘立柱建物跡〕（第 188 図、写真図版 20 - 5、21 - 1・2）

〔位置・確認面〕D区北東部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西 2 間（総長 4.80m）、南北 1 間（総長 4.70m）の側柱建物である。

〔柱穴〕6 か所確認した。掘方の平面形は長軸 20 ~ 30cm、短軸 12 ~ 26cm の略円形または楕円形を呈し、深さ 10 ~ 26cm である。3 か所で平面形が直径 14 ~ 16cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕南側柱列：西から 220—(230)cm、西側柱列：(480)cm

〔方向〕西側柱列：N - 19.4° - E

〔出土遺物〕なし

〔SB128 掘立柱建物跡〕（第 189 図、写真図版 20 - 5、21 - 3 ~ 5）

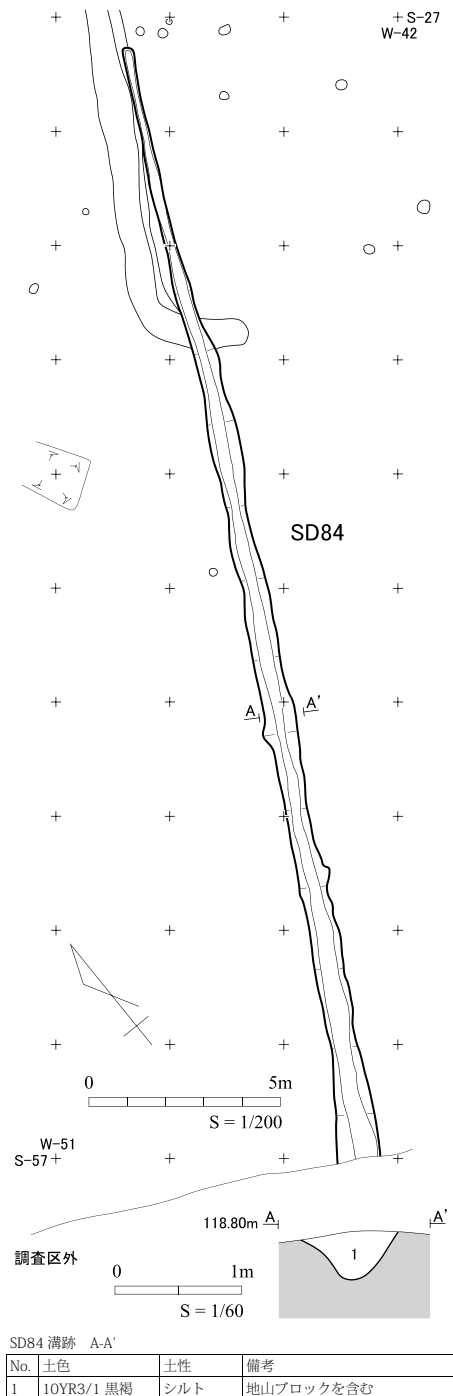
〔位置・確認面〕D区中央部の平坦面に位置する。V層上面で確認した。

〔重複〕なし

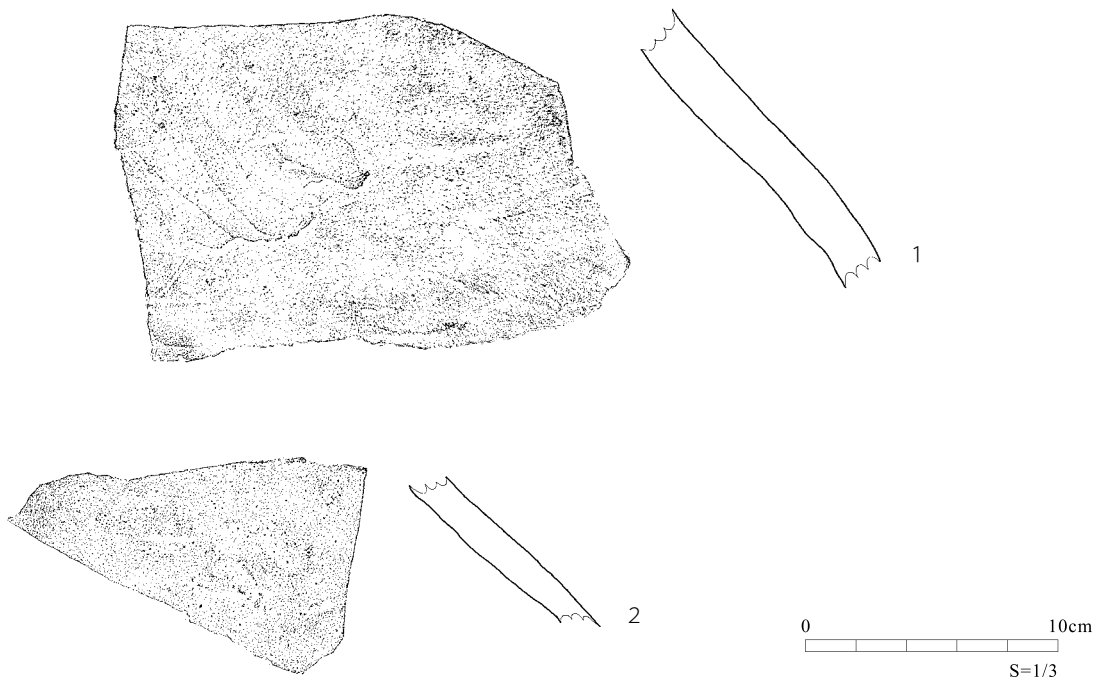
〔規模・形状〕東西 5 間（総長 10.70m）、南北 2 間（総長 4.40m）の東西棟側柱建物で、北面を除く 3 面に 1 間幅の廂を設けている。廂の出は南面で 1.10 ~ 1.35m、東・西面で 0.92 ~ 1.00m で、廂を含めた建物の規模は東西 12.90 m、南北 5.60m である。

〔柱穴〕22 か所確認した。このうち身舎部の柱穴は 13 か所で、掘方の平面形は長軸 20 ~ 40cm、短軸 20 ~ 40cm の略円形を基調とし、深さ 8 ~ 41cm である。3 か所で平面形が直径 9 ~ 20cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。廂部の柱穴は 9 か所で、掘方の平面形は 30 ~ 36cm、短軸 26 ~ 30cm の略円形を基調とし、深さ 14 ~ 85cm である。4 か所で平面形が直径 12 ~ 18cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕身舎部南側柱列：西から (208)—(215)—(215)—(218)—(218)cm、東側柱列：北から (206)—230cm、廂部南側柱列：西から (100)—(215)—(210)—(230)—210—(210)—(92)cm、東側柱列：(562)cm

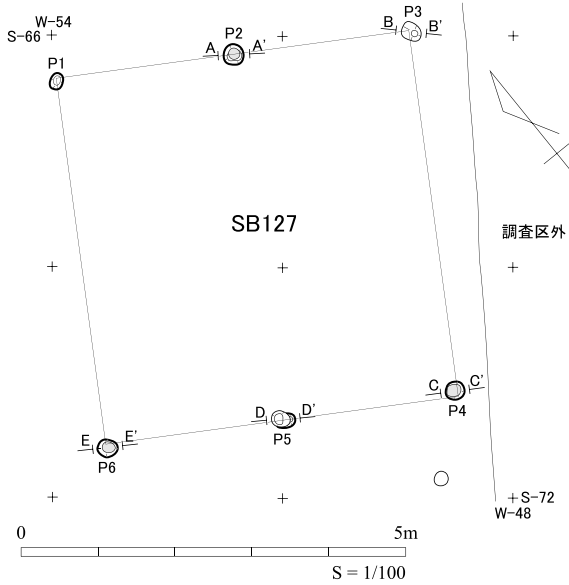


第 186 図 SD84 溝跡

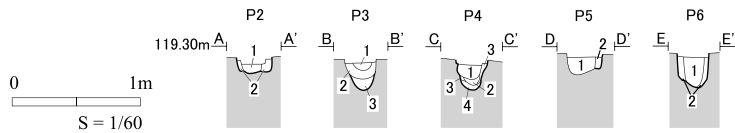


No.	区・遺構・層位	種別	器種	特徴	登録	写真	No.	区・遺構・層位	種別	器形	特徴	登録	写真
1	B・SD84・堆下層	中世陶器	甕	内外面：ナデ	549	55-8	2	B・SD84・堆下層	中世陶器	甕	内外面：ナデ	550	55-9

第187図 SD84 溝跡出土遺物



SB127 掘立柱建物跡 P2 A-A'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	下部に灰褐色土ブロックを含む（柱痕）
2	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）
SB127 掘立柱建物跡 P3 B-B'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山粒を含む（柱抜）
2	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱抜）
3	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）
SB127 掘立柱建物跡 P4 C-C'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山小ブロックをごくわずかに含む（柱痕）
2	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを少量含む（柱掘）
3	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）
4	10YR4/3 にぶい黄褐	シルト	地山ブロックを多量に含む（柱掘）
SB127 掘立柱建物跡 P5 D-D'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山ブロックを含む（柱抜）
2	10YR3/3 暗褐	シルト	地山粒を含む（柱掘）
SB127 掘立柱建物跡 P6 E-E'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山粒を少量含む（柱痕）
2	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）



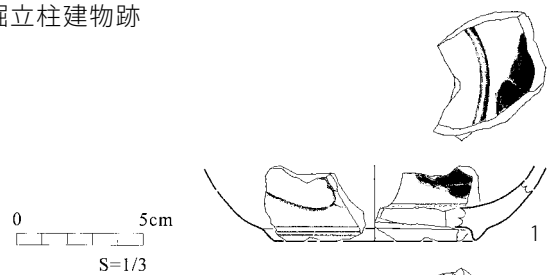
第188図 SB127 掘立柱建物跡

〔方向〕 南側柱列：E - 27.8° - S

〔出土遺物〕 なし

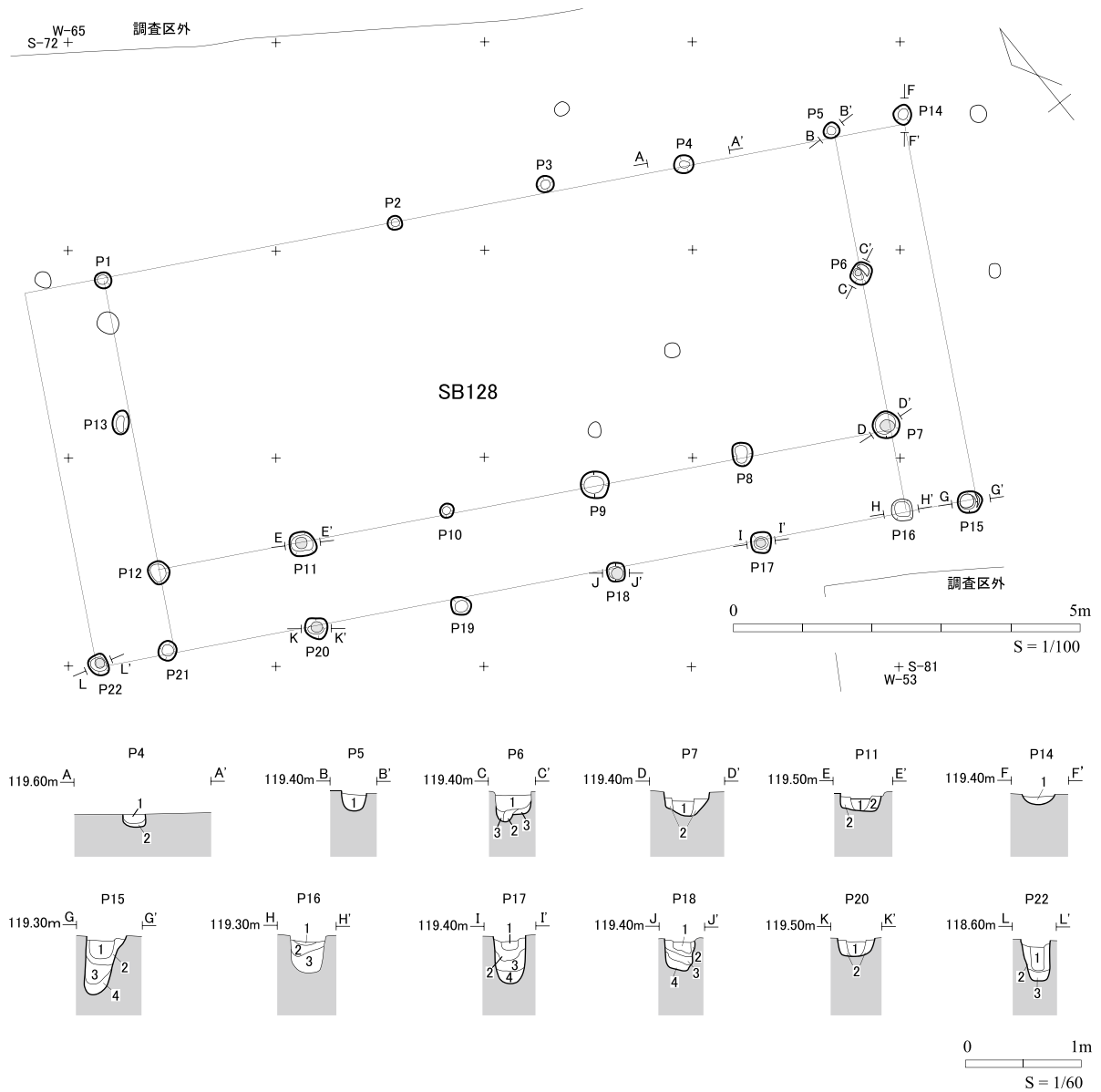
(4) その他の出土遺物

【遺構外】 D区表土より磁器（第189図）が、攪乱より近世陶磁器、中世陶器が出土している。第189図は肥前産（18世紀）で染付の皿である。近世陶磁器には鉄釉のものと染付のものがある。



No.	区・層位	種別	器種	特徴	登録	写真
1	D・表土	磁器	皿	染付 肥前（18世紀）	691	55-10

第189図 遺構外出土遺物



SB128 掘立柱建物跡 P4 A-A'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を多量に含む (柱拔)
2	10YR4/4 黒	シルト	地山ブロックを多量に含む (柱掘)

SB128 掘立柱建物跡 P5 B-B'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山ブロックを含む

SB128 掘立柱建物跡 P6 C-C'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山ブロックを多量に含む (抜)
2	10YR1.7/1 黒	シルト	地山粒を少量含む (柱)
3	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む (掘方)

SB128 掘立柱建物跡 P7 D-D'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山粒を少量含む (柱痕)
2	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む (柱掘)

SB128 掘立柱建物跡 P11 E-E'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒・マンガン粒・黒色土ブロックを含む (柱痕)
2	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロック・黒色土ブロックを含む (柱掘)

SB128 掘立柱建物跡 P14 F-F'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山ブロックを含む

SB128 掘立柱建物跡 P15 G-G'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ブロックを多く含む (柱拔)
2	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を含む (柱掘)
3	10YR2/2 黒褐	シルト	均質土 (柱掘)
4	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を多く含む (柱掘)

SB128 掘立柱建物跡 P16 H-H'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR1.7/1 黒	シルト	地山粒をわずかに含む (柱拔)
2	10YR2/1 黒	シルト	地山粒を多く含む (柱拔)
3	10YR2/1 黒	シルト	地山ブロックを含む (柱拔)

SB128 掘立柱建物跡 P17 I-I'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR1.7/1 黒	シルト	暗褐色土を少量含む 地山粒をわずかに含む (柱痕)
2	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒を少量含む (柱掘)
3	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒を多く含む マンガン粒を含む (柱掘)
4	10YR3/3 暗褐	シルト	地山粒を少量含む (柱掘)

SB128 掘立柱建物跡 P18 J-J'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR1.7/1 黒	シルト	暗褐色土ブロックを少量含む 地山粒をごくわずかに含む (柱痕)
2	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒を少量含む (柱掘)
3	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒を多く含む マンガン粒を含む (柱掘)
4	10YR3/3 暗褐	シルト	地山粒を少量含む (柱掘)

SB128 掘立柱建物跡 P20 K-K'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒・マンガン粒・黒色土ブロックを含む (柱痕)
2	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロック・黒色土ブロックを含む (柱掘)

SB128 掘立柱建物跡 P22 L-L'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR1.7/1 黒	シルト	暗褐色土ブロックを少量含む 地山粒をわずかに含む (柱痕)
2	10 2/1 黒	シルト	地山粒を多く含む (柱掘)
3	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒を多く含む マンガン粒を含む (柱掘)

第190図 SB128 溝跡



## 第5章 自然科学的分析

### 第1節 西浦B遺跡における放射性炭素年代測定（AMS測定）

株式会社 加速器分析研究所

#### 1. 測定対象試料

西浦B遺跡は、宮城県刈田郡蔵王町大字円田字西浦北（北緯 38° 5′ 58″、東経 140° 39′ 22″）に所在し、白石川支流の松川北岸に形成された矢附段丘上に立地する。測定対象試料は、土坑出土の木炭 1～5（IAAA-101511～101515）と土器付着炭化物 6～10（IAAA-101516～101520）の合計 10 点である（第2表）。土器付着炭化物は、6～8、10 は内面、9 は外面より採取された。

#### 2. 測定の意義

遺跡内に位置する複数の遺構の前後関係および集落の継続期間、土器型式の年代を明らかにする。

#### 3. 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 1mol/l（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表 1 に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

#### 4. 測定方法

3MV タンデム加速器（NEC Pelletron 9SDH-2）をベースとした <sup>14</sup>C-AMS 専用装置を使用し、<sup>14</sup>C の計数、<sup>13</sup>C 濃度（<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C）、<sup>14</sup>C 濃度（<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

## 5. 算出方法

- (1)  $\delta^{13}\text{C}$  は、試料炭素の  $^{13}\text{C}$  濃度 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である (第2表)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2)  $^{14}\text{C}$  年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中  $^{14}\text{C}$  濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 $^{14}\text{C}$  年代は  $\delta^{13}\text{C}$  によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表2に、補正していない値を参考値として表3に示した。 $^{14}\text{C}$  年代と誤差は、下1桁を四捨五入して10年単位で表示される。また、 $^{14}\text{C}$  年代の誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、試料の  $^{14}\text{C}$  年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の  $^{14}\text{C}$  濃度の割合である。pMC が小さい ( $^{14}\text{C}$  が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が100以上 ( $^{14}\text{C}$  の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も  $\delta^{13}\text{C}$  によって補正する必要があるため、補正した値を表2に、補正していない値を参考値として表3に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の  $^{14}\text{C}$  濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の  $^{14}\text{C}$  濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$  年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ( $1\sigma = 68.2\%$ ) あるいは2標準偏差 ( $2\sigma = 95.4\%$ ) で表示される。グラフの縦軸が  $^{14}\text{C}$  年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$  補正を行い、下1桁を四捨五入しない  $^{14}\text{C}$  年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09 データベース (Reimer et al. 2009) を用い、OxCalv4.1 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表3に示した。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$  年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

## 6. 測定結果

土坑出土木炭の  $^{14}\text{C}$  年代は、SK6 土坑の1が  $3880 \pm 30\text{yrBP}$ 、SK9 フラスコ状土坑の2が  $2960 \pm 30\text{yrBP}$ 、SK19 フラスコ状土坑の3が  $3920 \pm 30\text{yrBP}$ 、SK22 フラスコ状土坑の4が  $3780 \pm 30\text{yrBP}$ 、SK56 フラスコ状土坑の5が  $3840 \pm 30\text{yrBP}$  である。

土坑出土土器付着炭化物の  $^{14}\text{C}$  年代は、SK6 土坑出土の6が  $4010 \pm 30\text{yrBP}$ 、SK22 フラスコ状土坑出土の7が  $3870 \pm 30\text{yrBP}$ 、8が  $3780 \pm 30\text{yrBP}$ 、9が  $3840 \pm 30\text{yrBP}$ 、SK79 フラスコ状土坑出土の10が  $3770 \pm 30\text{yrBP}$  である。

SK6 の木炭1と土器付着炭化物6の年代値は、誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) の範囲で重ならないが、おおむね近い値となっている。SK22 の木炭4と土器付着炭化物7～9は、誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) の範囲で重なる部分を持ち、おおむね近接した値を示している。

暦年較正年代 ( $1\sigma$ ) は、1が  $2456 \sim 2308\text{cal BC}$  頃、2が  $1256 \sim 1128\text{cal BC}$ 、3が  $2470 \sim 2348\text{cal BC}$ 、4が  $2278 \sim 2142\text{cal BC}$ 、5が  $2341 \sim 2207\text{cal BC}$ 、6が  $2570 \sim 2487\text{cal BC}$ 、7が  $2456 \sim 2295\text{cal BC}$ 、8が  $2278 \sim 2142\text{cal BC}$ 、9が  $2342 \sim 2207\text{cal BC}$ 、10が  $2273 \sim 2140\text{cal BC}$  の間に各々



第2表 試料一覧および  $^{14}\text{C}$  年代

測定番号	試料名	採取場所 (登録番号)	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-101511	1	SK6 土坑 堆積土	木炭	AAA	-23.25 ± 0.53	3,880 ± 30	61.69 ± 0.22
IAAA-101512	2	SK9 フラスコ状土坑 堆積土	木炭	AAA	-24.54 ± 0.52	2,960 ± 30	69.20 ± 0.24
IAAA-101513	3	SK19 フラスコ状土坑 堆積土 3層	木炭	AAA	-24.79 ± 0.58	3,920 ± 30	61.39 ± 0.22
IAAA-101514	4	SK22 フラスコ状土坑 堆積土 下層	木炭	AAA	-23.78 ± 0.43	3,780 ± 30	62.49 ± 0.22
IAAA-101515	5	SK56 フラスコ状土坑 堆積土 5層	木炭	AAA	-23.82 ± 0.52	3,840 ± 30	62.03 ± 0.22
IAAA-101516	6	SK6 土坑 堆積土 (179)	炭化物	AaA	-22.14 ± 0.57	4,010 ± 30	60.69 ± 0.22
IAAA-101517	7	SK22 フラスコ状土坑 堆積土 (312)	炭化物	AaA	-25.79 ± 0.44	3,870 ± 30	61.75 ± 0.23
IAAA-101518	8	SK22 フラスコ状土坑 堆積土 (310)	炭化物	AaA	-27.40 ± 0.43	3,780 ± 30	62.48 ± 0.22
IAAA-101519	9	SK22 フラスコ状土坑 堆積土 (310)	炭化物	AaA	-25.96 ± 0.54	3,840 ± 30	62.03 ± 0.22
IAAA-101520	10	SK79 フラスコ状土坑 堆積土 (118)	炭化物	AaA	-25.48 ± 0.48	3,770 ± 30	62.55 ± 0.22

#3839]

第3表  $^{14}\text{C}$  年代と暦年較正年代

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-101511	3,850 ± 30	61.91 ± 0.22	3,880 ± 29	2456calBC - 2418calBC (21.8%) 2408calBC - 2374calBC (20.0%) 2369calBC - 2336calBC (17.8%) 2323calBC - 2308calBC (8.5%)	2468calBC - 2286calBC (94.9%) 2247calBC - 2243calBC (0.5%)
IAAA-101512	2,950 ± 30	69.27 ± 0.23	2,957 ± 28	1256calBC - 1237calBC (11.6%) 1215calBC - 1128calBC (56.6%)	1288calBC - 1284calBC (0.4%) 1269calBC - 1055calBC (95.0%)
IAAA-101513	3,920 ± 30	61.41 ± 0.21	3,919 ± 28	2470calBC - 2431calBC (27.7%) 2425calBC - 2402calBC (16.4%) 2381calBC - 2348calBC (24.1%)	2476calBC - 2332calBC (89.6%) 2326calBC - 2299calBC (5.8%)
IAAA-101514	3,760 ± 30	62.64 ± 0.22	3,777 ± 28	2278calBC - 2251calBC (18.4%) 2229calBC - 2221calBC (4.8%) 2211calBC - 2191calBC (14.3%) 2181calBC - 2142calBC (30.6%)	2291calBC - 2134calBC (93.5%) 2077calBC - 2062calBC (1.9%)
IAAA-101515	3,820 ± 30	62.18 ± 0.21	3,835 ± 28	2341calBC - 2272calBC (37.7%) 2258calBC - 2207calBC (30.5%)	2458calBC - 2418calBC (6.4%) 2407calBC - 2376calBC (7.5%) 2367calBC - 2356calBC (1.2%) 2351calBC - 2200calBC (80.2%)
IAAA-101516	3,970 ± 30	61.04 ± 0.21	4,012 ± 29	2570calBC - 2514calBC (54.1%) 2502calBC - 2487calBC (14.1%)	2617calBC - 2611calBC (1.0%) 2581calBC - 2469calBC (94.4%)
IAAA-101517	3,890 ± 30	61.65 ± 0.22	3,872 ± 29	2456calBC - 2419calBC (19.5%) 2407calBC - 2376calBC (17.0%) 2351calBC - 2295calBC (31.7%)	2466calBC - 2281calBC (91.0%) 2250calBC - 2231calBC (3.4%) 2219calBC - 2212calBC (1.0%)
IAAA-101518	3,820 ± 30	62.18 ± 0.21	3,777 ± 28	2278calBC - 2251calBC (18.4%) 2229calBC - 2221calBC (4.8%) 2211calBC - 2191calBC (14.3%) 2181calBC - 2142calBC (30.6%)	2291calBC - 2134calBC (93.5%) 2077calBC - 2062calBC (1.9%)
IAAA-101519	3,850 ± 30	61.91 ± 0.21	3,835 ± 29	2342calBC - 2272calBC (37.7%) 2258calBC - 2207calBC (30.5%)	2408calBC - 2375calBC (7.9%) 2458calBC - 2418calBC (6.8%) 2367calBC - 2200calBC (80.7%)
IAAA-101520	3,780 ± 30	62.49 ± 0.21	3,768 ± 28	2273calBC - 2257calBC (9.9%) 2207calBC - 2140calBC (58.3%)	2289calBC - 2131calBC (89.8%) 2085calBC - 2057calBC (5.6%)

複数の範囲で示され、1、3～10は縄文時代後期初頭頃、2は縄文時代晩期前葉頃に相当する。

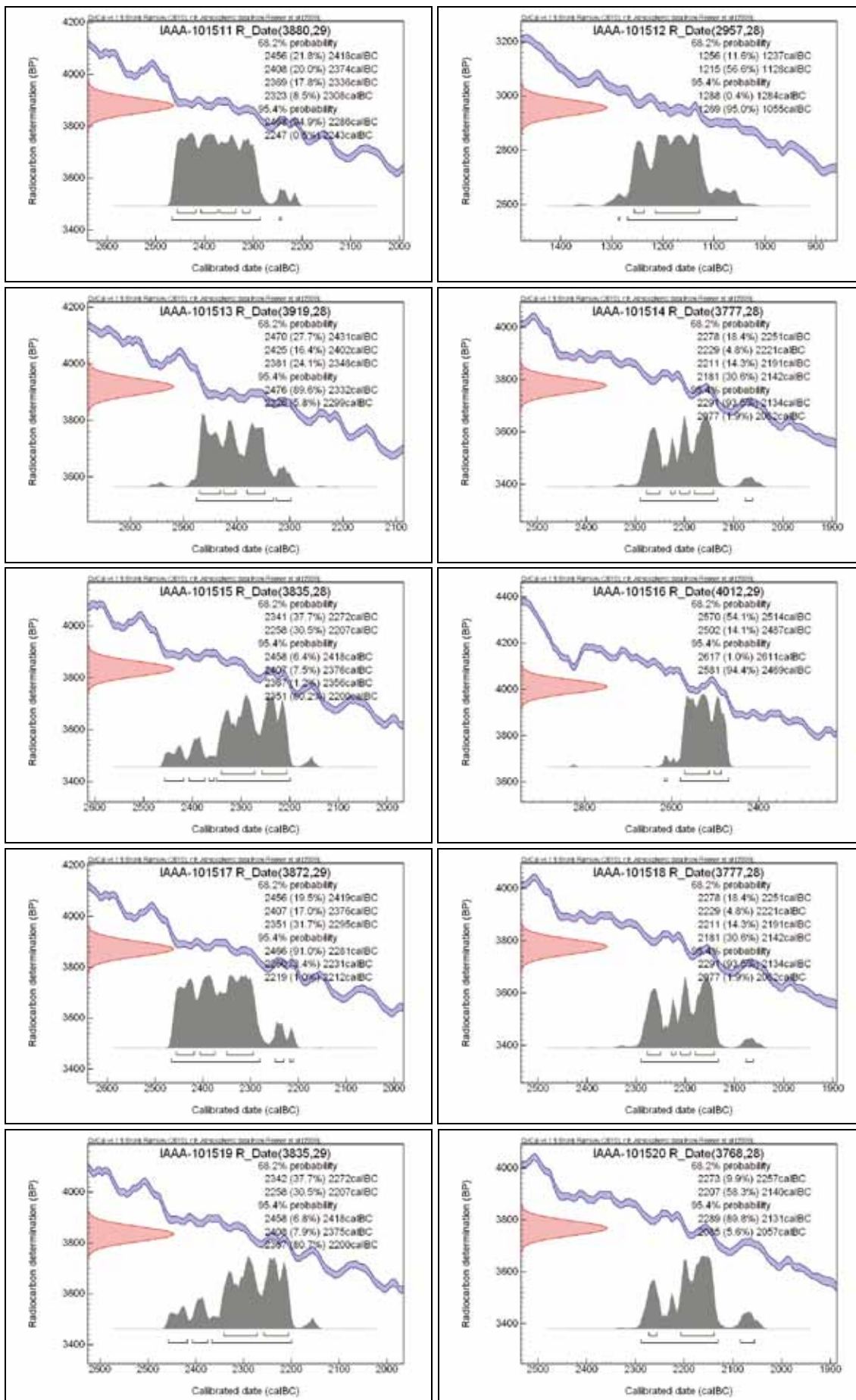
試料の炭素含有率は、土器付着炭化物の6が約17%、7が約20%と低く、10も約37%と若干低い値となっており、注意を要する。その他はすべて50%を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

## 文献

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data, Radiocarbon 19(3), 355-363

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51(4), 1111-1150



第 191 図 [参考] 暦年較正年代グラフ

## 第2節 西浦B遺跡出土縄文土器の胎土分析

株式会社 加速器分析研究所

### 1. はじめに

蔵王町に所在する西浦B遺跡は、蔵王火山を水源とし、おおよそ南東方向に流下する松川の中流域左岸に形成された矢附段丘上に位置する。矢附段丘の背後には、主に新第三紀鮮新世の堆積岩や凝灰岩から構成される山地が広がり、松川を挟んだ矢附段丘の対岸には、第四紀中期更新世に形成された青麻火山が位置している。西浦B遺跡の発掘調査では、縄文時代後期初頭～前葉前半頃とされる竪穴住居跡やフラスコ状土坑などの遺構が検出されており、それらに伴い多数の土器も出土している。発掘調査所見によれば、それらの土器は、在地型式を主体とするものの、一部に在地型式とは異なる型式と考えられる3種類以上の土器が含まれている。

本報告では、これらの縄文土器について、その材質（胎土）の特性を明らかにし、型式学的な区別との比較検討から、その生産や供給事情に関わる資料を作成する。特に、在地型式とされた土器と在地型式とは異なるとされた土器の両者の胎土から推定される地質から、その生産地の地域性を検討し、搬入品の可能性について考察する。

### 2. 試料

試料は、西浦B遺跡より出土した焼成粘土塊2点と縄文土器11点である。焼成粘土塊2点には、それぞれNo.1・2が付され、縄文土器にはNo.3～13までが付されている。

焼成粘土塊はいずれも遺構から出土したものであり、不定形塊状を呈する固結した粘土である。No.1は灰褐色を呈し、表面には細かな孔隙が散在し、砂粒も比較的多く認められる。No.2は褐色を呈し、表面は比較的なめらかな状態を呈し、砂粒も比較的小さい。縄文土器片は、深鉢が9点、壺と浅鉢が1点ずつある。これらのうち、7点是在地型式とされ、4点は非在地型式とされている。各試料の番号、器種、部位、型式および登録番号と出土遺構名は一覧表にして第4表に示す。

第4表 試料一覧および胎土分類

No.	種類	部位	型式	登録	遺構	胎土分類												
						鉱物・岩石			粒径組成					碎屑物				
						A1	A2	B	c	m	f	vf	cs	I	II	III		
1	焼成粘土塊	—	—	544	P279													
2	焼成粘土塊	—	—	306	SK28													
3	縄文土器 深鉢	口縁部	在地型式 (後期初頭～前葉前半)	555	遺構外													
4	縄文土器 深鉢	体部	非在地型式 (門前式)	118	SK79													
5	縄文土器 深鉢	体部	在地型式 (後期初頭～前葉前半)	208	SK56													
6	縄文土器 深鉢	体部	在地型式 (後期初頭～前葉前半)	242	SK28													
7	縄文土器 深鉢	口縁～体部	在地型式 (後期初頭～前葉前半)	187	SK92													
8	縄文土器 深鉢	体部	在地型式 (後期初頭～前葉前半)	309	SK22													
9	縄文土器 深鉢	体部	在地型式 (後期初頭～前葉前半)	308	SK22													
10	縄文土器 壺	上半部	在地型式 (後期初頭～前葉前半)	186	SK92													
11	縄文土器 浅鉢	口縁部	非在地型式 (三十稲場式)	310	SK22													
12	縄文土器 深鉢	口縁部	非在地型式 (三十稲場式)	560	遺構外													
13	縄文土器 深鉢	口縁部	非在地型式 (網取式)	563	遺構外													

### 3. 分析方法

本報告では、松田ほか（1999）の方法を用いる。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いも見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。したがって、単に岩片や鉱物片の種類のみを捉えただけでは試料間の胎土の区別ができないことが予想される、同一の地質分布範囲内で作られた土器の胎土分析には、松田ほか（1999）の方法は適当である。以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に 0.03mm の厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて 0.5mm 間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により 200 個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の 3 次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

### 4. 結果

観察結果を第 5 表、第 192・193 図に示す。鉱物片では、全ての試料で石英と斜長石を主体とし、多くの試料で少量のカリ長石を含むが、さらに試料によっては斜方輝石や単斜輝石、角閃石、黒雲母などの有色鉱物を少量または微量伴う組成などが認められる。また、岩石片では、堆積岩類や火砕岩、火山岩、深成岩、さらには変質岩や珪化岩まで、雑多な種類が混在する組成と、花崗岩類と多結晶石英の 2 者を主体とする組成とが認められる。ここでは、前者の岩石片の組成を A 類とし、後者を B 類とする。各分類の特徴とそれに分類される試料を以下に述べる。

#### (1) A 類

鉱物片では石英よりも斜長石の方が多い傾向を示し、カリ長石は含まれないか微量である。斜長石は、第四紀火山噴出物に由来すると考えられる新鮮なものが多い。他に、斜方輝石や角閃石、黒雲母などが微量含まれる。岩石片では、頁岩や砂岩の堆積岩類と凝灰岩、流紋岩・デイサイト、安山岩の火砕岩・火山岩、花崗岩類とした深成岩、および変質岩や珪化岩、さらに火山ガラスまで多くの種類を含むことが特徴である。なお、A 類の岩石片組成の中で、特に安山岩が突出して多い組成が認められたことから、これを A1 類とし、他を A2 類とする。なお、A1 類の火山ガラスの形態は、平板状のいわゆるバブル型であり、A2 類のそれは、発泡した軽石型を呈するという違いも認められた。

A1 類に分類された試料は、焼成粘土塊の No.1 と縄文土器片の No.12 の 2 点であり、A2 類に分類された試料は、No.3、5、9、11 の 4 点の縄文土器片である。焼成粘土塊の No.2 については、計数した砂粒の量が少なかったために、明瞭な分類はできないが、斜長石が新鮮であることから、A 類（細分は不能）に分類する。

#### (2) B 類

鉱物片では、斜長石よりも石英の方がやや多い傾向を示し、少量のカリ長石を含む。斜長石の中には、第四紀火山噴出物由来と考えられる新鮮な結晶が微量混在する。他の鉱物片としては、微量の角閃石と黒雲母が含まれている。岩石片は、多結晶石英と花崗岩類を少量含み、試料によっては、極めて微量の

頁岩や珪質頁岩、凝灰岩、流紋岩・デイサイトの各岩石片のいずれかを含んでいる。B類に分類された試料はいずれも縄文土器片であり、No.4、6～8、10、13の6点である。

次に各試料の砂分全体の粒径組成をみると、モードを示す粒径が試料によって異なっている状況が認められた。ここでは、モードを示す粒径により、以下のような分類をした。

粗粒砂をモードとする :No.1・3・5・9・12

中粒砂をモードとする :No.4・10・11

細粒砂をモードとする :No.6～8・13

粗粒シルトをモードとする :No.2

碎屑物・基質・孔隙の割合では、碎屑物の割合が20%前後を示す試料が多いが、15%前後の試料や10%未満の試料も認められる。ここでは順にⅠ類、Ⅱ類、Ⅲ類とすると、今回の試料では以下の通りに分けられる。

Ⅰ類 :No.1・4～10・13

Ⅱ類 :No.11・12

Ⅲ類 :No.2・3

以上述べた各試料の鉱物・岩石組成、粒径組成および碎屑物の量比における各分類結果は、一覧にして第4表に併記する。

## 5. 考察

### (1) 胎土の由来と在地・非在地の可能性

本分析法で呈示された結果のうち、鉱物片および岩石片の組成は、胎土の材料となった粘土や砂の採取地の地質学的背景を示唆していると考えられる。土器の材料採取地と土器の成形や焼成を行った場所は必ずしも同一でないが、ここでは両者が近接した範囲内にあると想定して、その範囲を製作地と呼ぶことにする。今回の分析では、A類とB類の2種類の鉱物・岩石組成が見出され、さらにA類はA1類とA2類に細分された。したがって、今回の試料とされた土器の中には、地質学的背景を異にする2つの製作地が存在し、さらに、一方の製作地は、比較的近距离ながらも2つの製作地に分かれる可能性があると考えられる。ここで、胎土分類と発掘調査所見による型式分類との対応関係をみると、在地型式とされた中にも、非在地型式とされた中にも、両者においてA1類、A2類およびB類が混在している。しかも焼成粘土塊の鉱物・岩石組成と非在地型式とされたNo.12とは、同一の分類結果を示した。これらの状況から、3種類の鉱物・岩石組成は、いずれも「在地（現時点では具体的な範囲は不明であるが）」における製作地を示唆するものであると考えられる。非在地型式とされた土器は、外観における型式の要素となる部分を模倣して在地の材料で作られた土器である可能性が高いと考えられる。

西浦B遺跡の位置する松川流域およびその周辺域の地質については、大沢ほか（1986）や日本の地質「東北地方」編集委員会編（1989）などにより概観することができる。西浦B遺跡の位置する段丘は、松川流域に分布する地質に由来する碎屑物によって構成されている。段丘の背後に分布する松川左岸の山地は、主に新第三紀鮮新世の砂岩や頁岩などの碎屑岩類と新第三紀中新世の火砕岩（凝灰岩類）から構成されており、松川右岸には、青麻火山を構成している溶岩および火砕流堆積物が広がっている。なお、青麻火山の噴出物の岩質は、主に輝石安山岩と輝石デイサイトである（戸谷・伴,2001）。松川の上流域すなわち澄川や濁川は、蔵王火山を水源とする。蔵王火山の噴出物の岩質は主にカンラン石玄武岩と輝石安山岩である。さらに、蔵王火山の北側の濁川左岸側の山地には中生代白亜紀に貫入した花崗岩類からなる深成岩体も分布している。西浦B遺跡周辺の例えば松川の河川砂などは、上述した様々な

地質に由来する砕屑物が混在していると考えられるが、その組成はA類の組成とよく一致する。したがって、A類の胎土は、西浦B遺跡周辺の松川の沖積層に由来する可能性がある。さらに松川の沖積層の場合、右岸側の青麻火山の裾野に近い場所であれば、安山岩片の多い砂あるいはその砂を含んだ粘土が分布している可能性が高いと考えられるから、A1類とA2類の違いは、松川の右岸側と左岸側程度の製作地の違いを示している可能性がある。

B類については、花崗岩類の分布が地質学的背景として推定できるが、上述したように「在地」に由来する胎土でもある。松川流域では、上流の濁川左岸側の山地に花崗岩類の分布があるが、例えば濁川の砂では、右岸側の蔵王火山噴出物に由来する火山岩類も多量に混在すると考えられるから、B類のような組成にはならない。したがって、B類の由来する地域は、「在地」ではあるが、松川流域ではない可能性が高い。上述した地質記載により松川流域から周辺域をみると、花崗岩類の分布する山地は、松川が白石川と合流し、その合流点から3kmほど下ったJR東北本線北白川駅付近の白石川両岸に分布する山地に認めることができる。B類の由来する地域がA類の地域から至近にあるとすれば、B類の胎土はこの付近の山地縁辺の堆積物に由来する可能性があると考えられる。西浦B遺跡から北白川駅までは直線距離にして約8km離れているが、地形条件としては松川から白石川沿いに、人の移動は比較的容易に可能である。

現時点では、上述したA1類、A2類およびB類の推定地域は、いずれも地質図上からの推定であり、より確かな地域の特定には、該当する周辺域の堆積物の検証や、それぞれの地域における遺跡から出土した同時期の土器のさらなる分析例の蓄積が必要である。これらの検証を経ることにより、西浦B遺跡周辺における縄文時代後期の土器の動向を把握することが期待される。

## (2) 胎土と器種との対応関係

縄文土器片11点のうち、9点は深鉢であるが、これら9点の胎土には、鉱物・岩石組成も粒径組成も砕屑物の割合も全種類が含まれている。したがって、今回の試料からは深鉢に対応する胎土の特性は把握できない。

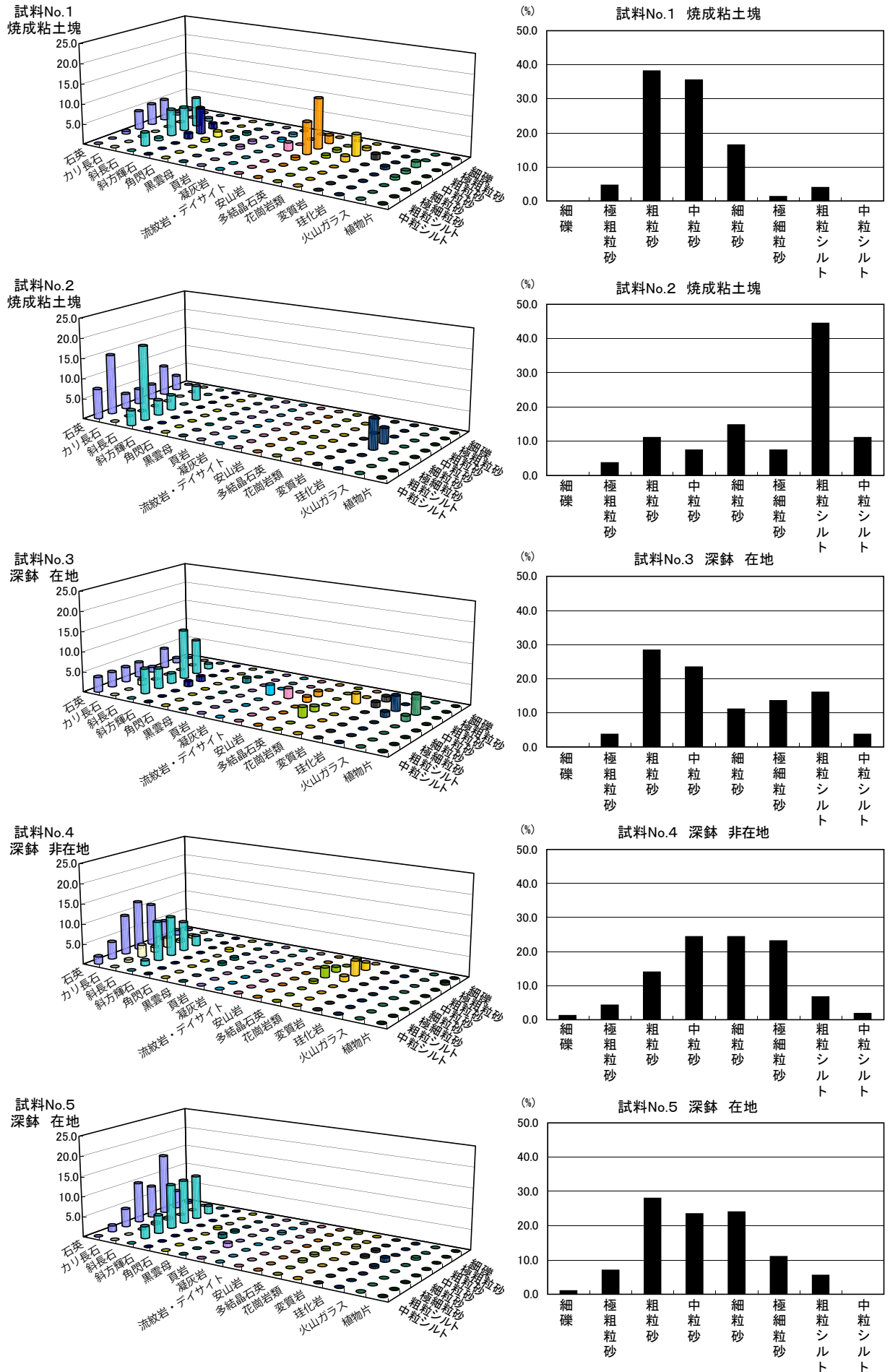
深鉢ではない試料のうち、壺形のNo.10は、B類で中粒砂にモードがあるが、B類の深鉢5点のうち4点は細粒砂にモードのあることに比べると、深鉢に比べて壺形の胎土中の砂は若干粗粒傾向にあるのかもしれない。また、浅鉢のNo.11は、A2類で中粒砂にモードがあるが、深鉢のA2類の試料3点は、いずれも粗粒砂にモードがある。これだけを見れば、壺形は深鉢に比べて、胎土中の砂の粒径が若干細粒傾向にあるとみることができる。

器種と胎土との関係についても、今後、より多くの分析事例を蓄積して、各器種の胎土の傾向を把握することが必要であると考えられる。

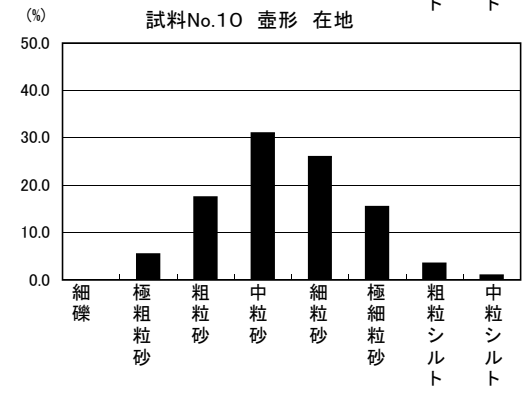
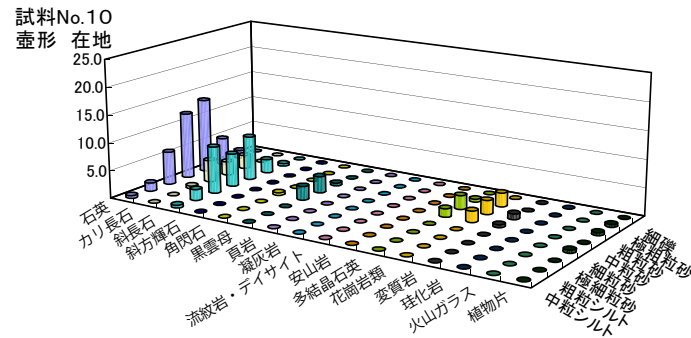
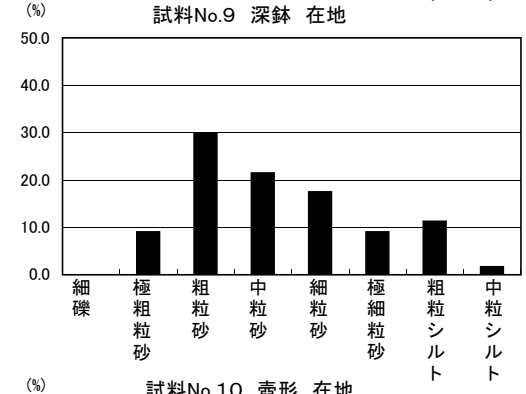
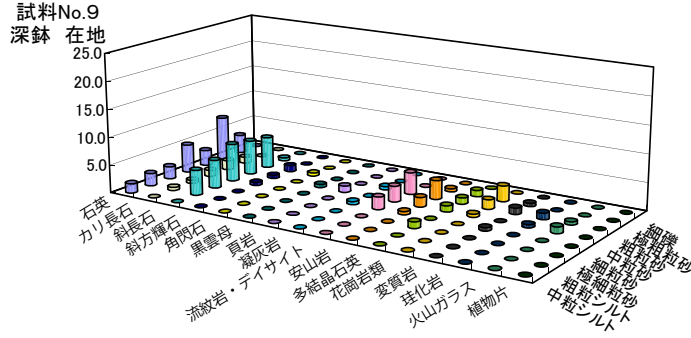
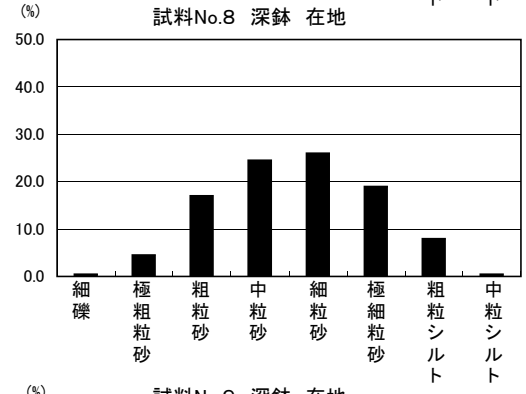
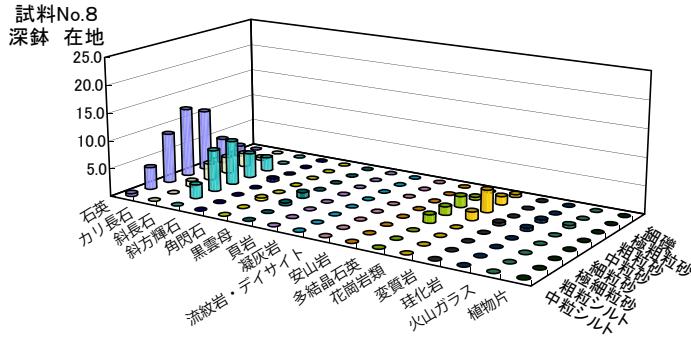
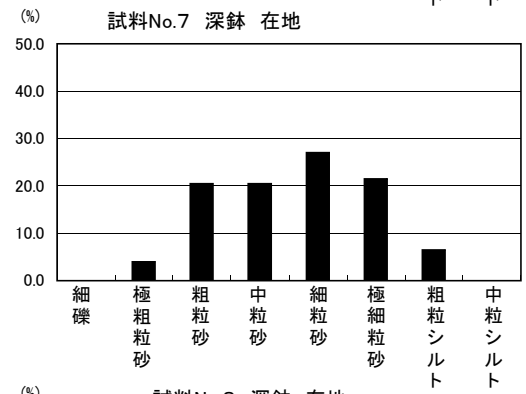
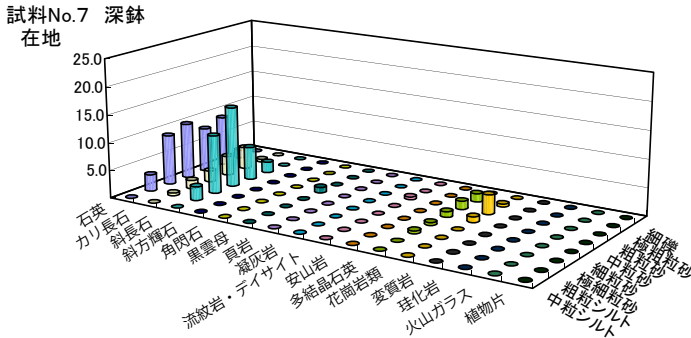
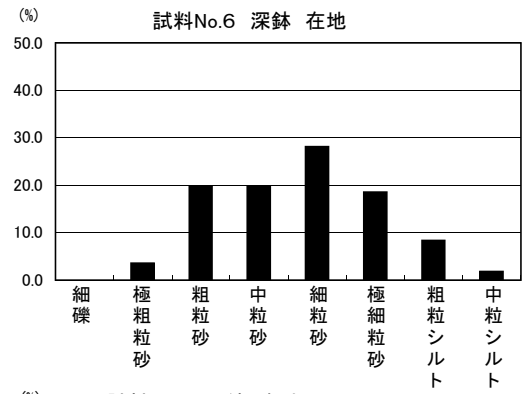
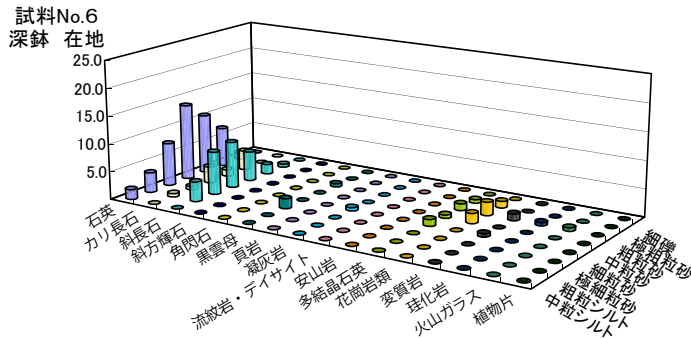
### 引用文献

- 松田順一郎・三輪若葉・別所秀高,1999,瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察—岩石学的・堆積学的による—,日本文化財科学会第16回大会発表要旨集,120-121.
- 日本の地質「東北地方」編集委員会,1989,日本の地質2 東北地方,共立出版,338p.
- 大沢あつし・三村弘二・久保和也・広島俊男・村田泰章,1986,20万分の1地質図幅「仙台」,地質調査所.
- 戸谷成寿・伴 雅雄,2001,東北日本弧,青麻火山の形成史と主成分化学組成,岩石鉱物科学,30,105-116.

※) 本分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。

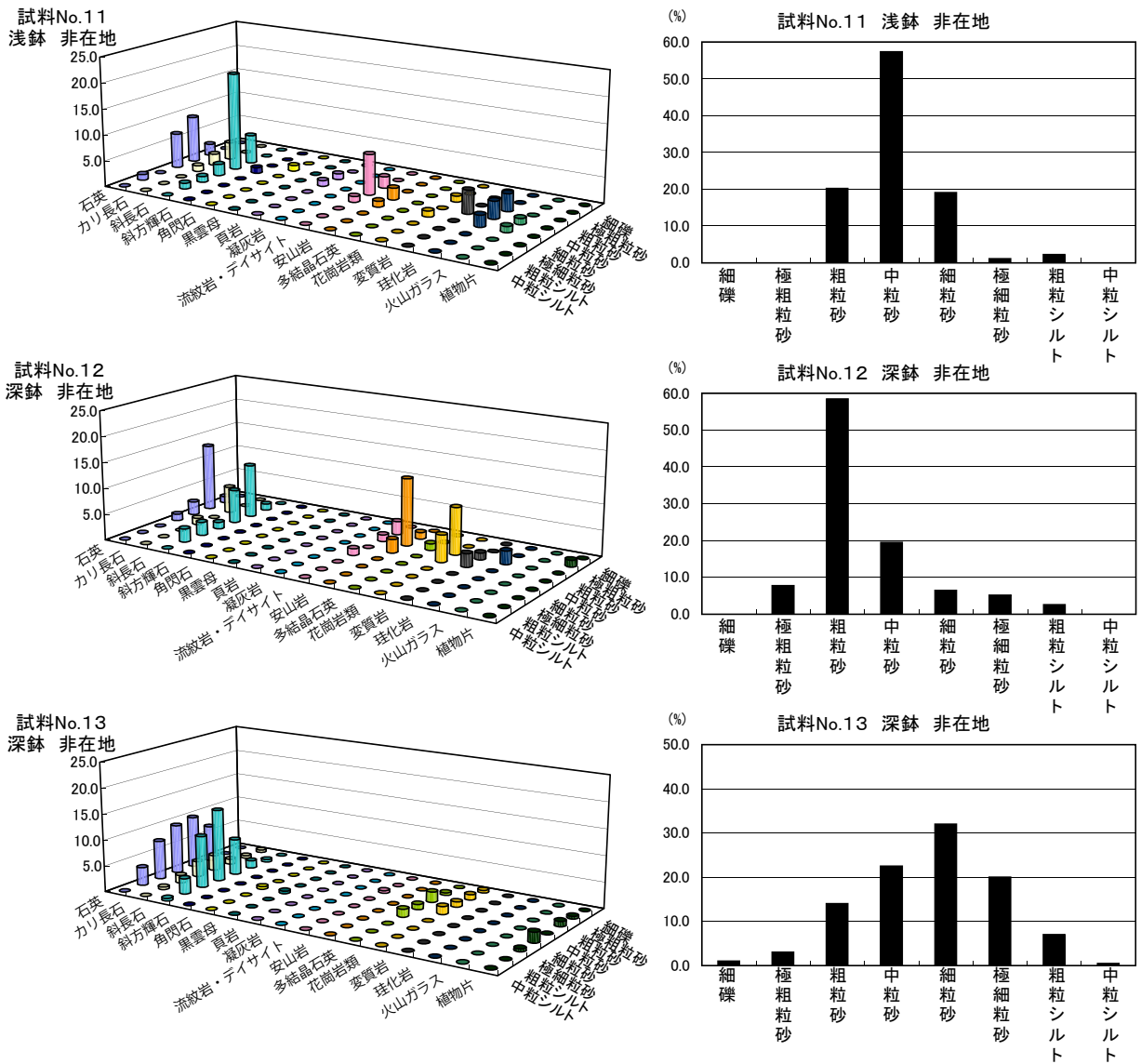


第192図(1) 各粒度段階における鉱物・岩石出現頻度(%)および全体の粒径組成

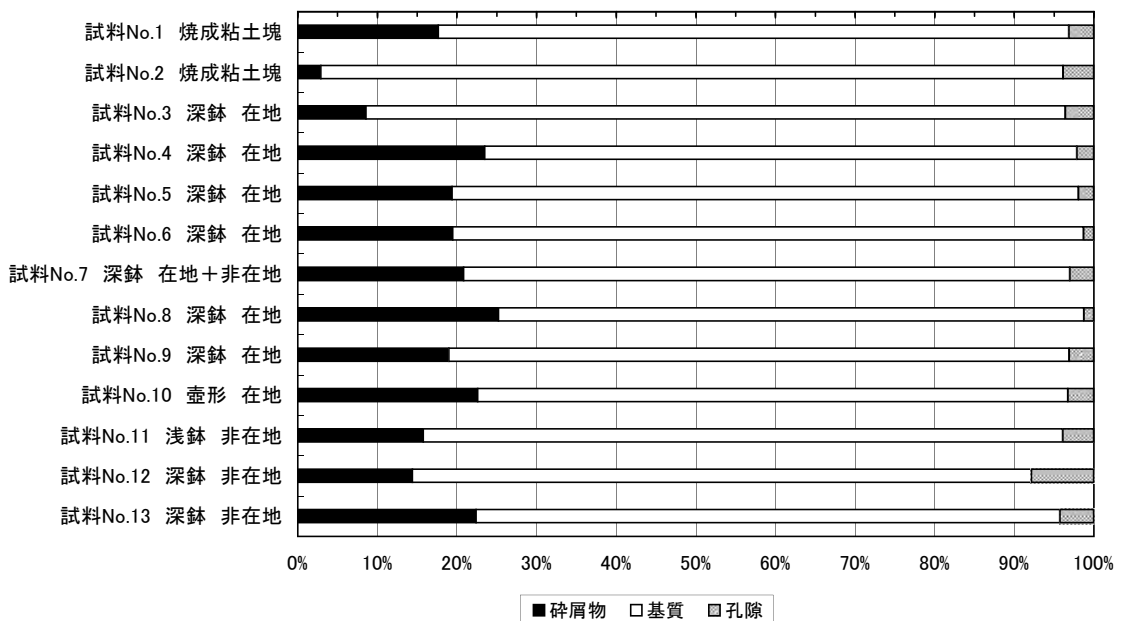


第 192 図 (2) 各粒度段階における鉱物・岩石出現頻度 (%) および全体の粒径組成





第 192 図 (3) 各粒度段階における鉱物・岩石出現頻度 (%) および全体の粒径組成

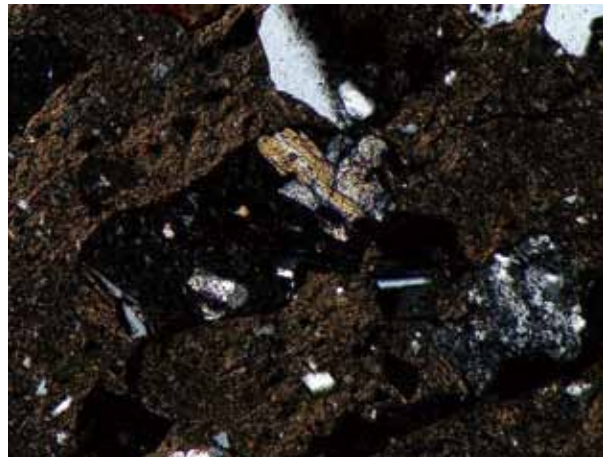
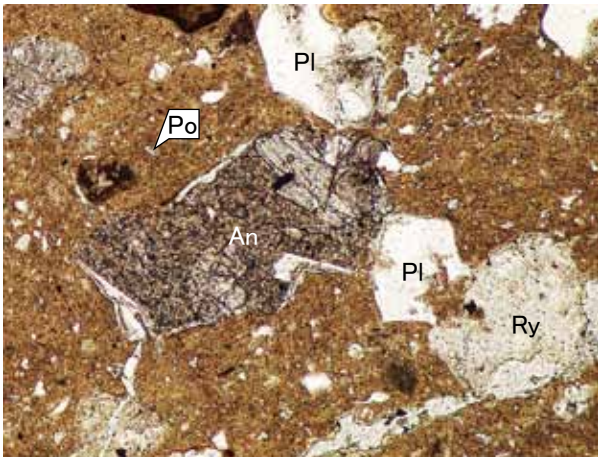


第 193 図 碎屑物・基質・孔隙の割合

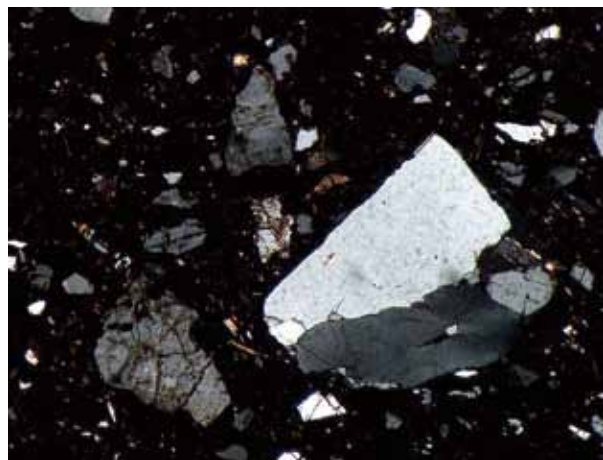
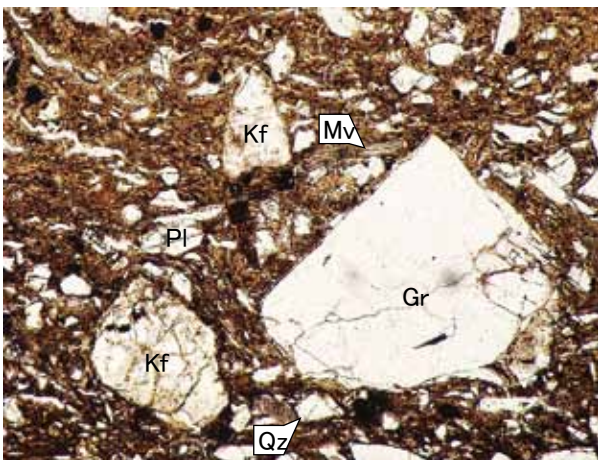
第5表(1) 薄片観察結果

No.	砂粒区分	砂粒の種類構成																	合計																
		鉱物片							岩石片						その他																				
		石英	トリディマイト	カリ長石	斜長石	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑簾石	黒雲母	ジルコン	不透明鉱物	頁岩	珪質頁岩	砂岩	凝灰岩		流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	植物片	酸化鉄結核	粘土塊	植物珪酸体				
1	細礫																															0			
	極粗粒砂	1			1												1		3		1											7			
	粗粒砂	8			11	1	2	1				1				1	1		19	1	8			2		2						58			
	中粒砂	8			9		10	2	2						1			3	12	1	2		1		1	1						54			
	細粒砂	7			10		2	1	1						1				1				1			1						25			
	極細粒砂	1			1																											2			
	粗粒シルト					5																										6			
	中粒シルト																																0		
基質																																682			
孔隙																																27			
2	細礫																															0			
	極粗粒砂	1																															1		
	粗粒砂	2			1																												3		
	中粒砂	1																						1									2		
	細粒砂	1			1																			2									4		
	極細粒砂	1			1																												2		
	粗粒シルト	4			5																												12		
	中粒シルト	2			1																												3		
基質																																867			
孔隙																																	36		
3	細礫																																0		
	極粗粒砂	1			1																			1										3	
	粗粒砂	4			7						1							1		2			1	3	4								23		
	中粒砂	1			10			1									2	2	1						1	1							19		
	細粒砂	3	1		2			1								1						1											9		
	極細粒砂	3	1	1	4																	2											11		
	粗粒シルト	3			5						1		1																				13		
	中粒シルト	3																															3		
基質																																830			
孔隙																																	34		
4	細礫	1																															2		
	極粗粒砂	2		1																			1											7	
	粗粒砂	8		1	4				1	1									2	6						1							23		
	中粒砂	17		4	12						1										4	2											40		
	細粒砂	20		2	16						1												1										40		
	極細粒砂	16		5	16						1																						38		
	粗粒シルト	7		1	2								1																				11		
	中粒シルト	3																															3		
基質																																	520		
孔隙																																		15	
5	細礫	1																															2		
	極粗粒砂	9			4																		1											14	
	粗粒砂	30			22												1						1	1		1							56		
	中粒砂	16		1	22				1		1	1										1	1	1	2								47		
	細粒砂	20		1	22						2	1											1			1								48	
	極細粒砂	9			9																													22	
	粗粒シルト	3			6																													11	
	中粒シルト																																	0	
基質																																		812	
孔隙																																		20	
6	細礫																																	0	
	極粗粒砂	2			1																		1	2										6	
	粗粒砂	12		6	3						1												2	4		2	1	1			1			33	
	中粒砂	18		2	9																		1	3										33	
	細粒砂	23		5	14																													47	
	極細粒砂	13		1	13																													31	
	粗粒シルト	6		1	6																													14	
	中粒シルト	3																																3	
基質																																		680	
孔隙																																			11
7	細礫																																	0	
	極粗粒砂	3		1																				3	1									8	
	粗粒砂	18		8	4																			1	3	7								41	
	中粒砂	16		7	12						2														2	2								41	
	細粒砂	20		4	29																				1									54	
	極細粒砂	18		3	21																													43	
	粗粒シルト	6		1	5																													13	
	中粒シルト																																		0
基質																																		731	
孔隙																																			29

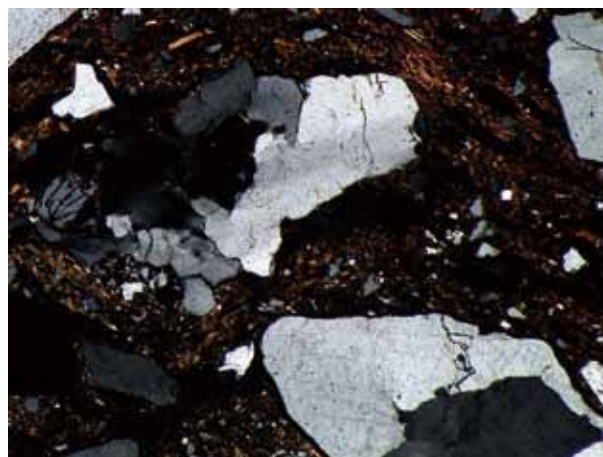
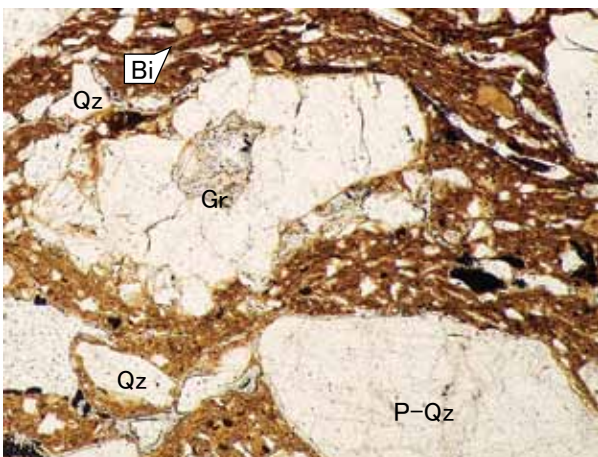




1. 試料No.1(焼成粘土塊 登録No.544 P279)



2. 試料No.4(縄文土器破片 深鉢体部 非在地型式 登録No.118 SK79)



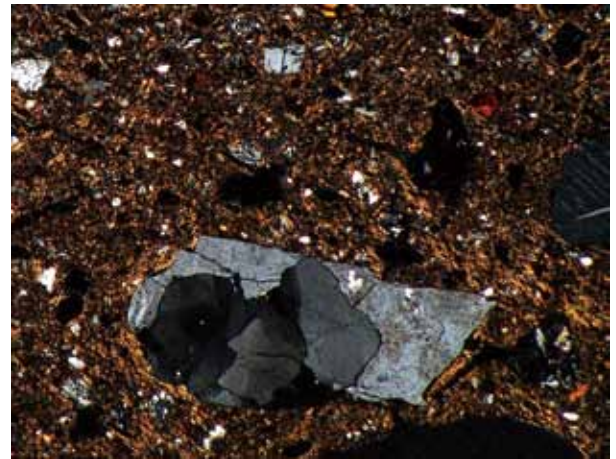
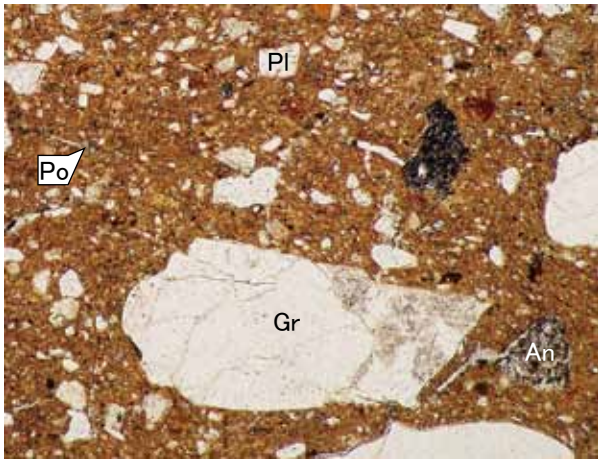
3. 試料No.7(縄文土器破片 深鉢口縁部～体部 在地 登録No.187 SK92)

Qz:石英. Kf:カリ長石. Pl:斜長石. Bi:黒雲母. Mv:白雲母. Ry:流紋岩. An:安山岩.  
P-Qz:多結晶石英. Gr:花崗岩. Po:植物珪酸体.

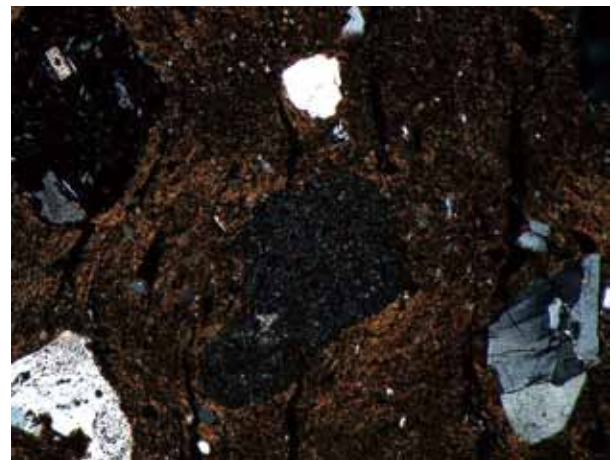
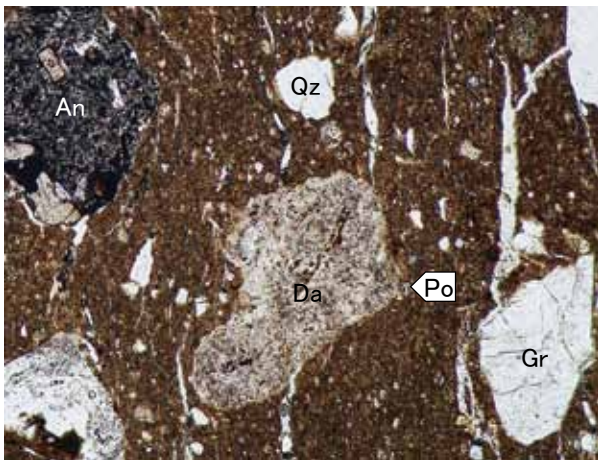
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

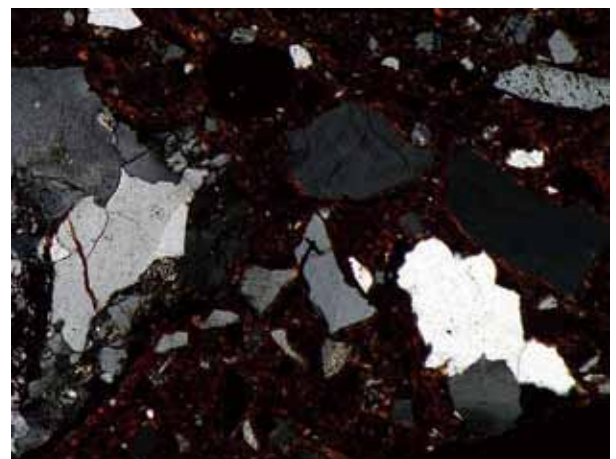
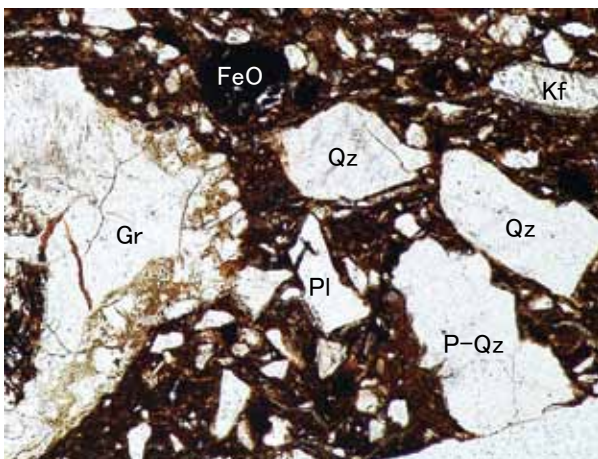
第194図 胎土薄片(1)



4. 試料No.9(縄文土器破片 深鉢体部 在地型式 登録No.308 SK22)



5. 試料No.12(縄文土器破片 深鉢口縁部 非在地型式 登録No.560 遺構外)



6. 試料No.13(縄文土器破片 深鉢口縁部 非在地型式 登録No.563 遺構外)

Qz:石英. Kf:カリ長石. Pl:斜長石. Da:デイサイト. An:安山岩. P-Qz:多結晶石英.  
Gr:花崗岩. FeO:酸化鉄結核. Po:植物珪酸体.

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

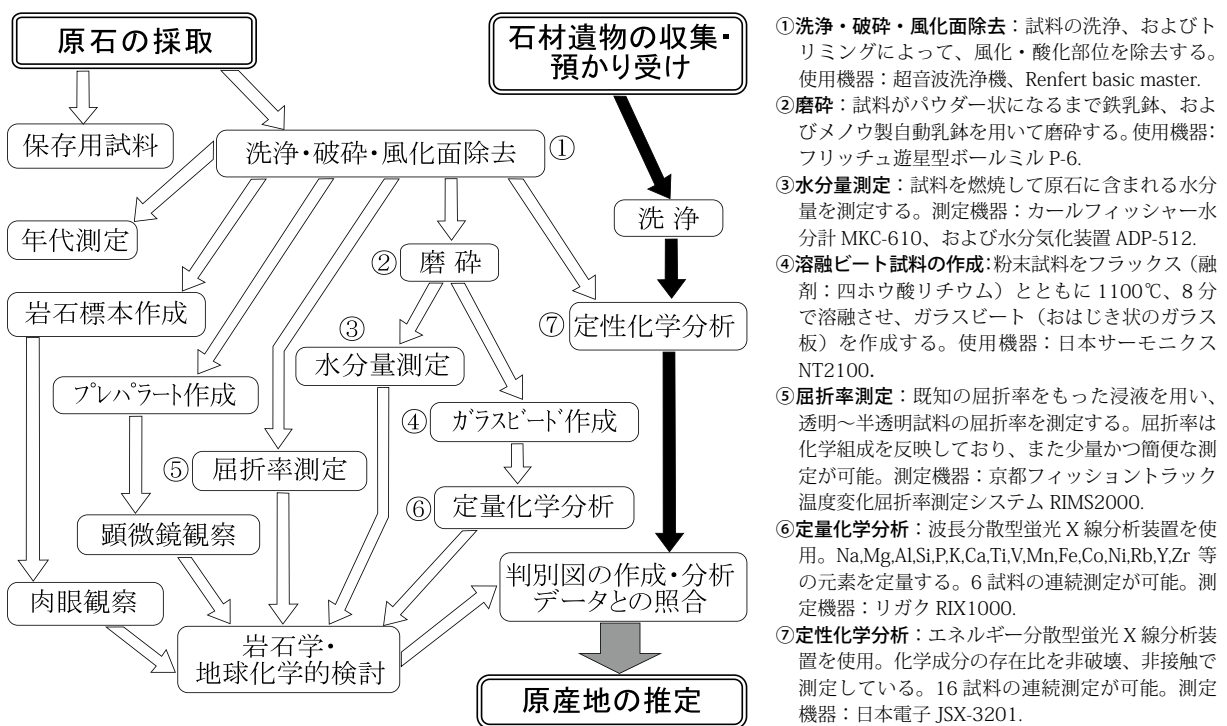
0.5mm

### 第3節 宮城県刈田郡蔵王町内出土黒曜石製遺物の原産地推定

杉原重夫（明治大学文化財研究施設運営委員）・金成太郎（明治大学文化財研究施設）・弦巻千晶・弦巻賢介（明治大学文学部 RA）・佐藤裕亮・金木利憲（明治大学学術フロンティア推進事業 RA）

#### 1. はじめに

考古学研究では、遺物が遺跡へと至るまでの来歴を辿ることによって、個々の時代における人々の行動様式や流通関係に迫ることが可能となる。特に狩猟・採集によって生計を立てていたと考えられている石器時代においては、石器に使用する石材の原産地推定が、空間的な人の動きに迫るための有効な分析方法となる。なかでも、火山の噴出物として生成された黒曜石は、結晶構造をもたず、斑晶の含有量が少ないことから元素組成が安定しており、このような黒曜石の岩石学的特質に着目して、今まで様々な理化学的分析方法を用いた原産地推定が行われている。特に蛍光 X 線分析装置を用いた分析は、装置の操作や測定の前処理が容易である点や、特に資料を非破壊で測定できるなどといったメリットにより、考古資料の扱いに適している。また、比較的短い時間で測定できるという点で、分析対象が出土遺物全般におよぶ石器研究においては非常に有効な測定手段といえる。以上のような経緯で、今回も蛍光 X 線分析装置を用いた原産地推定を行った。石器石材（黒曜石・サヌカイト等）の元素組成を根拠とした原産地推定のフローチャートを第 196 図に示す。



第 196 図 石材遺物（黒曜石・サヌカイト）の原産地推定

#### 2. 測定方法

蛍光 X 線法を用いて黒曜石の正確な元素分析値を得るには、内部が均質で表面形態が一般的な試料を作成し、検量線法などによって定量的に分析を行うのが一般的である。そのためには、試料を粉碎してプレスしたブリケットを作成するか、もしくは溶融してガラスビードを作成する必要がある。しかしながら、遺跡から出土した遺物は、通常、非破壊での測定が要求されるため、上記の方法をとることは困

難である。そのため、遺物に直接 X 線を照射する定性（半定量）分析が行われている。このような直接照射によって発生する蛍光 X 線の強度そのものは、試料の状態や装置の経年変化によって変動する可能性が高いが、特定元素の強度同士の比を採った場合はその影響は小さいと考えられている。今回は測定強度比をパラメータとして原産地推定を行った。

### 3. 試料の前処理

比較用の産出地採取原石については、必要に応じて新鮮な破断面または研磨面を作製し、超音波洗浄器によるクリーニングを行った。遺跡出土石器は、多くの場合新鮮で平滑な剥離面があるため、試料表面をメラミンスポンジとアルコールで洗浄してから測定を行った。特に汚れがひどい遺物のみ超音波洗浄器を用いた。

### 4. 装置・測定条件

蛍光 X 線の測定にはエネルギー分散型蛍光 X 線分析装置 JSX-3100s（日本電子株式会社）を用いた。X 線管球は、ターゲットが Rh（ロジウム）のエンドウインドウ型を使用した。管電圧は 30kV、電流は抵抗が一定となるよう自動設定とした。X 線検出器は Si（ケイ素）/Li（リチウム）半導体検出器を使用した。試料室内の状態は真空雰囲気下とし、X 線照射面径は 15mm とした。測定時間は、240sec である。測定元素は、主成分元素はケイ素（Si）、チタン（Ti）、アルミニウム（Al）、鉄（Fe）、マンガン（Mn）、マグネシウム（Mg）、カルシウム（Ca）、ナトリウム（Na）、カリウム（K）の計 9 元素、微量元素はルビジウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）、イットリウム（Y）、ジルコニウム（Zr）の計 4 元素の合計 13 元素とした。また、X 線データ解析ソフトには、明治大学文化財研究施設製；JsxExt を使用した。

### 5. 原産地推定の方法

黒曜石はケイ酸、アルミナ等を主成分とするガラス質火山岩であるが、その構成成分は産出地による差異が認められる。とりわけ微量元素の Rb、Sr、Y、Zr では産出地ごとの組成差がより顕著となっている。望月は、この産地間の組成差から黒曜石の産地推定が可能であると考え、上記の 4 元素に K、Fe、Mn の 3 元素を加えた計 7 元素の強度比を組み合わせることで産地分析を行っている（望月ほか 1994、望月 1997）。これら 7 元素による原産地分析の有効性は、ガラスビードを用いた定量分析によっても裏付けられている（嶋野ほか 2004）。ここでも、上記した望月の判別方法に準拠する形をとることとし、原産地推定のパラメータに Rb 分率  $\{Rb \text{ 強度} \times 100 / (A = Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})\}$ 、Sr 分率  $(Sr \text{ 強度} \times 100 / A)$ 、Mn 強度  $\times 100 / Fe \text{ 強度}$ 、 $\log (Fe \text{ 強度} / K \text{ 強度})$  を用いて判別図を作製し、判別分析は Zr 分率  $(Zr \text{ 強度} \times 100 / A)$  を加えて行った。

## 6. 黒曜石原産地の判別

### 6-1. 判別図

判別図は、視覚的に分類基準が捉えられる点、および判定基準が分かりやすいというメリットがある。また、測定結果の提示に際し、読者に理解しやすいという点も有効であろう。まず、各産出地採取試料（基準試料）の測定データを基に 2 種類の散布図（Rb 分率 vs Mn  $\times 100 / Fe$ 、Sr 分率 vs  $\log (Fe / K)$ ）を作製し、

第6表 北海道・東北地方における黒曜石の測定値（強度比）

原産地		Rb 分率	Sr 分率	Zr 分率	Mn × 100/Fe	Fe/K
名寄系 A	平均値:	29.8332	24.0450	34.2942	2.2027	1.9505
	標準偏差:	0.6177	0.5356	0.6872	0.0487	0.0290
名寄系 B	平均値:	35.3175	12.4363	32.9297	1.5020	1.5687
	標準偏差:	0.5201	0.5459	0.4468	0.0599	0.0374
赤石山系	平均値:	46.1064	10.0669	24.1947	3.6799	1.2809
	標準偏差:	0.8980	0.7575	1.0007	0.1517	0.0569
十勝石沢系	平均値:	53.3228	4.0426	19.9294	4.5306	1.2274
	標準偏差:	1.0475	0.7975	1.1094	0.1110	0.0305
社名淵系	平均値:	30.0002	13.2198	39.5429	3.2022	1.8748
	標準偏差:	0.5243	0.5775	0.6192	0.0592	0.0389
生田原系	平均値:	30.3818	9.7155	45.5441	1.6229	1.7969
	標準偏差:	0.6671	0.5115	0.8254	0.0473	0.0394
置戸山系	平均値:	26.0770	21.6069	40.1146	3.0153	2.1485
	標準偏差:	0.6325	0.4841	0.8222	0.0608	0.0663
所山系	平均値:	35.8981	18.3673	30.9634	3.2615	1.3757
	標準偏差:	0.6374	0.5073	0.6809	0.0809	0.0392
ケショマップ系	平均値:	27.3917	27.7661	32.5990	2.7875	2.4674
	標準偏差:	0.6934	1.0164	0.7488	0.1399	0.0306
旭川 A・滝川系 A	平均値:	31.0568	27.3119	28.9108	3.0865	2.0811
	標準偏差:	0.5544	0.5626	0.6414	0.0611	0.0703
旭川系 B	平均値:	25.4016	31.9111	32.1185	2.9203	3.0803
	標準偏差:	0.6741	0.8834	1.3632	0.0501	0.0580
上土幌・美蔓系 A	平均値:	40.0800	15.0582	26.3367	3.8147	1.3066
	標準偏差:	0.8822	0.7670	0.9569	0.0862	0.0392
美蔓系 B	平均値:	31.6863	24.9799	29.8919	2.4020	2.1598
	標準偏差:	0.9950	0.5907	0.9268	0.0546	0.1406
赤井川系	平均値:	38.7798	16.1257	28.2118	4.8933	1.2322
	標準偏差:	0.8048	0.7357	0.9436	0.0754	0.0248
豊浦系	平均値:	23.9305	27.1562	36.4499	4.3797	1.7401
	標準偏差:	0.7532	0.7554	0.6161	0.1211	0.0415
小泊系	平均値:	46.4658	12.0293	26.5073	3.5296	0.9651
	標準偏差:	0.7599	0.5166	0.9849	0.1014	0.0191
西青森系	平均値:	40.3146	17.3977	25.5706	3.7344	1.4330
	標準偏差:	0.5080	0.5827	0.8576	0.0725	0.0264
岩木山系	平均値:	27.7673	30.4254	25.7264	12.9973	1.2363
	標準偏差:	0.9601	1.1595	1.0518	0.2586	0.0430
深浦系	平均値:	15.1647	0.7125	73.2569	2.2049	2.6968
	標準偏差:	0.4189	0.3923	0.6112	0.0754	0.0610
男鹿系	平均値:	40.3372	22.7937	22.0288	16.5106	0.8208
	標準偏差:	0.6572	0.5493	0.6364	0.1148	0.0071
北上系 A	平均値:	19.3547	24.0818	41.9012	3.7985	2.8222
	標準偏差:	0.7931	0.9511	0.8548	0.1398	0.1166
月山系	平均値:	31.0560	28.7694	26.0881	11.9601	1.0478
	標準偏差:	1.4263	1.5951	1.4881	0.3412	0.0416
湯の倉系	平均値:	9.2363	35.7329	46.1112	2.6698	8.4943
	標準偏差:	0.8667	0.7128	0.5739	0.0338	0.1755
色麻系	平均値:	6.5862	32.4398	48.7309	5.3994	8.1681
	標準偏差:	0.5668	0.8226	0.7233	0.0675	0.1822
土蔵系	平均値:	7.1023	40.0162	40.9130	2.4707	17.9128
	標準偏差:	0.6311	0.6191	0.8704	0.0313	0.4082
馬場町北系	平均値:	6.7739	38.0019	42.5593	2.8996	13.1923
	標準偏差:	0.6103	0.8065	1.2039	0.0651	0.4966

各原産地を推定するための判別域を決定した。次に遺物の測定結果を重ね合わせて大まかな判別を行った。基準試料の測定強度比の平均値を第6表に示す。

## 6-2. 判別分析

判別図や測定値の比較による原産地の推定は、測定者ごとの恣意的な判断を完全に排除することは難しい。そこで、多変量解析の一つである判別分析を行った。判別分析では、上記のパラメータを基にマハラノビス距離を割り出し、各原産地に帰属する確率を求めた。距離と確率とは反比例の関係にあり、資料と各原産地の重点間の距離が最も短い原産地（群）が第一の候補となる。なお、分析用ソフトには





明治大学文化財研究施設製;MDR1.02を使用した。また、判別結果の参考資料として、各原産地（重点）間のマハラノビス距離を提示した（第7表）。

### 7. 黒曜石原産地の名称と地理的な位置づけ

北海道・東北地方の黒曜石原産地（第197図）の選定にあたっては、日本の黒曜石産出地データベース（杉原・小林2004、2006）を使用し、この中から、既存の文献・資料を参考にして現地調査を行い、石器石材に利用可能と思われる黒曜石の産出地を選択した（金成ほか2007、2010）。

黒曜石原産地（obsidian source）の判別にあたっては、各産出地を火山体、島嶼、河川流域、岩石区等の地形・地質的条件によって枠組みを行い、これを「地区；area」と名づけ、現在、黒曜石を産出する地点（露頭・散布地など）を「原石産出地（単に産出地とよぶ）；district」とした。今回の原産地推定に使用した「系；series」は、「地区」内の「産出地」のうち、蛍光X線分析の結果に地形・地質情報を参考にして判別された地理的に隣接する「産出地」群である。また、それぞれの「系」内の黒曜石産出地については、火道や貫入岩の位置、噴出物の産状や分布状態、黒曜石の岩石学的特徴（含有する斑晶鉱物、球顆の有無、色調、透明度など）についても検討を行い、この原産地設定が火山地質学的に有意義であることを確認している。ただし、同一の「系」内の産出地でも、複数の判別域が存在する場合や、異なる「系」同士で判別が困難な例も存在する。同一「系」内の地域において岩石学的に有意に元素比が異なる原石が混在して産出する場合は、「A、B、C…」の様に区分する。黒曜石産出地には、噴出源に近い一次産出地のほか、河川や海流によって遠方に運ばれた二次産出地があり、ここでの判別域は、必ずしも考古学的原産地（石器時代における採取地）を示すのではないことは言うまでもない。

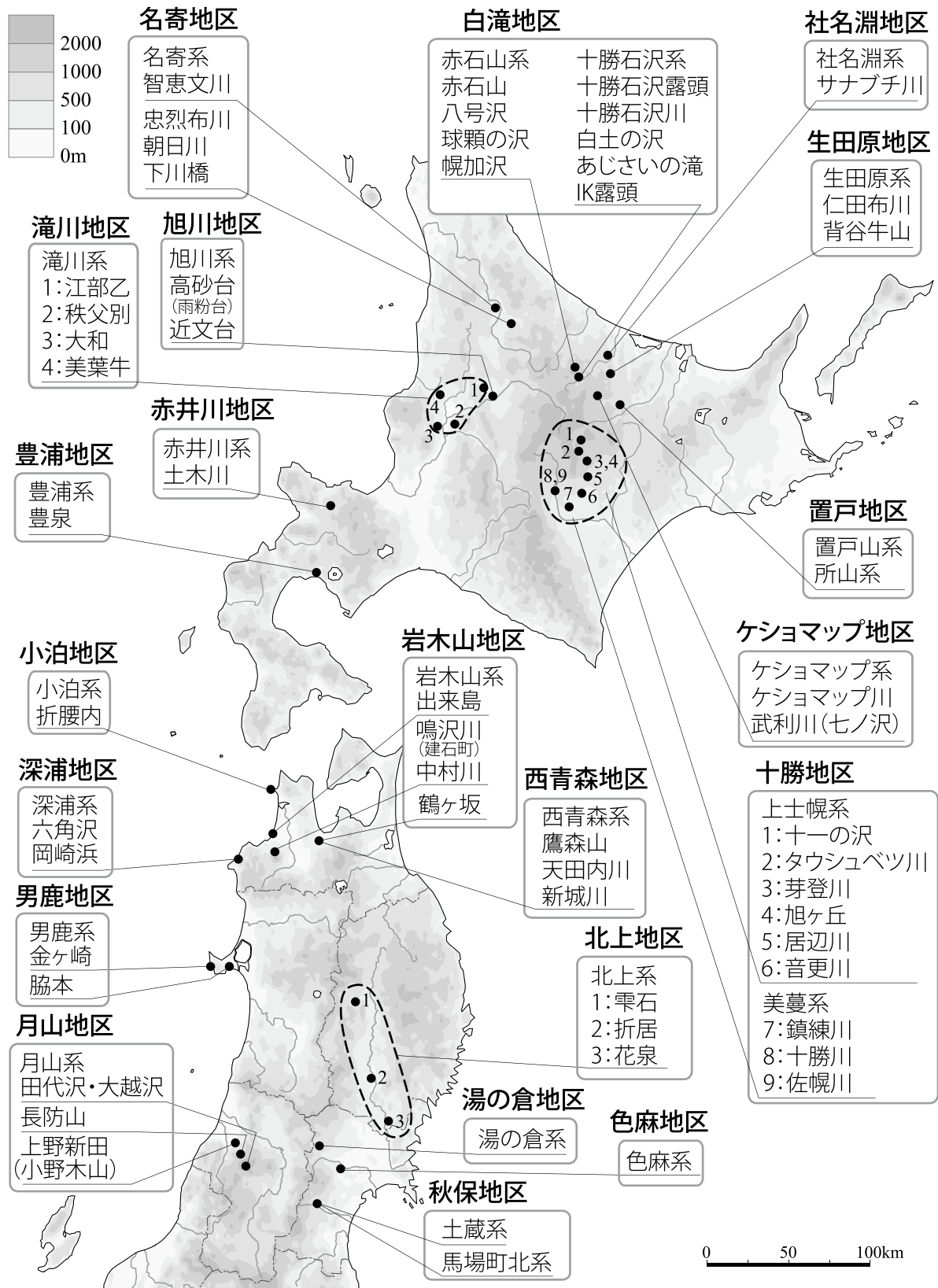
第8表 北海道・東北地方における黒曜石原産地の区分

	地区（area）	系（series）	産出地（district）	産出量
a) 北海道地方	名寄地区	名寄系	智恵文川, 忠烈布川, 朝日川, 下川橋	△
	白滝地区	赤石山系	赤石山, 八号沢, 球顆の沢, 幌加沢, 流紋沢川, 幌加蜂の巣沢, 幌加湧別川, 湧別川	◎
		十勝石沢系	十勝石沢の露頭, 十勝石沢川, 白土の沢, あじさいの滝, IK露頭, 幌加蜂の巣沢, 幌加湧別川（野宿の沢）, 湧別川	◎
	社名淵地区	社名淵系	サナブチ川, 湧別川	△
	生田原地区	生田原系	仁田布川, 背谷牛山南東麓	○
	置戸地区	置戸山系	置戸山, 訓子府川, 墓地の沢川, 常呂川	○
		所山系	所山, オンネアンズ川, 墓地の沢川, 常呂川	○
	ケショマップ地区	ケショマップ系	ケショマップ川, 七ノ沢（武利川）	△
	旭川地区	旭川系	高砂台（雨粉台）, 近文台,	—
	滝川地区	滝川系	江部乙, 秩父別, 大和, 美葉牛	—
	十勝地区	上士幌系	十一の沢, タウシュベツ川, 芽登川, 旭ヶ丘, 居辺川, 音更川	○
		美蔓系	十勝川, 鎮練川, 佐幌川	△
	赤井川地区	赤井川系	土木川	○
	豊浦地区	豊浦系	豊泉	△
b) 東北地方	小泊地区	小泊系	小泊中学校, 折腰内	—
	西青森地区	西青森系	鷹森山, 天田内川, 新城川	—
	岩木山地区	岩木山系	出来島, 鳴沢川（建石町）, 中村川, 鶴ヶ坂	△
	深浦地区	深浦系	六角沢, 岡崎浜	△
	男鹿地区	男鹿系	金ヶ崎, 脇本	○
	北上地区	北上系	隼石（小赤沢）, 折居, 花泉	—
	月山地区	月山系	田代沢・大越沢, 長防山, 上野新田（小野木山）	○
	湯の倉地区	湯の倉系	湯の倉	—
	色麻地区	色麻系	東原	△
	秋保地区	土蔵系	土蔵, 水上南	—
		馬場町北系	馬場町北	○

産出量：◎多, ○有, △少, —極少

a) 北海道地方

「名寄地区」：名寄盆地周辺の智恵文丘陵や忠烈布丘陵では、丘陵地を構成する第三紀中新世の陸成堆積物（川西層：北海道立地下資源調査所 1994）中から洗い出された黒曜石が、河床礫として産出する（吉



第197図 石器時代における北海道・東北地方の黒曜石原産地

谷ほか 1999a；向井ほか 2000)。黒曜石円礫の表面は不透明で灰黒色をなし、特徴的な爪痕状の溝や虫食い状の窪みが認められる。黒曜石の産出量が多いのは、忠烈布丘陵を刻む忠烈布川上流や朝日川の河床であり、智恵文丘陵における黒曜石の産出は少ない。

「白滝地区」：白滝地区は、日本における最大級の黒曜石産出地である（木村 1995；北海道埋蔵文化財センター 1998；向井ほか 2000；杉原 2003）。この地域については、古くからカルデラの存在が指摘されており（国府谷ほか 1964）、黒曜石はカルデラ内に形成された溶岩ドームから噴出したものと考えられる。このうち赤石山（標高 1,147m）では、ビュートまたはメサ状の地形の山頂部に厚さ約 50m の黒曜石溶岩が認められる。ここから産出するのは数 cm ～数 mm 大の球顆を含む黒色黒曜石、球顆をまったく含まない漆黒色の黒曜石、真紅の流れ模様をもつ黒曜石、赤褐色部分がブロック状に入る黒曜石など岩相は多様である（鈴木 2007；直江 2009 の赤石山系）。八号沢の露頭では、赤石山の黒曜石溶岩の基底部付近が露出している。

また、赤石山南方約 3km でメサ状の地形として残る標高 872m の山頂部にも厚さ 5m 前後の黒曜石質溶岩が認められ、この山体を刻む十勝石沢露頭や白土の沢からは多量の黒曜石岩塊が周辺の河谷に供給されている。十勝石沢川（通称でんぷん沢）沿いで見られる黒曜石礫は、すべてこの山頂部からの転石である。ここから産出する黒曜石は梨肌状とよばれるザラザラした割れ面に特徴がある（鈴木 2007；直江 2009 の梨肌系）。梨肌状の黒曜石は、このほか赤石山南西側の流紋沢川付近の林道でも転石として認められるが、供給源は不明である。

さらに、あじさいの滝、IK 露頭の黒曜石原産地は、赤石山東麓の標高 800 ～ 850m 付近に位置しており、肉眼観察結果では赤石山山頂の漆黒色の黒曜石と酷似するが、後述の通り蛍光 X 線分析では十勝石沢露頭や白土の沢の黒曜石と同じ化学組成を示す（鈴木 2007；直江 2009 のあじさい滝系）。

幌加沢、幌加蜂の巣沢（あじさいの滝下流）、幌加湧別川では、上記の黒曜石が河床礫として混在して産出する。これらのほかに、幌加湧別川支流の野宿の沢やカルデラ内で黒曜石溶岩の下位に広く分布する第三紀鮮新世の火砕流堆積物（国府谷ほか 1964 の幌加湧別溶結凝灰岩の一部）からも黒曜石を産出するが、詳しい調査は行われていない。白滝地区の黒曜石は湧別川沿いの河岸段丘や現河床にも多く認められ、約 60km 離れた湧別川河口のオホーツク海の海底からも発見されている（赤松ほか 1996）。

「社名淵地区」：遠軽市街地北方で湧別川に合流するサナブチ川では、社名淵付近において、河床から黒曜石の小円礫が採取できる（向井・和田 2003；向井 2003）。これらの黒曜石はサナブチ川上流域の社名淵層（八幡ほか 1988）の礫岩層中に含まれていたものが、洗い出されたと考えられる。また、サナブチ川と上モベツ川の分水界領域には第三紀中新世の藻別層（八幡ほか 1988）と呼ばれる流紋岩溶岩が広く分布し、ここから黒曜石や真珠岩（パーライト）が産出する。上モベツ川沿いには黒曜石岩脈の露頭があり、ここから崖錐堆積物として供給された黒曜石が上モベツ川沿いに河床礫として分布する（旭川市博物館 2003）。ただし、この露頭や河床で採取されるのは脆く崩れ易い松脂岩（ピッチストーン）である。これらの地域には、ほかにも多数の貫入岩があり、黒曜石の産出も知られているが詳細は不明である。また、湧別川沿いでも社名淵付近の丘陵地から供給されたと考えられる黒曜石が認められる。なお、黒曜石の割れ面はプラスチックのような樹脂状光沢があり独特である。

「生田原地区」：生田原では背谷牛山（標高 624 m）の南東麓及び、周辺を流れる仁田布川沿いで黒曜石が採取できる（向井ほか 2004）。この地域では背谷牛山溶岩（安山岩）の下位に中新世の流紋岩（生田原層：山田ほか 1963；野地ほか 1967）が分布しており、この中から産出すると考えられる。

「置戸地区」：置戸町の置戸山（標高 550m）と所山（標高 580m）の 2ヶ所では、第三紀鮮新世における流紋岩質溶岩の噴出に伴い黒曜石を産出する（鈴木 1964；沢村・秦 1965；向井ほか 2002；旭川市博物館 2003）。これらの山塊はいずれも独立した溶岩ドームないし溶岩流の地形（またはその名残）と

考えられるが、地表面は崖錐堆積物やロームに覆われていて、露頭における岩体の確認はできていない。置戸山の黒曜石は南西麓の林道沿いの崖錐堆積物や北麓沿いの訓子府川で認められるだけである。一方、所山の黒曜石は、山頂付近や林道沿いの崖錐堆積物中に直径 50cm 大から拳大の岩塊や角礫として分布する。これらの黒曜石は、墓地の沢川やオンネアンズ川が合流する常呂川沿いに北見市内まで河床礫として認められる（杉原ほか 2009）。

「ケショマップ地区」：遠軽町丸瀬布<sup>まるせつぷ</sup>と北見市留辺藪<sup>るべしべ</sup>町にまたがる華勝真布山<sup>けしよまっぷ</sup>（標高 1,162m）では、山麓部分を構成する凝灰角礫岩層（トムイルベシベ層：酒匂ほか 1964）から黒曜石の角礫を産出し、分布地域周囲の沢に多くの転石として認められる。これらの黒曜石は、河床礫として丸瀬布方面では七ノ沢から武利川へ、留辺藪方面ではケショマップ川から無加川へと運ばれている（旭川市博物館 2003）。

「旭川・滝川地区」：旭川市の高砂台<sup>たかさご</sup>（雨粉台<sup>うぶん</sup>）、近文台および滝川市江部乙町や、周辺の秩父別町中山、新十津川町大和、北竜町美葉牛<sup>びぼうし</sup>の盆地周辺では低い丘陵や段丘を構成する砂礫層（鮮新世の旭川層下部）中から黒曜石の円礫～亜円礫を産出する（鈴木 1955；向井 1999；向井・和田 2001）。噴出源から石狩川水系によって運ばれてきたと考えられるが、その噴出地点は不明である。これらの黒曜石は表面が風化して灰色に変質していて、不均質に溶蝕された虫食い状の溝がある。黒曜石には漆黒色で破断面が透き通ったものや灰色で斑晶が認められるものなども存在する。

「十勝地区」：十勝平野では、丘陵地や台地を構成する堆積物（段丘礫層）中や現河床に広範囲にわたり黒曜石が産出する（大場・松下 1965；佐々木 1979；松澤ほか 1981；旭川市博物館 2003；向井・和田 2004；吉谷 2004）。その供給源の 1 つとして音更川水系最上流部の十勝三股付近が指摘されている（吉谷ほか 1999a）。十勝三股付近の十一の沢（旧十三の沢）やタウシュベツ川沿いでは、人頭大から直径 10cm 前後の亜角礫～円礫の黒曜石が多量に産出し、いずれも河床礫や崖錐堆積物中の転石である。吉谷ほか（1999b）により糠平湖上流部で軽石流堆積物中から黒曜石の産出が指摘されているが、その噴出源については未だ明らかでない。十勝三股一帯の盆地については、約 1 Ma に大規模火砕流の噴出によって形成された長径約 14km のカルデラ（十勝三股カルデラ）の存在が明らかになっている（石井ほか 2008）。しかし黒曜石の産出地が南クマネシリ岳南・西麓の流紋岩質岩類である十勝幌加層（山岸・松波 1976）の分布地域に限られていること、タウシュベツ川産黒曜石のフィッション・トラック年代（ $4.1 \pm 0.4 \text{ Ma}$ ：未公表、以下 FT 年代）から黒曜石を生成した噴火は、このカルデラが形成されるかなり以前であると考えられる。十勝三股付近から産出した黒曜石は、上士幌付近から音更川のほかに芽登川<sup>めとう</sup>、居辺川<sup>おりべ</sup>、士幌川、利別川流域に広がる広大な十勝平野に分布する。なかでも芽登川上流の旭ヶ丘付近（旭ヶ丘牧場）の光地園面を構成する上旭ヶ丘礫層（松澤ほか 1978；十勝平野、地質図及び地形面区分図編集委員会編 1981）からは大量に黒曜石礫が産出し、これより下流部の低位の段丘群でも認められている。こうした段丘礫や河床礫として産出するものは、衝突痕に覆われているものが多い。これらの産出地の黒曜石は漆黒色のものが多いが、なかには赤色の流れ縞模様があるもの（紅十勝・花十勝）も産出する。

このほか十勝川とその支流である然別川<sup>しかりべつ</sup>、鎮鍊川<sup>ちんねる</sup>、久山川、佐幌川流域では、台地からの洗い出しと考えられる黒曜石の円礫が認められる。藁科・谷島（1992）は十勝川と然別川に挟まれた美蔓台地<sup>びまん</sup>において、台地を構成する美蔓礫層（松澤ほか 1978）中から黒曜石を採取している。美蔓台地から産出する黒曜石は、上士幌周辺のものと同供給源が異なると考えられるが、噴出源の火山は明らかでない。

「赤井川地区」：赤井川カルデラ周辺の丘陵地のうち、余市川支流の土木川の河床とその上流に続く林道沿いで、人頭大から直径数 cm 程度の黒曜石が崖錐堆積物や河床礫として多量に産出し、同じ丘陵地を刻む曲川や白井川沿いの沢でも採取されている（旭川市博物館 2003；向井ほか 2004）。この黒曜石

を含む流紋岩質噴出物は余市川南岸沿いに露出する厚い白色火砕流堆積物の上位を占めると考えられるが、黒曜石の岩体自体は観察されていない。この地域は外側の余市川カルデラと内側の赤井川カルデラの二重の陥没地形を形成しており（太田ほか 1954；横山ほか 2003）、黒曜石がどの噴火活動に関連する堆積物なのかは明らかでない。だが、FT年代（ $2.4 \pm 0.2\text{Ma}$ ；未公表）からは赤井川カルデラの形成初期かそれ以前の噴出物である可能性が強い。なお、赤井川カルデラ内でも黒曜石の小礫が転石として認められるが、それらはカルデラ内に噴出した永沢火山噴出物（横山ほか 2003）に含まれる黒曜石レンズに由来するものであろう。

「豊浦地区」：内浦湾（噴火湾）に臨む豊浦町大岸付近では、豊泉川の河床から黒曜石の亜角礫が産出する（旭川市博物館 2003；向井 2005a）。黒曜石は二次的に堆積した可能性がある火砕流または泥流堆積物中から産出するが、この地域の地質層序（土居ほか 1958）や東方の洞爺カルデラの活動との関係は不明である。

## b) 東北地方

「小泊地区」：青森県小泊村付近では小泊岬を中心に第三紀冬部層（対馬・上村 1959；奥海・前田 1963）の流紋岩溶岩に伴い白色の火砕流堆積物としてパーライトが産出し、この中に黒曜石の小礫（マレカナイト）が認められる。小泊中学校脇の大露頭から産出する黒曜石の小礫は灰色～黒灰色で直径5cm前後のものが多い。小泊岬対岸の折腰内（オートキャンプ場付近）でも黒曜石の小礫が採取できる。

「西青森地区」：青森市西部の鶴ヶ坂、鷹森山、戸門、大釈迦などでは、丘陵地を構成する第三紀鮮新世の軽石質凝灰岩（鶴ヶ坂層）や、この上位に重なる更新世の砂礫層（岡野層・前田野目層）中に黒曜石の小円礫（直径5cm以下）が含まれている。また、丘陵を刻む天田内川、新城川などの河谷にも黒曜石が認められる。これらの黒曜石の供給源は岩木山のほか複数あると考えられる（杉原・鈴木 2005；向井 2006；杉原ほか 2008a；齋藤ほか 2008）。

「岩木山地区」：青森県西海岸にまたがる七里長浜の出来島海岸などで、円磨された黒曜石が海浜礫として、あるいは海食崖に露出する砂礫層中に認められる（新渡戸・鈴木 1983；佐々木 1997；向井 2005b、2006）。また岩木山北麓（十面沢～十腰内～建石付近）では山麓扇状地の土石流堆積物（黒木 1995）や、これに続く台地を構成する海成堆積物（山田野層：小貫ほか 1963）や泥流堆積物（鈴木 1972）に、人頭大から直径5cm前後の円礫～亜円礫の黒曜石が含まれている。これらの堆積物中の黒曜石は、岩木山の新期火山噴出物（青森県農林部土地改良第一課 1987）に由来すると考えられるが、溶岩流や岩屑なだれ堆積物などが未区分のため、火口の位置や噴出時期は明らかでない。これらの黒曜石が鳴沢川などの河川によって日本海に運ばれて出来島海岸に漂着したと考えられる。このほか岩木山西方の中村川上流の乗廻橋付近では峡谷底から拳大以下の黒曜石礫が産出するが、この黒曜石は、峡谷沿いに露出する軽石質火山灰層（大秋層田代凝灰岩部層：藤田・根本 2002；青森県農林水産部農村整備課 2004；福田ほか 2008；島口 2009）からの転石と考えられる。しかし、岩木山北麓の火山麓扇状地堆積物中の黒曜石礫とは堆積時期や産状が異なることから、その起源や噴出年代については今後の調査が必要である。

「深浦地区」：青森県深浦町付近の六角沢の河床や岡崎浜の海浜からは、黒色半透明な黒曜石の小さな亜角礫を産出する（近堂 1985；井上 1989；佐々木 1997；向井 2006）。これらの黒曜石は、この付近一帯に広く分布する流紋岩質火砕流堆積物に由来するものと考えられ、その大きさは最大直径約5cmで、1～3cm大のものが多い。露頭が少ないためその産状は明らかでないが、なかにはパーライト状の火砕流堆積物からマレカナイトとして産出するものも含まれると考えられる。

「男鹿地区」：男鹿半島では、金ヶ崎海岸と脇本～船越海岸で黒曜石の海浜礫が採取できる（磯村 1972、1993、1994；井上 1985；佐々木 1997；向井 2005c）。男鹿半島では、真山～毛無山の山稜か

ら加茂川流域及び金ヶ崎の海岸などに流紋岩質の溶岩や火砕岩が広く分布し、真山流紋岩（類）とよばれている（西男鹿団体研究グループ 1972；藤岡 1973；深瀬 2000；大口ほか 2008；小林ほか 2008）。真山流紋岩（類）は全体的にガラス質で、金ヶ崎海岸の海浜礫で産出する黒曜石は、この岩体に由来すると考えられる。かつて金ヶ崎海岸沿いの道路敷設工事の際には、「テーブル大」の黒曜石岩塊が産出したことがあるという（五十嵐 1968）。脇本付近の海食崖沿いに露出する鮪川（しびかわ）層（北里 1975）中の砂礫層からは表面がやや風化した黒曜石の円礫が認められる。鮪川層は更新世中期の堆積物とされており（白石ほか 2008）、ここから産出する黒曜石は真山流紋岩（類）からの二次堆積と考えられる。脇本～船越海岸の黒曜石礫は鮪川層中に含まれていたものが、浸食されて海岸に打ち上げられたことが想定できる。

「北上地区」：北上川沿いに南北に連なる盆地内の丘陵地や台地を構成する砂礫層中には、まれに直径数 cm 以下の黒曜石礫が認められる。このうち、雫石盆地西縁部の晴山沢や荒沢では、第三系の山津田層（須藤・石井 1987；土井ほか 1998）最上部のデイサイト質軽石凝灰岩層（火砕流堆積物）や礫層中に黒曜石礫が含まれる。また、小赤沢付近でも第四系の橋場層の砂礫層中に握り拳大の黒曜石の垂円礫が産出する（鈴木 1983；井上 1989）。このほか、奥州市水沢区の胆沢扇状地末端の折居付近では、段丘礫層に覆われる礫層（折居層：木野 1963）中に黒曜石が含まれている（佐島 1975）。また、一関市花泉町金沢、老松、日形や一関市真滝、滝沢などにおいて丘陵地を構成する砂礫層（滝沢層：中川 1961）中に直径 5cm 前後の黒曜石の円礫が認められる（佐島 1975；井上 1989；佐々木 1997；向井 2006）。黒曜石の礫径は、北上川の上流で大きく下流で小さい傾向にあり、下流ほど円磨度が増す（吉谷ほか 2001）。これらの表面は灰色不透明な水和層の皮膜で覆われていたり、虫食い状の窪みが認められたりする。内部については新鮮な黒色でガラス光沢を示すものが多いが、やや透明度の低い灰黒色のものも含まれる。なお、これら北上川沿いの地帯では、北上川最上流域のいわゆる仙岩地域の火山群が黒曜石の供給源として想定できる。

「月山地区」：山形県では月山・湯殿山と北方の山麓及び丘陵にかけての地域に、月山火山を起源とする火砕流堆積物や、これからの泥流や岩屑なだれの堆積物が広く分布し、この中から各地で黒曜石が産出することが知られている（百瀬 1975；神保ほか 1964；山形県企画調整部土地対策課 1979）。このうち西川町志津の月山荘付近の道路沿いでは、ガラス質凝灰岩中に数 cm 以下の黒曜石角礫が認められる（百瀬 1975；井上 1989；向井 2006）。また湯殿山の南側山腹を刻む田代沢や大越沢では、河床に多量の黒曜石の円礫が散乱している。また、鶴岡市大網付近の長防山（天保堰沿い）や天狗森、今野川に分布するパーライト（百瀬 1975；本多・清水 1962）は火砕流堆積物と考えられ、小豆大のマレカナイトが多量に含まれるほか、拳大の黒曜石も含まれている。さらに鶴岡市北部一帯には月山からの流れ山と考えられる独立した小丘陵が多数認められ、羽黒町上野新田（小野木山）などで、この流れ山堆積物（笹川岩屑流）から黒曜石の円礫～垂円礫が産出する（百瀬 1975；土谷ほか 1984；井上 1989；大場・石原 2000；佐々木 1997；向井 2006）。

「湯の倉地区」：宮城県宮崎町湯の倉では、鳴瀬川上流にある田川の支谷（澄川）の谷壁に黒曜石の岩脈が露出し、周囲の火砕流堆積物と接する部分の幅 150～200cm に角礫状の黒曜石が産出する。また、黒曜石礫は周囲の火砕流堆積物中にも含まれているほか、田川の河床でも円礫として採取することが可能である（井上 1985；佐々木 1997）。この火砕流堆積物は、永志田層（庄司 1958；宮城県企画部土地対策課 1993）などによばれている。

「色麻地区」：宮城県色麻町愛宕山付近（根岸）では、丘陵を構成する東原層（北村ほか 1981）とよばれる砂礫層が 20～30m の厚さで発達する。この砂礫層の限られた層準内に黒曜石の円礫が多量に含まれる（佐々木 1997）。黒曜石礫は直径 5cm 程度のものが多く、いずれも風化のため周囲がパーライ

ト状に白濁変質して脆いものが多いが、内部にクルミ大～枇杷の種状のマレカナイトが含まれている。

「秋保地区」：仙台市西部の丘陵性山地には、第三紀中新世の流紋岩質凝灰岩を含む火山性堆積物が広く分布することが知られている。このうち名取川上流部にあたる仙台市秋保町馬場町北（大雲寺の北側）には、流紋岩によって構成される丘陵が認められている（宮城県企画部土地対策課 1985）。この丘陵は火山岩頸（volcanic neck）の地形と考えられる。岩脈縁辺部（幅 50cm 前後）には黒曜石が認められ、山麓では崖錐堆積物（ローム）中に黒曜石が角礫として多く散乱する（向井 2006）。ただしこの黒曜石は斑晶鉱物を多く含むことから、割れ面が平滑にはならない。また土蔵付近の丘陵地では、安山岩や流紋岩を含む砂礫層（白沢層の馬場凝灰岩）中に黒曜石の円礫～垂円礫が含まれている（高橋・野田 1965；井上 1985）。これらの砂礫層中の黒曜石は谷筋沿いの林道（水上南）で転石として認められるほか、土蔵付近では水田の耕作土からも採取できる（井上 1985；佐々木 1997）。土蔵付近の黒曜石は、表面が風化している。

### c) 北陸地方

「板山地区」：新潟県新発田市で櫛形山地の西縁に沿っては、津川層や七谷層（鮮新世～中新世）とよばれる流紋岩の存在が知られている（新潟県 1972）。板山付近に産出する黒曜石は、これらの流紋岩の噴出に伴い産出したと考えられる。なかでも板山市宮牧場付近では丘陵地末端（鉄塔付近）に流紋岩岩脈（火道）が露出し、周囲の火砕流堆積物と接する縁辺部に多量の黒曜礫が産出する。火砕流堆積物はパーライト状を呈し、ここには黒曜石がマレカナイトとして含まれている。このほか板山付近の丘陵地に続く扇状地や台地の地表面（畑地や牧草地）や谷筋や水路沿いに多量の黒曜石礫が散乱する。ただし黒曜石礫の大きさは最大 5cm 程度で、大部分が直径 1～0.3cm の細礫が多い。また、板山北東約 2km の上三光集落の南東の沢でも黒曜石礫が産出するのが認められ、さらに板山北方約 4 km の上石川でも、直径 3～5cm の黒曜石礫が産出するが、これらは河川堆積物中に含まれていたものが再堆積した可能性もある。なお板山付近の黒曜石産出地状況については、関（1999）、土橋（1998）による詳細な紹介がある。

## 8. 蔵王産黒曜石について

宮城県刈田郡蔵王町<sup>しほうとうげ</sup>四方峠で佐々木繁喜教諭・登米高校自然科学部により採集された黒曜石は、これまで東北地方で知られている黒曜石原産地と元素組成で一致しなかった。よって、「蔵王地区蔵王系」を新しく設けた。現在のところ詳細は不明であるため、今後の野外調査を待つ火山地質学的所見は記載したい。また、黒曜石原石が少ないため、判別分析の母集団を形成するには至らなかった。よって、今回の原産地推定は判別図上での判別に止まる。

## 9. 石器の原産地推定結果

今回測定したのは、宮城県刈田郡蔵王町内から出土した黒曜石製遺物である。測定した遺物は 35 点であり、原産地が判別できた遺物は 11 点であった。

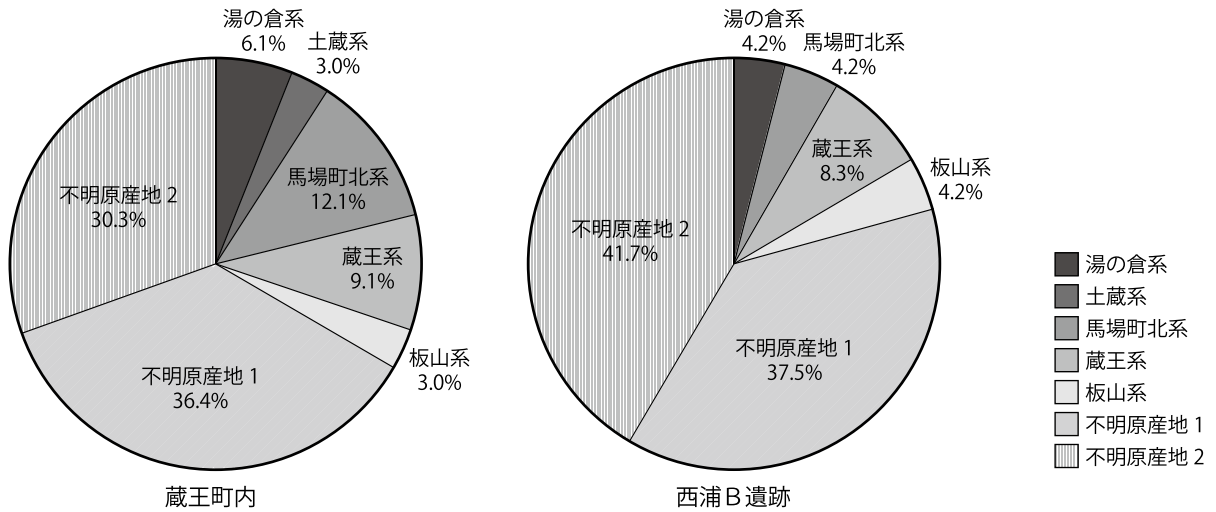
原産地推定の結果は、湯の倉地区湯の倉系が 2 点、土蔵地区土蔵系が 1 点、同地区馬場町北系が 4 点、蔵王地区蔵王系が 3 点、板山地区板山系が 1 点認められた。また、判別不可の中に、判別図上で集中的に分布する集団が 2 つ認められ、それぞれ不明原産地 1 と 2 とした。不明原産地 2 は  $\text{Log}(\text{Fe}/\text{K})$  の値に幅があるが、これは被熱によって影響するパラメータであり、ZA01-016 には被熱の痕跡が認められる。原産地構成でも不明原産地が 12 点、不明原産地が 10 点と割合は高い。



第9表 蔵王町における原産地推定の集計結果

遺跡名	測定点数	判別点数	湯の倉系	土蔵系	馬場町北系	蔵王系	板山系	判別不可*	不明原産地1	不明原産地2
西浦B遺跡	25	5	1		1	2	1	20	9	10
湯坂山B遺跡	7	4	1		2	1		3	2	
六角遺跡	1							1	1	
前戸内遺跡	1	1		1						
車地蔵遺跡	1	1			1					
合計	35	11	2	1	4	3	1	24	12	10

\*；判別不可には不明原産地も含む。



第198図 蔵王町内の原産地構成

なお、ZA01-031は化学組成ではSiO<sub>2</sub>が非常に高い（FP法で90%以上）にも関わらず、比重が2.1と非常に軽いため、岩石名を決定することができなかった（SiO<sub>2</sub>の比重は2.65）。

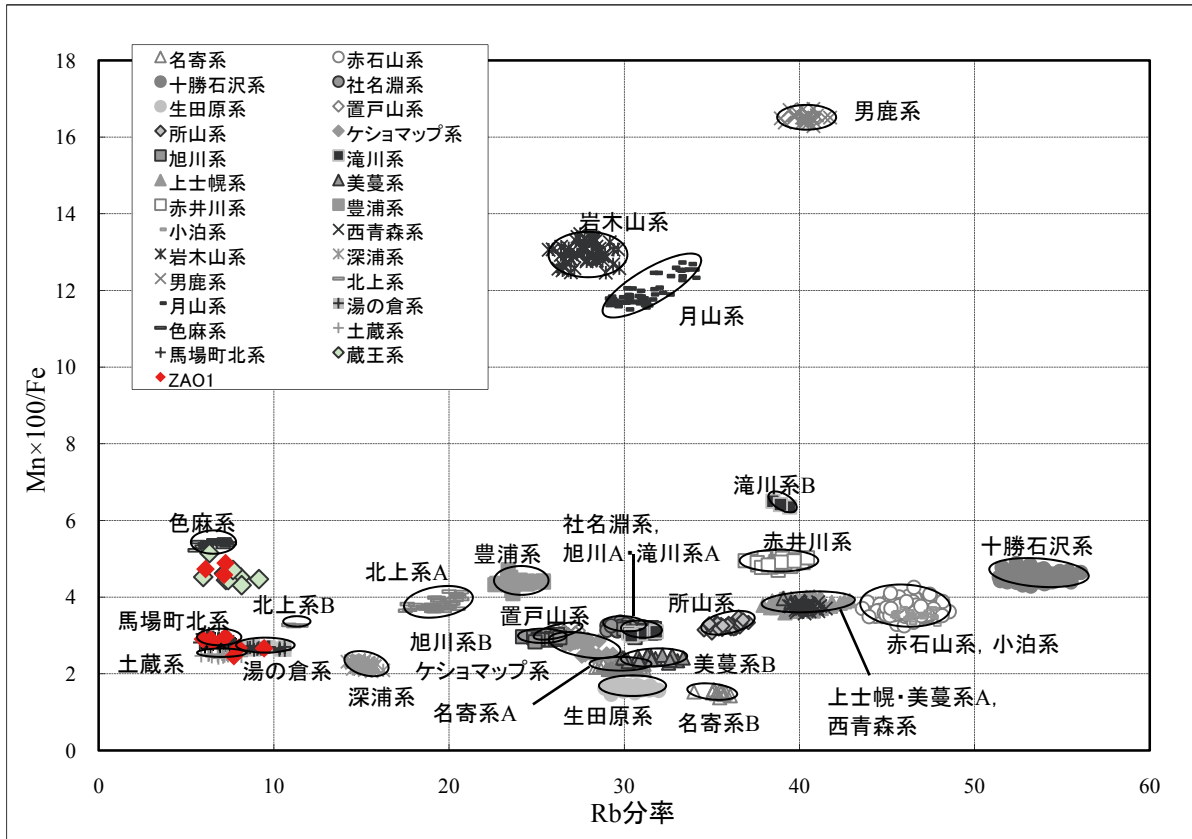
今回の分析では、土蔵地区など比較的近接する黒曜石原産地を利用していた。他に、直線距離で100km以上ある新潟県新発田市にある板山系も認められ、広範囲な流通も想定される。だが、蔵王系を始め不明原産地が多く、またZA01-031のように不明岩石が認められたため、周辺地域での原産地調査が必要であろう。

## 10. おわりに

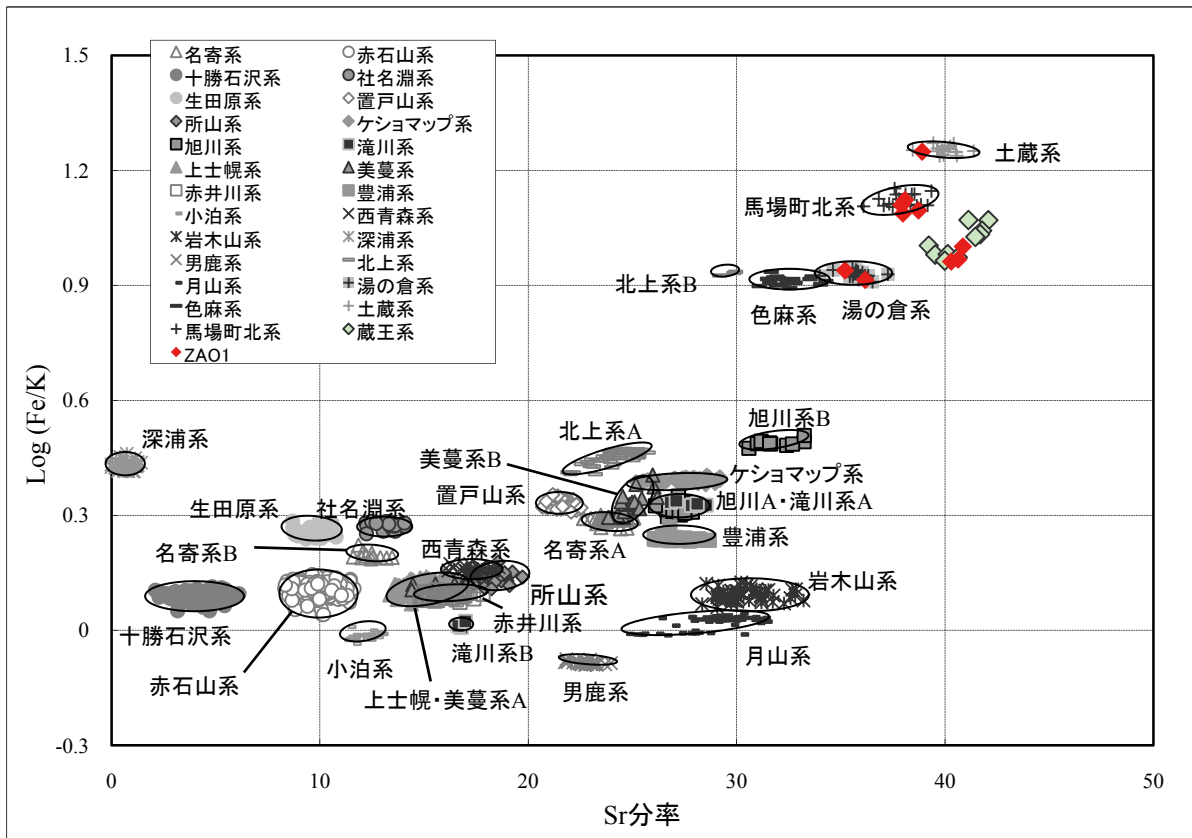
黒曜石製遺物の原産地推定は、明治大学文化財研究施設に設置されている「黒曜石原産地推定システム」で行ったものである。なお、この報告書を参考に論文を作成する場合は、原産地推定の結果を遺物の出土状況からも検討していただきたい。

## 謝辞

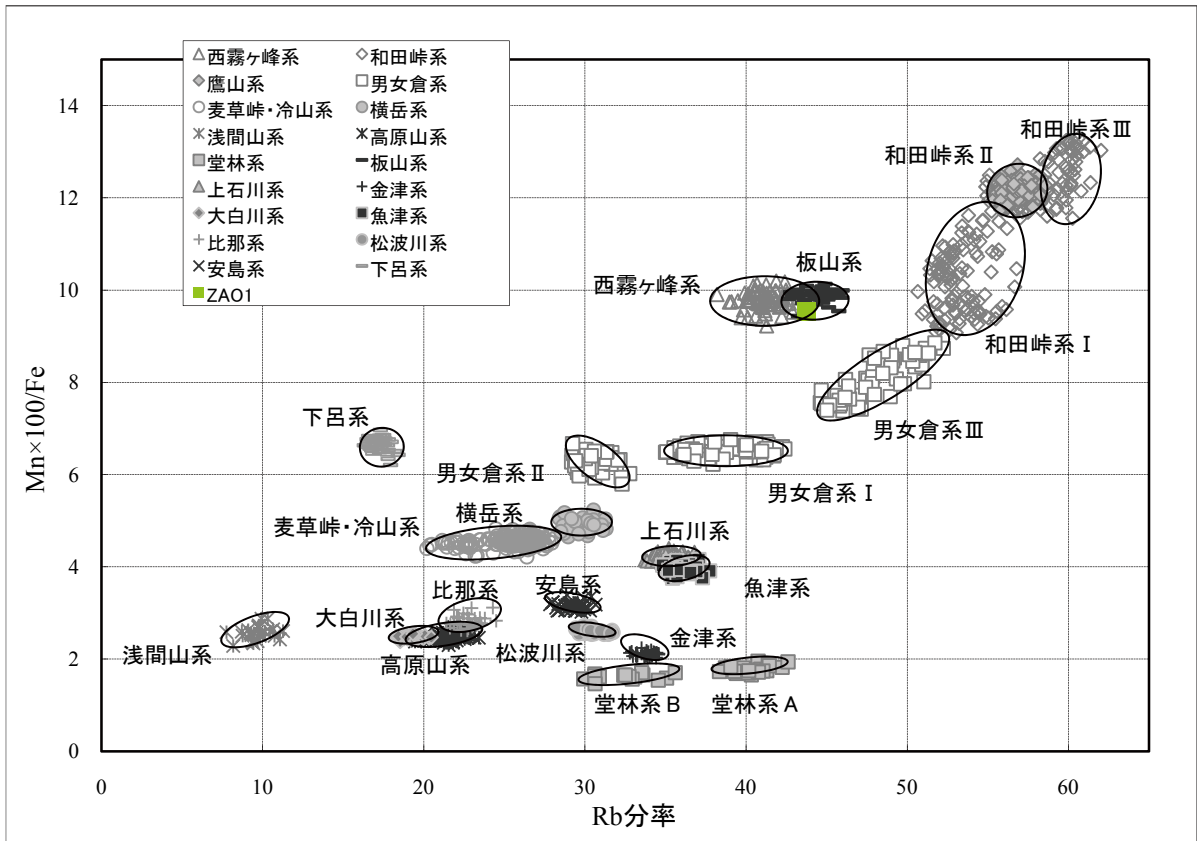
今回の報告を草するにあたり、宮城県登米高等学校佐々木繁喜教諭および自然科学部には黒曜石の提供と共に、黒曜石原産地について貴重なご意見を頂いた。文末であるが厚く御礼申し上げる。



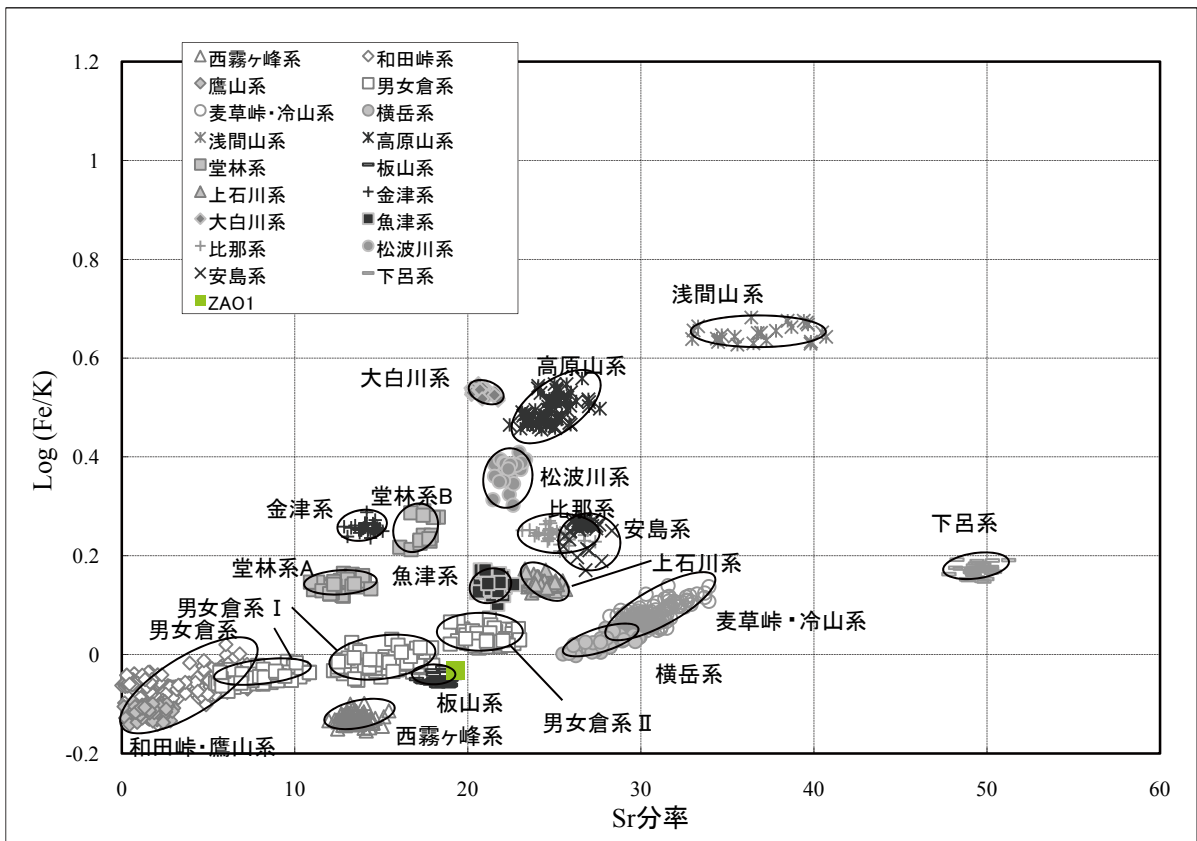
第 199 図 (1) 蔵王町内出土黒曜石製遺物の判別図 (Rb 分率；北海道・東北地方)



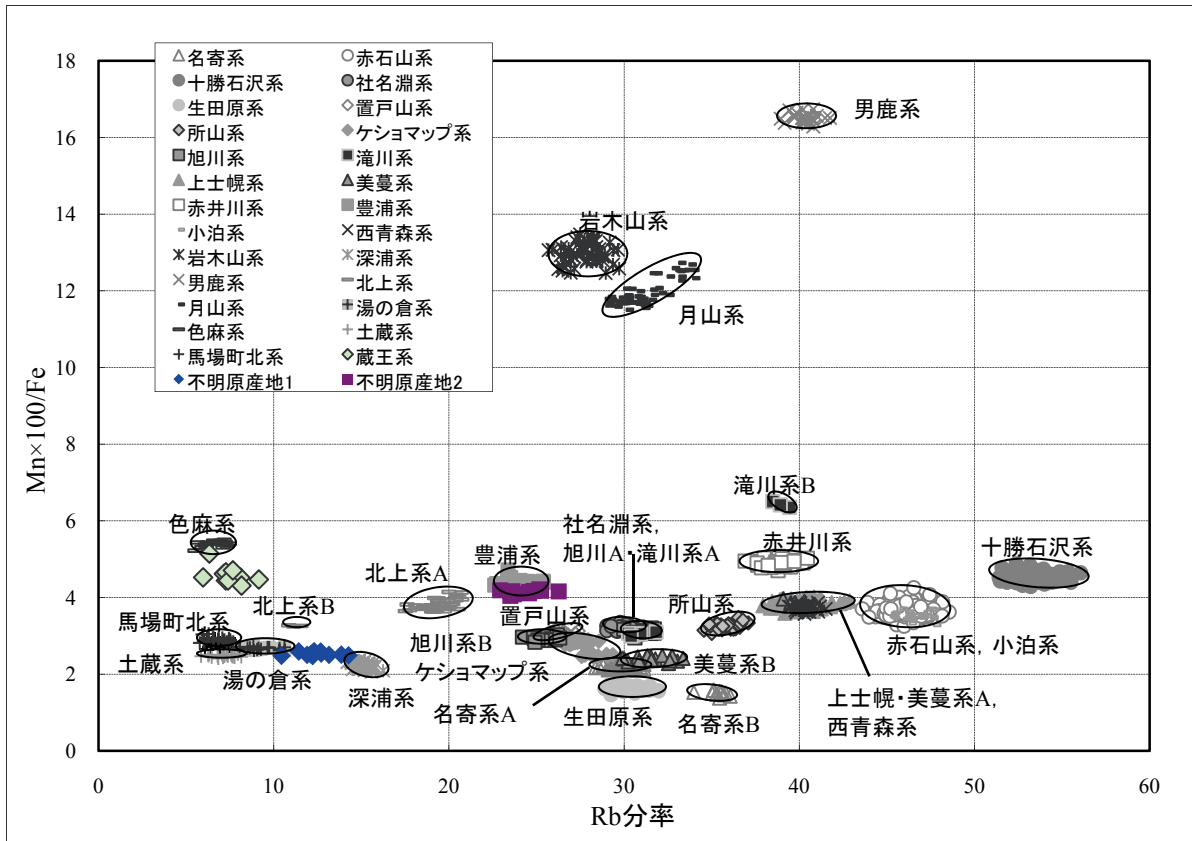
第 199 図 (2) 蔵王町内出土黒曜石製遺物の判別図 (Sr 分率；北海道・東北地方)



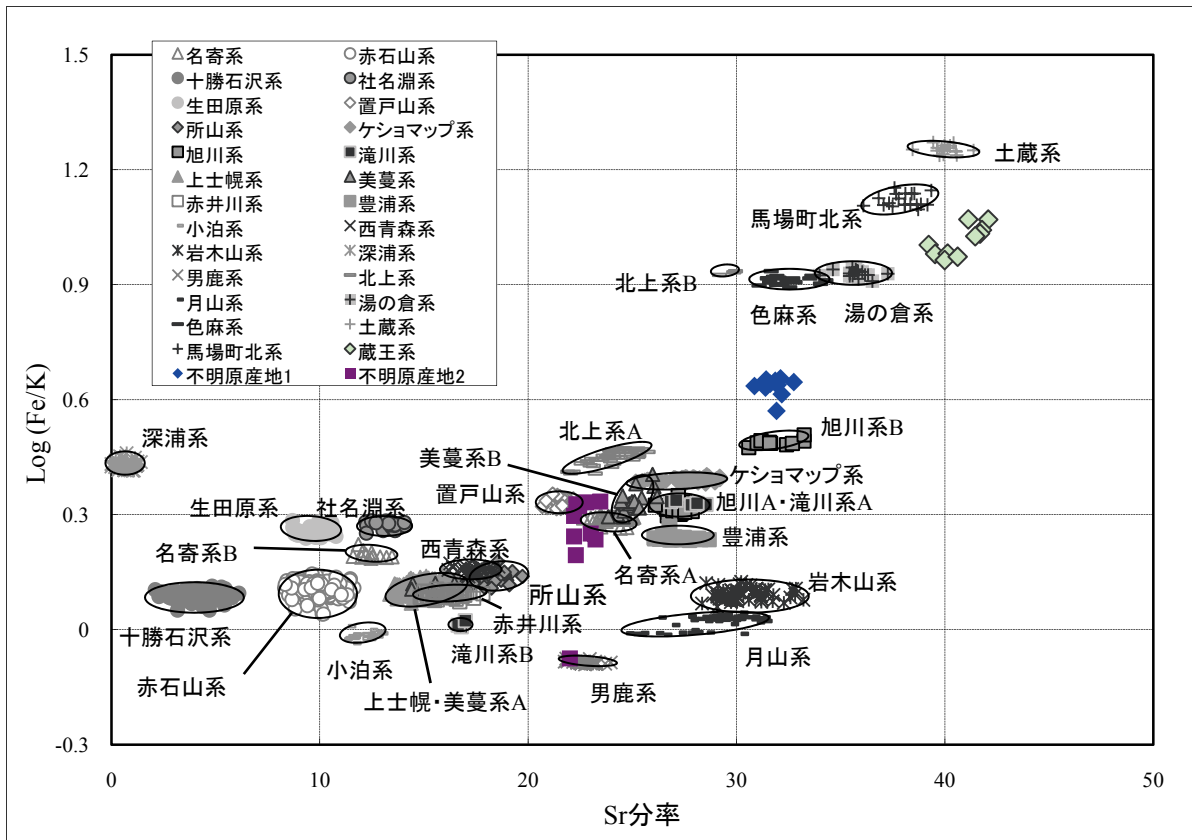
第200図(1) 蔵王町内出土黒曜石製遺物の判別図 (Rb分率; 北陸・中部地方)



第200図(2) 蔵王町内出土黒曜石製遺物の判別図 (Sr分率; 北陸・中部地方)



第 201 図 (1) 不明原産地遺物の判別図 (Rb 分率; 北海道・東北地方)



第 201 図 (2) 不明原産地遺物の判別図 (Sr 分率; 北海道・東北地方)

第10表 蔵王町出土黒曜石製遺物の原産地推定結果

試料No.	Rb 分率	Sr 分率	Zr 分率	Mn×100/Fe	Log(Fe/K)	候補1	候補2	確率	距離	候補1	候補2	確率	距離	遺跡名	遺構名	器種	登録番号	時代	土器型式
ZAO1-001	11.9045	32.7429	47.6241	2.5014	0.6457	不明原産地1								西浦B遺跡	B区 P9	石核	738	縄文時代後期初頭~前葉前半	南境式
ZAO1-002	24.5850	22.4465	40.1306	4.1435	0.3226	不明原産地2								西浦B遺跡	A区 SK19	石核	770	縄文時代後期初頭~前葉前半	南境式
ZAO1-003	6.5203	38.7254	43.1552	2.8468	1.0952	馬場町北系		1.00	6.74	土蔵系		0.00	392.07	西浦B遺跡	A区 SK19	剥片	1030	縄文時代後期初頭~前葉前半	南境式
ZAO1-004	7.1603	40.8580	42.0369	4.5806	1.0010	蔵王系								西浦B遺跡	B区 SK82	剥片	1034	縄文時代後期初頭~前葉前半	南境式
ZAO1-005	12.6784	31.8868	44.8774	2.5891	0.6416	不明原産地1								西浦B遺跡	B区 SB100 P1	剥片	1035	縄文時代後期初頭~前葉前半	南境式
ZAO1-006	12.3030	32.1673	46.3177	2.5966	0.6142	不明原産地1								西浦B遺跡	B区 P276	剥片	991	縄文時代後期初頭~前葉前半	南境式
ZAO1-007	13.1539	31.4175	48.3506	2.5028	0.6526	不明原産地1								西浦B遺跡	B区 P276	剥片	992	縄文時代後期初頭~前葉前半	南境式
ZAO1-008	25.2594	22.2033	39.8067	4.1729	0.2431	不明原産地2								西浦B遺跡	B区 SK28 2層	剥片	961	縄文時代後期初頭~前葉前半	南境式
ZAO1-009	25.1642	22.2903	40.4376	4.2095	0.1945	不明原産地2								西浦B遺跡	B区 SK28	剥片	959	縄文時代後期初頭~前葉前半	南境式
ZAO1-010	24.5674	22.2046	41.7079	4.1088	0.2966	不明原産地2								西浦B遺跡	B区 SK28 3層	剥片	962	縄文時代後期初頭~前葉前半	南境式
ZAO1-011	7.2467	40.6327	42.3605	4.8876	0.9673	蔵王系								西浦B遺跡	B区 SD8	剥片	994	縄文時代	-
ZAO1-012	14.2649	31.3886	45.8565	2.4891	0.6313	不明原産地1								西浦B遺跡	B区 SD84	剥片	999	縄文時代	-
ZAO1-013	24.8289	23.0041	40.4179	4.1697	0.2507	不明原産地2								西浦B遺跡	C区 遺構外	石核	717	縄文時代	-
ZAO1-014	12.1979	31.6166	47.9204	2.5421	0.6416	不明原産地1								西浦B遺跡	B区 北東部 遺構外	剥片	925	縄文時代	-
ZAO1-015	23.6228	23.2349	40.3558	4.1597	0.2352	不明原産地2								西浦B遺跡	試掘 4T 遺構外	石核	769	縄文時代	-
ZAO1-016	26.2698	22.0007	38.5225	4.1578	-0.0750	不明原産地2								西浦B遺跡	表面採集	剥片	1033	縄文時代	-
ZAO1-017	10.7563	35.8121	40.0772	2.6260	0.3908	判別不可		-	-	-	-	-	-	西浦B遺跡	表面採集	剥片	1024	縄文時代	-
ZAO1-018	43.7746	19.2882	19.5765	9.5452	-0.0328	板山系		1.00	11.92	和田峠・鷹山系		0.00	167.48	西浦B遺跡	表面採集	石核	760	縄文時代	-
ZAO1-019	12.1130	31.8568	47.4580	2.5188	0.6493	不明原産地1								西浦B遺跡	表面採集	石核	765	縄文時代	-
ZAO1-020	13.8553	30.8616	46.5904	2.5073	0.6356	不明原産地1								西浦B遺跡	表面採集	石核	766	縄文時代	-
ZAO1-021	12.2271	31.4883	47.1368	2.4722	0.6473	不明原産地1								西浦B遺跡	表面採集	石核	767	縄文時代	-
ZAO1-022	23.5107	23.4595	39.9976	4.0401	0.3344	不明原産地2								西浦B遺跡	表面採集	二次加工剥片	764	縄文時代	-
ZAO1-023	22.9235	22.7760	40.7861	4.1869	0.3322	不明原産地2								西浦B遺跡	表面採集	剥片	1031	縄文時代	-
ZAO1-024	23.6895	22.3097	39.8096	4.0803	0.3273	不明原産地2								西浦B遺跡	表面採集	剥片	1032	縄文時代	-
ZAO1-025	7.9859	36.1697	47.1253	2.6759	0.9140	湯の倉系		1.00	5.11	馬場町北系		0.00	322.31	西浦B遺跡	表面採集	剥片	1023	縄文時代	-
ZAO1-026	10.4462	32.1064	47.4880	2.4772	0.6555	不明原産地1								湯坂山B遺跡	SI03 竪穴住居跡 床面	石核	26	縄文時代中期後葉	大木9式
ZAO1-027	6.4063	38.0794	47.7587	2.8910	1.1225	馬場町北系		1.00	1.96	土蔵系		0.00	379.54	湯坂山B遺跡	SI03 竪穴住居跡 床面	微細剥離剥片	153	縄文時代中期後葉	大木9式
ZAO1-028	9.4481	35.2029	45.2693	2.6656	0.9388	湯の倉系		1.00	5.92	馬場町北系		0.00	293.00	湯坂山B遺跡	SI03 竪穴住居跡 3層	石核	23	縄文時代中期後葉	大木9式
ZAO1-029	12.7082	31.9155	47.2471	2.5349	0.5709	不明原産地1								湯坂山B遺跡	SI03 竪穴住居跡 3層	剥片	-	縄文時代中期後葉	大木9式
ZAO1-030	6.0984	40.2978	42.9191	4.7317	0.9619	蔵王系								湯坂山B遺跡	SI03 竪穴住居跡 3層	剥片	-	縄文時代中期後葉	大木9式
ZAO1-031	34.7588	33.1518	1.36234	0.1574	1.3297	岩石名不明								湯坂山B遺跡	SI04 竪穴住居跡 床面	二次加工剥片	145	縄文時代中期後葉	大木9式
ZAO1-032	7.2383	37.9814	41.9090	2.9586	1.0872	馬場町北系		1.00	7.01	湯の倉系		0.00	379.03	湯坂山B遺跡	SI04 竪穴住居跡 2層	剥片	-	縄文時代中期後葉	大木9式
ZAO1-033	11.4249	31.9768	47.2903	2.5907	0.6392	不明原産地1								六角遺跡	N4区 遺構外	微細剥離直を有する剥片	-	-	-
ZAO1-034	7.7188	38.9046	41.5326	2.4606	1.2487	土蔵系		1.00	4.37	馬場町北系		0.00	83.56	前戸内遺跡	SKI151 土坑	剥片	-	-	-
ZAO1-035	5.9484	37.9100	44.0964	2.9048	1.1091	馬場町北系		1.00	2.68	土蔵系		0.00	418.99	車地蔵遺跡	SX28 水場遺構 (近世)	二次加工剥片	-	-	-

## 引用・参考文献

- 青森県農林水産部農村整備課 2004『土地分類基本調査「川原平」(5万分の1)』, 35p.
- 青森県農林部土地改良第一課 1987『土地分類基本調査「五所川原」(5万分の1)』, 47p.
- 赤松守雄・本吉春雄・右代啓視 1996「オホーツク海底上で採集される黒曜石礫とその意義」北海道開拓記念館研究紀要, 24, pp.9-16.
- 旭川市博物館 2003『黒曜石展—産地を巡って—』第36回企画展, 61p.
- 五十嵐芳郎 1968「秋田産黒曜石」出羽路, 38, pp.47-50.
- 石井英一・中川光弘・斎藤 宏・山本明彦 2008「北海道中央部, 更新世の十勝三股カルデラの提唱と関連火砕流堆積物—大規模火砕流堆積物と給源カルデラの対比例として—」地質学雑誌, 114, pp.348-365.
- 磯村朝次郎 1972「男鹿半島産の黒曜石の原石について」男鹿半島研究, 1, pp.17-20.
- 磯村朝次郎 1993「男鹿半島における石器原石の採取地について」日本海域文化研究所所報, 2, pp.1-3.
- 磯村朝次郎 1994「再び男鹿半島における石器原石について」日本海域文化研究所所報, 3, pp.1-2.
- 井上真理子 1985「大木囲貝塚出土の黒曜石製石器の原石起源について」北奥古代文化, 16, pp.1-31.
- 井上真理子 1989「縄文時代の物と人の動き—東北地方の黒曜石原石産地と大木囲貝塚との関係—」考古学論叢, 2, pp.225-249.
- 大口健志・鹿野和彦・小林紀彦・佐藤雄大・小笠原憲四郎 2008「男鹿半島の火山岩相—始新世～前期中新世火山岩と戸賀火山」日本地質学会第115年学術大会見学旅行案内書, pp.17-32.
- 太田良平・上村不二雄・大沢あつし 1954『5万分の1地質図幅「仁木」および同説明書』北海道開発庁, 55p.
- 大場利夫・松下 亘 1965「北海道の先土器時代」日本の考古学 先土器時代, 1, pp.174-197.
- 大場与志男・石原慈子 2000「山形県月山周辺の黒曜石・パーライト」山形大学紀要(自然科学), 14[4], pp.161-168.
- 奥海 靖・前田勝春 1963「青森県小泊村および市浦村のパーライト」東北の工業用鉱物資源, 3, pp.234-237.
- 小貫義男・三位秀夫・島田昱郎・竹内貞子・石田琢二・斎藤常正 1963「青森県津軽十三湖地域の沖積層」東北大学理学部地質学古生物学教室研究邦文報告, 58, pp.1-36.
- 金成太郎・杉原重夫・長井雅史・柴田 徹 2007「北海道における黒曜石の原産地に関する定量・定性分析」日本文化財科学会第24回大会研究発表要旨集, pp.232-233.
- 金成太郎・杉原重夫・長井雅史・柴田 徹 2010「北海道・東北地方を原産地とする黒曜石の定量・定性分析—黒曜石製遺物の原産地推定に関わる研究—」考古学と自然科学, 60, pp.57-81.
- 北村 信・大沢 穠・石田琢二・中川久夫 1981『「古川地域の地質」地域地質研究報告(5万分の1図幅)』地質調査所, 32p.
- 木野義人 1963「表層地質説明書」『土地分類基本調査 地形・表層地質・土じょう調査「水沢」(5万分の1)』経済企画庁, pp.1-42.
- 北里 洋 1975「男鹿半島上部新生界の地質および年代」東北大学理学部地質学古生物学教室研究邦文報告, 75, pp.17-49.
- 木村英明 1995「黒曜石・ヒト・技術」北海道考古学, 31, pp.3-63.
- 黒木貴一 1995「岩山北麓の火山麓扇状地」季刊地理学, 47[4], pp.285-301.
- 国府谷盛明・長谷川潔・松井公平 1964『5万分の1地質図幅「白滝」および同説明書』北海道開発庁, 35p.
- 小林紀彦・大口健志・鹿野和彦 2008「東北日本, 男鹿半島門前層層序の再検討」地質調査研究報告, 59, pp.211-224.
- 近堂祐弘 1985「北海道・東北地域の黒曜石研究」考古学ジャーナル, 24, pp.7-11.
- 斎藤 岳・杉原重夫・金成太郎・太田陽介 2008「青森県ムシリ遺跡・十腰内(2)遺跡出土黒曜石製遺物の原産地推定」青森県立郷土館調査研究年報, 32, pp.11-24.
- 酒匂純俊・浅井 宏・金山祐祐 1964『5万分の1地質図幅「北見富士」および同説明書』北海道開発庁, 31p.
- 佐々木繁喜 1979「十勝石について」十勝考古, 3, pp.11-24.
- 佐々木繁喜 1997「東北地方の黒曜石」岩手考古学, 9, pp.45-83.
- 佐島三郎 1975「胆沢扇状地出土の黒曜石」ふるさと, 36, pp.1-3.
- 沢村孝之助・秦 光男 1965『5万分の1地質図幅「留辺蘂」および同説明書』北海道開発庁, 46p.
- 島口天・齋藤岳・柴正敏 2009「弘前市中村川支流の孫産童子沢に分布する凝灰岩産黒曜石」青森県立郷土館研究紀要, 33, pp.35-38.
- 嶋野岳人・石原園子・長井雅史・鈴木尚史・杉原重夫 2004「波長分散型蛍光X線分析装置による日本全国の黒曜石全岩定量分析」日本文化財科学会第21回大会研究発表要旨集, pp.140-141.
- 白石建雄・白井正明・西川 治・鈴木隼人・古橋恭子・星多恵子 2008「男鹿半島—能代地域の地形と第四系」日本地質学会第115年学術大会見学旅行案内書, pp.33-50.
- 庄司力偉 1958「宮城県北西部亜炭田地域の地質—鮮新統に発達する堆積輪廻の生成に関する研究—」東北鉱山, 5, pp.1-25.
- 神保 恵・吉田 昭・島崎恵造・玉ノ井正俊 1964「表層地質各論」『土地分類基本調査 地形・表層地質・土じょう調査「湯殿山」(5万分の1)』経済企画庁, pp.1-23.
- 杉原重夫 2003「日本における黒曜石の産出状況」駿台史学, 117, pp.159-174.
- 杉原重夫・小林三郎 2004「考古遺物の自然科学的分析に関する研究—黒曜石産出地データベース—」明治大学人文科学研究紀要, 55, pp.1-83.
- 杉原重夫・鈴木尚史 2005「青森県三内丸山遺跡出土—縄文時代黒曜石遺物の産地推定—」特別史跡三内丸山遺跡年報, 9, pp.22-35.
- 杉原重夫・小林三郎 2006「文化財の自然科学的分析による文化圏の研究」明治大学人文科学研究紀要, 59, pp.43-94.
- 杉原重夫・金成太郎・杉野森淳子 2008a「青森県出土黒曜石製遺物の産地推定」青森県埋蔵文化財調査センター研究紀要, 13, pp.41-60.
- 杉原重夫・金成太郎・柴田 徹・長井雅史 2009「北海道, 置戸安住遺跡出土黒曜石製遺物の原産地推定」旧石器研究, 5, pp.131-150.
- 鈴木 醇 1955『5万分の1地質図幅「旭川」および同説明書』北海道開発庁, 38p.
- 鈴木隆介 1972「岩火山の変位」地理学評論, 45[11], pp.733-755.
- 鈴木隆英 1983「岩手県岩手郡雫石町小赤沢産の黒曜石について」紀要, 3, 岩手県埋蔵文化財センター, pp.45-78.
- 鈴木宏行 2007「原産地遺跡における遺跡間変異研究—北海道遠軽町白滝遺跡群出土の小型舟底形石器器群を対象として—」考古学談叢, 東北大学大学院文学研究科考古学研究室 須藤隆先生退任記念論文集刊行会, pp.109-129.

- 鈴木 守 1964「置戸町の黒曜石」北海道立地下資源調査所報告, 32, p.80.
- 須藤 茂・石井武政 1987『「霰石地域の地質」地域地質研究報告(5万分の1地質図幅)』地質調査所, 142p.
- 関 雅之(1999):所謂「新潟県新発田市板山産黒曜石」について一発見の経緯と分布についての覚書一. 北越考古学, 10, pp.31-38.
- 土橋由理子(1998):新潟県における縄文時代の黒曜石利用について. 新潟県埋蔵文化財調査事業団研究紀要, 2, pp.43-69.
- 高橋橋一・野田素子 1965「宮城県川崎村腹帯北方のパーライト」東北の工業用鉱物資源, 5, pp.112-114.
- 対馬坤六・上村不二雄 1959『5万分の1地質図幅「小泊」および同説明書』地質調査所, 37p.
- 土谷信之・大沢 穠・池辺 穰 1984『「鶴岡地域の地質」地域地質研究報告(5万分の1図幅)』地質調査所, 77p.
- 土居繁雄・松井公平・藤原哲夫 1958『5万分の1地質図幅「豊浦」および同説明書』北海道開発庁, 40p.
- 土井宣夫・越谷 信・本間健一郎 1998「岩手県霰石盆地北一西縁部の地質と活断層群の垂直変位量」活断層研究, 17, pp.31-42.
- 十勝平野, 地質図および地形面区分図編集委員会編 1981『十勝平野, 地質図および地形面区分図(1/200,000)』.
- 直江康雄 2009「白滝産黒曜石の獲得とその広がり」旧石器研究, 5, pp.11-22.
- 中川久夫 1961「本邦太平洋沿岸地方における海水準静的変化と第四紀編年」東北大学理学部地質学古生物学教室研究邦文報告, 54, pp.1-61.
- 新潟県農地部農地計画課(1972):土地分類基本調査「新発田」(5万分の1). 30 p.
- 新戸渡隆・鈴木克彦 1983「日本海七里長浜の黒曜石原石採取踏査」考古風土記, 8, pp.90-100.
- 西男鹿団体研究グループ 1972「男鹿半島南西部戸賀一門前間の地質」地球科学, 26[5], pp.183-194.
- 野地正保・渡辺 順・魚住 悟・鈴木 守 1967『5万分の1地質図幅「丸瀬布」および同説明書』北海道開発庁, 28p.
- 深瀬雅幸 2000「男鹿半島, 前期中新世流紋岩の岩石学(演旨)」日本地質学会第107年学術大会講演要旨, pp.176.
- 福田友之・齋藤 岳・島口 天 2008「青森県弘前市中村川上流域の黒曜石産地」青森県立郷土館調査研究年報, 32, pp.9-10.
- 藤岡一男 1973「男鹿半島の地質(付図:5万分の1)」日本自然保護協会調査報告, 男鹿半島自然公園学術調査報告, 44, pp.5-34.
- 藤田一世・根本直樹 2002「青森県西津軽地域における鮮新統テフラの対比」地学団体研究会第56回北海道総会プログラム, 講演要旨, pp.161-162.
- 北海道埋蔵文化財センター 1998『白滝遺跡群を掘るI—上白滝8遺跡の調査—』, 23p.
- 北海道立地下資源調査所 1994『名寄市の地質と地下資源』名寄市, 106p.
- 本多朔郎・清水貞雄 1962「山形県朝日村大網のパーライト」東北の工業用鉱物資源, 2, pp.292-295.
- 松澤逸巳・右谷征靖・川添 熙・春日井昭・木村方一・野川 潔・松井 晋 1978「北部十勝地域」地団研専報 十勝平野, 22, pp.142-161.
- 松澤逸巳・松井 愈・近堂祐弘・瀬川秀良・田中 実・小久保公司 1981『地域地質研究報告 5万分の1地質図幅 釧路(2)第42号「帯広地域の地質」』地質調査所, 82p.
- 宮城県企画部土地対策課 1985『土地分類基本調査「川崎・山形」(5万分の1)』宮城県, 63p.
- 宮城県企画部土地対策課 1993『土地分類基本調査「鳴子・葉菜山」(5万分の1)』, 70 p.
- 向井正幸 1999「旭川から産出する黒曜石について」旭川市博物館研究報告, 5, pp.43-56.
- 向井正幸 2003「遠軽町社名淵地域に分布する黒曜石の特徴」旭川市博物館研究報告, 9, pp.27-30.
- 向井正幸 2005a「紋別地域, 留辺蘂地域, 豊浦地域から産出する黒曜石ガラスの化学組成」旭川市博物館研究報告, 11, pp.9-20.
- 向井正幸 2005b「青森県津軽地方から産出する黒曜石ガラスの化学組成」旭川市博物館研究報告, 11, pp.21-30. ??
- 向井正幸 2005c「秋田県男鹿半島から産出する黒曜石ガラスの化学組成」旭川市博物館研究報告, 11, pp.31-38. ??
- 向井正幸 2006「東日本から産出する黒曜石ガラスの化学組成」旭川市博物館研究報告, 12, pp.27-61.
- 向井正幸・長谷川仁彦・和田恵治 2000「旭川周辺地域における黒曜石ガラスの化学組成—黒曜石の産地特定への適用—」旭川市博物館研究報告, 6, pp.51-64.
- 向井正幸・和田恵治 2001「旭川西方, 秩父別・北竜地域から産出する黒曜石ガラスの化学組成」旭川市博物館研究報告, 7, pp.23-30.
- 向井正幸・和田恵治・大倉千加子 2002「置戸地域・赤井川地域から産出する黒曜石ガラスの化学組成」旭川市博物館研究報告, 8, pp.47-58.
- 向井正幸・和田恵治 2003「遠軽地域・雄武地域から産出する黒曜石ガラスの化学組成」旭川市博物館研究報告, 9, pp.19-26.
- 向井正幸・渋谷亮太・和田恵治 2004「生田原地域から産出する黒曜石ガラスの化学組成」旭川市博物館研究報告, 10, pp.35-40.
- 向井正幸・和田恵治 2004「十勝地方から産出する黒曜石ガラスの化学組成」旭川市博物館研究報告, 10, pp.47-56.
- 望月明彦 1997「蛍光X線分析による中部・関東地方の黒曜石産地の判別」X線分析の進歩, 28, pp.157-168.
- 望月明彦・池谷信之・小林克次・武藤由里 1994「遺跡内における黒曜石製石器の原産地別分布について—沼津市土手上遺跡BBV層の原産地推定から—」静岡県考古学研究, 26, pp.1-24.
- 百瀬孝美 1975「月山山麓の黒曜石」科学研究発表集録, 5, pp.46-50.
- 山形県企画調整部土地対策課 1979『土地分類基本調査「鶴岡」(5万分の1)』, 65p.
- 山岸宏光・松波武雄 1976『5万分の1地質図幅「糠平」及び同説明書』北海道立地下資源調査所, 40p.
- 山田敬一・寺岡易司・石田正夫 1963『5万分の1地質図幅「生田原」および同説明書』北海道開発庁, 42p.
- 八幡正弘・田近 淳・黒沢邦彦・松波武雄 1988『5万分の1地質図幅「丸瀬布北部」および同説明書』北海道立地下資源調査所, 110p.
- 横山 光・八幡正弘・岡村 聡・西戸裕嗣 2003「西南北海道, 赤井川カルデラの火山層序とカルデラ形成史」岩石鉱物科学, 32, pp.80-95.
- 吉谷昭彦 2004「十勝の黒曜岩」ひがし大雪博物館ブックレット, 1, 31p.
- 吉谷昭彦・片山博臣・鈴木邦輝・吉田清人・鈴木 力・涌嶋三奈 1999a「名寄盆地およびその付近に産出する黒曜岩の微量元素からみた化学組成の特徴」北国研究集録, 3, pp.37-44.
- 吉谷昭彦・須田 修・川辺百樹・陶守統一・片山博臣・涌嶋三奈・上村 暁 1999b「十勝地方に産出する黒曜岩の微量元素の組成について」上士幌町ひがし大雪博物館研究報告, 21, pp.1-11.
- 吉谷昭彦・上村 暁・片山博臣 2001「岩手県内の北上川流域に産出する黒曜岩の微量元素組成について」鳥取大学教育地域科学部紀要 地域研究, 3[1], pp.169-177.
- 薬科哲夫・谷島由貴 1992「新しく判明した黒曜石の産地」郷土と科学, 105, pp.1-6.

## 第4節 西浦B遺跡出土石器の使用痕分析

鹿又喜隆・村田弘之（東北大学）

### 1. はじめに

宮城県刈田郡蔵王町西浦B遺跡から出土した4点の石器を対象に、使用痕分析を実施した。分析対象には、肉眼で光沢や微小剥離痕が確認されたものと、器種分類が難しく機能的な視点から検討する必要があるものが選択された。使用痕観察では、落射照明付き金属顕微鏡（オリンパス BX51M）とデジタルマイクロスコープシステム（キーエンス VHX-1000）を使用した。この分析方法は高倍率法と呼ばれ、被加工物と操作方法を推定できる利点がある。使用痕の分類基準は、東北大学使用痕研究チームによる一連の研究（阿子島 1981、梶原・阿子島 1981）に基づく。線状痕の方向は、隣接する縁辺に対する傾きによって「平行、斜行、直交」と記載する。顕微鏡写真は、デジタルマイクロスコープによって500倍にて深度合成を行い撮影された。なお、No.792と836を鹿又が、No.721と832を村田が担当した。

### 2. 分析結果

No.792は、微小剥離痕が多く、背面の先端部に明瞭な光沢が肉眼で確認された石器である。この光沢は、縁辺部よりも内側に広く発達することから、使用痕とは考えられない（第202図3・4）。輝斑（bright spot）と呼ばれる光沢面であり、埋没後の表面変化（post depositional surface modification）の一種であると考えられている。また、背面の右縁辺と腹面の左側縁には、D2タイプのポリッシュ（use-wear polish）と平行の線状痕が認められた（第202図1・2・8・9）。骨角を対象とした切断作業に使用されたと推定される。その一部には輝斑が混じる部分がある（第202図10）。一方、未使用と思われる縁辺にはポリッシュが認められない（第202図5・6）。この石器は、ガジリのキズが多く、鉄錆を伴う線状痕が多く確認された（第202図7）。

No.836は、微小剥離痕が多く認められるが、高倍率の顕微鏡下で観察しても、ポリッシュが認められない（第203図1～3）。また、各縁辺の微小剥離痕の状況が類似することから、使用とは異なる作用によって微小剥離痕が生じた可能性がある。

No.721は、背面左肩に槌状剥離を有する石器である。ポリッシュや線状痕はみられないが、剥離面ごとに摩滅度が異なることが確認された。摩滅は、主要剥離面の縁辺や、相対的に古い剥離面の稜線などに発達する（第203図5・6）。これに対し、槌状剥離面は、石器が持つ剥離面の中で相対的に新しい剥離であるが、この縁辺は非常にシャープであり、微小剥離痕も確認されなかった（第203図4）。こうした状況から、この石器は、槌状剥離面を刃部として用いられた石器ではなく、細長い剥片が剥離された石核の可能性がある。縄文時代には、細長い小型の石錐が認められることから、この石核から剥離された細長い剥片が石錐の素材として用いられたと考えることもできよう。

No.832は側縁に微小剥離痕を有する剥片である。石器表面全体が光沢面に覆われる（第203図8）。この光沢面は高低差に関係なく広範囲に分布することから、使用痕とは考えにくい。埋没光沢である可能性や、玉髓が有する石質によって形成が促進されたものである可能性がある。背面中央部左側には縁辺に平行するように輝斑が分布する（第203図7）。使用によるポリッシュや線状痕は確認されなかった。



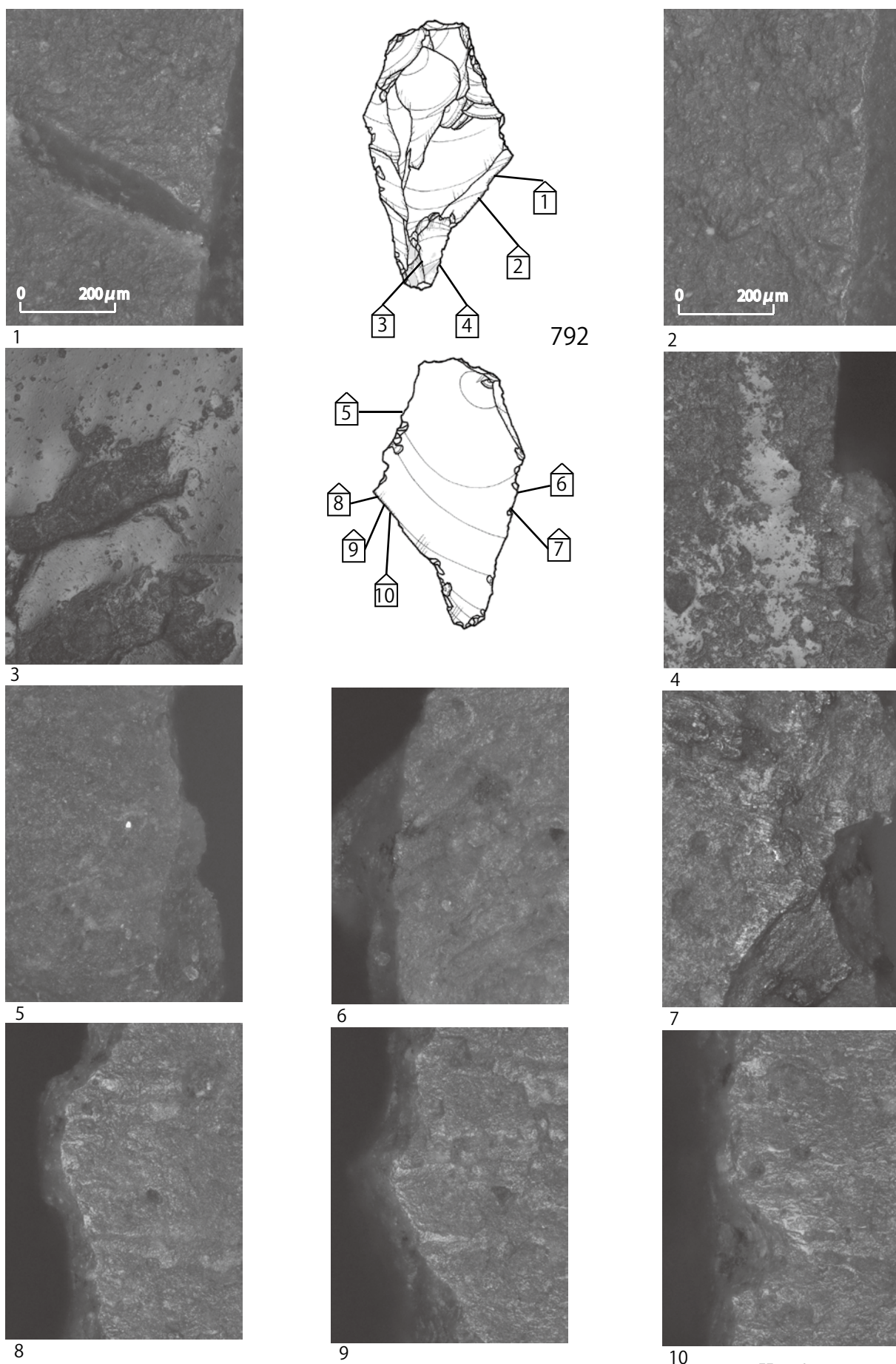
### 3. まとめ

西浦B遺跡では、縄文時代後期初頭～前葉前半の南境式土器が主体的に出土しており、石器の多くも同時期のものと考えられる。また、定型的な石器が少ないものの、二次加工や微小剥離痕のある剥片が多く出土していることが特徴である。本分析では、対象が4点と少なく、全容を明らかにするには至らないが、幾つかの点を指摘できる。ひとつは、十分に整形されていない石器であっても、使用されたものがあること。そして、石核か利器かの区別が難しい石器に対して、使用痕分析を含めた表面観察が有効であることである。また、肉眼観察で確認された光沢や微小剥離痕の一部は、使用によって形成されたものではないことも確認できた。石器の表面に残された様々な痕跡は、石器のライフヒストリーを示すものである。したがって、個々の石器を詳細に観察してその機能を明らかにし、さらに遺跡内の空間的配置の中に位置づけることによって総合化する試みが必要であろう。

#### 引用文献

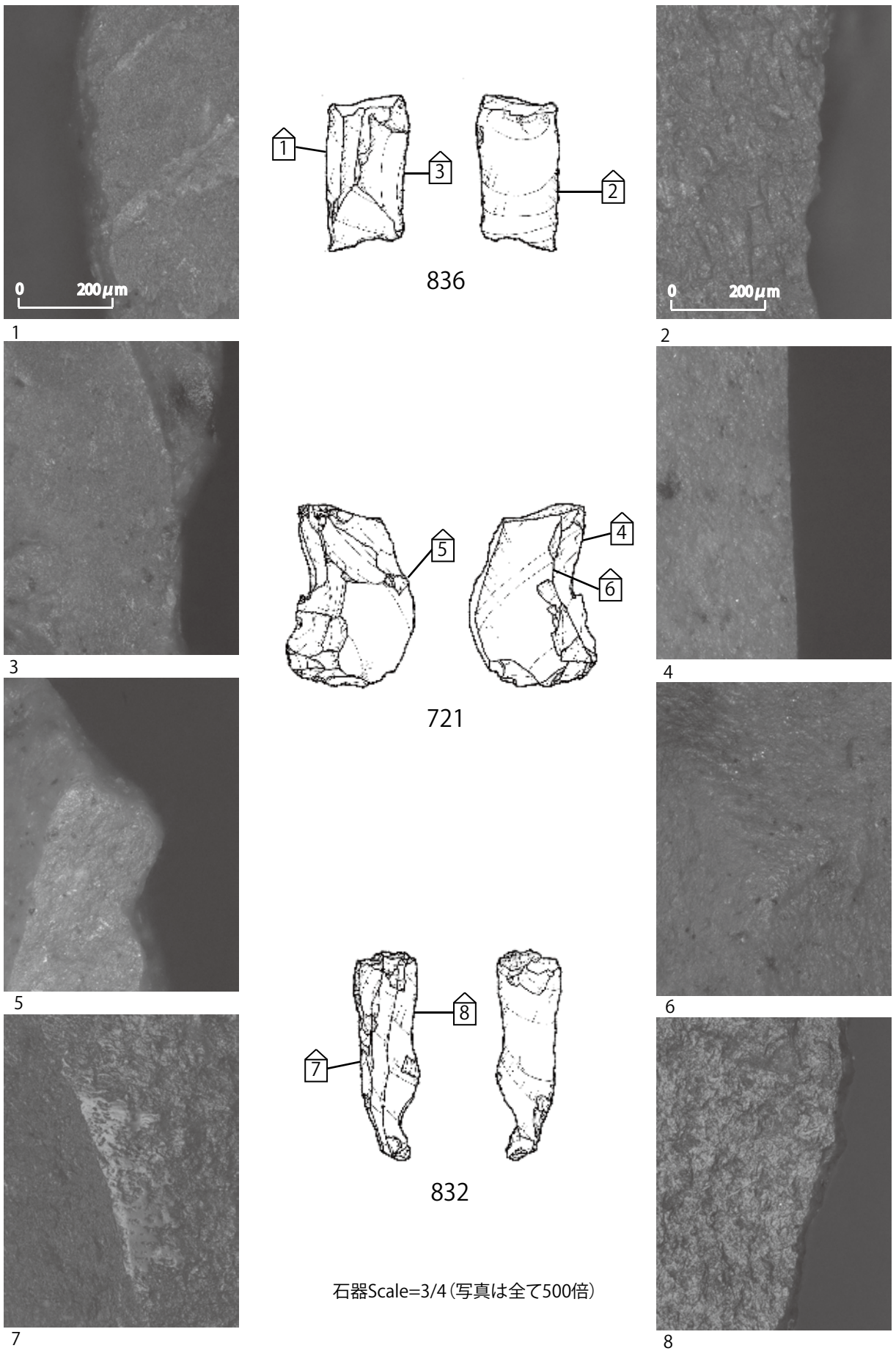
阿子島香 1981 「マイクロフレイキングの実験的研究－（東北大学使用痕研究チームによる研究報告その1）」『考古学雑誌』66（4）pp.1 - 27

梶原洋・阿子島香 1981 「頁岩製石器の実験使用痕研究－ポリッシュを中心とした機能推定の試み－（東北大学使用痕研究チームによる研究報告 その2）」『考古学雑誌』67（1）pp.1 - 36



第202図 西浦B遺跡出土石器の使用痕 (1)

石器Scale=3/4  
写真は全て500倍



第203図 西浦B遺跡出土石器の使用痕(2)

## 第5節 西浦B遺跡における石器石材の地質学的検討

佐藤恵子・鈴木雅

### 1. はじめに

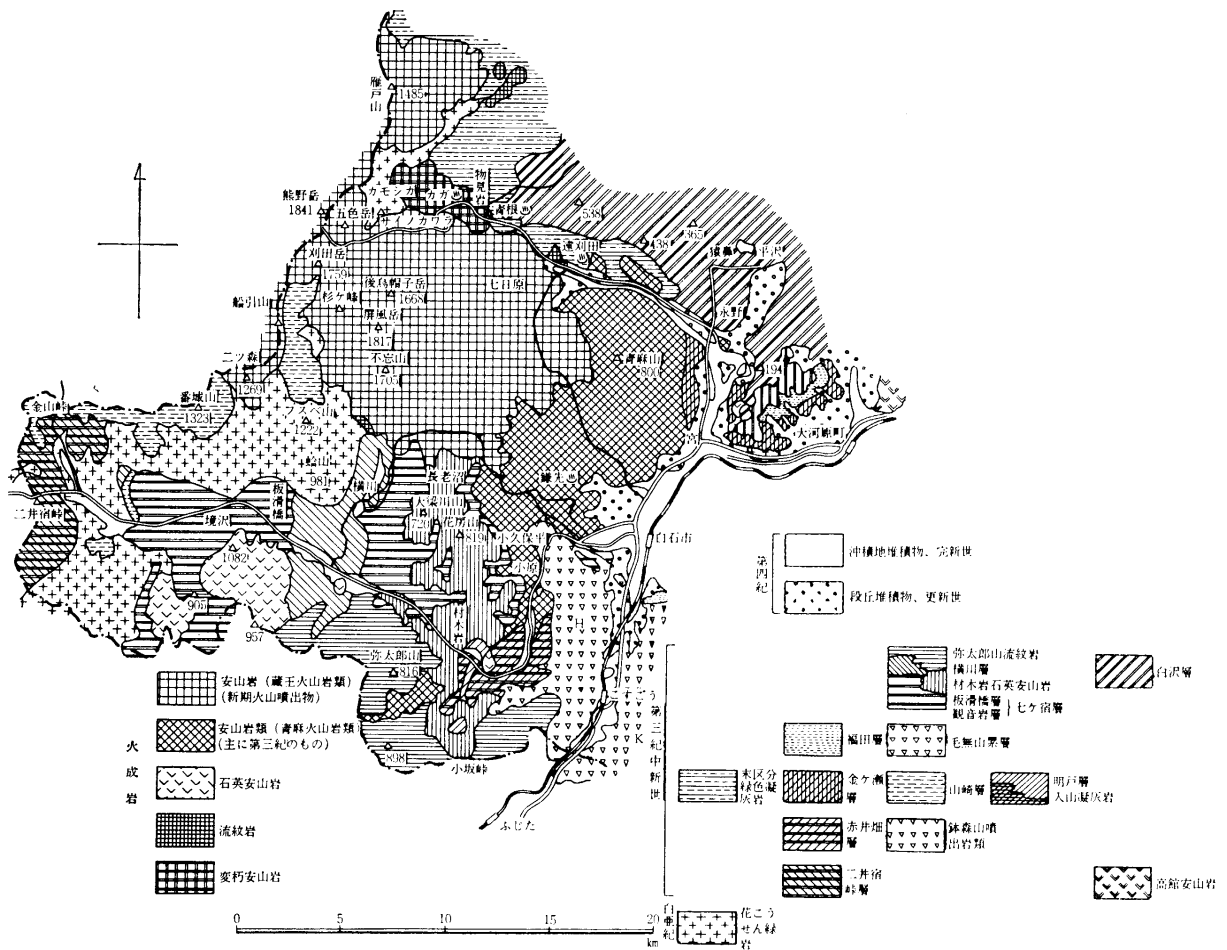
西浦B遺跡から出土した石器に使用されている石材について、本遺跡の立地する蔵王火山東麓地域の地質学的背景との対比により採取地を検討した。西浦B遺跡の石器石材は、利用率の多い順に珪質頁岩、安山岩、玉髓、黒曜石、砂岩、頁岩、碧玉、流紋岩、石英安山岩、珪化凝灰岩、玄武岩、緑色泥岩、緑色凝灰岩、変朽安山岩、シルト岩、粘板岩、チャート、花崗閃緑岩、凝灰岩、凝灰質砂岩、玉髓質珪化木と分類されている。地質学的背景の把握にあたっては、20万分の1土地分類基本調査「宮城県」（奥津1972）および5万分の1都道府県土地分類基本調査「白石」（北村・中川1983）による表層地質図を参照したほか、第四系の層序・地形・地質構造・植物化石・火山灰の組成から仙台付近の第四紀地史を組み立てた中川久夫ら（1960）、蔵王火山東麓地域における古火山の形成、火山泥流地形および河成段丘の形成について編年的・生成論的考察を行ない、地盤運動との関係を明らかにした古谷（1965）、第四紀火山活動および蔵王火山の火山灰層序について、火山灰の性質の地域差を検討した村山（1966）の研究、および宮城県高等学校理科研究会地学部会編（1975）による宮城県内の各層準の解説を適宜参照した。

### 2. 検討結果

検討対象とした石器石材を地質・岩石学的にみると、黒曜石・流紋岩・安山岩・石英安山岩・玄武岩・花崗閃緑岩は火成岩、凝灰岩・緑色凝灰岩・珪化凝灰岩・頁岩・珪質頁岩・砂岩・粘板岩・凝灰質砂岩・シルト岩・チャートは堆積岩、緑色泥岩・変朽安山岩は変成岩、玉髓・碧玉は鉱物、玉髓質珪化木は植物化石に分類される。以下、本地域における各石材の分布状況を記載する。

**火成岩：**黒曜石は、珪酸分の多い流紋岩質溶岩が急冷することで生成される火山岩の一種である。本地域周辺では仙台市秋保地区、川崎町前川地区、村田町谷山地区などに産地が知られている（井上1989、佐々木1997）ほか、近年の佐々木繁喜氏、高橋健寿氏による調査で蔵王町円田地区の四方峠周辺などに分布する薄木層中に黒曜石が含まれることが確認されている（佐々木2009）。流紋岩は貫入岩として存在するほか、白石市小原付近の弥太郎山流紋岩質凝灰岩、および宮城県中南部に広く分布する青根層に含まれる。安山岩は、蔵王火山岩類、青麻火山岩類、高館安山岩類など中新統の火山活動に伴う噴出物および貫入岩として本地域に広く存在し、その後の砕屑物からなる堆積層にも含まれる。石英安山岩も、青麻火山岩類、猫田石英安山岩類、鉢森山安山岩類、鎌先層、七ヶ宿層などに広く存在する。玄武岩は蔵王火山岩類に含まれるほか、鎌先層に貫入岩として存在する。花崗閃緑岩は阿武隈山系および本地域の白垂系基盤岩類として存在する。

**堆積岩：**凝灰岩・珪化凝灰岩は、沼田凝灰岩、小沢凝灰岩、白石層、金ヶ瀬層などに含まれ、本地域に広く分布する。緑色凝灰岩は中新統の火山活動に伴う火山岩として奥羽脊梁山脈に広く存在し、青根層、鎌先層、七ヶ宿層などに含まれる。頁岩は二井宿峠層、沼田累層などに含まれる。珪質頁岩は、東北地方の新第三紀女川層に由来する珪酸分に富んだ硬質の石材である。東北地方の石器石材として多用されているものの、地質学的な検討対象となることは少なく、より軟質の頁岩と区別されていない。考古学的な石材流通の検討を目的として詳細な分布調査を行なった秦昭繁氏によれば、珪質頁岩は東北地



第 204 図 宮城県南西地域地質図 (宮城県高等学校理科研究会地学部会編 1975)

方の新潟県北部から青森県にかけての日本海側に広く分布し、出羽山地を横断する最上川流域、月布川流域、白鷹町付近、玉庭丘陵周辺が分布の中心であることが明らかにされている (秦 1995・1998・2001、第 205 図)。太平洋側では福島県北部の摺上川上流域、宮城県南部の白石川上流域と太郎川流域、宮城県北部の田川流域と江合川上流域、岩手県南部の磐井川流域などに小規模な産地が確認されているが、量・石質・大きさにおいて石器製作に適さないものが多い。砂岩・凝灰質砂岩・シルト岩は横川層などに含まれる。粘板岩は古生層に、チャートは第三紀層に含まれるが、本地域の表層地質には確認できない。

**変成岩：** 緑色泥岩は二井宿峠層、変朽安山岩は鉢森山安山岩類、二井宿峠層、我々層などに含まれる。

**鉱物：** 玉髓は、乳白色のもの白石市小原付近の材木岩石英安山岩類中に脈岩として存在する (須田・須田 2000)。碧玉は玉髓・瑪瑙と同種の鉱物であり、これらは本地域の比較的広い範囲に散在する普遍的な石材である。

**植物化石：** 高館丘陵の基盤であり小沢凝灰岩層との対比が考えられる白沢層下部凝灰岩層中には、珪化木などの植物化石



第 205 図 珪質頁岩分布図 (秦 1998)

が豊富に含まれる（田村 1986）。高館丘陵西麓の村田町新川流域では、多数の珪化木とそれらが瑪瑙・玉髓化して黄褐色または茶褐色を呈するものが産出することが高橋氏、藤原二郎氏、村田町教育委員会、東北学院大学などによる調査で確認されている（東北学院大学佐川ゼミナール 2006 など）。

### 3. まとめ

西浦 B 遺跡の石器石材と蔵王火山東麓地域の表層地質とを対比した結果、分布が明確に確認できない珪質頁岩や粘板岩、チャートなど数種類の石材を除いて、大半が本地域に存在することが判明した。ただし、現時点では地質図上での検討であり、本地域の表層地質に分布が確認された石材のすべてが本地域内で調達されたことを直ちに指摘するものではない。今回の検討結果に基づき、河川および露頭などでの分布状況および石質と剥離特性の把握を通して具体的な採取地を推定する必要がある。

日本海側からの搬入と考えられる珪質頁岩をはじめ、蛍光 X 線分析による原産地推定（第 5 章第 3 節）で新潟県板山産をはじめ複数の産地が判別された黒曜石など遠隔地からの搬入が確認された石材の存在は、縄文時代の広範な地域間交流を示す。一方、その他の石材については在地石材として一括され、具体的な利用状況については未解明な点が多い。石材をはじめとした在地資源がどのように調達され、消費されたのかを明らかにすることは、縄文時代の集落の成り立ちを考える上で非常に重要である。

西浦 B 遺跡では、蔵王火山東麓の地質学的背景が供給した多種類の在地石材の特性とその分布を的確に把握し、集落内の活動に取り入れていたと考えられる。今後は詳細な石材調査によって、そうした彼らの活動を具体的に明らかにしていくことが必要である。

#### 引用文献

- 井上真理子 1989 「縄文時代の物と人の動き」『考古学論叢Ⅱ』
- 奥津春生 1972 「20 万分の 1 土地分類基本調査 宮城県」
- 北村信・中川久夫 1983 「5 万分の 1 都道府県土地分類基本調査 白石」
- 佐々木繁喜 1997 「東北地方の黒曜石」岩手考古学 9
- 佐々木繁喜 2009 「蔵王町から発見された黒曜石について」地学部会誌 46 宮城県高等学校理科研究会
- 須田良平・須田富士子 2000 「宮城県における石器石材の基礎的研究」『佐藤広史君追悼論文集 一所懸命』佐藤広史君を偲ぶ会
- 田村俊和 1986 「谷山県自然環境保全地域の地形・地質」『谷山県自然環境保全地域学術調査報告書』谷山県自然環境保全地域学術調査委員会編
- 東北学院大学佐川ゼミナール 2006 「賀籠沢遺跡 2003～2006 年度発掘調査の成果」第 20 回東北日本の旧石器文化を語る会予稿集
- 中川久夫・小川貞子・鈴木養身 1960 「仙台付近の第四系および地形（1）」第四紀研究 1-6
- 秦昭繁 1995 「山形県における珪質頁岩分布と地域内の石材流通」福島考古 36
- 秦昭繁 1998 「珪質頁岩とその分布」考古学ジャーナル 432
- 秦昭繁 2001 「考古学における珪質頁岩の石材環境と産地推定」山形応用地質 21
- 古谷尊彦 1965 「蔵王火山東麓地域の地形発達史」地理学評論 38-2
- 宮城県高等学校理科研究会地学部会編 1975 『宮城県の地質案内』
- 村山磐 1966 「蔵王火山およびその周辺の火山灰について」地理学評論 39-9

## 第6章 考察

### 第1節 縄文時代

#### 1. 遺物の特徴と編年的位置づけ

##### (1) 縄文土器

縄文土器は遺物収納コンテナ（44 × 60 × 15cm）で約 35 箱分が出土した。整理作業の結果、資料化できたものは破片資料を含めて深鉢 616 点、鉢 26 点、浅鉢 8 点、壺 8 点、皿 1 点、注口付浅鉢 1 点、注口土器 1 点、台付鉢 1 点、把手 2 点の計 664 点である。土器の多くはフラスコ状土坑から出土し、ほかに土坑、竪穴住居跡、炉跡、および遺構外からも出土している。器種はほとんどが深鉢で、ほかに鉢、浅鉢、壺、注口付浅鉢などがある。隆線・沈線・貼付・刺突などの技法によって文様が施文されるものと、地文のみのものであり、地文は縄文が最も多く、撚糸文、網目状撚糸文などが少数みられる。土器の底部はナデ調整のものが多く、一部に網代痕がみられる。これらを従来の研究に従って大別すると、Ⅰ群土器（中期中葉）、Ⅱ群土器（後期初頭～前葉前半）、Ⅲ群土器（晩期中葉）に分けられる。なお、Ⅰ・Ⅲ群土器はごく少数であり、本遺跡において主体を占めるのはⅡ群土器である。ここでは、各土器群の特徴を検討し、その編年的位置づけおよび地域性について考察する。

##### ① 出土土器の器種と文様

###### A. Ⅰ群土器（中期中葉）

深鉢(第 82 図 10)がある。遺構に伴う遺物ではない。隆沈線により渦巻文を施文し、地文は縄文(RL)である。

###### B. Ⅱ群土器（後期初頭～前葉前半）

本遺跡出土土器の主体を占め、口縁部資料だけで 311 点を数える。資料化にあたっては、器形・文様等の類型をすべて表現できるよう留意しながら、代表例を抽出して図示するよう努めた。出土土器は全体として小片が多く、器形・文様の検討が十分に行なえないものが多かった。ここでは、各遺構ごとに器形・文様の特徴が把握できるものに限定して抽出し、記述することとする。なお、各遺構出土土器のより詳細な内容については、適宜第 4 章の観察表を参照されたい。

SK28 フラスコ状土坑出土土器 深鉢（第 206 図 1～11）がある。1 は波状口縁で、口縁部から胴部まで内弯する。網目状撚糸文を地文として、胴上部に波状口縁の頂部から垂下する鎖状隆線文と逆コの字状の沈線文による方形区画を施文する。2 は波状口縁で、胴部が内弯して胴上部で逆くの字状にすぼまり、口縁部が直立する。地文は磨消縄文（LR）である。口縁部は無文帯で胴部との境を 2 条の沈線文で区画する。波状口縁の頂部下に 8 字状隆線文、谷部にボタン状貼付文を施文し、8 字状隆線文から 2 条の沈線文による楕円文を、ボタン状貼付文から 1 条の沈線によるジグザグ文を垂下させる。楕円文の沈線は胴下部で横方向に転じて方形区画を形成するようである。口縁部と胴部を区画する沈線上に 1 か所の貫通孔をもつ。3 は沈線文と円形刺突文を施文するねじり状把手である。4 は波状口縁で地文は縄文（LR）である。口縁部にボタン状貼付文と楕円形沈線区画を施文し、胴部との境を 1 条の隆線文で区画する。5 は口縁部無文帯に垂下させた沈線入隆線文の下端に円形刺突文を施文し、胴部との境を 1 条の隆線文で区画する。6 は口縁部がくの字状に短く外反する。地文は縄文（LR）で口縁部と胴部の境を 2 条の沈線文で区画する。上部の沈線上に 8 字状隆線文を施文し、下部の沈線の一部が渦巻文に転じる。7 は口縁部がごく短く外反し、波状口縁の頂部下に沈線による渦巻文を施文する。8 は無文で

波状口縁の頂部下に貫通孔をもつ。9は平口縁で口縁部から胴部まで内弯する。地文のみを施文する。地文は櫛歯状沈線文を縦位に施文し、口縁部付近で一部格子状となる。10は口縁部が無文帯で胴部との境を1条の沈線文で区画し、胴部に櫛描状沈線による連続S字状文を施文する。11は地文が縄文(LR)で1条の沈線による方形区画文を施文する。

SK79 フラスコ状土坑出土土器 深鉢(第206図12・13)がある。12は波状口縁で胴部が外傾し胴上部でくの字状に内折し、口縁部が直立する。地文は縄文(L)で口縁部無文帯に波状口縁の頂部下から刺突入隆線文を垂下させ、胴部と口縁部の境の稜上を刺突入隆線文で区画する。13は地文が縄文(LR)で口縁部無文帯と胴部の境を1条の隆線文で区画する。

SK125 フラスコ状土坑出土土器 鉢(第206図14)、浅鉢(第206図15)がある。14は胴部が内弯して胴上部で逆くの字状にすぼまり、口縁部が外折して短く内弯する。地文は縄文(LR)で一部にミガキを施す。口縁部に橋状把手をもち、把手部の内外面に貫通孔をもつ。口縁部にI字状沈線入隆線文と沈線による方形区画を施文し、I字状沈線入隆線文の上下端部に円形刺突文を、方形区画内に連続円形刺突文を施文する。焼成が比較的良好で胎土が赤みがかかった褐色を呈する。15は外反する口縁部に縦位の隆線文を施文し、口唇部に沈線文を施文する。内面に炭化物の付着がみられる。

SK13 土坑出土土器 深鉢(第206図16～18)がある。16は口縁部から胴部まで内弯し、口唇部の内外面に粘土帯が貼り付けられて肥厚する。地文は磨消縄文(LR)で、口唇部に橋状把手をもち、把手の内面側に盲孔をもつ。1・2条の沈線文を横位・U字状に施文し、沈線文の交点にボタン状貼付文を施文し、1条の沈線によるジグザグ文を垂下させる。焼成が比較的良好で胎土が赤みがかかった褐色を呈する。外面に炭化物の付着がみられる。17は地文が縄文(LR)で口縁部無文帯と胴部の境を1条の隆線文で区画し、沈線による蕨手文を垂下させる。18は地文が縄文(RL)で沈線文を垂下させる。

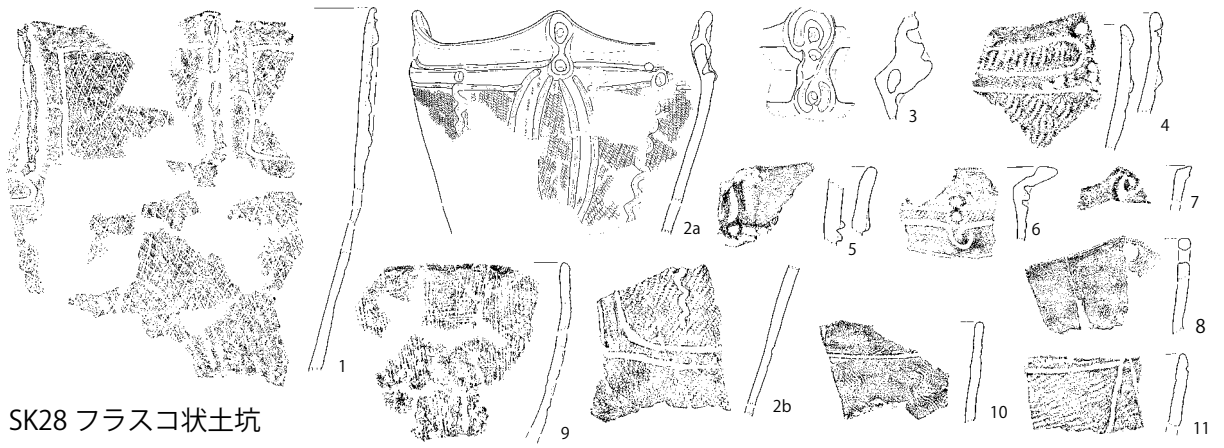
SK90 フラスコ状土坑出土土器 深鉢(第206図19・20)がある。19は口縁部から胴部まで内弯し、地文の縄文(LR)のみを施文する。20は口縁部から胴部まで外傾し、地文の撚糸文(R)のみを施文する。

SK56 フラスコ状土坑出土土器 深鉢(第206図21～25)がある。21は波状口縁で口縁部から胴部まで内弯する。地文は磨消縄文(LR)である。口縁部無文帯に波状口縁の頂部からノの字状に垂下した1条の沈線文が口縁部と胴部の境を区画する沈線文に転じる。胴部には沈線による蕨手文とU字状文を交互に垂下させる。22は口縁部がやや外反する。地文は撚糸文(R)である。口縁部に1条の沈線文と円形刺突文を施文し、円形刺突文の両端から2条の沈線によるジグザグ文を垂下させる。23は口縁部がやや内弯する。地文は縄文(LR)である。口縁部無文帯と胴部の境に刻目付隆線文を施文する。24は口縁部が外傾し、地文の撚糸文(LR)のみを施文する。25は胴部が内弯する。地文は磨消縄文(LR)で一部にミガキを施す。胴部に平行沈線文を垂下させる。底部は無文(ミガキ)である。

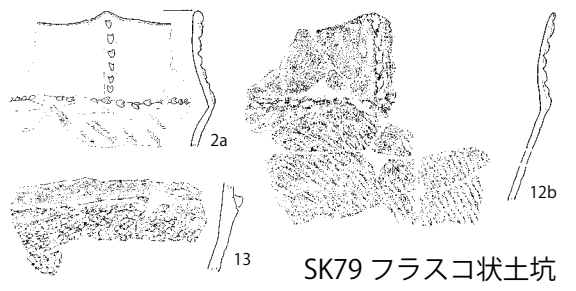
SK19 フラスコ状土坑出土土器 注口土器(第206図26)、深鉢(第206図27～30)がある。26は胴部中位を頂点にして、ほぼ対称に内弯し、頸部がくの字状に外折する。地文は縄文(RL)である。口縁部無文帯と胴部の境を1条の沈線文で区画し、沈線文の下部に接してボタン状貼付文を施文する。胴部に沈線による蕨手文とU地文を斜位に施文する。底部は無文(ミガキ)である。27は磨消縄文(LR)を地文とし、口縁部無文帯と胴部の境を1条の沈線文で区画する。胴部に沈線による楕円文またはU字状文を垂下させる。28は波状口縁で口縁部がやや外反する。地文は磨消縄文(LR)で、口縁部無文帯に波状口縁の頂部から隆沈線文を垂下させ、口縁部無文帯と胴部の境を1条の沈線文で区画する。胴部に沈線による蕨手文とU字状文を垂下させる。29は地文が磨消縄文(LR)で沈線による蕨手文を垂下させる。30は胴部が内弯し地文は磨消縄文(LR)である。平行沈線文を垂下させる。

SK82 フラスコ状土坑出土土器 深鉢(第206図31～33)がある。31は波状口縁で、地文は磨消縄文(LR)である。口縁部無文帯の波状口縁の頂部下に円形盲孔を施文し、口縁部無文帯と胴部の境を1条

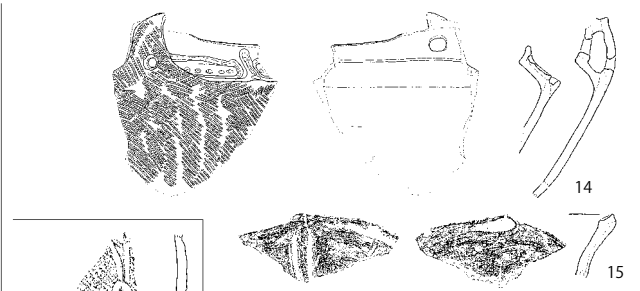




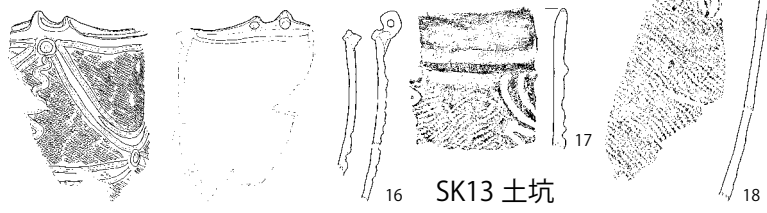
SK28 フラスコ状土坑



SK79 フラスコ状土坑



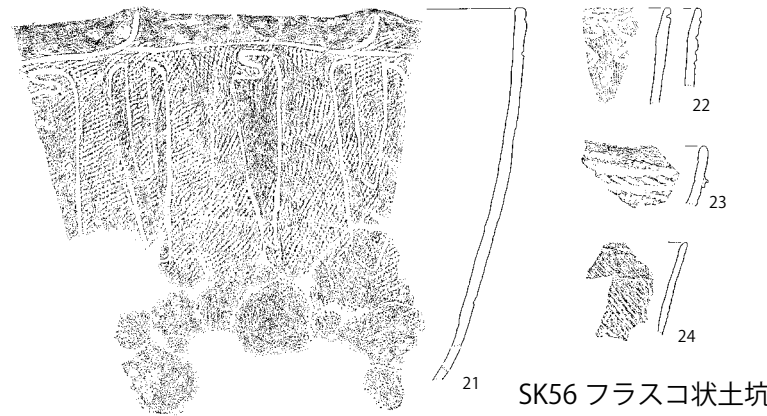
SK125 フラスコ状土坑



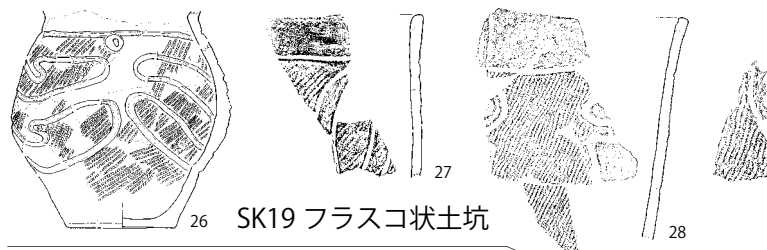
SK13 土坑



SK90 フラスコ状土坑



SK56 フラスコ状土坑



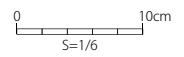
SK19 フラスコ状土坑



SK82 フラスコ状土坑



SK62 フラスコ状土坑



第206図 II群土器(1)

の沈線文で区画する。胴部に沈線による蕨手文を垂下させる。内面に炭化物の付着がみられる。32は波状口縁で、地文は縄文(LR-0段多条)である。口縁部無文帯の波状口縁の頂部下に2個の円形盲孔を施文し、口縁部無文帯と胴部の境を1条の沈線文で区画する。胴部に沈線文を施文する。33は磨消縄文(LR)を地文とし、蕨手文を施文する。

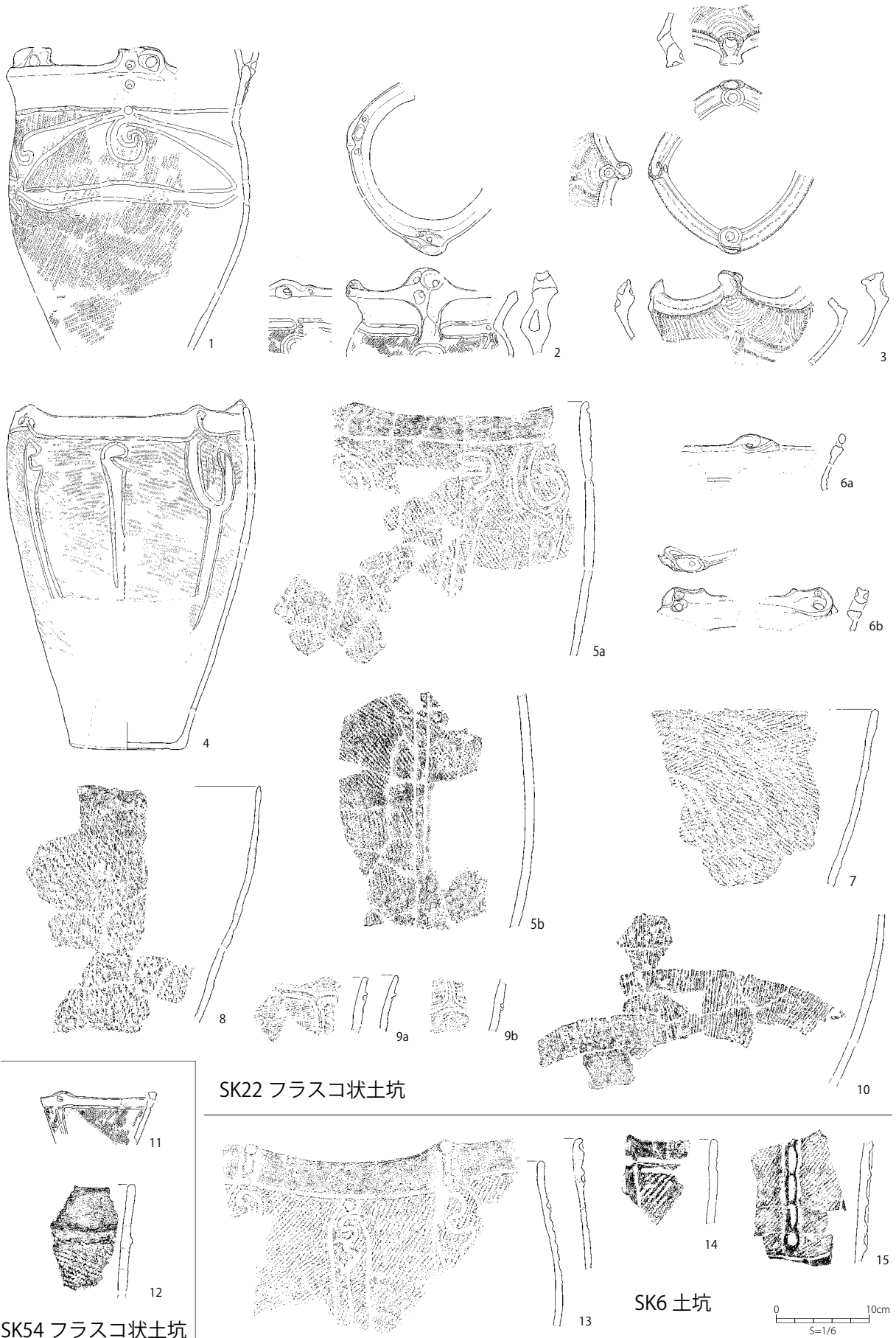
SK62 フラスコ状土坑出土土器 深鉢(第206図34)がある。波状口縁で、地文は磨消縄文(R)である。口縁部無文帯の波状口縁の頂部下に逆C字状隆沈線文と円形刺突文を施文する。

SK22 フラスコ状土坑出土土器 深鉢(第207図4・5・7～10)、鉢(第207図1・2・6)、注口付浅鉢(第207図3)がある。1は胴部上半が膨らみをもち、頸部がくの字状に外折して口縁部が外傾する。口唇部の内外面に粘土帯が貼り付けられて肥厚し、突起をもつ。地文は磨消縄文(LR)である。口縁部は無文帯で突起部に貫通孔および盲孔が施文され、胴部との境を一条の沈線文で区画する。文様は胴上部に沈線で渦付三角文を施文する。2は胴部上半が膨らみをもち、頸部がくの字状に外折して口縁部が外傾する。口唇部の内外面に粘土帯が貼り付けられて肥厚し、突起と橋状把手をもつ。地文は磨消縄文(LR)である。口縁部は無文帯で突起部と把手部に貫通孔および円形盲孔が施文され、胴部との境に沈線による方形区画文を施文する。方形区画文の開口部には3～4か所の円形盲孔が施文され、胴部で渦付三角文に転じるようである。3は波状口縁で胴部が外傾して立ちあがり、口縁部が内傾する。上面観は丸みのある方形を呈する。波状口縁の頂部にS字状、8の字状突起をもち、口縁部に鎖状沈線文を施文する。また、突起部から口縁部と胴部の境にかけての稜上に細かい爪形文による加飾隆帯を施文する。胴部文様は細かい連続爪形文で区画され、区画内に弧状の多条沈線文を充填する。外面の全面と内面の胴部に帯状に炭化物の付着がみられる。4は波状口縁で口縁部から胴部まで内湾する。地文は磨消縄文(L)である。口縁部無文帯に波状口縁の頂部から逆ノの字状に垂下した1条の沈線文が口縁部と胴部の境を区画する沈線文に転じる。逆ノの字状沈線文の始点には円形盲孔を施文する。胴部には沈線による蕨手文とU字状文を垂下させる。5は波状口縁で口縁部から胴部まで内湾する。地文は磨消縄文(RL)である。口縁部無文帯に波状口縁の頂部から逆ノの字状に垂下した1条の沈線文が口縁部と胴部の境を区画する沈線文に転じる。逆ノの字状沈線文の始点と口縁部を区画する沈線の上に円形盲孔を施文する。胴部には沈線による蕨手文とU字状文を垂下させる。6は口縁部に貫通孔のある突起をもち、口縁部無文帯と胴部の境を沈線文で区画する。7は口縁部から胴部まで内湾し、地文の縄文(LR)のみを施文する。8は口縁部から胴部まで内湾し、地文の網目状撚糸文のみを施文する。9は波状口縁で口縁部がやや外傾する。地文は縄文(LR)で円形刺突付隆線文と沈線文により方形区画を形成するようである。10は地文の撚糸文(R)のみを施文する。

SK54 フラスコ状土坑出土土器 深鉢(第207図11・12)がある。11は平口縁で胴部が直線的に外傾し、口縁部に貫通孔と盲孔のある突起をもつ。口縁部無文帯と胴部の境を1条の沈線文で区画し、胴部に平行沈線文と鎖状沈線文を垂下させる。12は縄文(RL)を地文として口縁部無文帯との境を1条の隆線文で区画する。

SK6 フラスコ状土坑出土土器 深鉢(第207図13～15)がある。13は波状口縁で胴部が内湾し、口縁部がわずかに外反する。地文は磨消縄文(LR)である。口縁部無文帯に波状口縁の頂部から沈線入隆線文を施文し、胴部との境を1条の沈線文で区画する。胴部には沈線による蕨手文を垂下させる。沈線入隆線文の上下端と蕨手文の始点にボタン状貼付文を施文する。14は波状口縁で地文は磨消縄文(LR)である。口縁部の狭い無文帯と胴部の境を2条の沈線文で区画し、波状口縁の頂部下にボタン状貼付文を施文する。胴部には平行沈線文を垂下させる。15は縄文(LR)を地文とする。胴部に沈線による方形区画をもち、区画内に鎖状隆線文を垂下させる。

SK92 フラスコ状土坑出土土器 深鉢(第208図1・3～6・8)、鉢?(第208図2)、壺(第208図7)



第207図 II群土器(2)

がある。1は平口縁で口縁部から胴部まで内弯する。地文は撚糸文(R)である。口縁部の狭い無文帯と胴部の境を1条の沈線文で区画し、胴部に不規則な短沈線文を施文する。底部は無文(ミガキ)である。2は胴部上半が膨らみをもち、頸部がくの字状に外折して口縁部が外傾する。無文(ミガキ)で口縁部に貫通孔のある突起をもつ。3は波状口縁で、地文は磨消縄文(RL)である。口縁部無文帯と胴部の境を1条の沈線文で区画し、胴部に沈線による蕨手文を垂下させる。4は縄文(LR)を地文とし、口縁部無文帯と胴部の境を2条の沈線文で区画する。上位の沈線上にボタン状貼付文を施文し、下位の沈線上からS字状沈線文を垂下させる。5は地文の網目状撚糸文(R)のみを施文する。6は平口縁で胴部から口縁部まで直線的に外傾する。口唇部の内外面には粘土帯が貼り付けられて肥厚し、貫通孔のある突起をもつ。口縁部無文帯と胴部の境を1条の沈線文で区画し、胴部に蕨手文と結節文を垂下させる。7は胴部に膨らみをもち、円形刺突付隆線文と沈線による方形区画を施文し、方形区画内に沈線による蕨手文を斜位に施文する。8は波状口縁で、口縁部から胴部まで内弯する。地文は磨消縄文(LR)である。口縁部無文帯に波状口縁の頂部下に逆C字状沈線文と円形盲孔を施文し、口縁部無文帯と胴部の境を1条の沈線文で区画する。胴部には沈線による蕨手文を垂下させる。

SK7 フラスコ状土坑出土土器 深鉢(第208図9~12)がある。9は波状口縁の頂部下に沈線付隆線文とその上下端に盲孔を施文する。地文は縄文(LR)である。口縁部無文帯と胴部の境を刻目付隆線文で区画し、胴部に沈線区画と鎖状沈線文を下垂させる。10は波状口縁で縄文(RL)を地文とする。口縁部無文帯に波状口縁の頂部から逆ノの字状に垂下した1条の隆線文が口縁部と胴部の境を区画する隆線文に転じる。波状口縁の頂部下の内外面に盲孔を施文し、胴部に沈線文を施文する。11は磨消縄文(LR)を地文とし、口縁部無文帯と胴部の境を1条の沈線文で区画する。胴部に沈線によるU字状文を垂下させる。12は胴部が内弯し縄文(LR)を地文とする。底部は無文(ミガキ)である。

柱穴(P318)出土土器 深鉢(第208図13)がある。緩やかな波状口縁で地文は磨消縄文(LR)である。口縁部無文帯の波状口縁の頂部下に円形刺突付隆線文を施文し、口縁部無文帯と胴部の境を1条の沈線文で区画する。胴部には沈線によるU字状文が施文されるようである。

遺構外出土土器 深鉢(第208図14~28)がある。14は口縁部に貫通孔のある突起をもち、突起部の外面に沈線文と盲孔、内面に盲孔を施文する。口縁部の外面に2条、内面に1条の沈線文を施文し、外面の胴部に鎖状沈線文を施文する。15は縄文(LR)を地文とし、貫通孔のある突起をもつ。口縁部無文帯と胴部の境を1条の沈線文で区画し、沈線上にボタン状貼付文を施文する。胴部に沈線文を垂下させる。16は円形盲孔と沈線文を施文する。17は把手部に円形隆線貼付文を施文する。18は口縁部に方形渦状沈線文と盲孔を施文し、胴部との境を1条の沈線文で区画する。また、胴部に鎖状刺突文を施文する。19は網目状撚糸文(R)を地文とする。口縁部無文帯にC字状沈線入貼付文を施文し、胴部との境を刺突入隆線文で区画する。20は磨消縄文(LR)を地文とする。口縁部無文帯に( )状沈線文と盲孔を施文し、胴部との境を1条の沈線文で区画する。21は磨消縄文(RL)を地文とする。口縁部無文帯と胴部の境を1条の沈線文で区画し、胴部に沈線による蕨手類似文を施文する。22~24は外面に炭化物の付着がみられる。22は口縁部が外反し、縄文(LR)を地文とする。23は胴部が内弯する。磨消縄文(RL)を地文とし、沈線による蕨手文を施文する。24は地文の撚糸文(R)のみを施文する。25は口縁部に橋状把手を付加し、胴部に連続刺突文を施文する。26は連続刺突文を施文する。27は口縁部が強く外反する。磨消縄文(RL)を地文とし、口縁部に平行沈線文を施文する。28は磨消縄文を地文とし、沈線による区画内に刺突文を施文する。

### C. III群土器(晩期中葉)

皿(第135図1)、鉢(第16図14~17)、鉢?(第16図20・21)、浅鉢(第16図18・19)、台付鉢(第16図22)がある。いずれも遺構に伴う遺物ではない。皿(第135図1)は縄文(LR)を地文とし、雲



第208図 II群土器 (3)

形文を施文する。瘤付で口縁部の内面に沈線文を施文する。内外面に漆状物質の付着がみられる。鉢(第16図14)は彫去による小波状口縁をもつ口縁部破片で、2条の平行沈線で区画された狭い文様帯に細かい刻み目を施す。地文は縄文(L)である。ほかに沈線文や撚糸文を施すもの(第16図16・17)があり、地文は縄文(LR・RL)である。浅鉢(第16図18・19)は体部破片で、雲形文を施文する。地文は縄文(LR)である。台付鉢(第16図22)は脚部の破片で、隆線文がみられる。地文は無文でミガキ調整を施す。

②編年的位置づけと地域性

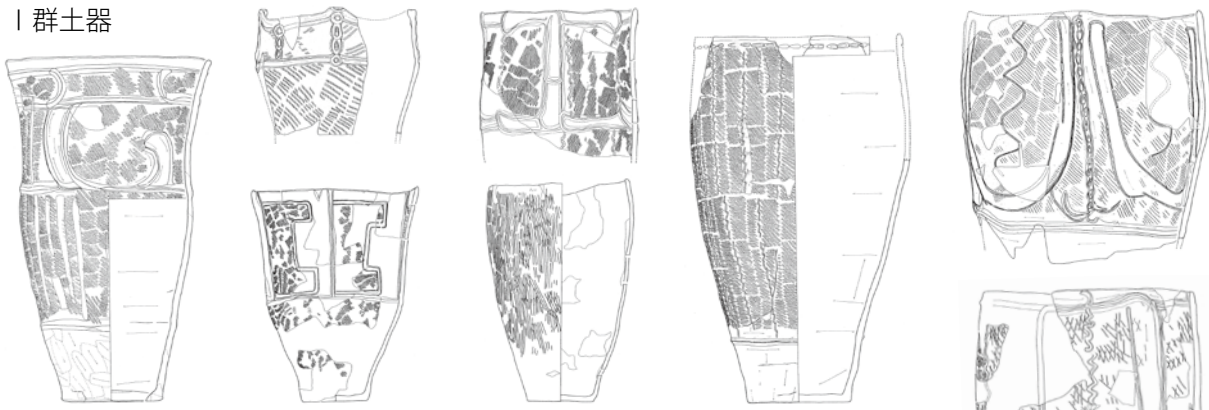
A. I群土器 (中期中葉)

I群土器の類例は仙台市高柳遺跡II群土器(仙台市教育委員会1995a)、上野遺跡(仙台市教育委員会1989・2010)、大和町勝負沢遺跡II群土器(宮城県教育委員会1982a)、川崎町中ノ内B遺跡出土土器(宮城県教育委員会1987a)、七ヶ宿町小梁川遺跡(宮城県教育委員会1987b)などにみられ、これらは中期中葉の大木8b式(山内1937、丹羽1989)に位置づけられている。このことから、I群土器は中期中葉の大木8b式に位置付けられる。なお、資料の制約からI群土器の地域性については検討できない。

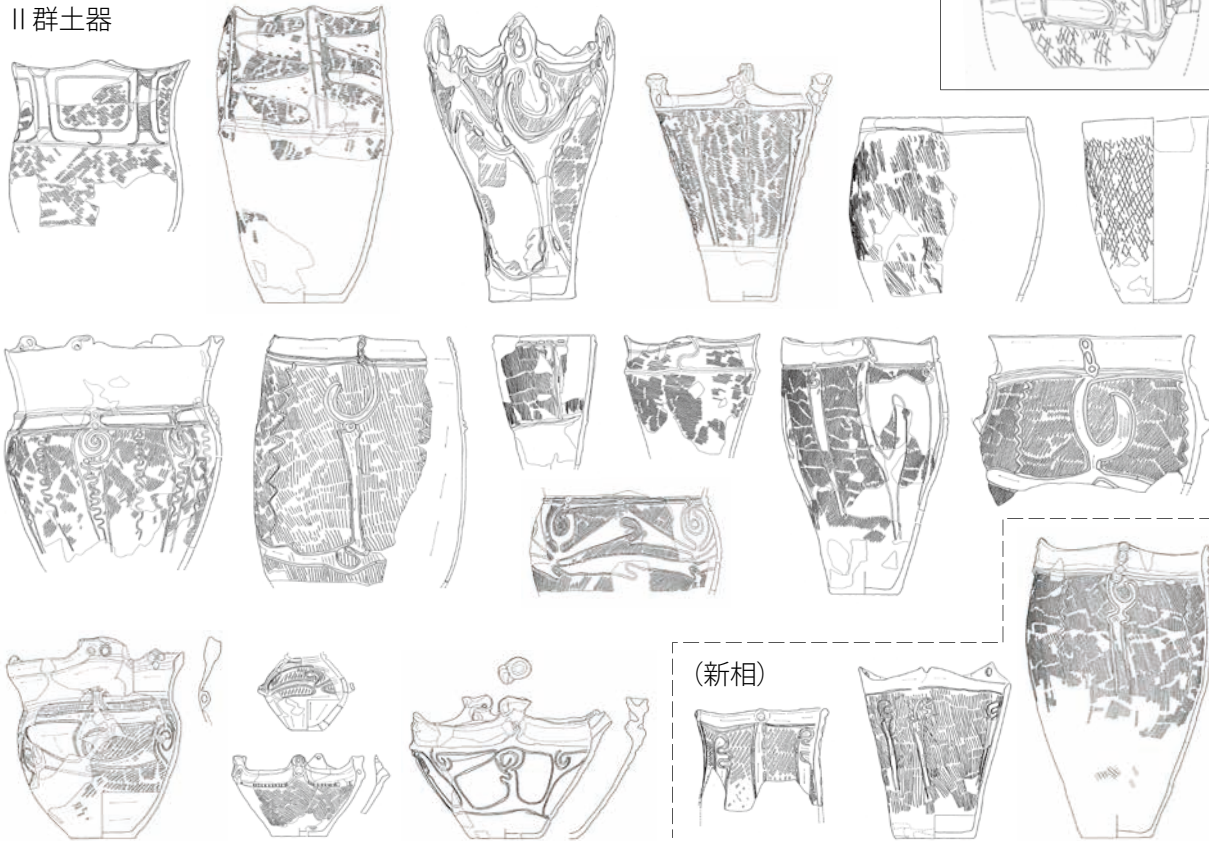
B. II群土器 (後期初頭～前葉前半)

II群土器の類例 蔵王町二屋敷遺跡II群土器(第211図、宮城県教育委員会1984)、仙台市六反田遺跡I・II群土器(第209図、仙台市教育委員会1987)、下ノ内浦遺跡III群土器(仙台市教育委員会1996a)、

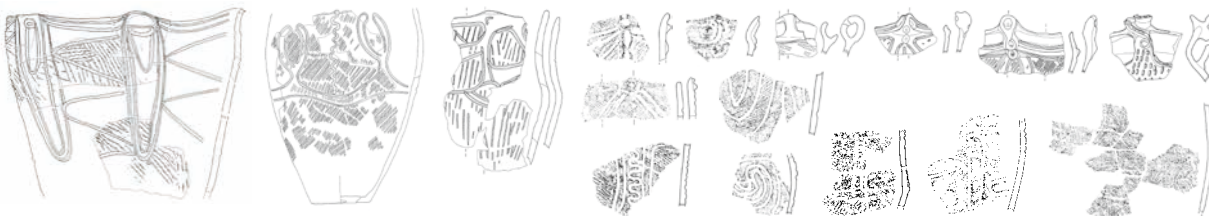
I 群土器



II 群土器



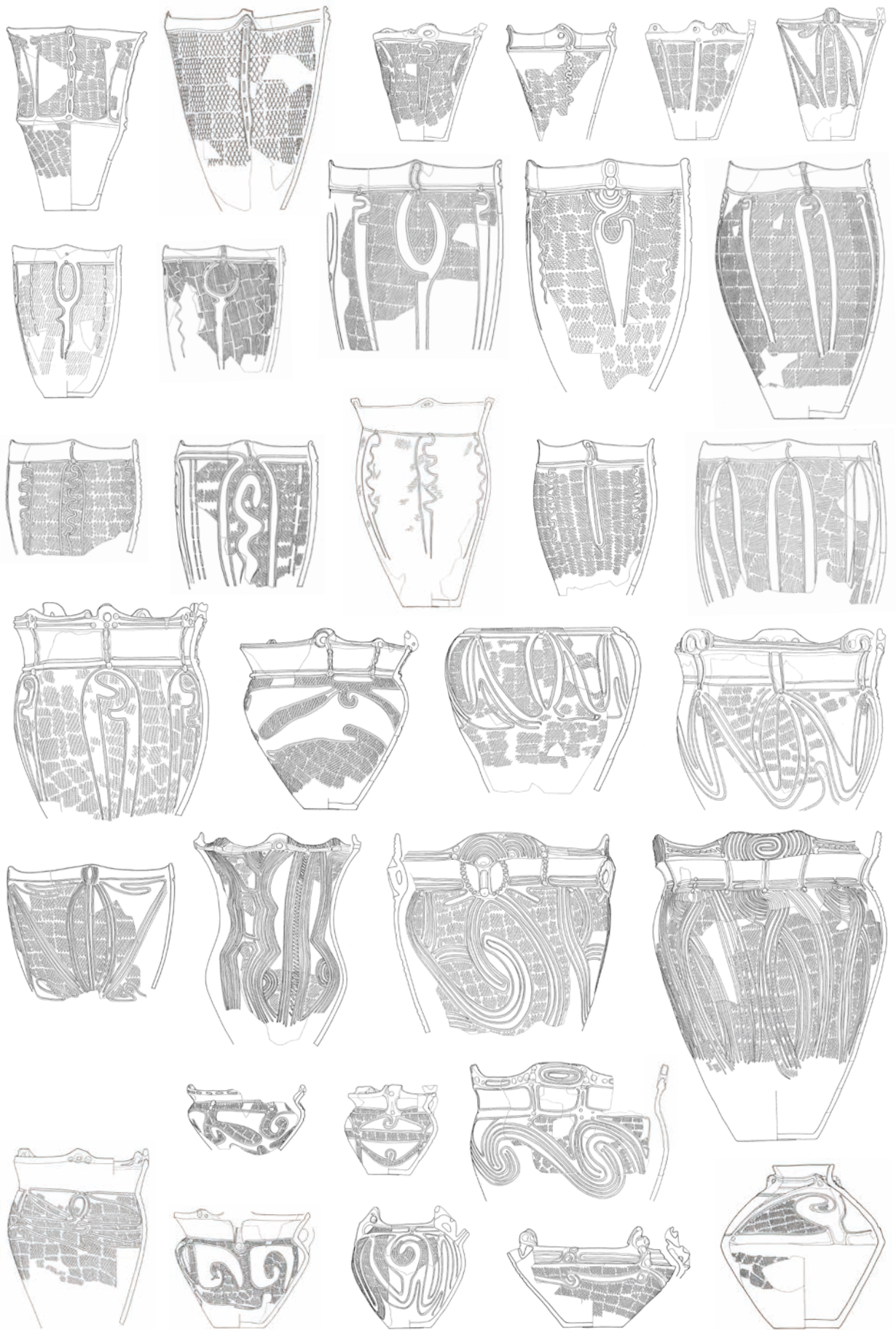
第 209 図 仙台市六反田遺跡 I・II 群土器 (仙台市教育委員会 1987、S=1/10)



第 210 図 仙台市梨野 A 遺跡 VIII 群土器 (仙台市教育委員会 1983、S=1/10)

梨野 A 遺跡 VIII 群土器 (第 210 図、仙台市教育委員会 1983)、石巻市南境貝塚 7 トレンチ 9～11 層出土土器 (第 212 図、後藤 2004)、福島県新地町三貫地貝塚 II 群土器 (第 213 図、福島県立博物館 1988)、いわき市大畑貝塚出土土器 (馬目 1975) などに見られる。

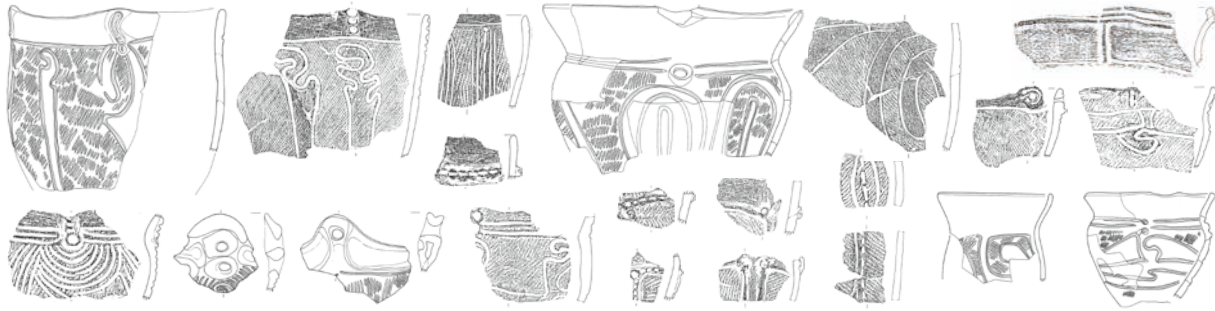
SK28 出土土器のうち、網目状撚糸文を地文とし、鎖状隆線文と沈線文で方形区画を形成する第 206 図 1 の類例は六反田 I 群に主体的に組成し、六反田 II 群、二屋敷 II 群に少数組成している。また、口縁部に 8 字状隆線文、ボタン状貼付文を施文し、胴部に垂下させた U 字状文が中位で横方向に展開して



第211図 蔵王町二屋敷遺跡II群土器 (宮城県教育委員会 1984、S=1/10)



第 212 図 石巻市南境貝塚 7 トレンチ 9～11 層出土土器 (後藤 2004、S=1/10)



第 213 図 福島県新地町三貫地貝塚 II 群土器 (福島県立博物館 1988、S=1/10)

方形区画を形成し、区画内にジグザグ文を垂下させる第 206 図 2 の類例は、六反田 II 群、梨野 A VIII 群にみられる。

SK6・13・19・22・56・82・92 出土土器などにみられる胴部に蕨手文・U 字状文を垂下させる深鉢の類例は二屋敷 II 群、六反田 II 群、三貫地 II 群、南境 7 T 9～11 層などにみられる。第 206 図 17・27～33、207 図 4・5・13、第 208 図 3・6・8 など全般に二屋敷 II 群または三貫地 II 群との類似性が強く認められるが、第 206 図 21、207 図 13 は南境 7 T 9～11 層、207 図 4、208 図 6 は六反田 II 群との類似性が強い。また、蕨手文を横位に施文する第 206 図 26 は三貫地 II 群に類例がみられる。

SK22 出土土器のうち、貫通孔と盲孔のある把手を付加し、胴上部に渦付三角文を施文する第 207 図 1・2 は六反田 II 群、二屋敷 II 群に類例がみられ、六反田 II 群では本例と共通性の高い鉢 I a 類に渦付三角文が多用されている。

SK56 出土土器のうち、2 条のジグザグ文を垂下させる第 206 図 22 は三貫地 II 群、大畑などに類例が多くみられる。SK62 出土土器のうち、逆 C 字状隆沈線文と円形刺突文を施文する第 206 図 34 は三貫地 II 群、二屋敷 II 群、南境 7 T 9～11 層などに類例がみられる。

遺構外出土土器のうち、貫通孔と盲孔のある突起をもち沈線文と鎖状沈線文を施文する第 208 図 14 は、南境貝塚 8 T 7・8 層などに類例がみられる。

これらは南境式 (伊東 1957)、宮戸 I b 式 (後藤 1956・1957・2004・2005)、六反田式 (柳澤 1992・1996)、綱取 I・II 式 (馬目 1968・1970・1975)、称名寺式 (吉田 1960)、堀之内 I 式 (山内 1937) 併行期に位置づけられているものに概ね相当する。このことから、II 群土器は後期初頭～前葉前半期に位置づけられる。より仔細に見れば、SK28・SK79 出土土器は後期初頭に近い様相を残し、このほかは後期前葉前半期の様相を良く示していることが指摘できる。

周辺地域における後期初頭～前葉の土器編年と II 群土器の位置づけ これまで南境式として一括されてきた宮城県域の後期初頭～前葉の土器群についてはいくつかの細分案が提示され、さらに宮城県北部と中央部、南部地域ではそれぞれ文様構成などに独自性がみられることが指摘されている。

県南地域の二屋敷遺跡では後期前葉の土器群を 3 群に分類し、柴田町向畑遺跡 2・3 層 (菅生田遺跡)



段階（二屋敷Ⅰ群土器）→二屋敷Ⅱ群土器段階→二屋敷Ⅲ群土器段階の変遷が提示されている。県北との違いは向畑段階から二屋敷Ⅱ群段階にかけて顕著にみられる。すなわち、向畑段階では地文に県北で目立つ撚糸文が少なく、胴部文様は県南では渦状・弧状を基本とした文様であるのに対し、県北では胴上部に「八」字状文を施文するものが多いこと、二屋敷Ⅱ群段階ではやはり地文に撚糸文が少なく、胴部文様は蕨手文が圧倒的多数を占め縦長単位文様との比率が県北と逆転していることなどが指摘されている（宮城県教育委員会 1984）。

仙台平野南部の六反田遺跡では後期初頭～前葉の土器群を2群に分類し、方形区画文を代表とする六反田遺跡Ⅰ群土器から、磨消手法を伴う蕨手文を主体とする六反田遺跡Ⅱ群土器への変遷が明らかにされている（仙台市教育委員会 1987）。六反田Ⅰ・Ⅱ群に対応する土器は仙台市梨野A遺跡でも確認され、前者に梨野AⅦ群、後者に梨野AⅧ群が対応する（仙台市教育委員会 1983）。六反田Ⅰ群は県南地域の向畑3層、二屋敷Ⅰ群との対応が考えられているが、六反田Ⅰ群を特徴づける方形区画文は県北・県南では主体とならず、名取川水系など県中部で卓越した文様である可能性が指摘されている。六反田Ⅱ群は県南地域の向畑2層、二屋敷Ⅰ群の一部と二屋敷Ⅱ群の一部との対応が考えられている。柳澤清一は六反田Ⅰ群に類する土器のうち方形またはD字形モチーフの一部を貫入させたり、描線を挿入する手法を盛んに用いるものを六反田（古）式と呼び、これを仙南地方における後期の始まりの土器に位置づけている（柳澤 1992・1996）。

また、六反田遺跡に隣接する下ノ内浦遺跡では、下ノ内浦Ⅲ群土器を六反田Ⅰ・Ⅱ群より後出の後期前葉に位置づけ、二屋敷Ⅱ群に対応させている（仙台市教育委員会 1996a）。下ノ内浦Ⅲ群には六反田Ⅰ・Ⅱ群にはみられなかった多条沈線文が加わる。また、基本的な器形と文様構成は二屋敷Ⅱ群とほぼ同様であるが、渦付三角文が僅少であること、蕨手文が少ないこと、連続S字文や山形文（二屋敷での「八」字状文）が多用されること、連続楕円文が存在すること、地文に撚糸文が多用され縄文との割合が半々となることなどが相違点として指摘され、県南・県北両方の要素をもつ土器群と位置づけられている。

県北地域では後藤勝彦が南境貝塚7・8トレンチの層位的調査成果をもとに7トレンチ12～13層・8トレンチ9層を宮戸Ⅰb式より古い土器群、7トレンチ9～11層・8トレンチ7～8層を宮戸Ⅰb式、7トレンチ6～8層・8トレンチ4～6層を宮戸Ⅰb式より新しい土器群に位置づけている（後藤 2004・2005）。宮戸Ⅰb式より古い土器群は隆起線による装飾やボタン状凹部（突起）、隆起線状に施される二個連鎖の刻目、宮戸Ⅰb式は磨消手法を伴う倒卵形状の沈線文が特徴とされ、宮戸Ⅰb式より新しい土器群は退化した倒卵形の沈線文、2～3本単位の沈線を頸部から胴部に放射状に施文するもの、縦3本の沈線を基本に頸部から胴部に重弧文、同心円文、S字、弧状、渦巻文が充填されるものの3種類に大別されている。

石巻市山居遺跡出土土器（宮城県教育委員会 2007）の分類をもとに中期末葉～後期前葉の土器編年を検討した相原淳一は、山居遺跡Ⅶ群土器を後期初頭、Ⅳ～Ⅵ群土器を後期前葉に位置づけ、山居Ⅶ群→Ⅵ群→Ⅴ群→Ⅳ群の変遷を提示している（相原 2009）。これによると、Ⅶ群は隆線による装飾や隆線文の交点部分に施される二個一対の刻目文が特徴である。大木10式（山内 1937）の一部（藤沼 1972、宮城県教育委員会 1969、宮城県 1981、須藤 1985）、門前式（小友式）（江坂 1956、江坂ほか 1959、吉田 1960）、宮戸Ⅰa式（後藤 1957）、観音堂式（大迫町教育委員会 1986、本間 1994）などに該当し、県南地域の向畑段階との並行関係が指摘されている。Ⅵ群は胴部に施される隆線による装飾や隆線文の交点部分に施されるボタン状貼付文、隆線状に連続刺突を施す鎖状隆線文が特徴である。袖窪式（林 1965）あるいは袖窪Ⅰ式・Ⅱ式（小笠原 1993）に該当し、県南地域で確認されている称名寺遺跡2群土器（吉田 1960、相原 2008）との並行関係が指摘されている。Ⅴ群は1～3本の沈線による懸垂文を特徴とし、後期前葉の南境式の一部、宮戸Ⅰb式に該当する。福島県の綱取Ⅱ式の前半期、

千葉県の堀之内Ⅰ式の前半期と多くの共通点を持ち、とくに宮城県中南部ではその傾向の強いことが指摘されている。Ⅳ群は多条沈線文や磨消縄文を特徴とし、後期前葉の南境式の一部、宮戸Ⅰb式より新しい土器群に該当する。福島県の綱取Ⅱ式の後半期、千葉県の堀之内Ⅰ式の後半期と多くの共通点をもつことが指摘されている。

綱取Ⅰ・Ⅱ式の変遷について検討した本間宏は、二屋敷Ⅱ群土器を綱取Ⅱ式古・中・新の各段階に対応させている。すなわち、古段階は口縁部直下にC字状ないしノの字状の単位文を加える綱取Ⅰ式の伝統が残り、胴部文様は磨消手法を伴う蕨手状文や波状入組文を特徴とする。中段階は胴部文様に磨消手法と蕨手文が消失して2～3条一組の沈線で文様が構成され、口縁部直下のノの字状単位文は複数の短沈線で表現される。新段階では、口縁部無文帯が収縮するものがみられるようになり、胴部文様を構成する沈線は3～4条一組のものが増え、弧線文が下降する文様構成が主流となることが指摘されている(本間2008)。

このように、後期初頭～前葉の土器編年は、関東地方においては称名寺Ⅰ群→称名寺Ⅱ群→堀之内Ⅰ式、福島県域では綱取Ⅰ式→綱取Ⅱ式の変遷が明らかとなっている。宮城県北部～岩手県南部では、南境式の細分により門前式→袖窪式→宮戸Ⅰb式→宮戸Ⅰb式より新しい一群の変遷が整理された。また、宮城県中央部では六反田Ⅰ群→六反田Ⅱ群→下ノ内浦Ⅲ群の変遷が明らかとなり、六反田Ⅰ・Ⅱ群については六反田(古・新)式が提唱されている。これらの各地域では、宮城県北部と南部での地文における撚糸文と縄文の比率や、宮城県北部での倒卵形状の沈線文、宮城県中央部での方形区画文、宮城県南部～福島県での蕨手文といった胴部文様に表出されるように、隣接地域と相互に関連を持ちながらも独自性のある土器群を形成していたことが分かる。

本遺跡Ⅱ群土器は、地文に縄文を主体に少数の撚糸文を用いること、胴部文様には蕨手文とU字状文を主体に、渦付三角文、方形区画文などを用いることが特徴である。このことから、本遺跡Ⅱ群土器は宮城県北部地域の宮戸Ⅰb式の一部、宮城県中央部地域の六反田Ⅱ群の一部などとの関連を持ちながら、二屋敷Ⅱ群、三貫地Ⅱ群、大畑など宮城県南部～福島県地域に成立した綱取Ⅱ式およびその影響を比較的強く受ける土器文化圏に属していたものと考えられる。また、前述の本間の変遷観に従えば、二屋敷Ⅱ群に含まれる多条沈線による文様構成がみられないことから、本遺跡Ⅱ群土器は綱取Ⅱ式古段階に概ね相当するであろう。

**異系統土器と地域間交流** Ⅱ群土器に共伴して出土した土器の中には、本遺跡周辺の型式変遷とは異なる特徴をもつ土器がみられた。ここでは、これらの特徴と類例を検討し、本遺跡における地域間交流について若干の考察を行なうこととする。

SK79出土土器のうち、波状口縁で胴部がくの字状に内折し、刺突入隆線文を施文する第206図12の類例は北上市横欠遺跡(稲野ほか1995・1997)など北上川中流域にみられ、門前式(小友式)あるいは観音堂式などと呼ばれている。門前式・観音堂式は後期初頭に位置づけられ、宮城県中・南部では門前式に相当する資料は多くないが、類似する器形は六反田Ⅰ・Ⅱ群にもみられる。

遺構外出土土器のうち、口縁部無文帯にC字状沈線入貼付文を施文する第208図19は、福島県いわき市綱取貝塚C地区出土土器(馬目1977)など福島県沿岸部に類例がみられ、綱取式に特徴的な口縁部文様である。綱取式は後期初頭～前葉に位置づけられ、六反田Ⅰ群にも伴っている。

SK22出土土器のうち、S字状、8の字状突起をもち、細かい連続爪形文と浅く幅広の多条沈線による弧状文を施文する第207図3の類例は、新潟県朝日村アチャ平遺跡上段(朝日村教育委員会2002a)、元屋敷遺跡上段(朝日村教育委員会2002b)、新津市平遺跡(新津市教育委員会1982)、新潟市上ん原遺跡(前山1994)など新潟県から福島県会津地方にみられ、三十稲場式(田中1985)と呼ばれている。これと極めて類似性の高いものが二屋敷Ⅱ群にも伴っている。なお、本例は内外面に黒色炭

化物の付着がみられるが、本例と文様の一部と器形が類似する資料が下ノ内浦Ⅲ群に伴っており、やはり内外面に黒色物質の付着がみられることから、漆を塗布していた可能性が指摘されている。また、遺構外出土土器のうち連続刺突文を施文する第208図25・26も三十稲場式に特徴的な文様である。三十稲場式は後期前葉に位置づけられ、向畑3層、菅生田、六反田Ⅱ群、下ノ内浦Ⅲ群、大畑などでも伴っている。

以上のように、Ⅱ群土器に伴う異系統土器として北上川流域の門前式、福島県沿岸部の綱取式、新潟県から福島県会津地方の三十稲場式が認められた。これらの異系統土器は上述の通りこれまでも宮城県地域で複数の共伴事例が報告されている。特に、三十稲場式については宮城県中・南部～福島県沿岸部においては、数は数個体と少ないものの多くの遺跡で共伴しており、当時の地域間交流を考える上で重要と考えられる。

なお、こうした異系統土器の搬入の可能性について考察することを目的の一つとして、土器胎土分析（第5章第2節）を実施した。この結果、Ⅱ群土器に伴う門前式、綱取式、三十稲場式土器のすべてが在り地型式の土器と同様の鉱物・岩石組成を示し、本遺跡周辺で製作された可能性が高いとの判断が提示された。このことは、器形や文様による型式学的な差異に加えて胎土や器面の質感からも明確に在り地型式の土器と区別される土器であっても、在り地で製作された可能性があり、搬入品と即断できないことを示している。在り地型式の土器と同じ場所で製作された土器であっても、粘土と砂などの混和剤の調合や器面の調整、焼成の方法などの違いから胎土や器面に異なる質感を生じている可能性が考えられる。このことは今後より多くの地域での分析事例の蓄積を待って検討を重ねる必要があるが、異系統土器をめぐる人やモノの地域間交流を考察する上で興味深い事実として指摘しておきたい。

### C. Ⅲ群土器（晩期中葉）

Ⅲ群土器の類例は大和町摺萩遺跡出土土器（宮城県教育委員会1994）、石巻市南境貝塚7トレンチ1～2層出土土器（後藤2004）、大崎市中沢目貝塚C地点出土土器（須藤編1984）、岩手県北上市九年橋遺跡出土土器（北上市教育委員会1977～1991）などにみられ、これらは晩期中葉の大洞C1式（山内1930・1932、藤沼1989）に位置づけられている。このことから、Ⅲ群土器は晩期中葉の大洞C1式に位置づけられる。なお、資料の制約からⅢ群土器の地域性については検討できない。

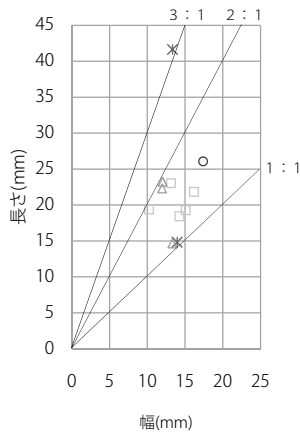
## （2）石器

石器は268点が出土した。このうちツールは128点で、石鏃、石匙、石錐、彫刻刃形石器、スクレイパー、ピース・エスキュー、二次加工剥片、微細剥離痕を有する剥片、磨製石斧、擦痕のある石製品、磨石、凹石、磨石／凹石の複合石器、磨石／凹石／敲石の複合石器、石皿、棒状石製品があり、ほかに石核16点、剥片124点がある。剥片石器類で接合関係が認められたものはない。竪穴住居跡およびフラスコ状土坑のほか、遺構外から出土したものが多量に多い。遺構内から出土したものについては、共伴する土器の年代から縄文時代後期初頭～前葉前半期のものと考えられる。また、遺構外から出土したものについてその所属年代を特定することは困難であるものの、出土土器と遺構配置などからみて本遺跡での活動が後期前葉にほぼ限定されると考えられることから、石器についてもこれに伴うものと考えられることができる。なお、土器の場合と異なり、前後の時期の微量の混入品を区別することはできなかった。ここでは、出土石器のすべてが後期初頭～前葉前半期に帰属する石器群と仮定して器種構成、技術、石材について検討し、本遺跡における石器の製作と使用について考察する。

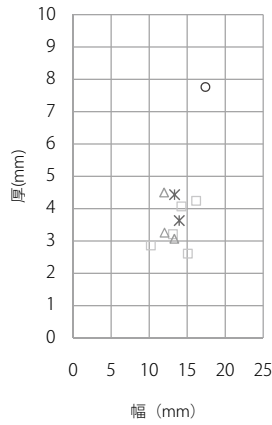
### ① 出土石器の器種と類型

#### A. 石鏃

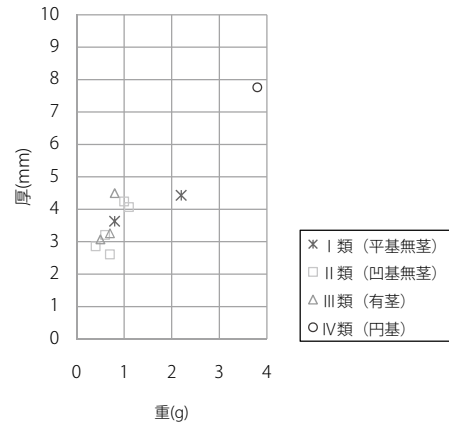
11点出土し、ツールの8%を占める。石材は珪質頁岩6点、黒曜石2点、玉髓1点、玉髓質珪化木1点、珪化凝灰岩1点である。基部形態から平基無茎（Ⅰ類）、凹基無茎（Ⅱ類）、有茎（Ⅲ類）、円基（Ⅳ類）



第 214 図 石鏃の長幅値



第 215 図 石鏃の幅厚値



第 216 図 石鏃の最大厚と重量

に、Ⅰ～Ⅲ類はさらに平面形から寸詰まりのもの（a類）、長身のもの（b類）に分類できる。

- |                |                      |                  |
|----------------|----------------------|------------------|
| Ⅰ類：2点          | Ⅰa類：1点（第147図5）       | Ⅰb類：1点（第147図1）   |
| Ⅱ類：5点          | Ⅱa類：4点（第147図3・4・6・9） | Ⅱb類：1点（第147図2）   |
| Ⅲ類：3点          | Ⅲa類：1点（第147図10）      | Ⅲb類：2点（第147図7・8） |
| Ⅳ類：1点（第147図11） |                      |                  |

長幅値（第214図）は最大長14～24mm、最大幅10～17mmの範囲に集中する。Ⅰ～Ⅲ類の主体がこの範囲に含まれ、Ⅳ類はやや大形である。長幅比では1：1～2：1の範囲に集中する。Ⅰ類にはほぼ1：1のものとは3：1を超える長身のものがあるが、幅の変異は小さい。Ⅲ類はやや細身の傾向がみられる。最大厚（第215図）は2.6～4.5mm、重量（第216図）は0.4～1.0gの範囲に集中し、Ⅰ～Ⅲ類の主体がこの範囲に含まれるが、Ⅳ類は厚さ・重量ともに大きな値となっている。

各類型とも薄手で湾曲の少ない剥片を素材として、ほぼ全面に両面調整を施すものが多いが、Ⅱa類では調整加工が縁辺にとどまり、両面に素材面を大きく残すものがある。Ⅳ類は先端部と基部に調整加工が施されるが、両面に素材面を多く残している。Ⅰ・Ⅲ類は側縁が直線的で平面形が三角形を呈し、最大厚が基部付近に位置するのに対し、Ⅱ類では側縁が膨らみをもち平面形が滴形を呈し、最大厚が器体中位に位置する。Ⅱ類の側縁形状は、挟入部の作出によって強度が減少する基部付近の補強が意図された可能性がある。調整加工は打点が明瞭で細長くのびる剥離面の状態から、押圧剥離によるものと考えられる。第147図1は二次加工部が素材面よりも強い光沢を有し、押圧剥離に際して加熱処理を行なった痕跡の可能性がある。第147図1・2・8は平行する剥離によって器面が平滑に整形されており、製作者の技術的習熟度が高い。8はさらに両側縁が鋸歯状に調整されている。

石鏃の形態と機能の関係については、石鏃が矢の先端に装着される部品であり、着柄される柄とのバランスが重要であったと考えられることから、個々の形態変異および重量の多寡がそれぞれ異なる用途と結びつくとは考え難い。石鏃の形態差は主に基部の作出方法によるものであるが、気仙沼市田柄貝塚（宮城県教育委員会1986）では有茎石鏃・無茎石鏃ともにアスファルトによる装着痕跡が確認され、アスファルトの付着状況から①有茎石鏃の茎部のみを固定、②茎部と身部を固定、③有茎・無茎石鏃の身部全体を挟み込むように固定、④無茎石鏃の基部から身部の中央部までを挟み込んで固定する方法が推定されている。大崎市中沢目貝塚（須藤編1984）では、凹基無茎石鏃が骨角製の根挟みの二又部にアスファルトで固定された状態で出土している。このような各種の装着法に応じて、形状や素材の異なる柄が準備されたと考えられる。

## B. 石匙

1点出土している（第148図2）。珪質頁岩製で、縦長剥片の打面部につまみを作出した縦形石匙である。

側縁は一方が外湾し、一方は直線的であり、背面側の全面に調整剥離が施される。外湾する側縁の腹面側には急角度剥離が施され、これを打面として背面側に細長く平行する調整剥離が施されている。調整加工は打点が明瞭で細長くのびる剥離面の状態から、押圧剥離によるものと考えられる。

栗原市山王団遺跡（楠本 1973）では横形石匙のつまみ部に紐が巻き付いた状態で出土し、気仙沼市田柄貝塚（宮城県教育委員会 1986）では縦形・横形石匙のつまみ部に帯状にアスファルトの付着が観察されていることから、石匙のつまみ部には紐状のものが巻き付けられていたことが分かっている。

石匙の機能については、その形態から動物の解体・加工具と推定されてきたが、仙台市三神峯遺跡出土石匙について使用痕分析に基づく機能推定を行なった梶原洋によって、縦形・横形石匙には機能的に大きな差はなく、被加工物は皮・肉・角・骨などの動物質のものほか、木や草といった植物など多様であることが指摘され、携帯する万能道具としての認識が定着している（梶原 1982）。また、東北地方と関東甲信越地方の石匙の使用痕分析結果について検討した高橋哲によれば、石匙が出現する中期中葉以降晩期まで、旧石器時代にはみられなかった草本植物のカットングを示す使用痕が確認されていることから、石匙の用途の一つとして草本植物のカットング作業が重要な位置を占めていたことを指摘している（高橋 2007）。

### C. 石錐

1点出土している（第148図1）。珪質頁岩製で、素材剥片の末端側に背面の稜を利用してV字状の錐部を作出している。錐部の横断面形は算盤形である。

### D. スクレイパー

5点出土し、ツールの3%を占める（第148図3～7）。いずれも珪質頁岩製で、素材剥片の側縁に連続的な調整加工を施すことにより直線的に整形している。調整加工が一側縁のみに施されるもの（I類）と、二側縁の調整加工が収斂し端部がV字状となるもの（II類）に分類できる。

I類：3点（第148図3・6・7）

II類：2点（第148図4・5）

これらはいわゆる不定形石器であり、本遺跡と同じ後期前葉に位置づけられる蔵王町二屋敷遺跡（宮城県教育委員会 1984）においても多数出土し不定形剥片石器1類とされたものにほぼ該当する。側縁に施される調整加工は比較的急角度であり、調整加工が施された側縁に対向する側縁は素材縁辺が未加工のまま残されるものが多い。5は未加工の側縁に顕著な微細剥離痕が認められ、刃部として使用されたことが分かることから、この場合、側縁の調整加工は刃潰しとして施されたと考えられる。4・6は腹面側に数枚の平坦な剥離が施され、刃部再生の可能性がある。

### E. 彫刻刀形石器

1点出土している（第149図1）。珪質頁岩製で、縦長剥片の末端側の折断面を打面として左側縁に二条のファシット（槌状剥離）を施すことにより彫刻刀面を作出している。彫刻刀面の作出に先立って、左側縁の腹面側に調整剥離が施されている。彫刻刀形石器は後期旧石器にみられ縄文石器としては一般的ではないが、技術形態学的に後期旧石器のものと共通することから彫刻刀形石器として分類した。縁辺に微細剥離痕など肉眼で観察できる使用痕跡は認められない。

### F. ピエス・エスキーユ

5点出土し、ツールの3%を占める（第149図2～6）。石材は珪質頁岩2点、珪化凝灰岩1点、凝灰岩1点、玉髓1点である。いわゆる楔形石器で、小形の剥片の相対する二側縁に両極剥離痕が認められる。3は上下・左右方向に両極剥離痕が認められる。

ピエス・エスキーユの機能については、両端が尖って縦断面が凸レンズ状を呈すること、両端に製作と使用によると思われる微細な潰れが観察されることから、骨角器製作や石器製作で素材を分割するた

めの楔としての機能が推定されている（岡村 1976）。

### G. 二次加工剥片

36点出土し、ツールの25%を占める（第149図7～11、第150～153図）。石材は珪質頁岩17点、頁岩3点、碧玉2点、玉髓2点、黒曜石1点、凝灰質砂岩1点である。剥片に何らかの二次加工が施されているが、特定の器種に分類できない。素材剥片の形状と二次加工の施される部位および調整剥離の状態は多様である。

### H. 微細剥離痕を有する剥片

25点出土し、ツールの17%を占める（第154～156図）。石材は珪質頁岩17点、緑色凝灰岩2点、玉髓2点、碧玉1点、頁岩1点、チャート1点、流紋岩1点である。縁辺や稜上に肉眼観察で微細剥離痕が確認できる。剥片の形状と微細剥離痕が確認される部位および状態は多様であるが、微細剥離痕の状態としては連続的なもの、まばらなもの、一部に集中するものに大別できる。

剥片の微細剥離痕の成因については、縁辺を刃部として使用した結果生じた刃こぼれのほか、着柄による損傷、運搬中の石器どうしの接触による損傷、踏みつけによる損傷、水や霜柱など自然現象による損傷、剥片剥離時の偶発剥離などが想定され（御堂島 1994・1996）、これらの成因パターンは石器に残された微細剥離痕のパターンと一対一で結び付くわけではなく、現段階ではその認定は困難である。

### I. 剥片

124点出土している。石材は珪質頁岩53点、玉髓25点、黒曜石16点、頁岩9点、緑色凝灰岩7点、碧玉3点、珪化木2点、チャート2点、流紋岩2点、珪化凝灰岩1点、凝灰岩1点である。同一母岩と認められるものはほとんどなく、遺跡内での剥片剥離作業を示す痕跡は乏しい。剥片形状は多様であり、定形的な剥片生産によるものではない。単剥離打面から剥離するものが多く、剥片剥離に先立って石核調整を施すものは少ない。

### J. 石核

16点出土し、ツールの11%を占める（第157～159図）。石材は黒曜石6点、珪質頁岩5点、玉髓3点、碧玉1点、流紋岩1点である。残核形状が角柱状またはサイコロ状を呈するもの（I類）、扁平な両面体となるもの（II類）があり、II類はさらに両面が作業面となるもの（a類）、片面が作業面となるもの（b類）、相対する二側縁からの打撃によって剥片を剥離するもの（両極石核、c類）に分けられる。

I類：8点（第157図3、第158図2・3・4・5、第159図2・3・4）

II類：8点 II a類：4点（第157図1・2、第158図1、第159図1）

II b類：1点（第157図4）

II c類：3点（第157図5、第158図6・7）

石核はいずれも小形で最大計測値が5cmを超えるものはなく、剥離痕跡から推定される剥片サイズも最大長が4cm以下である。II c類はいずれも黒曜石で原石は2.5cm未満の小礫と推定される。剥片剥離にあたっては、素材がある程度大きさのある剥片または分割礫の場合はその形状に合わせて剥片が剥離され、その結果I類・II a類・II b類が、極小の礫の場合はII c類が残されたことが窺える。剥片剥離に先立つ石核調整技術はあまり駆使されず、単剥離打面からの剥片剥離を繰り返した後に打面転移を行なうものが多い。

### K. 磨製石斧

3点出土し、ツールの2%を占める（第160図）。石材は緑色泥岩2点、緑色凝灰岩1点である。第160図3は完形品で側面に面取り加工を施す定角式磨製石斧である。平面形は撥形で側縁下端に最大幅をもち、刃部は弧状を呈する。全面に入念な研磨が施され、研磨痕は正面から見て右下がりな線条痕が観察できる。肉眼観察で使用の痕跡は判別できないが、刃部正面左側が片減りした状態となってお

り、縦斧として使用された結果によるものと考えられる。1は定角式磨製石斧の折損品で基部のみ残存する。3よりも僅かに細身である。折損部は裏面側からの衝撃により折断している。磨製石斧の破損例としては刃部の欠損に次いで多くみられるものであり、着柄された状態で使用中に破損したものと考えられる。2は磨製石斧の破片で側縁を取り込んでいる。欠損した刃部の可能性がある。

#### L. 擦痕のある石製品

1点出土している（第160図4）。粘板岩製で厚さ2.4mmの板状を呈し、緩やかな弧状の縁辺をもつ。両面が研磨され、表面側には多方向の線条痕が認められる。縁辺の断面は鋭角で、縁辺に斜行する線条痕が認められる。全体の形状は不明であるが、石製品の一部と考えられる。

#### M. 磨石・凹石・敲石

15点出土し、ツールの10%を占める。礫に使用痕としての磨面・凹部・敲打痕が残されている。凹部は敲打痕の集合で、特定の場所に集中して浅い窪みをなすものである。これらの痕跡は単体で残されている場合と、複合して残されている場合とがあり、磨石8点（第161図・第162図2～4）、凹石2点（第162図1、第163図1）、磨石／凹石の複合石器4点（第163図2、第164図1・2・4）、磨石／凹石／敲石の複合石器1点（第164図3）である。

磨石は安山岩を素材としたものが6点と多く、ほかに石英安山岩1点、緑色凝灰岩1点である。平面形が最大長10～14cm程度で幅広の楕円形を呈し、やや扁平な河原石の両面に磨面のあるものが多い。第161図3は横断面形が隅丸三角形を呈し、3面に磨面がある。

凹石は玄武岩1点、安山岩1点である。第162図1は平面形が最大長15.7cmで幅広の楕円形を呈し、やや厚みのある河原石の両面に多数の凹部がみられる。第163図1は平面形が最大長6.6cmで幅広の楕円形を呈し、やや扁平な河原石の片面中央に楕円形の凹部がみられる。

磨石／凹石の複合石器は安山岩2点、砂岩2点である。平面形が最大長9.5～12.0cm程度で幅広の楕円形を呈し、やや扁平な河原石の両面に磨面と凹部がみられる。磨面と凹部のある面は重複し、凹部は各面の中央部付近に複数みられる。

磨石／凹石／敲石の複合石器は安山岩を素材とし、最大長8.5cm、最大幅6.7cm、最大厚6.8cmの握り拳状の河原石の2面に顕著な磨面が、4面に凹部がみられる。凹部の一部は磨面と重複し、面と面の境界となる湾曲部に敲打痕がみられる。

全体的な様相としては、石材は安山岩が最も多く、大きさは最大長で8.5cm～15.7cmと片手で扱えるサイズのものである。複合する使用痕跡が転用の結果によるものか、当初から複数の用途を想定したものかは不明であるが、本遺跡で確認されたような複合例は縄文時代各時期に一般的にみられることから、敲く（敲打痕）、割る（凹部）、磨り潰す（磨面）といった主に堅果類などの食料加工の一連の作業の中で使用されたものと考えられる。

池谷勝典が行なった凹石の使用痕分析に基づく機能推定によれば、凹部は先端が尖った対象物に対する敲打によって生じたものであり、クルミを割る作業に使用された敲石であると指摘されている。また、石器に残された凹部の位置関係から、片手で保持した対象物に対してもう片方の手で保持した石器を用いて打撃を加える際の動作が復元されている（池谷2004）。

なお、晩期中葉の里浜貝塚（東北歴史資料館1984）などでは赤色顔料が付着した円礫や石皿が出土しているほか、敲打痕のある礫はハンマーストーンとして石器製作に使用された可能性が考えられるが、本遺跡では顔料の加工や石器製作が行なわれたことを示す資料は確認されなかった。

#### N. 石皿

19点出土し、ツールの15%を占める（第165～171図）。敲打によって整形された周縁をもち、受け皿状を呈するもの（Ⅰ類）と、大型で扁平な板状の礫の平坦面が摩耗しているもの（Ⅱ類）がある。

Ⅱ類はさらに最大長が20cmを超える大形のもの（a類）と小形のもの（b類）に分けられる。

I類：1点（第165図3）

Ⅱ類：10点 Ⅱa類：4点（第166図、第167図1）

Ⅱb類：6点（第167図2、第168・169図、第170図1）

第165図3はI類に分類されるが、欠損品のため全体の形状は不明である。砂岩製で全体が敲打と研磨によって入念に整形され、平坦な磨面の周囲に幅2.4cm、高さ1.5cmの立ち上がりをもつ。

Ⅱa類は平面形が最大長27.7cm～35.5cmの楕円形を呈し、扁平な河原石の両面に浅く窪んだ磨面をもつ。いずれも安山岩製で重量は8.4～22.8kgである。

Ⅱb類は平面形が最大長14.0cm～19.5cmの円形または楕円形を呈し、扁平な河原石の片面または両面に磨面をもつ。いずれも安山岩製で重量は0.8～4.0kgである。

## 0. 棒状石製品

4点出土し、ツールの2%を占める（第172・173図）。棒状石製品と仮称した。石材は安山岩2点、花崗岩1点、凝灰岩1点である。最大長43～44cmの隅丸の三角柱状ないしは四角柱状を呈し、剥離・敲打・研磨により整形を施している。

第172図は安山岩製である。最大長43.3cm、最大幅17.3cm、最大厚15.4cm、重量18.9kgで、端部の一方がやや厚くなる隅丸の三角柱状を呈する。側面と端部は敲打・研磨・剥離され、側面は多面となる。切り合い関係からは6つの異なる調整範囲が確認できる。最も古い面は敲打面（1）であり、これより新しい磨面（2）は研磨の程度差によって、（2a）とより入念な（2b）とに分けられる。広めの敲打面（3）とそれより新しい磨面（4）は、正面と左側面の磨面がつくった稜を取り去るようになされる。裏面中央に位置する（5）は（2b）より新しい凹部であり、敲打の後に平滑に研磨されている。（6）は（2a）と（2b）の磨面が接する稜上の剥離痕であり、下端部からの打撃による剥離痕と上半部の中央から上端部へと抜ける剥離痕からなる。第173図1はSK67フラスコ状土坑の底面から出土した。安山岩製で、最大長44.0cm、最大幅15.0cm、最大厚12.5cm、重量12.7kgである。隅丸の四角柱状を呈する。棒状の大型礫の側面に敲打の後に研磨を施している。端部中央からの強い打撃による大形の剥離痕がみられる。第173図2は花崗岩製で、残存長32.8cm、残存幅17.2cm、残存厚13.0cm、残存重量12.0kgである。隅丸の四角柱状を呈する。棒状の大型礫の側面と端部に敲打の後に研磨を施している。中央部で折損し、端部から側面に磨面を切る剥離痕がみられる。第173図の2点はいずれも端部からの大きな剥離痕がみられ、その他の整形・加工痕跡よりも相対的に新しい。通常の打撃とは異なる強い衝撃によるものであり、偶発的なものとは考え難いことから、何らかの儀礼的行為として行われた可能性が考えられる。図化した3点のほかに、SK92フラスコ状土坑から1点が出土している。風化が著しく取り上げができなかったが、粗粒凝灰岩製で直径約21cm、長さ約47cmの柱状を呈し、土坑西壁に接して底面付近から直立した状態で出土した。

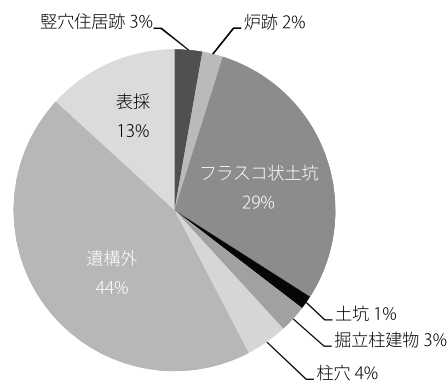
## ②石器の出土状況

遺構種別ごとの石器出土状況（第11表・第217図）をみると、遺構外出土または表面採集が57%（83点）を占める。遺構に伴って出土した石器は43%（61点）である。遺構種別ではフラスコ状土坑が29%（42点）と最も多い。このほか、竪穴住居跡、炉跡、土坑、掘立柱建物跡の柱穴などで2～6点の石器が出土した。

器種別の出土状況（第11表・第218図）を見ると、石鏃はフラスコ状土坑から1点が出土したほかは、遺構外出土または表面採集であり、石匙・石錐・磨製石斧・擦痕のある石製品はいずれも遺構外出土または表面採集である。スクレイパーはフラスコ状土坑から3点、掘立柱建物跡の柱穴から1点、遺構外から1点が出土した。彫刻刀形石器はフラスコ状土坑から1点が出土した。ピエス・エスキューは竪穴住居跡から1点、フラスコ状土坑から1点、土坑から1点、遺構外から2点が出土した。二次

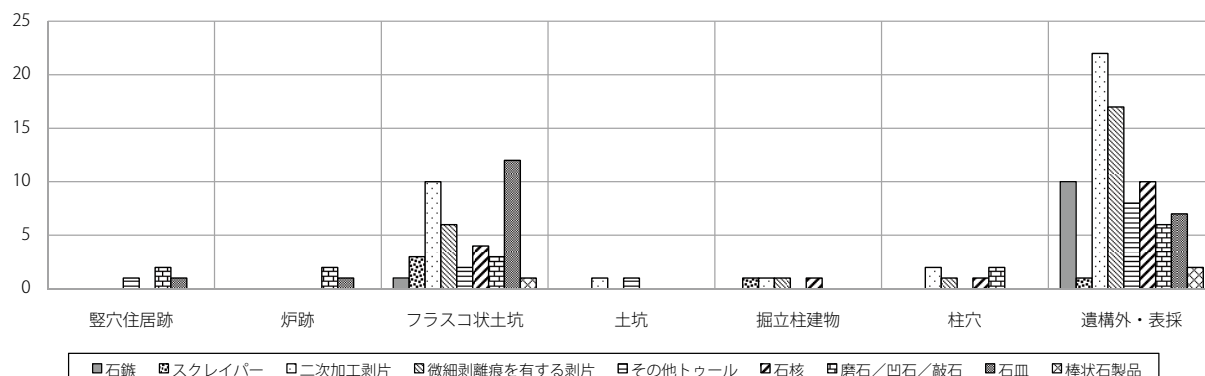


加工剥片はフラスコ状土坑から10点、土坑から1点、柱穴から3点が出土したほか、遺構外出土または表面採集が22点である。微細剥離痕を有する剥片はフラスコ状土坑から6点、土坑から1点、柱穴から2点が出土したほか、遺構外出土または表面採集が16点である。剥片は竪穴住居跡から1点、炉跡から4点、フラスコ状土坑から28点、土坑から1点、掘立柱建物跡から5点、柱穴から11点が出土したほか、遺構外出土または表面採集が71点である。石核はフラスコ状土坑から4点、柱穴から2点が出土したほか、遺構外出土または表面採集が10点である。磨石・凹石・敲石は竪穴住居跡から2点、炉跡から2点、フラスコ状土坑から3点、柱穴から2点が出土したほか、遺構外出土が6点である。石皿は竪穴住居跡から1点、炉跡から2点、フラスコ状土坑から10点が出土したほか、遺構外出土が6点である。棒状石製品はフラスコ状土坑から2点（うち1点は取り上げができなかったため図表の点数に含んでいない）が底面付近に斜位または立位に据え置かれた状態で出土したほか、遺構外出土が2点である。



第217図 遺構種別にみた石器出土状況

狩猟具の石鏃は11点のうち10点が遺構外出土または表面採集である。竪穴住居跡・炉跡で出土した礫石器は石組炉の石材に転用されたものである。また、掘立柱建物跡・柱穴で出土した石器は少数で柱穴の堆積土に偶発的に紛れ込んだと判断される。フラスコ状土坑ではまとまった数の石器が出土し、石器の使用状況や遺構の性格についてある程度検討を加えることが



第218図 遺構種別にみた器種構成

第11表 遺構種別にみた器種構成

	打製石器								磨製石器		礫石器					合計		
	石鏃	石錐	石匙	スクレイパー	彫刻刃形石器	ピエス・エスキュー	二次加工剥片	微細剥離痕を有する剥片	石核	磨製石斧	擦痕のある石製品	磨石	凹石	磨石/凹石	磨石/凹石/敲石		石皿	棒状石製品
竪穴住居跡						1						1		1		1		4
炉跡												1	1			1		3
フラスコ状土坑	1			3	1	1	10	6	4			2		1		12	1	42
土坑						1	1											2
掘立柱建物跡				1			1	1	1									4
柱穴							2	1	1			1		1				6
遺構外	6			1		2	17	14	7	1	1	3	1	1	1	7	2	64
表採	4	1	1				5	3	3	2								19
合計	11	1	1	5	1	5	36	25	16	3	1	8	2	4	1	21	3	144
	101								4		39							

可能である。フラスコ状土坑では廃絶後の若干の自然堆積の後に土器・石器類が一括して廃棄された状況が窺われ、フラスコ状土坑群の周辺で行なわれた作業の結果を示していると考えられる。フラスコ状土坑出土石器の器種構成をみると、二次加工剥片と石皿が最も多く、次いで微細剥離痕を有する剥片、石核、スクレイパー、磨石・凹石・敲石の順となる。また、このほかに剥片が28点出土している。定形的な剥片石器をほとんど含まず、二次加工剥片や微細剥離痕を有する剥片が主体であること、石皿や磨石・凹石・敲石など礫石器を含むことが特徴的である。

### ③石器の使用痕跡

肉眼観察の範囲において使用の痕跡が確認できるものとしては、石鏃の先端部に衝撃剥離痕をもつもの（第147図2）、茎部が折損するもの（第147図7・8・10）があり、使用による損傷と考えられる。また、先端部が折損後に再加工を施したと考えられるもの（第147図19）がある。磨製石斧は刃部正面左側が片減りした状態となっており、縦斧として使用された結果によるものと考えられる。また、基部のみ残存する折損品は裏面側からの衝撃により折断している。磨製石斧の破損例としては刃部の欠損に次いで多くみられるものであり、着柄された状態で使用中に破損したのと考えられる。

また、高倍率法による石器の使用痕分析（第5章第4節）の結果、微細剥離痕を有する剥片1点で骨角を対象とした切断作業が推定された。同様に微細剥離痕を有する剥片2点については使用の痕跡が確認されず、使用とは異なる作用によって微細剥離痕が生じた可能性が指摘された。また、槌状剥離を有する技術形態学的特徴から彫刻刀形石器と分類した1点については、刃部と想定した槌状剥離面には使用の痕跡が全く確認されず、細長い剥片を剥離した石核の可能性が指摘された。

剥片の微細剥離痕については、前述のとおり多様な成因が想定され、必ずしも使用の痕跡と判断できないことが使用痕分析からも明らかにされた。ただし、出土状況の点では礫石器やスクレイパー、二次加工剥片、微細剥離痕を有する剥片などがフラスコ状土坑に一括廃棄された状況を示すものが多く、これらは集落内のフラスコ状土坑周辺での活動を反映している可能性が高いと考えられる。このことから、剥片類には利器として使用されたものが一定の割合で含まれていると考えられる。

礫石器では石皿の破損頻度が高く、意図的に打ち割られて廃棄されたと考えられるものも少なくない。このことは、石器の廃棄行動に儀礼的な側面が関与した可能性を示していると考えられる。

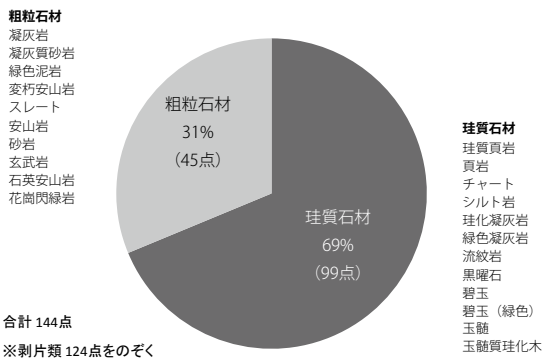
### ④石材の利用

石器に利用されている石材は、珪質頁岩、玉髓、黒曜石などの緻密・硬質で劈開性の高い一群と、粗粒・軟質で劈開性のない一群とに大別できる（第12表）。前者を珪質石材、後者を粗粒石材と呼称する。ツールと石核の石材は珪質石材が69%（99点）、粗粒石材が31%（45点）である（第219図）。珪質石材は主に打製石器に、粗粒石材は主に礫石器と磨製石器に使用されており、後述する大別器種構成の比率（第225図、打製石器70%、磨製石器3%、礫石器27%）ともほぼ一致することから、石材の特性に応じた選択が行なわれたことが分かる。

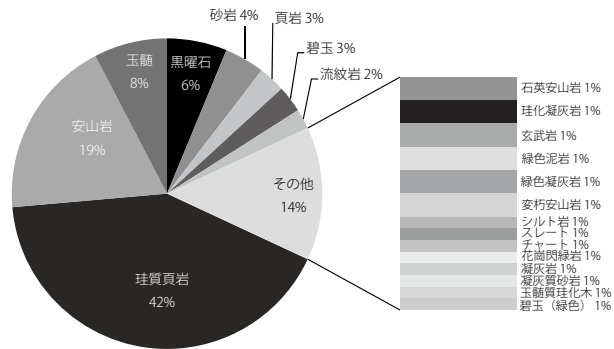
打製石器の石材構成（第12表・第221図）をみると、珪質頁岩が59%（60点）と群を抜いて多く、次いで玉髓が11%（11点）、黒曜石が9%（9点）であり、残りの21%は11種21点で構成される。珪質頁岩は脊梁山脈をはさんだ山形県域から搬入されたと考えられ、玉髓および玉髓質珪化木は隣接する村田町新川流域からの搬入が考えられる。黒曜石は蛍光X線分析による原産地推定（第5章第3節）によって新潟県板山産1点、仙台市秋保産1点、加美町湯の倉産1点、蔵王町蔵王産2点のほか、判別図上でのまとめりとして不明原産地1：9点、不明原産地2：10点と判定された（1点は判別不能）。遠隔地石材として直線距離で約100kmの板山産があり、湯の倉産は約60kmの位置にある。不明原産地1・2は黒曜石の79%を占めるものの、石核から推定される原石は2.5cm未満の小礫であることから遠隔地からの搬入石材とは考え難く、遺跡近傍で採取されたものと考えられる。本遺跡周辺では、佐々

木繁喜氏によって報告された蔵王産（佐々木 2009）をはじめ、高橋健寿氏が蔵王町・村田町・川崎町周辺において複数の黒曜石産出地点を確認しており、両氏によれば不明原産地 2 の黒曜石は蔵王町内で産出するものに類似しているという。このほかの石材について現段階で具体的な産地は指摘できないが、いずれも地質学的には本遺跡周辺にも存在する石材であり（第5章第5節）、松川など遺跡近傍の河床礫から採取された可能性が高い。

打製石器の器種別石材構成（第224図）をみると、珪質頁岩は石鏃、スクレイパー、二次加工剥片などすべての器種に利用され、特に定形石器で優位なのに対し、そのほかの石材は石鏃、ピエスエスキュー、二次加工剥片など消費率の高い器種に利用されている傾向が見られる。山形県域から搬入された珪質頁岩を主要石材としながら、黒曜石や玉髓など多様な在地石材の補完的な利用が看取される。



第 219 図 大別石材でみた石材構成



第 220 図 石材構成

第 12 表 石器の器種・石材の構成

		打製石器								磨製石器		礫石器						合計	
		石鏃	石錐	石匙	スクレイパー	彫刻対形石器	ピエス・エスキュー	二次加工剥片	微細剥離痕を有する剥片	石核	磨製石斧	擦痕のある石製品	磨石	凹石	磨石・凹石	磨石・凹石・敲石	石皿		棒状石製品
珪質石材	珪質頁岩	6	1	1	5	1	2	23	17	4									60
	頁岩							3	1										4
	チャート								1										1
	シルト岩									1									1
	珪化凝灰岩	1					1												2
	緑色凝灰岩								2										2
	流紋岩							1	1	1									3
	黒曜石	2						1		6									9
	碧玉							2	1	1									4
	碧玉（緑色）							1											1
	玉髓	1					1	4	2	3									11
玉髓質珪化木	1																	1	
粗粒石材	凝灰岩						1												1
	凝灰質砂岩							1											1
	緑色泥岩										2								2
	変朽安山岩										1		1						2
	スレート											1							1
	安山岩												6	1	2	1	15	2	27
	砂岩														2			4	6
	玄武岩													1					2
	石英安山岩														1				2
花崗閃緑岩																		1	
合計	11	1	1	5	1	5	36	25	16	3	1	8	2	4	1	21	3	144	
	101								4		39								

磨製石器の石材は緑色泥岩 2 点、変朽安山岩 1 点、スレート 1 点である。これらも地質学的には本遺跡周辺にも存在する石材である（第 5 章第 5 節）。磨石の石材にもみられる変朽安山岩は、松川上流域にまとまった分布がみられることから、遺跡近傍を流れる松川の河床礫から採取された可能性が高い。緑色泥岩と変朽安山岩は磨製石斧に、スレートは擦痕のある石製品に使用されている。

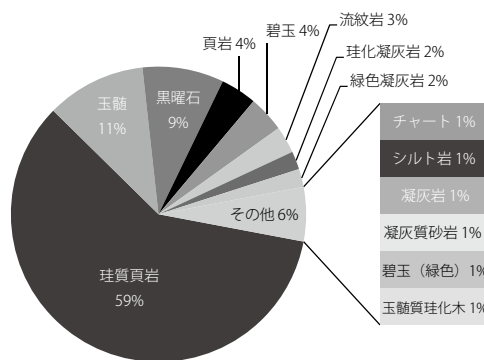
礫石器の石材構成（第 12 表・第 222 図）は安山岩が 63%（27 点）と最も多く、次いで砂岩が 14%（6 点）であり、残りの 23% は 6 種 6 点で構成される。これらはいずれも転磨された円礫を素材としており、礫層または河床で採取されたと考えられる。具体的な原産地は不明であるが、地質学的には蔵王町周辺にも存在する石材であり、遠隔地からの搬入が想定される石材はない。

磨製石器と礫石器の器種別石材構成（第 223 図）をみると、安山岩、砂岩、玄武岩、石英安山岩は石皿と磨石・凹石・敲石の両方に利用され、偏在性はみられない。また、変朽安山岩は磨石に、安山岩と花崗閃緑岩は棒状石製品に利用されている。用途に応じた大きさ・形状で劈開性のない石材を選択して利用していたと考えられる。

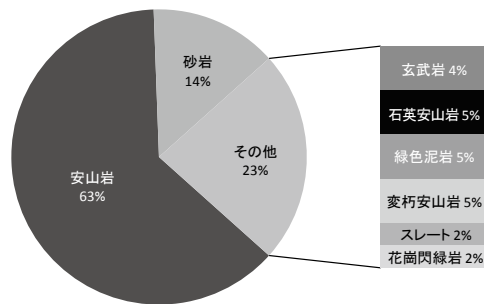
⑤器種構成

器種構成は、劈開性の高い珪質石材を素材とする打製石器と、劈開性のない粗粒石材を素材とする磨製石器、礫石器とに大別できる（第 12 表）。ツールの構成は打製石器 70%（101 点）、磨製石器 3%（4 点）、礫石器 27%（39 点）である（第 225 図）。

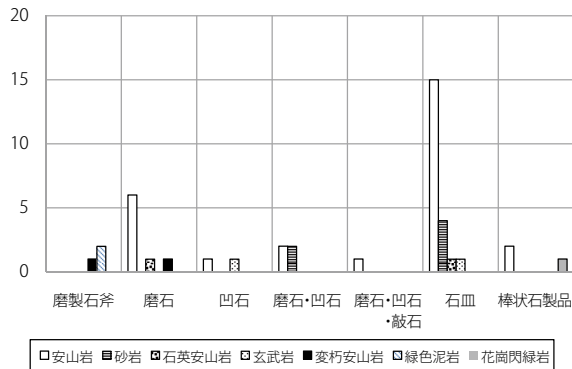
打製石器の器種構成（第 227 図）をみると、狩猟具 11%（11 点）、加工具 49%（49 点）以上、石核 16%（16 点）である。また、形態からみると定形石器は 13%（11 点）で、不定形石器が 47%（47 点）以上を占める。石鏃を除く定形石器は極めて少なく、スクレイパーや二次加工剥片などに分類される不定形石器が多い。定形石器の石鏃、石匙はそれぞれ 1 点のみであり、尖頭器、打製石斧、筐状石



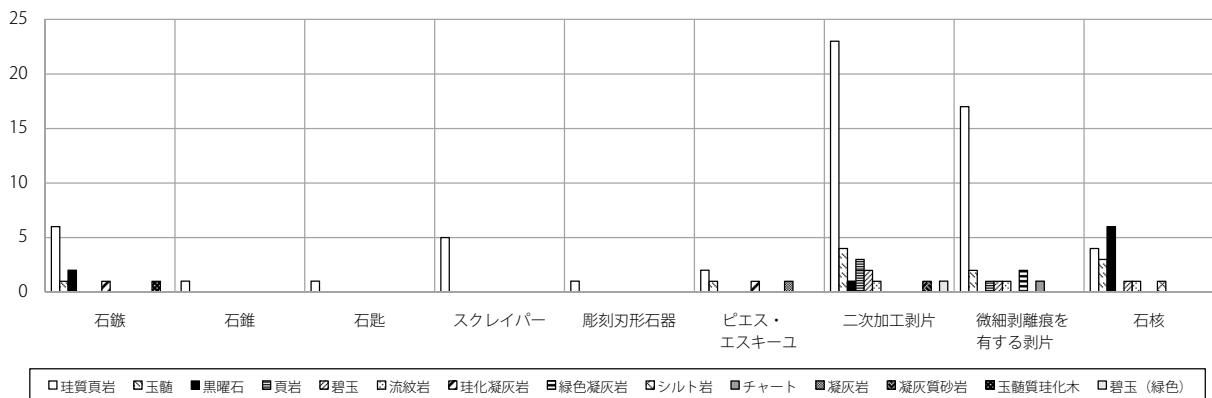
第 221 図 打製石器の石材構成



第 222 図 礫石器の石材構成



第 223 図 磨製石器・礫石器の器種別石材構成



第 224 図 打製石器の器種別石材構成

器などはまったくみられない。

磨製石器は、磨製石斧3点、用途不明の擦痕のある石製品1点である。

礫石器の器種構成（第228図）は、加工具92%（36点）、用途不明の棒状石製品8%（3点）である。加工具のうち石皿が54%（21点）、磨石・凹石・敲石が38%（15点）を占めている。

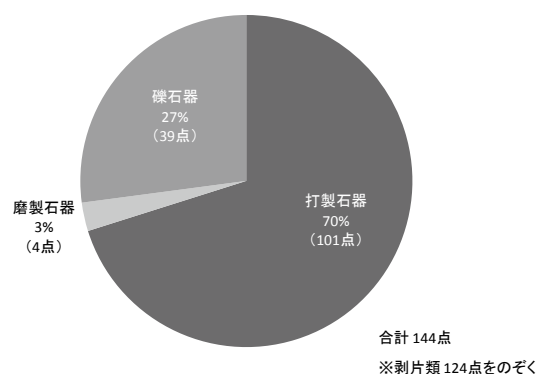
### ⑥石器の製作と使用

**石材の利用と剥片剥離** 本遺跡出土の石核は、剥片素材のツールより小形のものが多く（第229図）、石核に残された剥離面も、剥片に比べて小さい。石核の大きさを主要石材別にみると、珩質頁岩とその他の石材製のものがやや大きく、玉髓製のものがやや小形で黒曜石製のものは極めて小さい（第231・232図）。剥片剥離にあたって石核調整技術はあまり駆使されず、打面転移を行なって限界まで剥片剥離作業が行なわれたことが窺える。石核の類型は多様で、規格性の高い一定の剥片剥離技法は認められず、不定形の剥片を量産する剥片剥離作業であったと考えられる。生産された剥片の形状に明瞭な縦長・横長のものは少なく、比較的薄手のものが多い。また、黒曜石の場合は原石が極小の小礫であり、両極剥離によって小剥片を剥離している。

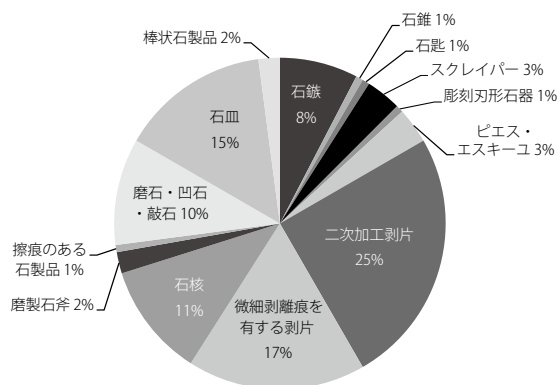
剥片剥離作業の主体は山形県域から搬入された珩質頁岩であり、このほかに黒曜石や玉髓をはじめとした在地石材を補完的に利用している。これらを素材としたツールの大きさや形状を比較すると、在地石材は珩質頁岩に比べて小さいものが多い（第230図）。このことは、やや大形の定形石器や二次加工剥片に珩質頁岩が多く、より小形の石鏃やピエス・エスキューに在地石材が多く用いられていることと一致する。

**ツールの製作と使用** 石材の利用状況から、スクレイパーなどの不定形石器や石鏃の製作が行なわれていたことが指摘できる。石鏃は押圧剥離によって製作され、加熱処理の痕跡が認められる。平基無茎・凹基無茎・有茎・円基の各類型が認められ、凹基無茎がやや多い。先端部や茎部に使用による損傷が認められるものがある。また、磨製石斧には使用による折損や刃部の変形が認められる。

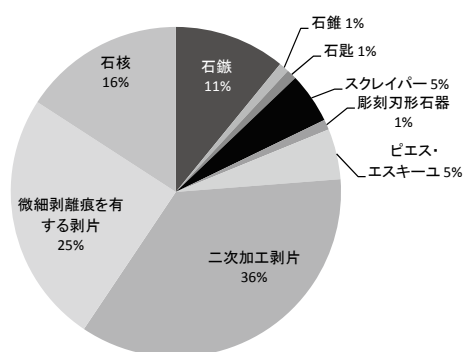
なお、本遺跡の南約5kmに位置する二屋敷遺跡では石刃を素材とする縦形石匙、スクレイパーなどが多数出土し、山形県寒河江市柴橋遺跡（寒河江市教育委員会1989）など山形県の最上川中流域にみられる石刃製作遺跡との交易が議論されている（石井1996・会田2000）。本遺跡では石刃の搬入を明



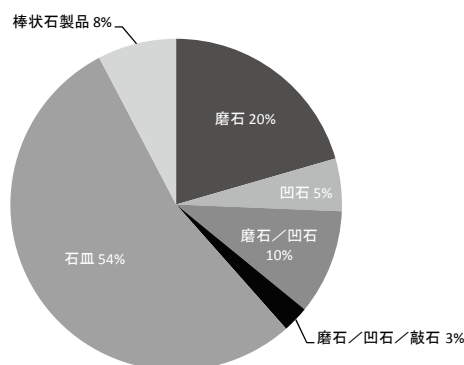
第225図 大別器種構成



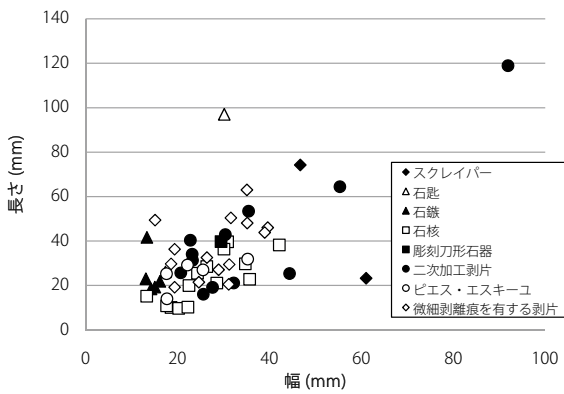
第226図 器種構成



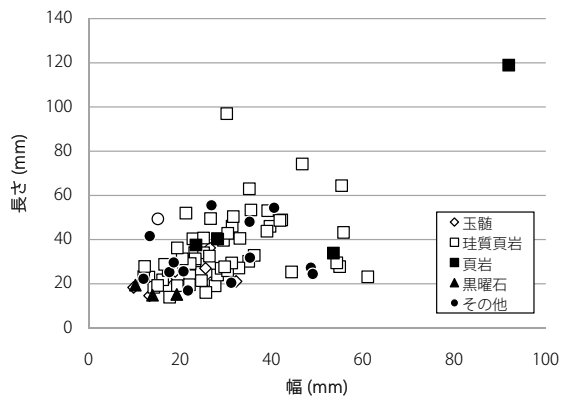
第227図 打製石器の石材構成



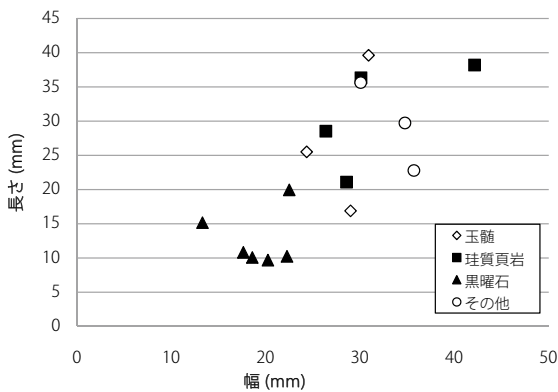
第228図 礫石器の石材構成



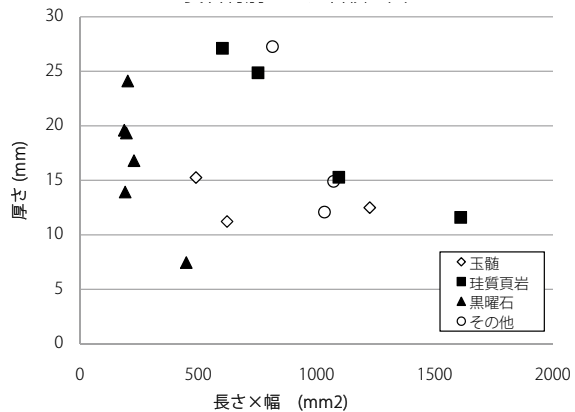
第229図 器種別にみた打製石器・石核の長幅値



第230図 主要石材別にみた打製石器の長幅値



第231図 主要石材別にみた石核の長幅値



第232図 主要石材別にみた石核の大きさ

確に裏付ける資料は出土していないが、二屋敷遺跡出土石匙と形態・調整が類似する縦形石匙がみられることから、石刃またはそれを素材とした製品が搬入されていた可能性がある。

礫石器の石皿や磨石・凹石・敲石は遺跡近傍の河床礫を素材としたと考えられ、二次加工剥片などとともにフラスコ状土坑からの出土が多く、食料の加工などに使用されたと考えられる。棒状石製品も河床礫を素材として製作されたと考えられるが、石皿などとは法量・形態的に大きく異なっており、土坑底面付近に斜位または立位に据え置かれた状態で出土したものがある。管見の限りでは類例を確認できなかったが、一般的な礫石器の特徴とは大きく異なることや、特異な出土状況を示すことが特徴として指摘できる。このことから、棒状石製品は生活に直接関わる「第一の道具」とは異なり、精神世界に関わるいわゆる「第二の道具」(小林 1998)として使われた可能性が考えられる。

### ⑦編年的位置づけ

本遺跡出土の石鏃には、Ⅰ類(平基無茎)2点、Ⅱ類(凹基無茎)5点、Ⅲ類(有茎)3点、Ⅳ類(円基)1点の4類型が認められた。これについて本遺跡と同じ後期前葉に位置づけられる蔵王町二屋敷遺跡(宮城県教育委員会 1984)、仙台市六反田遺跡(仙台市教育委員会 1981)と比較すると、二屋敷遺跡では本遺跡でいうⅠ類6%、Ⅱ類17%、Ⅲ類20%、Ⅳ類5%、六反田遺跡ではⅠ類3%、Ⅱ類75%、Ⅲ類3%、Ⅳ類19%と、Ⅱ類を主体としてⅠ・Ⅲ・Ⅳ類をそれぞれ少数組成する点で共通している。資料数が少ないものの、本遺跡においても同様の傾向が認められ、時期的な特徴を示していると考えられる。

なお、草創期中葉の山形県高島町日向洞窟遺跡西地区(佐川・鈴木編 2006)、草創期後葉の仙台市野川遺跡(仙台市教育委員会 1996b)ではすべてⅡ類、前期初頭の角田市土浮貝塚(東北大学大学院部学研究所考古学研究室・角田市教育委員会 2008)、前期中葉の利府町六田遺跡(利府町教育委員会 1987)、前期後葉～中期初頭の栗原市嘉倉貝塚(宮城県教育委員会 2003)、中期初頭の大崎市東要害貝

塚（大崎市教育委員会 2008）、中期中葉の仙台市高柳遺跡（仙台市教育委員会 1995）ではⅡ類を主体に少数のⅠ類を伴う組成であったのに対し、中期末の栗原市鰻沢遺跡（築館町教育委員会 2005）ではⅡ類を主体に少数のⅠ類・Ⅲ類・Ⅳ類を伴うようになり、後期中葉の気仙沼市田柄貝塚（宮城県教育委員会 1986）、後期後葉の東松島市里浜貝塚風越地点（東北歴史資料館 1997）、後期後葉～晩期初頭の村田町東足立遺跡（宮城県教育委員会 1981b）、晩期中葉の里浜貝塚西畑地点（東北歴史資料館 1984）では一転してⅢ類を主体とする組成に変化していることが分かる。

石鏃形態の時期的な変化について全国的な視野から検討した鈴木道之助によれば、有茎石鏃は東北地方北部以北では前期初頭に出現し、中期には無茎石鏃をしのぐようになるが、東北地方南半部ではやや遅れて後期中葉頃に同様の逆転現象が起こり、有茎石鏃が爆発的に増加することが指摘されている（鈴木 1981）。宮城県内では、有茎石鏃が出現するのは中期末（大木 10 式）以降とされている（東北歴史資料館 1991）。

田柄貝塚ではイノシシとニホンジカの動物遺存体に石鏃の射込まれた痕跡が確認され、石鏃による狩猟対象の一端が明らかにされているが、より小形の鳥獣類も対象として大きな割合を占めたものと推察される。田柄貝塚ではイノシシとニホンジカに対して至近距離から射込まれたことが推定されているが、小形の鳥獣類の場合にはある程度離れた位置からの射撃が想定され、矢の直進性がより重要視されたと考えられる。この点、一般に有茎石鏃は無茎石鏃と比較して幅狭・軽量であり、対象物に対する破壊力を除けば矢の直進性・刺突性は高かったものと考えられる。後期中葉以降の有茎石鏃の爆発的な増加の背景には、石鏃による狩猟対象の変化に応じた狩猟法の選択、新しい装着法の開発および柄となる素材の選択などが相互に関連したことが想定され、本遺跡を含む後期初頭～前葉の石器群は石鏃による狩猟技術の転換期に位置付けられる。

### ⑧西浦B遺跡における縄文時代後期初頭～前葉前半の石器群

本遺跡で出土した石器群は、共伴する土器の型式などから縄文時代後期初頭～前葉前半期のものと考えられる。器種構成は打製石器に石鏃、石匙、石錐、彫刻刀形石器、スクレイパー、ピエス・エスキュー、二次加工剥片、微細剥離痕を有する剥片、剥片、石核、磨製石器に磨製石斧、擦痕のある石製品、礫石器に石皿、磨石、凹石、敲石、棒状石製品がある。打製石器に定形石器が非常に少なく、不定形石器が多いことが特徴的である。また、礫石器の占める割合も比較的大きい。

石鏃は点数的に多くないものの、平基無茎、凹基無茎、有茎、円基の各類型がみられ、無茎鏃主体から有茎鏃、円基鏃主体へと変化する過渡期の様相を良く示している。

剥片剥離技術では、石核の打面転移を行なって限界まで石材を利用しており、不定形の剥片を生産している。また、黒曜石の場合は原石が極小の小礫であり、両極剥離によって小剥片を剥離している。生産された剥片は小形・薄手のものが多く、不定形石器や石鏃の製作が主体であったと考えられる。

剥片剥離作業の主体は山形県域から搬入された珪質頁岩であり、このほかに黒曜石や玉髓をはじめとした在地石材を補完的に利用している。やや大形の定形石器や二次加工剥片に珪質頁岩が多く、より小形の石鏃やピエス・エスキューに在地石材が多く用いられている。

礫石器は石皿と磨石・敲石・凹石のほか、棒状石製品があり、素材の多くは遺跡近傍を流れる松川の河床礫から採取されたと考えられる。石皿の破損率が高いことや、いわゆる第二の道具と考えられる棒状石製品が存在し、これらに意図的な破損行為が読み取れることが注目される。

石器の出土状況をみると石鏃は遺構外出土が多いのに対し、不定形石器と礫石器はフラスコ状土坑からの出土が多い。こうしたことから、本遺跡では不定形石器と礫石器を使用した食料加工の作業を主体として、狩猟具の石鏃の簡易なメンテナンスなどの作業が行なわれていたと考えられ、さらに棒状石製品などを使用した精神的行為も行われたことが推察される。

## 2. 遺構の特徴と遺跡の性格

### (1) 遺構の時期と特徴

確認した縄文時代の遺構は、竪穴住居跡 1 軒、炉跡 1 基、掘立柱建物跡 23 軒、柱列跡 7 条、溝跡 5 条、フラスコ状土坑 31 基、落とし穴状土坑 4 基、土坑 14 基、柱穴多数である。これらの遺構の出土遺物と平面分布状況から推定した機能時期は第 13 表のとおりであり、落とし穴状土坑を除くほとんどの遺構がⅡ群土器段階（後期初頭～前葉前半）に位置づけられる。ここでは、各遺構の特徴について述べる。

第 13 表 遺構の時期

出土遺物の特徴からⅡ群土器段階に位置づけられる遺構	竪穴住居跡	SI65
	炉跡	SL86
	掘立柱建物跡	SB93・97・98・100・108・111・112・116・135
	柱列跡	SA109・121
	フラスコ状土坑	SK7・9・19・20・22・28・54・55・56・62・63・66・68・73・76・79・82・83・87・89・90・91・92・101・125
	土坑	SK6・13・39・81
遺構の分布状況からⅡ群土器段階に位置づけられる遺構	掘立柱建物跡	SB103・104・105・113・114・115・118・120・129・130・131・132・133・134
	柱列跡	SA106・107・110・117・119
	フラスコ状土坑	SK52・53・67・71・74・126
	土坑	SK36・44・45・49・50・51・64・70・72・102
時期が不明な遺構	落とし穴状土坑	SK69・122・123・124

#### ① 竪穴住居跡・炉跡

竪穴住居跡は 1 軒確認した。SI65 竪穴住居跡は残存範囲で南北 4.6m、東西 3.6m の規模で、不整楕円形を呈する。残存壁高は 0～12cm である。地山を床面としており、貼床は認められないが、顕著な硬化がみられる。柱穴は確認されなかった。床面の中央やや北東寄りの位置に石組炉が構築されている。石組炉は河原石を用いて不整形に区画し、地山ブロック主体の埋土で炉床を構築している。炉床中央部の直径約 30cm の範囲に焼面が認められ、焼面の中央に深鉢形土器を正位に埋設している。

炉跡は 1 基確認した。SL86 炉跡は長軸 100cm、短軸 80cm の楕円形を呈し、深さ 12cm の皿状の窪みの周囲に石材を配置する。石材は一部が抜き取られており、南側のみ残存する。中央部の長軸 50cm、短軸 30cm の範囲に焼面が認められる。

#### ② 掘立柱建物跡・柱列跡

掘立柱建物跡は 23 棟確認した。4 本柱で構成されるものが 15 棟、6 本柱が 4 棟のほか、5 本、7 本、8 本、10 本柱のものが各 1 棟である。平面形は方形または長方形のものが多く、五角形、七角形のものが各 1 棟である。10 本柱で 1 間×4 間の東西棟建物を構成する SB97 掘立柱建物跡、7 本柱で七角形建物を構成する SB98 掘立柱建物跡は他の掘立柱建物跡と比較して柱穴の規模が大きい。SB93 掘立柱建物跡は 6 本柱で構成される 1 間×2 間の東西棟建物の東西に近接棟持柱をもつ。

柱列跡は 7 条確認した。3 本柱で構成されるものが 4 条、4 本柱が 2 条、6 本柱が 1 条である。柱穴はいずれもほぼ等間隔で直線的に配置されている。

#### ③ フラスコ状土坑・土坑

フラスコ状土坑は 31 基確認した。平面形が直径 50～184cm の円形を呈し、下部の壁面が挟り込ま



れて縦断面形がフラスコ状を呈する。こうした形態の土坑については、貯蔵穴としての機能が推定される。深さは10～62cmで、30cm以下のものが多い。残存状況が良好でないものについては必ずしもフラスコ状の縦断面形を確認出来ないものが含まれるが、平面形態と堆積状況などからフラスコ状土坑に含めた。底面の中央に小柱穴をもつものが4基ある。堆積状況を見ると、底面付近に自然崩落土や自然堆積土が堆積した後、人為的に埋め戻されているものが多く、自然堆積層の上面に遺物が一括廃棄される状況がみられた。このことから、フラスコ状土坑が貯蔵穴としての機能を果たさなくなった後はごみ捨て穴として利用され、最終的に埋め戻されたと考えられる。

土坑は14基確認した。平面形は円形、方形、不整形を呈するものがある。機能について推定できたものはない。堆積状況は人為的に埋め戻されているものが多い。

#### ④落とし穴状土坑

4基確認した。平面形が長軸282～300cm、短軸30～42cmの溝状を呈するものと、長軸102～260cm、短軸70～80cmの長方形または小判形を呈するものがある。小判形のは底面中央に打ち込み杭跡の可能性のある小柱穴が確認された。堆積状況を見ると、いずれも自然堆積土と考えられ、土坑が落とし穴としての機能を果たさなくなった後は利用されることなく放棄されたと考えられる。

### (2) 遺跡の性格

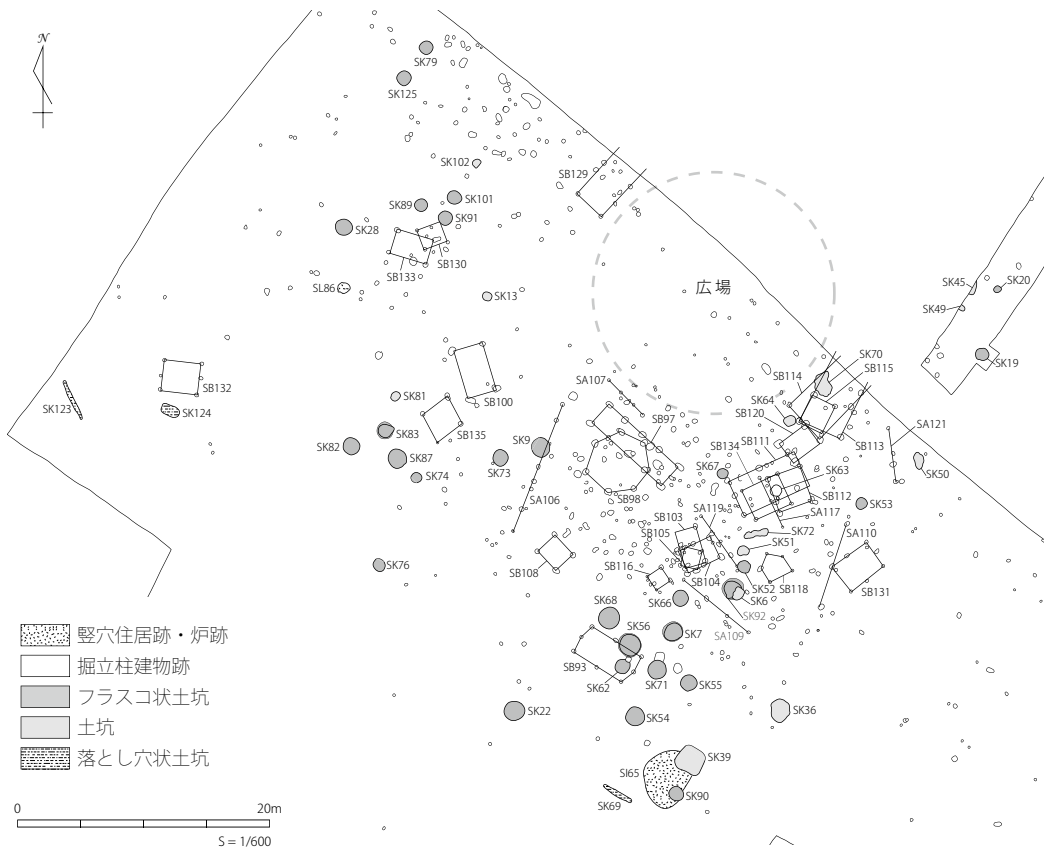
確認した遺構は主にB区中央部からA区南半部に分布する。これらの平面分布状況と遺物の出土状況から空間利用について検討し、遺跡の性格を考察する。

#### ①遺構の平面分布状況

遺構は主にB区中央部からA区南半部にかけての半径約50mの範囲に分布する。調査前の現況はわずかに東へ傾斜する平坦な畑地で、後世の明らかな削平等の影響は認められなかったが、フラスコ状土坑は深さ30cm未満のものも多く、竪穴住居跡の壁高も0～12cm程度であり、遺構の残存状況はあまり良好でなく、当時の生活面も残存していないと考えられる。確認した遺構の分布状況を見ると、中央部の半径約10mの範囲では散漫であり、この空白域を取り囲むように各遺構が帯状に分布する。

各遺構の分布する範囲には重複がみられるが、より中央に近い位置に掘立柱建物跡が分布し、その外側にフラスコ状土坑および土坑が、さらに外側に竪穴住居跡および炉跡が分布する傾向がみられる。これらの遺構群にはいくつかの重複関係がみられ、数時期の変遷があるが、遺構分布の中心部は全時期を通じて空白域となっている。このことから、中央の空白域には広場としての機能があり、これを中心として各遺構が配置されていたと考えられる。

各遺構の分布状況を見ると、掘立柱建物跡は南東側にやや多く分布する。重複するものがあり、最大4時期の変遷がある。SB97・SB98掘立柱建物跡は柱穴の規模が大きく、中心的な施設であった可能性がある。SB98掘立柱建物跡は7本柱で構成される七角形の建物で、SB97掘立柱建物跡に壊されている。SB97掘立柱建物跡は東西棟建物で、長軸方向を広場に向けている。このほかの掘立柱建物跡は4本または6本柱で構成される方形または長方形のものも多く、長方形のものは長軸方向を広場に向けているものが多い。柱列跡の配置に規則性はみられないが、SA106柱列跡は遺構分布のより濃密な南東側とやや希薄となる北西側との間に位置している。フラスコ状土坑は掘立柱建物跡の分布帯の外側に分布し、掘立柱建物跡や竪穴住居跡などの重複がみられるが、フラスコ状土坑同士での重複はみられない。分布帯の中には空白域がみられ、数基ずつの単位を構成している可能性がある。土坑について機能が推定できたものはないが、フラスコ状土坑と一連の分布帯に分布しているものが多い。竪穴住居跡および炉跡はフラスコ状土坑の分布帯の外側に分布する。南側に位置するSI65竪穴住居跡は正位に土器を埋設する石囲炉をもつ。東側に位置するSL86炉跡も石囲炉で、残存状況を考慮すれば竪穴住居跡に伴うものであった可能性がある。



第 233 図 縄文時代の遺構配置

落とし穴状土坑は遺構集中範囲からやや離れた位置に分布する。フラスコ状土坑や土坑は廃絶後に人為的に埋め戻されているものが多いのに対し、落とし穴状土坑はいずれも廃絶後自然堆積によって埋没していることから、一帯が集落として利用されている段階とは時期を違えるものと考えられる。

### ②遺物の出土状況

遺物は各遺構から出土しているが、フラスコ状土坑から出土したものが多く、竪穴住居跡からは若干の縄文土器片と石器が出土したほか、石組炉内に埋設された深鉢および炉石に転用された礫石器が出土している。炉跡からは多数の縄文土器片と炉石に転用された礫石器が出土している。掘立柱建物跡の柱穴からは少数の縄文土器片と石器が出土している。フラスコ状土坑からは多数の縄文土器と二次加工剥片や微細剥離痕を有する剥片、石皿などが出土している。なお、フラスコ状土坑の遺物出土状況をみると、土坑が廃絶されて底面付近に若干の堆積層が形成された後に遺物が一括廃棄された状況を示すものが複数みられた (SK7・SK22・SK56・SK79 など)。

### ③遺跡の性格

確認した遺構の機能時期はⅡ群土器段階 (後期初頭～前葉前半) と考えられる。

遺構は半径約 50m の範囲にまとまって分布する。広場を中心として掘立柱建物跡の分布帯があり、その外側にフラスコ状土坑および土坑の分布帯が、さらに外側に竪穴住居跡と炉跡が分布している。それぞれの分布帯には重複がみられることや、フラスコ状土坑や掘立柱建物跡がいくつかの単位を構成している可能性があること、遺構期に細分の可能性が残されていることから、広場を中心として各施設が環状に配置された集落景観であったかどうかについては判断を留保しなければならない。しかしながら、遺構分布の中心部は数時期の変遷を通して空白域であったことから、集落内における各種活動がこの空白域=広場を中心として営まれたものと推察される。

遺物の多くはフラスコ状土坑から出土した。縄文土器と二次加工剥片や微細剥離痕を有する剥片、石

皿などが多い。石器類に定形石器が少なく、不定形石器が多いこと、礫石器が多いことが特徴的である。遺物はフラスコ状土坑の廃絶後に一括廃棄された状況を示すものが複数みられることから、これらはフラスコ状土坑周辺で行なわれた作業を反映していると考えられる。作業の内容としては、不定形石器と礫石器を使用した食料加工の作業を主体として、狩猟具の石鏃の簡易なメンテナンスなどの作業が推定される。

本遺跡の集落には竪穴住居や炉跡といった居住に関わる施設が希薄で、仮設的な施設と考えられる小規模な掘立柱建物が多い。出土遺物からみても、石器類に定形石器が僅少で不定形石器の割合が多いことや石器製作の痕跡が希薄であることから、日常生活が継続的に営まれた場所ではなかったと考えられる。このことから、本遺跡の集落では食料の貯蔵・加工などを主とした季節的な活動が営まれ、これに伴う貯蔵施設として多数のフラスコ状土坑が残されたと考えられる。

### 3. 遺跡の年代

遺構から出土した木炭片 5 点および土器付着炭化物 5 点を試料として実施した AMS 法による放射性炭素年代測定の結果、木炭 4 点の較正暦年代は 2142 ～ 2470cal BC、土器付着炭化物 5 点は 2140 ～ 2570cal BC であった（第 5 章第 1 節）。木炭は SK9・19・22・56 フラスコ状土坑と SK6 土坑堆積土より、土器付着炭化物は SK22・79 フラスコ状土坑と SK6 土坑出土土器より採取したもので、土器はいずれも II 群土器に含まれる。木炭と土器付着炭化物の年代に齟齬はなく、妥当な年代が示されたと考えられる。このことから、本遺跡における活動の主体であった II 群土器段階（縄文時代後期初頭～前葉）には 2355cal BC を中央値とする 2140 ～ 2570cal BC の年代が与えられよう。

なお、上記のほかに木炭 1 点の較正暦年代は 1256 ～ 1128cal BC と示された。これについては遺構出土土器の編年観と一致しないことから後世の混入と考えられるが、やはり縄文時代晩期の土器片が混入する遺構もあり、ある意味では本遺跡における人間活動の一端を示す測定結果と言えよう。

## 第2節 古代

### 1. 遺物の特徴と年代

古代の遺物が出土したのは SI16 竪穴住居跡のみである。ここでは、SI16 竪穴住居跡出土遺物の特徴について分析し、その年代を検討する。遺物は床面出土のロクロ土師器甕（第 175 図 1～3、176 図 6～8・10）、砥石（第 177 図）、K1 堆積土出土のロクロ土師器小形甕（第 176 図 9）、住居内堆積土出土のロクロ土師器坏（第 175 図 4）、確認面出土のロクロ土師器坏（第 175 図 5）がある。

ロクロ土師器坏は 2 点が出土しているが、下半部のみのため全体の器形は不明である。内面に放射状のミガキ調整と黒色処理を施すもので、切り離し方法は不明である。切り離し後に体下部～底部に回転ヘラケズリを施すもの（5）と、手持ちヘラケズリを施すもの（4）がある。ロクロ土師器甕は 7 点が出土し、略完形のもので 3 点（1～3）、上半部のみのもので 3 点（6・7・10）、下半部のみのもので 1 点（8）である。焼成が良好で胎土が赤褐色を呈する。胴部上半に緩やかな膨らみをもつ長胴形を呈し、きわめて斉一性が高い。口縁部は外傾し、口縁端部を上方につまみ出すもの（1～3・7）、受け口状のもの（6・10）がある。外面は胴部のほぼ全面に縦方向のヘラケズリ調整を施すもの（1～3・7）、下半にヘラケズリ調整を施すもの（3・8）がある。また、ヘラケズリ調整の後に下半に粗いヘラナデ調整を施すもの（1・2）がある。内面調整はハケメ調整の後にヘラナデ調整を施すもの（1～3・7）

が多い。底部はいずれも切り離し後にヘラケズリ調整を施し、静止糸切痕が確認できるもの(3)がある。ロクロ土師器小形甕は1点が出土しているが、下半部のみのため全体の器形は不明である。外面の下半にヘラケズリ調整を施す。底部は回転糸切の後無調整である。

これらは製作に際してロクロを使用したもので、その特徴から表杉ノ入式(氏家1957・1967)の範疇に含まれる。表杉ノ入式の年代的位置づけは8世紀末～12世紀頃と幅広いが、主に坏類に加えられ技法的側面から、底部の切り離し後に再調整を施すものから回転糸切の後無調整のものへ変化することが指摘されている(阿部1968・桑原1969)。また、利府町郷楽遺跡出土土器の分析から①ロクロ使用の製品は8世紀末頃から漸移的に組成比率を増し、9世紀前半にはすべてロクロ使用となること、②9世紀後半になると口径に比して底部が小さく、底部の切り離し後に再調整を施さなくなることが明らかにされている(菊地ほか1990)。SI16 竪穴住居跡出土土器をみると、小形甕は回転糸切の後無調整であるが、坏はいずれも切り離し後に再調整を施していることから、9世紀後半まで降ることはないものと考えられる。また、甕は胴部のほぼ全面に丁寧な縦方向のヘラケズリ調整を施すことが特徴的である。このような特徴をもつ土器群は、色麻町上新田遺跡1・5・8号住居跡出土土器(宮城県教育委員会1981a)に類似しており、年代は9世紀初頭頃に位置づけられている。このことから、SI16 竪穴住居跡出土土器の年代は概ね9世紀初頭頃に位置づけられよう。

## 2. 遺構の特徴と遺跡の性格

古代の遺構はSI16 竪穴住居跡とSX78 竪穴状遺構を確認した。ここでは、その特徴と機能時期について述べ、遺跡の性格について検討する。

SI16 竪穴住居跡は、東西4.2m、南北4.5mの不整隅丸方形を呈し、東壁にカマドを付設する。住居掘方埋土を床として4基の支柱穴をもち、住居南東隅に貯蔵穴を配置する。カマド燃焼部は取り壊されており、燃焼部付近の住居床面に7個体以上の土師器甕などが廃棄されていた。住居廃絶に伴う儀礼的行為の可能性がある。出土土器の年代から、SI16 竪穴住居跡の機能時期は9世紀初頭頃と考えられる。

また、SX78 竪穴状遺構は残存範囲で東西3.9m、南北2.5mの不整形を呈する。SI16 竪穴住居跡との距離は約10mである。残存範囲の西寄りの位置でカマド燃焼部の痕跡と考えられる赤色硬化範囲を確認したことから古代の竪穴住居跡の可能性が考えられるが、床面は残存しない。出土遺物がないため機能時期は不明である。

なお、本調査区の西側に隣接する畑地では過去にロクロ土師器坏が表面採集されている地点があり、今回確認した竪穴住居跡を含めて数軒の竪穴住居からなる小規模な集落が営まれていた可能性がある。

## 第3節 中世～近世

### 1. 遺物の特徴と年代

中世～近世の遺物は中世陶器、近世陶磁器が出土した。中世陶器はSD84 溝跡出土の甕（第187図）などがある。近世陶磁器は鉄釉の陶器、染付の磁器（第189図）などがある。第189図はD区表土出土の磁器で、染付の皿である。肥前産（18世紀）である。

### 2. 遺構の特徴と遺跡の性格

中世～近世の遺構は掘立柱建物跡3棟、柱列跡2条、溝跡5条を確認した（第179図）。これらの遺構配置の状況と各遺構の特徴を述べる。

掘立柱建物跡はB区南端にSB85 掘立柱建物跡、D区にSB127・SB128 掘立柱建物跡が位置する。SB85 掘立柱建物跡は東西3間・南北1間の東西棟、SB127 掘立柱建物跡東西2間・南北1間の建物であり、SB128 柱列跡は東西5間・南北2間の東西棟で北面を除く3面に1間幅の廂を設けている。建物に重複関係はなく、造営方向は北を基準にして $19.4^{\circ}$ ～ $27.8^{\circ}$ の範囲で東へ振れており、ほぼ一致することから同時期に並存していた可能性がある。

柱列跡はB区東側にSA95・SA96 柱列跡が位置する。SA95 柱列跡は2間、SA96 柱列跡は3間の規模で、概ね東西方向である。

溝跡はB区中央部にSD8・SD24・SD84・SD88 溝跡が、A区にSD18 溝跡が位置する。SD8・SD84・SD88 溝跡は重複関係にあり、SD88→SD8→SD84の前後関係が確認できる。これらの溝跡は掘立柱建物跡の造営方向とも一致し、ほぼ同位置での掘り直しがみられることから、いずれも同一の地割りに基づいて掘られた区画溝と考えられる。遺物はSD84 溝跡で中世陶器が、D区表土で近世の磁器が出土している。

このことから、これらの遺構群は中世～近世に位置づけられ、SB128 掘立柱建物跡を主屋とする屋敷地の建物群とそれに隣接する畑地などを区画した溝跡と考えられる。



## 第7章 総 括

1. 西浦B遺跡は、宮城県南部の刈田郡蔵王町大字円田字西浦北地内に所在する。遺跡は蔵王町東部の松川北岸に形成された矢附段丘上に立地している。
2. 今回の発掘調査は店舗建設計画を原因とする事前調査として実施した。調査区は遺跡範囲の中央部に位置し、発掘調査面積は4,678㎡である。
3. 確認した遺構は、縄文時代の竪穴住居跡1軒、炉跡1基、掘立柱建物跡23棟、柱列跡7条、フラスコ状土坑31基、落とし穴状土坑4基、土坑14基、柱穴多数、古代の竪穴住居跡1軒、竪穴状遺構1基、中世～近世の掘立柱建物跡3棟、柱列跡2条、溝跡5条である。
4. 出土した遺物は、縄文土器、ロクロ土師器、中世陶器、近世陶磁器、石器（打製石器、磨製石器、礫石器）、石製品（砥石）である。縄文土器は縄文時代中期中葉大木8b式、後期初頭～前葉前半の南境式の一部あるいは綱取Ⅱ式などとの併行期、晩期中葉大洞C2式に位置づけられる。ロクロ土師器は平安時代初頭の9世紀初頭頃に位置づけられる。このうち、主体を占めるのは縄文時代後期初頭～前葉前半の土器・石器である。
5. 本遺跡出土資料を対象とした自然科学的分析の結果、下記のことが明らかとなった。
  - ・土器付着炭化物および土坑出土木炭を試料としたAMS法による放射性炭素年代測定の結果、校正暦年代は2,140～2,570calBCと示された。
  - ・薄片観察法による土器胎土分析の結果、胎土の組成から遺跡近郊の2か所の採取地点が判明し、型式学的に区別された在り地型式と非在り地型式の両方が在り地で製作された可能性が指摘された。
  - ・黒曜石製石器の蛍光X線分析による原産地推定の結果、新潟県板山産を含む4か所の原産地からの搬入が判明したほか、本遺跡近郊に2か所の未知の原産地が存在する可能性が示唆された。
  - ・高倍率法による石器使用痕分析の結果、十分に整形されていない石器でも、使用された痕跡を残すものがあることが判明した。
6. 発掘調査結果を検討した結果、下記のことが明らかとなった。
  - ・縄文時代後期初頭～前葉前半に多数のフラスコ状土坑と掘立柱建物跡を伴う集落が形成されていたことが判明した。竪穴住居跡や炉跡など居住に関わる施設が少なく、石器類に定形石器が僅少で不定形石器の割合が多いことや石器製作の痕跡が希薄であることから、日常生活が継続的に営まれた場所ではなかった可能性が考えられる。このことから、本遺跡の集落では食料の貯蔵・加工などを主とした季節的な活動が営まれ、これに伴う貯蔵施設として多数のフラスコ状土坑が残されたと考えられる。
  - ・平安時代初頭の9世紀初頭頃には少数の竪穴住居跡からなる小規模な集落が形成され、中世～近世には溝による区画を伴う屋敷地として利用されていたことが判明した。
7. 今回の発掘調査成果は、松川流域に居住した当時の人びとの具体的な暮らしぶりを知る上で貴重な手掛かりとなるものである。

## 引用・参考文献（編著者名五十音順）

- 会田容弘 2000 「縄文時代の頁岩製石刃製作と流通—東北地方南部のありかた—」 山形考古 6-4
- 相原淳一 2008 「阿武隈川下流域における縄文時代後期初頭の土器編年研究序説」『蔵王東麓の郷土誌—中橋彰吾先生追悼論文集—』中橋彰吾先生追悼論文集刊行会
- 相原淳一 2009 「東北地方における縄文時代中期末葉から後期前葉に関する土器編年—宮城県石巻市山居遺跡の調査成果から—」 東北歴史博物館研究紀要 10
- 朝日村教育委員会 2002a 『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書XⅢ アチャ平遺跡上段』
- 朝日村教育委員会 2002b 『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書XⅣ 元屋敷遺跡Ⅱ（上段）』
- 阿子島香 1991 「民族考古学と旧石器研究」『北からの視点』日本考古学協会 1991 年度宮城・仙台大会実行委員会
- 阿部昭典 2007 「新潟県下越地方の縄文中期終末から後期初頭の諸様相」『第 20 回縄文セミナー 中期終末から後期初頭の再検討』縄文セミナーの会
- 阿部義平 1968 「東国の土師器と須恵器—多賀城外出土土器をめぐって—」 帝塚山考古学 1
- 池谷勝典 2004 「縄文時代石器の機能研究—使用痕分析を中心に—」 考古学ジャーナル 9 (No.520)
- 石井浩幸 1996 「寒河江市柴橋遺跡出土の石器接合資料」『西村山地域史研究会 15 周年記念論集 西村山の歴史と文化Ⅲ』西村山地域史研究会
- 石坂圭介 2007 「新潟県中越地方の縄文時代中期末から後期の前葉の土器様相」『第 20 回縄文セミナー 中期終末から後期初頭の再検討』縄文セミナーの会
- 石坂圭介 2008 「三十稲場式土器」『総覧 縄文土器』
- 伊東信雄 1957 「古代史—縄文文化の変遷—」『宮城県史 1』宮城県史編纂委員会
- 稲野裕介ほか 1995 『横欠遺跡（図版編）』北上考古学会
- 稲野裕介ほか 1997 『横欠遺跡（本文編）』北上考古学会
- 稲村晃嗣 2008 「門前式土器」『総覧 縄文土器』
- 氏家和典 1957 「東北土師器の型式分類とその編年」 歴史 14
- 氏家和典 1967 「陸奥国分寺跡出土の丸底杯をめぐって—奈良・平安土師器の諸問題—」『山形県の考古と歴史』
- 江坂輝彌 1956 「各地域の縄文式土器 東北」『日本考古学講座 3』
- 江坂輝彌ほか 1959 「日本各地の縄文式土器形式編年と推定文化圏」『世界考古学体系 日本 I』 巻末折込
- 大崎市教育委員会 2008 『東要害貝塚』宮城県大崎市文化財調査報告書 3
- 大迫町教育委員会 1986 『観音堂遺跡—第 1 次～ 6 次発掘調査報告書—』大迫町埋蔵文化財報告 11
- 岡村道雄 1976 「ピエス・エスキューについて—岩手県大船渡市基石遺跡出土資料を中心として—」『東北考古学の諸問題』東北考古学会
- 小笠原好彦 1993 「袖窪貝塚出土の縄文後期初頭土器」宮城史学特別号（14・15・16 号） 宮城歴史教育研究会
- 梶原洋 1982 「石匙の使用痕分析—仙台市三神峯遺跡出土資料を使って（東北大学使用痕研究チームによる研究報告その 3）—」 考古学雑誌 68-2
- 金子昭彦 1999 「東北地方 後期前半」『縄文時代文化研究の 100 年』縄文時代 10 縄文時代文化研究会
- 菊地逸夫・吉田雅之・庄子敦 1990 「古代の遺構と出土遺物」『利府町郷楽遺跡Ⅱ』宮城県文化財調査報告書 134・利府町文化財調査報告書 5 宮城県教育委員会・利府町教育委員会
- 北上市教育委員会 1977 『九年橋遺跡第 3 次調査報告書』北上市文化財調査報告書 18
- 北上市教育委員会 1978 『九年橋遺跡第 4 次調査報告書』北上市文化財調査報告書 23
- 北上市教育委員会 1979 『九年橋遺跡第 5 次調査報告書』北上市文化財調査報告書 25
- 北上市教育委員会 1980 『九年橋遺跡第 6 次調査報告書』北上市文化財調査報告書 29
- 北上市教育委員会 1984 『九年橋遺跡第 7 次調査報告書』北上市文化財調査報告書 35
- 北上市教育委員会 1985 『九年橋遺跡第 8 次調査報告書』北上市文化財調査報告書 39
- 北上市教育委員会 1986 『九年橋遺跡第 9 次調査報告書』北上市文化財調査報告書 42
- 北上市教育委員会 1987 『九年橋遺跡第 10 次調査報告書』北上市文化財調査報告書 44
- 北上市教育委員会 1988 『九年橋遺跡第 11 次調査報告書』北上市文化財調査報告書 47
- 北上市教育委員会 1991 『九年橋遺跡第 10 次調査報告書（補遺）』北上市文化財調査報告書 66
- 楠本政助 1973 「仙台湾における先史狩漁文化」『矢本町史第一巻 先史 別刷』矢本町史編纂委員会
- 桑原滋郎 1969 「ロクロ土師器について」 歴史 39
- 後藤勝彦 1956 「宮城県宮戸島里浜台囲貝塚の研究」宮城県の地理と歴史 1
- 後藤勝彦 1957 「陸前宮戸島里浜台囲貝塚出土の土器編年について」塩釜市教育委員会教育論文 2
- 後藤勝彦 2004 「南境貝塚調査の層位的成果Ⅰ 7 トレンチの場合—陸前地方縄文中期から後期の編年学的研究」宮城考古学 6 宮城県考古学会
- 後藤勝彦 2005 「南境貝塚調査の層位的成果Ⅱ 8 トレンチの場合—陸前地方縄文中期から後期の編年学的研究」宮城史学 24 宮城歴史教育研究会
- 小林達雄 1998 『古代史復元 3 縄文人の道具』
- 佐川正敏・鈴木雅編 2006 『山形県東置賜郡高島町 日向洞窟遺跡西地区出土石器群の研究Ⅰ—縄文時代草創期の槍先形尖頭器を中心とする石器製作址の様相—』
- 寒河江市教育委員会 1989 『柴橋遺跡 発掘調査報告書』山形県寒河江市埋蔵文化財調査報告書 7
- 佐々木繁喜 1997 「東北地方の黒曜石」岩手考古学 9 岩手考古学会



- 佐々木繁喜 2009 「蔵王町から発見された黒曜石について」地学部会誌 46 宮城県高等学校理科研究会
- 縄文セミナーの会 2007 『第 20 回縄文セミナー 中期終末から後期初頭の再検討』
- 鈴木道之助 1981 『図録 石器の基礎知識Ⅲ 縄文』
- 須藤隆 1985 「東北地方における縄文集落の研究」東北大学考古学研究所報告 1 東北大学文学部考古学研究室
- 須藤隆編 1984 『縄文時代晩期貝塚の研究－中沢目貝塚－』東北大学文学部考古学研究会
- 須藤隆編 1986 『中沢目貝塚－第 3 次調査概報－』東北大学考古学研究会
- 須藤隆編 1995 『縄文時代晩期貝塚の研究 2－中沢目貝塚Ⅱ－』東北大学考古学研究室
- 仙台市教育委員会 1981 『仙台市大野田六反田遺跡発掘調査報告書－名取川下流域の縄文時代中期～平安時代の集落跡－』仙台市文化財調査報告書 34
- 仙台市教育委員会 1983 「梨野 A 遺跡」『茂庭－茂庭住宅団地造成工事地内遺跡発掘調査報告－』仙台市文化財調査報告書 45
- 仙台市教育委員会 1987 『六反田遺跡Ⅲ－名取川下流域の縄文時代後期・律令時代集落跡－』仙台市文化財調査報告書 102
- 仙台市教育委員会 1989 『上野遺跡－電力鉄塔関係発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書 127
- 仙台市教育委員会 1995a 『高柳遺跡調査報告書』仙台市文化財調査報告書 190
- 仙台市教育委員会 1995b 『六反田遺跡』『仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書Ⅳ』仙台市文化財調査報告書 199
- 仙台市教育委員会 1996a 『下ノ内浦・山口遺跡』『仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書Ⅴ』仙台市文化財調査報告書 207
- 仙台市教育委員会 1996b 『仙台市宮城地区 野川遺跡』仙台市文化財調査報告書 205
- 仙台市教育委員会 2010 『上野遺跡 第 6・7 次調査－都市計画道路「富沢山田線」関連遺跡発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書 365
- 高橋哲 2007 「石匙の使用痕分析－植物加工具としての石匙についての考察－」『考古学談叢』東北大学大学院文学研究科考古学研究室・須藤隆先生退官記念論文集刊行会編
- 田中耕作 1985 「所謂三十稲場式土器の成立について」信濃 37-4
- 田中耕作 1989 「三十稲場式土器様式」『縄文土器大観 4 後期・晩期・続縄文』
- 築館町教育委員会 2005 『鰻沢遺跡－ふるさと農道緊急整備事業に係る町道木戸 2 号線改良工事に伴う発掘調査報告書－』築館町文化財調査報告書 18
- 東北大学大学院部学研究科考古学研究室・角田市教育委員会 2008 『阿武隈川下流域における縄文貝塚の研究－土浮貝塚－』
- 東北歴史資料館 1984 『里浜貝塚Ⅲ－宮城県鳴瀬町宮戸島里浜貝塚西畑地点の調査・研究Ⅲ－』東北歴史資料館資料集 9
- 東北歴史資料館 1991 『里浜貝塚Ⅷ－宮城県鳴瀬町里浜貝塚台頂部地点の調査－』東北歴史資料館資料集 32
- 東北歴史資料館 1997 『里浜貝塚Ⅹ－宮城県鳴瀬町宮戸島里浜貝塚風越地点の調査－』東北歴史資料館資料集 43
- 戸沢充則編 1994 『縄文時代研究辞典』
- 新津市教育委員会 1982 『平遺跡緊急発掘調査報告書』新津市文化財調査報告書 1
- 西田泰民 1989 「門前式土器、南境式土器、網取式土器など」『縄文土器大観 4 後期・晩期・続縄文』
- 丹羽茂 1989 「中期大木式土器様式」『縄文土器大観 1 草創期・早期・前期』
- 林謙作 1965 「縄文文化の発展と地域性 東北」『日本の考古学Ⅱ』
- 福島県立博物館 1988 『三貫地貝塚』福島県立博物館調査報告 17
- 藤沼邦彦 1989 「亀ヶ岡式土器様式」『縄文土器大観 4 後期・晩期・続縄文』
- 藤沼邦彦 1972 「宮城県石巻市沼津貝塚」日本考古学年報 20 日本考古学協会
- 本間宏 1994 「大木 10 式土器の考え方」しのぶ考古 10 しのぶ考古学会
- 本間宏 2008 「南境式・網取式土器」『総覧 縄文土器』
- 前山精明 1994 「上ノ原遺跡」『巻町史 資料編Ⅰ 考古』巻町史編纂委員会
- 馬目順一 1968 「網取貝塚第四地点発見の堀之内Ⅰ式期土器の考察」『小名浜』
- 馬目順一 1970 「いわき市下片寄貝塚発見の後期縄文式土器について」考古 16 福島県立磐城高等学校史学研究クラブ
- 馬目順一 1975 『大畑貝塚発掘調査報告』福島県いわき市教育委員会
- 馬目順一 1977 「いわゆる「網取貝塚 C 地区」の土器について」考古 19 福島県立磐城高等学校史学研究クラブ
- 御堂島正 1994 「踏みつけによる遺物の移動と損傷」旧石器考古学 48
- 御堂島正 1996 「微細剥離痕を有する剥片」の再検討－偶発剥離の可能性－」旧石器考古学 52
- 宮城県 1981 『宮城県史 34 (資料篇 11) 資料集Ⅴ 考古資料』宮城県史刊行会
- 宮城県教育委員会 1969 『埋蔵文化財第 4 次緊急調査概報－南境貝塚－』宮城県文化財調査報告書 20
- 宮城県教育委員会 1981a 「上新田遺跡」『長者原貝塚・上新田遺跡』宮城県文化財調査報告書 78
- 宮城県教育委員会 1981b 「東足立遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ』宮城県文化財調査報告書 81
- 宮城県教育委員会 1982a 「勝負沢遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ』宮城県文化財調査報告書 83
- 宮城県教育委員会 1982b 『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅶ (菅生田遺跡)』宮城県文化財調査報告書 92
- 宮城県教育委員会 1984 『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅸ (二屋敷遺跡)』宮城県文化財調査報告書 99
- 宮城県教育委員会 1986 『田柄貝塚』宮城県文化財調査報告書 111
- 宮城県教育委員会 1987a 「中ノ内 B 遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告書Ⅱ』宮城県文化財調査報告書 121
- 宮城県教育委員会 1987b 『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ 小梁川遺跡』宮城県文化財調査報告書 122
- 宮城県教育委員会 1994 『摺萩遺跡』宮城県文化財調査報告書 132
- 宮城県教育委員会 2003 『嘉倉貝塚』宮城県文化財調査報告書 192
- 宮城県教育委員会 2007 『山居遺跡ほか (縄文時代編)－三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅹ－』宮城県文化財調査報告書 214

- 宮城県教育委員会 2010『鍛冶沢遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書 222
- 柳澤清一 1992「仙南地方における後期初頭土器の成立」北奥古代文化 22
- 柳澤清一 1996「東日本における縄紋中・後期の別境界と広域編年軸の検討」古代 102
- 山内清男 1930「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」考古学 1-3
- 山内清男 1932「縄紋式土器の終末」ドルメン 1-6
- 山内清男 1937「縄紋土器型式の細別と大別」先史考古学 1-1
- 吉田格 1960『横浜市称名寺貝塚』東京都武蔵野郷土館調査報告書 1
- 利府町教育委員会 1987『菅谷六田遺跡－縄文時代前期中葉集落跡の発掘調査報告－』利府町文化財調査報告書 3

# 写真図版





1. 遺跡遠景（永野段丘上から南西方向に調査区周辺を望む）



2. 遺跡遠景（東から調査区周辺を望む）



3. 遺跡遠景（北東から調査区周辺を望む）



4. 調査前現況（南西から）



5. 調査前現況（北東から）



1. 遺構確認調査 作業風景



2. B区発掘調査 作業風景



3. B区発掘調査 作業風景



4. B区発掘調査 作業風景



5. A区 全景 完掘状況 (南から)



6. SK19 フラスコ状土坑 完掘状況 (西から)



7. SK19 フラスコ状土坑 土層断面 (東から)



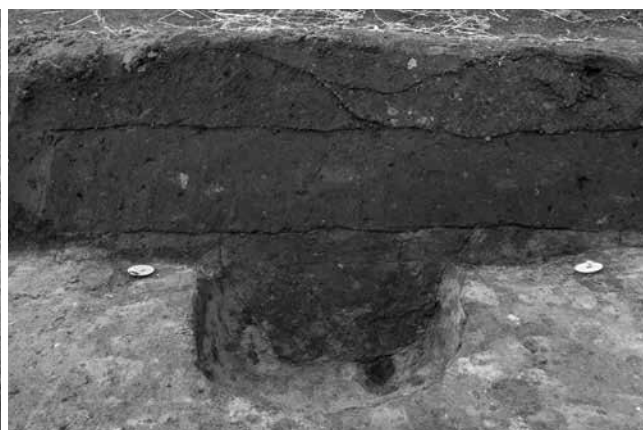
1. SK20 フラスコ状土坑 完掘状況 (南から)



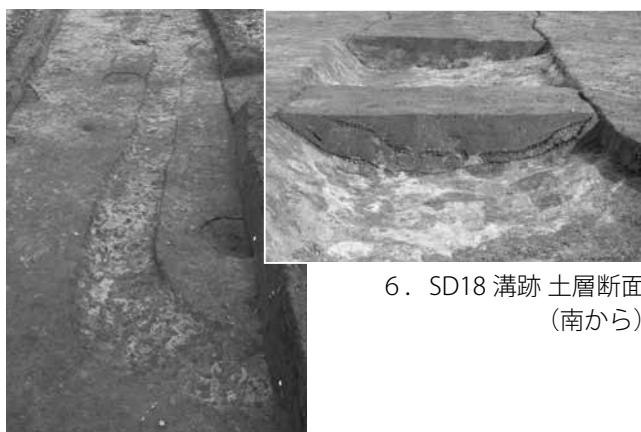
2. SK45 土坑 土層断面 (東から)



3. SK49 土坑 半掘状況 (西から)



4. SK49 土坑 土層断面 (東から)



5. SD18 溝跡 完掘状況 (南から)

6. SD18 溝跡 土層断面  
(南から)



7. B区遺構確認状況 (南から)



8. B区遺構確認状況 (西から)



9. B区遺構確認状況 (北から)



1. B区遺構確認状況（北東から）



2. B区中央部遺構確認状況（北から）





1. B区南部遺構確認状況（西から）



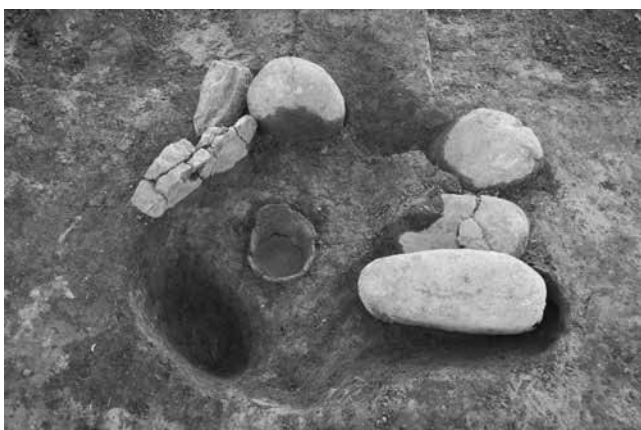
2. B区遺構完掘状況（西から）



3. C区遺構確認状況（南から）



4. SI65 竪穴住居跡 床面検出状況（北から）



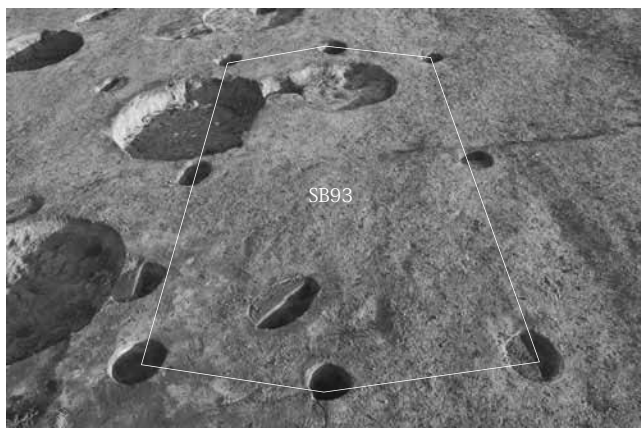
5. SI65 竪穴住居跡 石組炉跡検出状況（北から）



6. SI65 竪穴住居跡 石組炉跡土層断面（北から）



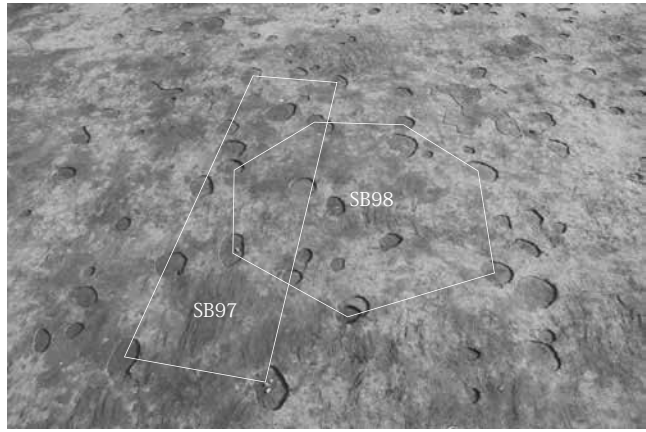
7. SI65 竪穴住居跡 石組炉跡埋設土器検出状況（北から）



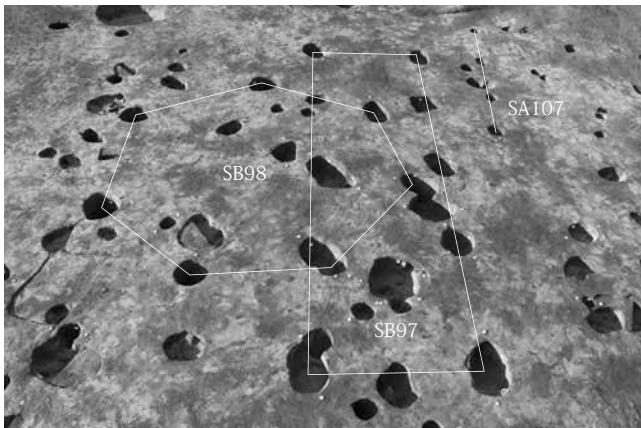
8. SB93 掘立柱建物跡 完掘状況（西から）



1. SB93 掘立柱建物跡 P3 土層断面 (北から)



2. SB97・SB98 掘立柱建物跡 検出状況 (西から)



3. SB97・SB98・SA107 完掘状況 (東から)



4. SB97 掘立柱建物跡 P3 土層断面 (北から)



5. SB97 掘立柱建物跡 P4 土層断面 (北から)



6. SB98 掘立柱建物跡 P5 土層断面 (東から)



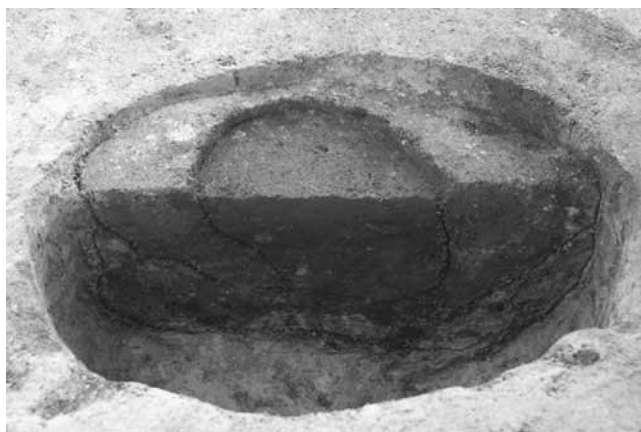
7. SB98 掘立柱建物跡 P6 土層断面 (西から)



8. SB100 掘立柱建物跡 P1 土層断面 (南から)



1. SB100 掘立柱建物跡 P3 土層断面 (南から)



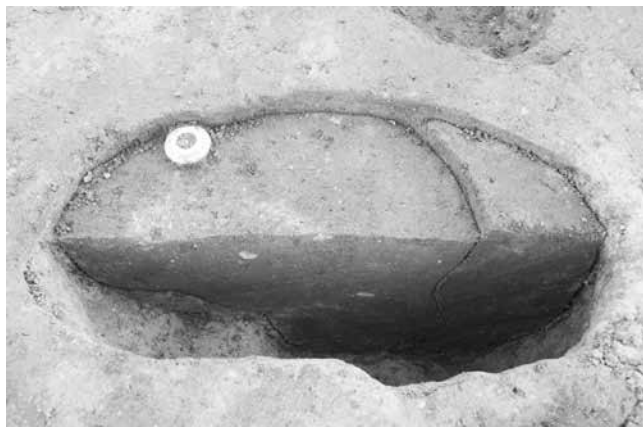
2. SB103 掘立柱建物跡 P1 土層断面 (南西から)



3. SB104 掘立柱建物跡 P4 土層断面 (南から)



4. SB104 掘立柱建物跡 P6 土層断面 (南から)



5. SB105 掘立柱建物跡 P1 土層断面 (西から)



6. SB105 掘立柱建物跡 P4 土層断面 (西から)



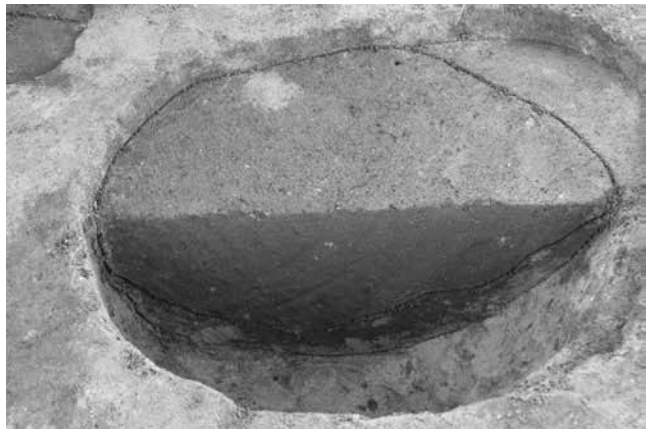
7. SB108 掘立柱建物跡 P1 土層断面 (南から)



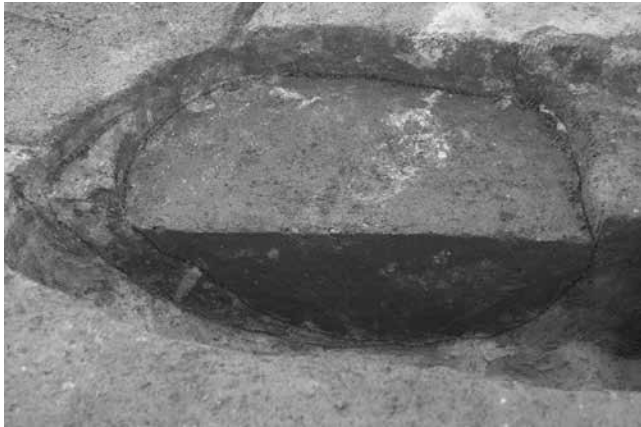
8. SB108 掘立柱建物跡 P3 土層断面 (南から)



1. SB111 掘立柱建物跡 P5 土層断面 (西から)



2. SB112 掘立柱建物跡 P3 土層断面 (北から)



3. SB113 掘立柱建物跡 P2 土層断面 (東から)



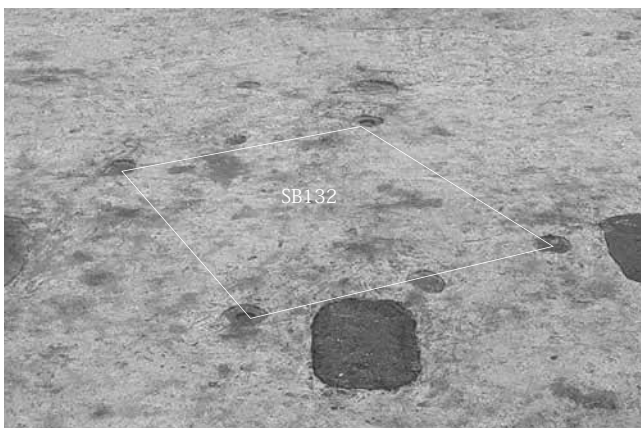
4. SB113 掘立柱建物跡 P6 土層断面 (南から)



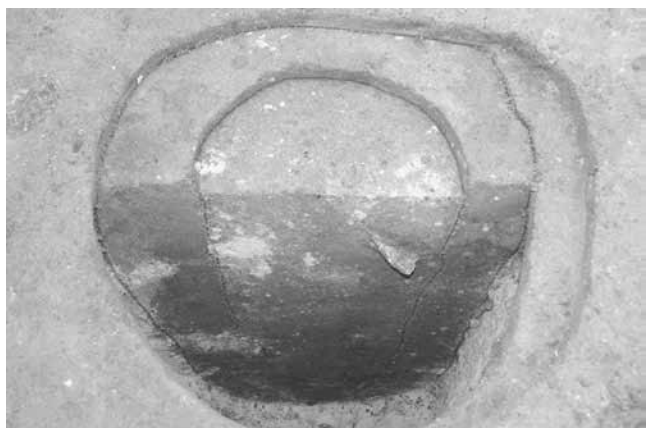
5. SB116 掘立柱建物跡 P2 土層断面 (東から)



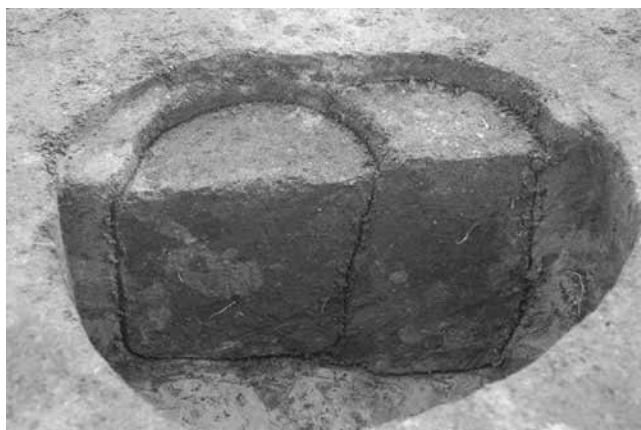
6. SB120 掘立柱建物跡 P2 土層断面 (東から)



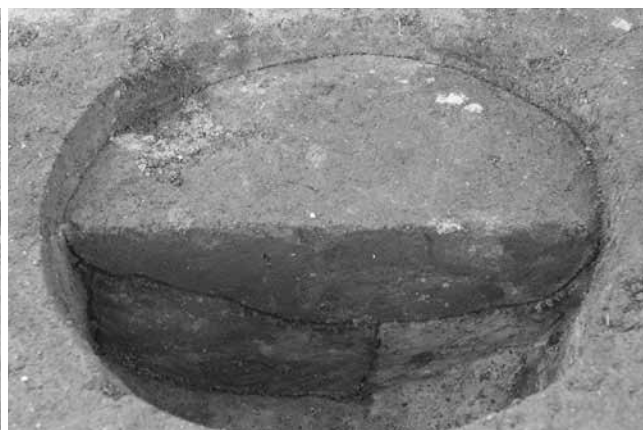
7. SB132 掘立柱建物跡 検出状況 (東から)



8. SB135 掘立柱建物跡 P1 土層断面 (西から)



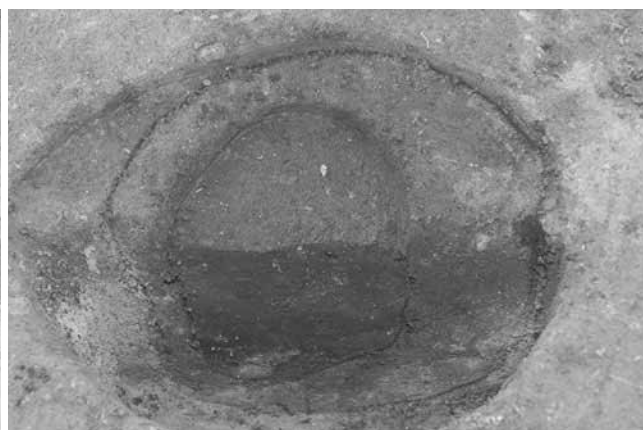
1. SB135 掘立柱建物跡 P4 土層断面 (西から)



2. SA107 柱列跡 P4 土層断面 (北から)



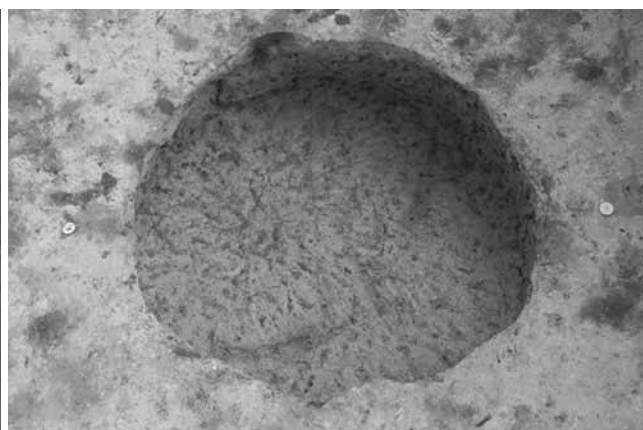
3. SA109 柱列跡 P2 土層断面 (南から)



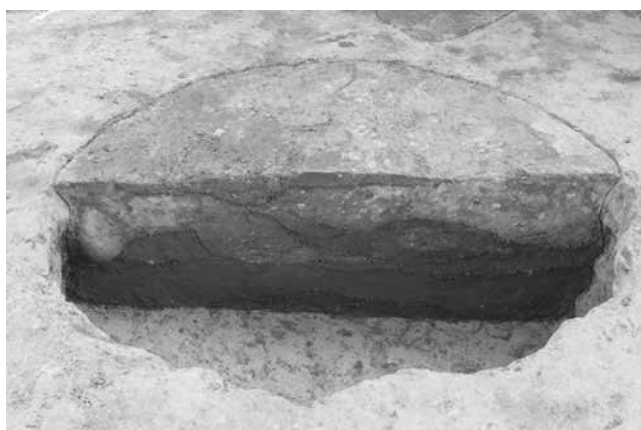
4. SA117 柱列跡 P3 土層断面 (北から)



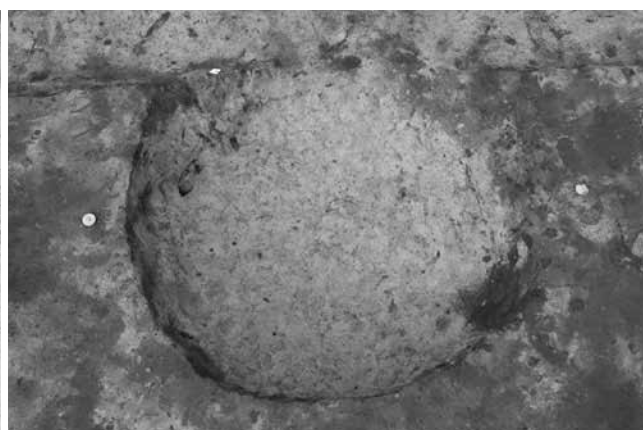
5. SL86 炉跡 検出状況 (北から)



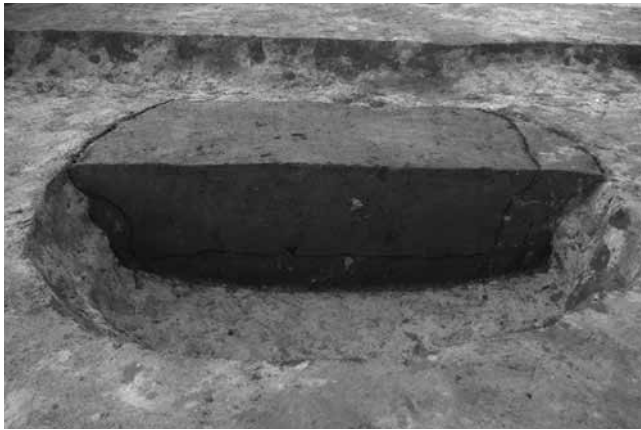
6. SK7 フラスコ状土坑 完掘状況 (西から)



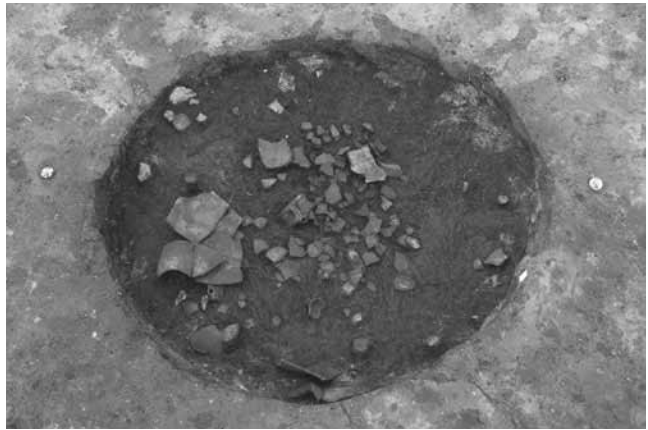
7. SK7 フラスコ状土坑 土層断面 (西から)



8. SK9 フラスコ状土坑 完掘状況 (東から)



1. SK9 フラスコ状土坑 土層断面 (東から)



2. SK22 フラスコ状土坑 遺物出土状況 (南から)



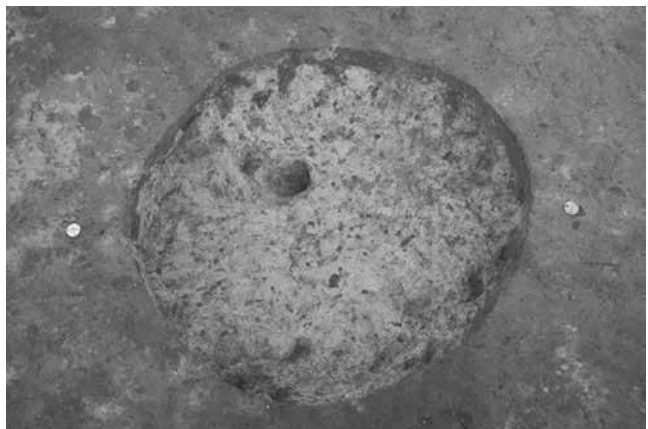
3. SK22 フラスコ状土坑 遺物出土状況 (南から)



4. SK22 フラスコ状土坑 完掘状況 (南から)



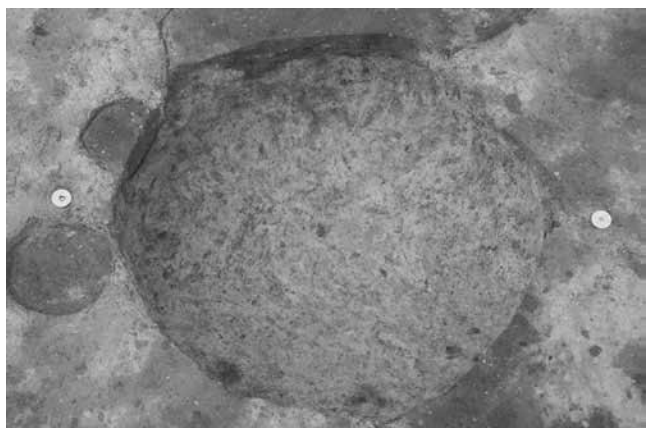
5. SK22 フラスコ状土坑 土層断面 (南から)



6. SK28 フラスコ状土坑 完掘状況 (南から)



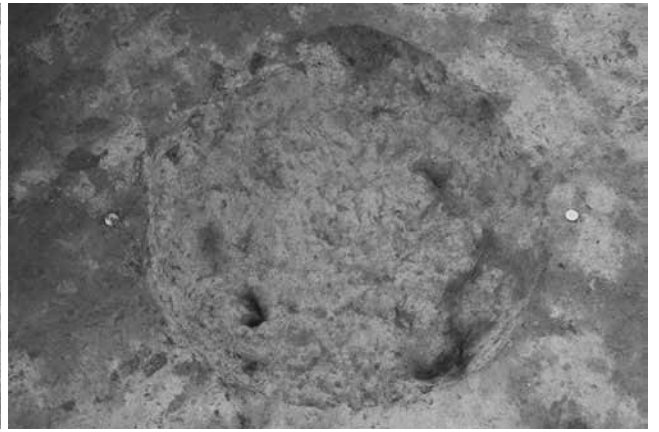
7. SK28 フラスコ状土坑 土層断面 (南から)



8. SK52 フラスコ状土坑 完掘状況 (南東から)



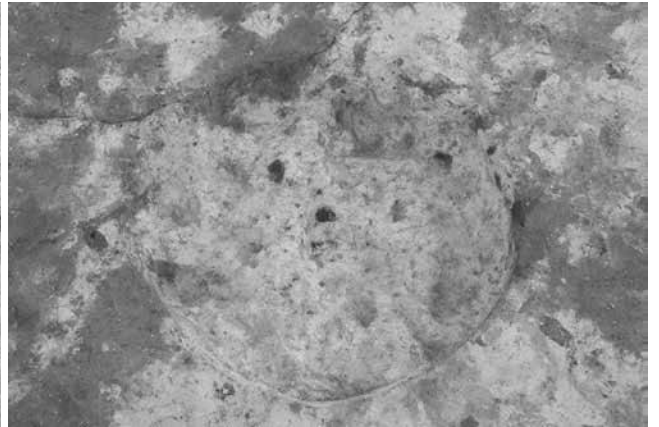
1. SK52 フラスコ状土坑 土層断面 (南東から)



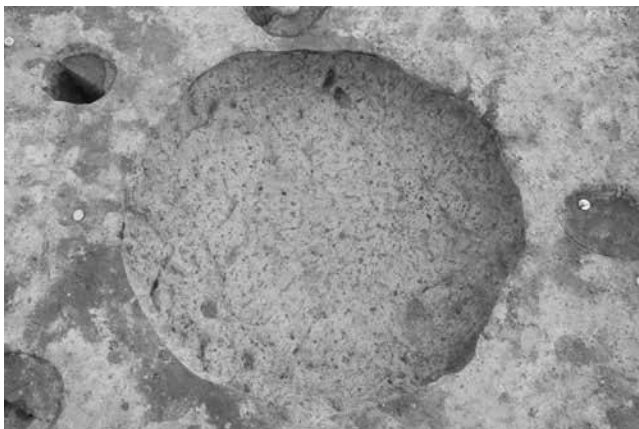
2. SK54 フラスコ状土坑 完掘状況 (北から)



3. SK54 フラスコ状土坑 土層断面 (北から)



4. SK55 フラスコ状土坑 完掘状況 (北西から)



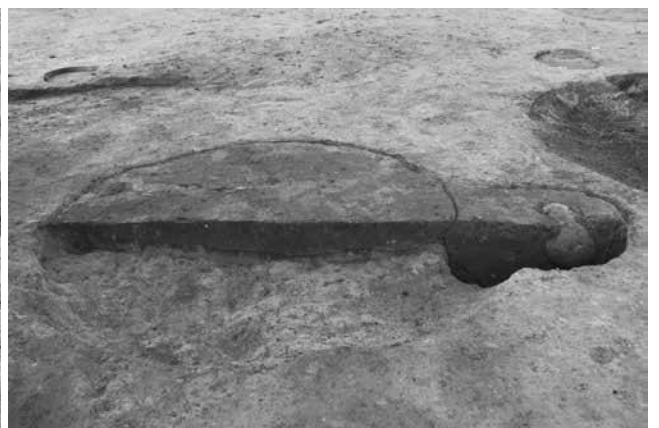
5. SK56 フラスコ状土坑 完掘状況 (北西から)



6. SK56 フラスコ状土坑 土層断面 (北西から)



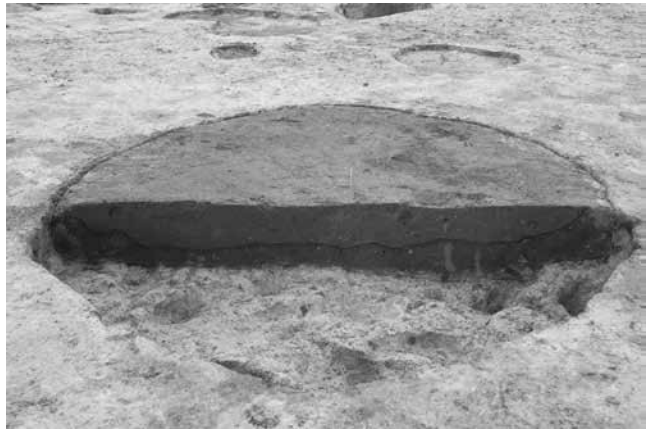
7. SK56 フラスコ状土坑 遺物出土状況 (北東から)



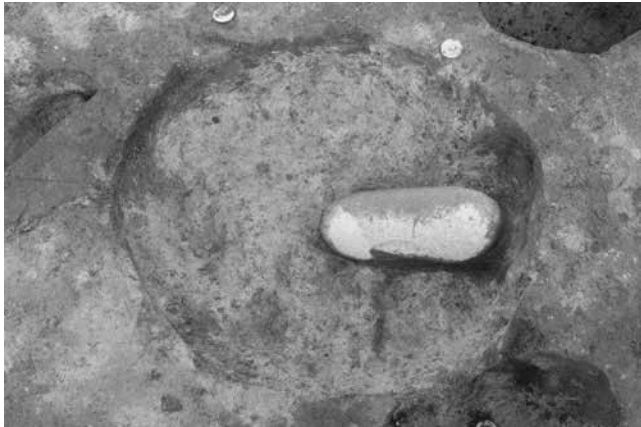
8. SK62 フラスコ状土坑 土層断面 (東から)



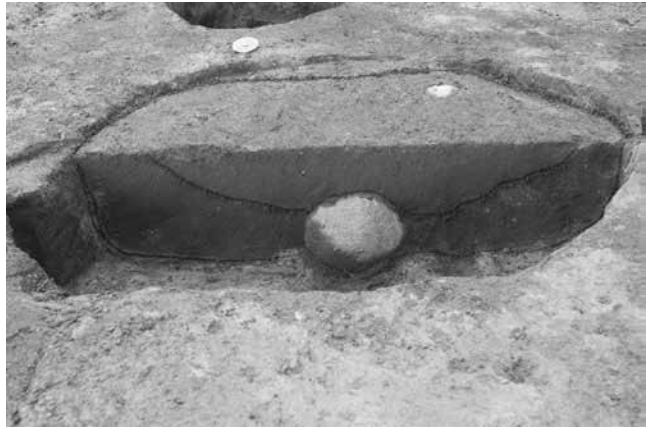
1. SK63 フラスコ状土坑 土層断面 (西から)



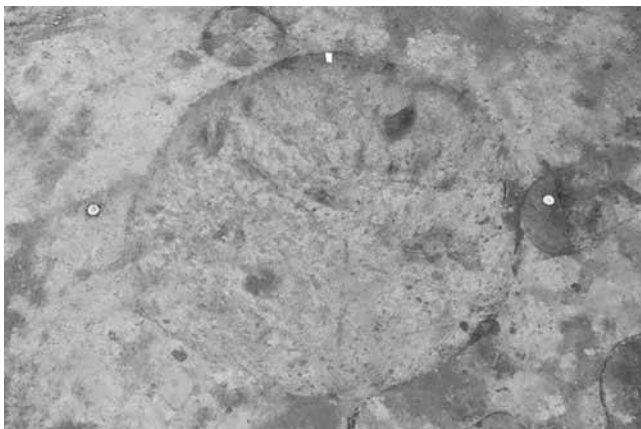
2. SK66 フラスコ状土坑 土層断面 (南から)



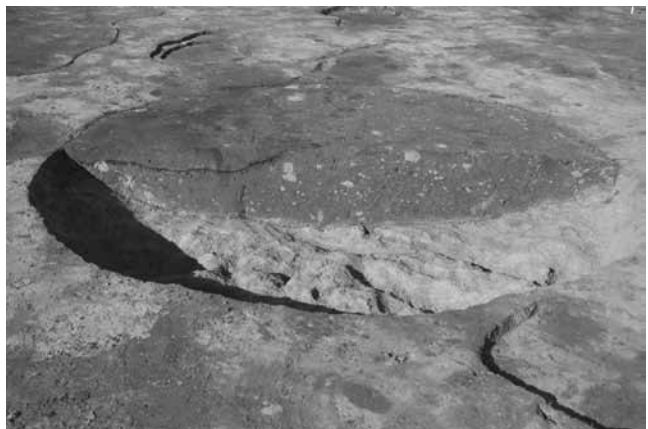
3. SK67 フラスコ状土坑 棒状石製品出土状況 (東から)



4. SK67 フラスコ状土坑 土層断面 (南から)



5. SK68 フラスコ状土坑 完掘状況 (西から)



6. SK68 フラスコ状土坑 土層断面 (東から)



7. SK73 フラスコ状土坑 完掘状況 (南から)



8. SK73 フラスコ状土坑 土層断面 (南から)

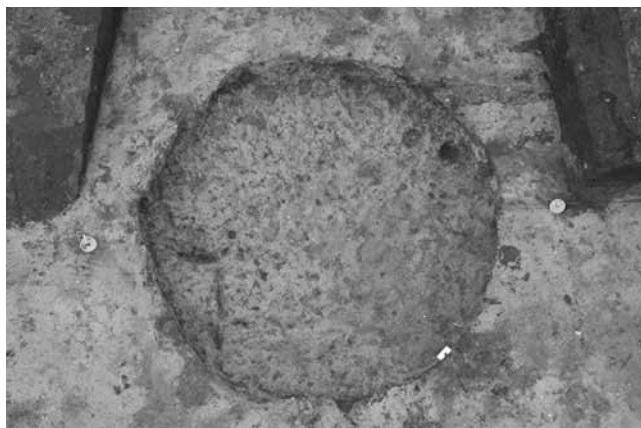




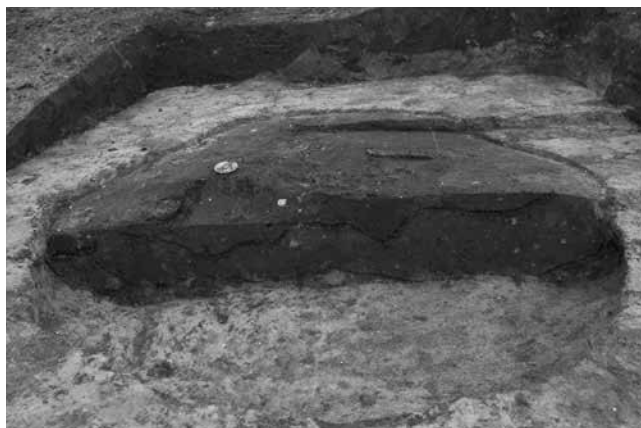
1. SK74 フラスコ状土坑 土層断面 (北から)



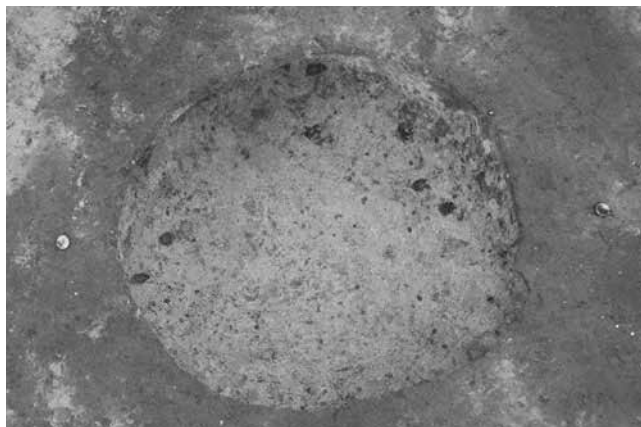
2. SK76 フラスコ状土坑 土層断面 (北から)



3. SK79 フラスコ状土坑 完掘状況 (東から)



4. SK79 フラスコ状土坑 土層断面 (東から)



5. SK82 フラスコ状土坑 完掘状況 (南から)



6. SK82 フラスコ状土坑 土層断面 (南から)



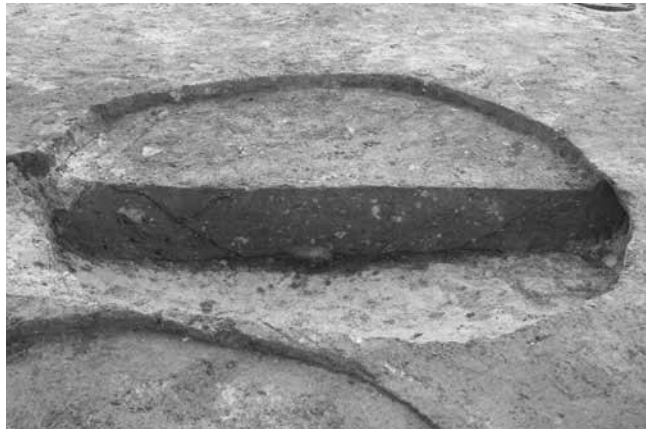
7. SK83 フラスコ状土坑 完掘状況 (西から)



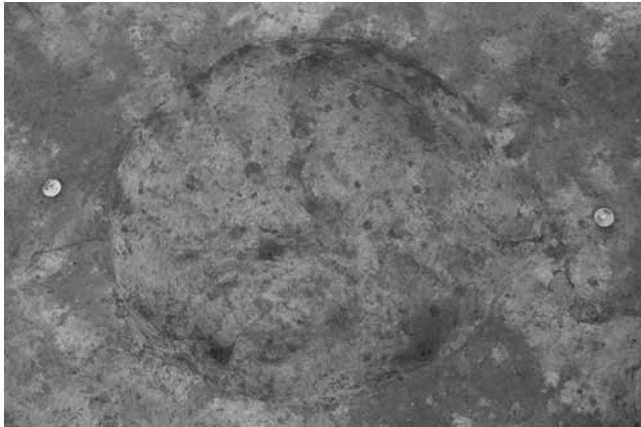
8. SK83 フラスコ状土坑 完掘状況 (南から)



1. SK87 フラスコ状土坑 完掘状況 (南から)



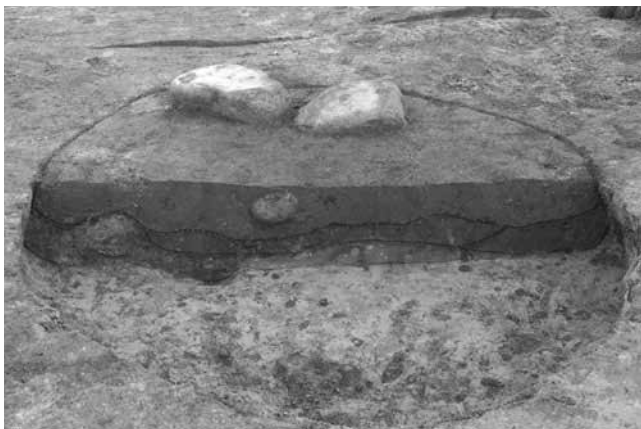
2. SK87 フラスコ状土坑 土層断面 (南から)



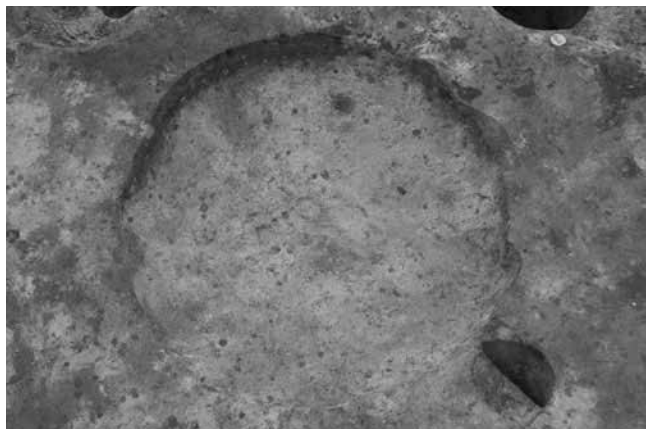
3. SK89 フラスコ状土坑 完掘状況 (西から)



4. SK89 フラスコ状土坑 土層断面 (西から)



5. SK90 フラスコ状土坑 土層断面 (東から)



6. SK91 フラスコ状土坑 完掘状況 (南から)



7. SK91 フラスコ状土坑 土層断面 (南から)



8. SK92 フラスコ状土坑 遺物出土状況 (南から)



1. SK92 フラスコ状土坑 遺物出土状況 (東から)



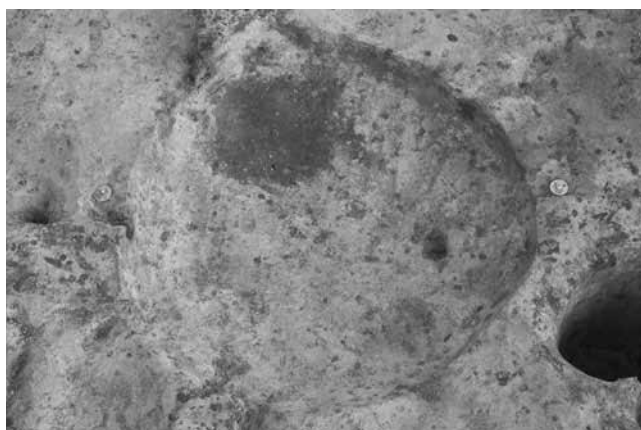
2. SK92 フラスコ状土坑 遺物出土状況 (南から)



3. SK92 フラスコ状土坑 完掘状況 (南から)



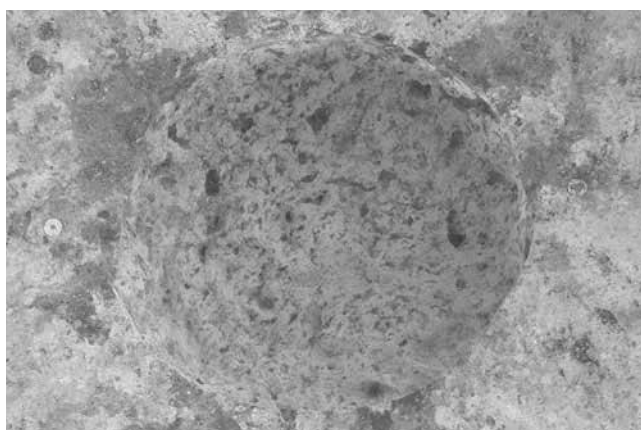
4. SK92 フラスコ状土坑 土層断面 (東から)



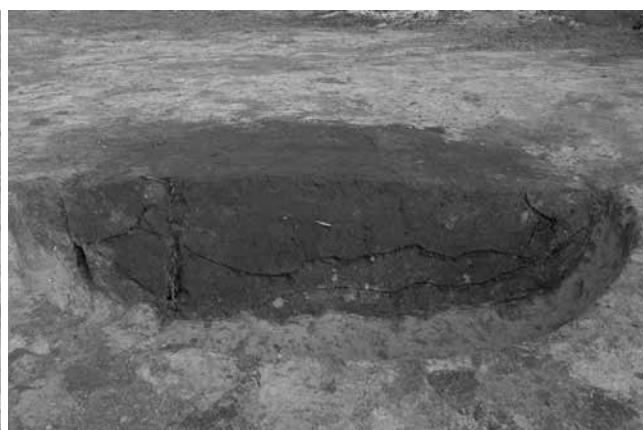
5. SK101 フラスコ状土坑 完掘状況 (西から)



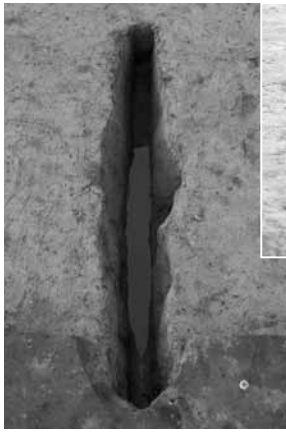
6. SK101 フラスコ状土坑 土層断面 (西から)



7. SK125 フラスコ状土坑 完掘状況 (南から)



8. SK125 フラスコ状土坑 土層断面 (南から)



1. SK69 落とし穴状土坑 完掘状況 (東から)



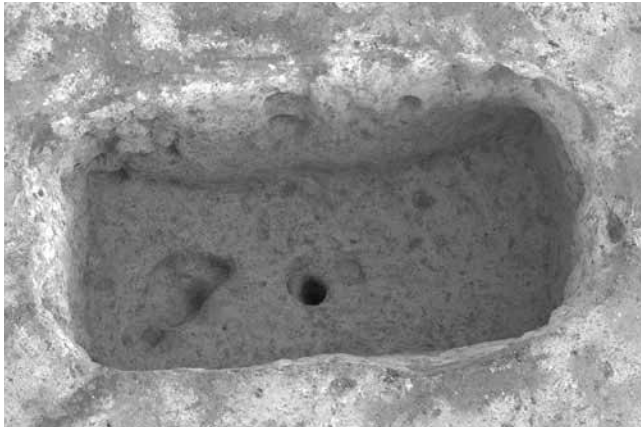
2. SK69 落とし穴状土坑  
土層断面 (東から)



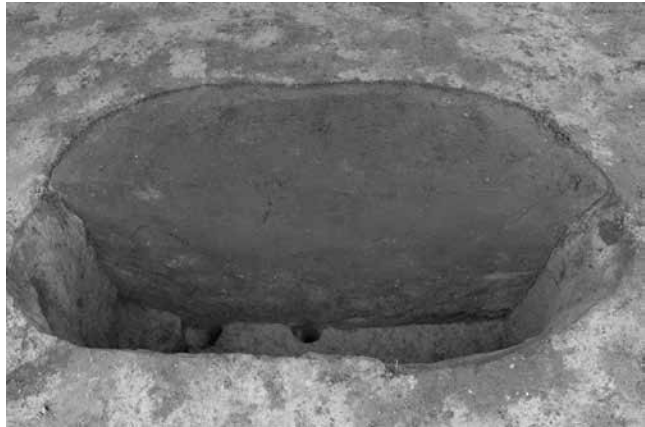
3. SK123 落とし穴状土坑 完掘状況 (西から)



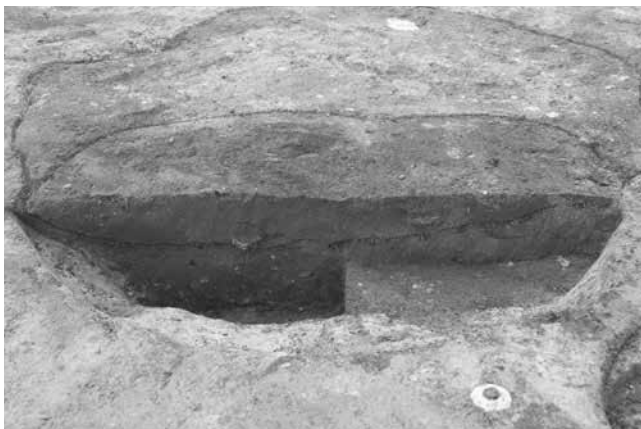
4. SK123 落とし穴状土坑  
土層断面 (東から)



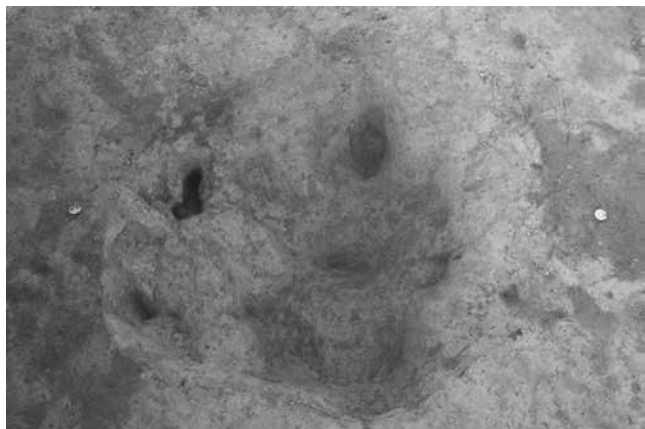
5. SK124 落とし穴状土坑 完掘状況 (南から)



6. SK124 落とし穴状土坑 土層断面 (南から)



7. SK6 土坑 土層断面 (東から)



8. SK36 土坑 完掘状況 (東から)



9. SK36 土坑 土層断面 (西から)



10. SK39 土坑 完掘状況 (北から)



1. SK39 土坑 土層断面 (北から)



2. SK44 土坑 土層断面 (東から)



3. SK50 土坑 完掘状況 (南から)



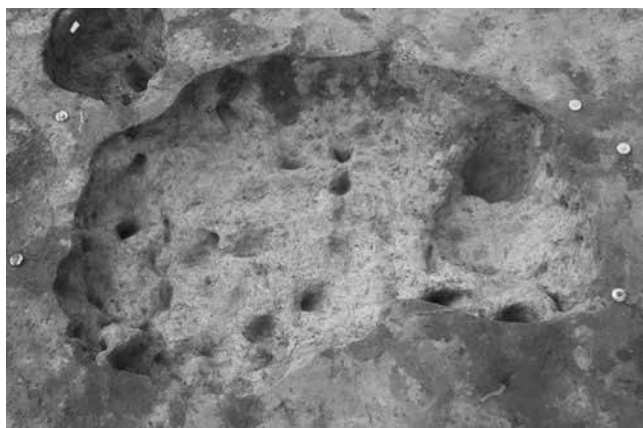
4. SK50 土坑 土層断面 (北東から)



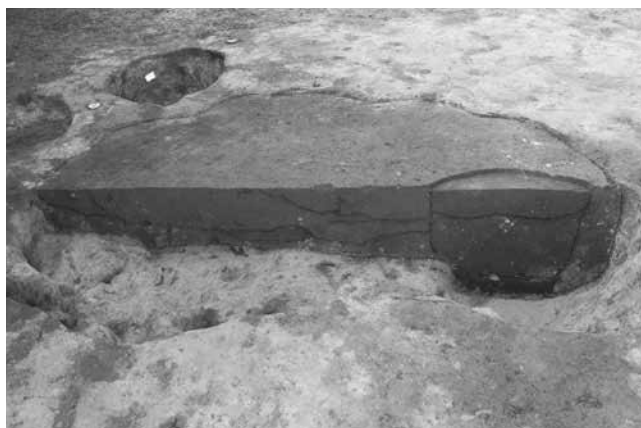
5. SK51 土坑 土層断面 (北西から)



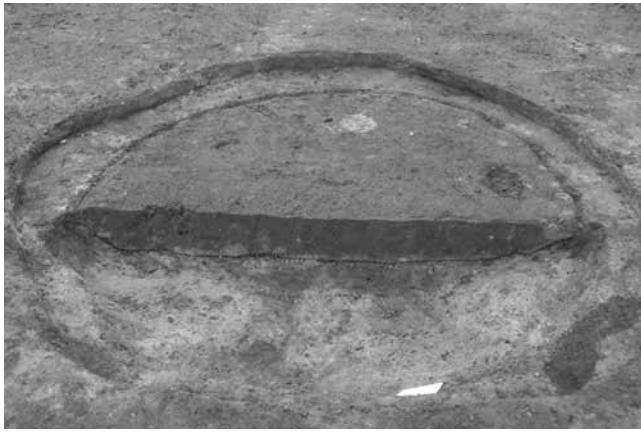
6. SK64 土坑 土層断面 (北から)



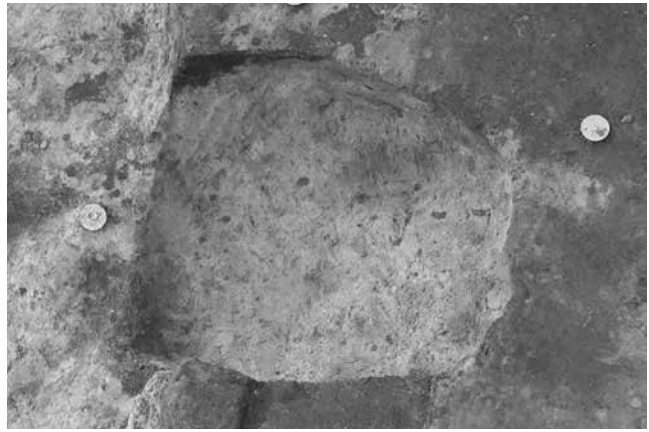
7. SK70 土坑 完掘状況 (北から)



8. SK70 土坑・SB114 掘立柱建物跡 P1 土層断面 (北東から)



1. SK81 土坑 土層断面 (南から)



2. SK102 土坑 完掘状況 (東から)



3. SK102 土坑 土層断面 (東から)



4. SI16 竪穴住居跡 床面遺物出土状況 (西から)



5. SI16 竪穴住居跡 床面検出状況 (西から)



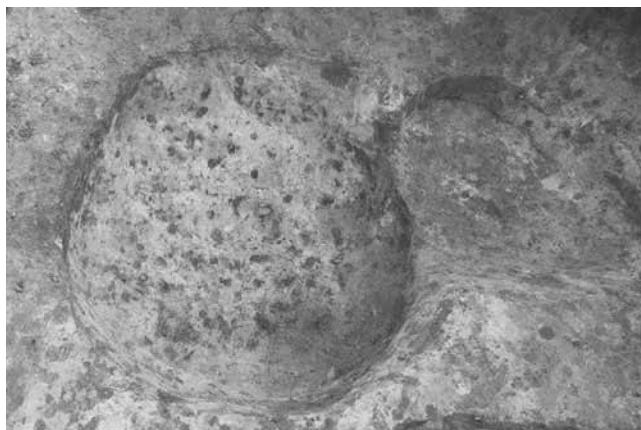
1. SI16 竪穴住居跡 カマド検出状況 (西から)



2. SI16 竪穴住居跡 カマド付近遺物出土状況 (西から)



3. SI16 竪穴住居跡 カマド付近遺物出土状況 (西から)



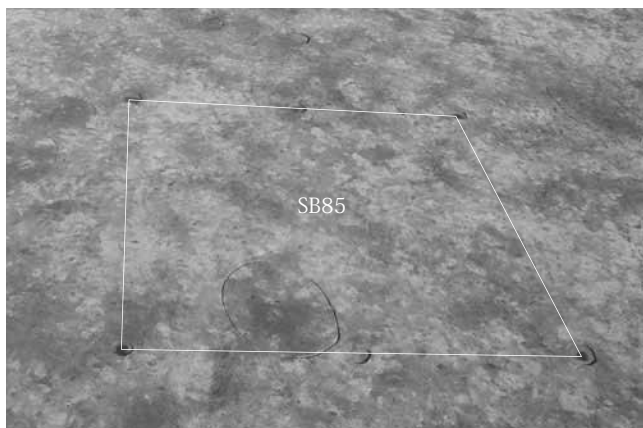
4. SI16 竪穴住居跡 K1・K2 貯蔵穴完掘状況 (西から)



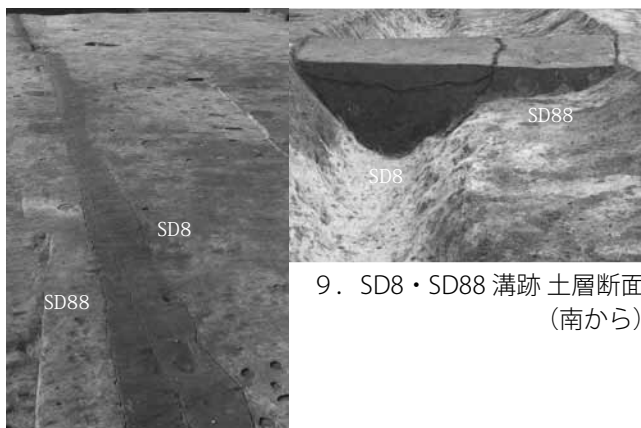
5. SI16 竪穴住居跡 K1・K2 貯蔵穴 土層断面 (西から)



6. SX78 竪穴状遺構 検出状況 (東から)

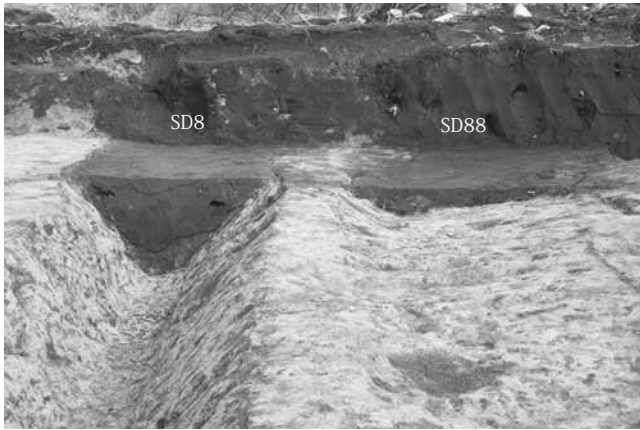


7. SB85 掘立柱建物跡 検出状況 (南から)

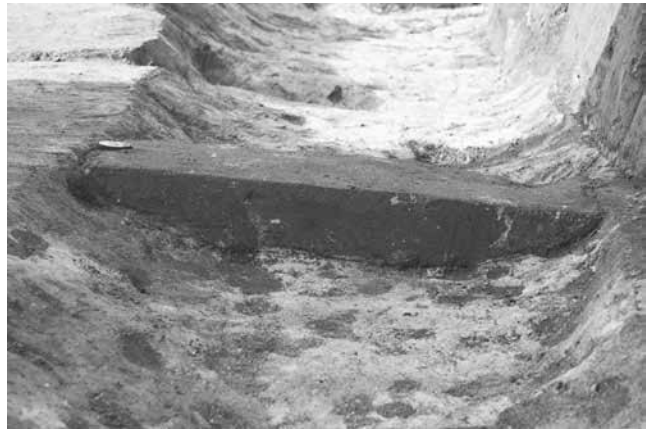


8. SD8・SD88 溝跡 検出状況 (北から)

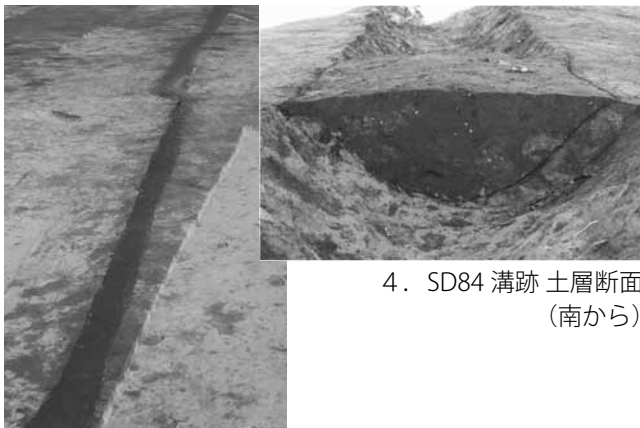
9. SD8・SD88 溝跡 土層断面 (南から)



1. SD8・SD88 溝跡 土層断面 (南から)



2. SD24 溝跡 土層断面 (東から)

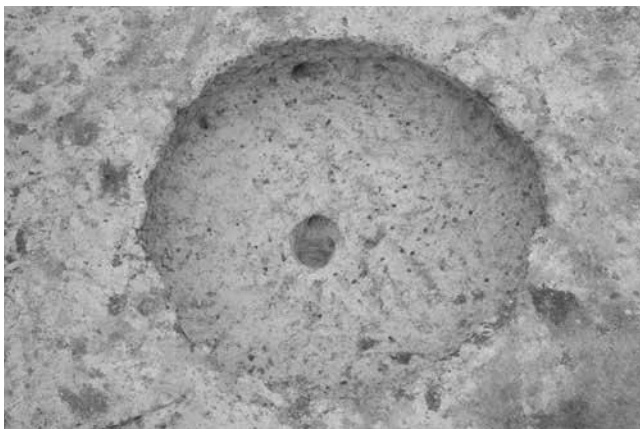


3. SD84 溝跡 検出状況 (南から)

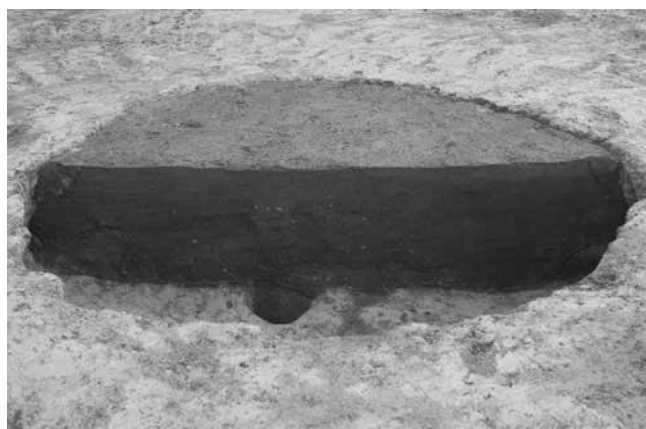
4. SD84 溝跡 土層断面 (南から)



5. D区遺構確認状況 (南から)



6. SK126 フラスコ状土坑 完掘状況 (南から)



7. SK126 フラスコ状土坑 土層断面 (南から)

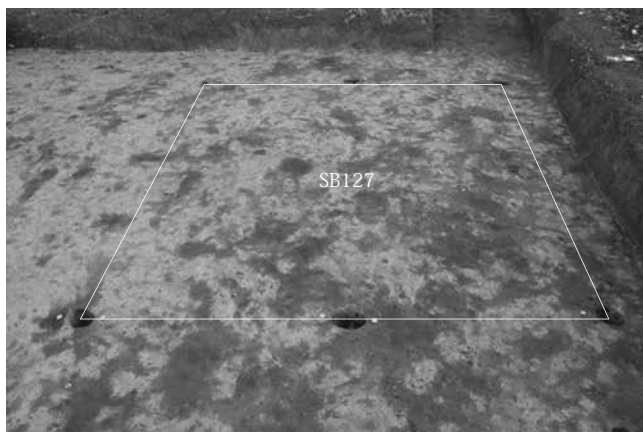


8. SK122 落とし穴状土坑 完掘状況 (南から)

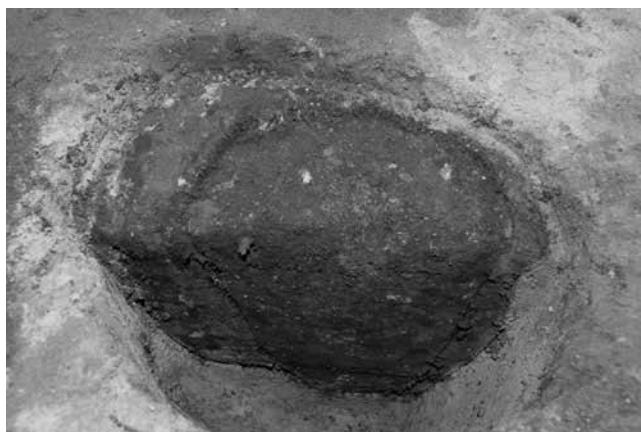


9. SK122 落とし穴状土坑 土層断面 (南から)

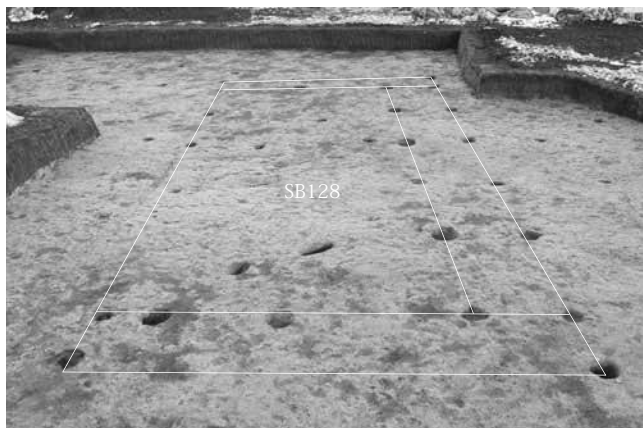




1. SB127 掘立柱建物跡 完掘状況 (南から)



2. SB127 掘立柱建物跡 P6 土層断面 (南から)



3. SB128 掘立柱建物跡 完掘状況 (西から)



4. SB128 掘立柱建物跡 P11 土層断面 (南から)



5. SB128 掘立柱建物跡 P22 土層断面 (南から)



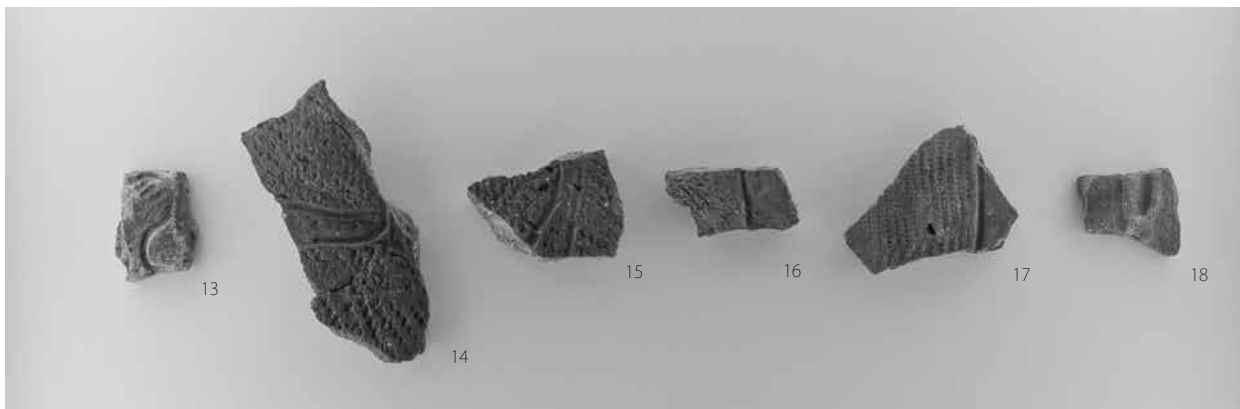
6. D区発掘調査 作業風景



7. D区発掘調査 作業風景



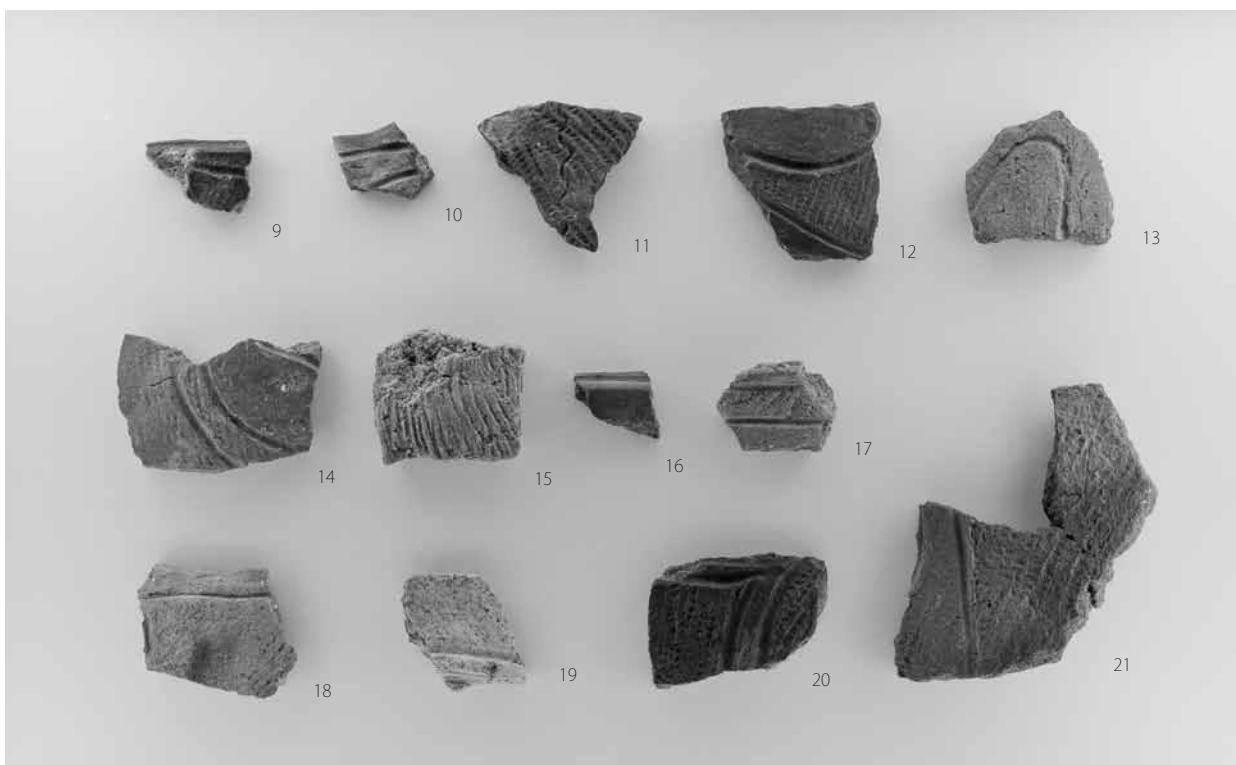
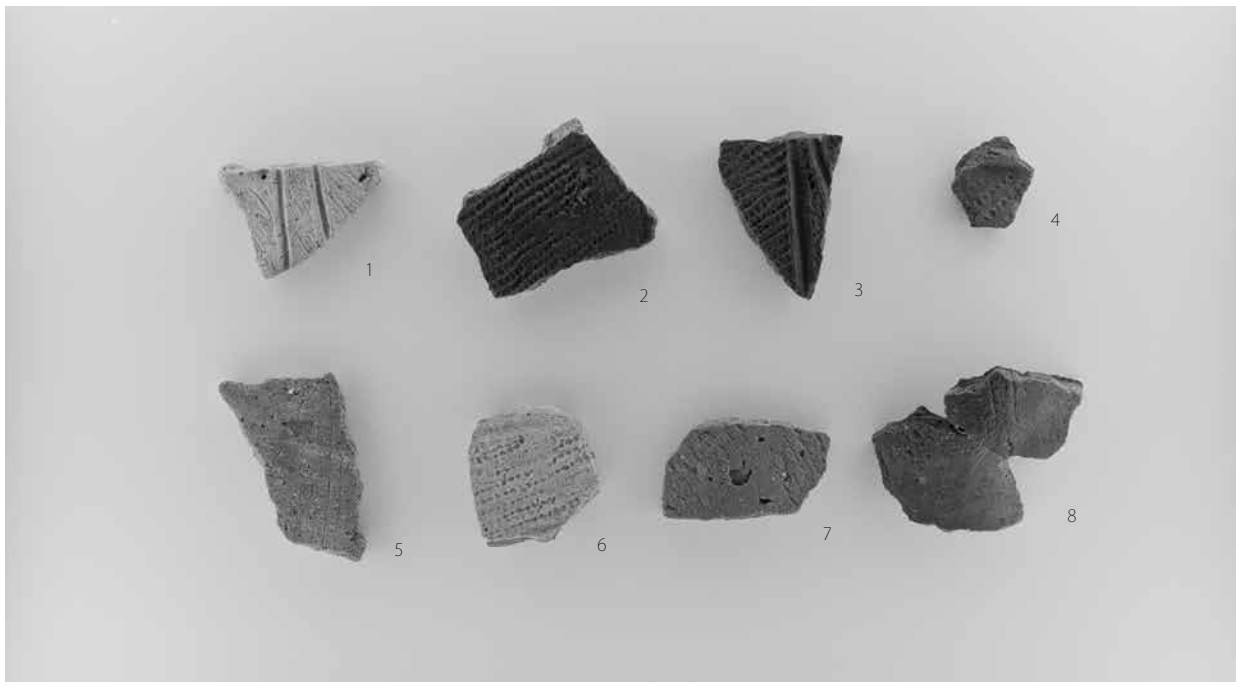
8. B区発掘調査 作業風景



(S ≒ 1/3)

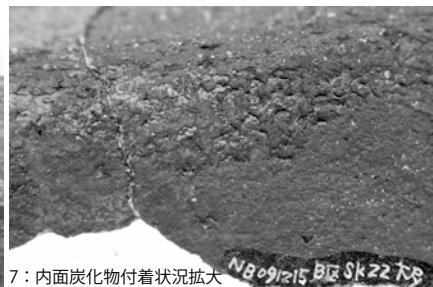
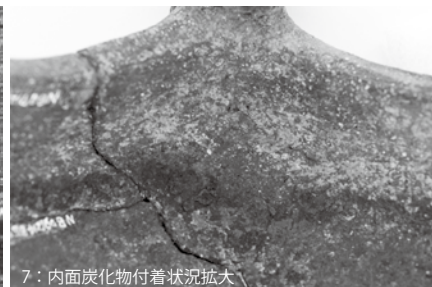
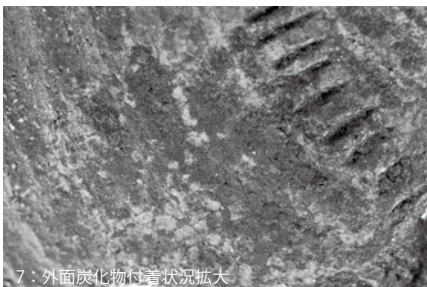
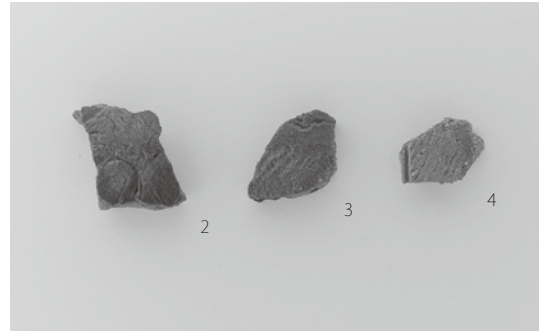
SK19・SK20 フラスコ状土坑・SI65 竪穴住居跡出土土器

(1・3～8: SK19/第15図 9～11: SK19/第16図 12: SK20/第17図 2・13～18: SI65/第19図)



(S ≍ 1/3)

SB7・SB98・SB112・SB135 掘立柱建物跡・SL86 炉跡・SK7 フラスコ状土坑出土土器  
(1～8：SB97・SB98・SB112・SB135／第22図 9～21：SL86／第44・45図 22～24：SK7／第46図)



7：外面炭化物付着状況拡大

7：内面炭化物付着状況拡大

7：内面炭化物付着状況拡大

(S ≒ 1/3 拡大写真は任意倍率)

SK7・SK9・SK22 フラスコ状土坑出土土器

(1：SK7／第46図 2～4：SK9／第47図 5～7：SK22／第56・57図)

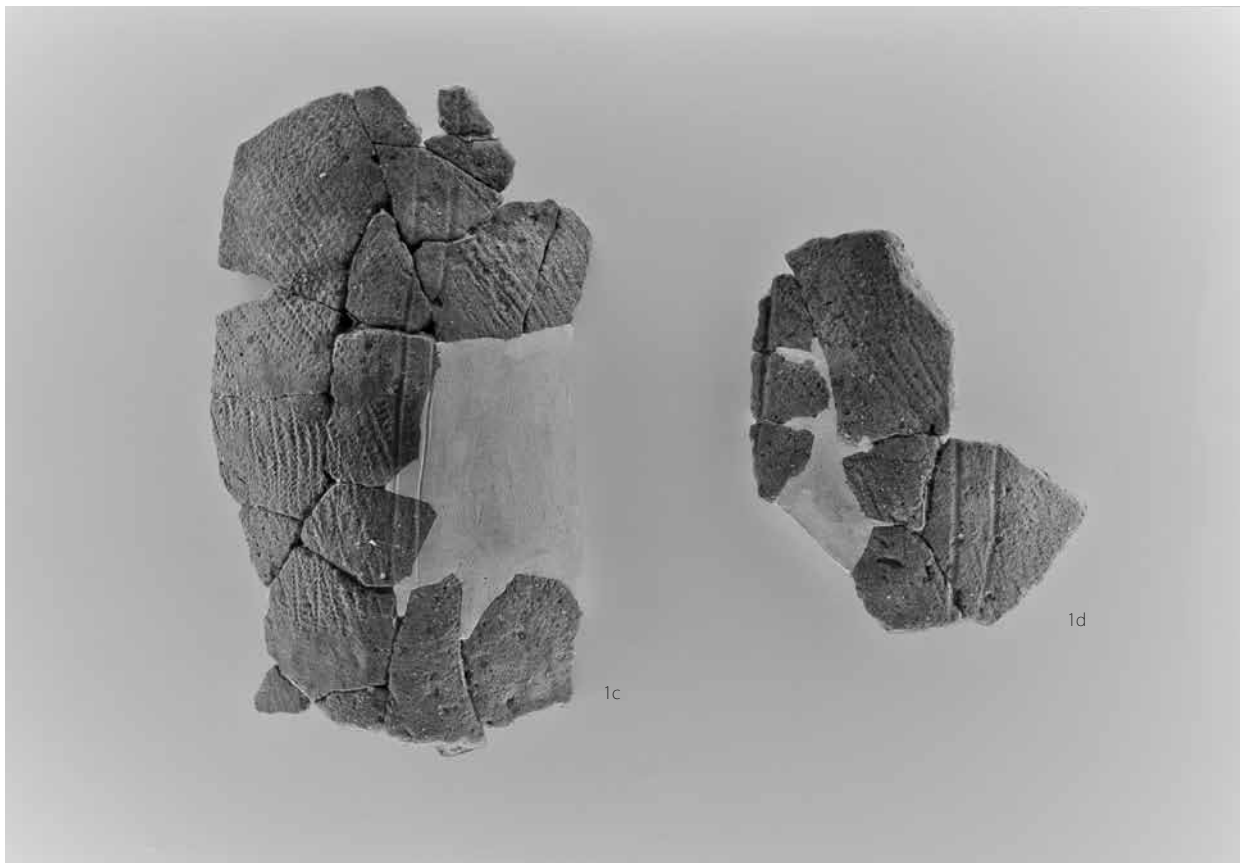


1: 展開写真

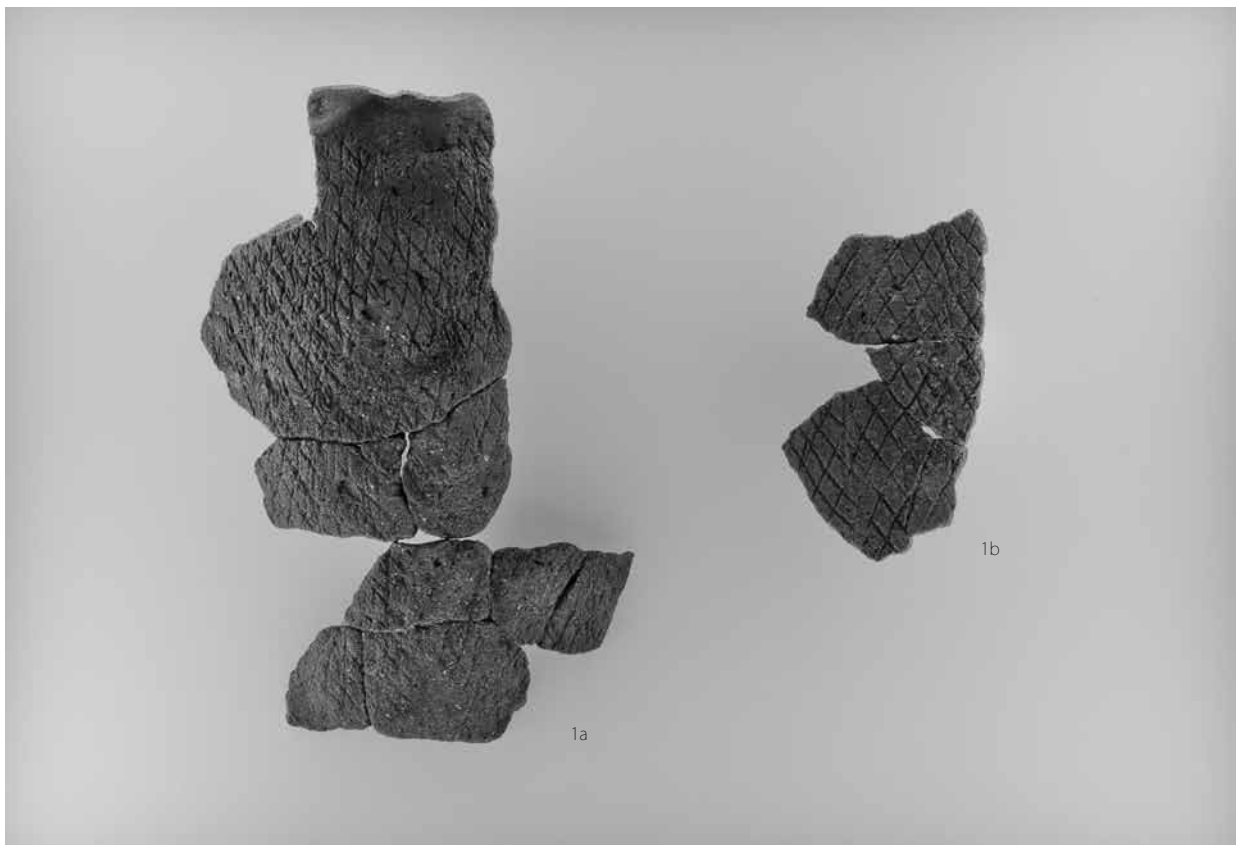


(S ≍ 1/3)

SK22 フラスコ状土坑出土土器  
(1・2: SK22 / 第55・56 図)



SK22 フラスコ状土坑出土土器  
(1 : SK22 / 第 58 図)



SK22 フラスコ状土坑出土土器  
(1～3：SK22／第59・60図)



SK22 フラスコ状土坑出土土器  
(1～17: SK22 / 第61・62 図)





(S ≒ 1/3)

SK22・SK28 フラスコ状土坑出土土器  
(1～12：SK22／第63・64図 13：SK28／第65図)



1



2

3

4

5

6

7

8

9

10

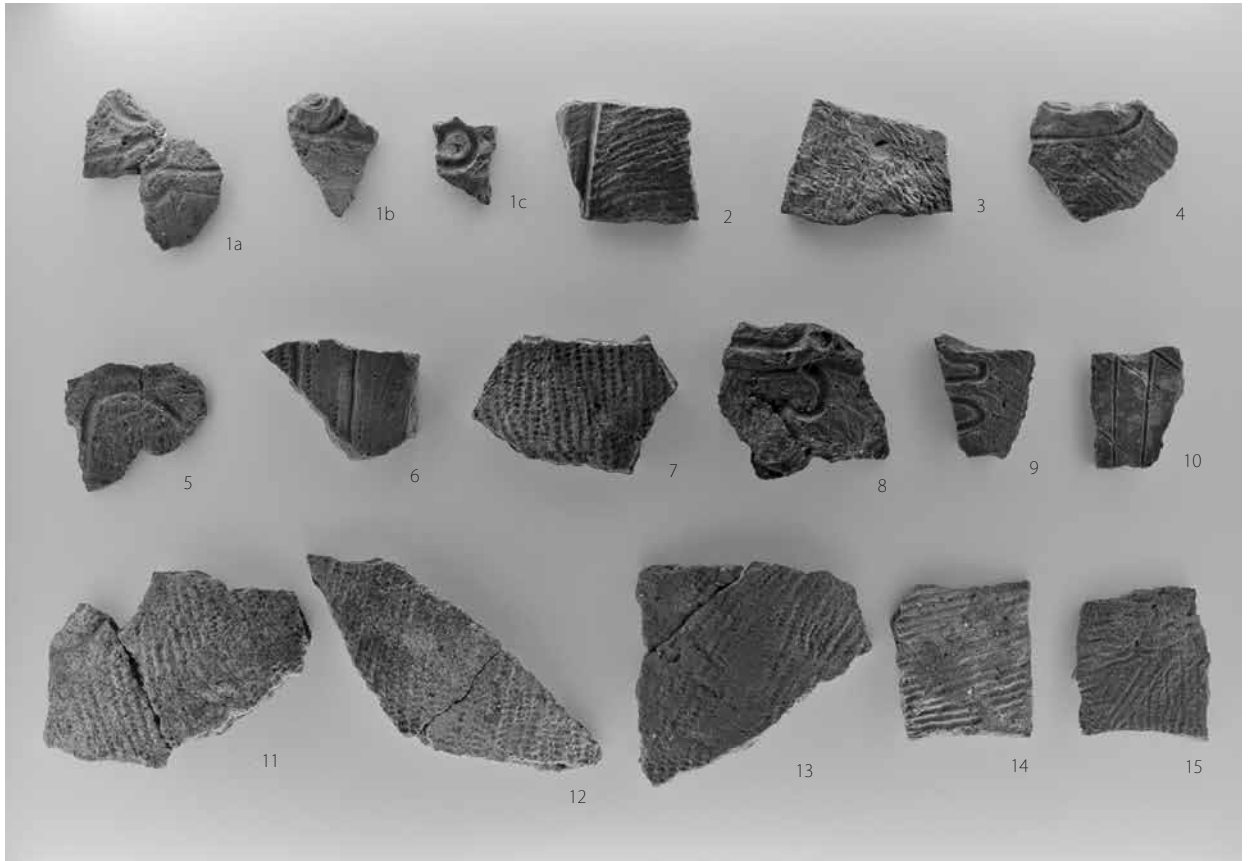
11

12

13

SK28 フラスコ状土坑出土土器  
(1～13: SK28 / 第65・66 図)

(S ≒ 1/3)



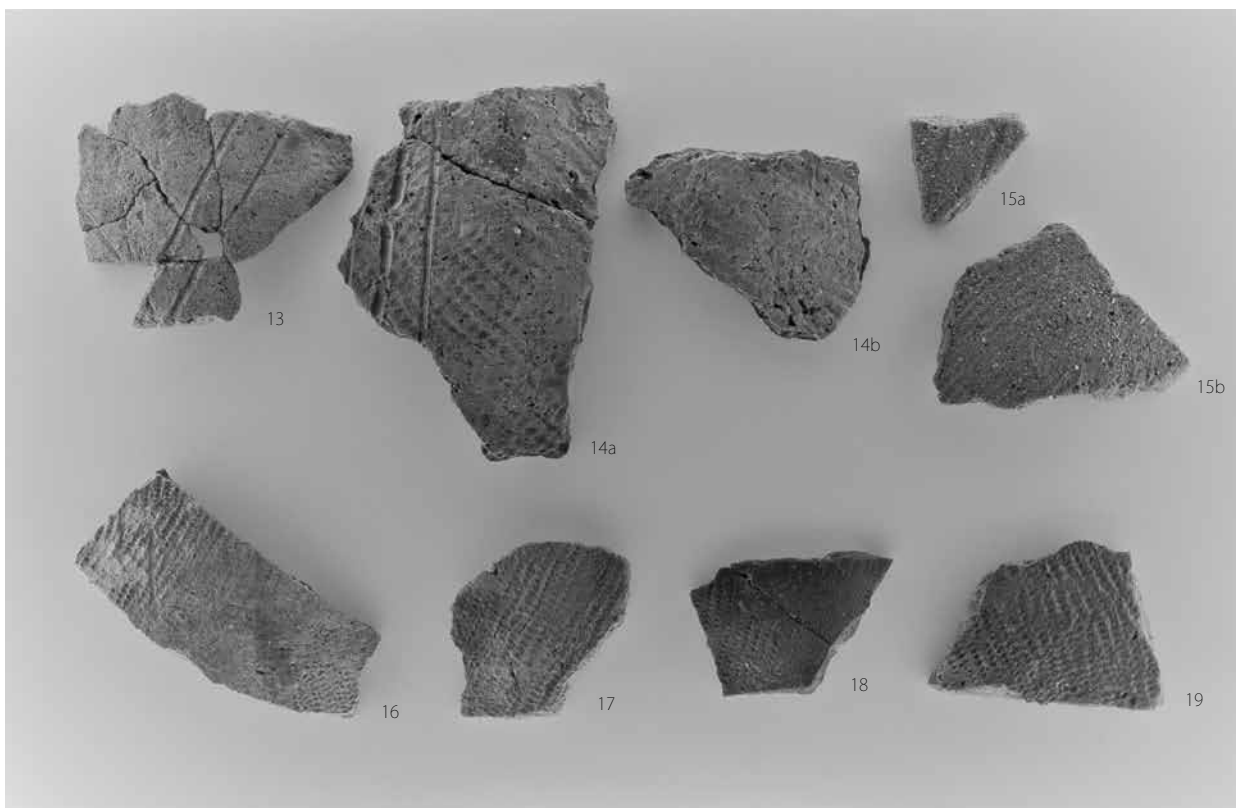
(S ≒ 1/3)

SK28・SK54 フラスコ状土坑出土土器  
(1～15・SK28／第67・68図 16～21：SK54／第69図 22・23：SK55／第70図)

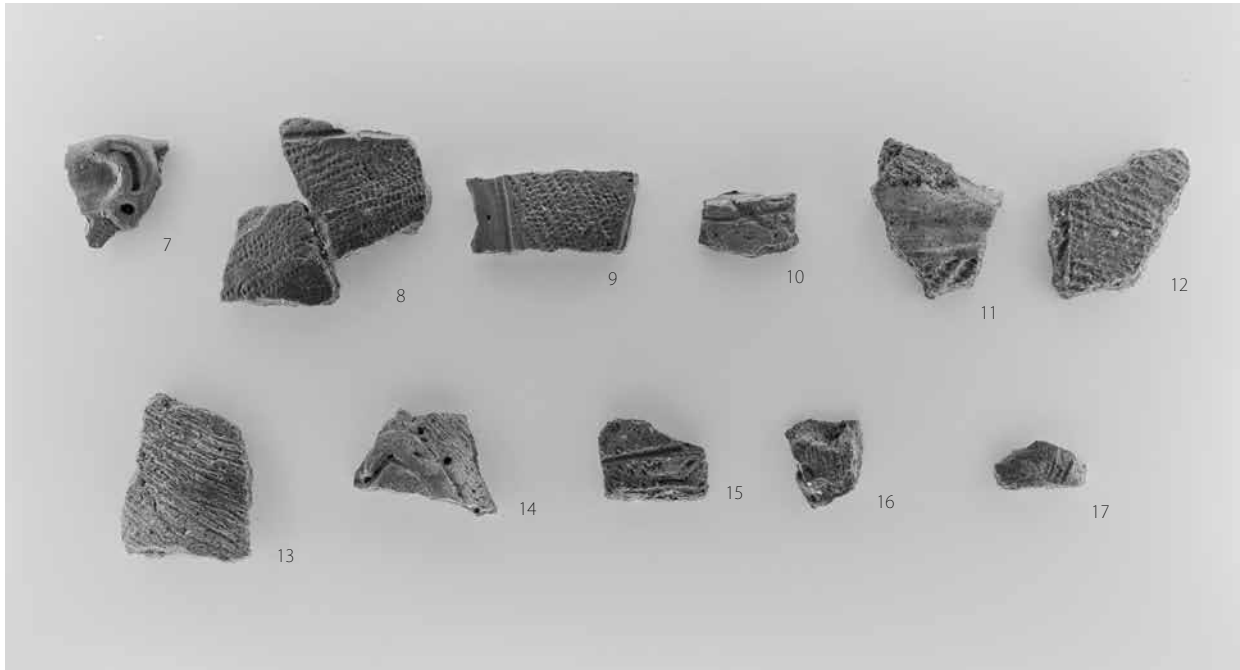
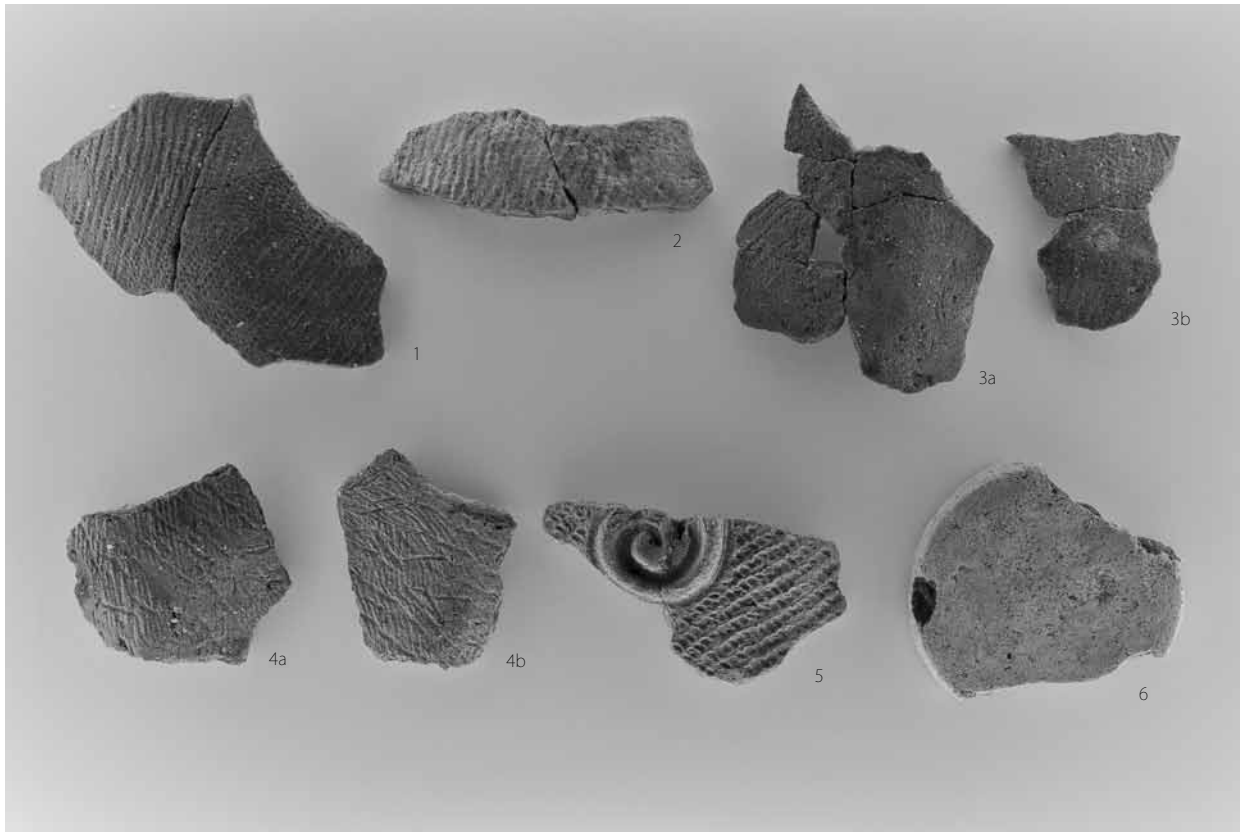


SK56 フラスコ状土坑出土土器  
(1・2 : SK56 / 第79 図)

(S ≒ 1/3)



SK56 フラスコ状土坑出土土器  
(1 ~ 19 : SK56 / 第 80・81 図)



(S ≒ 1/3)

SK56・SK62・SK63・SK66・SK73・SK76 フラスコ状土坑出土土器

(1～6:SK56/第81・82図 7～9:SK62/第83図 10:SK63/第85図 11・12:SK66/第84図 13～16:SK73/第86図 17:SK76/第87図)



SK79・SK82・SK83・SK87 フラスコ状土坑出土土器

(1～4: SK79/第79図 5～12: SK82/第93図 13: SK83/第96図 14・15: SK87/第97図)

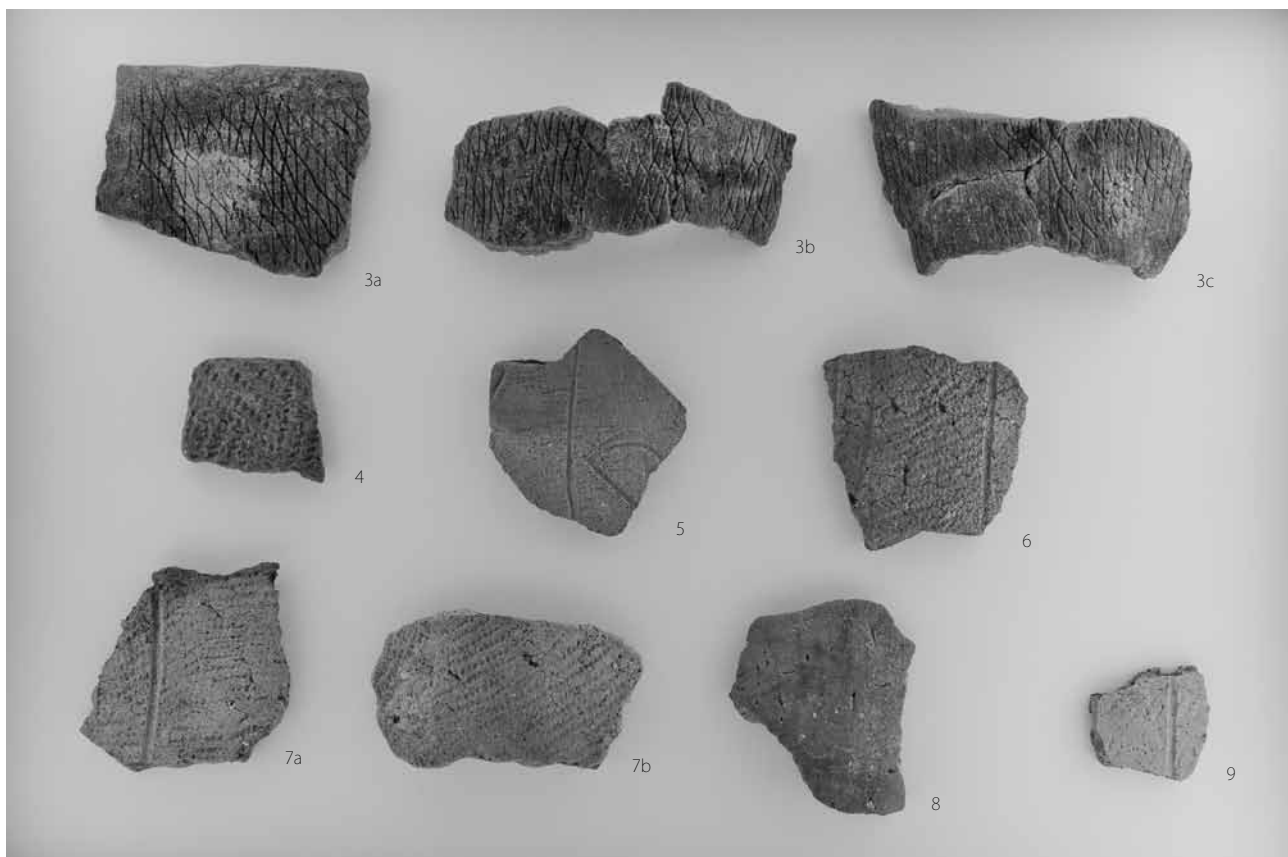


(S ≒ 1/3)

SK89・SK90・SK91・SK92 フラスコ状土坑出土土器

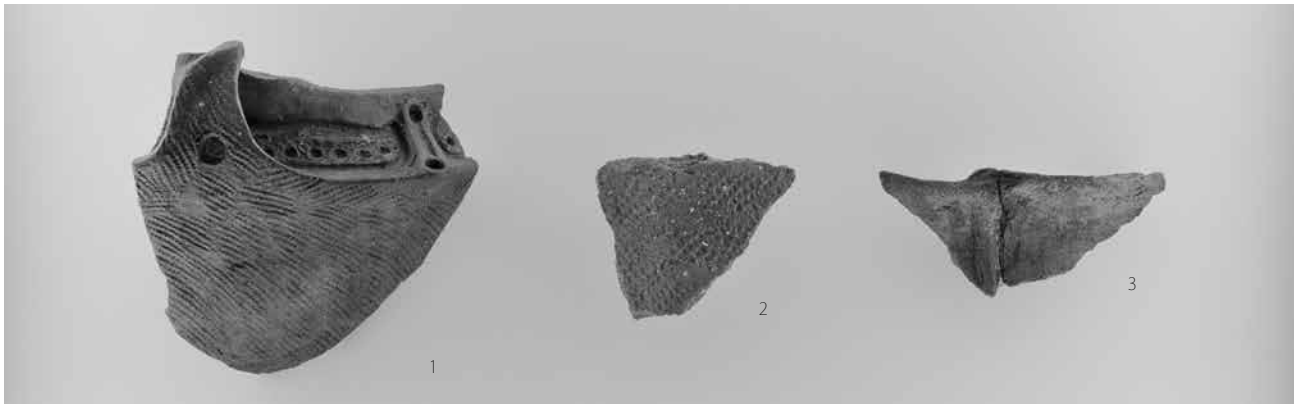
(1～4: SK89/第100図 5～7: SK90/第101図 8: SK91/第102図 9～13: SK92/第106・107図)





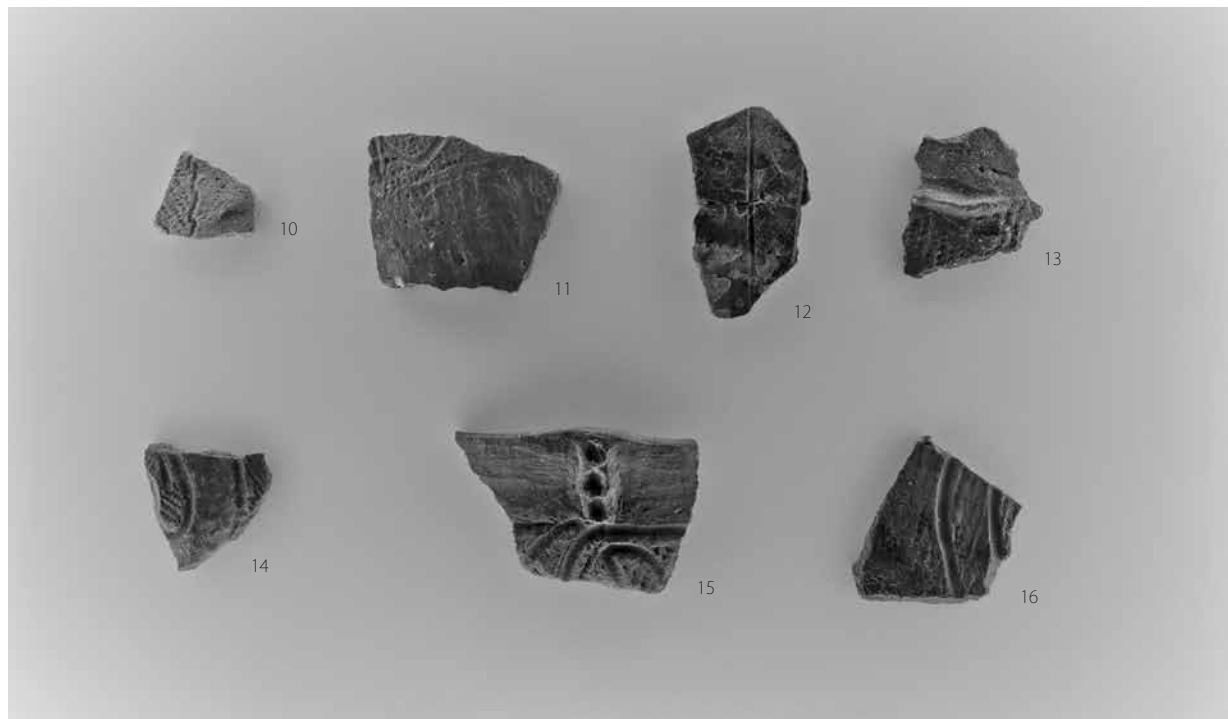
(S ≒ 1/3)

SK92・SK101 フラスコ状土坑出土土器  
(1～8：SK92／第106～108図 9：SK101／第109図)



(S ≒ 1/3)

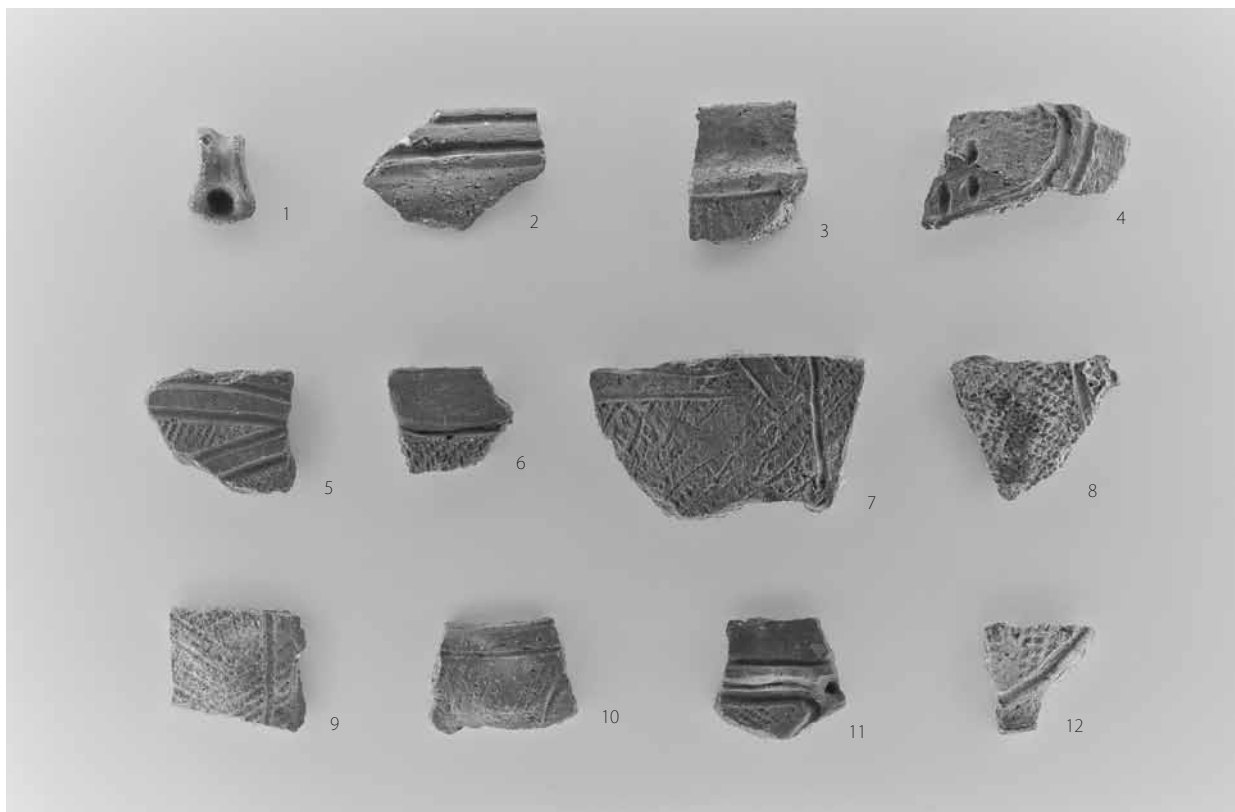
SK125 フラスコ状土坑・SK6 土坑出土土器  
(1～3: SK125/第110図 4～10: SK6/第118・119図)



SK13・SK39・SK81 土坑・柱穴跡出土土器

(1～3:SK13/第120図 4～8:SK39/第121図 9:SK81/第125図 10～16:柱穴跡/第131図)

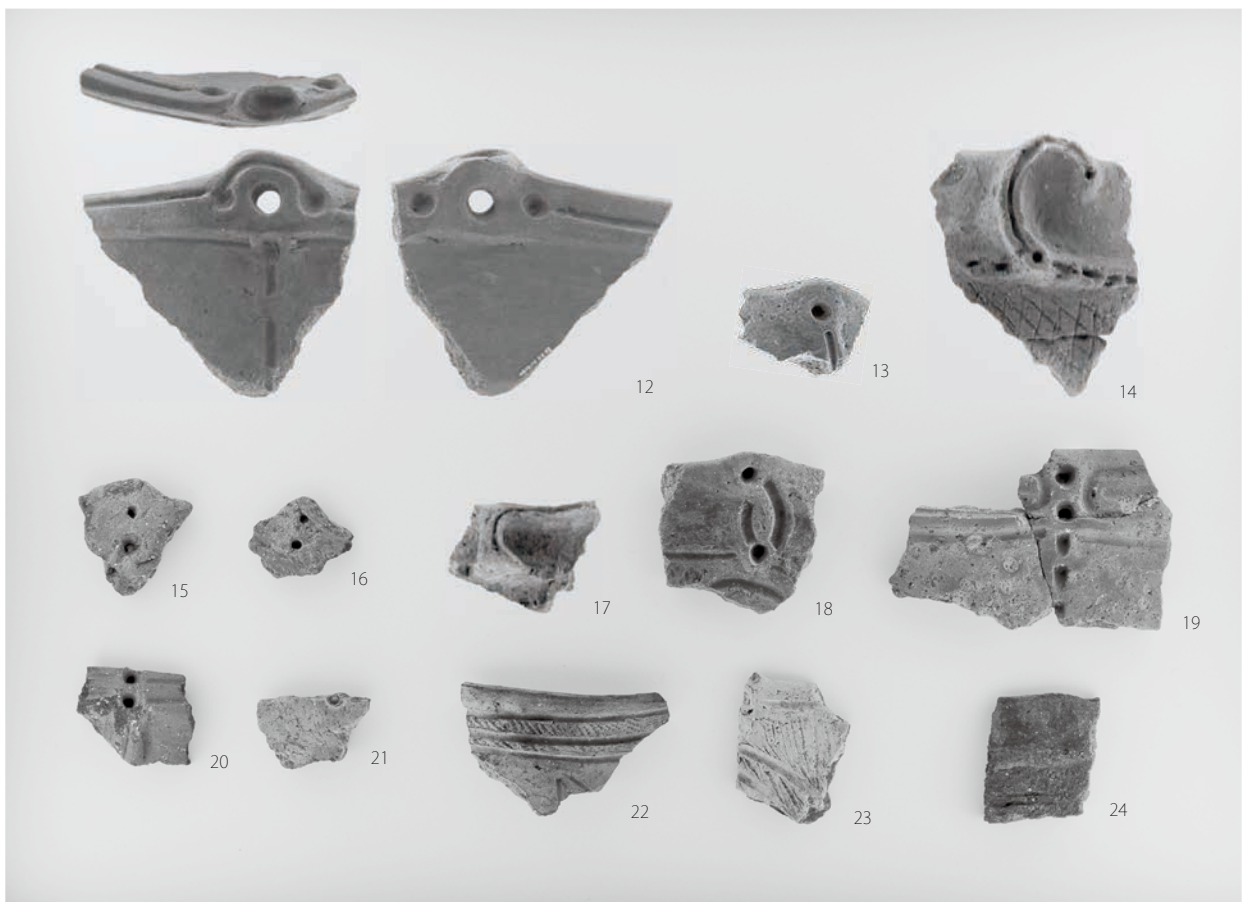
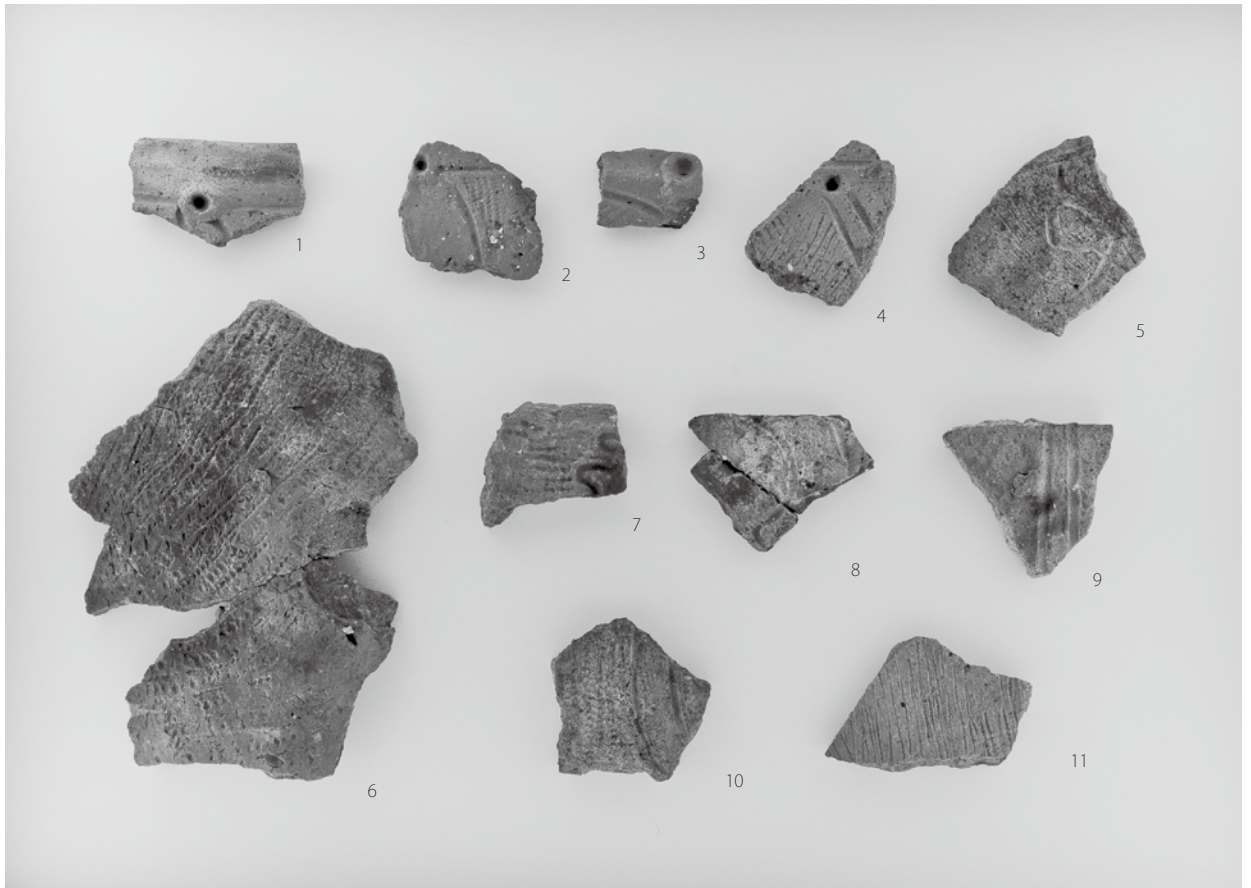
(S ≍ 1/3)



(S ≒ 1/3)

SI16 竪穴住居跡・SD8・SD84・SD88 溝跡出土土器 (混入遺物)

(1 ~ 12 : SI16 / 第 132 図 13 : SD8 / 第 133 図 14 ~ 21 : SD84 / 第 137 図 22 ~ 27 : SD88 / 第 135 図)



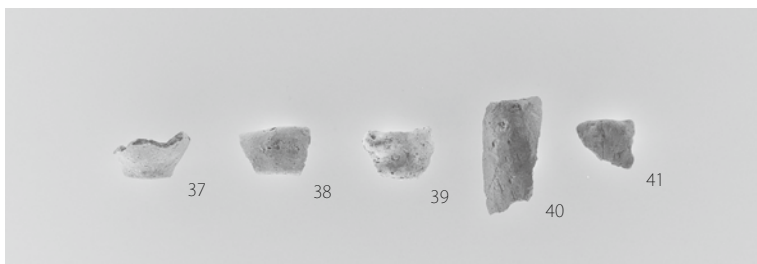
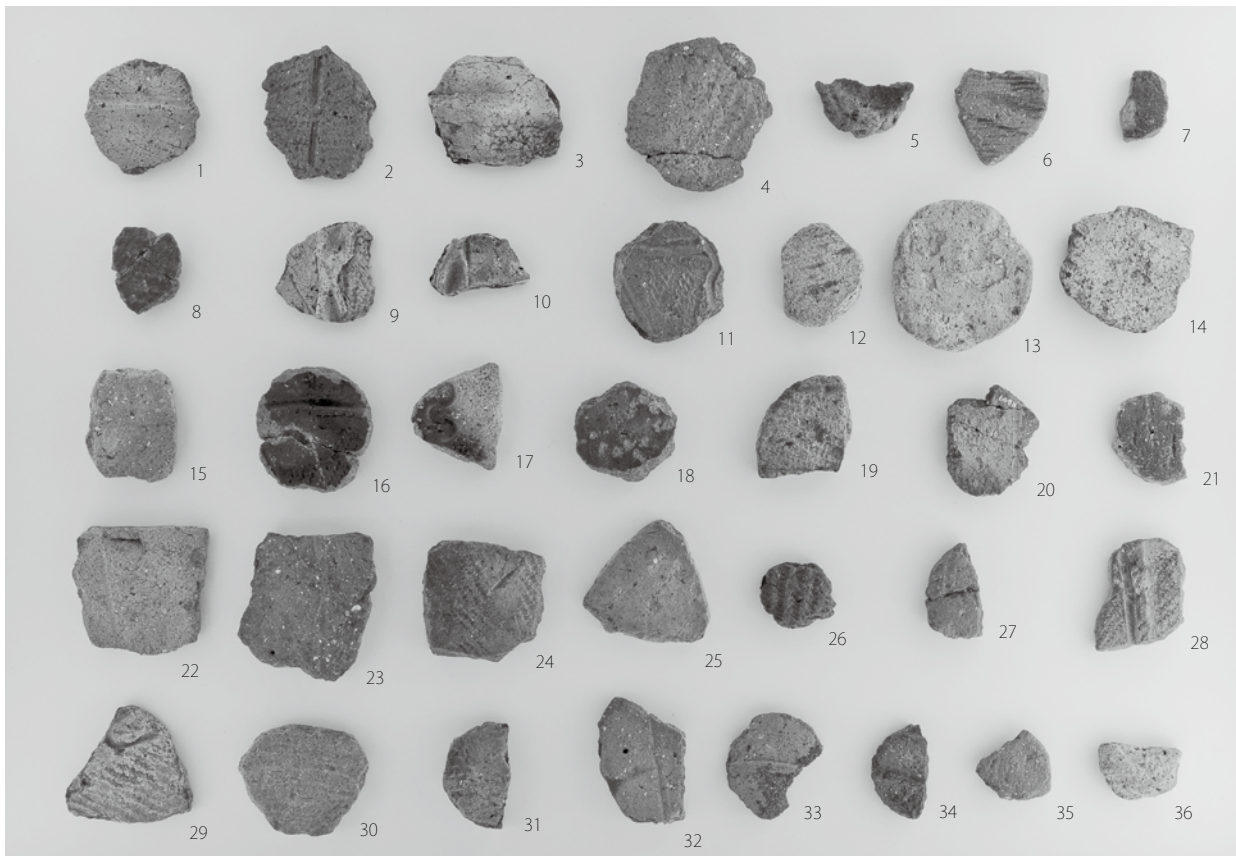
(S ≒ 1/3)

SD88 溝跡 (混入遺物)・遺構外出土土器  
(1～11: SD88 / 第 135・136 図 12～24: 遺構外 / 第 138 図)



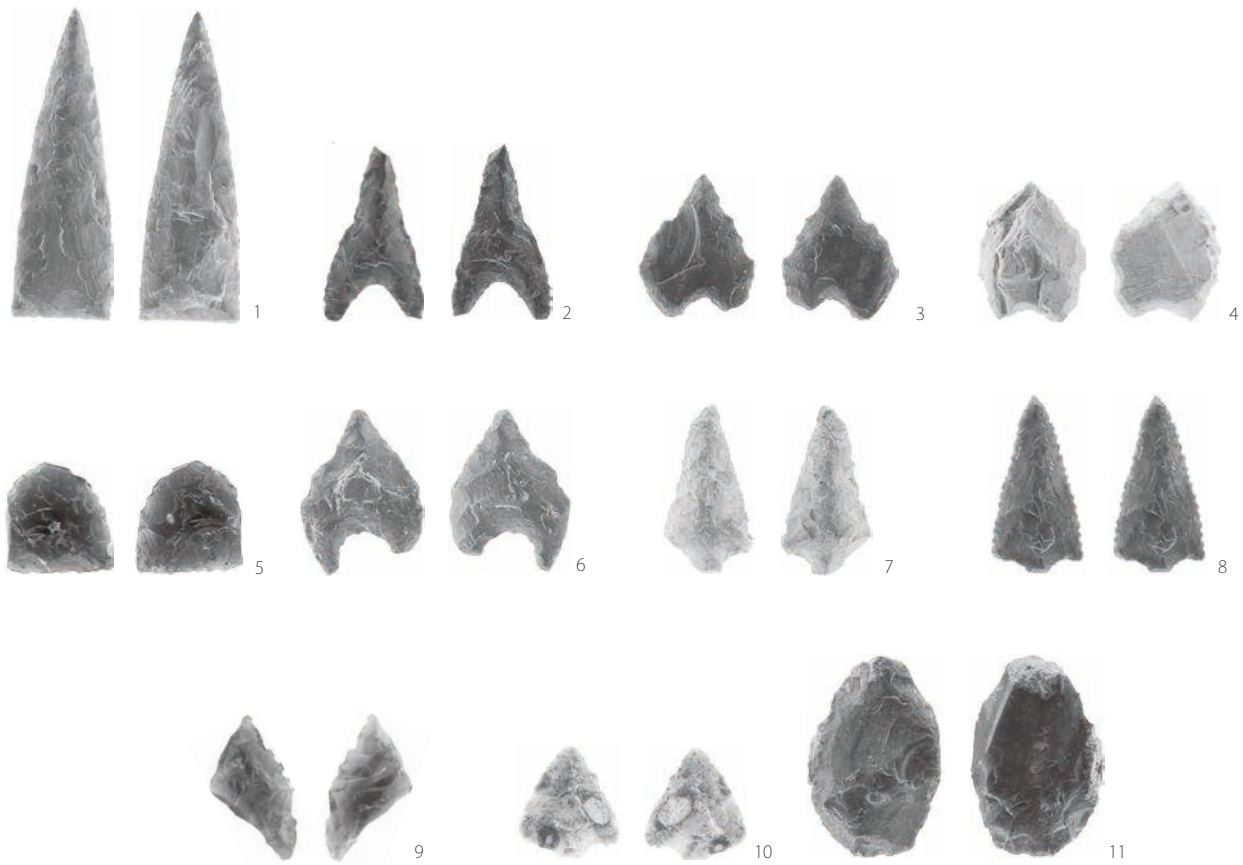
遺構外出土土器  
(1 ~ 23 : 遺構外 / 第 138 ~ 144 図)

(S ≒ 1/3)

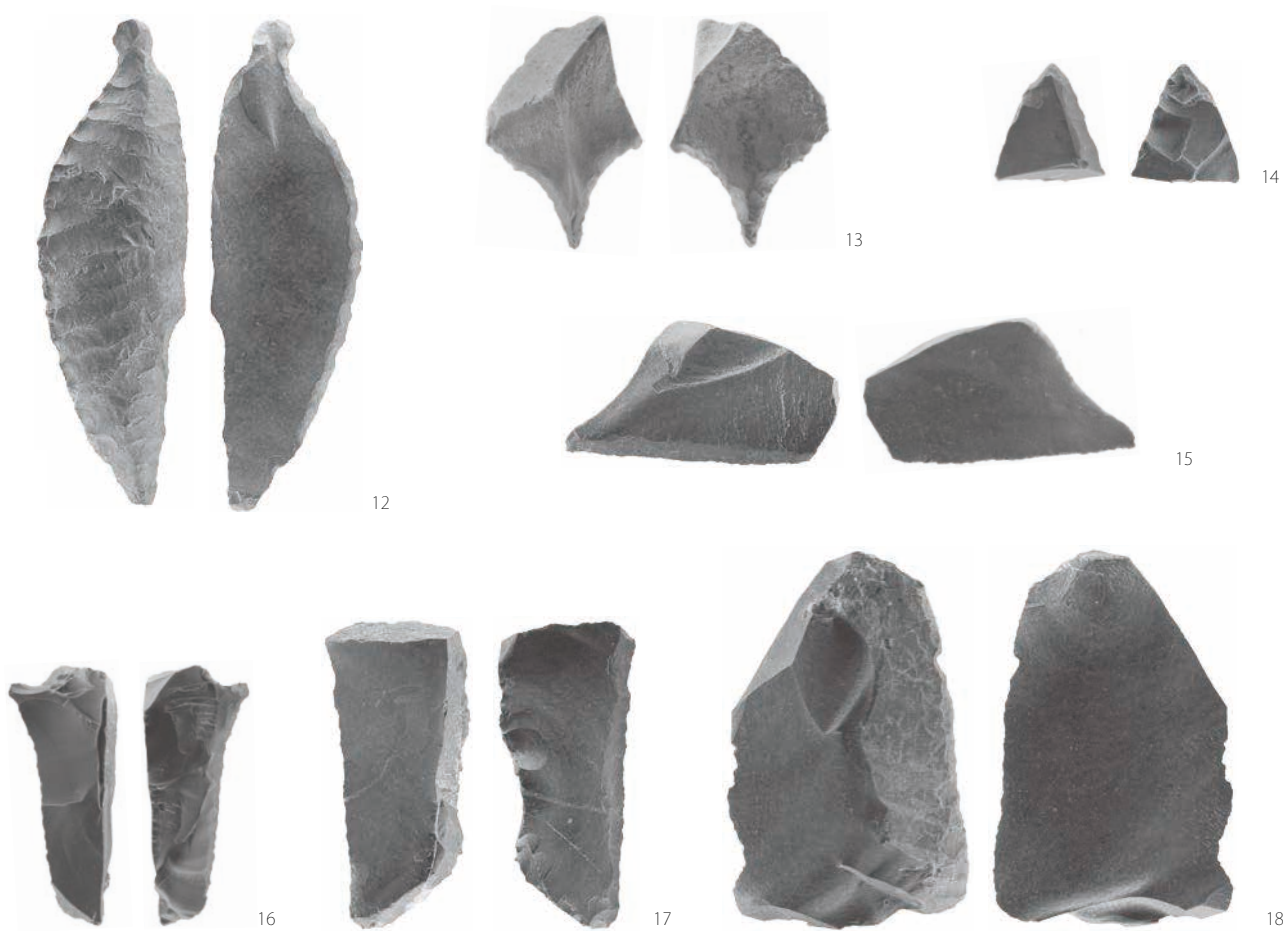


(S ≒ 1/3)

土器片加工円板 ミニチュア土器 土錘 不明土製品 焼成粘土塊  
 (1 ~ 36 : 土器片加工円盤 / 第 146 図 37・39 : ミニチュア土器 / 第 145 図 40・41 : 土錘 / 第 145 図  
 38 : 不明土製品 / 第 145 図 42・43 : 焼成粘土塊)



(1~11 : S ≒ 1/1)

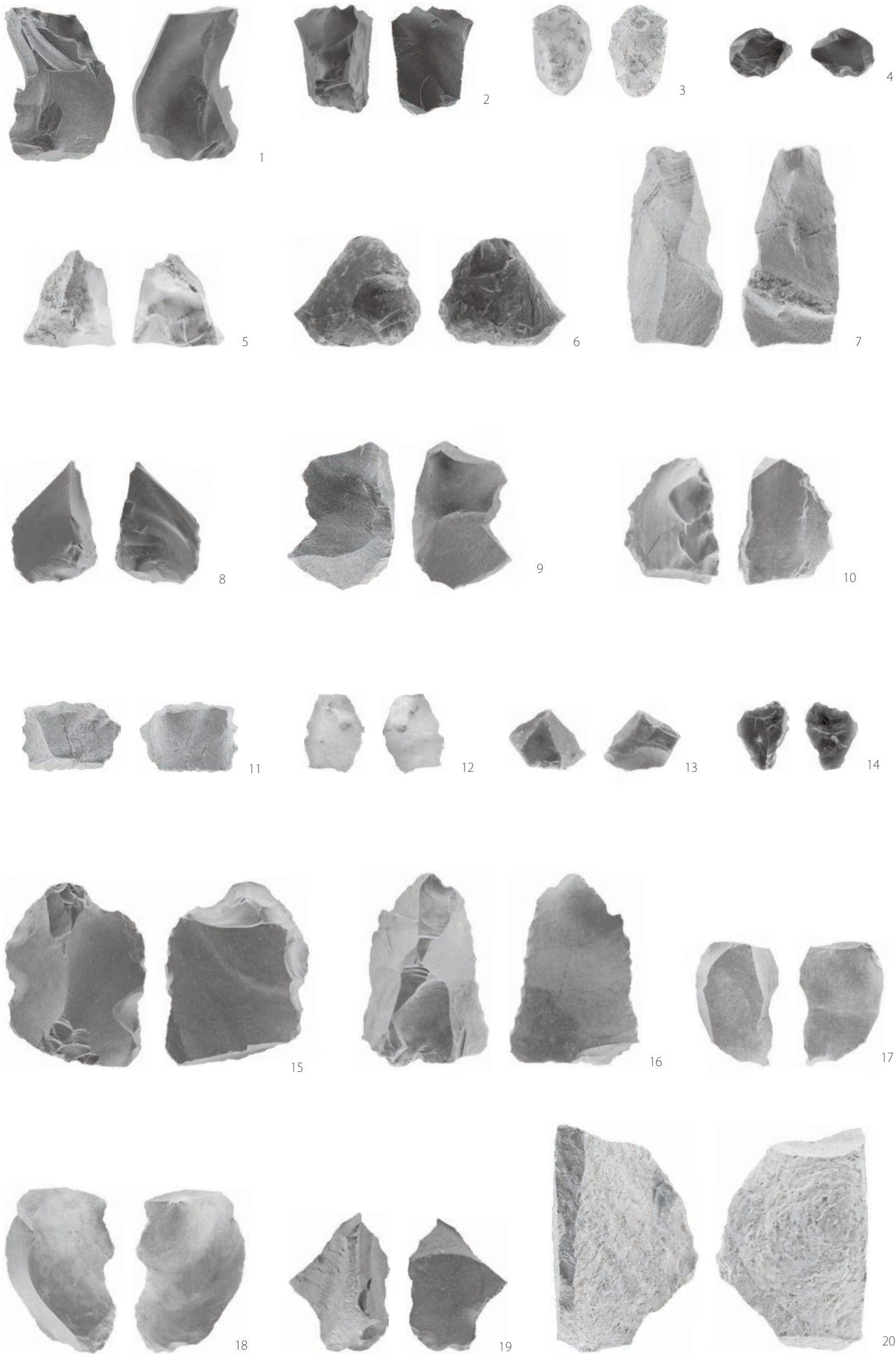


(12~18 : S ≒ 2/3)

石鏃 (1~11) 石匙 (12) 石錐 (13) スクレイパー (14~18)

(1~11 : 第 147 図 12~18 : 第 148 図)

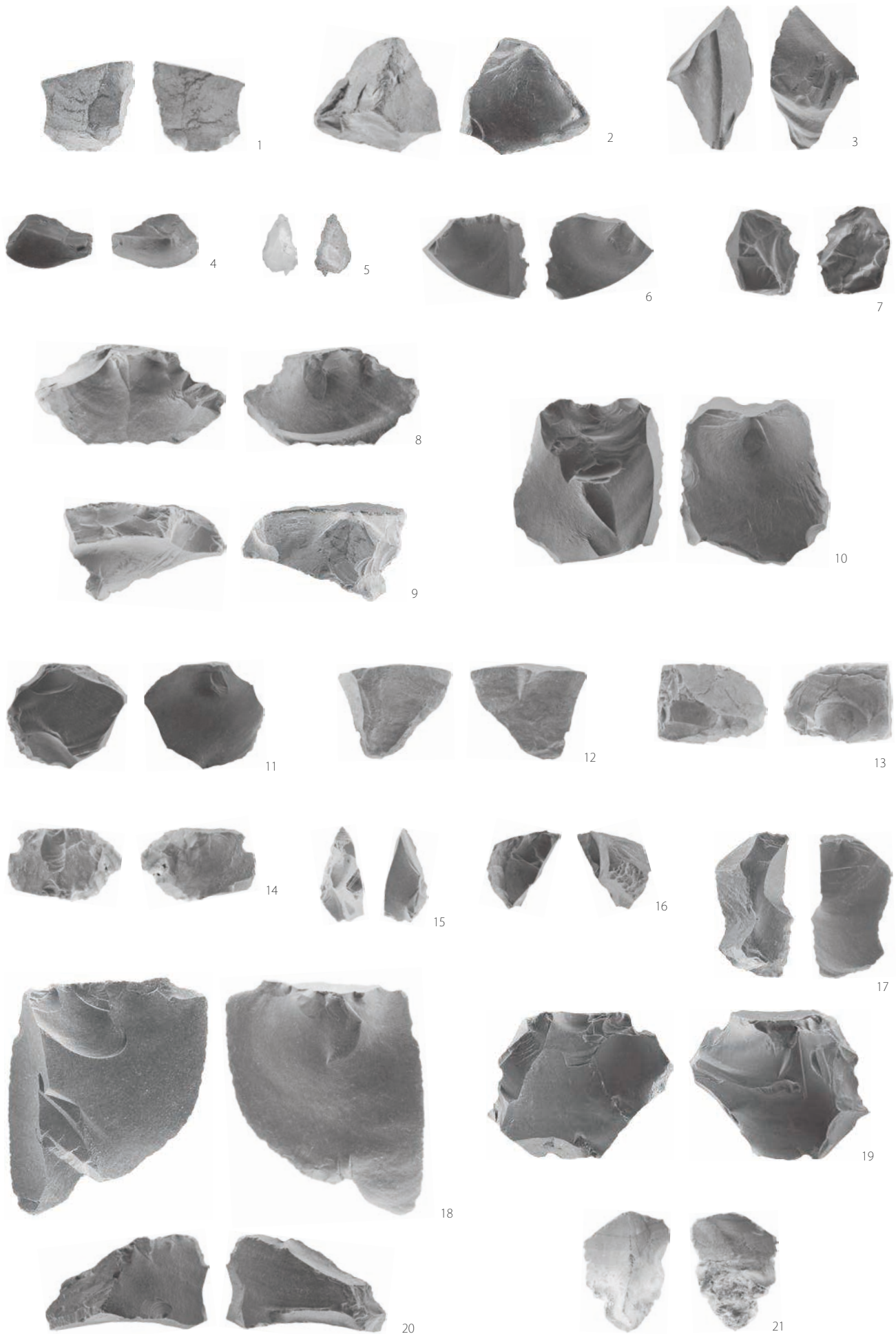




彫刻刀形石器 (1) ピエス・エスキーユ (2~6) 二次加工剥片 (7~20)

(1~10・14: 第149図 11~13・15~20: 第150図)

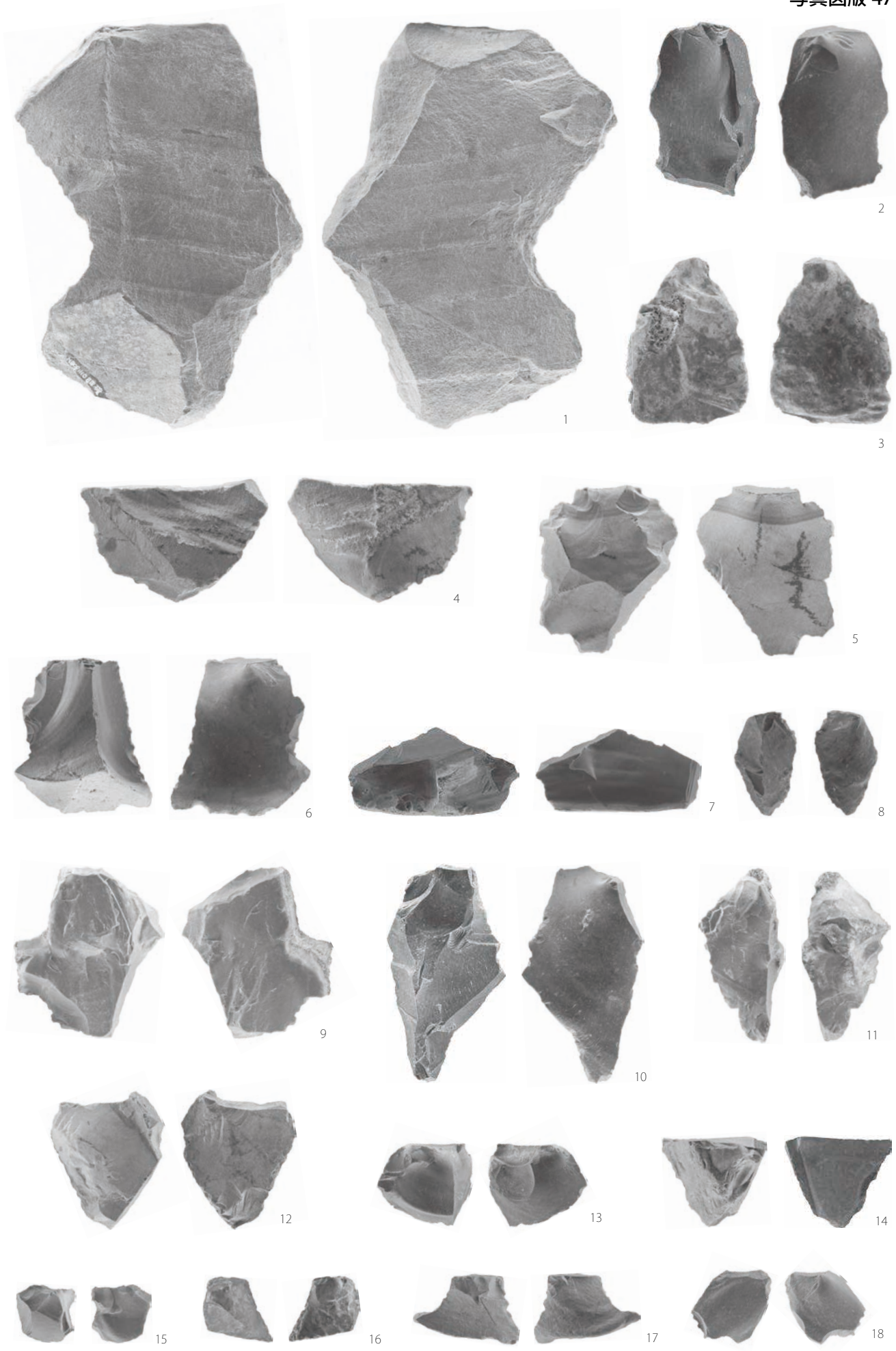
(S ≒ 2/3)



(S ≅ 2/3)

二次加工剥片

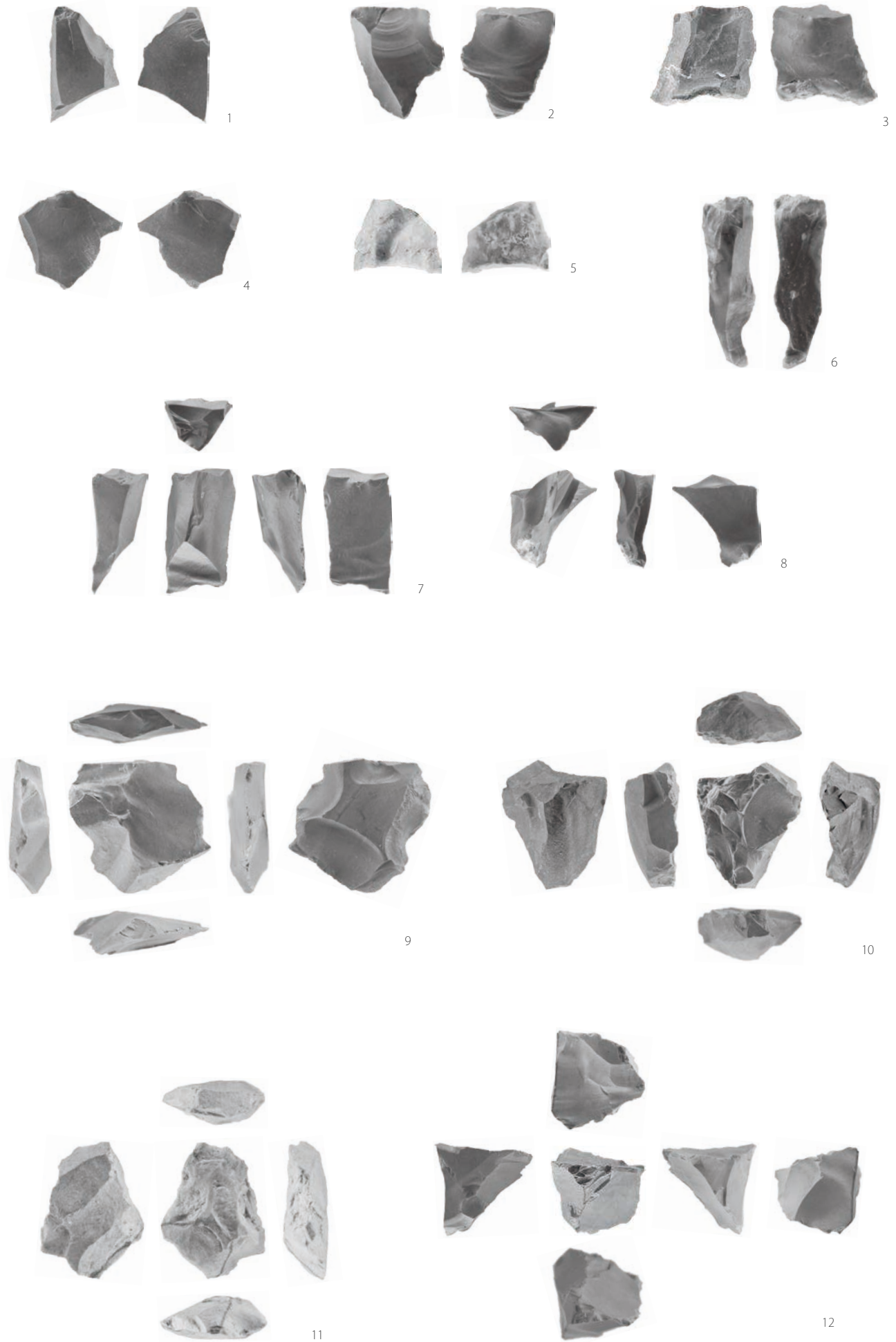
(1~8: 第151图 9~16·19: 第152图 17·18·20·21: 第153图)



二次加工剥片 (1) 微細剥離を有する剥片 (2~18)

(1: 第153図 2~8・16・17: 第154図 9~15・18: 第155図)

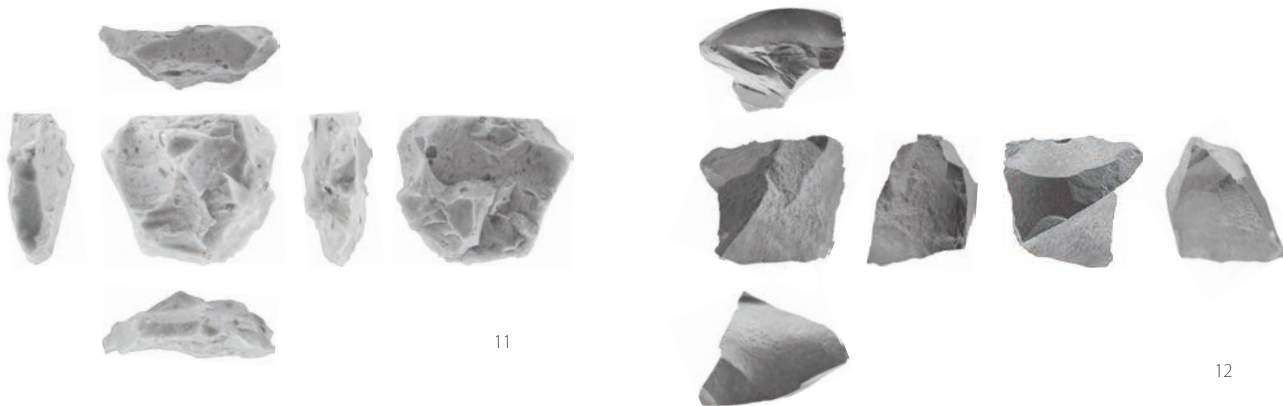
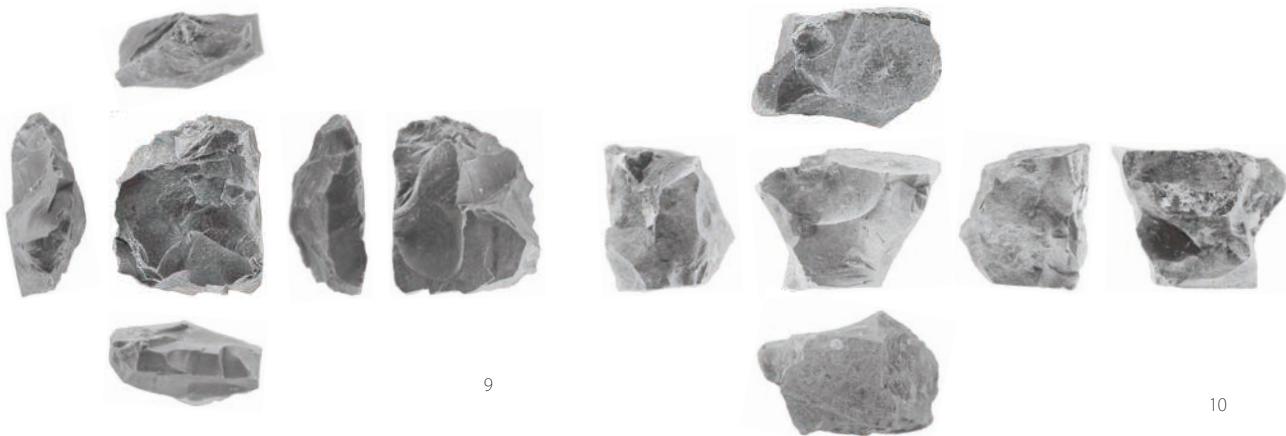
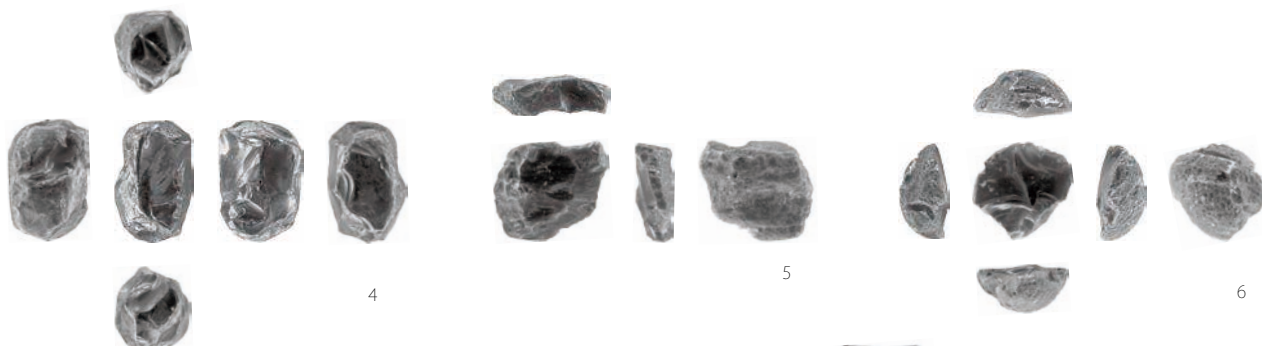
(S ≒ 2/3)



微細剥離を有する剥片 (1～8) 石核 (9～12)

(1: 第155図 2～8: 第156図 9～12: 第157図)

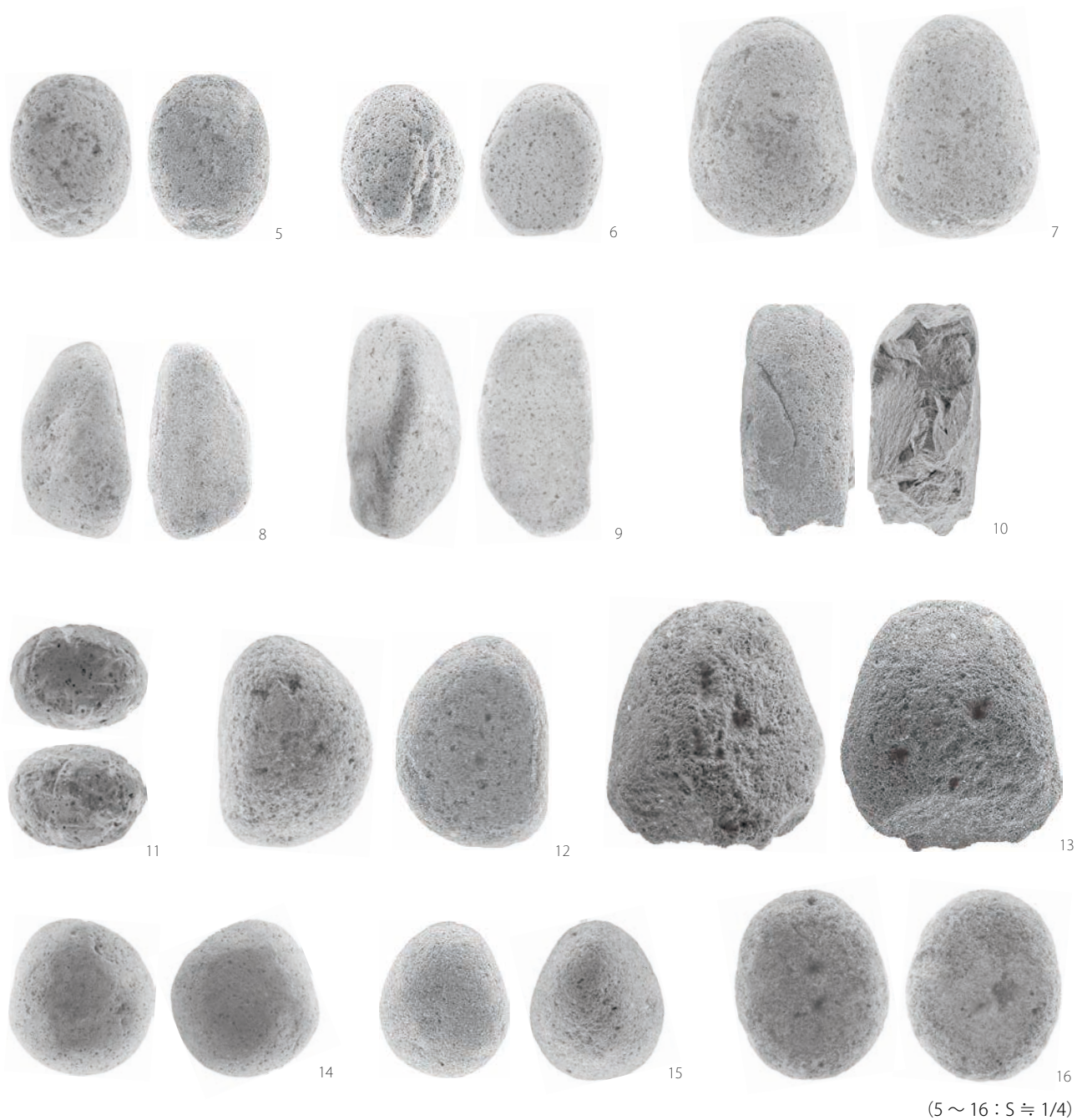
(S ≒ 2/3)



(S ≒ 2/3)

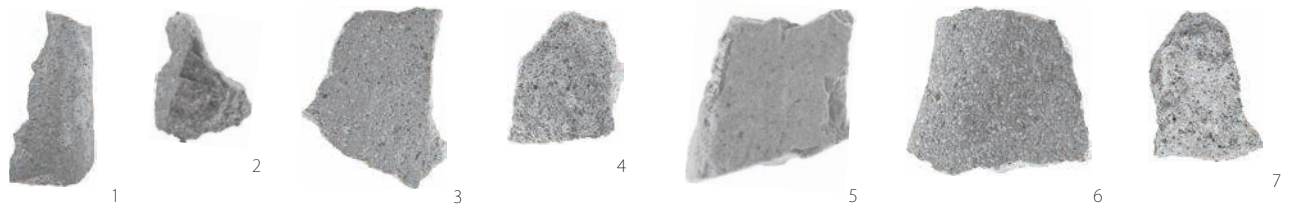
石核

(1: 第157图 2~6·9·10: 第158图 7·8·11·12: 第159图)



磨製石斧 (1 ~ 3) 擦痕のある石製品 (4) 磨石 (5 ~ 10・14) 凹石 (11・13) 磨石／凹石 (12・15・16)

(1 ~ 4 : 第160図 5 ~ 9 : 第161図 10・13・14 : 第162図 11・15 : 第163図 12・16 : 第164図)



(1~7: S ≒ 1/3)



(8~19: S ≒ 1/4)

磨石 (1) 磨石/凹石 (8) 磨石/凹石/敲石 (9) 石皿 (2~7・10~18)

(1: 第162図 2・3・6・16: 第170図 4・5・7: 第171図 8・9: 第164図 10~12: 第165図 13・15: 第168図 14: 第167図 17・18: 第169図)



1



2



3



4

(S ≒ 1/5)

石皿

(1~3: 第166図 4: 第167図)





1



2



3

(S ≒ 1/5)

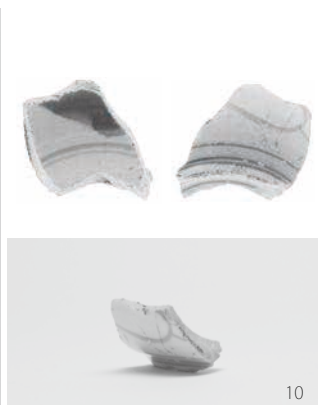
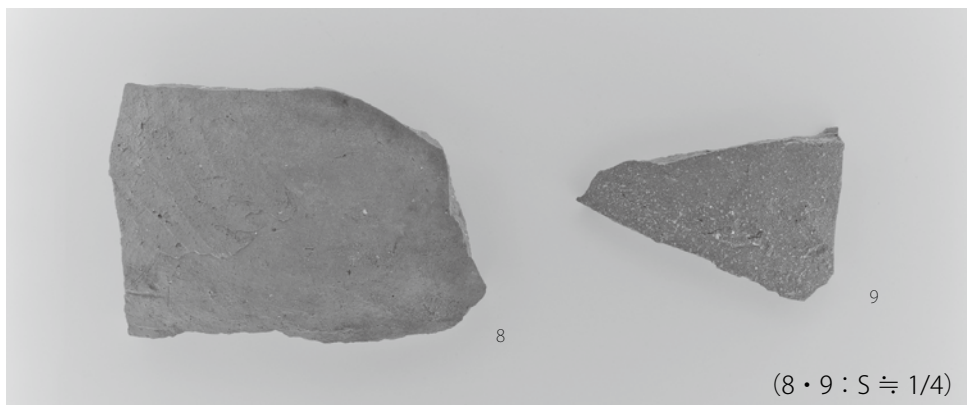
棒状石製品

(1: 第172図 2・3 第173図)



(S ≒ 1/3)

S116 豎穴住居跡出土土器  
(1・2: 第176図 3・4 第175図)



(S ≒ 1/3)

SI16 豎穴住居跡出土土器・石製品 SD84 溝跡出土中世陶器 D区表土出土磁器  
 (1・2・5 : SI16 / 第 175 図 3・6・7 : SI16 / 第 176 図 4 : SI16 / 第 177 図 8・9 : SD84 / 第 187 図 10 : D区表土 / 第 190 図)



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	にしうらBいせき							
書名	西浦B遺跡							
副書名	商業施設出店計画に伴う緊急発掘調査報告書							
巻・次								
シリーズ名	蔵王町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第10集							
編著者名	本文・考察：鈴木 雅・渡邊香織・中沢祐一 自然科学的分析：杉原重夫・金成太郎・弦巻千晶・弦巻賢介・佐藤裕亮・金木利憲・ 鹿又善隆・村田弘之・鈴木 雅・佐藤恵子							
編集機関	蔵王町教育委員会							
所在地	〒989-0892 宮城県刈田郡蔵王町大字円田字西浦北10 TEL 0224-33-3008 Fax0224-33-3831							
発行年月日	西暦2011年(平成23年) 1月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
西浦B遺跡	宮城県刈田郡蔵王町大字円田字西浦北地内	43010	05160	38° 5' 58"	140° 39' 22"	2009.11.1 } 2010.2.26	A区 83㎡ B区 3,650㎡ C区 595㎡ D区 350㎡ 合計 4,678㎡	フレスコキ クチ蔵王店 建設計画
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西浦B遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡1軒 炉跡1基 掘立柱建物跡23棟 柱列跡7条 フラスコ状土坑30基 土坑15基 柱穴多数	縄文土器 (中期中葉 大木8b式) (後期初頭～前葉前半 南境式前半/綱取Ⅱ式) (晩期中葉 大洞C2式) 石器 (打製石器) (磨製石器) (礫石器) 総量：コンテナ40箱分		縄文後期初頭～前葉前半 の土器付着炭化物および 土坑出土木炭の放射性炭 素年代測定値(AMS法)： 2,570～2,140calBC 黒曜石製石器原産地推定： 板山・湯の倉・秋保・蔵王・ 不明原産地2か所		
	集落跡	古代	竪穴住居跡1軒 竪穴状遺構1基	土師器 ロクロ土師器 (9世紀初頭 表杉ノ入式) 石製品 (砥石) 総量：コンテナ5箱分				
	屋敷跡	中世以降	掘立柱建物跡3棟 柱列跡2条 溝跡5条	中世陶器 近世陶磁器 総量：コンテナ1箱分				
要約	縄文時代後期初頭～前葉前半に多数のフラスコ状土坑と掘立柱建物跡を伴う集落が形成されていたことが判明した。遺物はフラスコ状土坑などから出土した縄文土器深鉢と石器が主体である。石器は不定形の剥片石器と礫石器が多い。竪穴住居跡、炉跡など居住に伴う施設が少ないことから、食料の貯蔵・加工などを主とした季節的な活動が行なわれたと考えられる。また、平安時代初頭の9世紀初頭頃には少数の竪穴住居跡からなる小規模な集落が形成され、中世～近世には溝による区画を伴う屋敷地として利用されていたことが判明した。							

## 【 解 説 】

### かけがえのない遺跡を未来へ

私たちの足もとには、昔の人びとが暮らした家の跡や、そこで使われた土器や石器などの道具が埋もれている場所があります。このように、昔の人びとの生活の跡が残されている場所を、「遺跡」と呼んでいます。遺跡は、長い歴史の中で大地に刻み込まれた人間の生活の記憶なのです。

蔵王山麓の豊かな自然環境に恵まれた蔵王町には、私たちの祖先が残した多くの遺跡があります。人びとがいつ、どのようにして郷土蔵王に住み着いたのか。コメ作りはいつから始めたのか。彼らは日々の生活をどのように送り、何歳まで生きたのか。興味の尽きないテーマです。

遺跡を調べることで昔の人びとの知恵に学び、私たちの歴史や文化をよく知ることは、私たち自身の生活を見直したり、将来を考えるためにとても大切な役割を果たしています。そのためには、長い歴史を経て今日に伝えられている大切な遺跡を、私たち国民共有の財産として、未来の子どもたちの世代へ守り伝えていかななくてはなりません。

### 遺跡を記録に残すための発掘調査

地面の下に埋もれている遺跡は、一度掘り返されて壊れてしまうと、二度と元に戻すことができません。かけがえのない遺跡を未来へ残すためには、そのまま保存することが望ましいのです。ところが、現在の私たちの生活に必要な土木工事などによって、どうしても遺跡を壊さなくてはならないことがあります。このような時には、工事をする前にそこにどのような遺跡が残されていたのかを調べ、その様子を写真や図面に記録するために、発掘調査を行います。

西浦B遺跡のある場所は畑や果樹園として使われていましたが、店舗の建設工事が計画されました。工事を計画した株式会社キクチと、文化財の保護を担当している町と県の教育委員会では遺跡を壊さずに保存するための相談を重ねましたが、どうしても遺跡が壊れてしまうことが避けられないという結論が出されました。そのため、遺跡が工事によって壊れてしまう前に発掘調査をして記録を残すことになりました。発掘調査の費用は株式会社キクチが負担し、発掘現場ではたくさんの地元作業員の皆さんが汗を流しました。このように、たくさんの人の努力によって、西浦B遺跡の記録を残すことができたのです。

### 西浦B遺跡から見えてきた郷土の歴史

ここに刊行した「西浦B遺跡発掘調査報告書」をひも解くと、蔵王山麓に暮らした人びとの歴史であり、奥羽山脈を越えて人や物が交流するダイナミックな縄文人の生きざまを知らせてくれ



発掘調査の様子－昔の人が掘った穴の跡を探す－  
写真手前の黒く細長い部分は、縄文時代の人びとが狩りをするために掘った落とし穴の跡です。



貯蔵穴跡の調査－穴の中を注意深く掘り下げる－  
縄文時代の人びとが食料などを蓄えた穴の跡です。少しずつ掘り下げると土器が出土しました。

る重要な遺跡だったことが分かります。西浦B遺跡は蔵王町の東部、蔵王の山から流れる松川の北の岸辺に沿ってのびる平らな丘の上にあります。さて、その「西浦の丘」に営まれた川辺の縄文ムラの様子をのぞいてみましょう。

今からおよそ 4,500 年ほど前の縄文時代、西浦の丘のまわりは蔵王山麓の大自然に囲まれた恵み豊かな土地だったようです。西浦の丘の北にはシカやイノシシ、ノウサギといった動物と、ドングリやトチの実といった木の実などの「森の恵み」がありました。そしてすぐ南には松川が流れ、たくさんの川魚や水辺に集まる鳥たち、秋には川をさかのぼるサケやマスなどの「川の恵み」があったのです。でも、縄文時代の人びとは年中食料に恵まれていたわけではありません。彼らは季節ごとのさまざまな自然の恵みを上手に組み合わせ、厳しい自然環境を生き抜いたのです。

西浦の縄文ムラの人びとは、食料の少なくなる冬に備えて、秋に収穫した木の実などを地面に掘った穴の中に蓄え<sup>たくわ</sup>ました。縄文人が食料を蓄えた穴の跡は、入口が狭くて、中が広がっています。理科の実験で使う「フラスコ」のような形をしていることから、考古学者は「フラスコ状土坑<sup>どこう</sup>」と呼んでいます（土坑とは昔の人が掘った穴の跡のことです）。西浦B遺跡では、フラスコ状土坑の中に縄文人が蓄えた食料は残っていませんでした。長い年月の間に腐ってしまったのかもしれないし、縄文人がみんな食べてしまったのかもしれない。その代わりに、穴の中からは縄文人が使わなくなって捨てた土器や石器がたくさん発掘されました。縄文人にとってはゴミでも、現在の私たちにとっては当時の人びとの暮らしの様子を知るための大切な宝物なのです。

発掘された土器を詳しく調べたところ、西浦の丘に縄文ムラがあったのは今から 4,500 年前のことと分かりました。そして土器の中には、現在の福島県の海沿いや、新潟県の縄文ムラの人びとが使っていた土器と同じデザインのもので少しだけ混じっていました。また、石器の材料には山形県の最上川あたりで採れる石がたくさん使われていましたし、黒曜石の矢じりのひとつは、なんと西浦の縄文ムラから 100km も離れた新潟県から運ばれてきたものでした。電車も自動車もない時代に、縄文人はいったいどのようにして行き来していたのでしょうか。

このように西浦の縄文ムラの人びとは、私たちの想像をはるかに超えるダイナミックな交流をしながら、ここ蔵王の地に力強く生きていたのです。——ここに記録された西浦B遺跡の考古学的成果は、地域の歴史を解き明かすカギとしてとても貴重なものです。



発掘調査の様子—さまざまな穴の跡を記録する—昔の人びとが掘った貯蔵穴や家の跡、建物の柱穴の跡などを、すべて図面や写真に記録します。



整理作業の様子—土器の破片をつなぎ合わせる—発掘された土器は壊れて小さな破片になっているので、パズルのようにつなぎ合わせます。





---

蔵王町文化財調査報告書 第10集

## 西浦B遺跡

—商業施設出店計画に伴う緊急発掘調査—

2011年（平成23年）3月25日 印刷・発行

発行 蔵王町教育委員会

〒989-0892 宮城県刈田郡蔵王町円田字西浦北10

T E L 0224-33-3008 F A X 0224-33-3831

印刷 (株)津田印刷

〒989-1236 宮城県柴田郡大河原町字東原町13-5

T E L 0224-52-5550 F A X 0224-52-3097

---

